

## (3) 縄文時代の遺物

遺構は検出されなかったが早期前半、後半～末葉、前期末および中期初頭各時期の土器が出土している。このうち比較的量が多くまとまっているのは早期後半～末葉貝殻条痕文系土器と中期初頭土器である。そのほか石器が出土している。

## ア 土器 (図5・6、P L32・33)

出土土器中最も古いのは押型文土器(1～3)である。しかし、全部で7点と少なく、地点も層位もまとまりなく出土している。7点の内訳は山形文が4点、格子目文2点、変形山形文1点である。変形山形文(3)は、原体の陰刻部が陽刻部より幅広で、山部と谷部が向かいあうように刻まれているという点で一般的な山形文とは異なっている。薄い器壁、石英粒の目立つ胎土は他の6点と共通する。

貝殻条痕文土器(4～24)は1点(17)を除いて全て南区から出土した。I層からIV層にかけて包含されるが、II層下部からIII層上部に集中する。大形破片が多いものの接合例は集石遺構に混入していた21のみであり、注意されるような出土状況は認められない。

4は野島式に比定される胴部破片。内外面に条痕をとどめ、その上に沈線による幾何学状の区画文、充填文を施文する。5は縄文を地文として2本単位の沈線文を縦位、斜位に施す。茅山下層式に含まれるであろう。6～12は米粒状ないしそれに類する連続刺突文を特徴とする。図示したものがすべてで、南区の東側に多く出土している。6は器厚6mm～8mm、口径推定約28cm程の深鉢。口唇部は内削ぎ状を呈し、口縁は胴部との境に段を作る。口縁下に2条の連続刺突文をめぐらし、その下から段部の間には重層する山形状の連続刺突文を施す。胴部にも現存2条の連続刺突文がめぐる、外面胴部に横方向の浅い条痕、内面の口縁部と胴部にそれぞれ横方向の擦痕、斜方向の条痕をとどめ、内面胴部には指頭圧痕が認められる。7は内削ぎ状、9は角頭状を呈する口縁部破片。12は縄文を地文とする。11は不明であるが、他はすべて浅いなぞり間の頂稜部に連続刺突文を加えている。13・14は長さ15mm、幅4mmと小さな圧痕が横位、縦位にある。絡条体圧痕文が施された同一個体であろう。胎土に繊維のほか長石粒、石英粒などを多く含む。外面はていねいな器面調整が加えられ比較的なめらかである。これらは6～12とは異なり調査区西側に多い。15は縄文施文の胴部破片。原体はLR。胎土に繊維のほか粗砂を多く含む。16・17は口唇部に指頭ないし棒状工具による圧痕をもち、16には交互押圧がなされている。ともに口縁直下に押圧ある隆帯が一条めぐる。器面には条痕をとどめ、胎土には5mm大の石、砂粒、石英粒などを多く含む。18・19は同一個体の口縁部破片。口唇部への押圧に加え、口縁部にもそれと交互に半截竹管による幅広の爪形状刺突を施す。口縁下にはキザミを加えたボタン状の貼り付けがある。外面は条痕をとどめるが、内面は比較的ていねいな調整が行われる。16・17に比べ堅い焼きで、胎土中に含まれる繊維の量もかなり少ない。20～23は器面に条痕をとどめる胴部破片。胎土、焼成等は16・17にきわめて類似し同伴すると考えられる。24は小さな平坦部を有する底部破片。

25～33は南区II層の上部より出土したもので、前期末諸磯C式に比定されよう。いずれも半截竹管状工具による平行沈線を用いてレンズ状文(25～30)や羽状文(31～33)を描出する深鉢の破片である。胴部上半がゆるく外反する器形であろうか。28は輪積痕の残る破片であるが、その擬口縁口唇部には深さ2mm～3mmの切り込みがある。製作時により強固な接着を意図して施されたものであろう。

34～47は中期初頭の梨久保式に比定される土器である。34・35が南区、他は全て北区III層出土。北区では、AO04グリッド周辺の狭い範囲から集中的に出土したので精査したが、遺構は検出されなかった。36・37は胴上半が大きく開き口縁部は「く」の字状に内折する深鉢で、平行沈線や斜格子目文、連続爪形文など梨久保式でも古い段階の特徴をもつ。38～40は同一個体と思われ、胴部は外反気味に開いて口縁部のふくらむ深鉢。口縁部には縄文を地文として弧線文や三角陰刻文を、胴部には底部まで達する隆線を垂らし

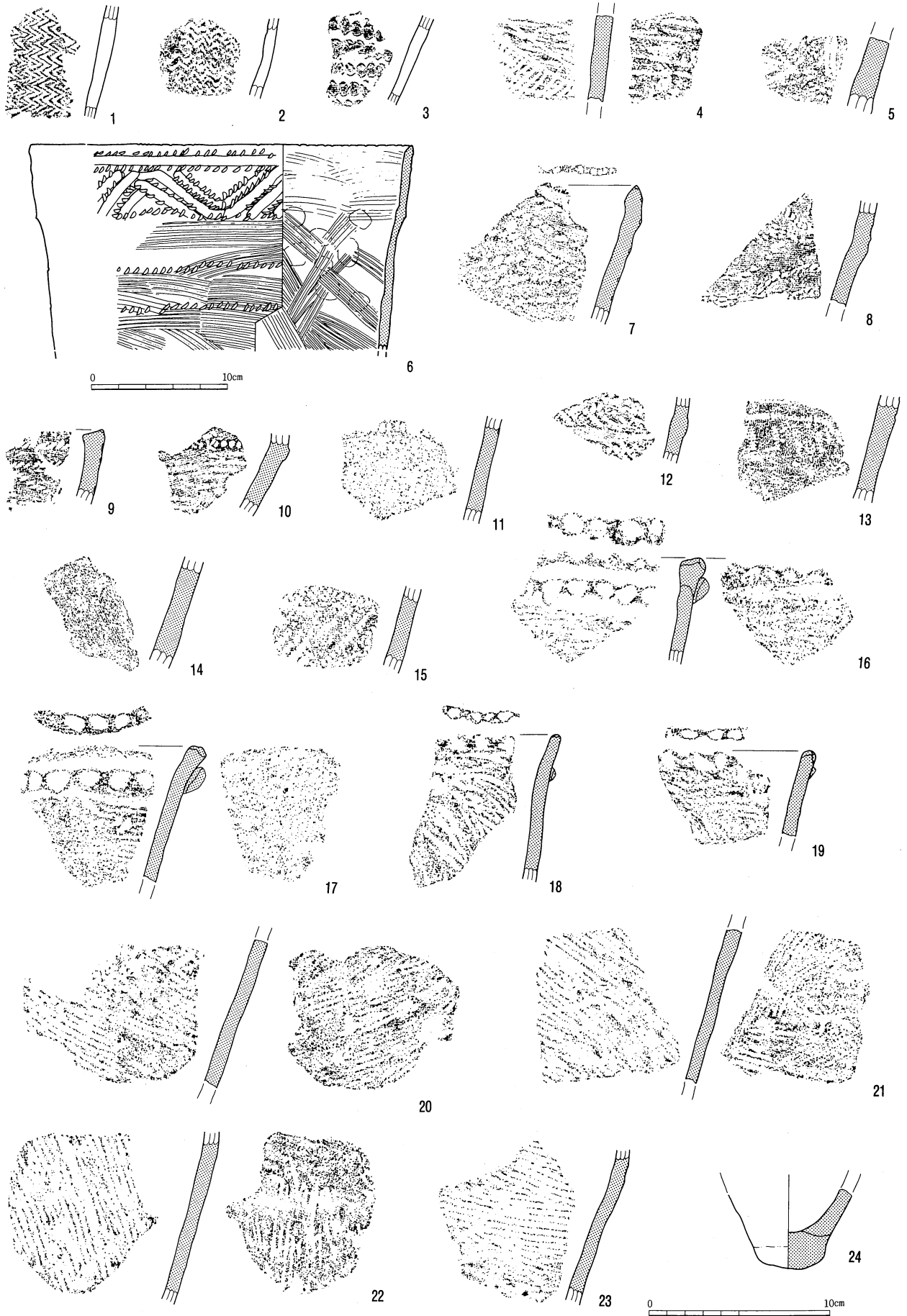


図5 遺構外出土縄文時代早期土器実測図・拓影

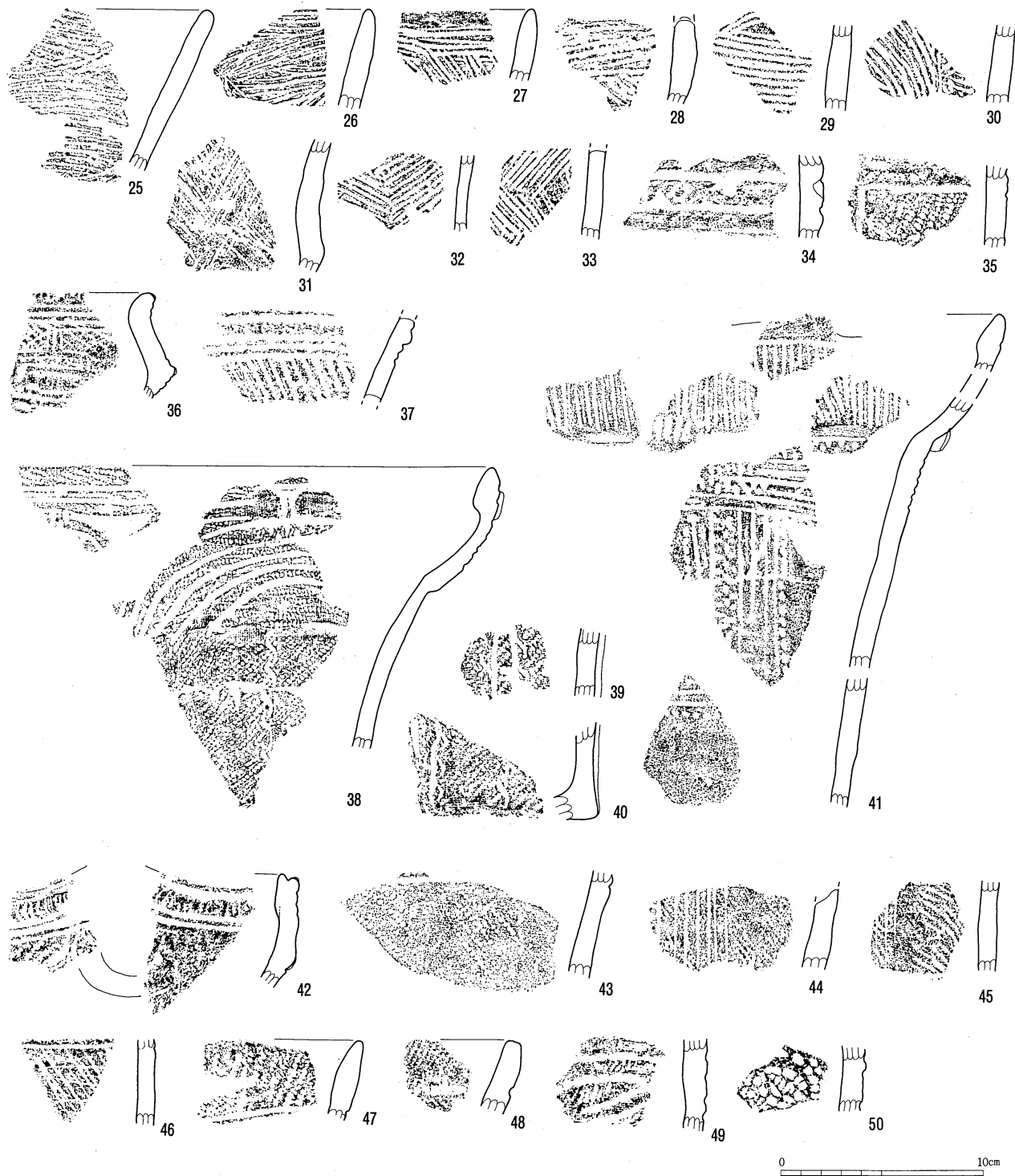


図6 遺構外出土縄文時代中期土器拓影

全面に結節縄文を施している。41はこれとよく似た器形ながら棒状工具による平行沈線と刺突を施し、地文はない。34・35および42～47もそれぞれ同一個体とみられる。これらは梨久保式の新しい段階に位置付けられよう。

その他、中期中葉の土器がわずかに北区Ⅲ層から出土している(48～50)。

イ 石器 (図7・8、PL33)

出土した石器は、石鏃27点、石錐2点、スクレイパー8点、ピエス・エスキュー18点、小剝離痕のある剥片27点、その他黒曜石片435点、打製石斧3点、磨石・凹石7点がある。石鏃のうち有茎鏃は1点(16)のみで

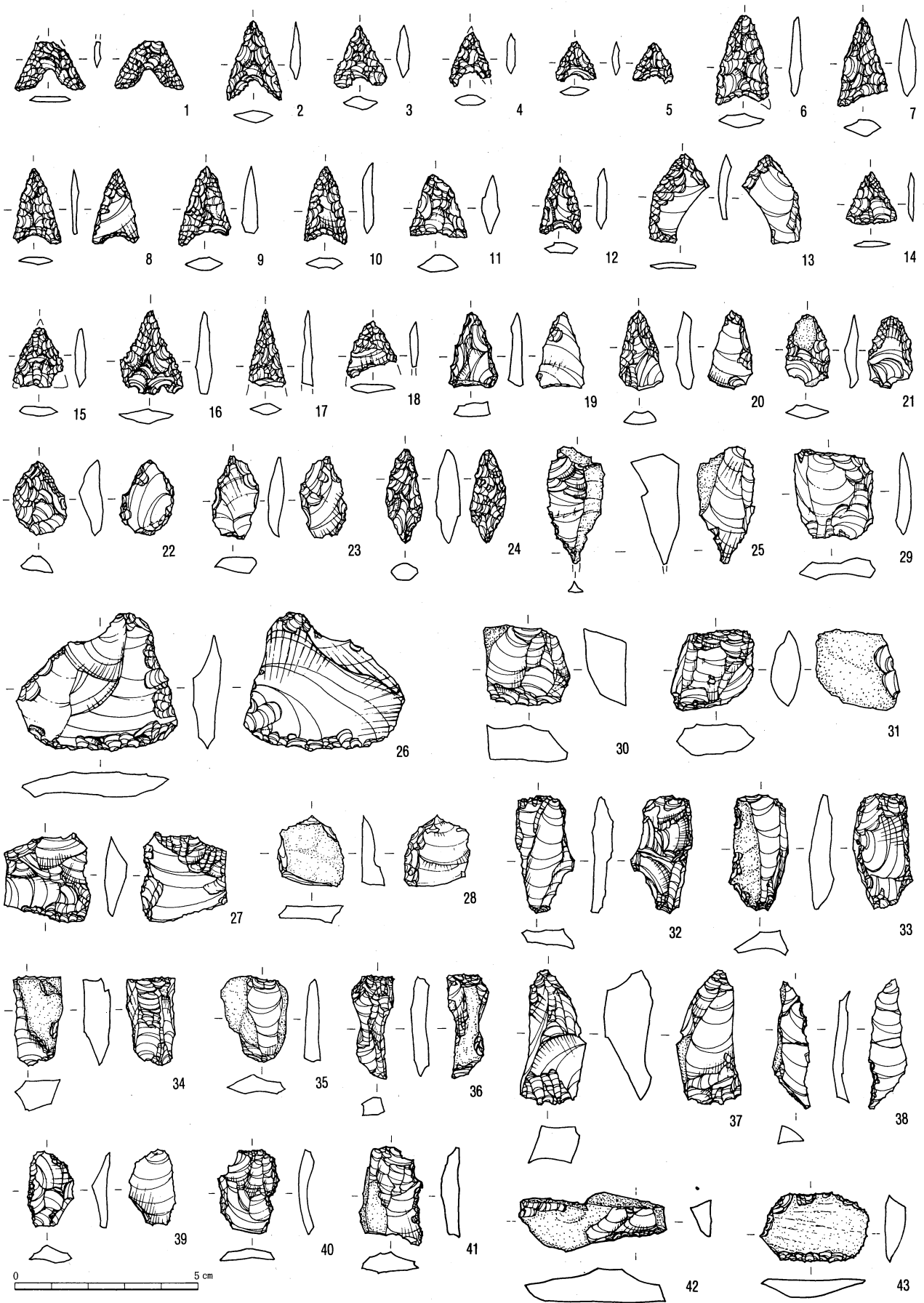


図7 遺構外出土縄文時代石器実測図1

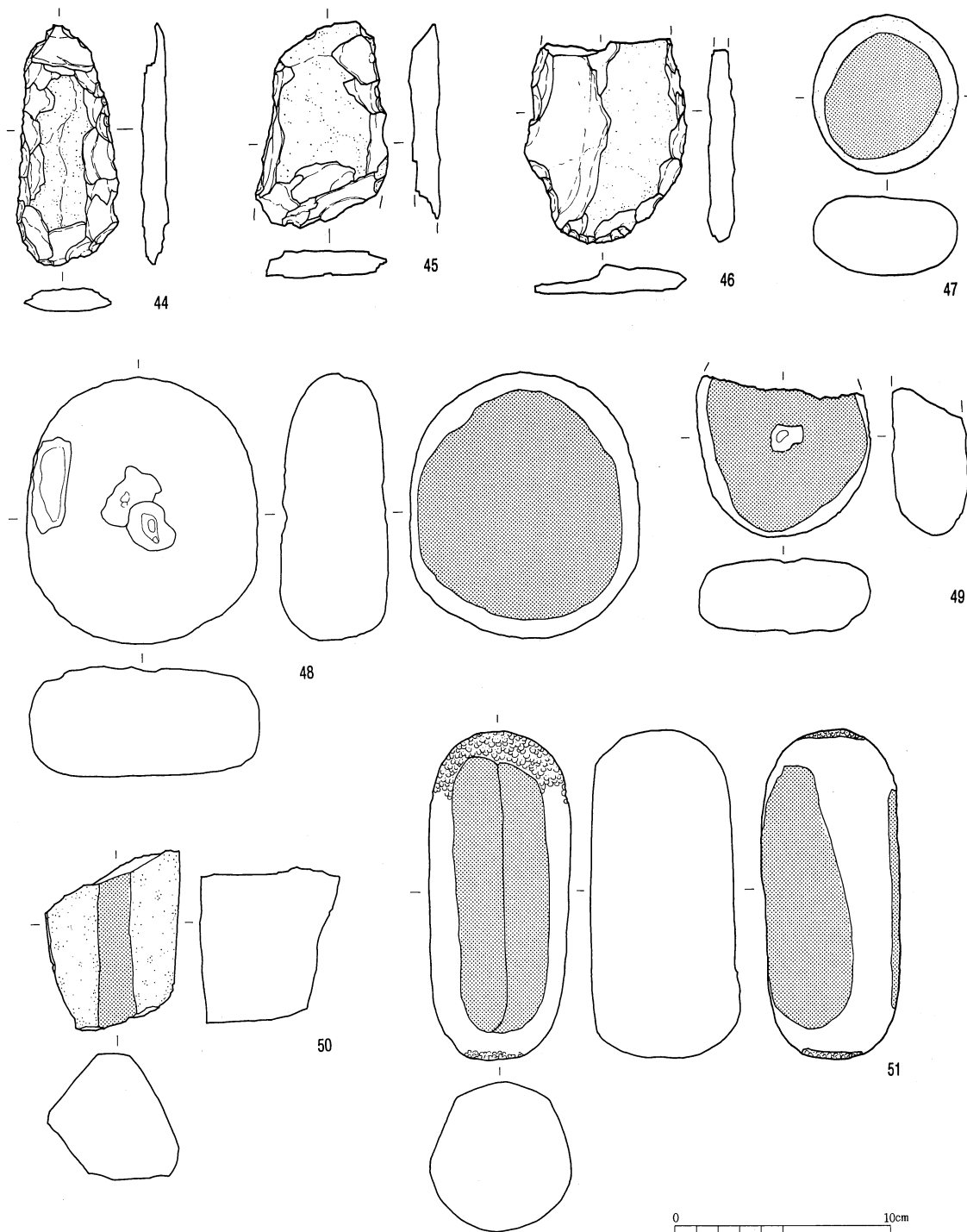


図8 遺構外出土縄文時代石器実測図2

無茎鏃が主体を占める。残存状況は完形8、破損13、未製品6。製品か未製品かの判別はむずかしいが、ここで未製品としたのは、全体の形が整わなかったり調整が不十分で刃部が鈍く、利器としての機能を果たし得ないと判断した19～23等である。ただし、21・22は剥離痕が小さくスクレイパーの可能性もある。これら未製品は6点とも南区の出土で、偏りなく出土した製品とは分布が異なる。出土層位はⅠ・Ⅱ層であり、Ⅱ層上部を包含層とする諸磯C式土器に伴うものかもしれない。石錐は棒状(24)とつまみを有するタイプ(25)が各1点出土した。24は全体に調整剥離が施されているうえ両端に使用痕とみられる摩耗が残る。25は先端を欠く。スクレイパー(26～28)は、両面調整された刃部をもつ大形(26)と片面調整の刃部をもち長さ2cm前後の小形(27・28)があり、後者が多い。ピエス・エスキーユ(29～37)は上端が平らな面をなす例(30・34)も

あるが、多くは両端が尖る。小剥離痕のある剥片(38~43)は、大きさ、形状ともにさまざまであるが、剥片の鋭利な縁辺に主要剥離面側からの加圧による小剥離痕が連続的に残るといふ点では共通する。その範囲は1cm~2cm程度の例が最も多い。以上は全て黒曜石製である。剥片、石核、原石も、剥片の中の3点のチャート以外はすべて黒曜石である。

打製石斧(44~46)は3点すべて頁岩製で北区から出土しており、南区にはない。磨石・凹石(47~51)には磨面のみ(47)、磨面と凹み(48)、凹みのみ(49)、いわゆる特殊磨石(50・51)の4種がある。石材は砂岩(47・50)または安山岩(48・49・51)である。このうち特殊磨石は4点あり、すべてが南区出土で、II層1点、III層上部3点と貝殻条痕文系土器の出土状況に似る。

#### (4) 平安時代の遺構と遺物

##### ア 住居址

##### ① 1号住居址 (図9、PL34・35)

**検出**：南区に位置する。尾根の麓の南西向き斜面に立地する。掘り込みの深い北側以外はプランの確認ができなかった。掘り込み面は、IIb層中で検出されたことからIIb層中かIIb層上面。2号住居址は本址の上に重複して構築される。**規模・形状**：プランの全容は不明。しかし、北壁の状況から東西ほぼ5mと比較的大型の隅丸方形プランが想定される。主軸方向はN10°E。**埋土**：北壁中央部やや東寄りの壁が一部壊れ、角礫の流れ込みが明確に認められるので、廃絶後直ちに埋められたとは考えにくい。埋土は2層に分かれ、黒褐色土の上にややローム混じりの黄味の強い黒褐色土がのる。**床面・壁**：床は堅く敲き締められており、南にわずかに傾斜する。カマドの東側3箇所焼化面が認められる。柱穴、周溝は認められない。壁高は最大値で41cmである。**カマド**：北壁中央部と思われる付近に石組みのカマドがある。天井石と西袖石に崩れが見られるものの、東袖石はほぼ原型を留め、カマドの概要を見ることができる。それによると、長さ1.0m、幅80cm程で、壁に対し主軸を13°東に振る。東袖石はIII層をわずかに掘り込んで5個の厚手の平石を並べ、下に土を入れ高さを調整している。天井部はほぼ同形の枕状の石でかけ口をつくる。焚口は両袖末端から半円状に伸び、燃焼部に向かって数cm掘り込まれ、火床は焼土化している。煙道は明確でない。**その他の施設**：住居址北東隅に深さ10cmほどの瓢箪形のピットがあるが、そのピット内部にやや深い別のピットが検出され、上位のピットに切られている。いずれも埋土全体に炭化物、灰、土師器片が散在していたが、上位ピットには炭化物塊が広がっていた。**遺物の出土状況**：遺物はすべて破片で100余点を数えるが、ほとんどはカマド周辺から住居址北東部のピットにかけて集中分布する。床面直上及びわずかに浮いたものが大部分であったが、上位ピット内のもの以外は押し潰されて割れた小破片である。**遺物**：土師器、黒色土器、灰釉陶器があるが、灰釉陶器は少ない。食膳具には土師器杯、椀、黒色土器A椀、灰釉陶器椀、段皿、耳皿が、煮炊具には甕と鍋がある。土師器杯(51・52)はAIIで、胎土緻密、ナデ調整も丁寧。51は上位ピット内より出土。黒色土器A(53)は内面ヘラミガキのある椀で、外面のナデも丁寧。土師器椀(54~57)のうち、54・55は高台接合時に糸切り痕がナデ消される。55は上位ピット内出土。57は大型で内面ロクロナデし、口縁部を外側に大きく引き出している。煮炊具(58~60)のうち58・59は土師器甕で、いずれもカマド周辺に散乱していた。ともに内外面ロクロナデが行われ、58では一部板状工具による整形の跡がみられる。60は獣脚付鍋と考えられるが、脚部と体部の接合部のみの残存で全容は不明。断面は四角形に近く、外面はナデ調整される。この鍋は長野市大室北遺跡、同田中沖遺跡などの類例が知られるもので、近年、塩尻市吉田川西・松本市神戸・南栗遺跡などでも出土しており、その整理が進めば形態も明確になってこよう。以上は全て土師質であるが、図示できなかった土師器も概して焼きの堅いものが多い。また、杯は小型化

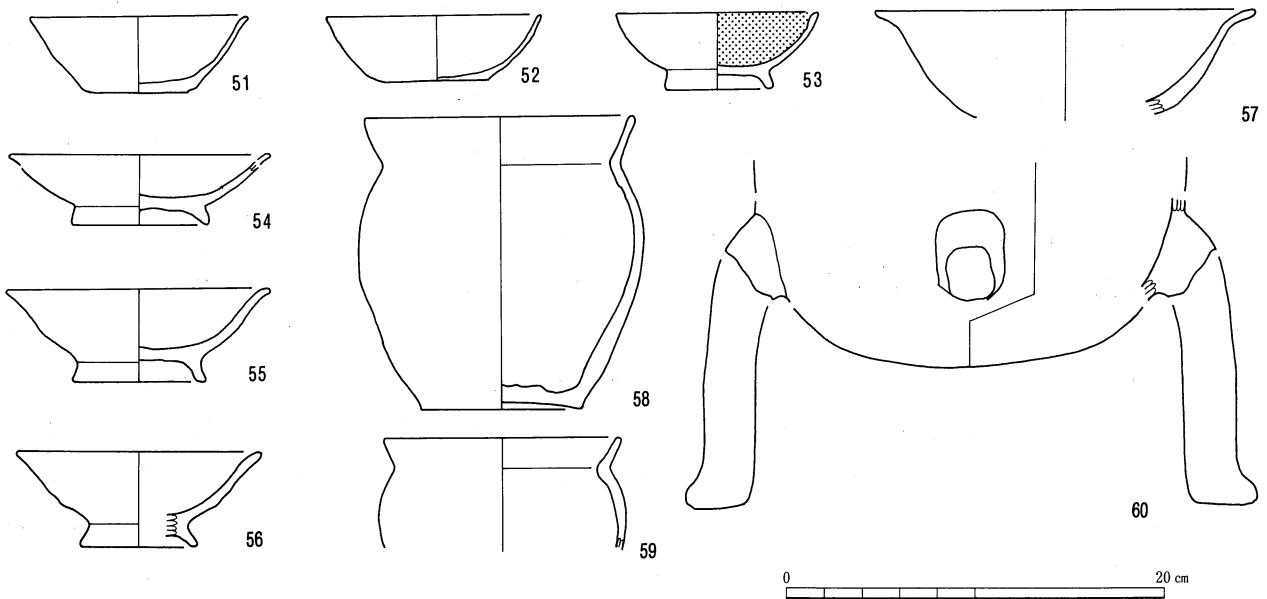
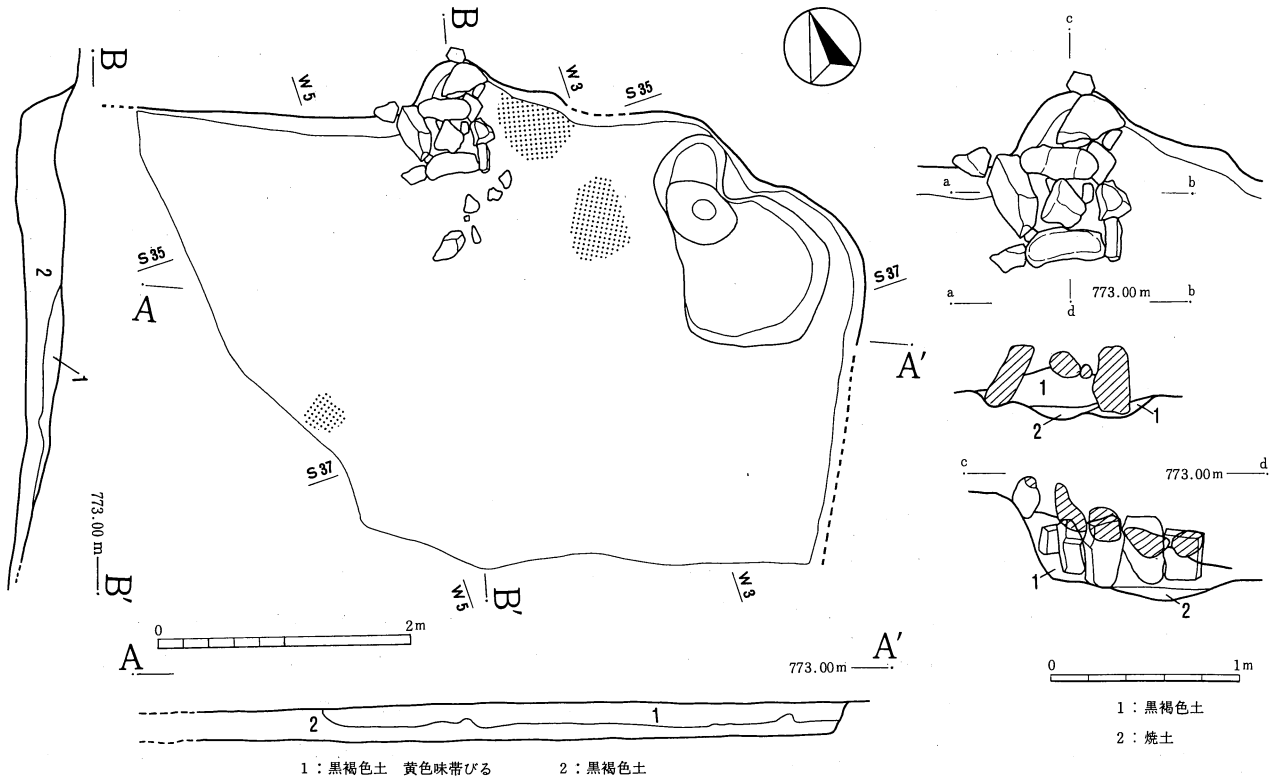


図9 1号住居址実測図及び出土遺物実測図

しながらも大小の法量分化に至っていない。灰釉陶器は前述の3点のみで、その特色は不明である。土師器杯は樋口遺跡1号住居址出土のものに極似する。**時期**：10世紀代。

② 2号住居址 (図10)

**検出**：南区に位置する。表土下に床面の一部が検出されたのみでプラン等不明な点が多い。**規模・形状**：不明。**埋土**：残存しない。**床面・壁**：確認できた床面は2m×3mの範囲である。1号住居址に重複してその上30cmに構築され、一部は非常に堅緻に敲き締められている。壁は存在しない。**カマド**：不明。**柱穴**：ない。**遺物の出土状況**：出土量はわずかで、すべて床面上の出土である。**遺物**：土師器、灰釉陶器の破片

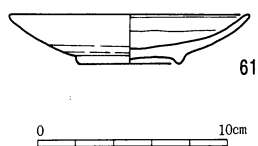


図10 2号住居址  
出土遺物実測図

合わせて4点がある。灰釉陶器は内側口縁付近に浅い沈線が1条入った皿で、底部から腰部にかけてケズリがみられるが高台の接合は雑である。東濃産で虎溪山1号窯式。時期：10世紀代。

③ 3号住居址 (図11)

**検出**：南区に位置する。南西に面した斜面に立地し、Ⅲ層に切り込んでおり東北部でのみプラン検出が可能であった。**規模・形状**：東北壁と一部痕跡を残した西壁及び遺物の集中状況から、1辺4m前後の隅丸方形と想定される。**埋土**：黒色土の単層で、Ⅱb層に由来する。**床面**：Ⅲ層を床面とし、南西に向けやや低くなる。風化のためか敲き締められた痕跡はほとんどない。南西部は、Ⅲ層の礫の露出のため、凹凸が認められる。**カマド**：残存する北及び東壁では検出できなかった。またその痕跡も見当らない。**柱穴**：ない。**その他の施設**：住居址東北隅近くに深さ20cmほどの瓢箪形のピットが設けられる。円形ピットの切り合いの可能性もある。**遺物の出土状況**：すべて細片で、ほとんどが埋土中の出土である。**遺物**：土師器、須恵器、灰釉陶器がある。62は黒砂混じりの胎土の須恵器杯Bである。底部は回転ヘラケズリの後、高台接合時にナデ消している。63は三日月高台の丁寧にナデ調整されたやや小振りの灰釉陶器椀Aで、口縁をわずかにひき出す。図示した以外に食膳具では土師器椀、杯、黒色土器A椀、灰釉陶器椀、皿が、貯蔵具は須恵器甕、灰釉陶器長頸瓶などがあるが、いずれも細片である。**時期**：灰釉陶器椀(63)は東濃産で虎溪山1号窯の古い段階に比定される。62の須恵器杯は時期を異にしているが、縄文遺物の混在などを考えると流れ込みの可能性が強く、他址とほぼ同時期とみてよい。

④ 4号住居址 (図12、P L34・35)

**検出**：北区に位置する。本址はすでに耕作土が削平されてカマド石が露出していた。プランは東・南壁の一部を除き不明瞭で、床面の広がりをもって確認した。現存する壁、床面ともにⅢ層中に構築されている。なお、住居址内には拳大から人頭大の礫が散乱し、一部は床面に食い込んでいた。**規模・形状**：一辺4mの

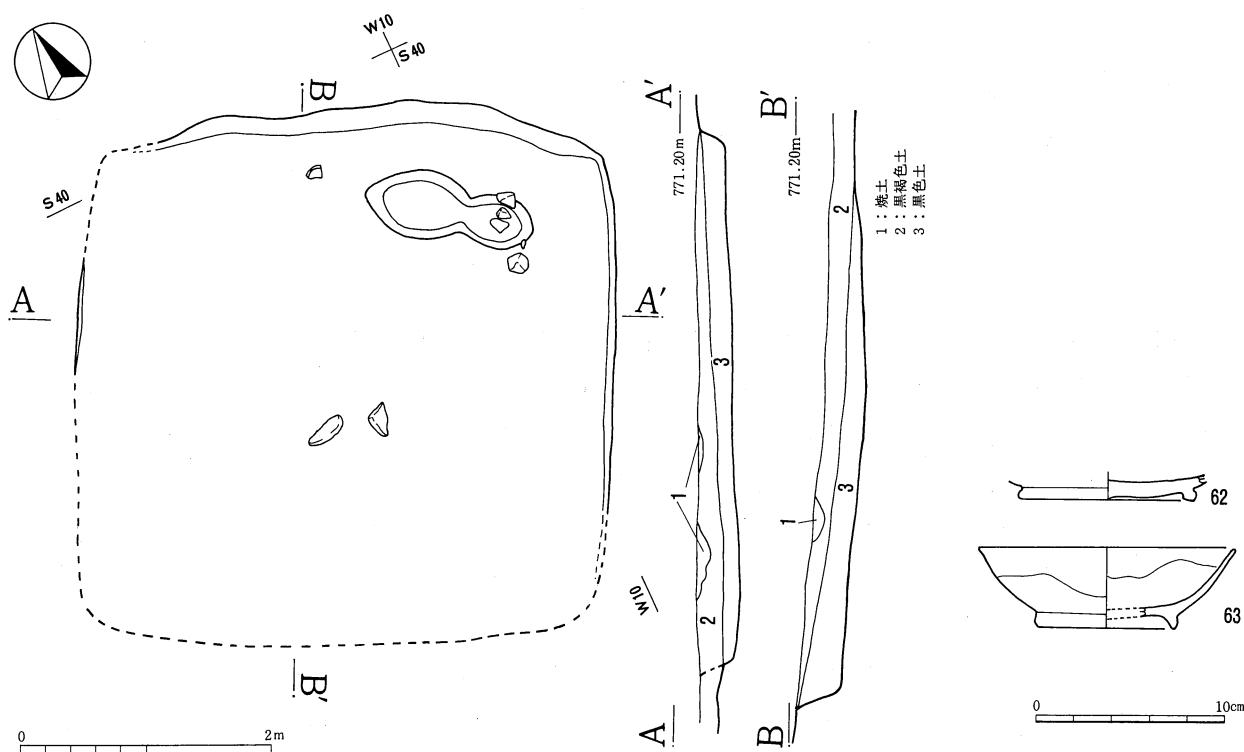


図11 3号住居址実測図及び出土遺物実測図



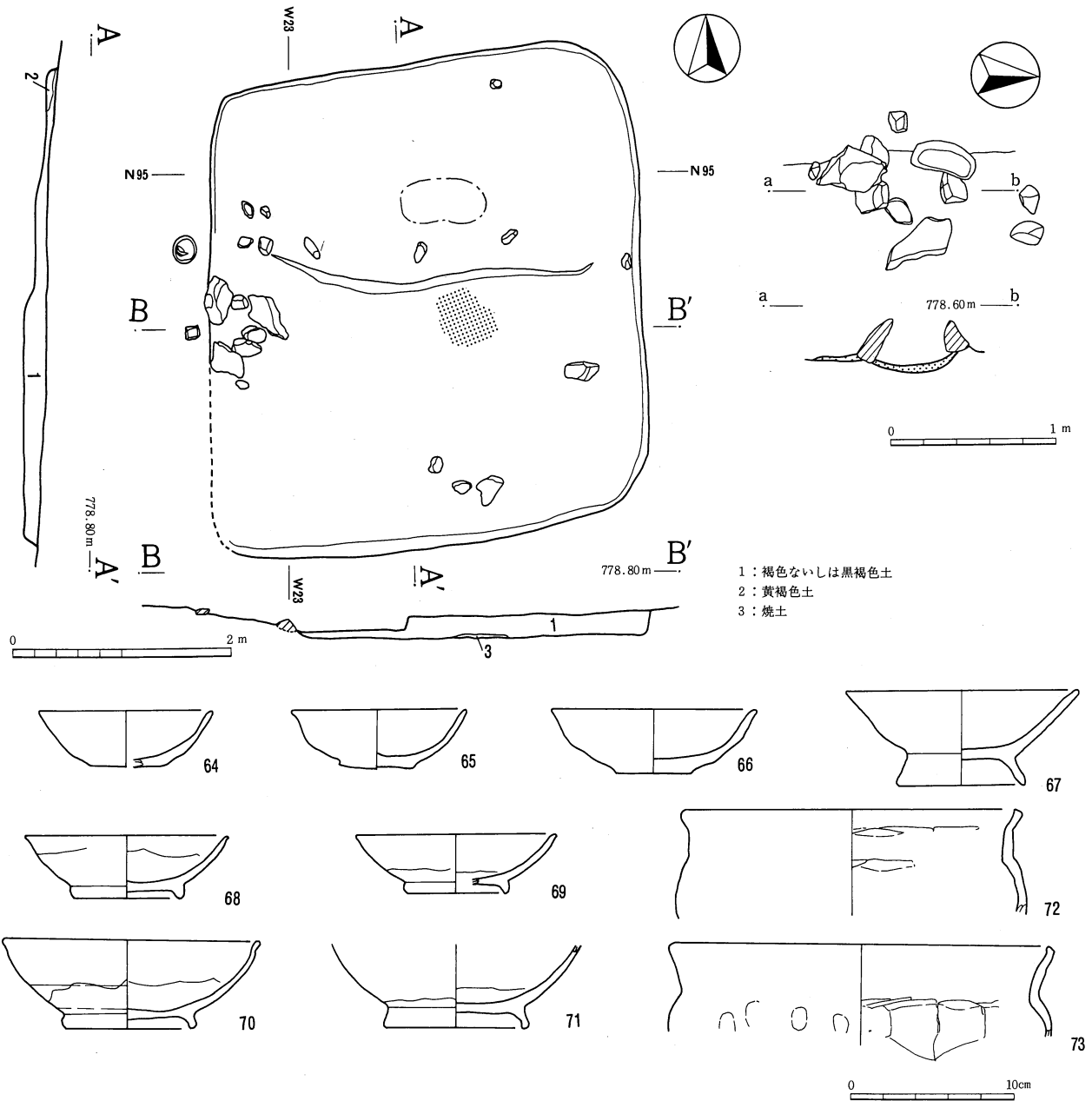


図12 4号住居址実測図及び出土遺物実測図

隅丸方形を呈するが、かなり歪んでおり、主軸が東西軸から10°程南に振っているのに対し対交軸はほぼ南北を指す。**埋土**：礫をわずかに含んだ黒褐色土の単層。**床面・壁**：床面は礫のかなり混入した黒味の強い黒褐色土で、南側は一様に堅く、わずかに南に傾く。北側では一部に粘土の貼り床があり、一段高い状況で、やはり南に傾く。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、高さは最高20cm。一部は攪乱により完全に失われている。周溝・柱穴は認められない。**カマド**：西壁中央にある。破壊が著しく、構造はつかみにくい、長さ90cm、幅70cm規模の石組カマドであろう。焚口から燃焼部にかけて7cm～8cmほど掘り窪められ、その底面は焼けている。焼土は袖石の外まで広がる。煙道は確認できなかったが、カマドの背後には、裏込めの礫混じりロームが見られた。**その他の施設**：カマドの外側に土師器を伴ったピットがあるが、本址に所属するか不明。**遺物の出土状況**：100点ほどあり、すべて細片で、そのうち3分の1が床面直上出土。ほぼ全面に散在しているが、やや東南部に厚い。**遺物**：焼物類では、食膳具として土師器杯、椀、盤、灰釉陶器椀が、貯蔵具は灰釉陶器長頸瓶が、煮炊具は土師器甕、羽釜がある。土師器杯A II (64~66)のうち65は小礫を

み、調整も雑であるが、64・66は胎土は緻密で調整も丁寧である。64は底部にケズリが入る。土師器盤B(67)はカマド内出土。68～71は灰釉陶器。椀(68～70)は立ち上がりの緩やかな三日月高台の古い系譜を受け継いでいる。68・69は全面にナデが入るが、69の底部の糸切りは十分にナデ消されていない。70は口縁端部をつまみ出してわずかに玉縁状とし、胴部下半から底部までケズリが加えられる。71は小片のため明確ではないが、器形から輪花椀の可能性もある。高台接合部付近のみケズリがみられ、底部に糸切り痕を残す。これらの灰釉陶器はいずれも東濃産であり、大原2号窯式から虎溪山1号窯式の古い方に属すると思われる。土師器甕(72・73)は頸部が強いヨコナデによりいわゆる「コ」の字状をなし、胴部はケズリの後ナデの加えられる武蔵型に近いが、口縁部がわずかに内湾する。内面に炭化物が付着して黒い。焼物以外では、東壁の北寄り近くに、3cm～4cm大の鉄滓2個が出土した。時期：10世紀代。

### イ 集石

#### ① 1号集石 (図13、P L34・35)

I層直下、IIb層上面で検出された。径90cmの円形で厚さ7cmほどの焼土ブロックを中心に礫が散乱する。礫は拳大から人頭大のやや丸味を持つ河床礫が多く、割れるなど火を受けた痕跡を示す。焼土東側の礫は平面的に敷かれた様相が認められ、なんらかの構築物であった可能性が大きい。しかし、直上まで攪乱が及んで礫の移動が激しく、立体構造を持つものであるか不明である。焼土は、焼土粒が多量に混入しており、北東部半分は特に密度が高い。

遺物は焼土上に土師器と灰釉陶器の細片が多数散在しており、東側の敷石の礫間に挟まった状態で緑釉陶器片が、敷石東端には黒色土器の椀と皿がほぼ完形で並んで出土した。これらの遺物に二次焼成痕は認められない。図示した焼物はすべて供膳具である。74・75は黒色土器Aで、75は椀Cである。74は口縁部内外に2条のヨコミガキを入れ、内面は見込み部から口縁にかけ粗いヘラミガキが入る。75は内面に不定方向のヘラミガキ痕をもつ。74・75ともに焼きは堅い。76は体部がほぼ直線的に開き、高台径は小さく足の長い盤状を呈するが、皿Bとしておく。77は灰釉陶器の椀で底部から胴部下半にかけケズリが入る。口縁端部を指でわずかにつまみ出している。78は緑釉陶器の皿Bである。体部はなだらかに立ち上がり、口縁端部につまみみを入れわずかに外へ引き出す。底部から腰部にかけケズリが入る。高台は外へ開いた足の長い形で、端部は指で面取りされる。胎土は硬質で、釉は刷毛塗り痕を明瞭に残すが、光沢のある黄緑色である。見込み部に三叉トチンの痕跡を残す。74・76は敷石東端に並んで出土したが、78は敷石内に、75・76は焼土内に散在していた。その他土師器杯、椀、甕、羽釜の細片が焼土付近に、敷石より数10cm離れて灰釉陶器長頸瓶の口縁部細片が出土したが、平面的にもレベル的にも大きく離れた遺物が接合するなど攪乱に

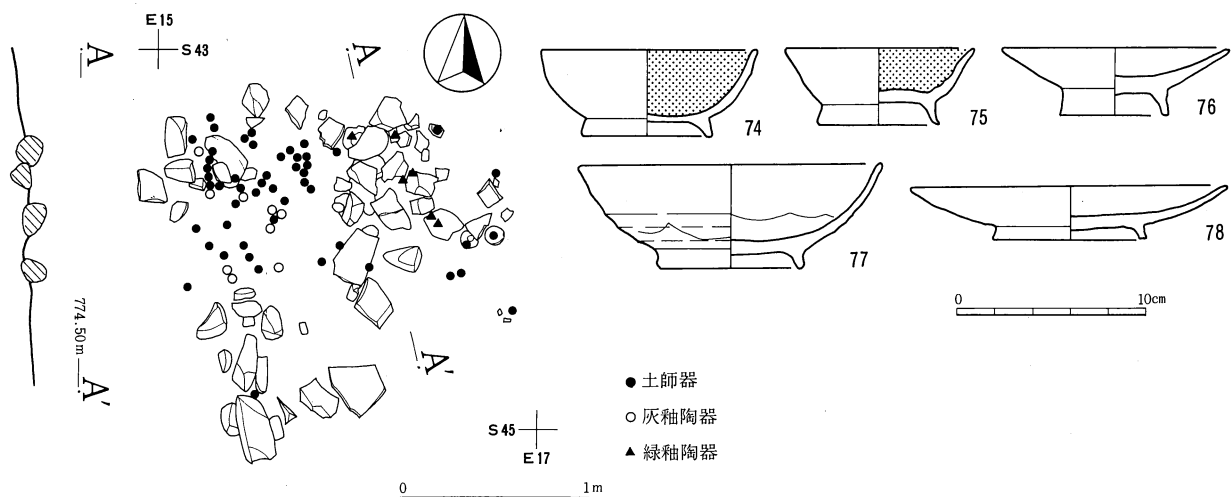


図13 1号集石址実測図及び出土遺物実測図

よる移動が激しく本址にすべて所属するものとはいきれない。しかし、焼土直上の東濃窯産の灰釉陶器の椀、尾北窯産と推定される緑釉陶器の皿、緻密な胎土と堅い焼きの土師器杯、椀など、いずれも東濃窯編年でいう大原2号窯式期と相伴するので、本址の所属時期を示す例証としてさしつかえなからう。

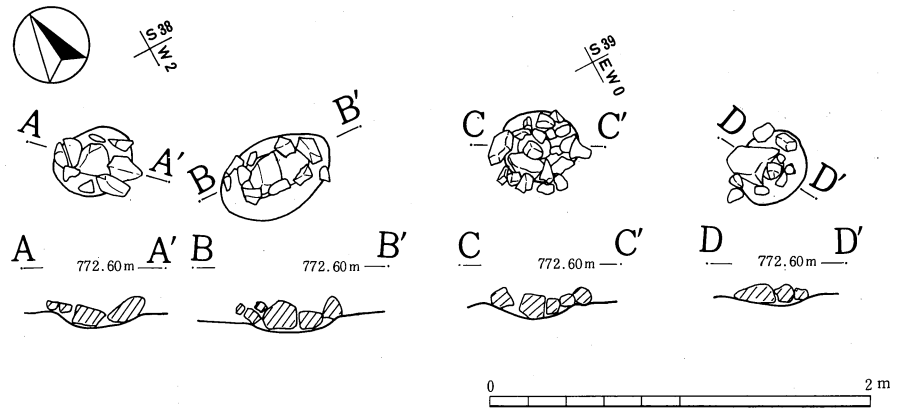


図14 2号集石址実測図

本址は、焼土ブロックの存在や、広い範囲にわたって火を受け割れた石が分布することから、恒常的ではないが大きく強い火を受けた状況が認められ、出土した完形に近い緑釉陶器や土師器を供献遺物と考えれば、骨は検出されていないが墓址ないしは火葬施設の可能性が大きい。

② 2号集石 (図14、PL35)

尾根から谷への地形変換線間近かの斜面上に検出された小さな集石4基を一括して2号集石とした。検出はIIb層下位であり、III層をわずかに掘り込む。1号住居址の東壁近くからS29°Eへ向け一列にA・B・C・Dと並んでおり、レベル差は10cm以内である。また、AB間が95cm、BC間が140cm、CD間が120cm(いずれも中心からの距離)とばらつきはあるが、縦方向ではCが10cmほど北にずれるだけで一直線上に並ぶ。個々の集石規模は径50cm前後で、拳大から10数cmの礫10個～20個を並べる。C以外は中央の大きめの礫のまわりに拳大の礫を配している。また、A・Cは中央部がやや低く、B・Dはほぼ水平である。掘り形は石を安定させる程度に10cm前後掘り窪めただけである。礫は円礫と角礫が混在し、A以外は焼礫をいくつか含んでいる。

遺物はAの掘り形付近に縄文前期末と早期末、Bの礫間に縄文早期末と平安時代の土師器片が、Cの掘り込み付近に縄文早期末の土器が検出されている。しかし、いずれも時期確定の決め手とはならず、その性格も明確ではない。ただ、集石の並ぶ方向が平安時代の住居址の軸と一致しており、1号住居址のすぐ脇から伸びている点などを考慮すると、同時期のものとするのが妥当のように思われる。

ウ 遺構外出土遺物 (図15・16、PL35)

南区では、疎密の違いはあるものの調査区全域のI・IIa層より遺物が出土した。なお、EX22及びHF01グリッド付近に遺物の集中がみられ、一部床面らしい堅い面も認められたが、遺構と断定できず、遺構外出土遺物として扱った。遺物はすべて焼物で、土師器では椀、杯を中心に羽釜、甕、盤、鉢が、黒色土器はAの椀が若干ある。須恵器では高台杯、甕、杯蓋が出土したが僅少である。一方北区では、I・II層中から出土しているが、ほとんどはI層中である。土師器、灰釉陶器ともに20数点で、とくに土師器は破片が細かく器種はほとんどわからない。灰釉陶器は椀、皿などがある。

以下は上記のうち復元されたものを中心に図示した。79～102は南区、103～106は北区の出土である。

北区の須恵器高台杯(79)は底部にロクロヘラケズリが入り、高台が外側に踏ん張ったもの。9世紀前半ぐらいに当るだろうが、この期のもは非常に少ない。

土師器杯(80・81)は糸切り痕のある内外面ロクロナデの杯AIIである。黒色土器椀(82)は内面口縁部付近に2～3条のヨコヘラミガキを入れ、その後放射状に粗いヘラミガキが入る。土師器椀(83)は比較的高台が

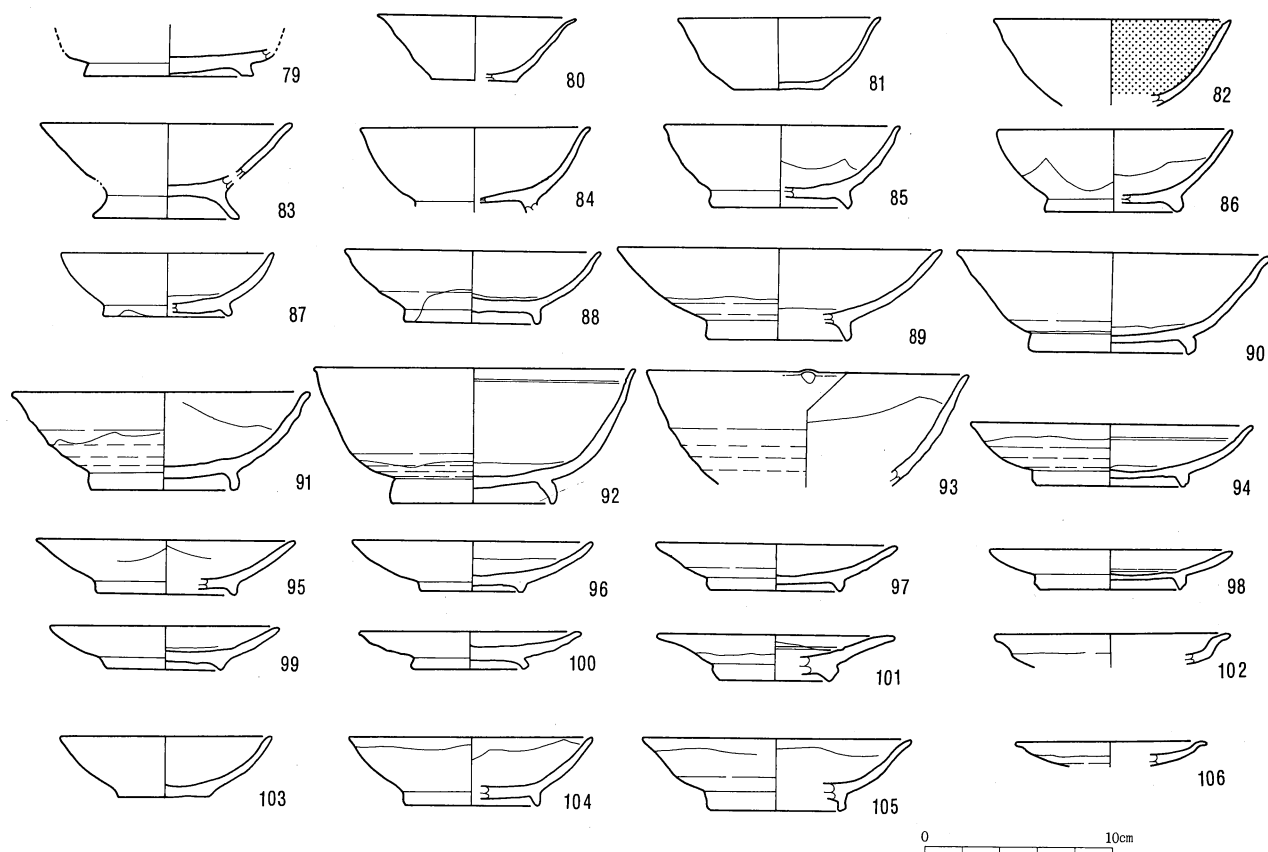


図15 遺構外出土平安時代遺物実測図

高く、直線的な体部をもつ。

灰釉陶器碗(84~93)のうち84~86はやや小形でへラケズリはみられず、いずれも糸切り痕を残すが、内外面ともナデが丁寧になされる。87~91は体部が緩やかに立ち上がる背の低いタイプで、小形(87・88)と大形(89~91)の2種がある。いずれも腰部付近から底部にかけてへラケズリが加えられる。92は腰の張った深碗タイプで、底部から体部下半にかけてへラケズリがあり、内面口縁付近に1条の沈線が入る。93は輪花碗。輪花数はへらを使用するが破片のため数は不明。灰釉陶器皿(94~102)のうち94~97・99・100は皿Bである。94は体部の張った大形で、口縁内面に1条の沈線が、外面には口縁近くまでへラケズリが入る。他は緩やかに立ち上がるもので、96以外は底部に糸切り痕を残す。皿C(98・101)のうち、98は見込み部境をへらでわずかに凹ませ、段状にする。102は折縁皿。以上の灰釉陶器はすべて漬け掛けである。

北区の103は土師器杯A IIで、全面丁寧にナデられる。灰釉陶器碗(104・105)は体部が緩やかに立ち上がり、背の低いタイプ。104は底部に糸切り痕を残すが全面丁寧にナデられる。105は口縁端部をややつまみ出し、腰部から底部にへラケズリ後ナデが加えられる。106は折縁皿で底部近くにへラケズリが入る。

以上の遺構外遺物は、土師器についてみれば胎土は緻密で焼きの堅いものが多く、杯は小形化しながらもいまだ大小の分化に至っていない。灰釉陶器は、碗では体部の立ち上がりが緩やかで三日月高台の系譜を継ぎながら底部糸切り痕を残すものと、ケズリ消されたものが混在する。皿においても大形、小形の両者を混在させているが、小形でも口径12cm近くある。また、皿Bは皿Cに主流を譲っていない。これらの灰釉陶器は東濃窯産であり、大原2号窯式から虎溪山1号窯式に該当し、遺構内遺物と期を同じくしている。

(註1) 灰釉陶器の年代観については「第19節 成果と課題」の項で触れている。

(5) 中世以降の遺構と遺物

ア 溝状遺構 (図4)

北区に位置する。VI層を5cm~10cm掘り込み、底面は平坦で一部酸化鉄の沈着を認める。銅の針金を出土し、新しい暗渠跡とも考えられるが、屈曲が激し過ぎる。時期性格ともに明確でない。

イ 竪穴状遺構

北地区に位置し、溝状遺構に接して構築される。VI層を10cm~20cm掘り込んでおり、溝状遺構よりやや深い。底面はほとんど平坦であるが敲き締められてはいない。遺物は皆無で性格、時期ともに不明であるが、溝と関係があろう。

ウ 中世以降の遺物 (図16)

南区ではI・IIa層中に、北区ではI層中に散見されるが、数は両地区とも少ない。そのうち、南区で出土した内耳鍋細片1点を除けばすべて近世連房期の所産で、中心は幕末から明治初期にあるとよい。連房初期は、志野皿、鉄絵志野皿をわずかに出土する。17世紀代ではほかに灰釉碗、鉄釉碗が1点ずつ出土する。18世紀では鉄釉碗、内面灰釉外面鉄釉の碗、京焼風灰釉碗、渋紙手茶碗等が見られる。18世紀末以降には、南区で呉須小碗、灰釉鉢、錆土瓶、糸目鉄釉土瓶(107)等を、北区では御深井碗、御深井香炉、灰釉灯明皿、染付け磁器碗などがある。糸目土瓶は完形で、IIa層中より押し潰された状態で出土した。胴部中央に最大径があり、それより上位には細かい沈線が入る。これらの陶磁器のほとんどは瀬戸・美濃産である。

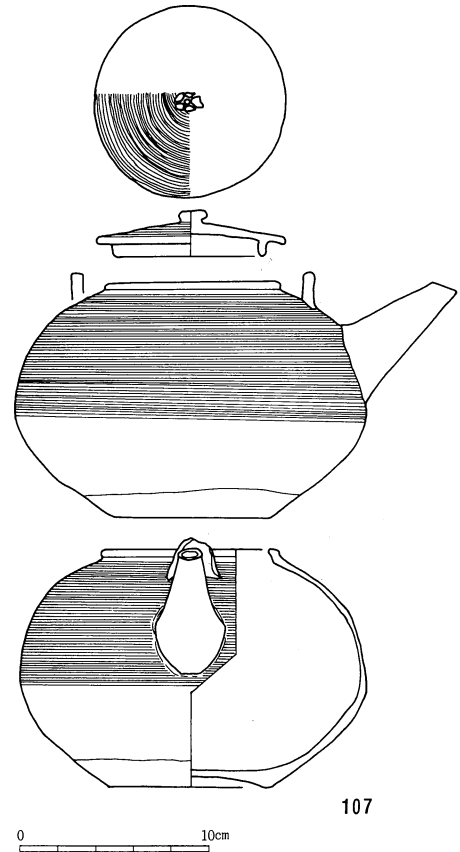


図16 遺構外出土近世遺物実測図

5 小 結

縄文時代及び平安時代の遺物が比較的まとまって出土しているにもかかわらず、近世以降の新しい攪乱によって包含層の多くを失い、形状の不明確な遺構数基を発見するにとどまった。

縄文時代については、塩尻市教育委員会の調査によって尾根末端部で時期不明ながら円形プランの住居址が発見されており(註1)、この付近に集落が営まれた可能性は大きい。

平安時代に関しては、住居址4軒と焼土を伴う集石が発見された。前述したとおり、このほかにも遺構の存在した可能性は大きい。地形からみて南・北区とも大規模集落とは考えにくい。平地縁辺の山間地に展開するこれらの集落を、平安期に特徴的な山間地に点在する小集落という範疇で捉えることには議論の余地もあろう。しかし、居住者の性格や、山地開発の状況についてはここでも大きな課題である(註2)。今回の調査ではこの問題に直接言及すべき所見は得られていないが、次の2点を指摘しておきたい。

(註1) 中央尾根末端部西側斜面、支谷合流点付近は昭和60年塩尻市教育委員会によって調査され、最も尾根寄りの高所に、楕円形プランを持つ縄文時代の住居址1軒(時期不明)、小竪穴3基、ピット6基が検出され、遺物は石鏃1点、摩滅した縄文土器及び平安時代土師器片が出土している(塩尻市教委1986)。

(註2) 山間小規模集落の性格については多くの研究者が論考を発表している。県内における研究を例に挙げれば、マタギ、木地師、鋳物師等の非農業民の生活の場とする桐原健氏(桐原1968)、気候の温暖化や農業技術の進歩等に支えられて生活域を拡散させた農業民の集落に比重をおいて考える笹沢浩氏(笹沢1972)が代表的である。いずれにしてもその背後には社会構造の変質が存在したことはほぼ共通な認識となっている。今後、遺跡あるいは遺構単位に両者の立場から詳細に検討を加える必要がある。

- (i) 出土遺物からすると集落が営まれた期間はそう長くない。大原2号窯式から虎溪山1号窯式の古い段階の灰釉陶器を伴出する10世紀代(年代観については本書第19節図57参照)がその中心で、隣接するヨケ・樋口遺跡と同様である。この傾向は近隣の山間地にも認められ、9世紀後半から増加しはじめ10世紀代に盛行するが、その後は急減する(註1)。これは山間地の開発期間を示すとみてよい。ところでこの開発開始期は、松本平平坦部に展開する大規模集落においては集落の発生や消滅、居住域の変転等集落の再編成が行われた大きな画期にあたると思われ、両者の関係が注目される(註2)。
- (ii) 当遺跡では緑釉皿を伴い、焼土をもつ集石遺構が発見された。攪乱が激しく明確でないが、墓址とも考えられ、緑釉陶器等の遺物は供献的な色彩が強い。この想定が許されるならば、被葬者は緑釉陶器を所有するにふさわしい生産力と生産関係に支えられていたとみるべきだろう。しかし、彼等がどのような生産形態をもちながら富の蓄積を行い得たかは想像の域を出ない(註3)。

## 参考文献

- 桐原 健 1968 「平安期にみられる山地居住人の遺跡」『信濃』III20-4 信濃史学会  
 小林 克 1986 「平安時代火葬墓の性格とその背景」『史叢』 日本大学史学会  
 笹沢 浩 1972 「善光寺平における古墳時代以降の集落立地の基礎的研究」『信濃』III24-4 信濃史学会  
 塩尻市教育委員会 1986 『禰ノ神・栗木沢・砂田』  
 長野県埋蔵文化財センター 1986 『長野県埋蔵文化財センター年報』3

- 
- (註1) この傾向は近隣山間地および山間地に続く谷あいや傾斜地に立地する塩尻市八窪、竜神、高山城、福沢、堂の前、俎原、内田原、舅屋敷の各遺跡及び松本市赤木山遺跡群で認められる。
- (註2) 再編成の具体的な様相は当センターが調査を実施した松本市南栗・北栗・三の宮遺跡等に窺うことができる〔埋文センター1986〕。
- (註3) 小林克氏は関東地方の火葬墓に論及して、「平安時代に特徴的な火葬墓の被葬者」は「独立小規模経営農民」即ち「在地の有力な家族共同体」の成員としている〔小林1986〕が、当遺跡を考える上で有力な視点となろう。

## 第8節 ヨケ遺跡 (EYK)

### 1 遺跡の概観

本遺跡は塩尻市大字長畝718番地、塩尻市斎場北東800m付近に所在する。この地域一帯には西方向に開析された支谷が多く見られるが、本遺跡もそうした狭浅な谷頭部に立地し、標高は780m前後である。栗木沢との河川争奪によって現在は水は流れていない。谷底は崖錐性崩落物や耕作によって平坦化されて西面した緩やかな斜面をなし、発掘前は畑地として利用されていた。南側の小尾根を越えたすぐ隣にある栗木沢遺跡は、載頭河川名残りの低い鞍部を通して容易に往復できる位置にある。北側の小尾根上及びその北側の谷部に樋口遺跡がある。谷は狭く、尾根に遮られ眺望は良くない。

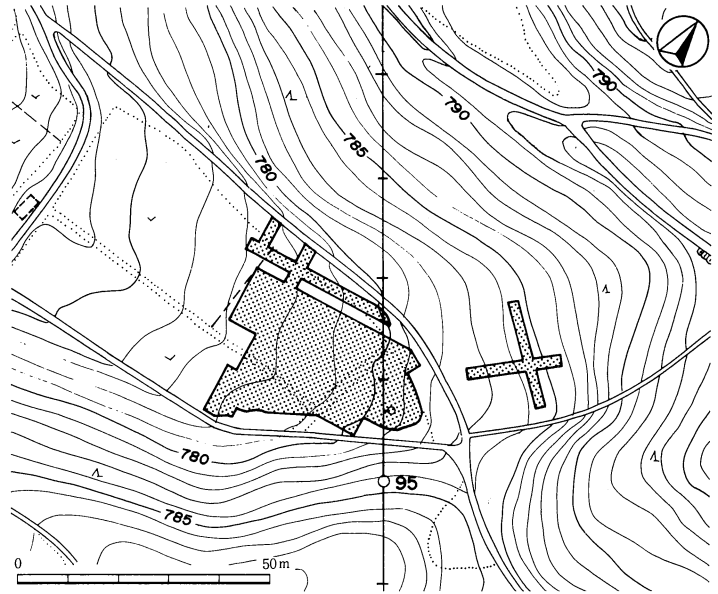


図1 地形及び発掘範囲 (1:1500)

### 2 調査の概要

遺跡は西に開く谷の谷頭部に位置するが、その東端、最も奥まった尾根付き付近の1490m<sup>2</sup>が路線にかかり、調査の対象となった。調査は昭和59年5月1日より6月21日まで実施し、調査研究員3名が当たった。まず、対象面積全域にわたる5本のトレンチを設定し、層序及び包含層の把握に努めた。その結果、密度は低いものの遺物はほぼ全域に分布し、遺構の存在する可能性も認められたので、全面発掘を行った。測量基準点は日本道路公団の工事用杭 STA93+60 (X=11920.4511, Y=-45866.5355) を用い、レベル原点は STA95+20 (標高 780.739m) を使用した。

整理作業は昭和60年1月から3月、62年2月から4月まで断続的に行われ、本報告に至る。

### 3 調査の経過

#### 昭和59年度

- 5月1日 グリッド設定。
- 5月9日 トレンチを設定し発掘開始。層序の確認に入る。
- 5月10日 北西部トレンチで表土下わずかで基盤に至ることを確認。
- 5月11日 調査区南部を拡張。II層から平安時代、IV層下限から縄文時代早期遺物が出土。
- 5月22日 南部掘り下げ終了。検出された4箇所 of 落ち込みはすべてロームマウンドと判断。
- 5月31日 北部は基盤まで掘り下げ。5箇所 of 落ち込み確認。
- 6月4日 落ち込みの精査完了。土壌は1基で、他の4箇所はロームマウンドと判断。

- 6月6日 東側の緩斜面でトレンチ調査開始。
- 6月7日 谷部の調査終了。
- 6月12日 東側尾根部包含層なく調査終了。
- 1月5日 図面整理、遺物復元、遺物実測開始(～3月)。

#### 昭和61年度

- 4月5日 遺物実測、図面整理再開。
- 2月1日 報告書刊行に向けて図版及び写真図版作成、原稿執筆(～4月)。

4 調査の結果

(1) 層序と地形形成 (図2)

本遺跡の基本的層序は次の通りである。

I層：茶褐色の現耕土。

II層：I層よりやや黒味の強い黒褐色土。シルトに近く粘性に富み、締りを持ち、礫は少ない。

III層：II層よりやや明るい茶褐色土。I層より粘性があり強く締る。礫は少ない。

IV層：黒色土。ボクボクして締りに欠ける。礫は少ない。

V層：やや明るい茶褐色の漸移層。硬度高く、小礫が多く混入する。

VI層：多量の角礫を含む二次堆積ローム。

層序の基本は、基盤の上に尾根から崩落した碎屑物が堆積して形成されたものと思われる。比較的明瞭な境界線を持つこれらの層序は、土壌化及び堆積の速度の違いによって形成されたと思われる。しかし、

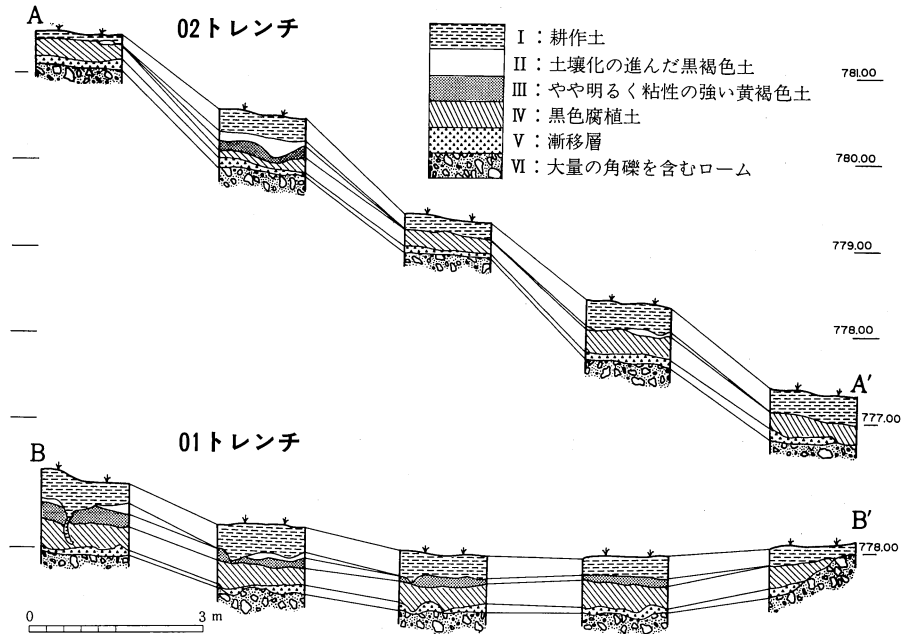


図2 土層図 (1:90)

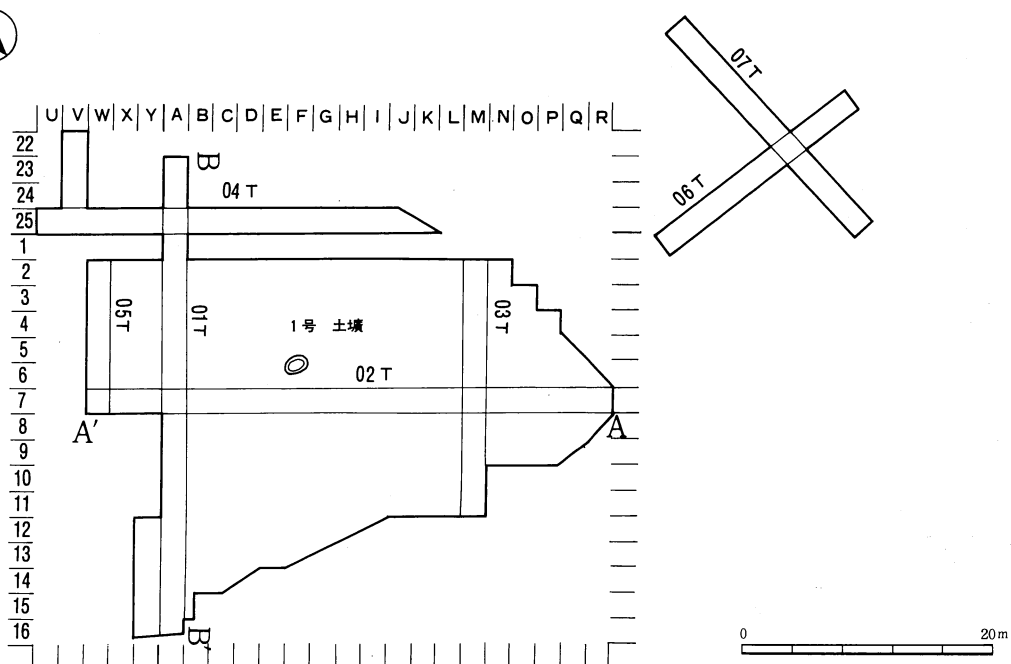


図3 トレンチ配置図及び遺構分布図 (1:600)



畑地化による削平で斜面部ではすでにII層からV層が失われ、中央部でもII・III層は薄く、しかも部分的にしか存在しない。

(2) 遺構と遺物の概観 (図3)

遺構は調査区ほぼ中央の谷底部で検出された土壇1基のみである。遺物は、中世以降のものはごく少量がすべてI層から、平安時代はI・II層から出土している。III層からは縄文時代中期後半及び縄文時代晩期から弥生文化波及期、VI層下部から縄文時代早期の遺物が出土している。このうち量の多いのは平安時代の焼物である。

(3) 縄文時代の遺構と遺物

ア 土壇 (図4、P L36)

調査区中央の谷底部に位置し、VI層上面で検出されたが、埋土はIV層の黒ボクに近い黒褐色土で、IV層上面あるいはIV層中より掘り込まれたものであろう。東西132cm、南北94cmの楕円形プランで、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東側及び南側上部はややラッパ状に開く。底部はほぼ平坦で、中央部にピットがある。こうした形態は従来陥穴とされてきたものに類似する。埋土中に深さ50cmほどにわたり多量の炭化物があった。遺物は流れ込みと思われる縄文時代中期後半から後期初頭にかけての土器片3点と打製石斧1点が出土したのみで、詳しい時期は不明。

イ 遺構外出土遺物 (図5~7、P L36)

遺構外出土の遺物には土器と石器がある。

土器は30点と少なく、しかも小破片ばかりで、図示できるものはわずかしかない。1~3は山形文を縦位に密接施文しており、早期押型文土器の中でも細久保式に比定される。IV層より出土した。4~6は太

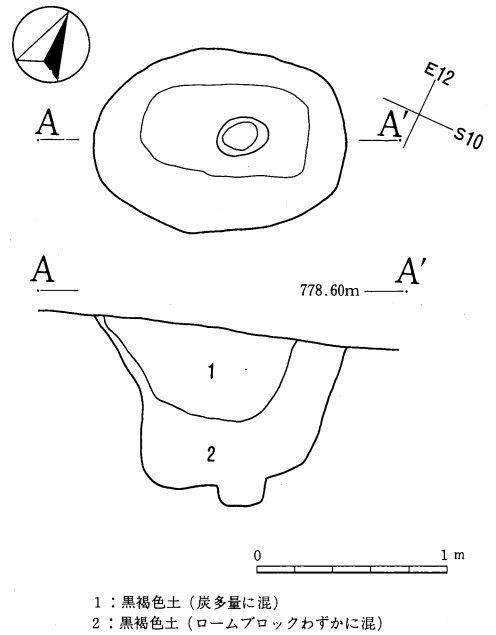


図4 1号土壇実測図

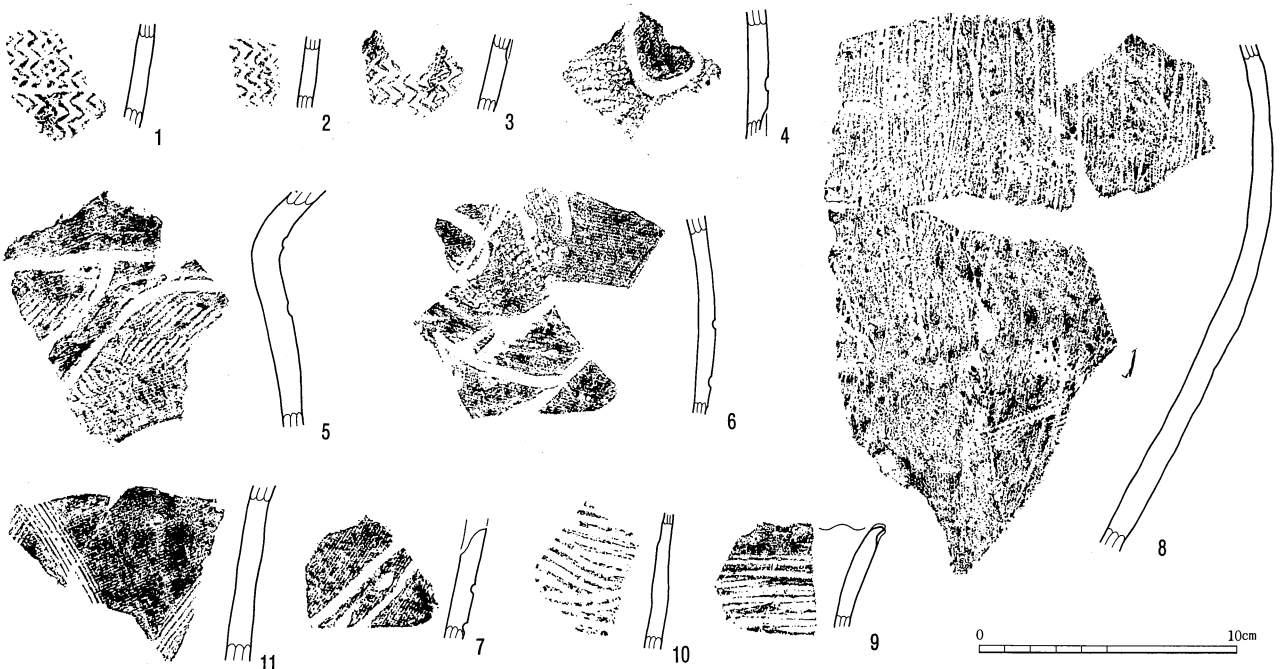


図5 遺構外出土縄文・弥生時代土器拓影

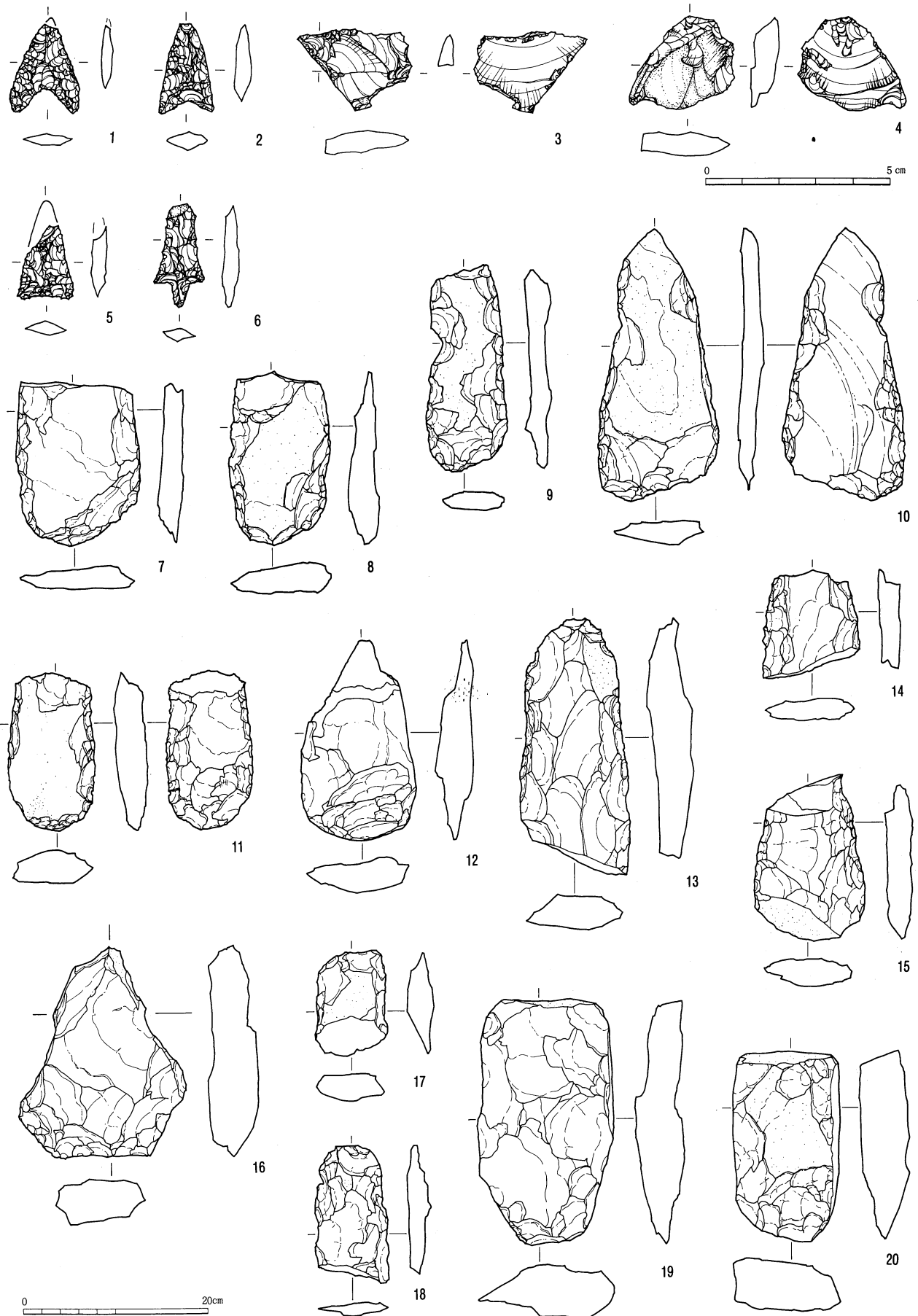


図6 遺構外出土縄文時代石器実測図1

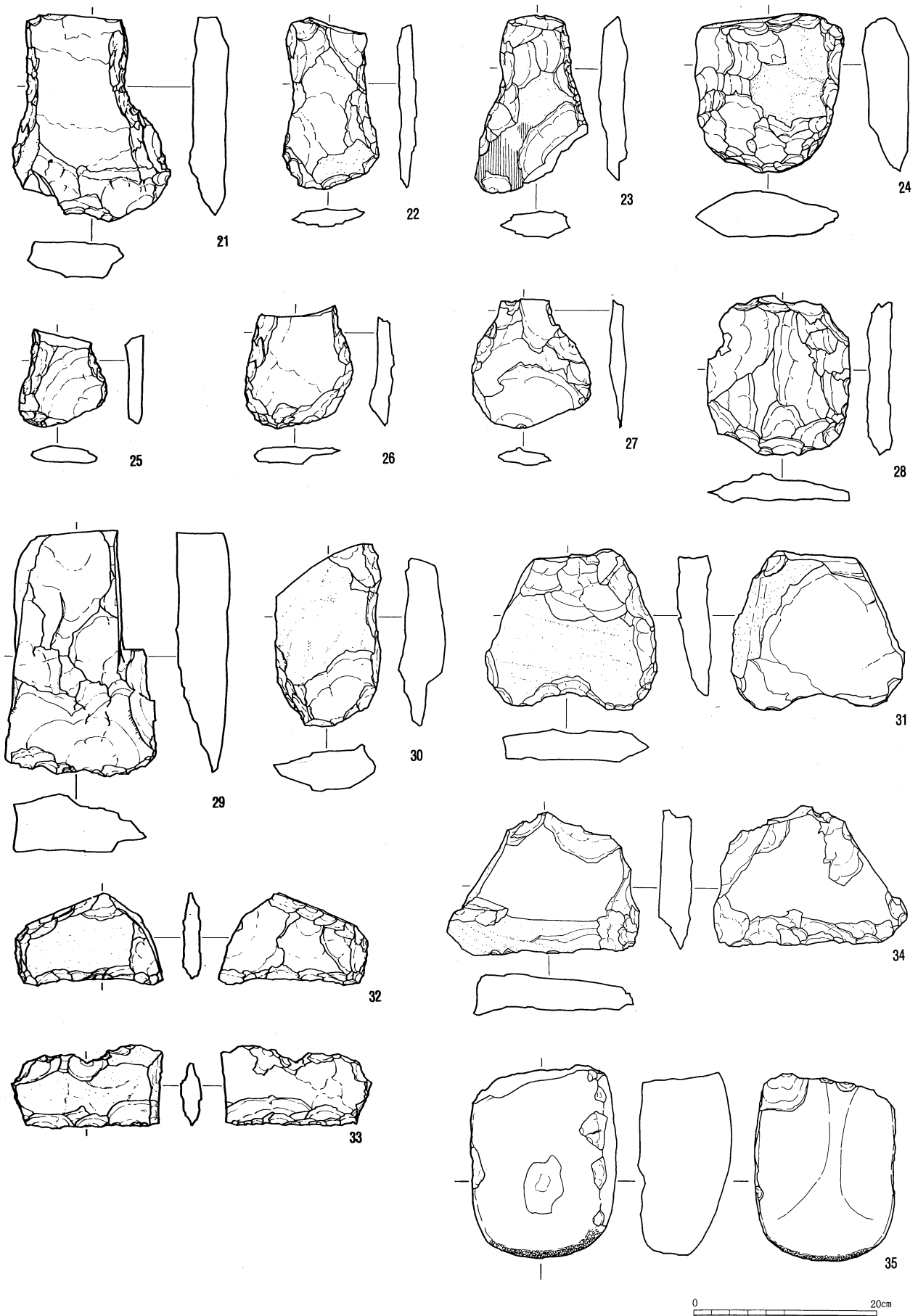


図7 遺構外出土縄文時代石器実測図2

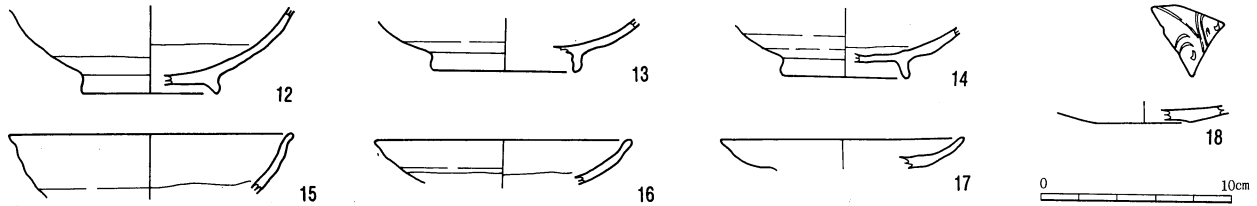


図8 遺構外出土平安時代遺物実測図

い沈線でモチーフを描き、間を縄文で埋めるという中期後半加曾利E式でも新しい段階の特徴がみられる。III層からの出土。7は後期初頭称名寺式、8～10は晩期末から弥生文化波及期にかけての土器である。8は細密条痕文をもつ甕あるいは深鉢の体部、9は半截竹管を用いた条痕をもち口縁部の外側に圧痕を施した深鉢、10は条痕文系土器の壺であろう。8はIII層、9・10はI層出土。これらのほかに図示しなかったが中期中葉新道式や後期堀之内式の土器も出土している。

土器に比較すれば石器の出土量は多い。器種別点数をみると、石鏃4、小剥離痕のある剥片2、打製石斧26、凹石1であり、特に打製石斧が多い。

ところで、今回調査した範囲の中では自然転石はほとんど見当たらず、すべて石器または石器の破片と思われたので、一つ残らず取り上げた。しかし、その後の検討で、石器とみていたものの中に角がとれて丸くなったものが相当数有り(12・19・20・24・30・31他)、剥離面を含め全体に摩耗がみられ、形態の整わないものが多いという指摘もあって、石器から除外した。さて、あらためて打製石斧をみると、完形は26点中3点しかなく、全体の15%にも満たない。破損状況は胴部での折れが最も多く、23例中13例を数える。これらは、製作中の破損というより使用による破損とみてよい。

#### (4) 平安時代の遺物 (図8)

土師器、灰釉陶器、緑釉陶器がある。そのほとんどが食膳具で、わずかに煮炊具としてハケ調整の土師器甕、貯蔵具としては灰釉陶器の長頸瓶および四足壺がある。いずれも細片である。

灰釉陶器の碗(12～15)のうち12～14は底部で、12は糸切り痕を残し、13・14はヘラケズリを体部から底部にかけて施しているが、14は中央に糸切り痕を残している。このように底部の調整方法には二種ある。高台は三日月高台に近い形態。15は口縁部で、端部がやや外へ引き出される。16は灰釉陶器の皿Bで、端部がやや内湾気味である。いずれも灰釉は漬け掛けである。17は緑釉陶器の皿Bで高台部は欠損している。胎土は須恵器質で、釉は銀化しており、調整は不明である。四足壺(PL36-5)は凸帯を貼り付けた胴部付近と底部の細片である。横方向の凸帯は断面方形で中央部に凹みをもち、肩部から足に続く縦方向の凸帯は紐状である。底部付近にヘラケズリが施され、体部はロクロナデ調整である。外面は底部に至るまで緑がかかった乳白色の灰釉がかかる。これらの灰釉陶器は東濃窯の製品であり、大原2号窯式から虎溪山1号窯式に含まれる。

#### (5) 中世以降の遺物 (図8)

焼物は白磁1点を除けばすべて17世紀以降まで下る。白磁(18)はヘラ描きの文様をもち、透明な黄緑色の釉調の小皿で、12世紀後半以降に輸入されたものである。瀬戸・美濃系陶器は、17世紀前半の志野鉄絵皿、輪禿皿が若干あるが主体は幕末から明治初期の所産であり、鍍釉播鉢、鉄釉碗、鉄釉灯明皿、御深井碗、灰釉鉢がある。一部、肥前(有田)産の染付碗、皿がみられる。

焼物以外では、皿部を欠いた角釘1本、近世の煙管1本、銅銭(寛永通宝)4枚がI層から出土した。

## 5 小 結

当遺跡の縄文・弥生時代に関する資料は、土壙1基と土器および石器がある。このうち、土器は数10点と少なくしかも摩耗した細片ばかりで、流れ込みの様相を呈している。一方、石器は石鏃等の利器が6点しかないのに対して打製石斧は20点を越えている。このように、集落から離れて打製石斧が多量に出土したことは、この地が打製石斧の製作地あるいは消費地であったことを意味している。そして、剥片類の量がさして多くないことを考え合わせれば、後者の可能性が強い。

古代に関しては、遺物を見る限り平安時代の大原2号窯式から虎溪山1号窯(東濃編年による)の灰釉陶器を伴う時期に集中する。これはこの一帯の山間地に共通した特色である。検出されていないが、遺構の存在を否定しきれない遺物量である。遺跡は狭小な谷部に位置し、浅谷で日当たりもよい。栗木沢遺跡境の尾根の低い鞍部を越えて比較的容易に水を得られ、集落があっても不思議はない。平安時代の生活面や遺構構築面とみられるII・III層のほとんどを耕作により失っており、遺構も失われたとみることもできる。

中世の遺物は、12世紀後半以降に輸入されたと思われる白磁小皿1点である。供伴する遺物がなく、その意味するところは不明である。

近世では、17世紀代の陶器を若干出土するが、中心は18世紀後半以降である。開発が再びこの地に及んだことを語っているのだろうか。

## 第9節 <sup>とよぐち</sup> 樋口遺跡 (ETG)

### 1 遺跡の概観

遺跡は塩尻市大字長畝519番地付近に所在する。

この辺り一帯には、発達した小支谷に挟まれて西に向かってのびる尾根が形成されている。遺跡の立地する尾根もそのひとつで、南側をヨケの谷に、北側を田川の支流鑄物師川に注ぐ福沢に削られている。微視的に見れば、尾根の北斜面には、流水を伴わない小谷が福沢に向けて刻まれており、遺跡はその谷頭部及び小谷とヨケ谷とに挟まれた尾根先端部に広がっている。尾根の南谷にはヨケ遺跡、北の福沢の谷には福沢・堂の前遺跡、谷を隔てた北側の尾根には高山城跡がある。標高は尾根部で785m 前後、谷部で780m 前後である。

谷部は山林地と畑地、尾根部は畑地として利用されていた。

### 2 調査の概要

本遺跡は周知の遺跡ではなかったが、中央道長野線に係わる事前の分布調査で、遺物の採集をみたため、県教育委員会により新たに追加されたものである。

尾根先端の南西の一部を除いて、ほぼ遺跡全域が路線にかかり、約2900m<sup>2</sup>が調査対象とされた。尾根部では、尾根筋に沿って1本、平坦部となる尾根先端部には地形に合わせてほぼ南北に1本と、それに直交する方向に2本のトレンチを入れた。谷頭部では、調査区を横断する等高線に沿ったトレンチ2本、微地形に合わせての小トレンチを7本設定し、層序と包含層の把握に努めた。なお、谷部では、谷口付近の緩傾斜面付近にも遺物が採集されたという地元の方の話があり、小トレンチを入れた。その結果尾根部では畑

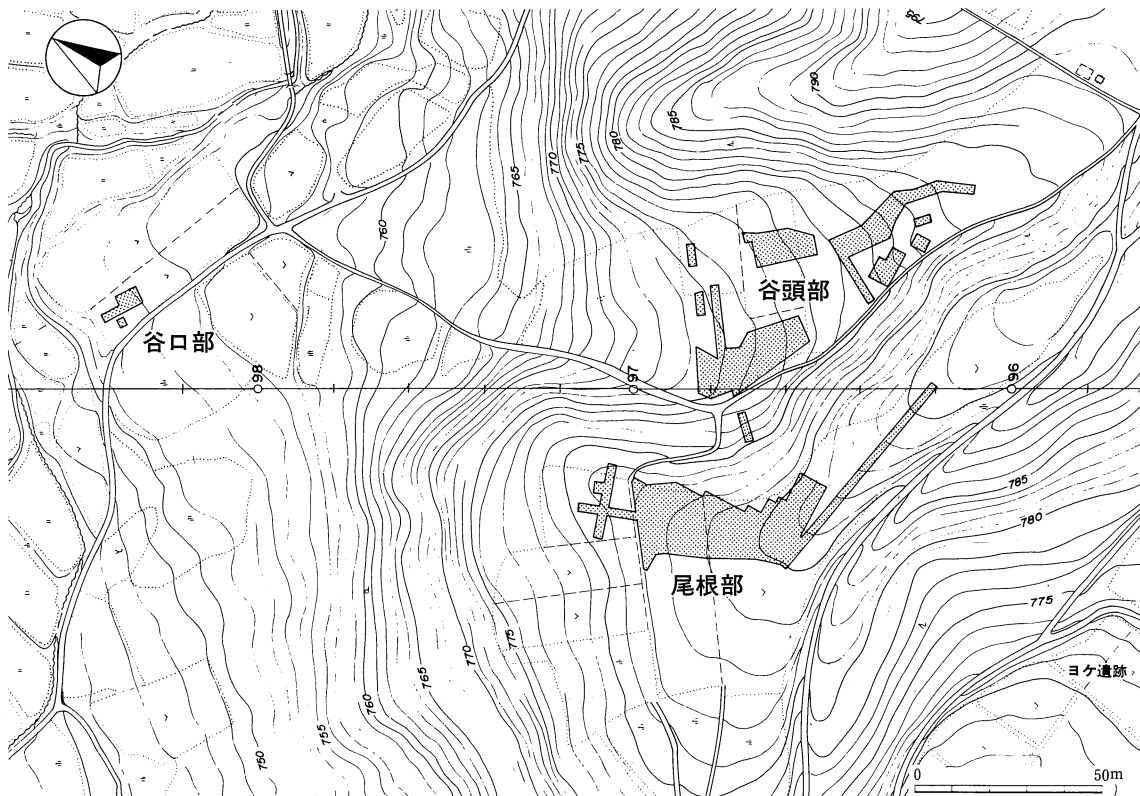


図1 地形及び発掘範囲図 (1:2000)

造成のため、そのほとんどが基盤まで削平され、遺物もわずかな細片を認めるにとどまった。しかし、先端部平坦面の調査区域境のわずかな範囲に包含層の残存が認められたため、その付近一帯のみ面的調査を行った。谷部での堆積状況は安定していたが、南側尾根寄りに古い流路跡や新しい暗渠排水施設があるなど湿地状態であり、また、調査区北側一帯の中央部から東側にかけては、耕土が基盤及び基盤近くまで及んでいることが確認された。しかし、遺物は疎密の差はあれ、ほぼ全域で採集され、焼土なども検出されたことから、尾根寄りの比較的乾燥し包含層の残存している地点を中心に面的調査を行った。なお、谷口部ではトレンチ内に土壌を検出し、遺物も採集されたため、その広がりの確認を目的に拡張した。

調査は、昭和59年6月15日から8月31日まで行い、調査研究員は3名が当たった。発掘範囲は部分的で狭いことなどから、すべて手作業で行った。

測量は遺構については遣り方測量を用い、発掘範囲等は光波測距儀を用いた。測量基準点は、日本道路公団の工事用杭 STA93+60 を使用し、その座標値から座標北を算出して座標に沿った基準線を設定した。測量基準点の座標値は、第Ⅷ測量系の X=11920.4511、Y=-45866.5355 である。レベル原点は STA96+20 を使用した。その標高値は790.896m である。

整理作業は昭和60年1月から3月まで図面整理、実測等が行われ、昭和62年2月より4月まで報告書執筆のための諸作業が断続的に行われた。

### 3 調査の経過

#### 昭和59年度

- 6月15日 尾根部の尾根筋にトレンチ4本設定。
- 6月18日 トレンチ掘り開始。尾根先端部の一部にのみ腐植土層を認め、面的調査する。
- 6月28日 尾根先端に住居址と土壌を認め調査開始。
- 7月9日 土壌からは近年の遺物が認められ放棄。
- 7月10日 調査は尾根下谷部に移る。座標基準杭、7本のトレンチを設定し、試掘開始。
- 7月16日 トレンチ調査終了。いずれもI層及びII層上位から縄文及び平安時代の遺物が出土。II層土の存在する地点を中心に面的調査に移行。

7月28日 谷口部平坦部先端に小トレンチを入れる。土壌一基を検出。南側に拡張、遺物は出土するが、遺構は認められない。

8月31日 谷頭部、谷口部ともに調査終了。

1月5日 図面整理、遺物復元等3月まで断続的に行う。

#### 昭和62年度

2月より遺物実測、報告書執筆の諸作業を断続的に行う。

### 4 調査の結果

#### (1) 層序と地形形成 (図1・2)

尾根部及び谷部の層序は次のようである。

#### 尾根部

- I層：ローム混じりの現耕作土。
- II層：黒褐色の腐植土。尾根部の一部にしか残存しない。
- III層：基盤のローム層。

#### 谷頭部

- I層：黒褐色の耕作土。
- II層：黒ボク土。下位ほど黒味が強く、礫の混入は少ない。尾根際ほど厚く、中央部は存在しない。調査区西南部のII層中に砂層が凹レンズ状に入り込み、黒ボク土層形成時に小河川が存在したらしい。
- III層：黒褐色の漸移層。2cm～3cmの礫を含む。

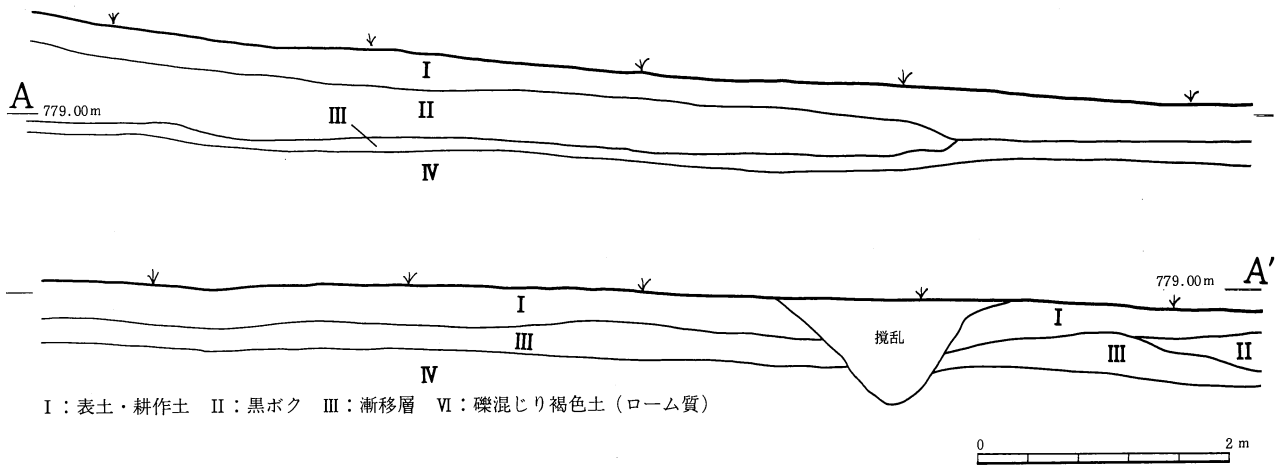


図2 土層図

谷口部

I層：暗褐色の現耕作土。

II層：まばらに礫を含む黒褐色土層。遺物包含層である。

III層：ローム質の基盤。表面は黄赤色、下位は黄褐色で大きな礫をまばらに含む。

層序の基本は、片丘・赤木山礫層上に、小坂田・波田ロームが堆積したものである。尾根部ではそのローム層の上位が土壌化して表土となっているのに対し、谷頭部では尾根からの碎削崩落物が土壌の腐植化を伴いながらゆっくり堆積し、谷底の湿潤さや、植生の影響のもとに黒ボク土層を形成したと思われる。背後に急斜面をもつ谷口部では水による押し出しや流れ込み、崩落物の堆積が谷頭部より急速に進行したらしく、基盤の礫の淘汰は弱く、II層の腐植化も弱い。

(2) 遺構と遺物の概観 (図3)

検出された遺構は、尾根部で平安時代の住居址1軒、谷頭部で平安時代の3箇所の火床と縄文時代と推

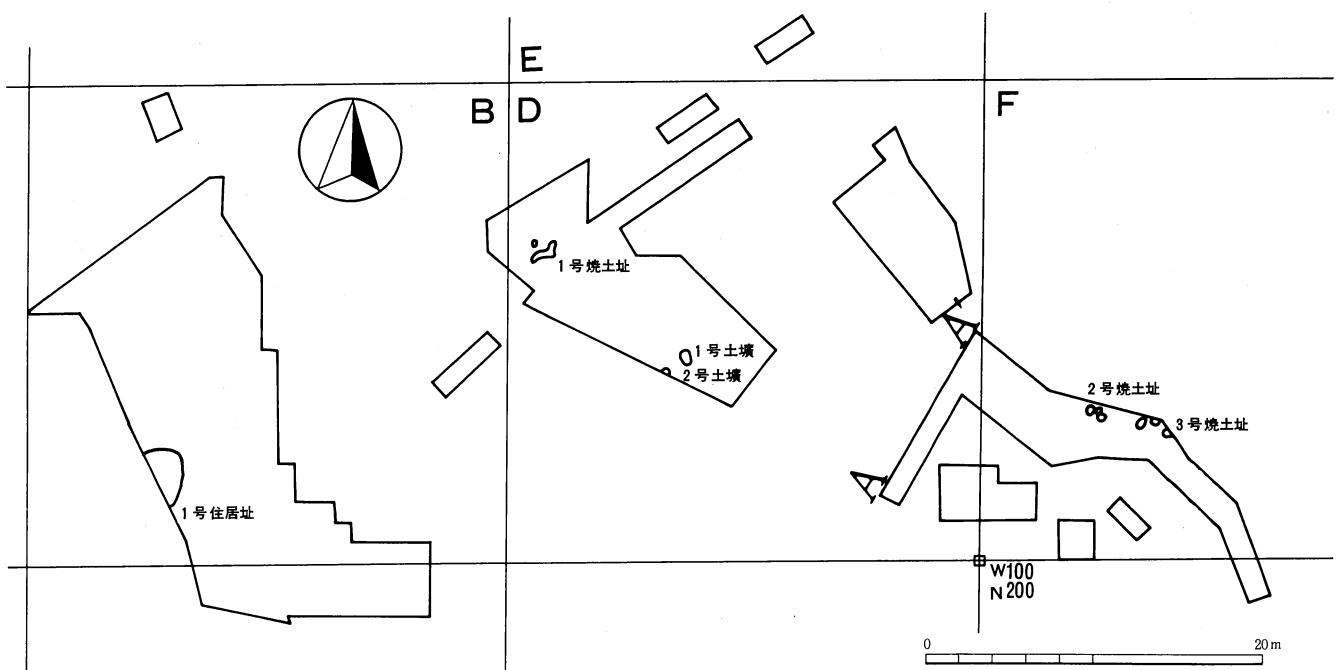


図3 遺構分布図 (1:800)



定される土壌2基、谷口部では縄文時代の土壌1基である。遺物は尾根部、谷部ともにほとんどが平安時代で、縄文時代、弥生時代及び中世以降がわずかに出土する。

### (3) 縄文時代の遺構と遺物

#### ア 土 壙 (図4)

1・2号は谷頭の調査区北西隅に位置し、III層上面で検出された。1号は径60cm、深さ30cm前後の円形で、基盤に掘り込まれていた。壁はほぼ垂直に落ち込み、底部は平坦である。埋土はII層に由来する。2号は1号の南西2m余りに位置し、その半分は調査区外にかかっていた。壁は底部に向かい椀状に落ち込む。埋土は1号と同じである。これらの土壌はいずれも遺物がなく、時期・性格ともに特定することはできず、2基の関係も不明である。しかし、黒ボク層下位から基盤に掘り込まれていること、谷頭部ではこの周辺に縄文土器が最も多いことから、縄文時代の遺構と考えたい。

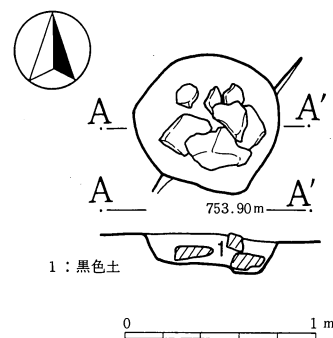


図4 1号土壙実測図

3号は谷口部のわずかに北に向って傾斜する平坦部の先端にあり、III層上面で検出された。埋土はII層に由来する黒味の強い黒褐色土である。プランは径75cm程の円形で掘り込みは垂直であるが、底部付近で緩やかに傾斜をもちながら底面へ続く。底部中央西南よりもう1段深く掘り込みがある。内部には径20cm～50cm前後の礫が8個入る。石には加工や熱を受けた痕跡は認められない。遺物はなく時期の特定は困難である。しかし、土壌の2m～3mほど南側の同一面上に特殊磨石が、3個はIII層上面に、2個はIII層に突き刺さるようにして、比較的隣接して出土している。これらは同一の生活面であった可能性もあり、縄文時代早期がこれに当たるだろう。

#### イ 遺構外出土遺物 (図5・6)

I層及びII層上部から平安時代遺物に混じって縄文時代遺物が出土した。土器は3地点合わせても数10点と少なく小破片ばかりである。尾根部、谷頭部出土の土器は中期初頭から後半に比定される(1～7)が、谷口部のものは摩滅が著しく時期がはっきりしない。

石器は石鏃21(1～12)、スクレイパー2、ピエス・エスキュー10(13・14)、小剥離痕のある剥片7(15・16)、黒曜石等の剥片、石核、原石135、打製石斧29(17～22・27～32)、磨石7(24～26・34)、その他不定形の打製石器2(23・33)が出土している。石鏃は無茎14、有茎2、不明2、未製品3と無茎鏃が主体を占める。未製品としたもののうち2点(11・12)は先端から両側縁にかけて調整剥離を施すが基部は未調整で、完成品に比べると厚くて重い。スクレイパーは2点とも両面調整された刃部をもち、小形で不整形。ピエス・エスキューは、長さ3cmをこえる大形品もあるが、2cm以下の小形品が多い。中には上端が平らな面をなすもの、上端と下端が90°ねじれるものも見られる(13)。小剥離痕のある剥片は、裏面からの圧力により表面縁辺に1cm前後の幅で小剥離を生ずる例が多く、逆に裏面に剥離を生ずる例は1点だけである。剥片、石核、原石を含めてこれらの石器に使われている石材は圧倒的に黒曜石が多く、他にはチャート製の石鏃3点(1・2・10)と剥片数点しかない。

打製石斧には短冊形と撥形がある。完形品といえるのは1点(29)と少なく、他は全て破損品である。破損品の中には胴部で長軸方向と直角に折れたものがある(19・21・22など)、その折れ口を観察しても打点があきらかにない。加撃による割れというより、表面または裏面に対して垂直方向から加わった圧力により折れたと考えられる。すなわち、柄に対して刃部が直交する向きに着柄されたことが推測されよう。石材は板状節理のみられる砂岩が多くて頁岩は少ない。磨石は7点全てが、いわゆる特殊磨石である。砂岩または安山岩の細長い亜円礫を素材とし、長軸に沿った稜に磨面をつくる。磨面には非常に滑らかな面

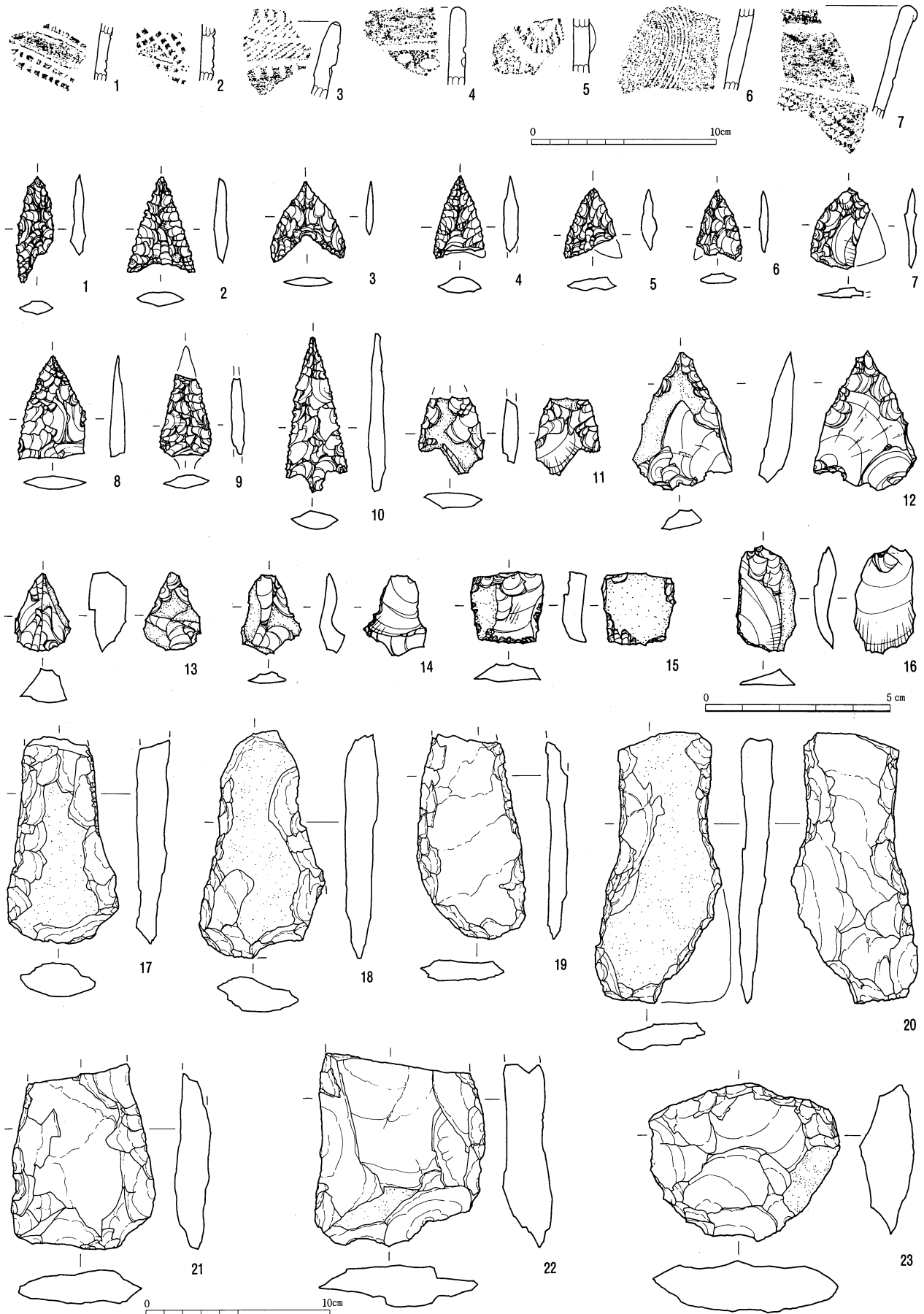


図5 遺構外出土縄文時代遺物実測図・拓影 (1~26=尾根部・谷頭部)

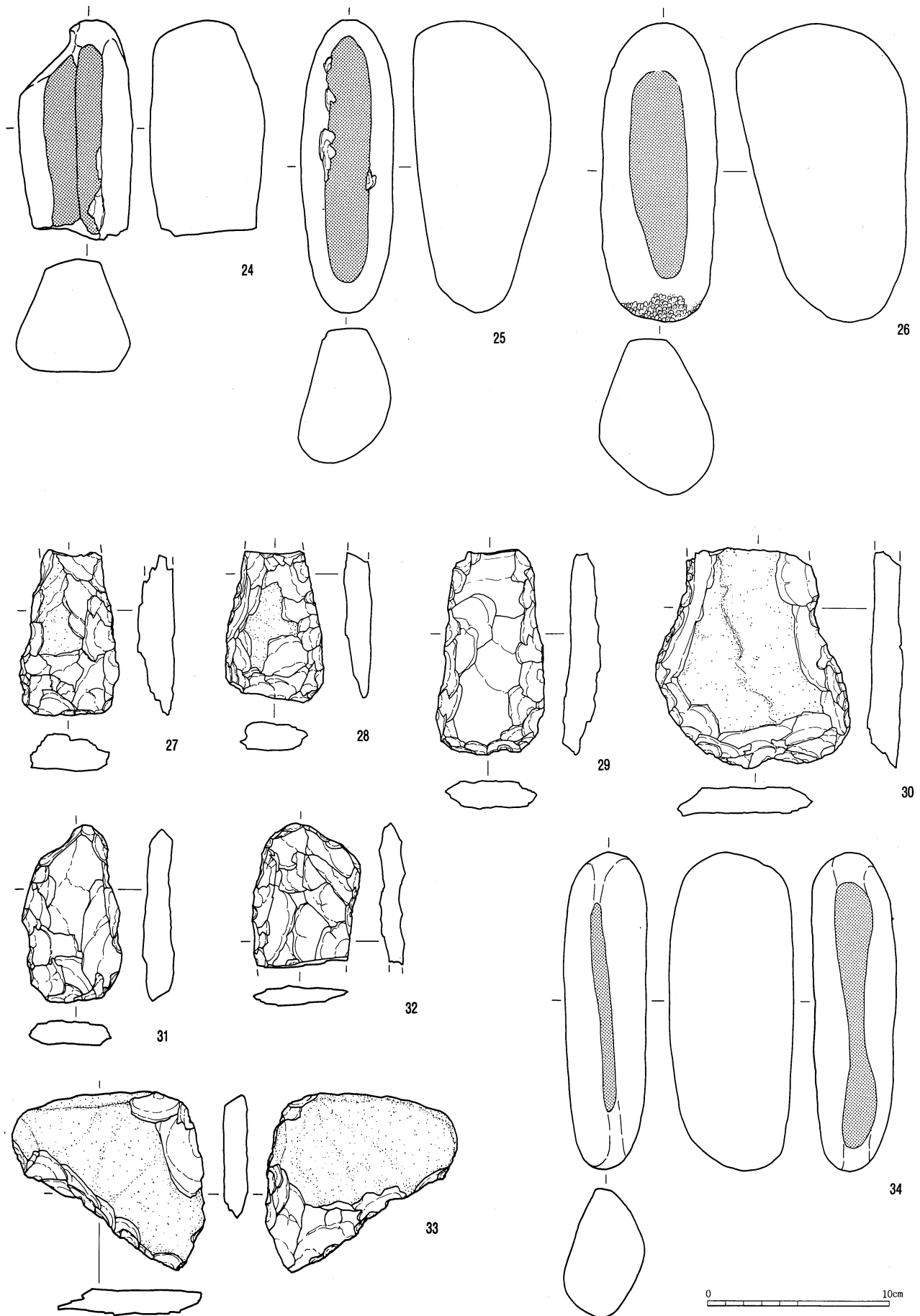


図6 遺構外出土縄文時代遺物実測図 (27~34=谷口部)

と敲打面に似たザラザラした面とがあり、また、磨面と自然面の接線上に磨面側からの剝離痕があることから、この石器がすりつぶすだけでなく、たたきつぶすという作業にも用いられたことが考えられる。破損品の多くが長軸に対して直角に割れていることも、たたきつぶすという機能を想像させる。ただし、すりつぶすという作業には磨面が滑らかすぎるのは効率が悪いと思われ、目立てを目的に敲打した可能性もある。その他の石器のうち23は礫器の部類に入るかもしれない。両面に調整を施し、頂部は刃つぶしされる。刃部は鋭く、摩耗などは認められない。33は偏平な砂岩の2縁辺に調整を加え、薄く尖った刃部を作り出している。

#### (4) 弥生時代の遺物

谷奥部から出土した有頸壺の口縁部小破片1点のみである。口縁部はラップ状に小さく外反し、口唇外側に稜をつくる。推定口径9cm。頸部はほぼ垂直に立ち、縄文が施される。胎土は石英粒を多く含み粗い。

#### (5) 平安時代の遺構と遺物

##### ア 住居址

##### ① 1号住居址 (図7、PL38)

**検出状況：**尾根先端部の平坦面で、調査区西側境のローム上面に検出された。西側3分の1が調査区にかかるほか耕作による攪乱が及んで全容は不明である。**規模・形状：**およそ一辺5m前後の隅丸方形が想定される。主軸の方向は、N110°E。**埋土：**2層で粒子の細かいローム混じりの褐色土層の上に、ボクボクした腐植土がレンズ状に堆積したと考えられるが、上面が削られて、黒色土は中央部付近に薄く残存するだけである。自然堆積と思われる。**床面・壁：**床は敲き締められたように堅く、北西に向かってわずかに傾斜を持つ。壁の立ち上がりは垂直に近く、現存壁最高値40cm余りである。柱穴を断定できるものはない。**カマド：**東壁中央部やや南寄りに設置され、両脇にピットを伴う。破壊により全容はつかみにくいが、主体は石組で、その間をロームで埋めて形を整えている。燃烧部の掘り込みは不明だが、焼土が径80cm～90cmの円形に広がっており、長さ1m、幅0.8mほどの規模と推定される。煙道は明確ではない。**その他の施設：**カマド両脇も含めてピットが全部で7基検出された。カマド南側のP<sub>1</sub>は他のピットが13cm～15cmの深さを持つのに比べ10cmと浅く、底は平坦である。焼土、炭化物、鉄滓、土師器を伴う。P<sub>2</sub>は底部中央に小さな窪みがあり、炭化物、焼土塊、30個ほどの土師器片を伴い、P<sub>3</sub>は土師器片、炭化物が、P<sub>5</sub>はピンク色の焼土が全面に詰っていた。その外、南西壁中央近くの床面上及びP<sub>4</sub>すぐ西側床面上に、炭化物を含んだ焼土ブロックが検出されているが、掘り込みをもたない。P<sub>1</sub>には数個の鉄滓や粘土塊の出土もありこれら焼土等を伴ったピットは鍛冶との関連を考慮する必要があるだろう。**遺物の出土状況：**遺物は、ほぼ埋土全体にわたり、800点あまりの細片が散乱していたが、そのうち1割余りが1層から、その他は2層中のカマド及びカマド両脇のピットを中心とした範囲、及びP<sub>2</sub>内に集中が認められた。床面直上は全体の1割に満たない。**焼物：**食膳具には土師器杯、椀、黒色土器Aの杯、椀、灰釉陶器椀、皿が、煮炊具は土師器甕が、貯蔵具には灰釉陶器長頸瓶がある。土師器杯(8～26)はすべて土師器杯AⅡで、そのうち22のみ糸切り後ナデ消される。26は法量を異にするがAⅡのバラエティーの1つとして捉えておきたい。これらはいずれも胎土が緻密で、焼きは堅く締まる。8・11・22～24は床面上、16はP<sub>2</sub>中、21はP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>から分かれて出土した。土師器椀(27～30)のうち27・29は腰部が直線的に立ち上がるのに対し、28は腰部が張り、丸味を持つ。28はカマド内出土である。いずれも胎土はよく、30以外は調整も丁寧である。土師器小型甕(31)は、この時期としては珍しい非ロクロ調整で、頸部から底部にかけ板状工具により縦方向にナデられ、内面底部付近にヘラケズリ痕を残す。口縁はヨコナデ、底部縁辺は手持ちのヘラケズリが施されている。底部はカマド近

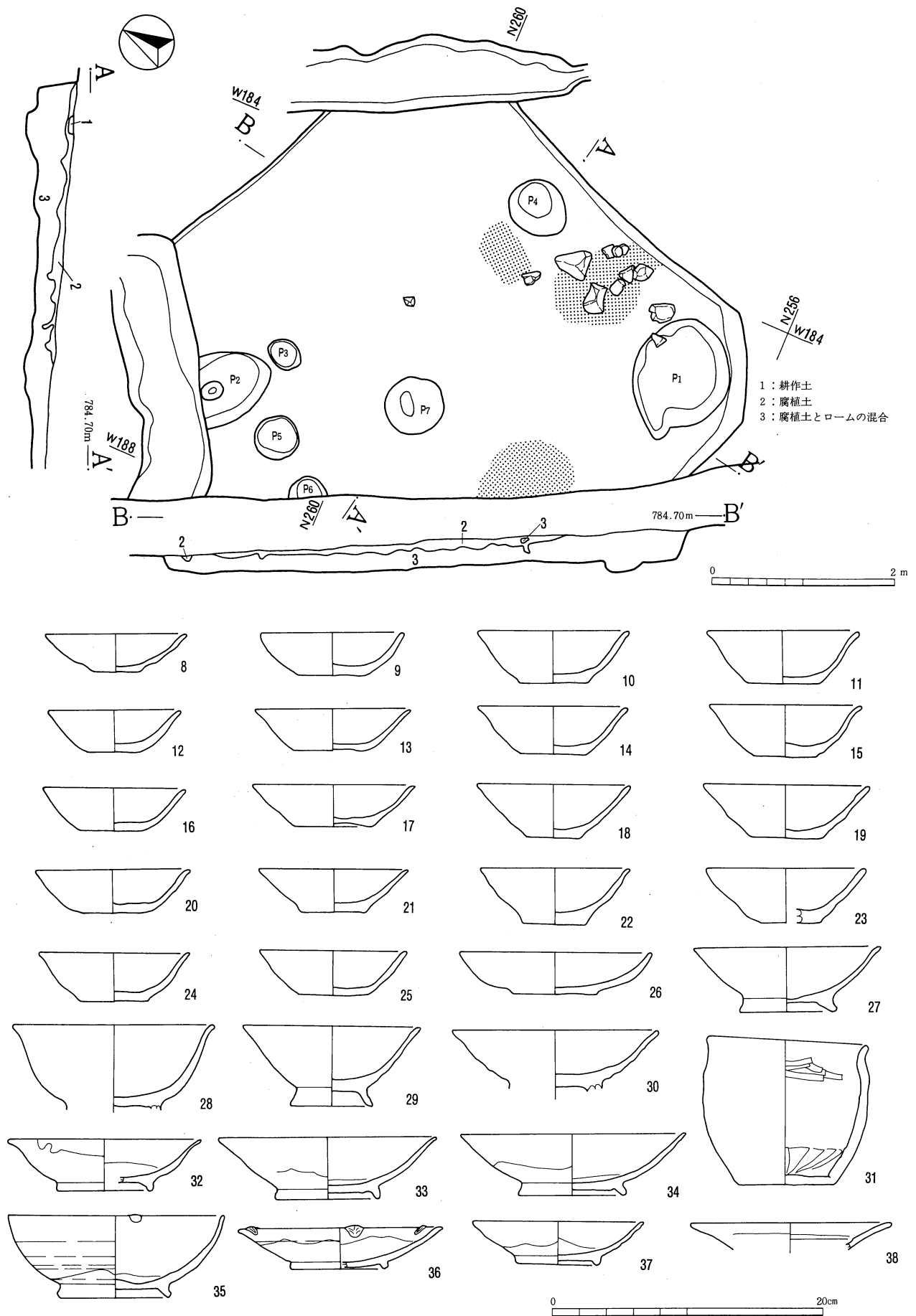


図7 1号住居址実測図及び出土遺物実測図

くの床面上、その他は埋土中から出土した。32~38は灰釉陶器である。椀(32~35)うち32~34の体部は背が低く、緩やかに立ち上がり、高台は三日月状であるが、ともに糸切り痕を残す。輪花椀(35)は底部から胴部までケズリを加え、口縁が垂直に立ち上がる。破片のため輪花数は不明。床面上出土である。皿は皿B(36~37)と皿C(38)は口縁近くまでヘラケズリを施した4輪花皿で、P<sub>2</sub>内出土である。37は糸切り痕を残す。これらの釉は漬け掛けで、ガラス質状に堅く焼成されたものが多い。以上の焼物を見ると、土師器では杯Aの小型化が進んでいるが、大・小の法量分化に至らず、黒色土器はほとんど姿を消している。灰釉陶器椀は体部が緩やかに立ち上がり、高台は三日月形の系譜をひくが、糸切り痕を残すものが多い。皿は皿Bが主流である。灰釉陶器はすべて東濃産であるが大原2号窯式の新しい時期、あるいは虎溪山1号窯式の古い方に属すると思われる。焼物以外には、刀子、紡錘車の鉄製品及び鉄滓が数個出土した。紡錘車は床面上に、刀子は埋土中に、鉄滓はP<sub>1</sub>の内外にわたって出土した。時期：灰釉陶器東濃編年の大原2号窯式~虎溪山1号窯式期。

#### イ 火床

##### ① 1号火床

谷頭部調査区西端近くに位置し北向き斜面のII層上面に検出された。付近から遺物が多量に出土して住居址を予想させたが、精査の結果、壁、床面等の施設は存在せず、住居址と認定されなかった。幅160cm、長さ180cm程の焼化面は「L」字状を呈し、わずかに炭化物を含み、厚さ3cm~10cm。周辺には拳大から人頭大の礫が散乱していた。土師器片、灰釉陶器片のほかに、焼化面の北端より鉄滓が1点出土しており、鍛冶に関する遺構の可能性もある。

##### ② 2号火床

調査区東北隅、北側尾根近くのII層上面で検出された。径40cm~50cm、厚さ数cmの3つの焼化面が、連なるように分布し、その南側に火熱を受けた径10cm~30cm大の礫が数個ある。焼化面の西側は土師器片の分布密度も高く、1m×2m程の不整形のやや堅い面が検出されたが、火床との係わりは明確でない。その他に構築物は認められず、性格は不明である。

##### ③ 3号火床

調査区東端のII層上面、2号火床の4mほど東側に検出された。厚さ数cmの3つの焼化面からなり、そのうち2つは隣接し、1つは2m程離れている。1つは径50cm前後のほぼ円形を呈するが、他は調査範囲外にかかっており不明である。近辺には土師器等の平安時代の遺物が多く、しかも完形に近い大形破片が出土した。性格は不明である。

#### ウ 遺構外出土遺物 (図9)

遺物は破片のみで、特に土師器の損傷は著しい。ほとんど谷頭部のI層及びII層上部出土であり、II層中は少なく、また、縄文時代の遺物と混在している。これらは流れ込みの様相を示すが、それにもかかわらず、平安時代の遺物に限ってみれば、数箇所集中区が見られる(図8)。こうした出土状況は、外部からの流れ込みだけでは説明できず、何らかの生活が営まれたが、その後の耕作等によって失われたと見るべきだろう。

遺物は、皿部を欠損した鉄釘1点を除けば、すべて焼物であり、土師器では杯、椀、盤、甕、羽釜、黒色土器では内面及び内・外面黒色の椀、灰釉陶器では椀、皿を中心に長頸瓶、小瓶、須恵器では甕がある。しかし、土師器の杯、椀、灰釉陶器の椀、皿以外は数は少ない。

土師器杯A II(39~41)のうち39には小礫が混入するが、他は緻密な胎土である。いずれも焼きがよい。39は見込み部にコテかヘラの痕跡が認められる。灰釉陶器椀(42~53)は口径12cm~13cmの小型(42・43)、15cm~16cmの中型(44~47)、18cm以上の大型(48~53)があるが、大型は49を除けば深椀(50)と輪花椀(51~53)であ

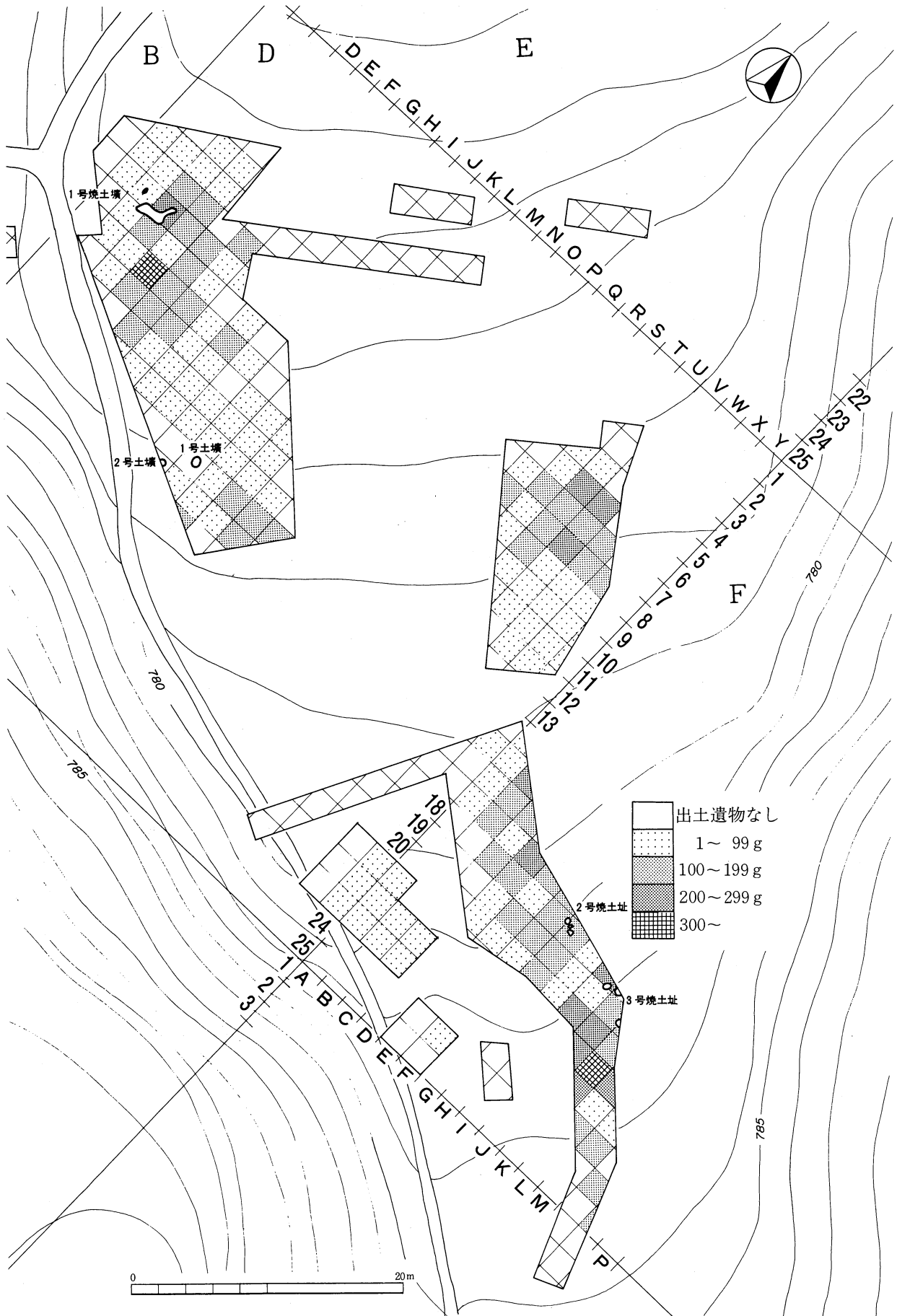


図8 平安時代遺物グリッド別出土状況図 (1:400)

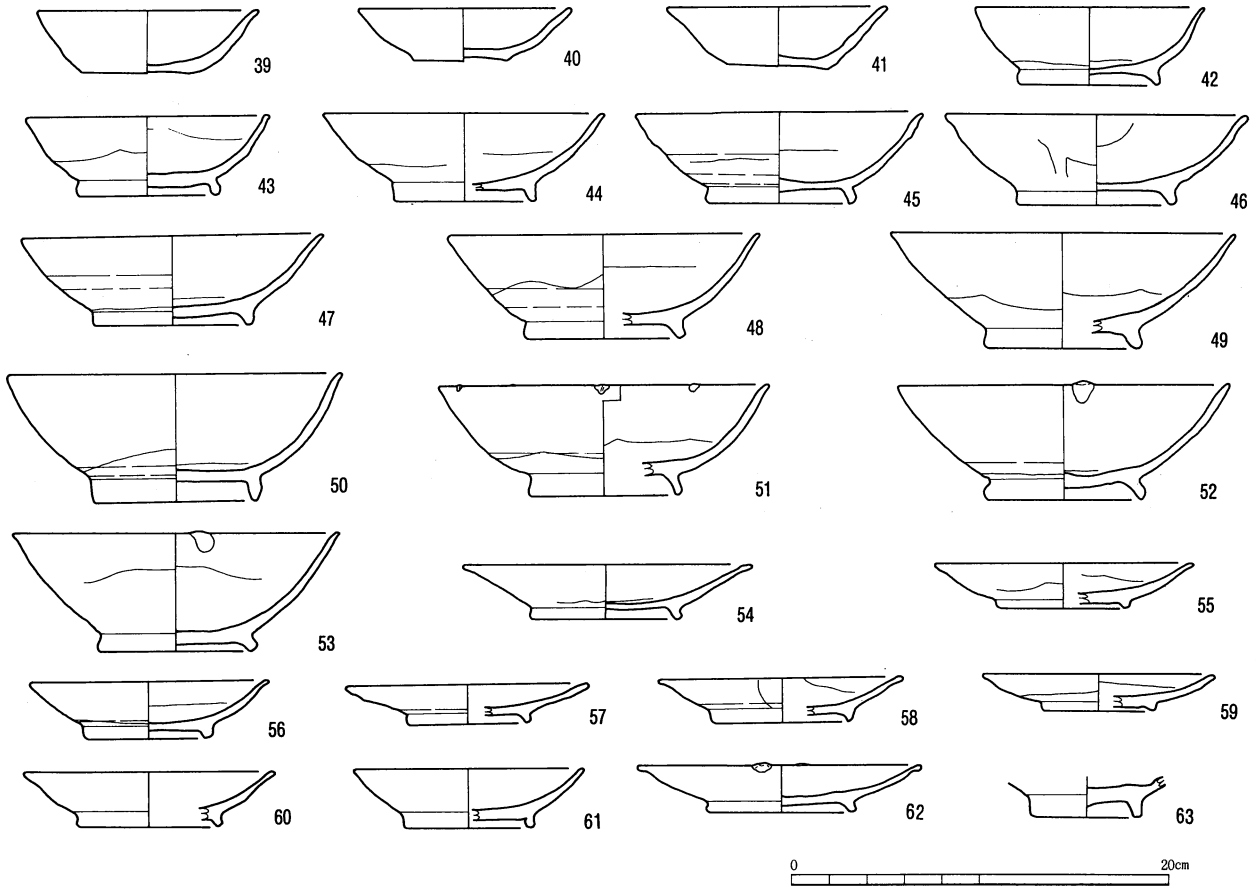


図9 遺構外出土平安時代遺物実測図

る。50以外は三日月系の高台をもち、その多くは体部が緩やかに立ち上がる。いずれも口縁部や高台の整形、胴部や見込み部の調整は丁寧であるが、底部から体部下半にへラケズリを入れたもの(45・47・48・50~52)とナデだけのものがある。輪花椀は破片のため輪花数不明。51・52の高台は外側に長く踏ん張り、端部に面取りが認められるが、53は端部を短く丸くおさめている。灰釉陶器皿B(54~61)のうち、54は口縁がわずかに玉縁状をなす大形の皿Bで、底部付近にへラケズリが入る。55・59は糸切り痕を残し、高台は低く断面三角形を呈する。56~58は底部から高台接合付近にへラケズリを持ち、高台成形も丁寧である。60・61は底部調整は不明であるが、胴部はナデのみである。61は胴部にヌタを多く残し、見込み部分に不定方向の指ナデ痕を持つ。輪花皿(62)は、底部にへラケズリが入る。輪花数は破片のため不明である。これらの灰釉陶器は東濃産で、大原2号窯式の新しい段階か虎溪山1号窯式でも古い段階のものが多いようであるが、55・59等は、やや時期が下るかもしれない。

#### (6) 中世以降の遺物

総数で120点ほど出土したが、そのほとんどは谷頭部I層からの出土で、細片のみである。中世は内耳鍋片20点余りのほか、見込み部に掻き取りによる輪禿を持ち、13~14世紀に比定される中国産白磁片1点(63)と大窯期の鉄釉播鉢がある。連房窯期では、その半数近くは近・現代製であり、近世のものは江戸時代初期~前期の志野皿、鉄釉丸碗、中期の御深井釉鬚盃、水滴、碗及び陶胎上絵付碗が見られる。後期から明治初期にかけては、灰釉仏餉具、鉄釉土瓶、染付碗などがあり、この時期の遺物が比較的多い。これらの焼物は瀬戸・美濃産を主体とし地元産と思われる鉢などが若干加わる。



## 5 小 結

検出された平安時代の住居址は、灰釉陶器東濃編年で大原2号窯式期から虎溪山1号窯式期に属し、栗木沢遺跡同様山間地に営まれた小規模集落の一部とみられる(註1)。谷部に検出された火床群も同時期のもので、鉄滓を伴う例もあり、鍛冶に関する遺構の可能性も指摘される。住居址からも鉄滓が出土しており、鍛冶の行われたことを暗示しているが、それは生業としてというより自給自足的と考える方が遺構規模や鉄滓の出土量からみて妥当であろう。その他、縄文時代では土壙3基と早期、中期の遺物少量がある。このうち谷口部検出の土壙と石器は早期の生活址と判断された。

---

(註1) 昭和62年、塩尻市教育委員会は、国道20号線東山バイパス建設に伴って路線にかかる尾根部の調査を行い、1号住居址の西方20m余りの地点で平安時代の住居址1軒を検出している(未報告)。

## 第10節 <sup>たかやま</sup>高山城跡 (ETJ)

### 1 遺跡の概観

本城跡は、塩尻市大字高山462に所在する。松本盆地南東部にあって高ボッチ山系の西麓から西向きに張り出す尾根の先端部付近に立地し、その南谷には田川に注ぐ鑄物師川の本流にも当る福沢が、北側には支流の塩沢が流れている。この尾根は更新統の礫層(梨木礫層)によって形成されているが、その先端付近のみ中・古生界石灰岩を基盤にもつため、差別浸食により独立峰的残丘となっている。残丘尾根筋ではなだらかな小平坦部を造るが、谷への落ち込みは急である。尾根筋と谷との比高差は40m~50m、頂部標高784.2mで並走する周辺の尾根より高く、眺望に富む。城跡はこの独立峰的残丘全域を範囲とする。ほとんどは山林地で、尾根の平坦部の一部が畑地として利用されている。福沢を隔てた南側の尾根には樋口遺跡が、福沢の谷には福沢遺跡、堂の前遺跡が、塩沢の谷を隔てた北側の尾根には竜神遺跡と向陽台遺跡がある。

### 2 調査の概要

#### (1) 発掘調査に至るまでの経過

本城跡は、「数段の土堦」「濠<sup>堀</sup>を掘鑿せる崖痕」「三条なる塹壕」などの存在から、城跡の可能性を指摘しながらも、「山嶺に人工の痕」を確認できず、「臨時の小砦」か「出丸」等として想定されていたものである〔堀内千萬蔵1925〕。これを受けての現地踏査では、尾根部先端付近でありながら後部が浸食されて急傾斜な山腹をもつ小山状を呈していること、近隣の中世城跡や松本平、山城や烽火台の設けられる木曾山脈北端の山塊が一望される場所であることが確かめられた。局部的には、西側の山腹の小谷部に4段の階段状小平坦部、北西部頂上付近及び山麓付近の小さな尾根部と谷部に小平坦部があり、尾根部のものは三日月状を呈していることも確認された。頂上はほぼ平坦であるが、四方を囲む土塁は無く、堀割り、空堀等の施設も認められなかった。このように人為的な工作の跡は認められるものの城跡としての判定が困難であったため、昭和59年7月20日米山一政氏(長野県文化財保護審議会会長)に、同年9月2日上代純一氏(国学院大学職員)に現地踏査を依頼し、次のようなほぼ一致した見解を得た。

- 土塁を巡らす等の防御施設が皆無で、城としての機能が考えられない。
- 本曲輪となるべき地点の周囲に工作の形跡が認められない。
- 曲輪らしき平坦部もあるが、形態が不明確で、機能的でない。
  - ・西側の小平坦部は、段曲輪の感じもあるが傾斜が急すぎる。
  - ・南西部の帯曲輪らしきものは、部分的であって帯としての機能を果たせない。
  - ・これらの平坦部に敲き締めが認められず、畑の可能性が高い。
- 尾根に続く背後に堀り切りが認められない。
- 西から北側にかけて切り落とし(縦堀)らしきものがあるが、自然決壊の可能性が高い。
- 水の供給地が遠い。
- 山城としては位置が奥まり過ぎる。

以上の点から、米山氏は城跡としての可能性をほぼ否定し、上代氏も山城としての可能性については否定的な発言があり、とりわけ、人為的工作跡がない中央道長野線用地内については、両氏とも城跡調査を目的とした発掘方法をとる必要はないという見解を示された。したがって、土器片や石器片が表採されること、近隣の尾根や谷に縄文~平安時代の遺構が検出されていることなどを考慮して集落遺跡を対象とし

た調査方法に変更し、城跡遺構の存否の確認も合わせて行うことにした(註1)。

(2) 発掘調査の概要 (P L38)

路線にかかる城跡東部の緩やかな尾根上平坦部4180㎡が調査範囲であり、標高は780m前後を測る。調査

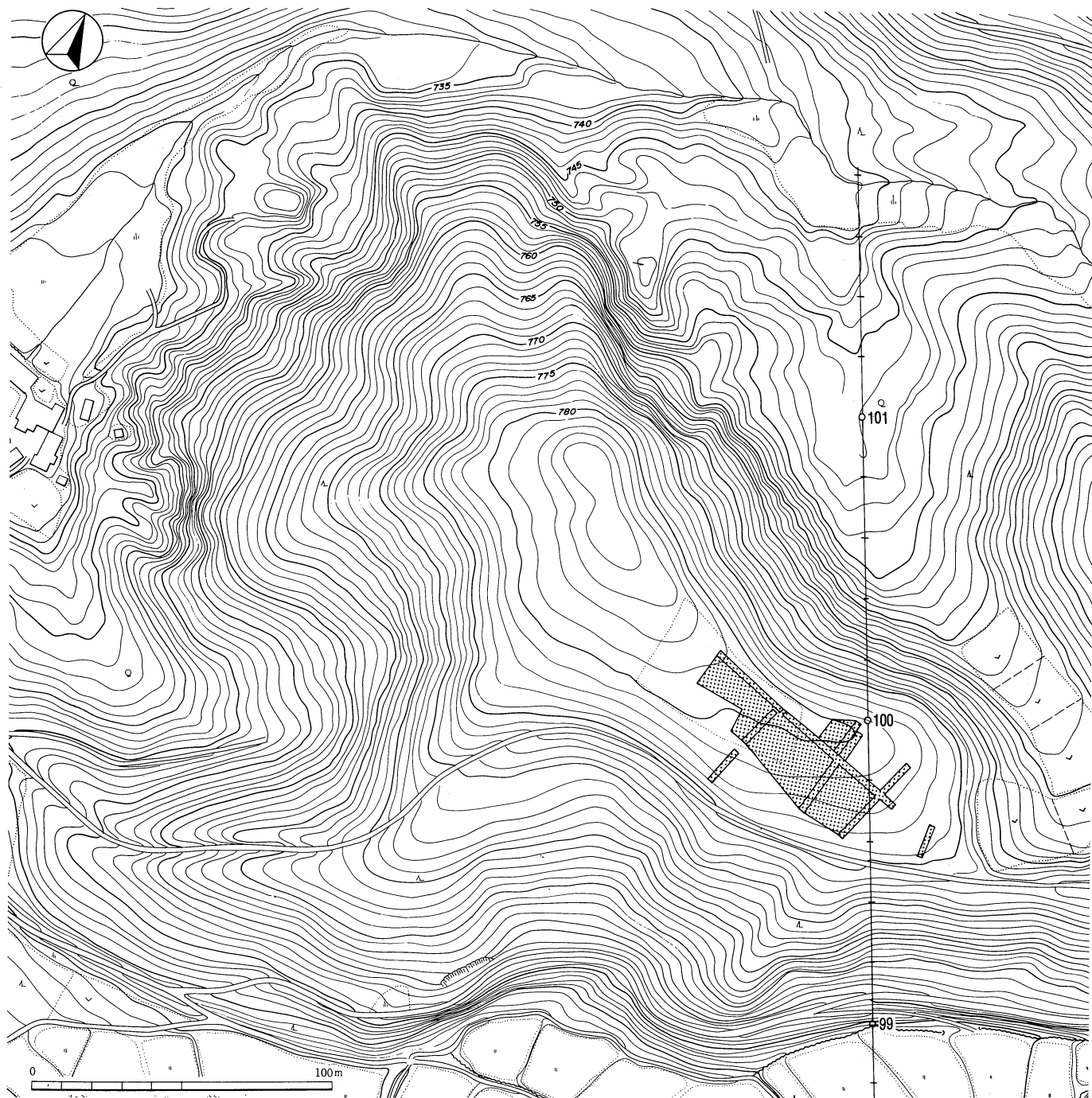


図1 地形及び発掘範囲図 (1:2500)

(註1) 昭和61年6月～7月、塩尻市教育委員会は、国道20号線東山バイパス建設に伴って路線にかかる高山城跡南西部と西部の2地点の調査を行っている。それは南西部の標高775m～760m間の南向き平坦部付近及び西部の標高758m～771m間にみられる4段の階段状小平坦部である。その結果、南西部では平安時代の住居址2軒と3基の小竪穴、西部では5基の小竪穴を検出している。しかし、西部の階段状遺構は明らかに人工的であるものの、城に伴うものか否かは不明であり、そのほか城跡とする積極的な所見も得られなかった、という。(塩尻市教育委員会小林康男氏の御教示による)

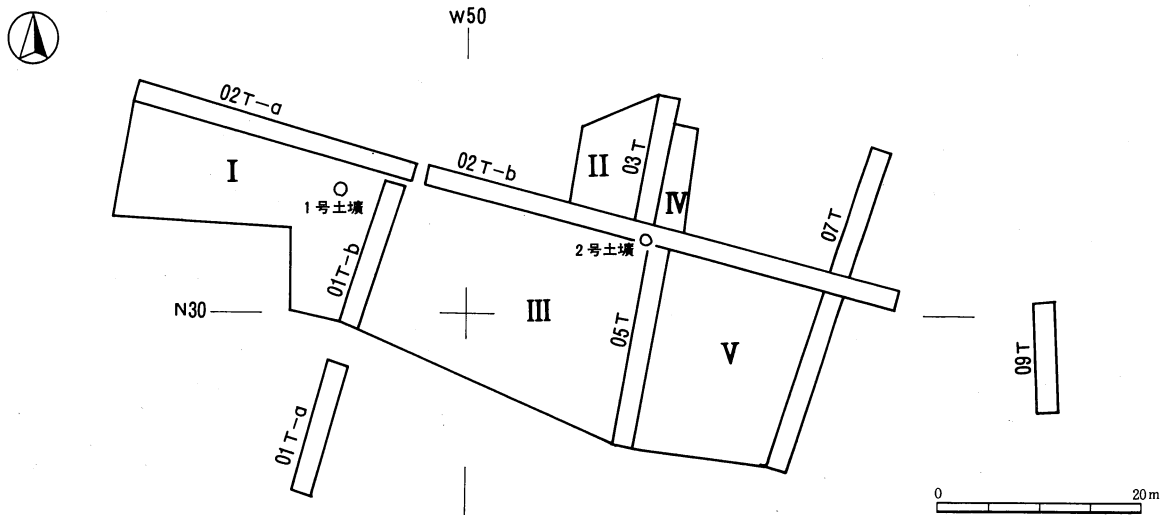


図2 トレンチ配置及び遺構分布図 (1:750)

前は頂部に近い北西側は畑地、南東側は山林となっていた。

調査は昭和59年9月17日より10月15日まで行い、3名の調査研究員が当たった。調査の初めに層序と遺構の有無確認のためトレンチ調査を行ったが、全面にわたって表土直下はロームの地山で、遺物はすべて表土、耕作土より採集された。また、城跡に関する所見は得られず、尾根上トレンチに土壌1基を検出した。そこで、比較的まとまって遺物が採集された02トレンチ南側の緩やかな南向斜面一帯について面的調査を実施した。

測量基準点は、日本道路公団の工事用杭STA99+40(座標値X=12433.5238、Y=-46137.0099、標高755.588m)を用いた。

整理作業は昭和60年1月より3月まで、62年2月より4月までの間断続的に行い、本報告に至る。

### 3 調査の経過

#### 昭和59年度

- 7月20日 米山一政氏を招聘し、現地踏査を行う。塩尻市教育委員会小林康男氏参加。
- 9月2日 上代純一氏を招聘し、現地踏査を行う。塩尻市教育委員会小林康男氏、岡谷市教育委員会高林重水氏参加。
- 9月5日 発掘用具の運搬及び下草刈り(~10日)。

- 9月17日 トレンチ調査開始(~26日)。土壌1基検出。
- 9月27日 面的調査開始(~10月14日)。新たに土壌1基、縄文時代遺物検出。
- 10月18日 発掘範囲の測量、写真撮影を行い、調査終了。
- 1月5日 図面整理、遺物実測を行う(~3月上旬)。

#### 昭和61年度

- 2月1日 報告書刊行に向けて原稿執筆(~4月)。

### 4 調査の結果

#### (1) 層序と地形形成

トレンチ調査によって確認された基本層序は以下のとおりである。

- I層：ローム混じりの茶褐色腐植土。畑地においては耕作土、山林地は表土である。
- II層：やや土壌化したローム。礫は混じらない。
- III層：堅く締ったローム。

これは波田ロームの上部が土壌化し、形成されたものである。表土は尾根上平坦部でやや厚く、傾斜面では薄くなっている。

(2) 遺構と遺物の概観 (図2)

縄文時代の遺物は、早期前半の土器約30点、石器は製品20余点の他剥片類が数10点ある。尾根筋平坦部のローム上面に検出された土壌2基(1・2号土壌)は遺物を伴っていないため時期は不明であるが、周辺出土遺物から縄文時代の可能性が大きい。黒曜石剥片は、III区南側のII層上面から比較的まとまって出土したが、数は少なく製作地とは断定できない。平安時代の遺物は数点、近世以降の遺物も焼物約30点が出土している。いずれも表土中及びII層上面より散漫に出土した。

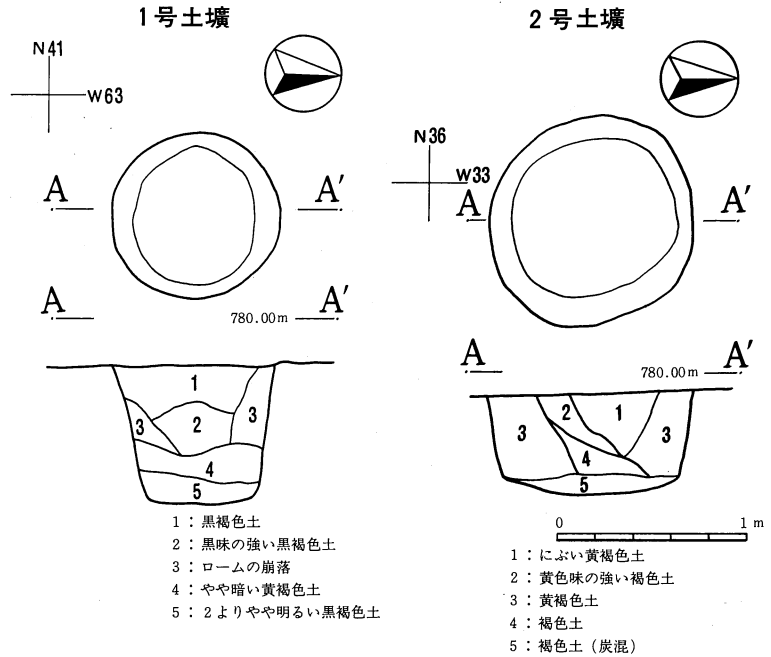


図3 1・2号土壌実測図

(3) 縄文時代の遺構と遺物

ア 土 壌 (図3)

尾根上平坦部のIIa層上面に2基検出された。1号は径80cm、深さ73cmの円形プランで、壁は垂直、底部は平坦である。上面及び埋土中心部は黒味の強い腐植土が入り、短時間に埋められたものではなさそうである。2号は径110cmの円形プランで、深さ50cmの壁はほぼ垂直に掘り込まれる。底にわずかな炭化物を含んだ層がある。埋土中心部にやや腐植したロームが入り、自然埋没を思わせる。2基とも遺物は皆無で、その性格、時期ともに明確ではない。しかし、土壌周辺出土の遺物はほとんど縄文時代であることから、該期の所産である可能性が高い。

イ 遺構外出土遺物 (図4)

土器及び石器がI層表土、耕作土から、発掘範囲全域にわたって散漫な状態で出土した。

土器はすべて破片で約30点あり、主体は早期貝殻沈線文系土器である。早期押型文土器(1)は1点が出土。口縁部が外反気味に開く器形で、口唇部に刻みを加え、口縁部には山形文を横位に回転施文する。口唇直下の平行沈線も回転施文されたものだが、山形文と同一原体に彫刻されたものか否か破片が小さいためはっきりしない。胎土に繊維を含み、焼成は堅く良好。細久保式併行と考えられる。2~13は早期前半貝殻沈線文系土器に含まれる。2~5は同一個体。2・3は平縁の口縁部破片で、口縁下に横走る沈線がめぐり、沈線間には短沈線を綾杉状に施文する。口唇部にも綾杉状の沈線を加える。ていねいな器面調整が行われ、とりわけ裏面はなめらかである。4・5は横位の蛇行沈線を数条めぐらす。6はキザミのある細い隆帯が施される。4・5と同様な蛇行沈線を加える。8~10は沈線文の施された胴部破片。11~13は縄文施文の土器で、それぞれ沈線文を併用する。原体RLの縄文施文後それを区画するように沈線文を施し、12は一部磨り消して無文帯としているかのように見える。2~13はすべて胎土中に少量の繊維を含む。田戸上層式の段階に比定されよう。

石器は石鏃5、スクレイパー2、ピエス・エスキーユ3、小剥離痕のある剥片4、石核・剥片・原石67、打製石斧4、粗製大形石匙1、磨製石斧1が出土した。石鏃は無茎3(2・3・5)、有茎(4)と不明(1)各1。ただし3と5は全体に厚味があって重く、周縁調整のやや粗いことと合わせ考えれば未製品の可能性がある。スクレイパー(6・7)はともに刃部片面調整。ピエス・エスキーユ(8)は自然面ないしは一次調整剥離面を大

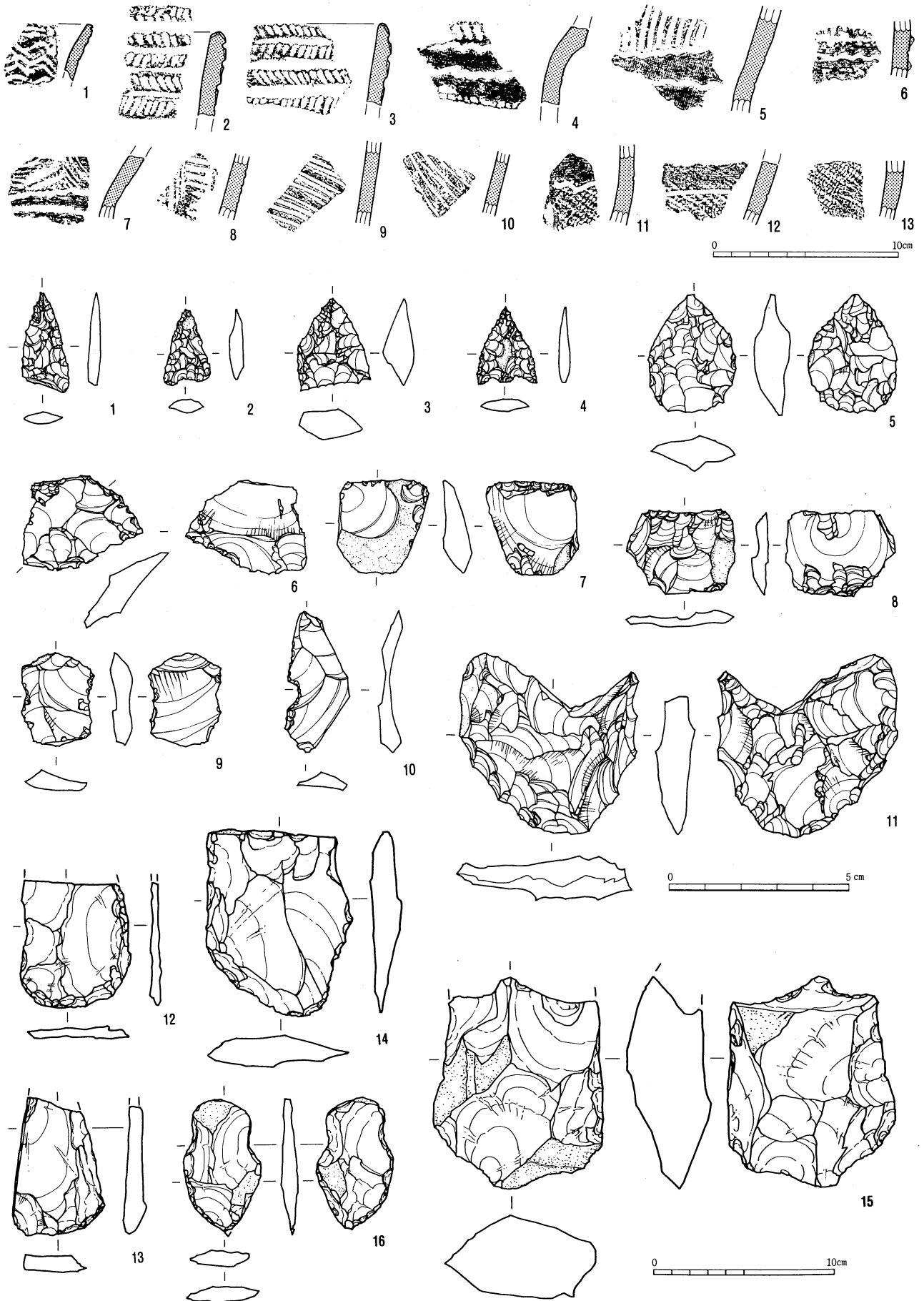


図4 遺構外出土縄文時代遺物実測図・拓影

きく残す。小剥離痕のある剥片は大きさの揃わない剥離痕がならぶ類で、小剥離痕が片面にのみ残る10と両面に残る9がある。11は大きな剥離によって整形され、縁辺は波状にうねる。右側と下部は剥離が比較的新しく小剥離痕が見られないが、左側縁には使用痕と考えられる小剥離痕が残る。スクレイパーを含めてよいかもしれない。これらは、剥片に6点のチャートがある以外すべて黒曜石を用いている。打製石斧は3点(12・13・15)が上半を欠損しており、完形は1点(14)のみである。12・13の刃部にわずかながら摩耗が認められるのに対して14は全く摩耗がみられない。粗製大形石匙(16)は縦形で、先端が尖り、その先端に近い側縁が摩耗する。石材は12～14が砂岩、15頁岩、16が蛇紋岩である。

#### ウ 平安時代以降の遺物

平安時代の遺物は総数で7点にとどまる。9世紀前半と思われる須恵器杯蓋以外は黒色土器B、灰釉陶器の細片で、時期は確定できない。

近世連房期の焼物は30点程の細片があるが、すべて18世紀以降のものである。18世紀代の御深井碗、18～19世紀の京焼風小碗、鉄釉碗、掛け分けの仏花瓶、19世紀の鉄釉及び灰釉の鉢、土瓶などがある。これらは地元産と思われる数点の鉢片を除けばすべて瀬戸・美濃産である。

### 5 小 結

調査区域内では城跡にかかわる遺構及び遺物は検出されなかった。昭和61年の塩尻市教育委員会発掘域についても、人工の痕跡は認めながらも、城跡として認め得るような積極的所見は得られていない。事前踏査の識者による「山城としての体裁を整えていない」との見解にほぼ集約されそうである。しかし、臨時の砦、あるいは出丸、烽火台等の可能性まで否定できるか否かの最終判断は今後の全面的な発掘調査の結果を待ちたい。

検出された遺構は縄文時代と考えられる土壇2基のみである。遺物が少なく、西側の調査区外を含めて集落の存在する可能性は小さい。しかし、石鏃や黒曜石片が比較的まとまって出土した地点もあり、一時的に逗留したキャンプ地と考えられる。

平安時代の遺物は、この時期山間地に展開された開発がこの地にも及んだ証しとみられよう。18世紀以降、特に幕末以降を中心とする近世遺物の存在も、同様に開発の歴史を語っているのであろう。

#### 引用・参考文献

堀内千蔵 1925 『塩尻地史』

## 第11節 <sup>りゅうじん</sup> 竜神遺跡 (ERJ)

### 1 遺跡の概観

遺跡は塩尻市大字片丘11023番地11を中心に所在し、高ボッチ山塊西麓の西に向かって突出した舌状台地に立地する。台地上は広く平坦で、わずかに北東に向かって緩く傾斜している。ここからは塩尻市内が一望できる。調査前、遺跡地一帯は畑地として利用されていた。

### 2 調査の概要

本遺跡は12000㎡余という広大な台地の全面に展開するため、まず遺跡の概況をつかむことを目的としてトレンチ調査を行い、その結果を踏まえて本調査に入ることにした。

トレンチ調査は、昭和60年6月10日から約2週間、竜神平遺跡の調査と並行して行われた。東西方向に4本、南北方向に5本、幅1mのトレンチを入れた結果、若干の遺物が出土すること、土層は耕作土下即ロームに至ることが判明した。したがって、50cm～60cmある耕作土のうち上部を重機によって排土したのち、面的調査を実施することにした。

面的調査は、12200㎡を対象に、昭和60年8月の約1ヶ月を費やして行われた。この間、調査研究員は主として2名が当たった。重機による排土作業の後、手掘りによって遺構、遺物の検出に努めた。なお、グロウラーダンプを使って台地斜面まで排土を移動するなど、作業の効率化を図った。

測量にあたっては、日本道路公団工事用杭 STA103+80 (X=12822.7514, Y=-46342.1973) を基準とし、その前後の工事用杭より座標北を算出して基準線とした。この基準線を基に竜神平遺跡をも含めて50m×50mの大地区を設定し(A～L地区)、さらに大地区を2m四方のグリッドに区画した。遺物は、出土点数が少なかったため出土地点にそのまま残し、地形の写真測量に併せて位置を記録し取り上げた。写真測量は業者に委託した。

整理作業は、発掘調査終了後12月から翌3月まで基礎的な作業を行った。その後、昭和61年8月より再開し、昭和62年1月より本格的な報告書作成に入り、本報告書に至った。

### 3 調査の経過

<b>昭和60年度</b>		8月20日	台地東側に集石炉を検出する。
6月10日	トレンチ調査を開始。東西方向に3本のトレンチを設定し、掘り下げる。	8月27日	土壌を検出し、半割。
6月27日	東西方向のトレンチ完掘。遺構はなく、遺物も僅少。新たに南北方向に5本のトレンチを設定。	8月30日	土壌、集石炉の土層実測、写真撮影終了。
7月1日	トレンチ調査終了。遺構は確認されず、遺物も少ない。したがって、表土は重機で排土することにする。光波測距儀を用いてトレンチの位置を測量し、土層図作成。	9月6日	土壌、集石炉及び遺跡全体地形の写真測量を業者に委託して実施。
7月9日	重機による表土剥ぎ作業。翌10日に完了。	9月9日	集石炉を完掘後平面図を作成しすべての調査終了。
7月31日	面的調査開始。遺構検出に努める。	1月～3月	図面整理、遺物の洗浄、注記等の基本的な整理作業終了。
		<b>昭和61年度</b>	
		1月～	報告書作成に向けて本格的な整理作業に入る。

### 4 調査の結果

#### (1) 層序と地形形成 (図2)

本遺跡の立地する舌状台地は平坦で、西側に向かってなだらかに傾斜する。平坦部の東西の比高差は約



7 m、傾斜角は約3度である。層序は単純で、ローム層の上は部分的にローム漸移層が残るほかは黒色の耕作土となる。特に長芋栽培による南北方向の細く深い耕作痕は、ローム層中にまで及ぶ。

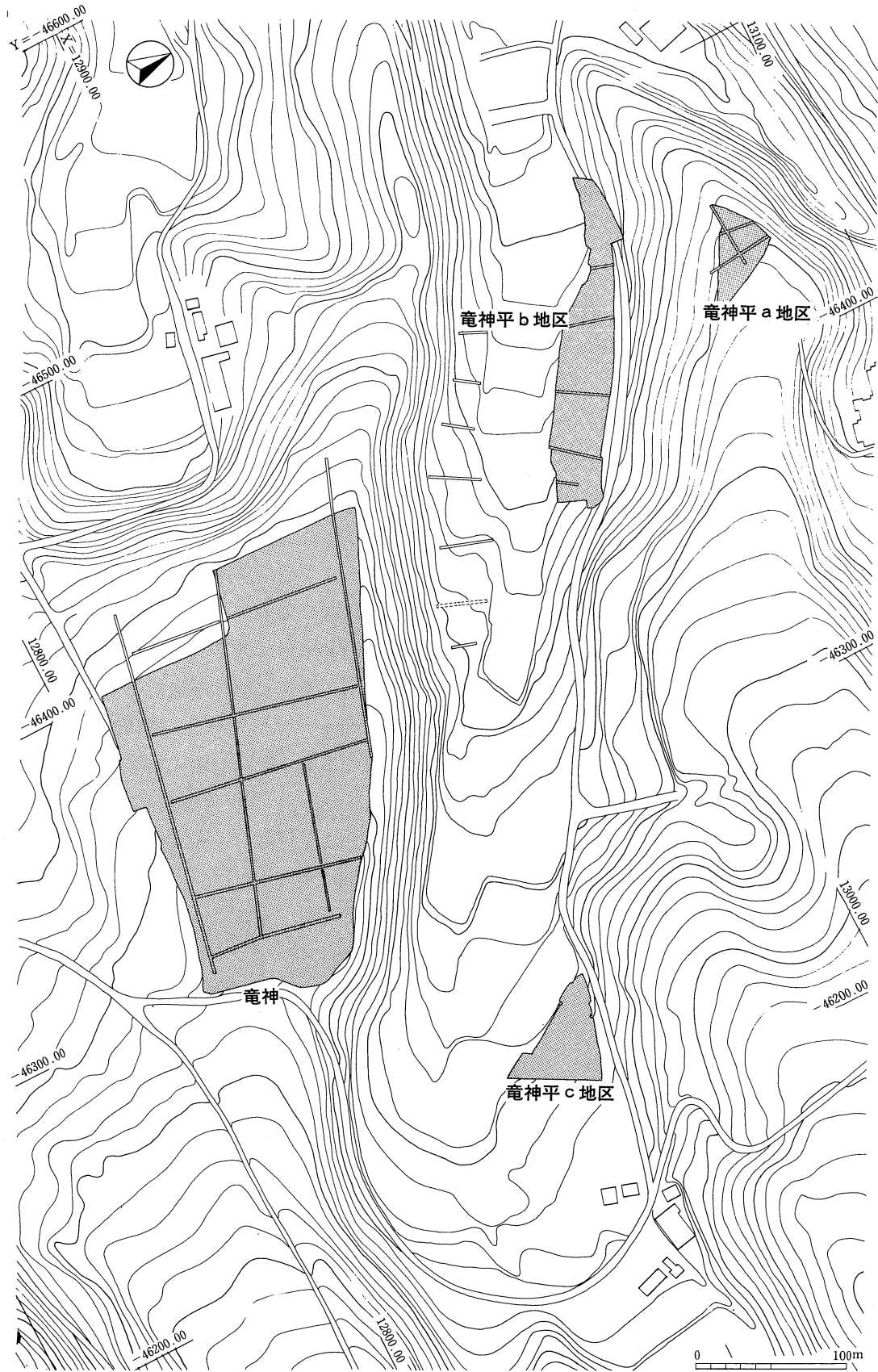


図1 竜神・竜神平遺跡地形及び発掘範囲図（1：4000）

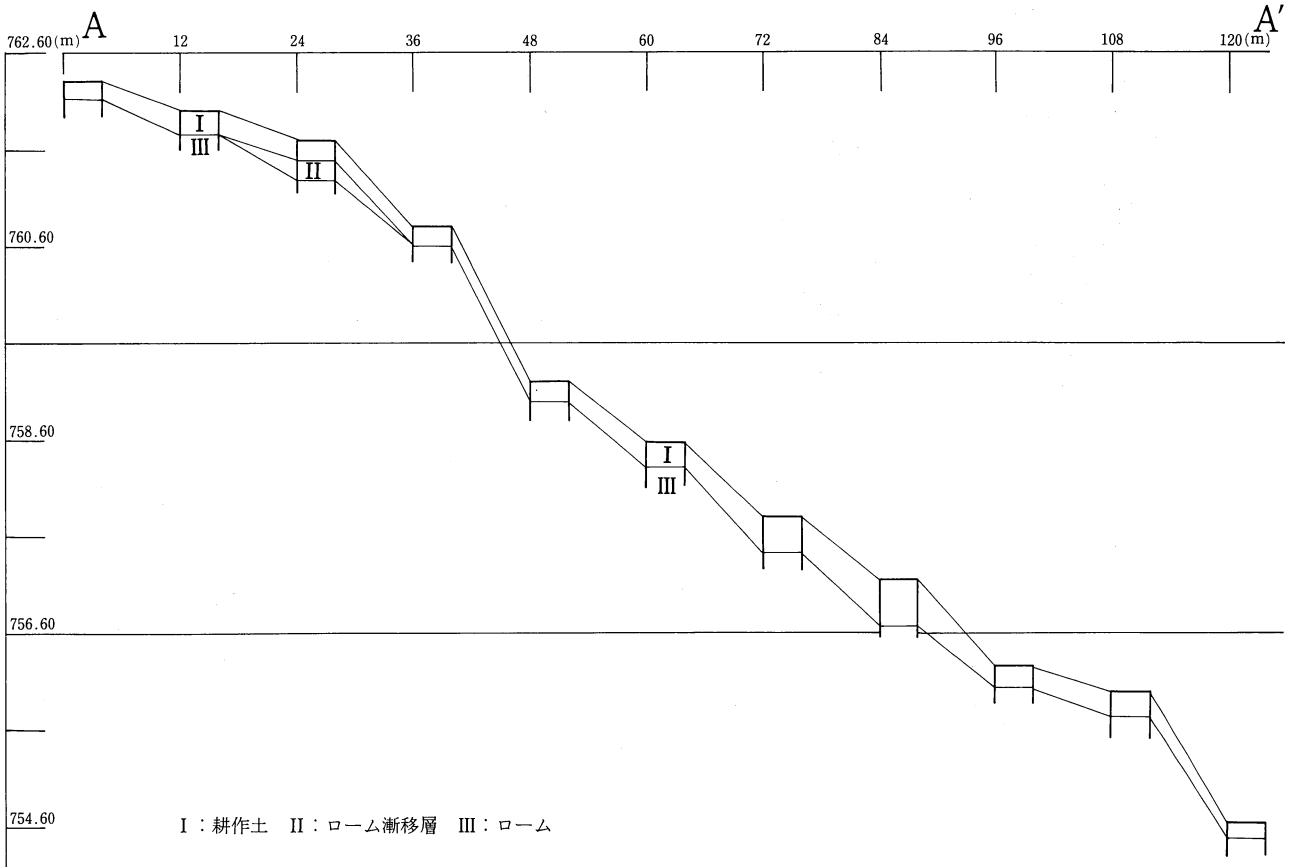


図2 土層図(水平1:400、垂直1:20)

(2) 遺構と遺物の概観

(図3)

集落を営むのに申し分のない立地環境であると思われた本遺跡であったが、調査結果はそうした当初の予想とは大きくかけ離れ、発見された遺構は土壌1、集石炉2がすべてである。いずれも台地の北東隅に集中し、縄文時代の所産と思われる。遺物は、縄文時代早期を中心に前期、中期、後期、晩期の土器破片が少量、また石鏃、打製石斧、磨石類の出土をみた。

(3) 縄文時代の

遺構と遺物

ア 土 壌 (図4)

土壌は長軸約1.6m、短軸約1mの楕円形プランで、深さ約65

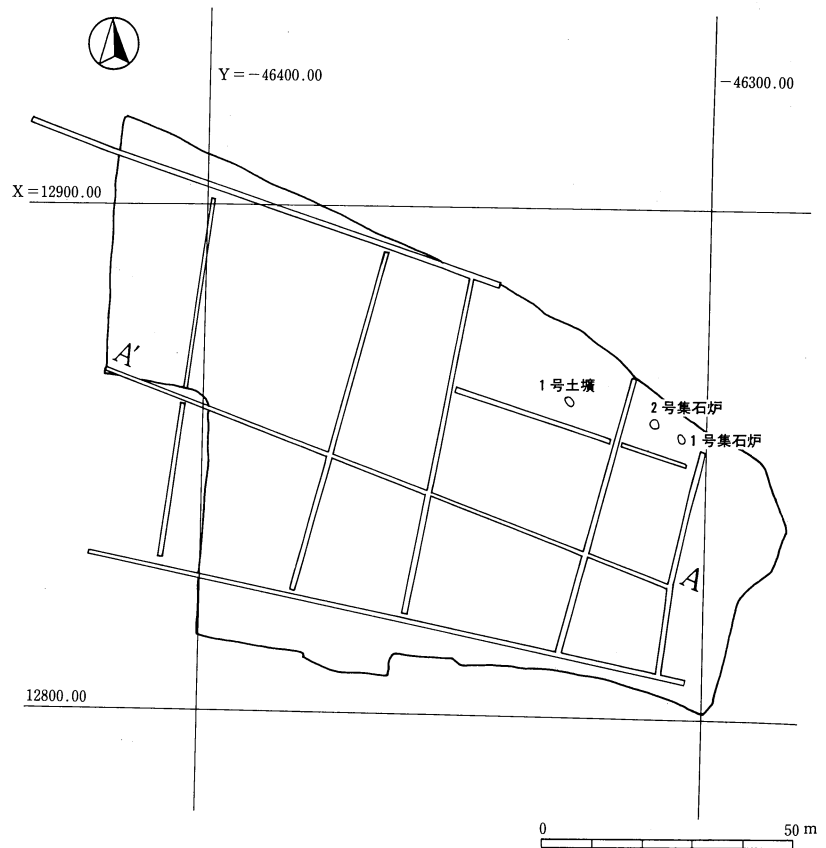


図3 トレンチ配置及び遺構分布図(1:1500)

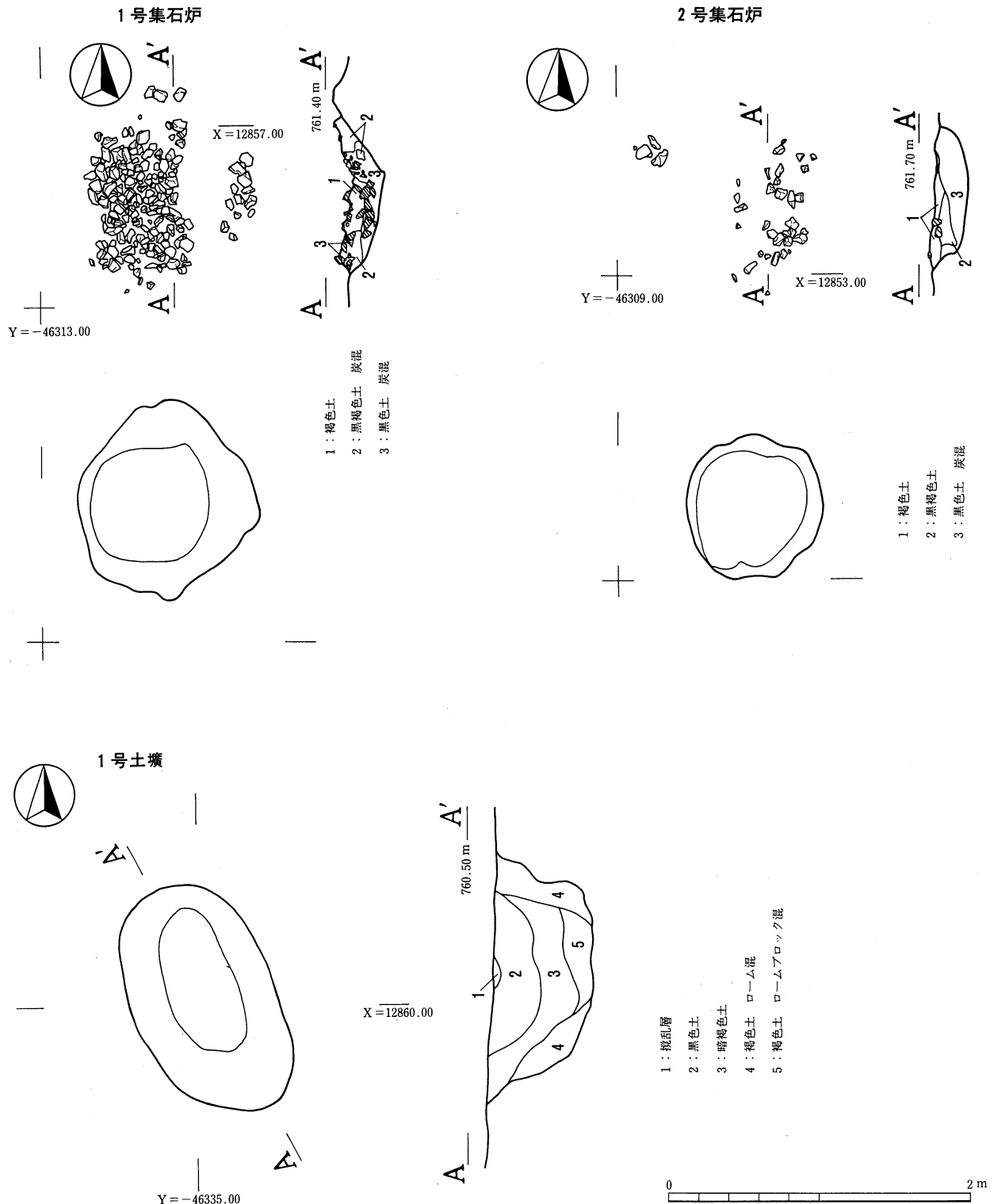


図4 1・2号集石炉・1号土坑実測図

cm。埋土は自然埋没状態を示す。出土遺物はなく、性格は不明である。

イ 集石炉

① 1号集石炉 (図4、PL39)

南北方向に長軸をもつ約1 m×0.6mの範囲に焼礫が密集する。礫はいずれも拳大かそれよりも小さいもので、大半は焼けて赤化している。礫の分布密度はそれほど高くなく、間から炭化物が多量に出土した。掘り形は直径約1.2mの円形で、深さ約25cm。坑底は炭化物が付着し、強く焼けている。出土遺物はない。



図 5 遺構外出土縄文時代土器拓影

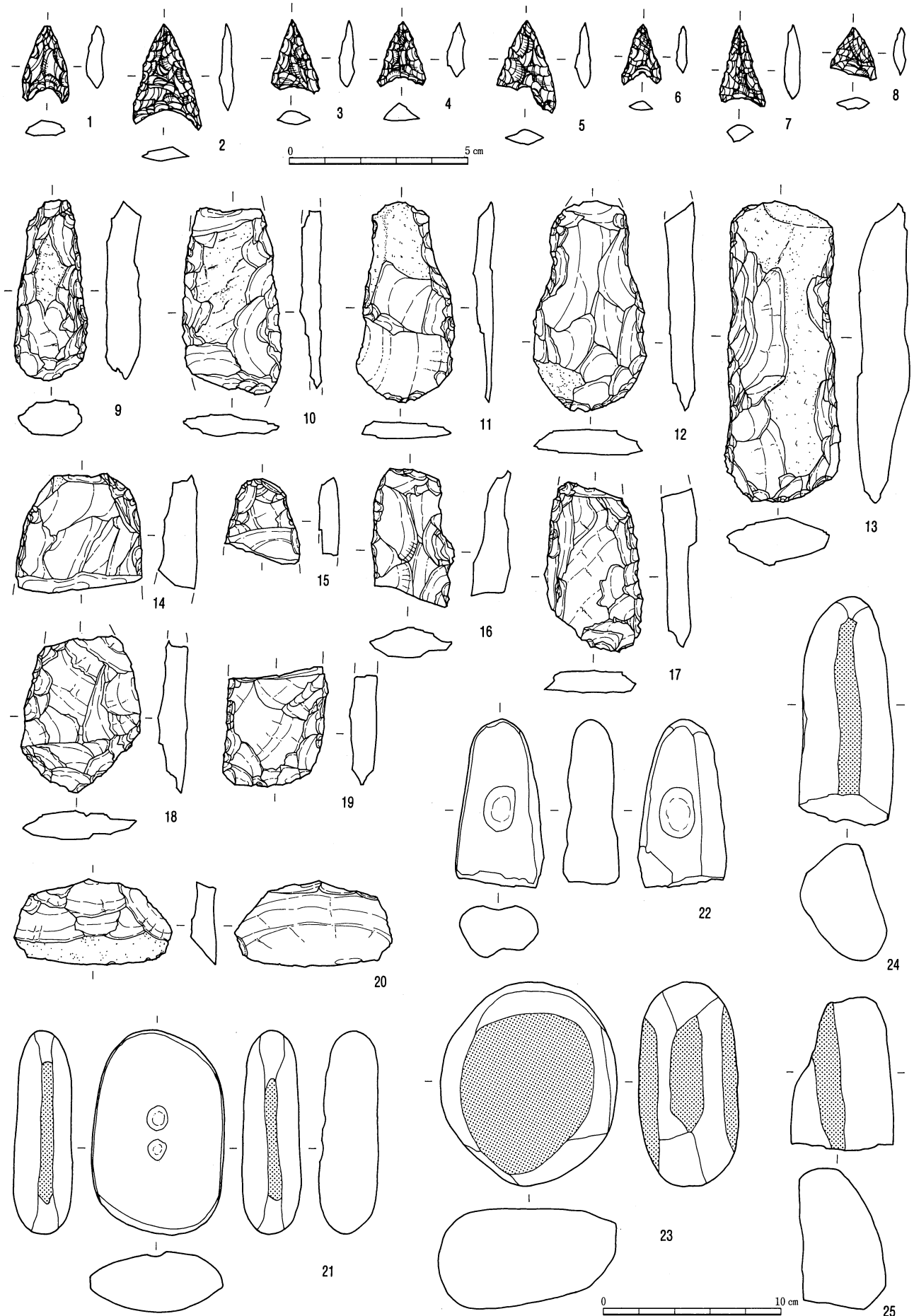


図6 遺構外出土縄文時代石器実測図

## ② 2号集石炉 (図4、PL39)

南北方向に長軸をもつ約1.0m×0.6mの範囲に焼礫が集中する。礫は少ないが、拳大からそれ以下のものがほとんどで、大半は焼けていた。埋土には炭化物が含まれる。このようにすべての点で1号集石炉によく似ており、石の少ない集石炉と考えておきたい。掘り形は直径約90cmの円形で深さ20cm。

## ウ 遺構外出土遺物

## ① 土器 (図5)

早期を中心として前期、中期、後期、晩期の土器がごく少量ずつ発見された。時期判別の可能な資料は図示したものがすべてであり、調査区全域から満遍なく出土した。

1～25はいずれも胎土に繊維を含む早期土器であり、時期差も認められる。1～9が最も古く、鵜ガ島台式ないしは茅山下層式に比定され、幾何学的な文様構成や列点状の刺突文を特徴とする。10は茅山上層式であろう。11・12は絡条体圧痕文をもつ土器で、11には突帯も貼付される。13～25には条痕文や縄文が施される。時期の特定はむずかしいが、上記のいずれかに伴出するものでであろう。26～29は弧状、直線状に重層する平行沈線文によるモチーフを特徴とし、前期諸磯C式に比定される。30～34は中期の土器である。30・31は隆帯文、沈線文をもち曾利式前半に、33・34は縄文を「U」字状に区画してその外側を磨消しており加曾利E式終末期に比定できる。35～38は後期の土器である。磨消縄文(37・38)や口唇部を巡る一条の沈線文(36)が特徴的であり、堀之内式期の前半に位置付けられる。40～42は板状工具による細密条痕文を格子目状に施す。晩期水式に相当しよう。

## ② 石器 (図6)

主な石器は石鏃、打製石斧、磨石・凹石類で、図化できるものはすべて掲載した。

石鏃(1～8)は8点。片脚欠損品が少量ある他は完形品で、形態的には抉りの浅いものが大半であるが、5のみ鉤形状の深い抉りをもつ。打製石斧は11点(9～19)。このうち完形品は2点である。形態はいずれも短冊形に近い。13は際立って大きく、長さ29.7cmを測る。20は片側側縁に刃をもつ横刃形石器。21～25は凹石及び磨石と特殊磨石である。21・22が凹石で、22はその両側面が摩耗し、磨石の機能も兼ねる。23は3面に磨面をもつ磨石、24・25は特殊磨石である。

## 5 小 結

本遺跡の立地する台地は平坦で広く、その上日当りが良く、眺望がきく。原始・古代人の生活域としてはこの上ない適地と思われた。しかし、上述の如く、彼らの定住の地とはなり得なかったらしい。わずかに発見された遺物類も縄文人が通り過ぎた痕跡を伝えるに過ぎず、この地に定住した形跡は希薄なのであり、むしろ、1基の土壙と2基の集石炉の存在したことが違和感を覚える。しかし、こうした遺跡が縄文社会を形成する一角として存在したことは確かで、縄文時代の遺跡間構造が論ぜられる際にデータの1つとして提示できるものと考えられる。

## 第12節 <sup>りゅうじんだいら</sup> 竜神平遺跡 (ERD)

### 1 遺跡の概観

遺跡は塩尻市大字片丘10990番地3を中心に所在する。松本盆地と諏訪盆地の間には高ボッチ山塊がそびえ、その西麓は片丘丘陵と呼ばれる、幾筋もの舌状台地が松本平の中心に向かって張り出している。本遺跡は3地区に分かれるが、それは台地の先端部、そして南側に平行してのびる竜神遺跡がのった台地との間の谷部、およびその谷頭にあたる地区である。この谷部は中央を東西に流れる小さな沢によって2分され、その右岸は緩やかなスロープをもった南向きの日だまり地形となる。谷中央部は狭まっているためか遺構等の存在をみないが、谷頭においては再び若干の傾斜を示すものやや広い平坦面をなし、ここに小規模な古墳時代の営みが展開されていた。また台地部はこの谷と約7mの比高差をもち、先端部のみが用地内に入っていた。おそらく遺跡はこの尾根の中央部を中心に展開していたものと思われる。なお、本遺跡から徒歩で2～3分西方には竜神とよばれる小さな池があり、どんな干ばつ時であっても水の溜れたことがないという古くからの言い伝えがある。

本遺跡の南側台地には竜神遺跡が、谷を隔てて北の台地には山の神遺跡が展開するなど、一帯は遺跡の多い地域といえる。

台地からは松本の盆地が広く眺望でき、調査前の付近一帯は畑地として利用され、一部は荒地となっていた。

### 2 調査の概要

本遺跡は3地区に分かれているため、台地の先端部、谷開口部および谷頭部を、それぞれa地区、b地区、c地区とした。従来はこのa地区をもって竜神平遺跡とされていたが、事前の踏査により谷部にも遺物の散布が認められたため、b地区、c地区も遺跡の範囲に含めて調査の対象となった。

調査はおおむねa地区→b地区→c地区の順で行ったが、重複した期間もある。

a地区は、昭和60年5月中旬から下旬にかけて、約1400㎡を調査対象とし、調査研究員は主として3名が当たった。b地区は約4800㎡が調査対象で、昭和60年5月中旬より9月初旬にかけて、主として6名の調査研究員により行われた。c地区は昭和60年9月の約1ヶ月間、約2100㎡を対象に主として2名の調査研究員によって行われた。その間、発掘作業に際しては、地元の方々に協力をいただいた。

調査は、いずれの地区においても、基本的には傾斜の方向に沿ったトレンチを設定して層序の確認と遺跡の全体像を把握することから始めた。a地区では南北に2本、東西に1本トレンチを設定したが、その時点で遺構、遺物ともにごくわずかであり、包含層の堆積も薄く、全体の掘り下げは容易に行えるであろうと判断できた。b地区は、当初左岸部にも遺跡の存在が予想されたため、トレンチは両岸に設定した。右岸部に5本、左岸部に7本である(ただし、左岸部で実際に掘ったのは6本)。その結果、左岸部は南の台地からの土石の崩壊が著しく、遺構は勿論、遺物もほとんどないことが確認された。一方、右岸部では遺構こそ検出できなかったものの、全面的に遺物の出土が認められたため、遺跡の中心と判断して全面調査に入った。c地区はやはり傾斜方向に2本のトレンチを設定した。この段階で完形の高杯を伴う土壌が検出されたため、全面的な調査に入った。なお、各地区とも調査はすべて手作業にて行った。

測量は、日本道路公団工事用杭STA103+80(X=12822.7514、Y=-46342.1973)を基準として、複数の工事用杭より座標北を割り出し、基準線とした。これと基点を通る直交線から竜神遺跡をも含めて50m×50mの大

地区を設定し（A～L地区）、さらに大地区を2m四方のグリッドに区画した。遺物の取り上げは、基本的にこのグリッドごとに行った。なお、b地区、c地区はグリッドの中の位置も詳細に記録するため、全点ドットによる取り上げを行った。遺構の実測および遺物の取り上げはすべて遺り方測量を用い、発掘範囲等の記録には光波測距儀を併用した。なお、遺構の実測に関しては、一部業者委託による写真実測も利用した。

整理作業は、発掘調査終了後12月から翌3月まで基本的な作業を行った。さらに、昭和61年8月より断続的に整理作業を行い、昭和62年1月より本格的な報告書作成に入り、本報告に至った。

### 3 調査の経過

#### [a地区]

##### 昭和60年度

- 5月17日 発掘調査開始。トレンチを3本あける。
- 5月21日 全面調査に入る。
- 5月24日 住居址と思われる落ち込みを検出し、プランを確認。
- 5月27日 1号住居址として掘り始める。
- 5月28日 1号住居址完掘。
- 5月30日 土壌3基を確認し、掘り始める。
- 5月31日 土壌調査終了。全体写真、全体図も終了し、本日を以て本地区の調査のすべてを完了。

#### [b地区]

##### 昭和60年度

- 5月17日 発掘調査開始。右岸に4本、左岸に3本のトレンチを設定し、調査を始める。
- 5月23日 左岸部のトレンチ調査について検討した結果、包含層や、生活の痕跡は認められないと判断する。右岸部は遺物も多く、また焼土を検出（後に火床とする）したので、以後全面調査に移行する。
- 5月27日 02・03トレンチ間に炭の大量につまった遺構を検出。焼土層とする。後にこの種の遺構を5基確認。
- 6月6日 02トレンチ西側に拳大の礫を集めた集石を発見。1号集石炉とし、このため道路側に発掘区を約70cm程拡張。集石炉は以後5基検出。
- 6月26日 墳墓と思われていた石組みをカマドと判断し、住居址であることを確認。掘り下げ開始。
- 7月6日 1号集石炉北側市道部分について、発掘区域拡張に伴う迂回路等の検討を行う。
- 7月17日 迂回路ができたため、道下の調査に入る。落ち込みを確認し竪穴状遺構とする。
- 7月19日 縄文時代の住居址を検出。1号住居址とする。

- 8月2日 1号集石炉の石を取り上げる。
- 8月8日 2号集石炉の平面図は写真実測とし、業者による写真撮影実施。
- 8月29日 4号集石炉の写真実測を実施。
- 9月10日 全景写真を撮影し、b地区の調査を終了。

#### [c地区]

##### 昭和60年度

- 8月29日 2本のトレンチを設定して発掘調査開始。
- 9月2日 遺構や遺物の存在が確認できたため、以後全面調査に移行。
- 9月4日 1号住居址を検出。
- 9月5日 1号集石土壌を検出。
- 9月9日 1・2号土壌を検出。
- 9月10日 1号住居址南西約3mに土器集中区を確認。
- 9月12日 1号集石土壌平面図を写真実測にて実施。1号住居址からは手捏土器が出土。
- 9月18日 2号住居址を確認し、調査開始。罎、杯等の完形土器が出土。
- 9月19日 1号住居址より土製模造鏡出土。
- 10月4日 1号集石土壌の完掘写真および全体写真を撮影し、本区の調査を終了。

なお、発掘調査終了後の整理作業については3地区とも共通であるため、以下にまとめて記したい。

##### 昭和60年度

- 1月～3月 図面整理、遺物の洗浄、注記等基本的な作業を終了。

##### 昭和61年度

- 8月～12月 遺物の接合、分類等を断続的に行う。
- 1月～報告書作成に向けて、本格的なまとめに入る。

### 4 調査の結果

調査の結果、立地の違う各地区は、時代や、場の利用も異なっていたことが確認された。したがって、同一の遺跡名で呼ばれてはいるものの、地理的な環境からも各々は独立していると考えられることから各地区ごとにその成果を述べる。

#### a地区

##### (1) 層序と地形形成（図1）

西方に伸びる舌状台地の先端部に本地区は位置し、すぐ脇からは谷に向かって急峻な傾斜面を形成する。



堆積層は非常に薄く、台地の中央方向である北側でわずかに自然堆積層を残すが、他は約20cmの厚さの耕作土層があるのみで、その下はすぐにローム層となる。

基本土層は以下の通りである。

- I層：黒色腐植土で、耕作土層。
- II層：細かい粒子の褐色土層。
- III層：ローム層。

(2) 遺構と遺物の概観 (図1、P L 40)

本地区では遺構、遺物共にごく少量であった。時代は縄文時代に限られ、住居址1軒、土壇3基、そしてごくわずかな遺物が発見されたにとどまる。

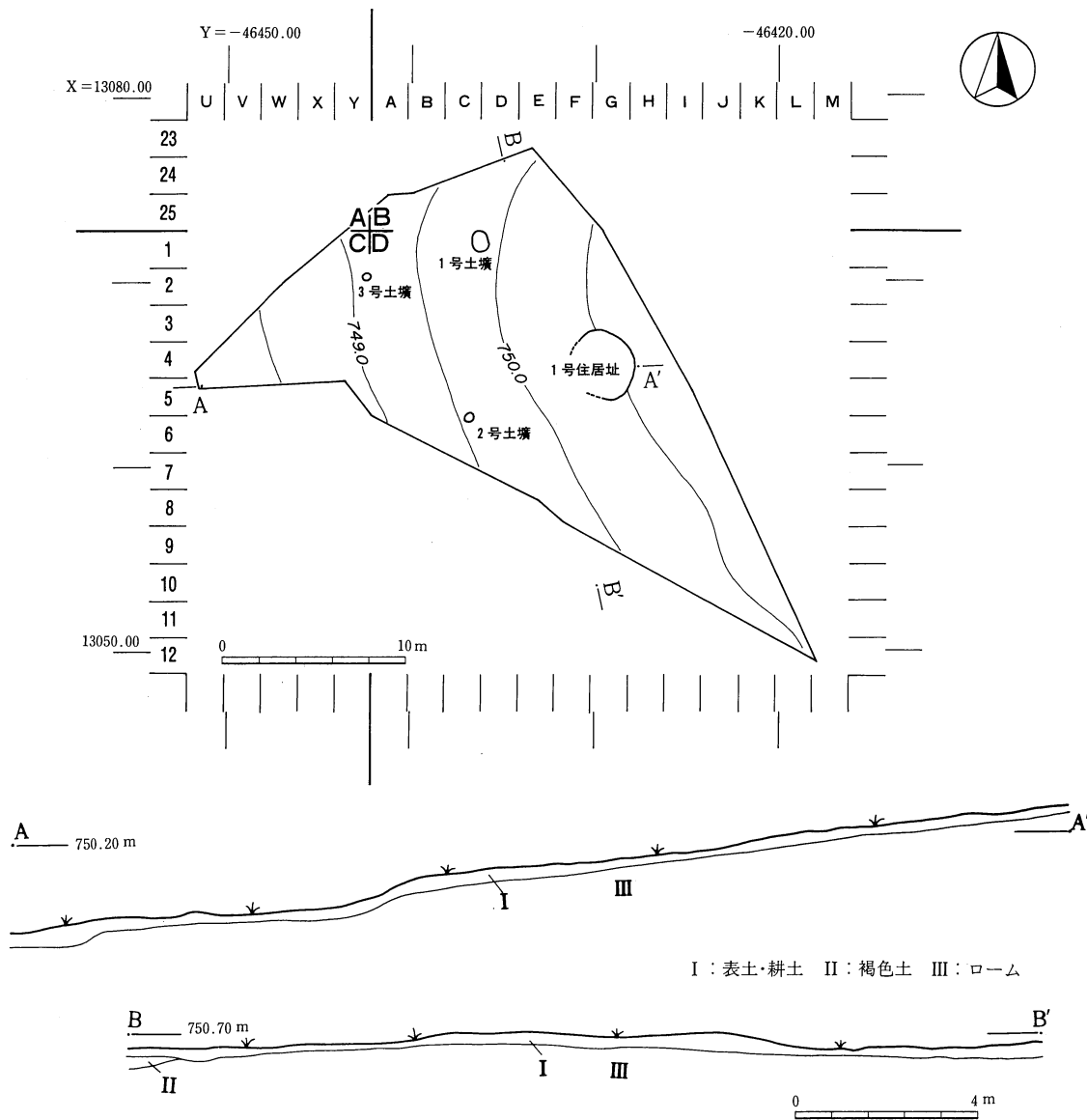


図1 a地区遺構分布図(上) (1:400)・土層図(下) (1:160)

(3) 縄文時代の遺構と遺物

ア 住居址

① 1号住居址 (図2)

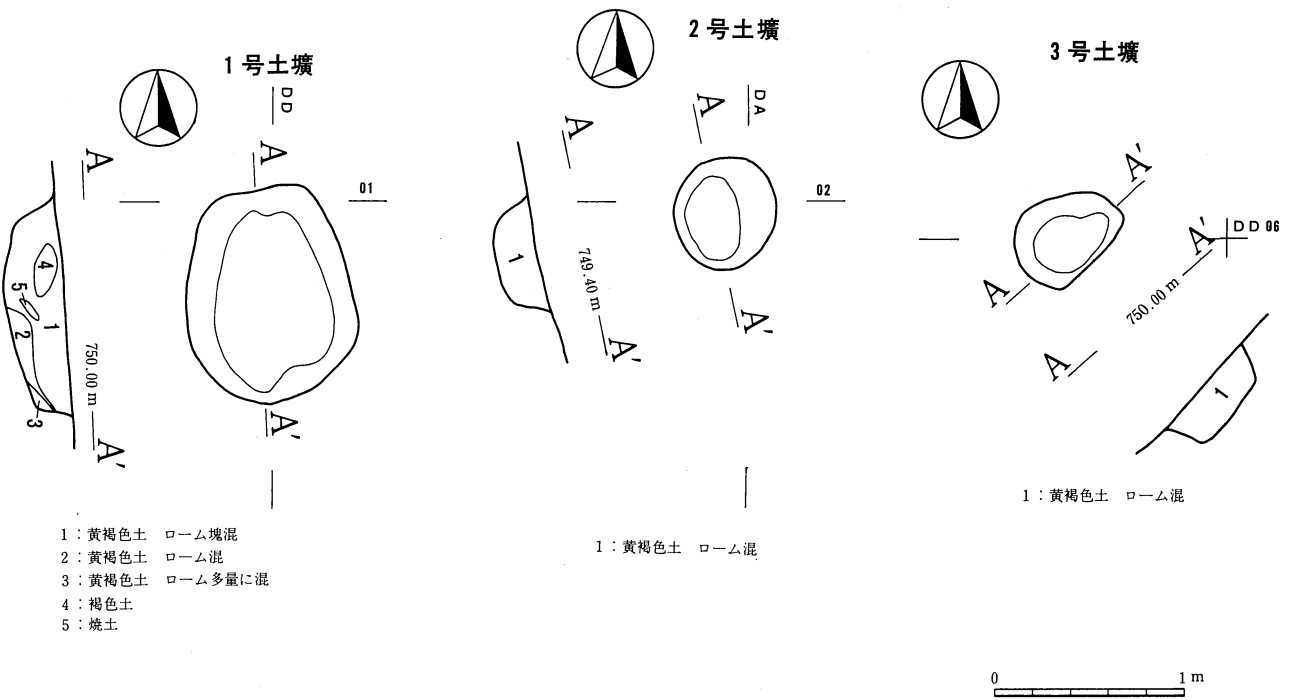
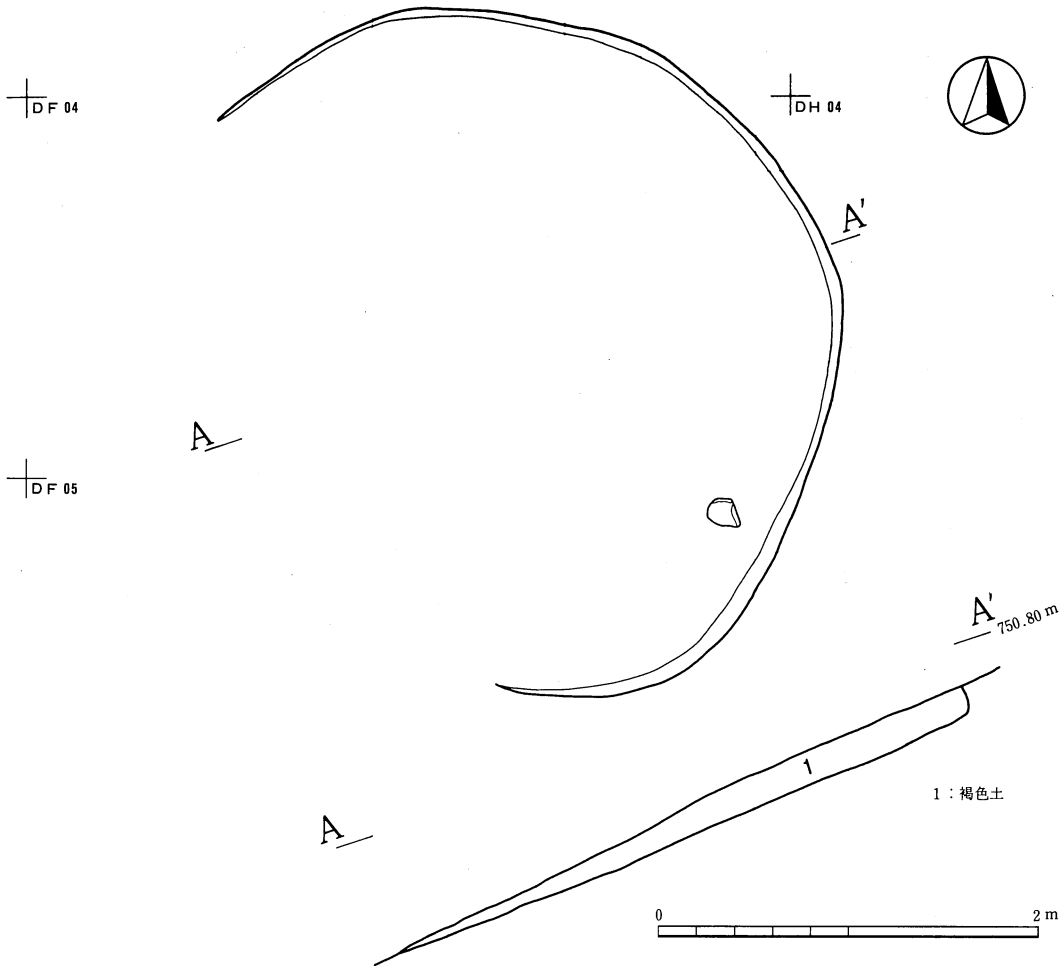


図2 a地区1号住居址(1:40)・1~3号土坑実測図

**検出**：発掘区ほぼ中央に位置する。ローム層を掘り込んでいるため、検出は容易であった。**規模・形状**：傾斜地であるため、南西壁については確認できなかったが、現状では3.8m×3.4mの規模を呈し、円形に近いプランであったことが予想される。**埋土**：褐色土の単層である。**床面・壁**：床面は堅くない。壁は特に西側で20cm程度の立ち上がりを示し、明瞭である。なお、炉や柱穴などの施設は検出されなかった。**遺物の出土状況**：少量が埋土中より散漫に発見された。**遺物**：繊維を含む早期末の土器の小破片がある。他には黒曜石、チャートのフレイク、チップ類が少量ある。**時期**：縄文時代早期末。

イ 土 壙 (図2)

発見された土壙は3基で、いずれも住居址の西側に位置する。土壙の規模や形態は表1に示した通りである。出土遺物はなく、時期は決し難いが、住居址等との関係から、早期末と考えることが妥当であろうか。また、用途についても示唆的な資料は得られていない。

番号	規模(長径×短径×深さ)m	平面形	断面形	埋 土	備 考
1	1.1×0.9×0.3	楕円形	擂鉢形	5分層焼土混	遺物なし
2	0.6×0.6×0.2	円形	擂鉢形	単層	遺物なし
3	0.6×0.4×0.2	楕円形	タライ形	単層	遺物なし

表1 a地区土壙一覧表

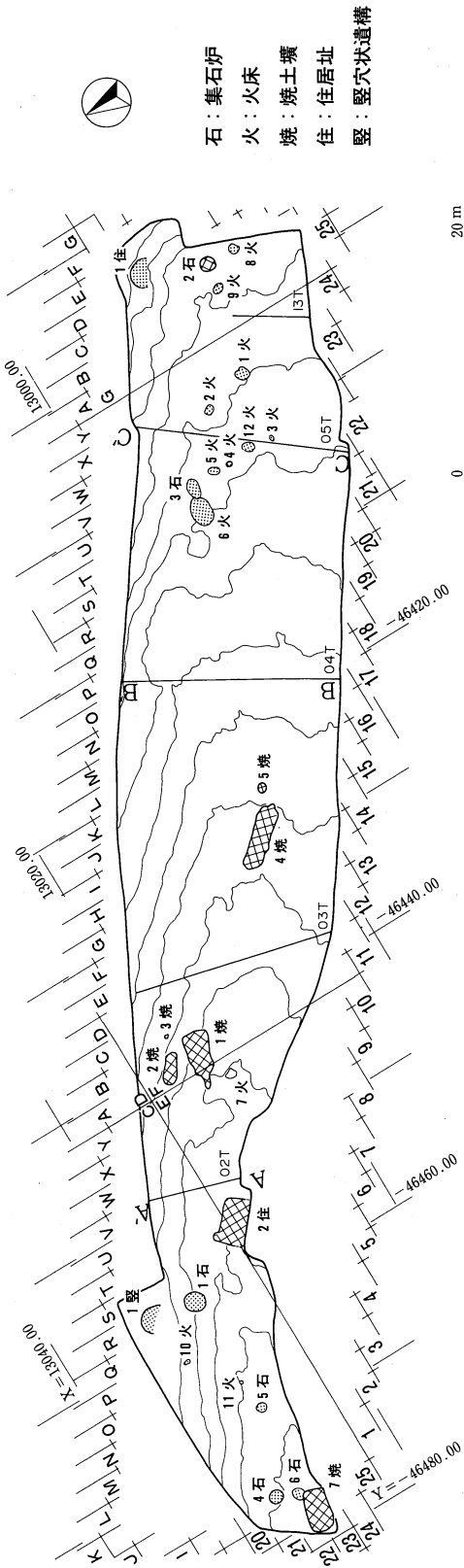
b地区

(1) 層序と地形形成 (図3、PL40)

谷部に位置する本地区は、底を流れる小さな沢によって左岸部、右岸部に分かれる。それぞれにトレンチを入れた結果、左岸部の層序は竜神遺跡のある南側の台地からその急峻な斜面を崩落したと思われる堆積状況がみられ、遺構はなく、遺物も微量でかつ摩耗をうけた小さな破片ばかりであり、トレンチ調査をもって左岸部の調査を終了した。右岸部は、部分的な堆積にとどまる層も含めて大きく8枚の層序が認められた。基盤層であるVIII層から順次堆積状況を見て、そこから地形形成の過程について触れてゆきたい。VIII層は右岸、左岸共に谷に並行する擂鉢状の窪みがみられ、特に右岸の方が幅広く深い。本層の上面には大小の礫が露出しており、かつては流路であったことが容易に想定される。その川跡にVII層が堆積した。VII層は粘土質であることから、この時期は川の跡にできた湿地帯であったと想定される。遺物量も非常に少ない。VI層、V層は特に窪みの深かった04トレンチ付近に堆積した部分的な層である。IV層の堆積時にはまだ河川の窪みは若干残っていたが、水の影響はほとんどなくなったといえる。遺物の量も多くなる。III層の時期になると平坦面が広く形成され、縄文時代の遺構が構築されて遺物の出土が最も多くなる。やがてII層が縄文時代の面を覆うと、そこに平安時代の遺構が造られるようになったと考えられる。

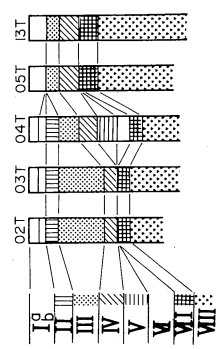
以上の基本層序を整理すると次の通りになる。

- I層：a－耕作土。b－黄褐色を呈する旧耕土。
- II層：やや黒味が強く、粒子の細かい黒褐色土。
- III層：1cm大の小角礫を含む黒褐色土。
- IV層：小角礫を含む黒褐色土。
- V層：粒子が細かく、しまりも強い暗褐色土。小礫を含む。
- VI層：粘性がやや強い明黒褐色土。
- VII層：粘性に富んだ黒色土。拳大の礫を若干含む。
- VIII層：基盤層で、大小の礫を多量に含む。ローム質で黄褐色を呈する。

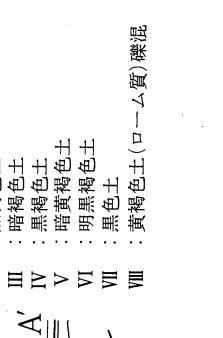


石：集石炉  
 火：火床  
 焼：焼土壟  
 住：住居址  
 竪：竪穴状遺構

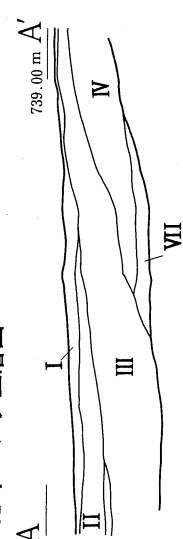
竜神平(B) 右岸地区



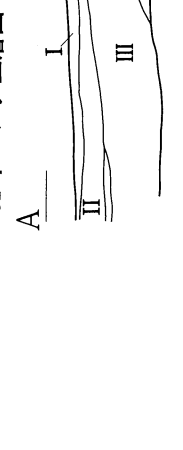
竜神平(B) 左岸地区



02 トレンチ土層図



04 トレンチ土層図



05 トレンチ土層図



I a : 耕作土  
 II : 黒褐色土  
 III : 暗褐色土  
 IV : 黒褐色土  
 V : 暗黄褐色土  
 VI : 明黒褐色土  
 VII : 黒色土  
 VIII : 黄褐色土(ローム質)礫混

図3 b地区遺構分布図(上)(1:600)・土層図(下)(1:120)

(2) 遺構と遺物の概観 (図3)

本地区が生活の適地として選地された時代は、大きくは縄文時代と平安時代といえることができる。

縄文時代に関しては、住居址1軒、小竪穴状遺構1基、集石炉6基、火床12箇所が存在した。それらの分布は発掘区の東西両極に分かれ、その中間は空白地帯となっていた。遺物も多い。早期押型文土器、沈線文系土器をはじめ、早期末貝殻条痕文系、前期諸磯C式、前期末晴ヶ峰式、中期初頭梨久保式、中葉猪沢式、新道式、藤内式の各時期があり、これらは量的にも豊富に得られた。後期になるとその数は極端に減少し、堀之内II式土器がわずかに出土しているにすぎない。石器もそれらの時期に対応するのであろう。石鏃、打製石斧、凹石、磨石等が発見されている。

平安時代生活址はごく小規模なもので、住居址1軒と焼土壇6基が遺構のすべてである。なお該期の遺物は遺構外からはほとんど発見されていない。

(3) 縄文時代の遺構と遺物

ア 住居址

① 1号住居址 (図4)

**検出：**発掘区東端にあたるGD18~20を中心に位置し、III層中に検出される。東から西に傾斜する斜面に構築されたためか、その南西側に床面や壁については確認できなかった。**規模・形状：**平面プランやその規模については断定できないが、現存で推定される長軸方向はN25°Wでその長さは約4.3mとなる楕円形かと思われる。**埋土：**小礫、炭化粒子を含む黄褐色土の単層である。**床面・壁：**南西側については床、壁とも検出されていない。残存部においても壁の立ち上がりは15cm前後と低く、床面もさほど堅い状況ではなかった。**炉：**検出されていない。**柱穴：**柱穴と思われるピットが2箇所いずれも径約20cm弱、深さ30cm~40cmでほぼ垂直に掘られている。**遺物の出土状況：**2の浅鉢が住居のほぼ中央に、あたかも据えられた2個の石の中に置かれたような状態で、床面直上に正位で発見された。他の遺物もこの部分を中心として床面直上から埋土内全般にわたって出土した。**遺物：**土器は1・2のほぼ復元できた個体以外に、多数の破片資料が得られている。2は類例の少ない深鉢で、胴下半を欠失する。口縁部文様帯は横位に二段に分かれる。その上段は楕円形に区画され、内部に三角印刻文をもつ。下段は沈線文、角押引文により重三角形に区画される。地文として縄文をもつ点も見逃せない。2は浅鉢で口縁部を欠失する。外面には横位の粗い整形痕が認められる。3・6・7は楕円区画文と斜行沈線文を特徴とする土器で、4は角状押引文が隆帯の脇を巡っており時期を知る目安となる。9・10・11は灰色の胎土を特徴とし、半截竹管状工具による文様の描かれる平出第III類A系の土器である。8・12・13は鉢あるいは浅鉢と思われる。文様帯は口縁部上端に集中し一列ないしは二列の角押引文により直線状、鋸歯状のモチーフが描かれる。以上の土器の編年的位置付けには苦慮するものも多いが、総じて梨久保式終末から猪沢式にかけての時期と捉えておきたい。

石器は1~3の3点が出土している。1・2は黒曜石製の石鏃、3は横刃型石器である。この他にも黒曜石剥片が多数出土した。**時期：**出土土器より中期初頭末~中葉初期と思われる。

イ 集石炉 (図5~7、PL41)

ここでいう集石炉とは、焼けた石が多数集合しているという状況を重視して一括しているが、これには掘り込みを伴うものと、伴わないものとの二者がある。本地区ではこの集石炉が6基発見され、それらは東端、西端に大きくは2箇所にグルーピングされて分布する。西側に4基(1・4~6号)、東側に2基(2・3号)である。ここではそのグループごとに西側から説明したい。

① 1号集石炉

発掘区西端、CR23を中心にIII層で検出された。直径約1.7m、深さ約50cmの断面播鉢状の土壇を伴う。

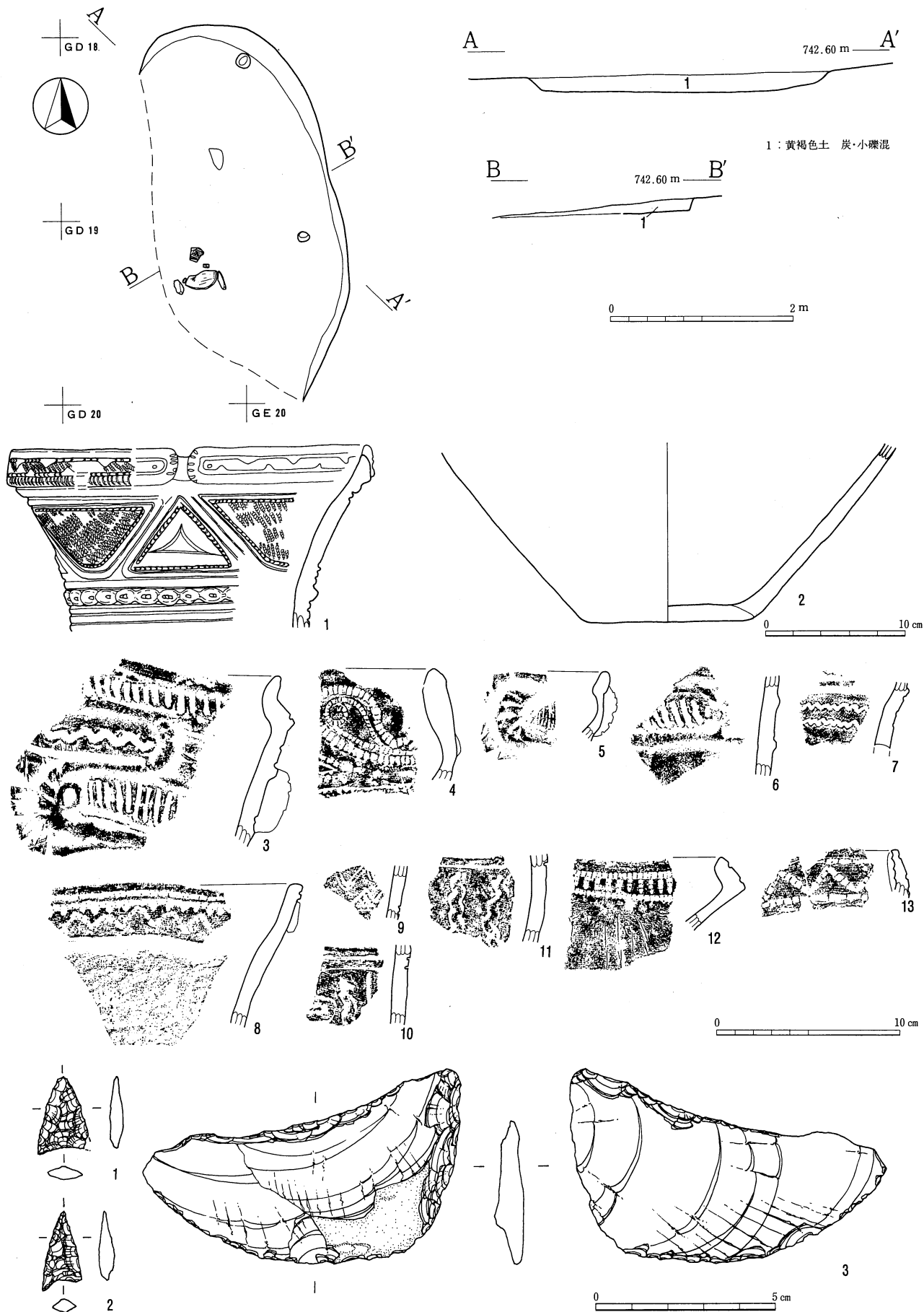
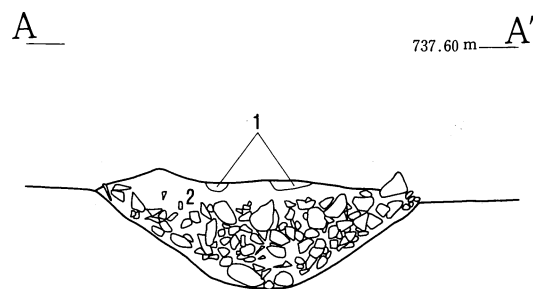
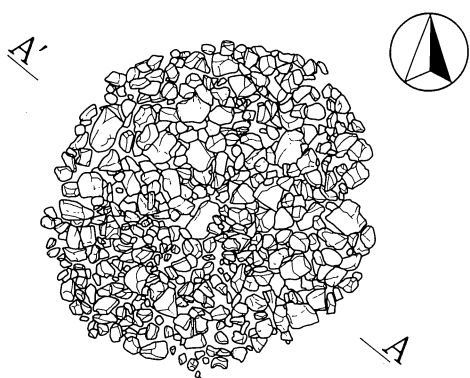
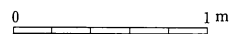
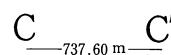
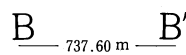
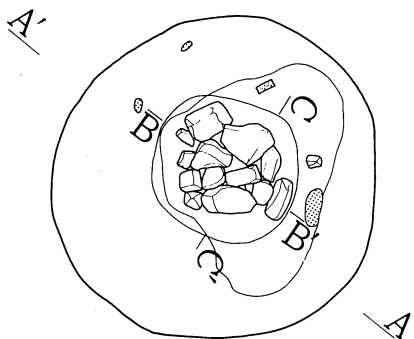


图4 b地区1号住居址实测图·出土遗物实测图·拓影

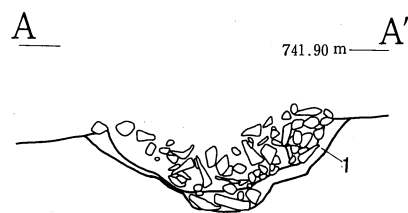
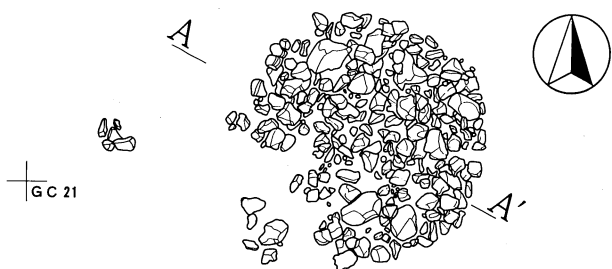
1号集石炉



1: 烧土  
2: 暗黄褐色土 烧土·炭混



2号集石炉



1: 黑色土 炭·烧土混

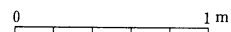
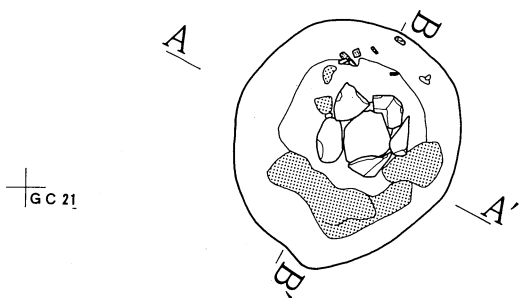


图5 b地区1·2号集石炉实测图

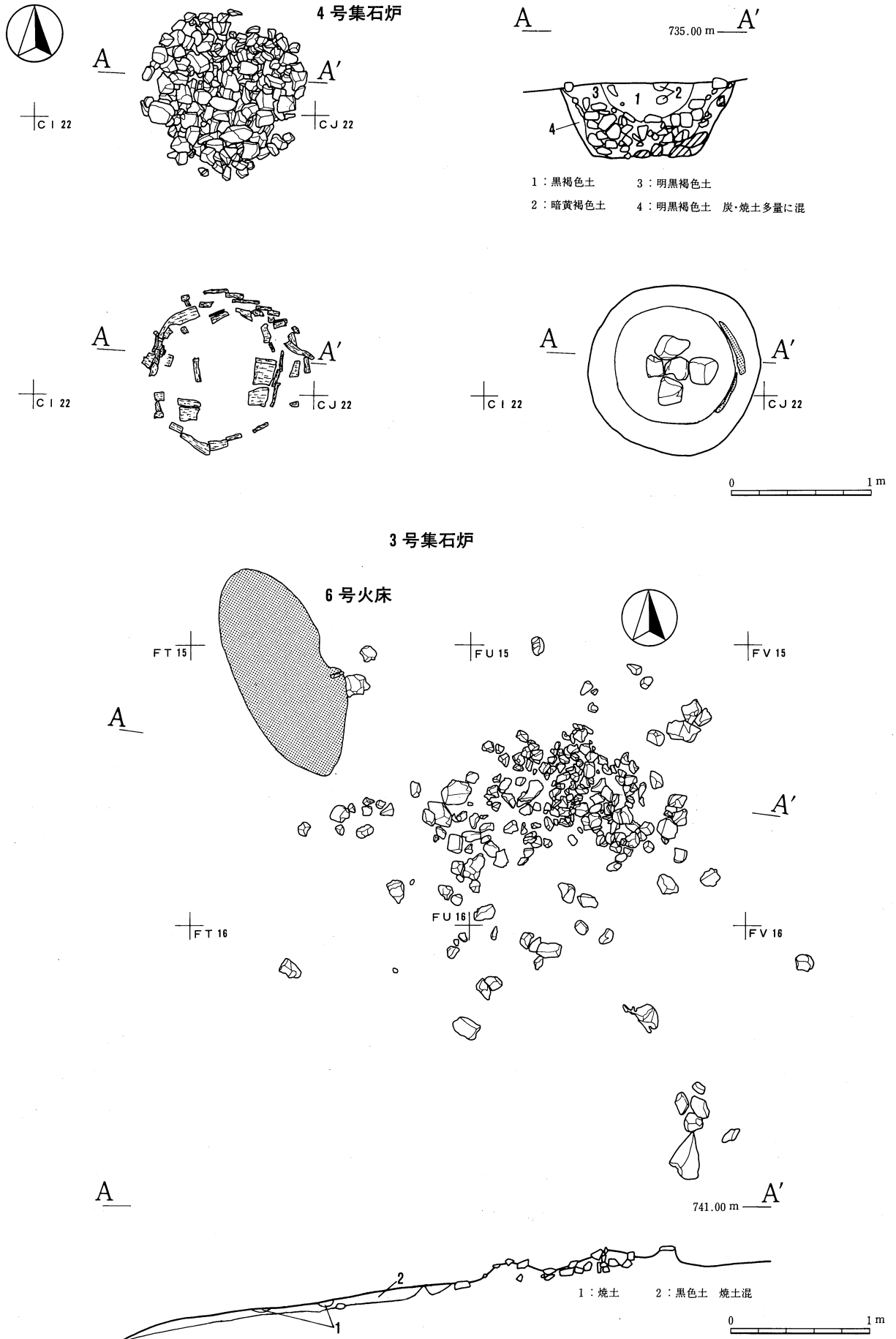


图6 b地区3·4号集石炉实测图



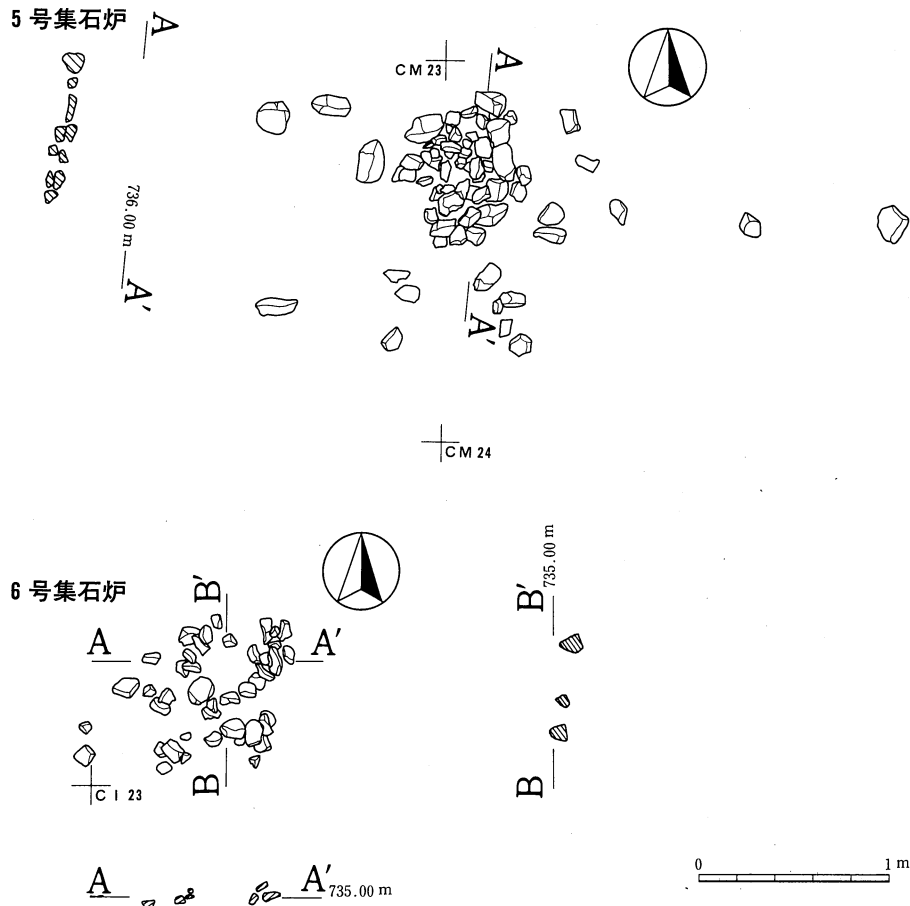


図7 b地区5・6号集石炉実測図

構築に際しては、まずその壙底に幼児頭大から拳大の石が13個敷かれる。その上に拳大からそれ以下の礫が2110個詰められていた。土壌側壁、特に東壁には焼土や木炭の集中が著しく、また礫の大半も割れたり、赤化するなど火熱を受けた様子がうかがえた。礫はギッシリと密に詰まっていたが、その隙間にも炭化粒子を多く含む黒色土が入り込む。集石上面の中央部はわずかに窪んでおり、その上には焼土が堆積していた。このように壁面の状況から、内部東側という特定の方向で集中的に火の焚かれたことと、火焚きの最中か後に石の入れられたらしいことが推測できる状況がみられた。なお、時期を決定できる遺物はなかった。

② 4号集石炉

C I 21・22にかかる位置で、III層中に検出された。直径約1.2mの平面円形プラン、深さ約50cmの断面台形様の土壌をもつ。構築は1号と同様、その壙底に内部の礫より大きめの幼児頭大の石が5個敷かれていた。土壌下位の壁面には木炭がびっしりと巡り、特に東壁においては壁部分が焼土と化していた。このことは、1号同様この部分が火の集中的な使用の行われた焚き口的な場であったことを推測させる。内部には約470個の拳大の礫が詰まっており、それらの礫はほとんどが火熱によって割れたり赤化していた。集石の上面中央は1号同様やや窪んでおり、礫間に詰まった土は多量の木炭、炭化粒子を含んでいた。時期決定のできる遺物は得られていない。

③ 5号集石炉

C L 23～CM 23にかかる位置で、III層中に検出される。前二者と異なり、土壌をもたず、礫が平面的に広がる集石炉である。礫は拳大でほぼ1m四方に同一レベルを保って集中する。約90個の礫の大半は焼けて

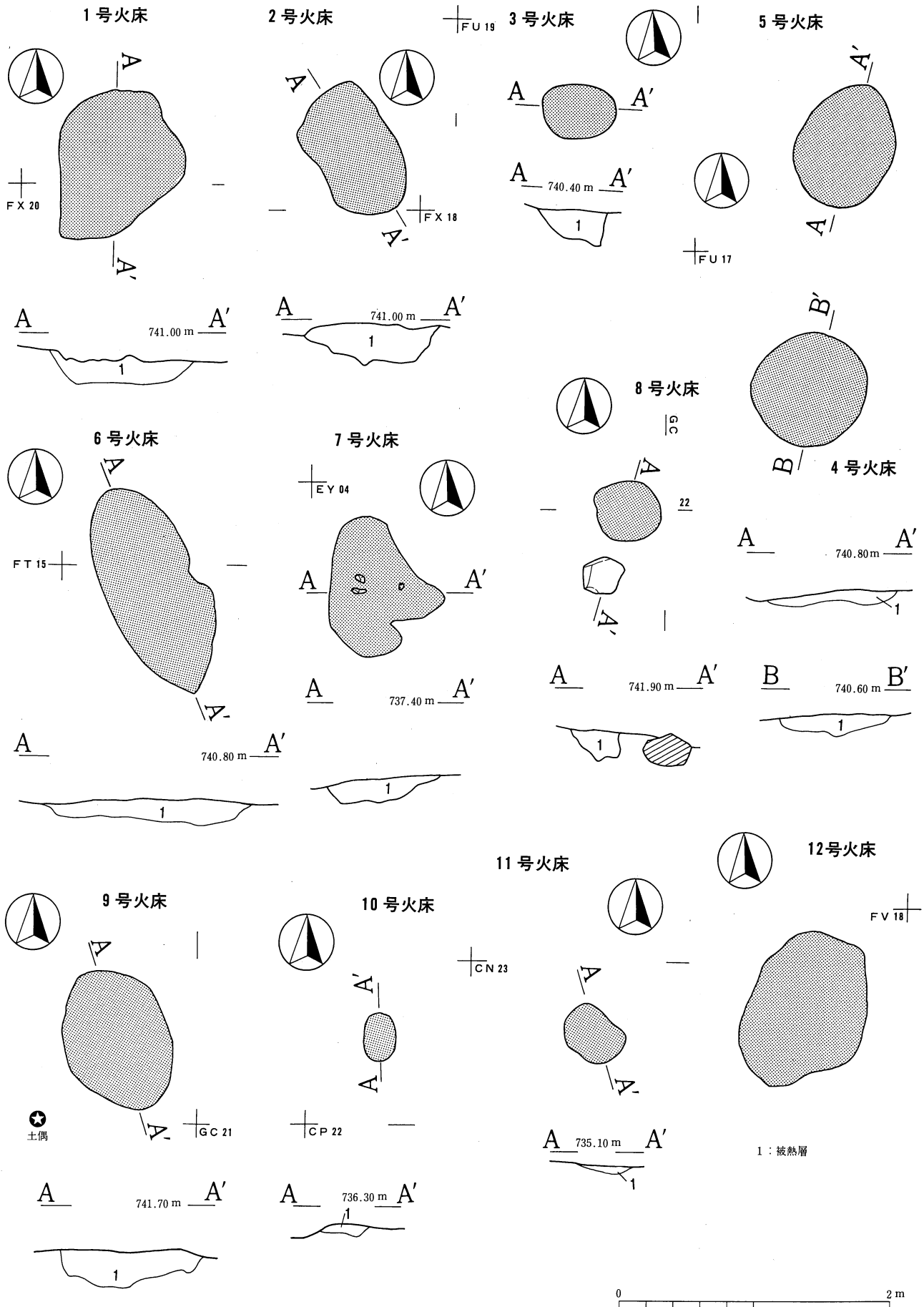


图8 b地区火床实测图

赤化している。この90個という数は土壌をもつ前二者と数の上でも大きな隔たりがあり、また、焼土を伴わない点も前者との相違点として指摘できる。なお、集石内より遺物の出土はない。

④ 6号集石炉

C I 22を中心に存在し、III層中に検出された。5号集石炉と同様土壌をもたず礫が平面的に密集する。礫の大きさは拳大またはそれ以下のものを中心とし1m四方に集まる。ほとんどの礫は焼けて赤化するが、その数は50個と極端に少ない。焼土は伴っておらず、また、遺物の出土はない。

⑤ 2号集石炉

発掘区最西端G C 20を中心に位置し、IV層上面で検出された。本址は直径1.2m～1.3mの平面円形、断面は深さ約50cmの擂鉢状の土壌を伴う。壙底中央は直径約40cm～50cmに一段深く掘り窪められ、この中に幼児頭大の石が6個、敷かれたように配置されていた。その上に拳大の礫が約800個つまめられていたが、断面をみると中心より東側に厚く南西部に薄いことが観察できた。これらの石はほとんどが火熱を受けており、中には取り上げの際にボロボロに崩れてしまうものさえあった。また、壁面全体にわたって礫と壁の間に炭化物や焼土粒子が挟まれており、中には5cm×20cmほどの大きさの木炭も認められた。焼土は特に南壁側で厚くなっている。こうした状況は1・4号集石にも認められたような、より集中的に火熱を受けた箇所、焚き口的な位置が決まっていたのではなかったかという推測をより強くするものである。

⑥ 3号集石炉

F U 15を中心に位置するが、そのすぐ西側に接する6号火床を調査中に検出された。約1.8m四方におよそ370個の礫が平面的に分布するもので、5号、6号同様掘り込みをもたない。礫はいずれも火熱を受けていた。なお、6号火床は本集石炉の西半分ほどまで広がっており、両者はほぼ同時に存在していたのではないかと考えられる。

集石炉は以上の6基である。それらは拳大の焼けた礫が炭化物等と共に集中するという点で共通し、土壌をもつ、もたないという点で2種のありかたを示した。土壌をもつ1・2・4号の構造は、壙底に石を敷くこと、壁と礫の間に多量の炭化物、焼土粒子をもつこと、そして特定の一方が特に強い火熱を受けたであろう痕跡を残しているというところに共通点をもつ。こうした集石炉の相似、あるいは相異なる属性や特徴が、集石炉の機能をそれぞれに反映しているのであろう。詳しくは後の考察にて考えてみたい。

ウ 火床 (図8・9)

火床とは、火を焚いた結果出来た焼土の残された場所をさす。本遺跡の火床は、火を使用した以外にそこに人の手が加えられた様子は認められない。

火床は12箇所あり、いずれもIII層上面ないしIII層中にて検出された。その分布は発掘区の東端と西端とに集中しており、その中間に位置するのは7号火床の1箇所のみである。

ここでは全体の火床の特徴について概括することにした。

火床とはいってもその全体が厚い焼土であるわけではない。火を使用した結果としてできた本格的な焼土は、火床とした範囲の中ではそれほど広くも厚くもない。焼土が広がり、すなわち火熱のおよんだと思われる範囲を火床として捉えた。こうした現象は、限られた場所で集中的な火の使用のあったことを想定させる。火床の規模は必ずしも一定しているわけではないが、大きな違いはない。最も大きな6号火床で長軸1.6m、小さい10号火床は40cmで、平均すると1m前後ということになる。付近には遺物も多いが、本遺構の性格上直接的な関係のあると思われる遺物を求めることは困難である。9号火床のすぐ南西には土偶が出土しており参考までに地点を示した(図8)が、それが火床と深く関わっているという根拠はない。この火床で何がどのように焼かれたのか、推測の手がかりとなる資料も少ないが、ただ前述した3号集石炉との関係、つまり集石と同時に存在していたらしい所見の得られたことは注目される。またこの3号集石

炉に限らず、集石炉と火床とは同一の分布を示し、かつ比較的近接しており、両者の相関性が想定されるところである。またその形成された時代については、前述の通り直接的な遺物がないため判然としないが、おおまかには土器の分布がそれを知る1つの目安になろう。それによると前期から中期にわたっており、一時的にできたものではなく、時間によって場所を移して造られたのではないだろうかと考えられる。詳しくは、次項で土器の細かな分布をみた上で改めて触れたい。

このように、火床の存在は集石炉と共に、本遺跡の性格を考える上で極めて重要な遺構であると考えられるが、ここでは火床の形態と観察点について触れるにとどめ、その用途や性格については、竜神平b地区全体の性格や意義を考える中で、それを構成する1つの要素として再度考察したい。

エ 竪穴状遺構 (図10)

発掘区西端、かつては道路であったCR21を中心に所在する。明瞭な掘り込みがあるが、規模が小さく、炉や柱穴のないことから、竪穴状遺構とした。南西斜面に造られているためであろうが、南から西にかけての壁や床の一部は確認されなかった。

平面規模は現存部で長軸約2.5mを測り、北側壁高は約10cmである。床面は一部破線内は堅いが、他の部分は軟らかい。床面には建築材と思われる比較的大形の炭化物があり、付近には焼土が散在する。埋土中にもやはり焼土粒子や炭化物が多く認められた。

出土遺物はほとんどなかったが、縄文時代前期の土器破片が少量出土しており、本遺構も該期の所産と考えておきたい。

オ 遺構外出土土器 (図11~15, PL 42~49)

出土状況

縄文式土器は早期から後期という長期にわたり、その量も決して少なくない。しかし、各期の土器が必ずしも場所を一にして出土しているわけではない。時期によってその占める位置が多少異なっている状況が観察されるのである。各時期ごとの分布状況以下のとおりである。

早期土器：発掘区西端に集中することが明らかである。中央部や東側では、散在的といえる。押型文期と、田戸下層並行期から早期末にかけての土器であるが、細かな時間差による分布に明瞭な差異を示さない。

前期土器：前期はほぼ二時期に限られる。諸磯c式と晴ヶ峰式である。この両者の分布域は明瞭に異なる。諸磯c式は早期と同じく発掘区西端に集中する。同じ西端でも早期土器より若干東側にその範囲を移していることに注目しておきたい。晴ヶ峰式土器は逆に東端に分布を濃くしていることが明らかである。

中期初頭土器：発掘区東端に集中し、晴ヶ峰式土器の分布と重なる。西端および中央部にほぼ一個体分の土器が点在していることが相違点として観察される。

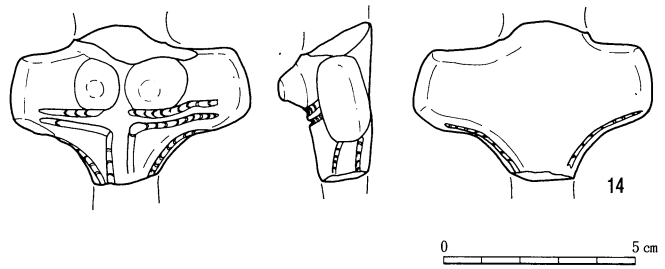


図9 b地区9号火床付近出土遺物実測図 (1:2)

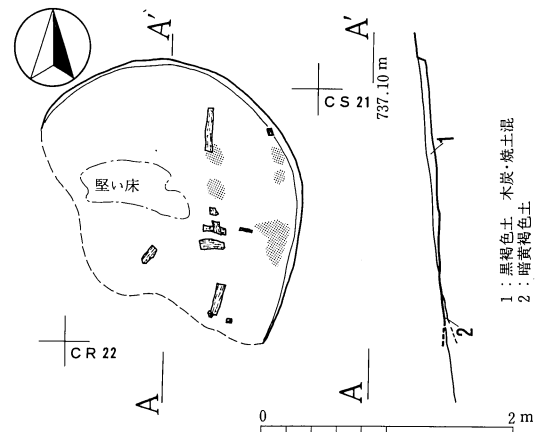


図10 b地区1号竪穴状遺構実測図

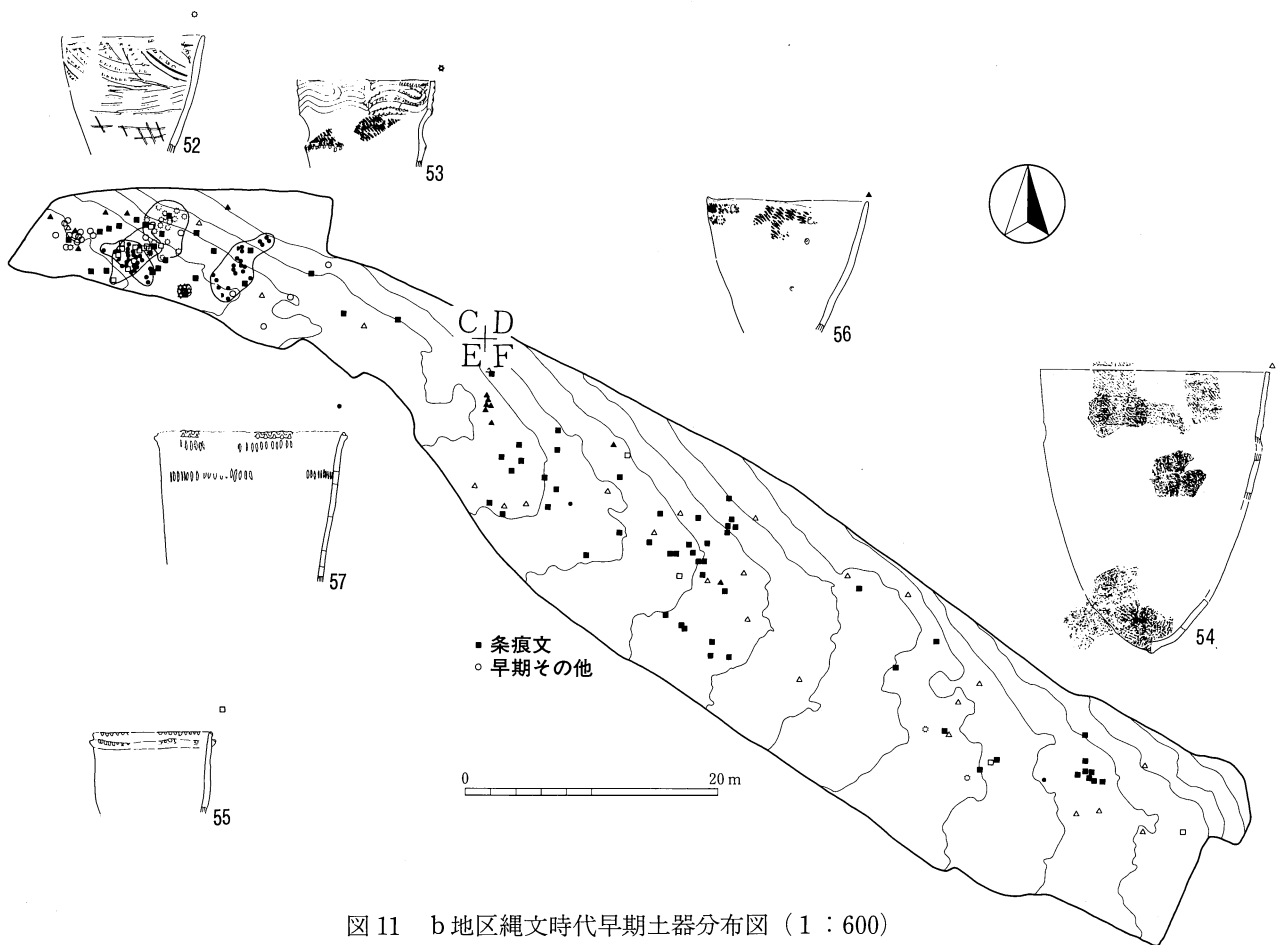


図11 b地区縄文時代早期土器分布図(1:600)

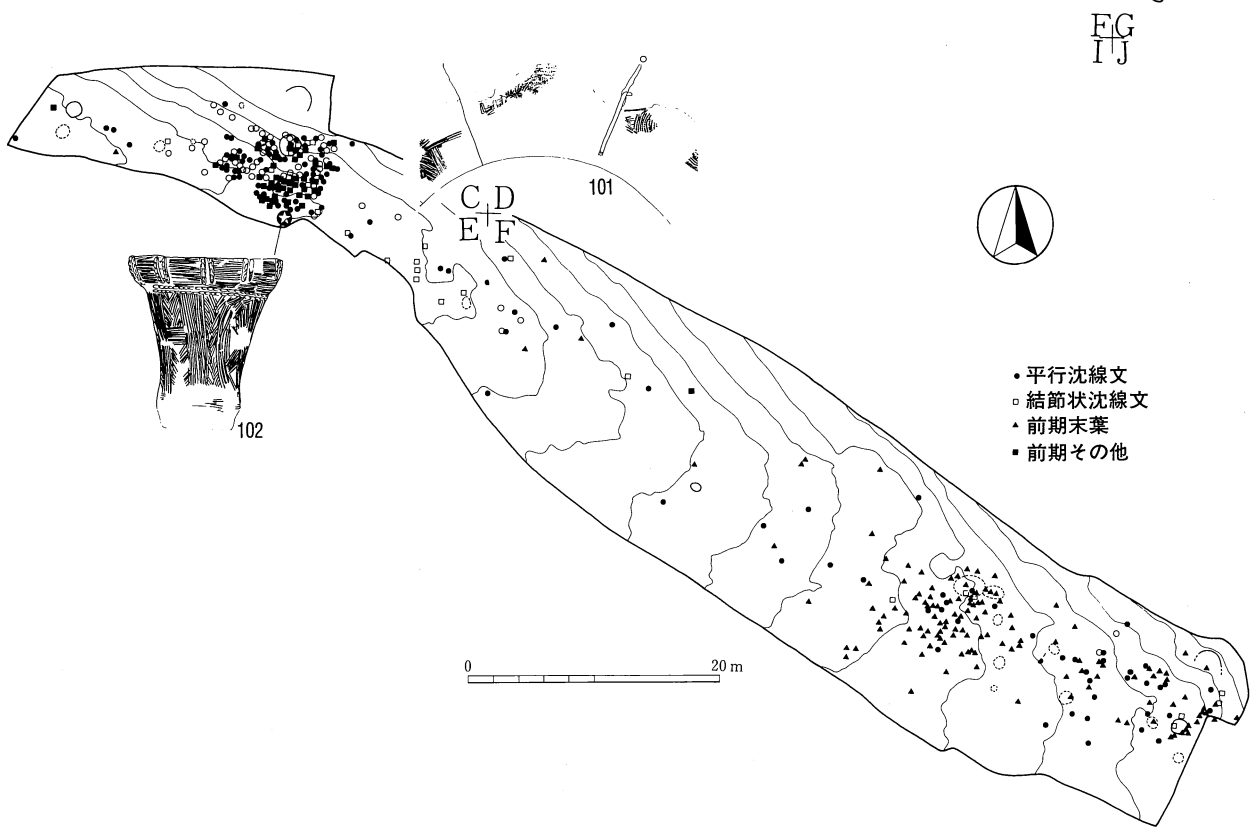


図12 b地区縄文時代前期土器分布図(1:600)

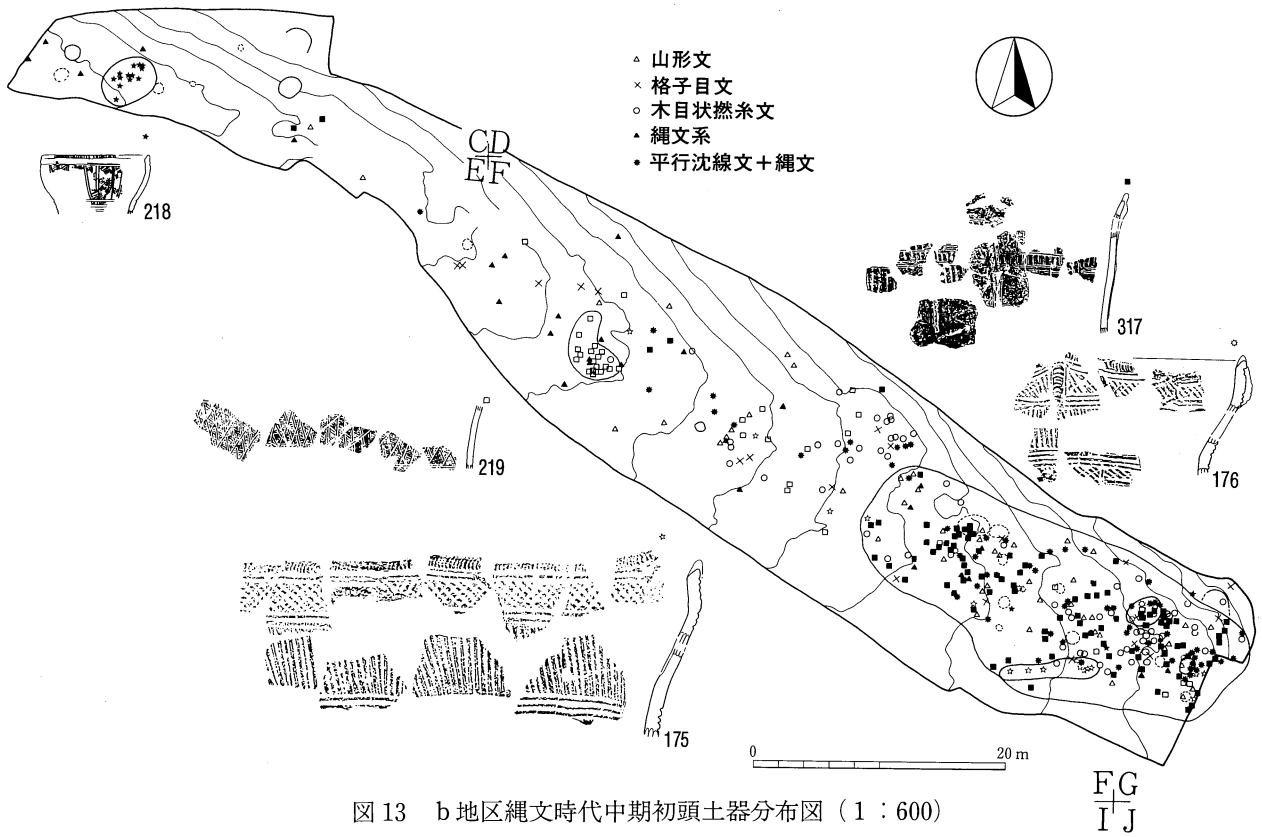


図 13 b 地区縄文時代中期初頭土器分布図 (1 : 600)

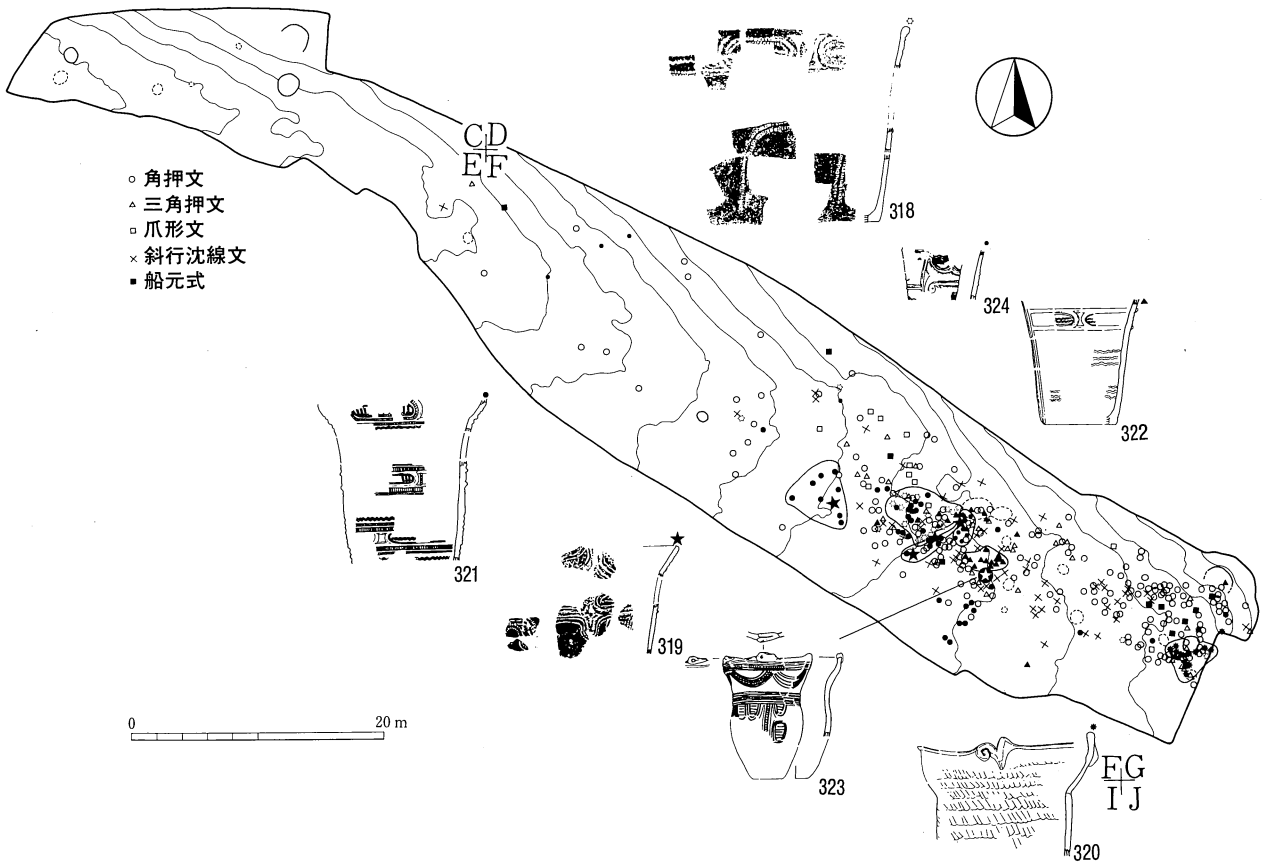


図 14 b 地区縄文時代中期中葉土器分布図 (1 : 600)

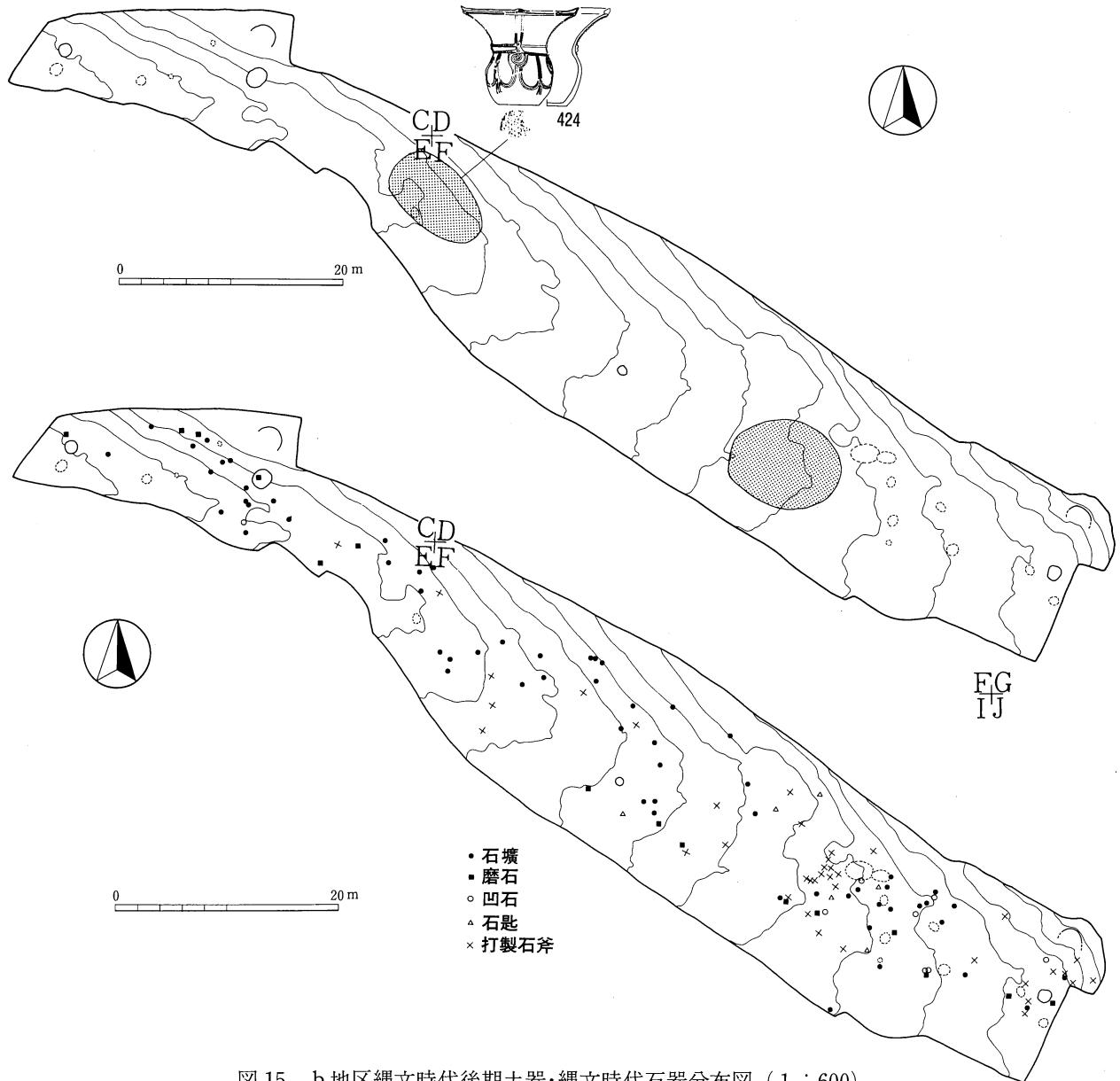


図15 b地区縄文時代後期土器・縄文時代石器分布図（1：600）

中期中葉土器：基本的には中期初頭土器の分布と同じといえようが、細かくみると、その中心が幾分東から西に移っている様である。なお、この時期の土器は西側および中央部には分布しない。

後期土器：2個体分の土器が中央部の東西2箇所にとまって出土した。それ以外の資料は皆無に等しい。

**土器の分類**

以上のように、時代により土器の分布の異なっていることが観察できた。このような分布とその違いは遺構の分布と深いかかわりをもっていることが予測される。その関係については後述することにし、次にこれら遺構外から出土した土器について触れてゆきたい。

① 早期押型文土器（図16）

胎土、文様構成の違いから細分が可能である。

第1類 立野式土器（15～25）

器壁が6mm～10mmと厚く、胎土には多量の石英、長石の他に粒子の細かい雲母、輝石、白い軽石が混入

される。文様は、格子目文(24・25は格子目が他より大きく深い)、楕円文があり、市松文は1点もない。文様の形状は1粒が菱形を呈する格子目文がほとんどで、正方形のものはない。24・25はやはり粒が大きく、断面は船底形にはならず、口状になる。口唇部はやや平になる17を除きいずれも面取りせず、とがり気味になる。16はやや内側に削がれている。

16～19は施文された後にナデられており、施文方向は明確ではないが文様の形状から縦位密接施文と思われる。15・20・21も縦位施文である。22は重複の判別はできないが、文様の形状から縦位密接施文であろう。23は拓影の両端に縦に重複している部分がみられ、縦位密接施文である。原体長は23mm前後、太さは文様の反復がとらえられないので不明であるが、条数はおそらく5条であろう。24は拓影の中央で横に重複しており、横位密接施文、25は文様の形状から縦位施文であろう。

### 第2類 樋沢式土器 (26～35)

器壁はやや肥大している口縁部分を除くと4mm～5mmと第1類よりも薄い。胎土には石英、長石、輝石、赤色スコリア、白い軽石が小粒子で混入されるが、29・33～35はやや大粒の長石と雲母が混入され他と異なる。また32のみ白い軽石が多い。胎土と施文に使われる原体等から27・28、29・33～35の2例が同一個体と考えられる。26は7条2単位、長さ23mm、太さ6mmの原体を口縁部に横位に带状施文している。さらに、口唇部にも回転施文される。27・28は6条2単位、長さ18mm、太さ5mmの原体を、26と同様に口縁部と口唇部に施文する。口唇部はやや肥大し、厚みをもつ。29は3条2単位、長さ17mm、太さ4.7mmの原体を使用し、26～28と同様な施文となる。また29は輪積み痕と口唇部に厚さをもたせるためか、両側から粘土を貼り付ける。29・33～35が同一個体の可能性が高く、そうであれば施文構成は口縁部～頸部にかけて2条横位帯条、以下縦位密接施文となる。さらに、30～32は横位带状施文である。

### 第3類 細久保式土器 (36・37・41・44～46)

器壁は2類よりもやや厚く7mm前後で、胎土には輝石、長石、赤色スコリア、白い軽石を含むが、特に白い軽石が多い。37・45のみ小粒子で雲母を含む。36・41・44は横位施文、37は縦位密接施文、45は底部近くの破片で、拓影の下は施文されず、横位に施文される。46は拓影の上部の割れている部分が、積み上げ時の擬口縁である。縦位密接構成と思われる。

### その他 (38～40・42・43)

器壁は7mm～8mmと厚く、胎土には多量の白い軽石を含むことが特徴である。これらは同一個体と思われる、口縁部に横1条带状施文し、以下縦位密接施文されるが、器面の摩耗がひどく、重複等の関係については観察できなかった。施文構成は普門寺式に似るが、器壁の厚さと混入物等から細久保式的である。以上から、この土器の位置付けは保留にし、今後の分析を進めながら明確にしたい。

### ② 撚糸文土器 (図16)

出土量は少なく図示できるものは5点にとどまる(47～51)。いずれも胎土に繊維を含まず、薄くて堅い土器である。

### ③ 早期前半の土器 (図17)

52の1個体のみである。口縁下に2条の沈線をめぐらし、以下同様な沈線を斜位、横位、斜位と多段に施文する。口縁上部の斜行沈線間には竹管状工具による斜め下方からの連続する刺突文を加える。沈線には禾本科植物の茎と思われる柔らかい工具を用い、刺突文も同一の工具の端部を使用しているように見える。くすんだ褐色を呈し、胎土には粗砂とともに繊維を若干含む。器面調整は比較的丁寧で口唇部は磨いている。口径推定23cm、現存高19cm程をはかる。田戸上層式に比定されよう。

### ④ 早期後半～末葉の土器 (図17～19)

53はなぞり手法を特徴とする。施文は禾本科植物の茎をつぶしたような平らな工具による弧状、波状の



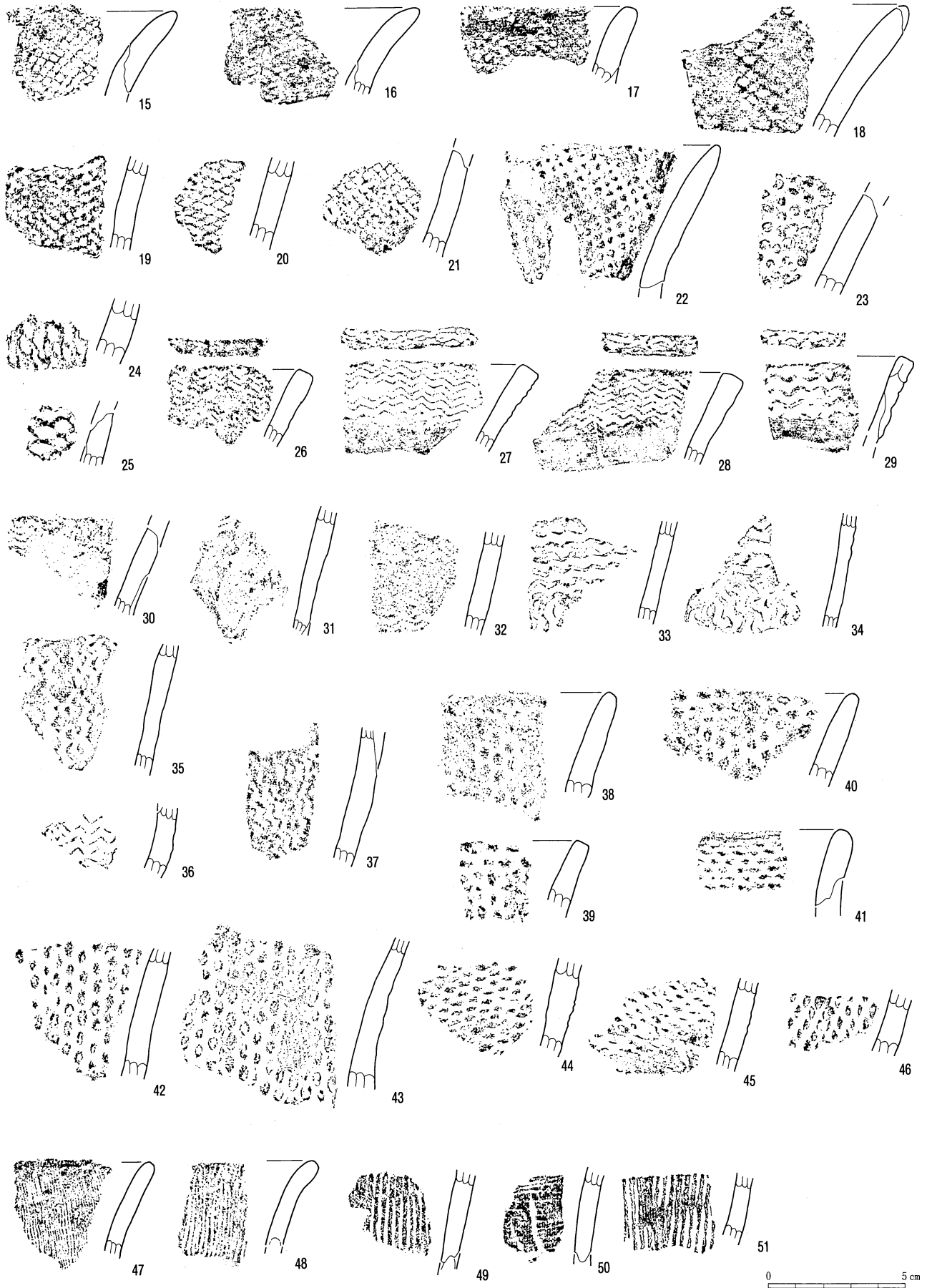


图 16 b地区遺構外出土縄文時代早期前半土器拓影 (1:2)

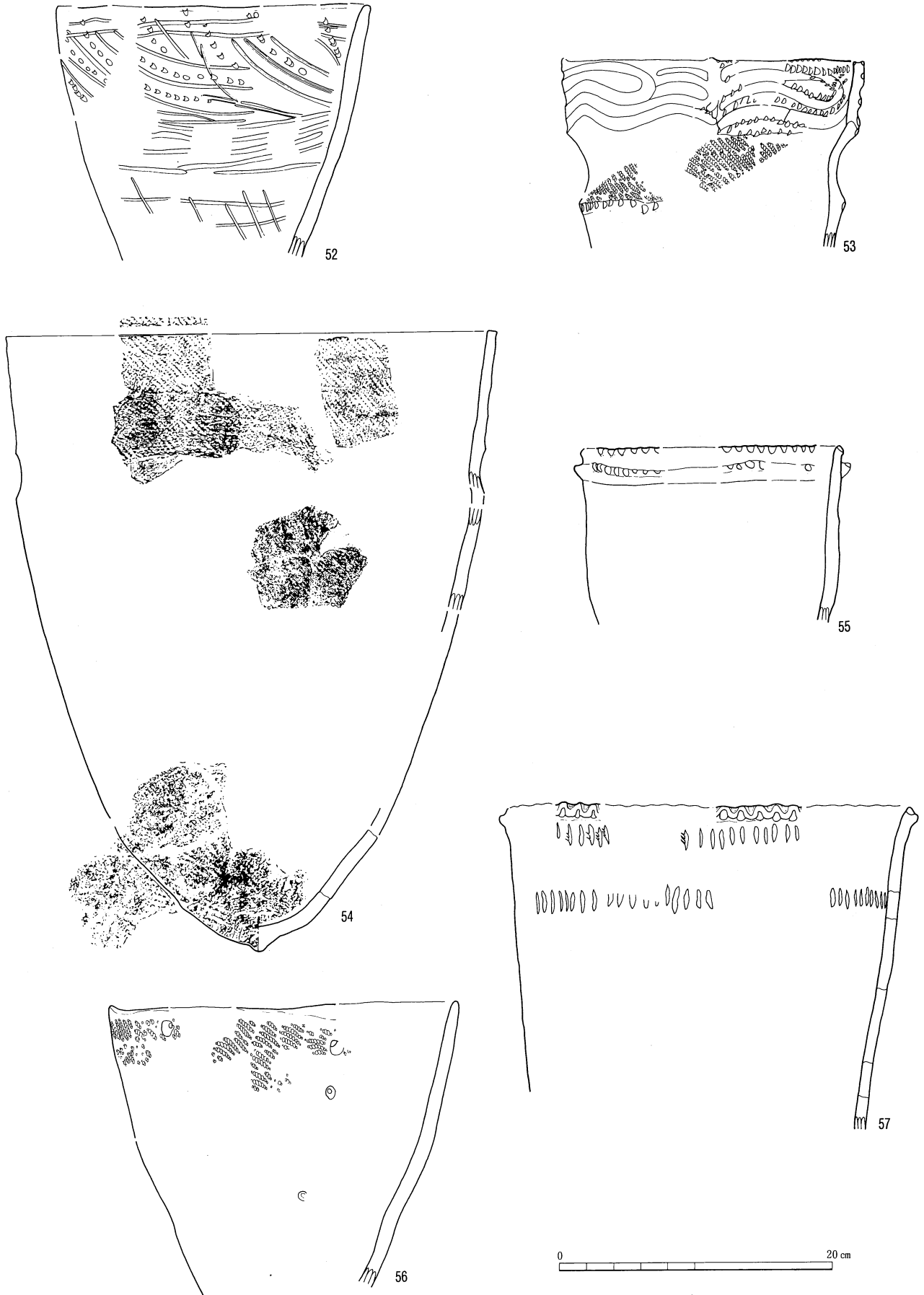


図17 b地区遺構外出土縄文時代早期土器実測図1

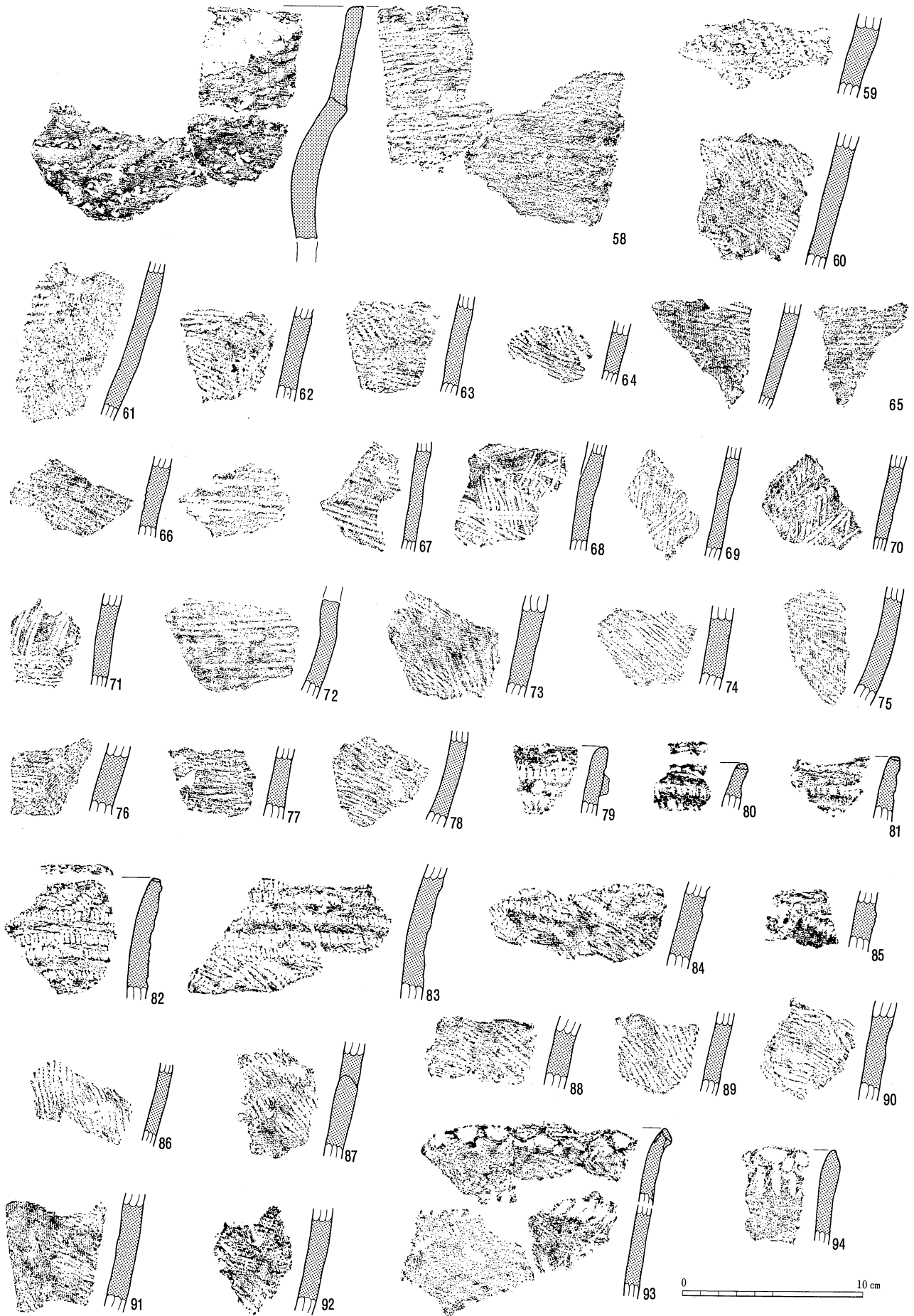


図18 b地区遺構外出土縄文時代早期土器拓影2

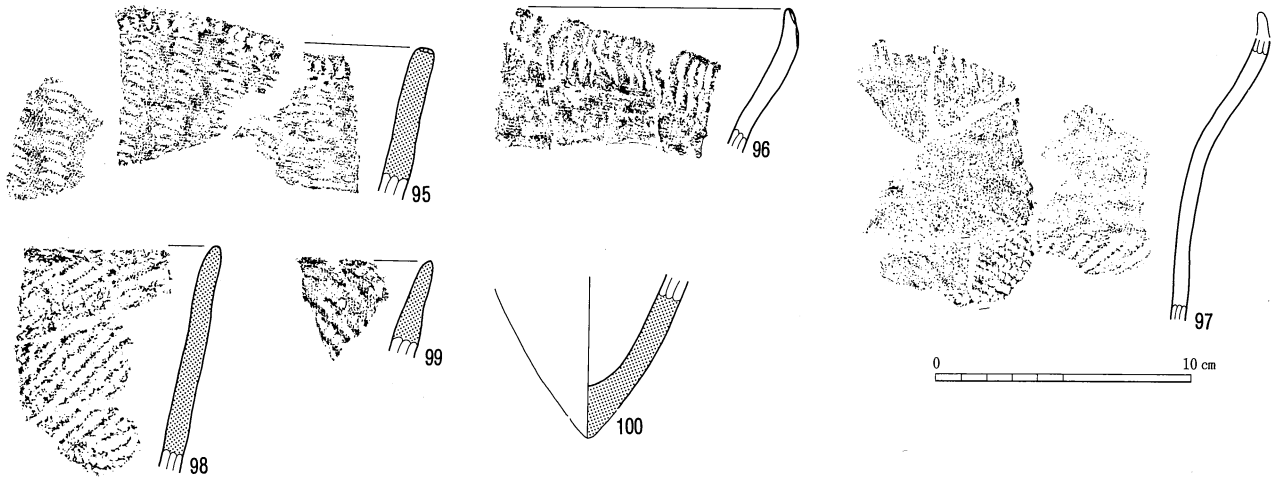


図19 b地区遺構外出土縄文時代早期土器実測図・拓影3

「なぞり」を施した後、そのなぞりの間に連続刺突文を加える。刺突文は「つぶしてない植物茎」であろう。口縁部文様帯下部に段を有し、以下丸くくびれる頸部を経て再び「く」の字状に屈折し胴部に至る。曲線的にくびれる頸部にはRL縄文が施され、胴部との境の屈折部には刺突文がめぐる。以下胴部はナデ調整により不明瞭となった横位の条痕をかすかに留めるのみとなる。内面も屈折部を境として上部は丁寧なナデ調整、下部はナデ調整により横位の条痕を磨消する。胎土には繊維のほか砂粒を含む。この土器はなぞり手法をもつ点で八窪遺跡(本報告書所収)出土の早期末葉第4類土器に近いものの、なぞりの間が広く頂稜部を形成しない点や、口縁部を4単位に分割するような縦位沈線文をもちモチーフが連続しない点、さらに、刺突文が同第4類土器の特徴の一つとされた米粒状ではなく、半截竹管による大きなものであることなどの文様モチーフの相違および器形的な特徴から、若干それに先行する要素を備えているといえる。ここでは先の八窪遺跡早期末葉第4類土器と、同第3類土器との中間に位置するものととらえておきたい。58も同時期の所産であろう。

54は器面全体に縄文が施される深鉢形土器で、口縁下に小さなくびれをもつ。現存部が小さく明確ではないが、くびれ部は無文帯として残されるようである。縄文施文は口唇面および乳頭状を呈す尖底部付近まで及び縄文原体はRLである。胴部の多くを欠き、形状は推定の域を出ないものの、くびれ部よりゆるやかにすばまって尖底部へ移行する。推定口径35cm余り、同器高45cm程を測る。器壁は8mm~10mm、胎土にやや多くの繊維のほか白色、褐色の鉱物粒子を多く含む。内面は丁寧にナデ調整が行われる。56も縄文施文の土器。「つぶし」状をなす丁寧な調整が加えられた器面の口縁下に、原体RLの縄文を帯状に施す。現存4個の補修孔が見られる。外面茶褐色、内面くすんだ灰褐色~暗褐色を呈し、胎土に多量の繊維および粗砂、石英粗粒子、雲母などを含む。内面の器壁は繊維が露出して虫食い状をなし、粗砂、石英粗砂など混和物が突出して凹凸が著しく、荒れている。焼成は良好とはいえない。54は茅山下層式~同上層式に、56は茅山上層式に比定されよう。55は口縁下に1条の隆帯がめぐるもの。隆帯上およびやや外反ぎみに開く口唇部には棒状の工具による押圧が加えられる。器面にはナデ調整が加えられているものの、全体に粗く整形も雑といえる。胎土中に若干量の繊維が含まれる。口径18.5cmを測り、胴下半を失う。口縁下に巡る隆帯文の特徴は早期末葉、上の山式土器のそれとよく類似し、同土器に並行する時間的位置づけが考えられる。57は口縁上部がやや外反ぎみに開くほかは底部にむかって緩やかに収束する器形をなし、口縁下から胴部にかけて2条の爪形文が施される。爪形文は刺突内部がギザギザしており、貝殻腹縁を工具としていると思われる。口唇部は外削ぎ状をなし、棒状のもので交互押圧される。結果として波状の隆起線が口縁端部をめぐるようにみえる。器面は横位~斜位のナデ調整が行われ、内外面に調整時の擦痕が観

察される。くすんだ黄褐色ないし暗灰褐色を呈し、胎土中にはやや少なめの繊維と粗砂を含む。口唇部の形状から、55と同じく早期末葉上の山式土器の段階に位置づけられると考えられるものの断定はしがたい。

59は縄文が施された胴部破片。60～64は条痕を地文として縄文が施される。65～78は器面に条痕のみのあるもので、65・66は内外面に条痕が認められる。67～71はいわゆる文様条痕をなす。これらは53・54・56の土器に伴う時期の所産と考えられるが、文様条痕風の67～71は茅山上層式に比定できよう。79～85は絡条体圧痕文土器で、79には口縁下に隆帯をめぐらせる。82～85は同一個体。82は口縁部破片で、口縁部下に斜位の絡条体圧痕文を連続させ、以下胴部にかけては数段横位に巡らせたのち「ハ」の字状、鋸歯状に施文される。鋸歯状をなす部位より下方は絡条体による条痕が明確に認められる。くすんだ褐色を呈し、胎土に繊維および白色、褐色の粗い鉱物粒子を多く含む。八窪遺跡(前出)出土の早期末葉第6群土器A種に比定されるものの、文様構成はより趣向を凝らしている。86・87は撚糸文、88～92は絡条体条痕文で、それぞれ胎土中に繊維、白色砂粒を多く含み、79～85に伴う胴部破片とみられる。93・94は端部に押圧が加えられて口縁が小さな波状を呈し、こうしたつくりは55・57に共通する要素である。93の内面口縁下には指頭による「おさえ」が加えられる。93は二連の工具ないし貝殻腹縁、94は貝殻腹縁による刺突文がそれぞれ口縁下に波状・横位にめぐらされる。94は57に酷似する。93・94共に55・57と共伴する土器であろう。95は横位の爪形文を縦に連ねており、波状をなす口唇部にはキザミが加えられる。胎土中に含まれる繊維は概して少なく、つくりも比較的丁寧である。96・97は同一個体で、波状を呈する口縁に沿って2条の爪形文をめぐらし、無文帯を挟んで以下縄文を施文する。胎土中には粗砂が多く混入されるが、繊維は含まれない。器壁は6mm程と薄手である。98・99は縄文が施され、ともに微量の繊維が混入される。100は無文の尖底部。95～100については時期的位置付けを明確にはしえないが、96・97はこれらの土器の中でもより後出的な要素をもつものとして注目しておきたい。

#### ⑤ 前期中葉の土器 (図20・21)

概ね諸磯c式に対比でき、地文が集合沈線文による場合がほとんどであり、その上に施されるモチーフにより大きく3分類できる。結節状沈線文、結節状浮線文、ボタン状貼付文をもつ各群である。ただし、これらは同一個体の中で共存する可能性もある。

ボタン状貼付文をもつ一群は106～118である。2個一対となる場合が多い。

結節状沈線文となる一群が119～131である。119と123には口縁部に縦位の隆帯文をもつ。この結節状沈線文にも2種類が観察される。半截竹管状工具の湾曲面を粘土に接して押引く場合(120・122・123)と逆に半截面を粘土に接して押引く場合である(121・124～131)。量的には後者の方が多い。102の口頸部にある横位2列の押引き文は、この場合の後者によってなされている。

結節状浮線文となる一群は101・102・105・132～136である。101は非常に大形の土器で、口縁部は4単位と思われる波状を呈する。胴部はストレートに底部に至ると思われるが、胴下半を欠失する。文様帯は、口縁部と胴部に大きく分かれ、口縁部に渦巻状の結節状浮線文が施される。102は底部を欠失する以外完形である。口縁部に、2本を一対とする縦位の隆帯文が8単位あり、この上には押引き施文がなされる。該期の資料は比較的少なく、胴部の文様構成を知る好資料と思われるため、それを模式的に展開してみた。これをみると胴部は縦に分割され、その内部は矢羽根状・鋸歯状のモチーフにより充填されていることが分かる。このような胴部区画と、区画内モチーフが該期に一般的な土器装飾と考えられる(三上1987)。105はミニチュアといえるほどの小形土器で、口縁部にはボタン状貼付文がみられる。

103・104・137～151は集合沈線文のみ一群である。これらは上記3種のモチーフの施されなかった部分か、あるいはそうしたモチーフの施されることの少ない胴部であると考えられる。

#### ⑥ 前期末の土器 (図21)

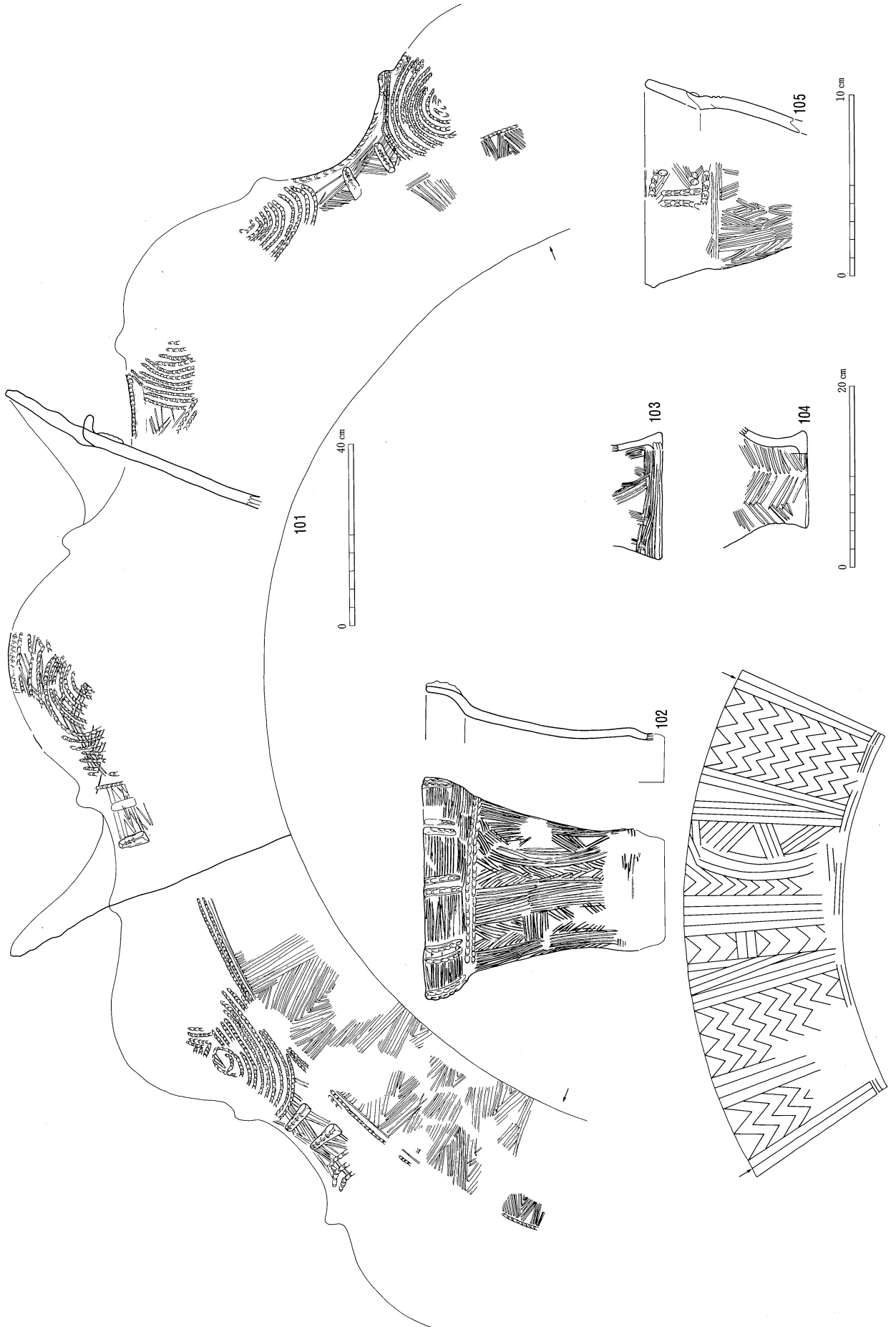


图20 b地区遺構外出土縄文時代前期土器実測図I (1:12、1:6、1:3)

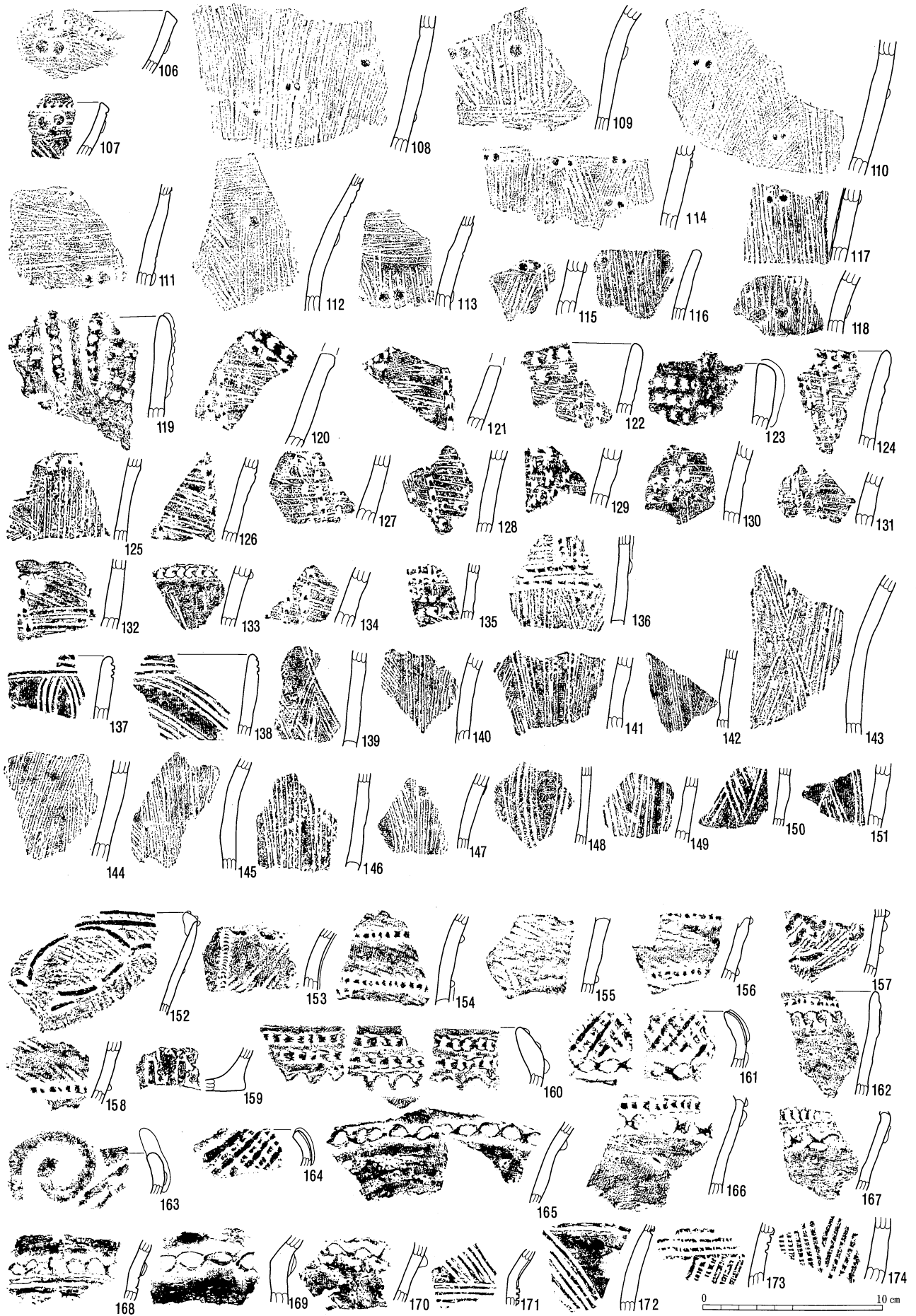


図 21 b地区遺構外出土縄文時代前期土器拓影 2

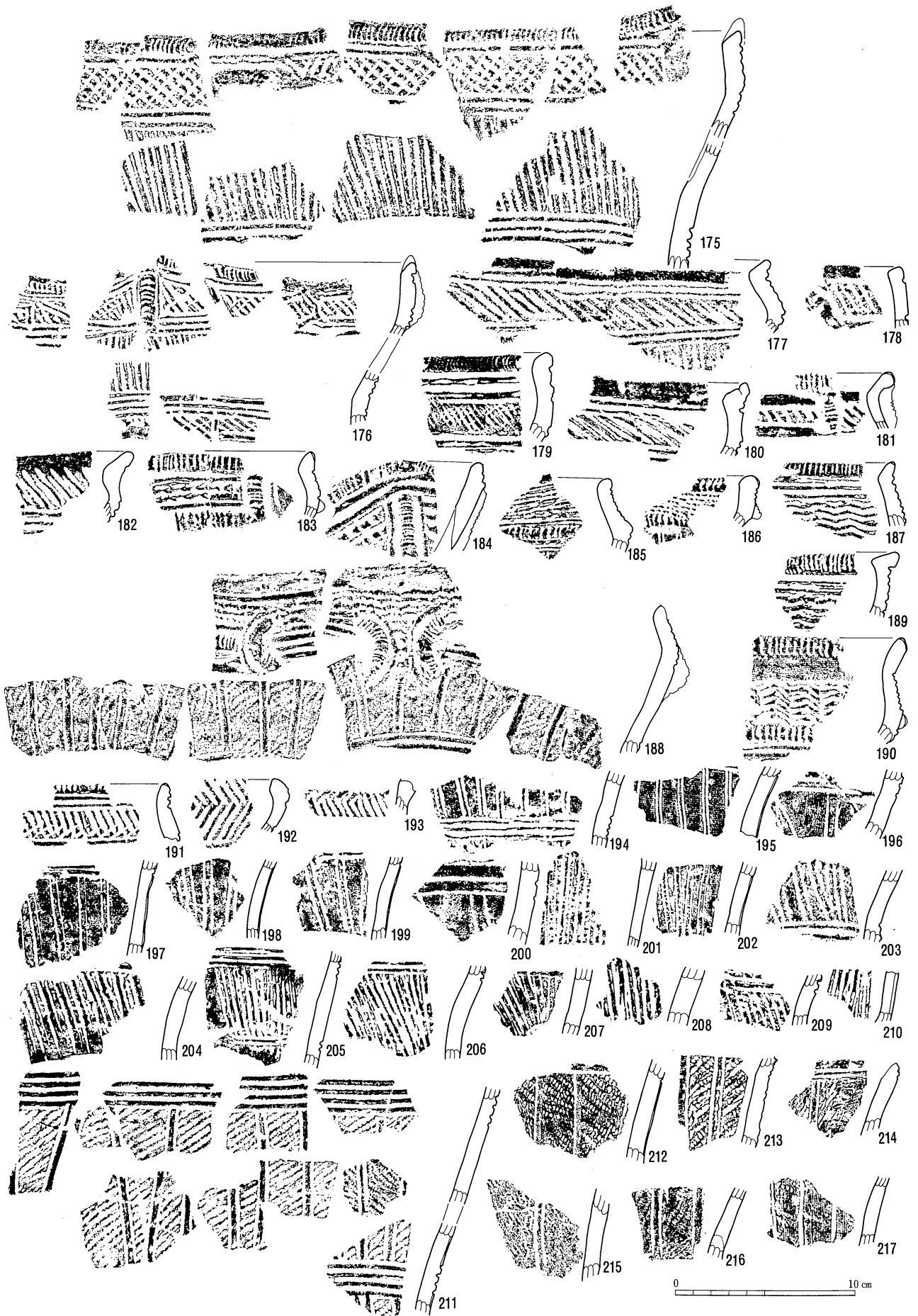


图 22 b 地区遺構外出土縄文時代中期初頭土器拓影 1



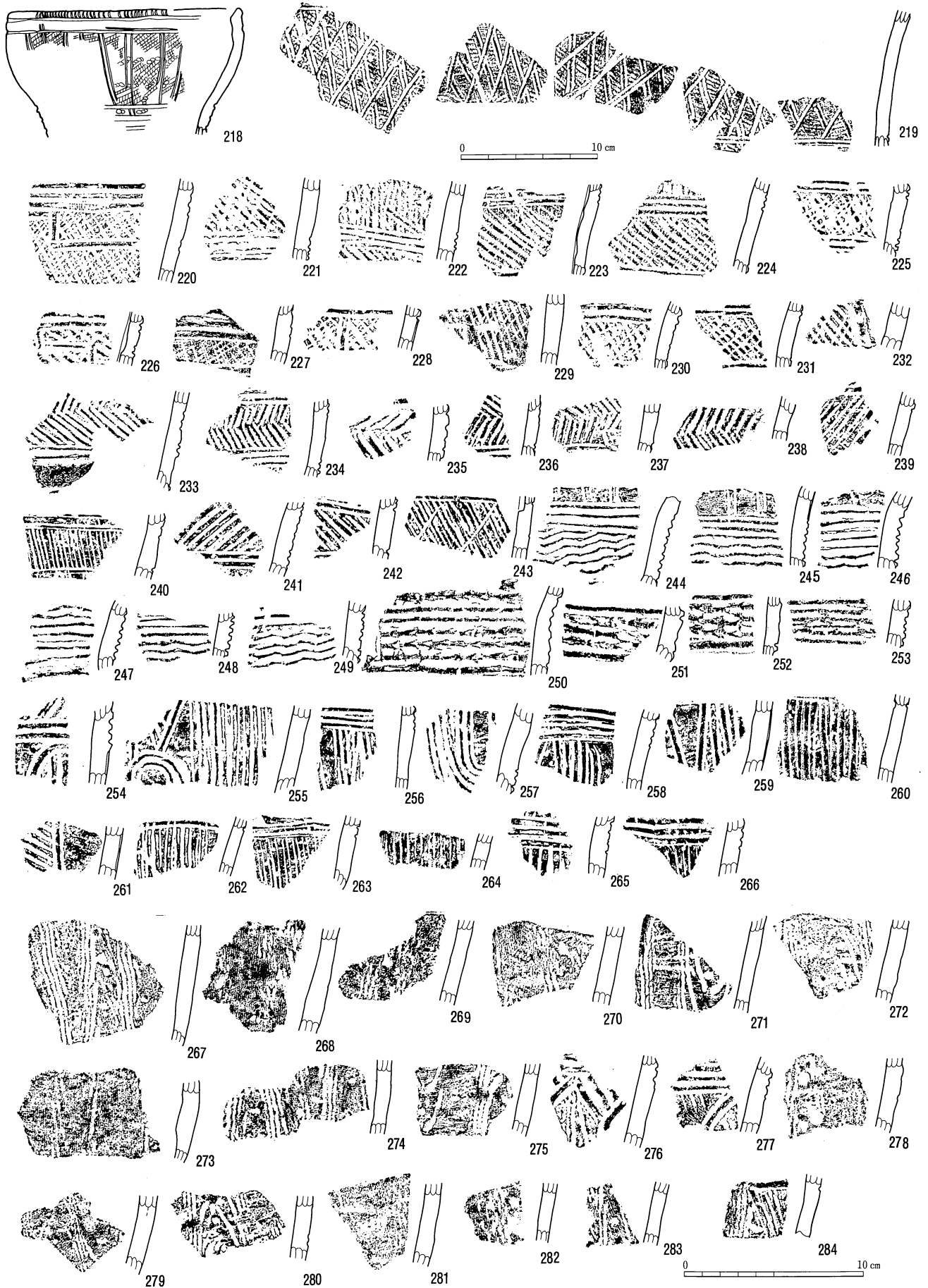


図 23 b地区遺構外出土縄文時代中期初頭土器実測図・拓影 2



図24 b地区遺構外出土縄文時代中期初頭土器拓影3

晴ヶ峰式に比定できる一群で、地文には縄文をもつものと、そうでないものに大きく二分できる。地文が縄文となる152~159は、その上に細い粘土紐が貼付され、さらにその粘土紐上には結節状に押しき施文されることが多い。器壁は比較的薄く、焼きも堅い。縄文のない160~174は口縁部が細い粘土紐と沈線文によって格子目状に裝飾されたり(161・163・164)、口頸部に横走隆帯がめぐり、その上に指頭圧痕が施され(160~162・165~170)、また、胴部は幾何学的に沈線区画される(171~174)ことが多い。やはり器壁が薄く、堅い焼成であることを特徴とする。

⑦ 中期初頭の土器 (図22~24)

梨久保式の範疇で捉えられる土器を一括した。これらの土器も、文様の特色によって大きく二つに分けることができる。沈線文を主体的にもつ一群と、縄文を主体に構成される一群である。沈線文を主体とする土器は特に豊富にあるため、口縁部から胴部という順に1個の土器を想定できるよう図を並べた。まず器形は頸部を境に外反する口縁部と、ほぼ筒形の胴部からなる。その口縁部文様が175～192であるが、その文様帯はさらに3帯に細かく分けることができる。それは、「く」の字状に内屈する部位を境としたその上部と下部で、さらに、上部は肥厚した口唇部分を独立して考えることができる。その口唇部は半截竹管状工具による連続施文のあるもの(175・176・179・183・184・186・187・189・190)と、素文のままの二者が認められた。口唇部下は沈線による格子目状となる場合が最も多い(175・176)。この他には単なる斜線文(177・180・182)、山形波状文(187・189・190)、瓦状押引文(183～186・188)等、少量ずつではあるがバラエティーが多い。なお、218はこの部分の文様帯の欠落したものと理解できる。口縁部の下部の文様帯は、縦位の懸垂文を特徴とする。細かくみると幾つかのバラエティーが認められる。まず地文に縄文があるものとなないものの二者がある。地文に縄文のない場合は縦位の沈線文が密なもの(204～210)、間隔をおいて施されるもの(194～203)の2種がある。地文に縄文をもつ場合では間隔をおかれることが多い。219には格子目状の沈線文も施されるが、このような例はきわめて少ない。次に胴部の文様帯ではそこが横位に細かく分かれる場合が多い。220～253がその最も上位文様帯のモチーフである。ここでも文様のバラエティーに富む。格子目文(220～232)、羽状文(233～239)、斜線文(240～243)、山形波状文(244～249)、瓦状押引文(250～253)がその主だったモチーフである。その下の文様帯は沈線文による幾何学的なモチーフの描かれる場合が多い(254～266)。この他には木目状撚糸文の展開するものも少なからずある(267～284)。

285～307は縄文を主体とする土器である。その中でも285～296が最も古い一群といえる。結節縄文を伴い、これを境として縦位に空白部をおいて帯状に施されることを特徴とする。297～307は同一個体で、口縁部は格子目状、胴部は縄文によって構成される。308～316も同一個体の土器で、細い沈線文により格子目状モチーフが描かれる。

317は沈線文系の土器で、梨久保式土器の中でも最も新しい段階に位置付けられる。

#### ⑧ 中期中葉の土器 (図25～27)

中期中葉の土器は、型式名でいうと猪沢・新道式を主体とし、藤内I式が若干加わる。そしてごく少量の外来系と思われる土器がある。

318・319・325～340は角状押引文の連続施文に特徴づけられる一群で猪沢式に比定できる。341～346は同一個体であるが円形刺突が施されるという類例の少ない資料である。

321・324・347～364は三角状押引文を文様要素の特徴とする新道式である。323には口縁部に4単位の蛇頭様突起が付され、また、モチーフも在地に一般的なものとは異なっており、あるいは北陸方面からの搬入品かとも思われる。320にはほとんど装飾はなく指頭圧痕がそのまま残された土器で、これも一応新道式の範疇で捉えておきたい。

365～369は三角状押引文が爪形文に代わったもので、藤内I式に対比できる。

322・370～380は沈線文による斜線、波形のモチーフを特徴とし斜行沈線文系土器とも呼ばれる。これらの一群も時間的には猪沢・新道式に併行する土器と考えられる。

381～401は灰色の色調、堅く、薄い器壁、そして波状モチーフ、平行線モチーフ等に特徴付けられる平出第Ⅲ類A土器である。

402～408は在地の土器とは異なった顔付きを示す。器形は鉢あるいは浅鉢になると思われ文様は口縁部に集約される。その口縁部には一列ないしは二列の角状押引文によるモチーフが施される。こうしたモチーフは阿玉台式にみられる場合が多く、あるいはその影響を受けた土器ではないかと考えられる。なお、

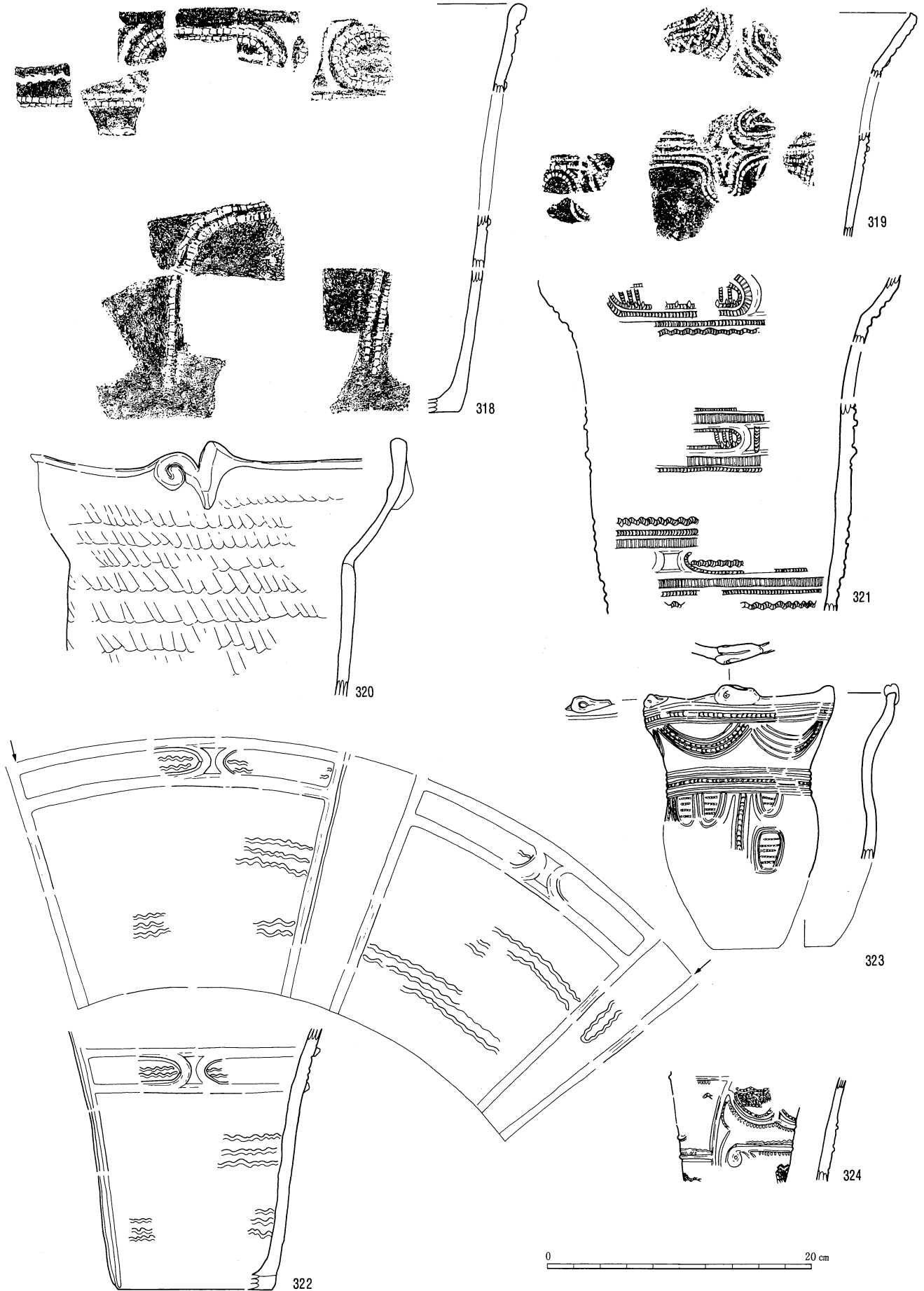


図25 b地区遺構外出土縄文時代中期中葉土器実測図・拓影1

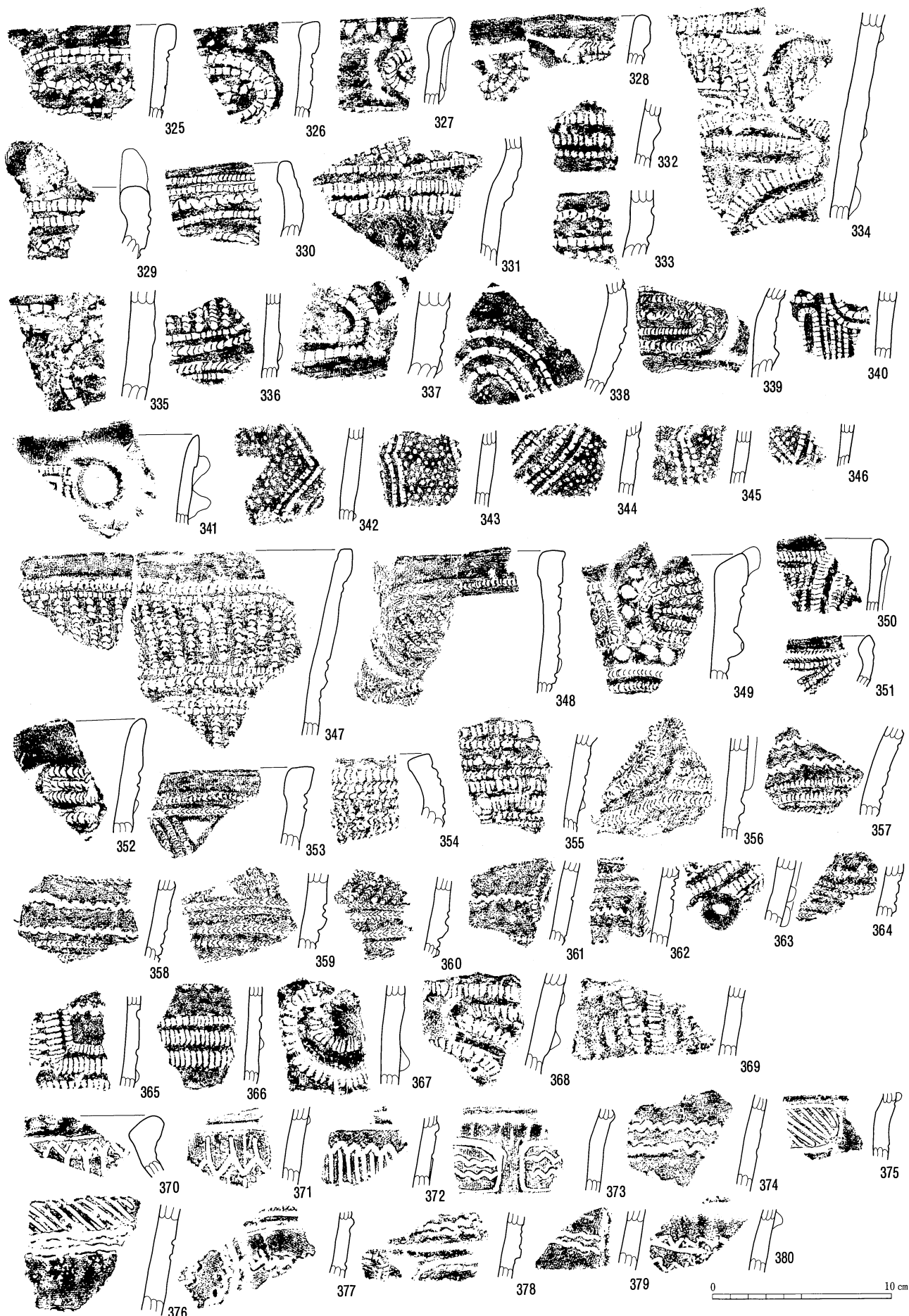


図 26 b 地区遺構外出土縄文時代中期中葉土器拓影 2

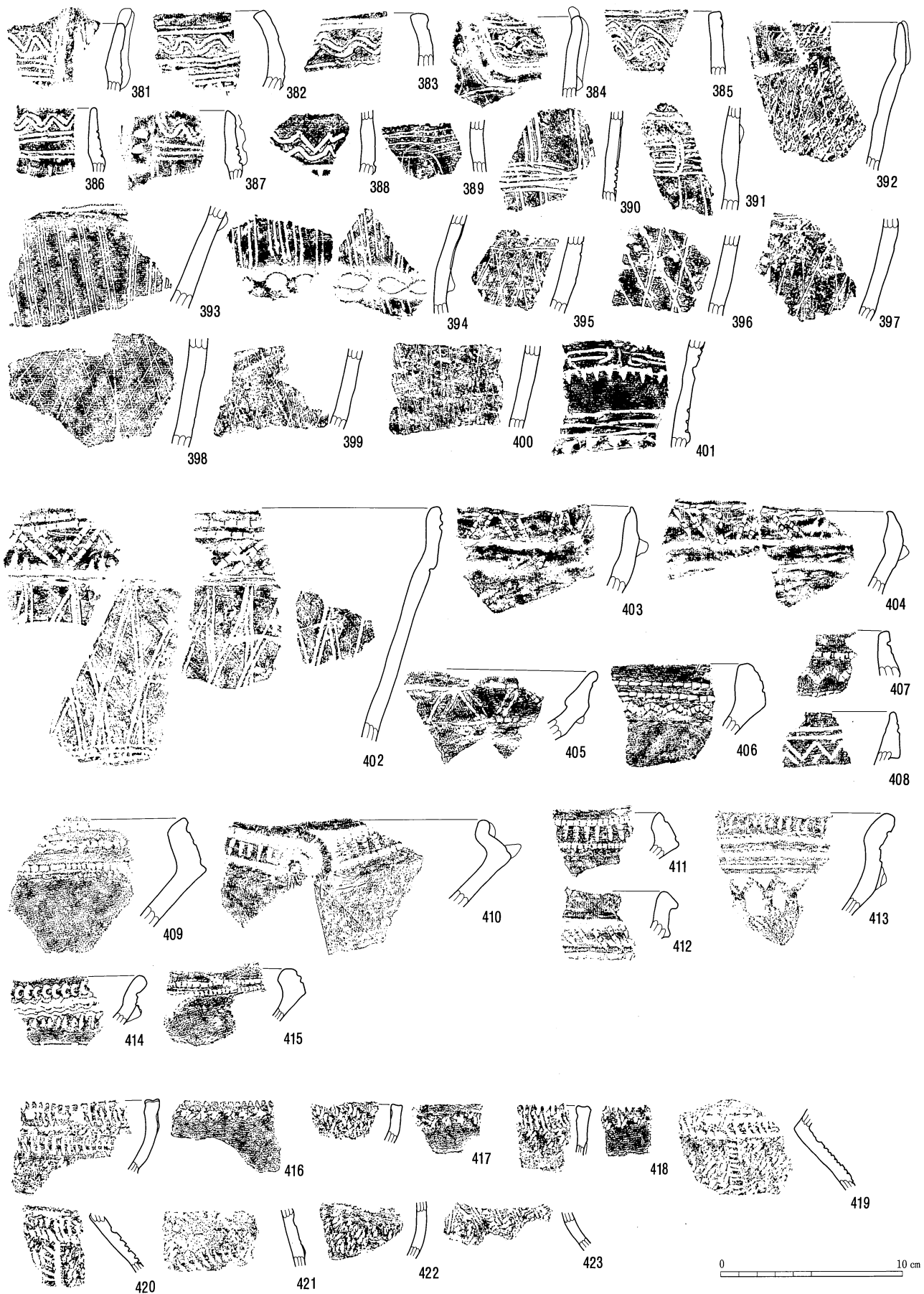


図 27 b 地区遺構外出土縄文時代中期中葉土器拓影 3

409～415は猪沢式に比定できる浅鉢である。

416～423は一目でそれと分かる外来系の土器である。堅い焼成、灰色の胎土、薄い器壁、そして爪形文モチーフや地文の縄文。こうした特徴は船元式そのものであると思われる。

⑨ 後期の土器 (図28)

図示した424と、もう1個体分の土器が出土している。424はいわゆる鉢形の土器である。薄い器壁で、器面は丁寧に磨かれる。文様構成は4単位となる。なお底部には網代痕をもつ。型式的には堀之内I式の新しい部分か、またはII式の古い部分に位置付けられよう。他の1個は縄文のみの土器で破片数も多かったが図上復元にまで至らなかった。やはり同時期と思われる。

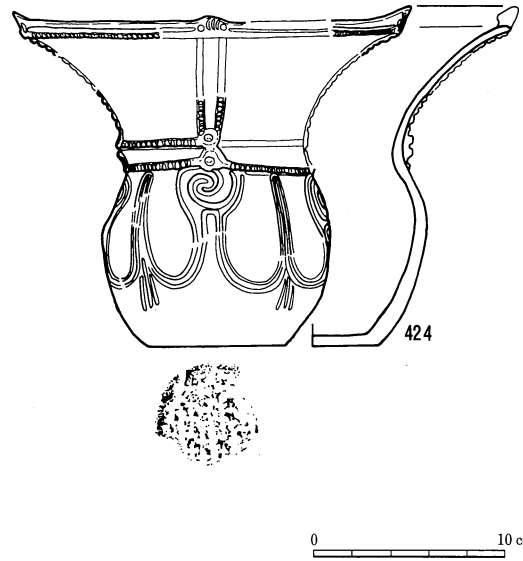


図28 b地区遺構外出土縄文時代後期土器実測図

カ 遺構外出土石器 (図15・29～36、P L50・51)

出土状況

土器に比べ、石器の出土量はそれほど多くない。主だった石器では打製石斧38、凹石8、磨石15、石鏃61、石匙5といったところである。それらの分布は図15に示す通りである。個々の石器の分布についてみたい。打製石斧は東端に集中する傾向が強い。磨石は東西両極に分かれ凹石はやはり東端にかたまる。石匙は東側に多く、石鏃は全区域に満遍なく分布するという状況がみられる。このような石器の分布に偏りのあることが興味深く観察できる。それらの時期については土器の分布と照らし合わせるにより1つの目安が得られるかもしれない。仮にそうであるとすれば、打製石斧は中期中葉の土器分布に近く、凹石は中期初頭から中葉の範囲に一致しようか。磨石は早期から中期中葉までの可能性が考えられ、石匙は前期末～中期中葉ということになる。このように大変大雑把ではあるが、石器の帰属時期も推定しておきたい。

石器の分類

① 石鏃 (4～68)

石鏃111点中、完形品39点(35%)、破損品66点(60%)未製品6点(5%)である。石材では黒曜石が圧倒的に多く91点(82%)、チャート17点(15%)、不明3点(30%)である。分類の方法は八窪遺跡に準じた。

I-A：無茎凹基で、長さが幅の1.4倍以上となるもの (4～24)

側辺の形状は、a 直線的あるいは内湾気味のもの(4～9)とb外湾するもの(10～24)に分けられる。脚部は先端が鋭利で逆刺しの効果を見込めるもの(14ほか)、先端は鋭利であるが柄が付くと流線型になってしまい逆刺しの機能を果たさなくなるもの(17ほか)などに分かれる。基部の挟り込みは、逆「U」字(13など)、逆「V」字(10など)、緩やかに湾曲するもの(5など)がある。

I-B：無茎凹基で、長さが幅に対して $1.4 > X > 1.0$ となるもの (25～44)

側辺は、a (25～33)、b (34～40)のほかにc先端のみを鋭く仕上げ脚部の開くもの(37～44)、d左右非対象のもの(41・42)がある。脚部先端も、鋭いもの(31)、丸味をもつもの(33)逆刺しの機能を持たないものがあり、その他に柄に対し垂直方向に平坦となるもの(38)が加わる。基部の挟り込みは、I-A類と同様のバラエティーを持つ。

I-C：無茎凹基で、長さが幅に対して $1.0 > X$ となるもの (45～56)

側辺の形状はa (45～51)、b (52～56)に分かれ、bの中に先端部を若干鋭利に加工しているもの

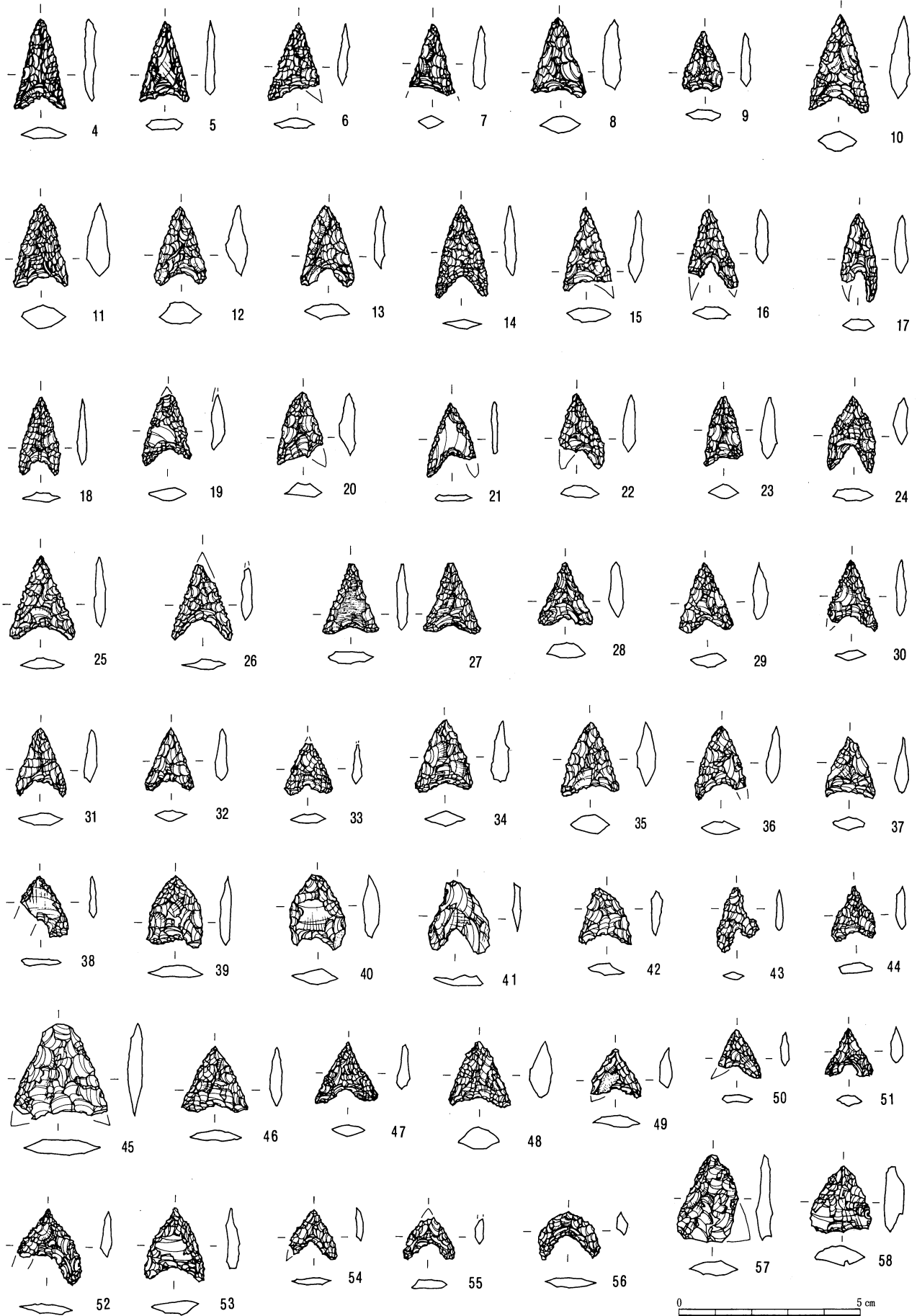


图 29 b 地区遺構外出土石器実測图 1



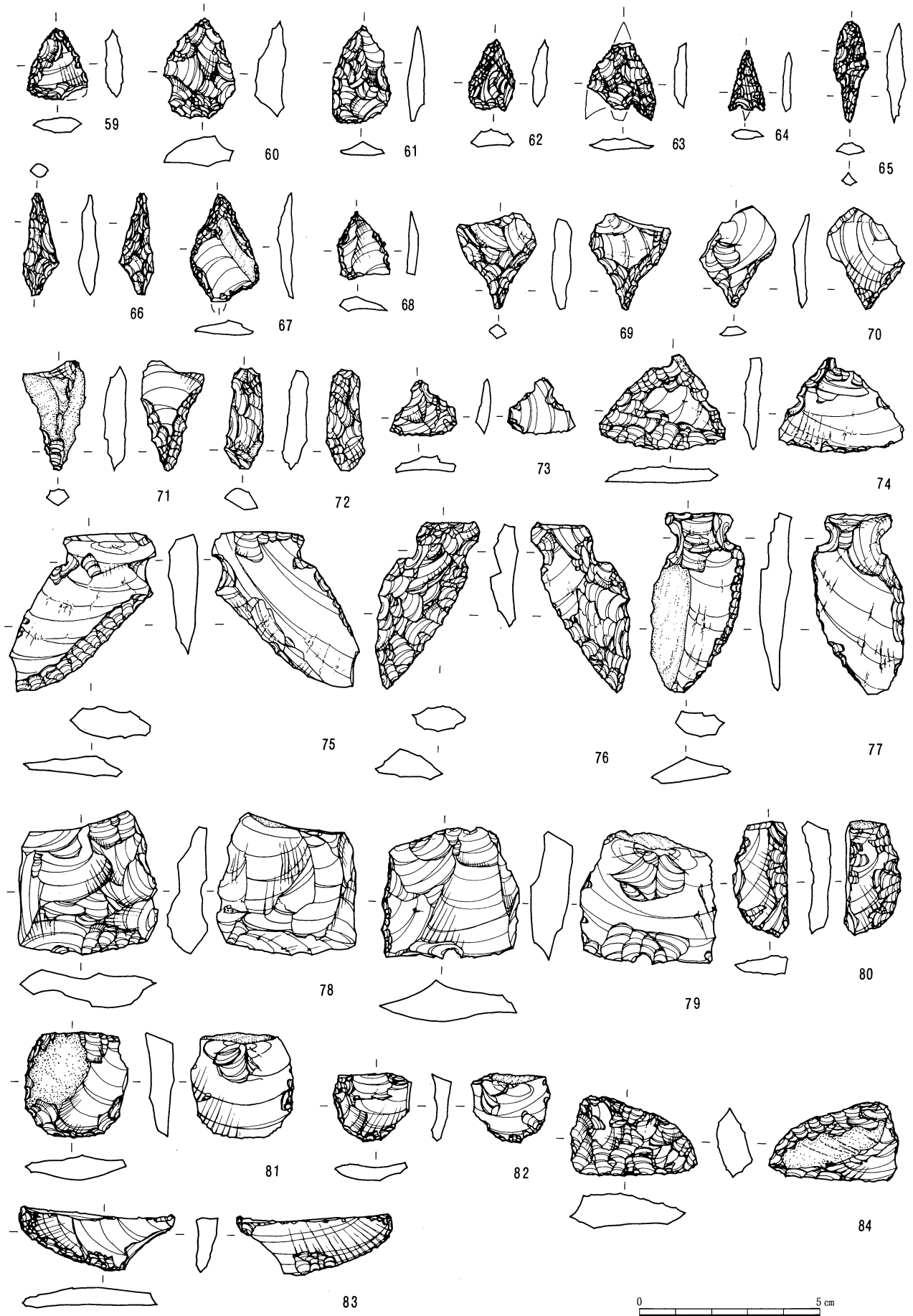


图30 b地区遺構外出土石器実測图2

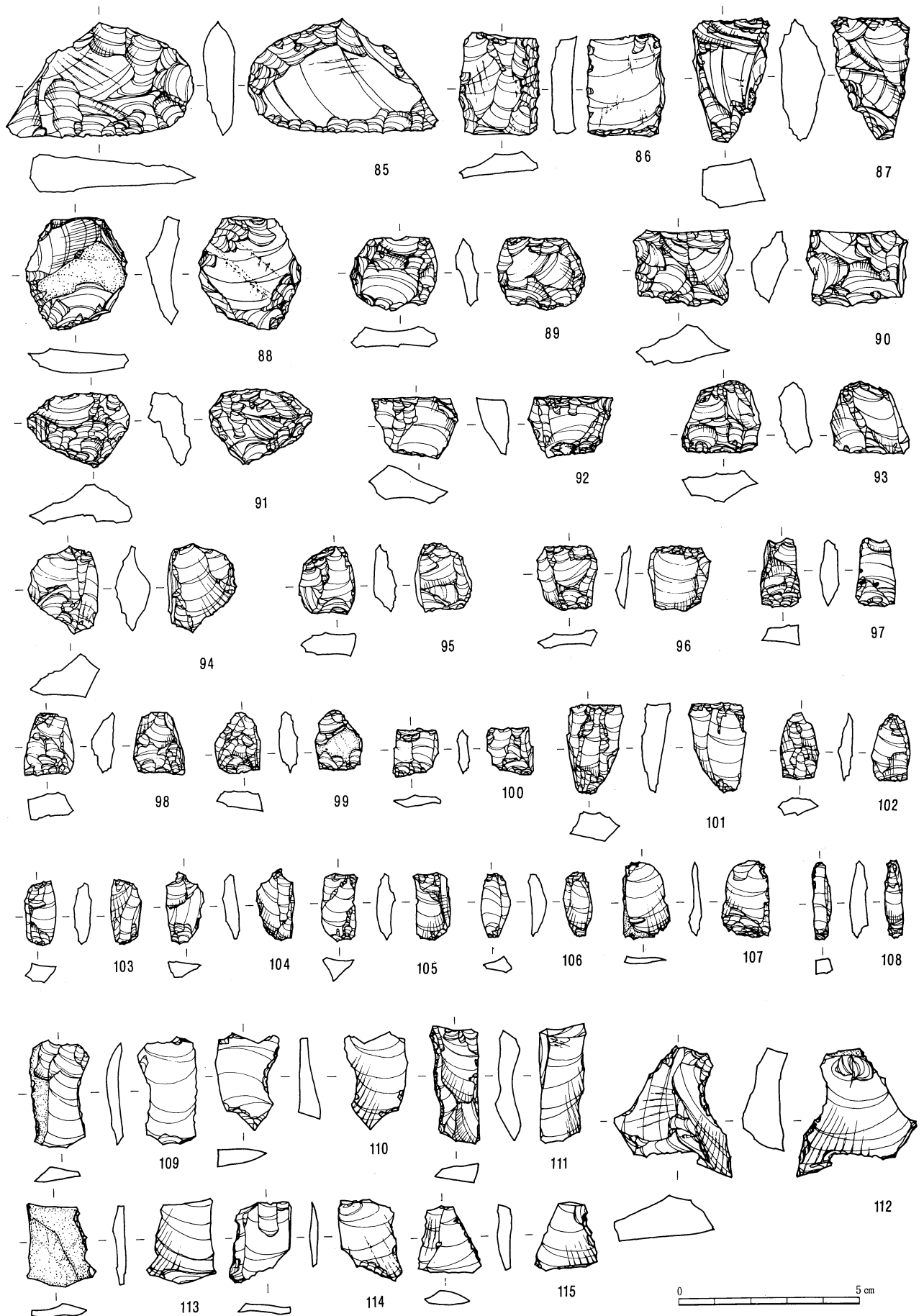


图 31 b 地区遺構外出土石器実測图 3

(52)が認められる。脚部先端は、先端の鋭いものから平坦になるものなど各種認められるが、逆刺しの効果が見込めないものは皆無である。基部の抉り込み形状にもバラエティーがある。

II：無茎で平基のもの (57~59)

側辺は外湾気味で、先端部も丸味を持つ。I類に比べ厚みのあるものが多い。

III：無茎で円基のもの (60~62)

側辺は外湾気味である。相対的に法量が大きい傾向をみせ、特に厚みのあるのが特徴的である。

IV：有茎のもの (63~66)

63・64は脚部の張り出しが明瞭で、逆刺しの効果が見込めるものである。65は脚部の張り出しが少なく、先端部が丸味を持つものである。66は左右非対象で棒状の鍔身を呈する。

V：未製品 (67・68)

67は有茎、68は無茎である。両者ともに、全体の形状を整える段階にあり、形も定まらず、剥離も粗雑さが目立つ。

② 石 錐 (69~72)

出土点数が少なく、4点のみである。石材は69がチャートであり、他は黒曜石である。八窪遺跡での分類を踏襲すれば、69・70がI A類、71がI B類、72がII類である。使用痕の肉眼観察では、69・70・72に錐部先端に稜のつぶれが見られ、71には横方向の摩耗痕が顕著に認められる。

③ 石 匙 (73~77)

総数9点出土している。73・74は横形、75~77は縦形である。73は超小形のもので石鍔未製品の可能性もある。74はつまみ部を欠損している。75~77はつまみ部上端に大きな平坦面が見られるという特徴がある。石質は73が黒曜石のほかはチャート製である。

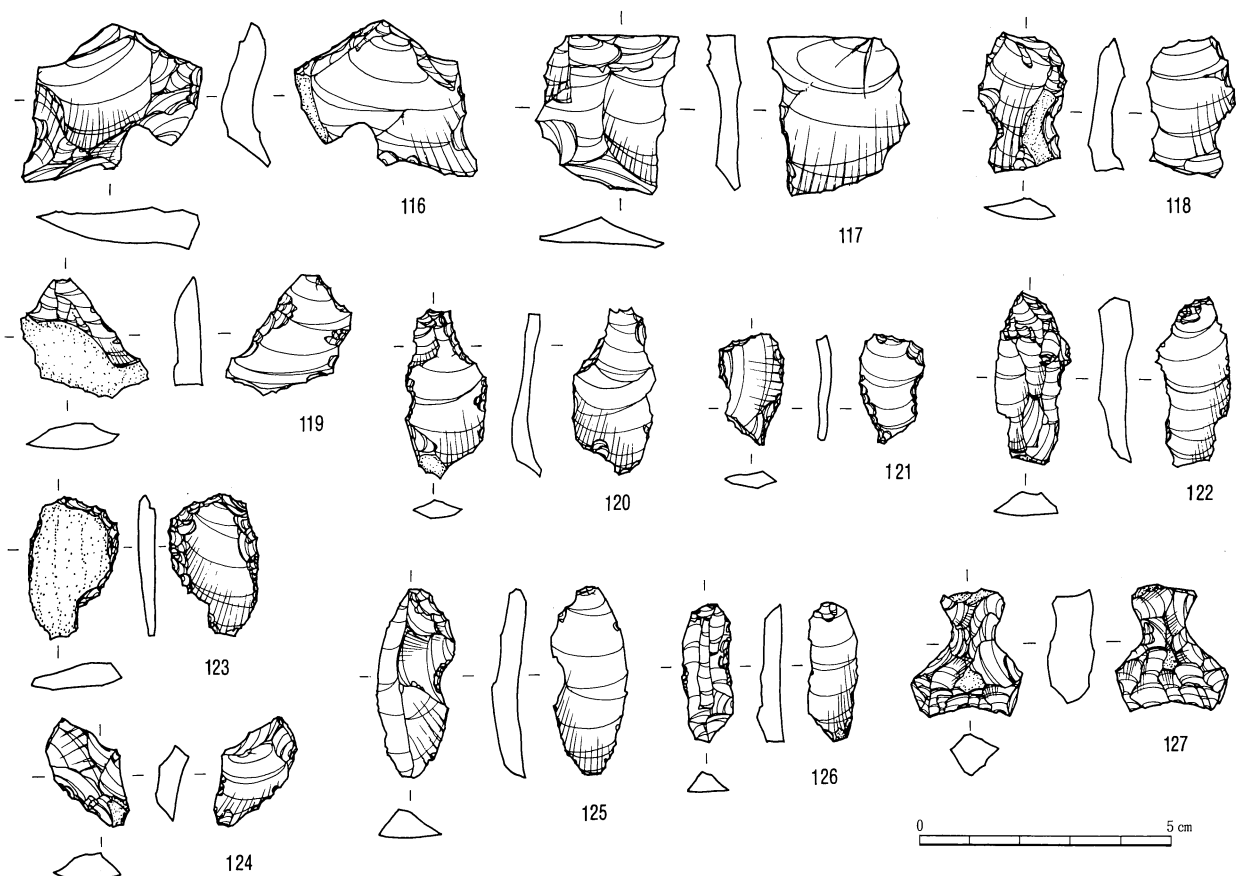


図32 b地区遺構外出土石器実測図4

④ スクレイパー (78~86)

総数13点出土している。分類は八窪遺跡に準じる。78~80はI-A類。81~83はI-B類。84・85はI-F類、つまみ部がないだけで、石匙に調整加工はよく似ている。86はII-A類。石質は86がチャートのほかはすべて黒曜石製である。

⑤ ピエス・エスキーユ (87~108)

総数40点出土している。八窪遺跡のピエス・エスキーユと比べて、87~94のやや大形のものが見られる点が特徴的である。八窪遺跡は縄文時代早期押型文が主体の遺跡であり、そこでは見られなかったこの大形の一群は、本遺跡の主体である縄文時代中期初頭に特徴的な一群としてとらえられる可能性がある。その一方で、102~106などは、八窪遺跡で特徴的に見られた一群と共通している。石質はすべて黒曜石

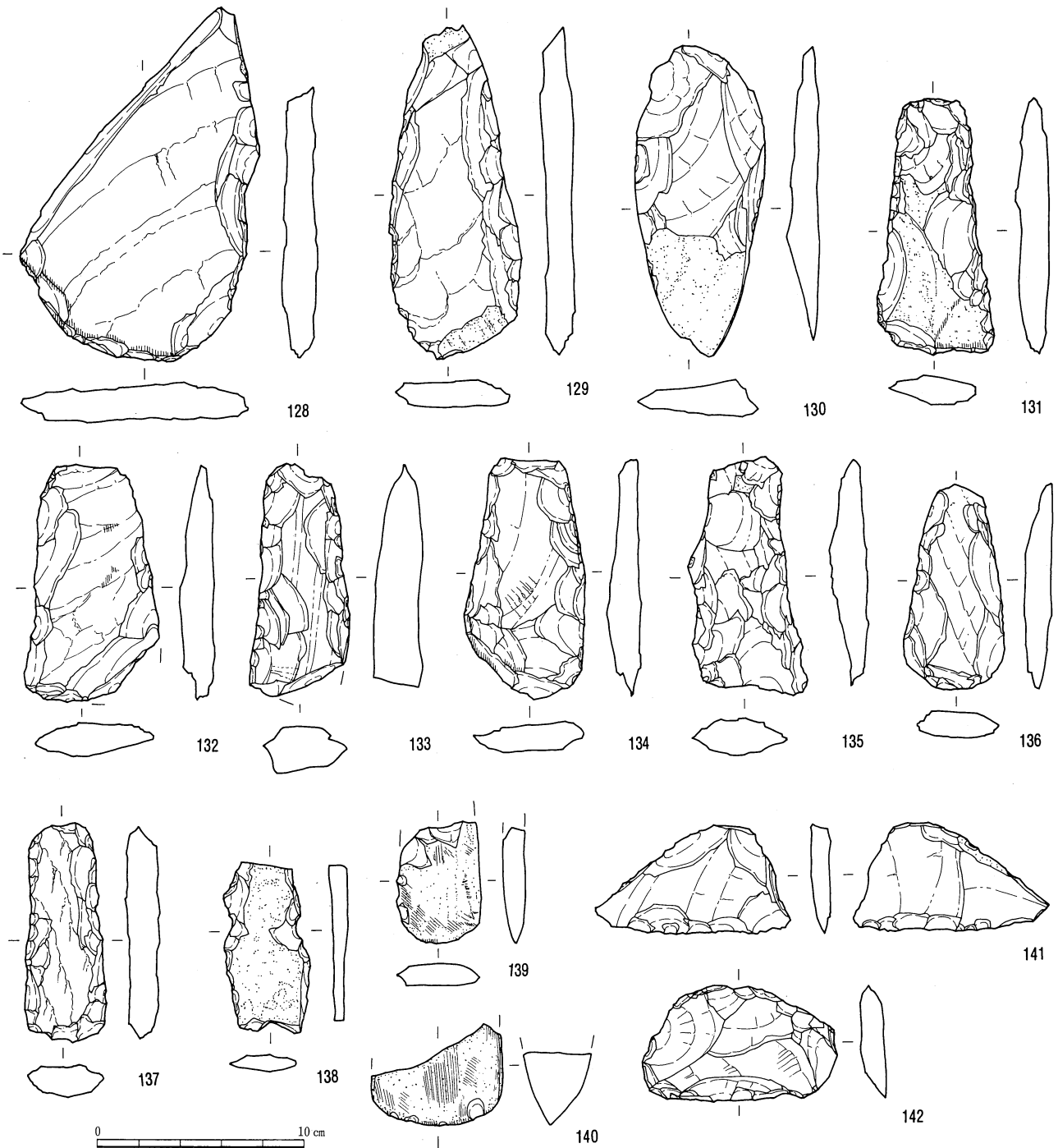


図33 b地区遺構外出土石器実測図5

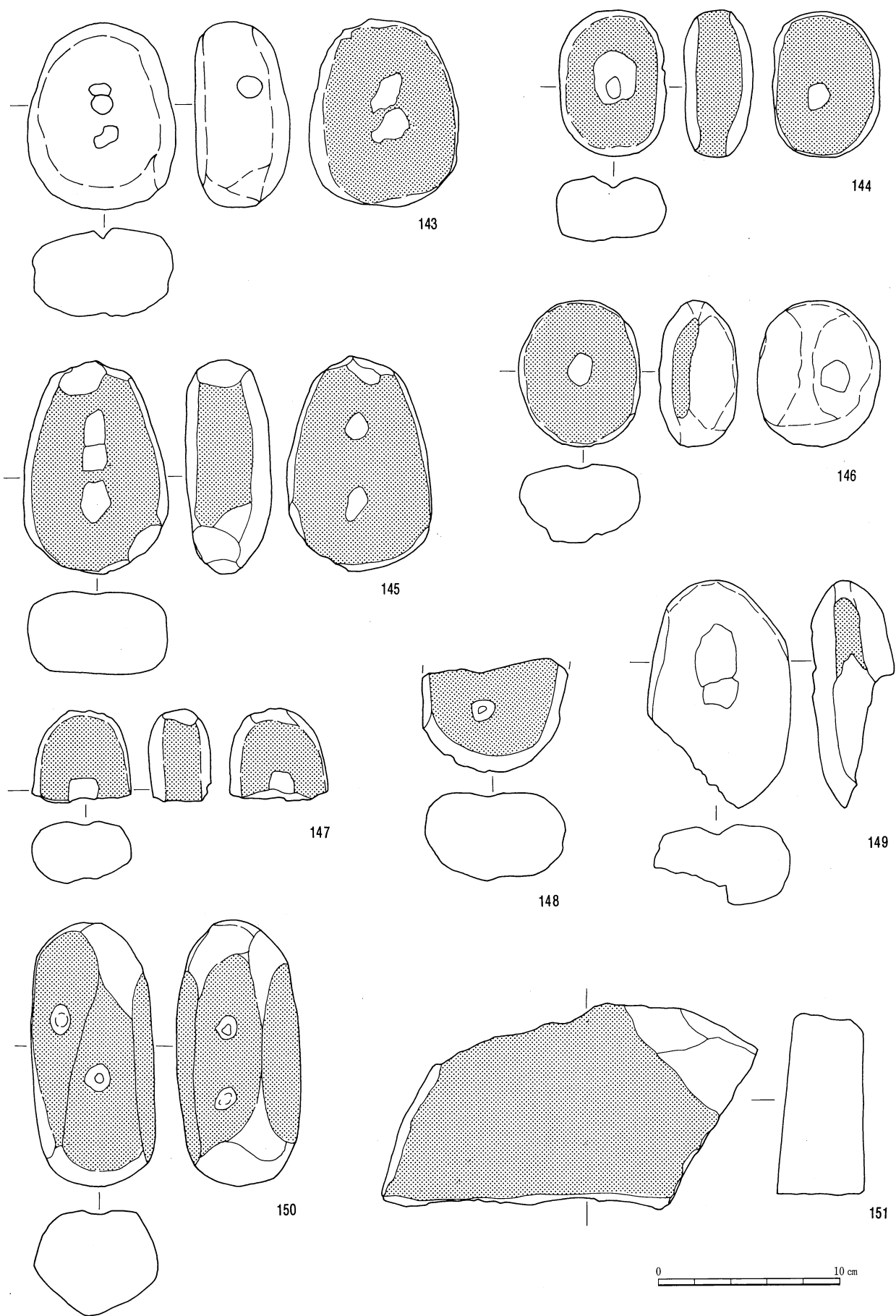


図34 b地区遺構外出土縄文時代石器実測図6

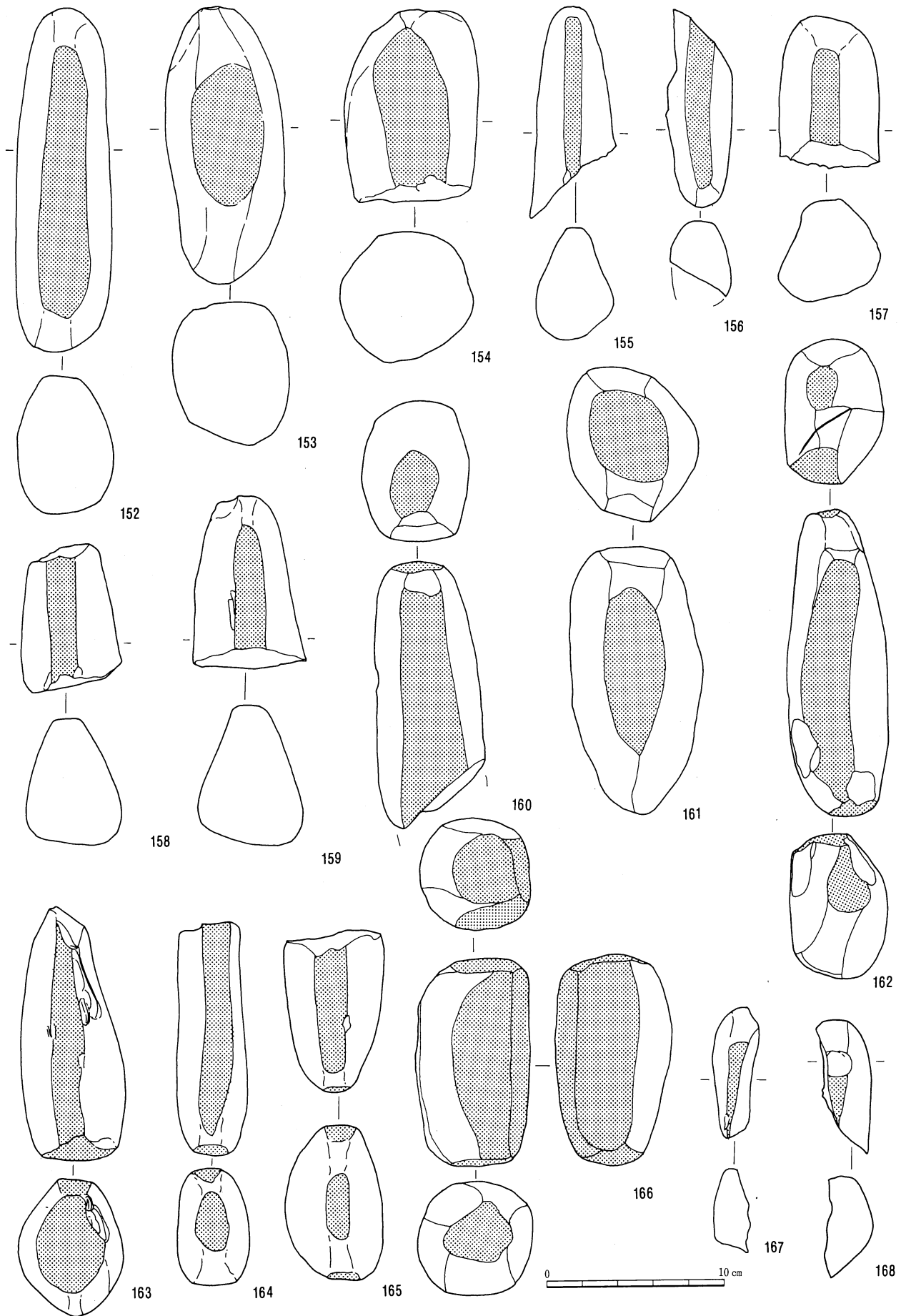


図35 b地区遺構外出土縄文時代石器実測図7

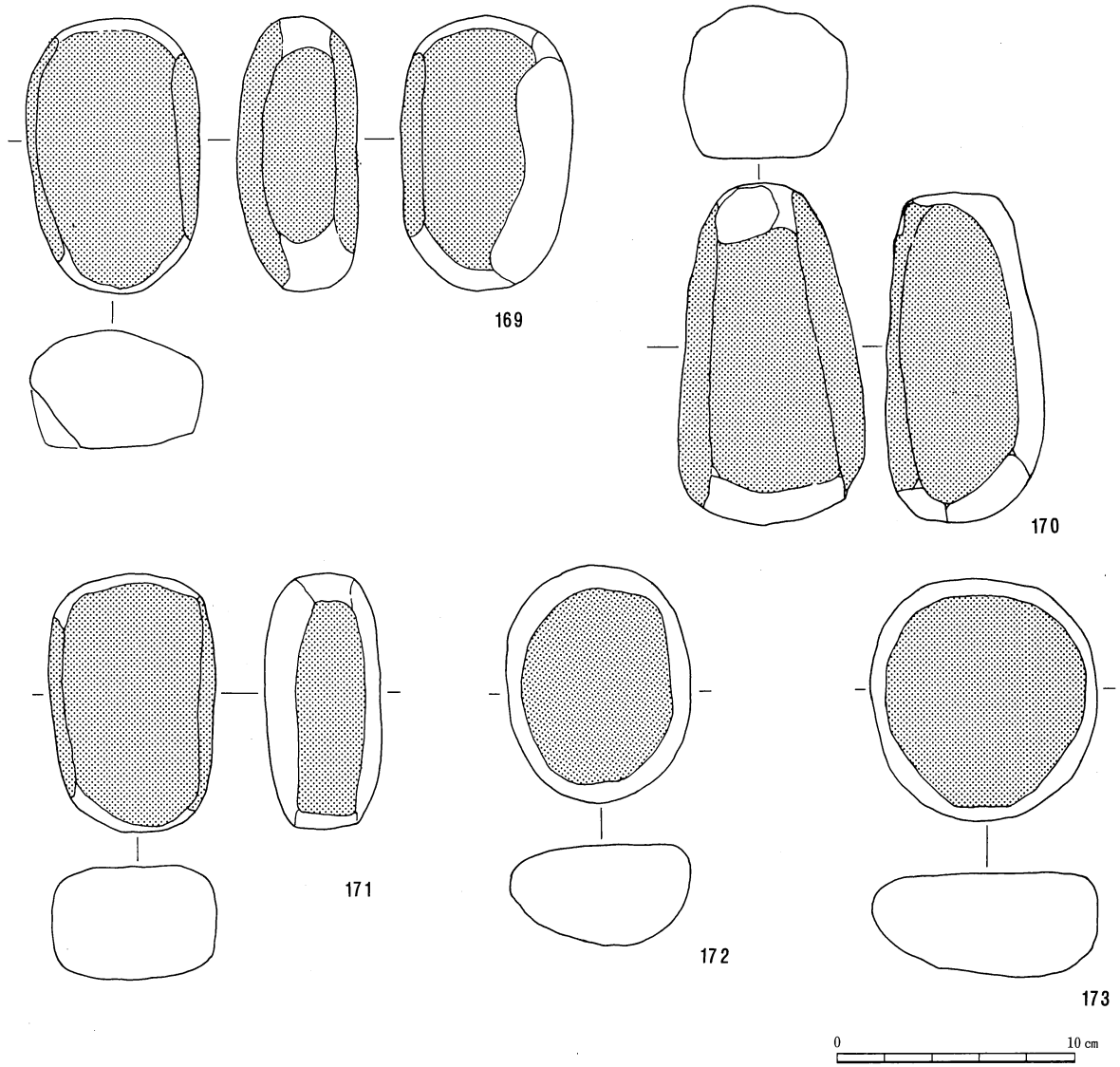


図36 b地区遺構外出土縄文時代石器実測図8

製である。

⑥ 小剥離痕のある剥片 (109~126)

総数46点出土している。分類は八窪遺跡に準じる。109~111はI-A類。112~119はI-B類。120~124はII-A類。125・126はII-B類。石質は114がチャートのほかはすべて黒曜石製である。

⑦ その他の石器 (127)

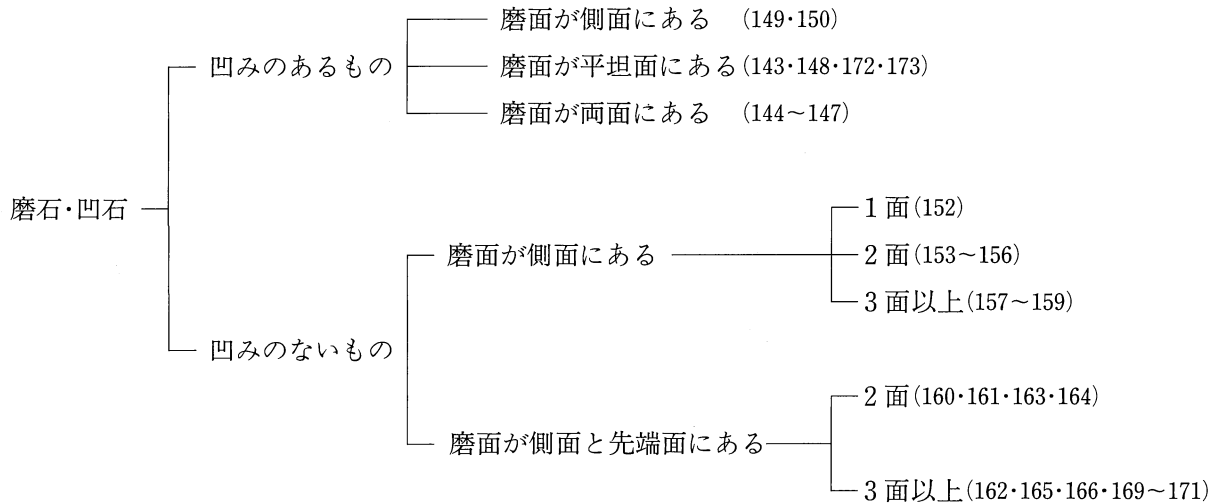
両面に調整加工が施されている。黒曜石製で完形品。3つの側縁はノッチ状を呈し、つぶれている。

⑧ 打製石斧・磨製石斧・横刃形石器 (128~142)

比較的残存率のよいものを図示した。打製石斧は短冊形が多く、撥形がそれに次ぐ。138の基部には両側に抉りがあり興味深い。139・140は磨製石斧で、この2点のみの出土である。ともにトレンチ内からの出土である。141・142は横刃形石器である。

⑨ 磨石・凹石・石皿 (143~173)

磨面をもつという点で共通するこれらを総称してここでは磨石と呼びたいが、その形状や、磨面の数や部位に幾つかのバラエティーが認められる。したがって、今回は磨面の部位の違いに基づいて分類する。



このように分類すると磨面の部位や広さに大小があり、一口に磨石といってもバラエティーに富むことが分かる。それは同時に磨石に対する疑問も通ずる。磨面の広さと用途はいかに係わるのか、先端面は側面や平坦面と同じ使われ方をしたのか、また、磨面と凹みとの関係等々である。本稿はその資料の提示にとどめたい。

なお151は平坦な石を使用した石皿である。

#### (4) 平安時代の遺構と遺物

##### ア 住居址

##### ① 2号住居址 (図37)

**検出：**調査区西端、N200W112付近に位置する。II層中でカマドの石組みを、III層上面で住居址のプランを確認した。斜面下位に当たる南西部ではプランを確認できなかった。**規模・形状：**南西半分を欠くため不明だが、3.9m×(2.0)mで、側壁の高さは9cmである。平面形は、長方形ないし正方形と考えられ、北東から南西に主軸をもつ。**埋土：**黒褐色土で竪穴中央床面直上から木炭や焼土が出土した。**床面・壁：**床は決して堅くなく、むしろ軟らかい。壁は南東、北東、北西の壁が残存し、特に北東壁の残りがよい。**カマド：**北東壁の北西隅にあり、住居の外へ半分以上張り出す。焚き口は南西に開口し、竪穴の主軸よりややずれ、住居の中央寄りに向く。両袖には扁平な石を立てならべ内壁面を構成する。支脚石は燃焼部中央に設けられている。火床には焼土は残っていなかった。天井部は残存せず、また煙道部は不明である。燃焼部内には10cm～20cm大の礫が入れられ、その上面には土師器碗の底部片があった。なお柱穴、周溝はない。**遺物の出土状況：**カマドより土師器碗が、カマド前底部より灰釉陶器片が少量出土した。覆土中からは、少量の土師器片が出土した。**遺物：**図示し得るのは425と426である。425は灰釉陶器碗で、底部に糸切り痕が残り、体部下半のヘラケズリは省略されている。また高台端部が面取りされている。426は土師器碗の底部で、内外面はロクロナデ仕上げがなされ、底部に糸切り痕が残る。灰釉陶器碗はその調整、形態等の特徴より、大原2号窯式と考えられる。**時期：**10世紀前半。

##### イ 焼土壙 (図38)

焼土壙とは、木炭や木炭粒を多量に含む土壙を指している。類例の少ない遺構のため、その詳細は考察を加えて後にまとめて記すことにしたい。出土遺物はなく、年代についても不安定な要素が多い。しかし、



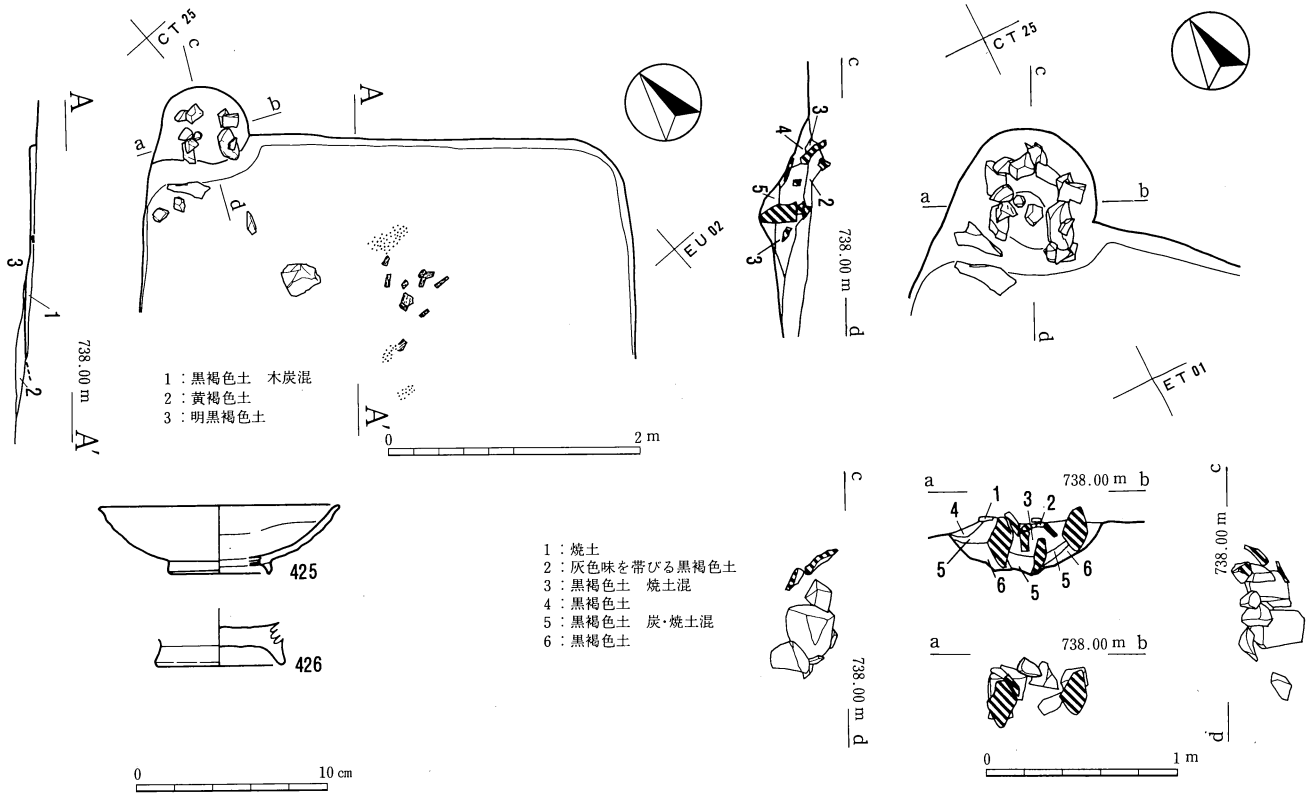


図 37 b 地区 2 号住居址実測図・出土遺物実測図

1号焼土壇の木炭のC<sup>14</sup>年代測定を行ったところ、B.P.1060±80という測定値が得られた。また、その検出面はII層であり、ほぼ平安時代と判断される。

この焼土壇は6基が検出されている。

① 1号焼土壇

調査区中央にあたる、N195W99付近に位置し、II層上面で検出。埋土中には木炭が多量に含まれ、焼土も混じる。本址は主体部と煙道部よりなり、主体部は3.6m×2.15m、深さ0.2mの長方形で、煙道部は1.25m×0.5m、深さ0.15m。主軸は西北西から東南東を示し地形の傾斜方向に直交する。主体部と煙道部の境には70cm×60cm、深さ10cmの窪みがある。遺物はないが、本址の木炭により、先のような年代値が得られている。

② 2号焼土壇

N197W96付近、1号焼土壇の2m北に位置し、II層上面で検出。埋土中には木炭粒が混在し、一部には焼土粒も混じる。北西から南東方向の隅丸長方形で、2.7m×1.2m、深さ0.3mある。床面は起伏があって平坦ではない。壁はゆるく立ち上がる。出土遺物はない。

③ 3号焼土壇

N196W96付近、2号焼土壇の1m東に位置し、II層上面で検出、埋土中には木炭粒が混在する。0.4m×0.4mのほぼ円形で深さ50cmである。底面から側壁にかけて緩く立ち上がる。遺物はない。

④ 4号焼土壇

調査区中央、N186W86付近に位置し、III層中で検出。埋土中には木炭粒が混じり、床面や壁に近くなるに従って多くなり、中には長さ10cm大の木炭もあり、焼土粒や焼土塊も含まれる。また床面直上にも焼土が分布する。本址は主体部と煙道部よりなり、主体部は5.3m×1.6m、深さ0.4mの長方形で、煙道部は0.3m×0.7m、深さ0.1mある。長軸は北西から南東方向にあり地形の傾斜に直交する。床面は平坦で、主軸

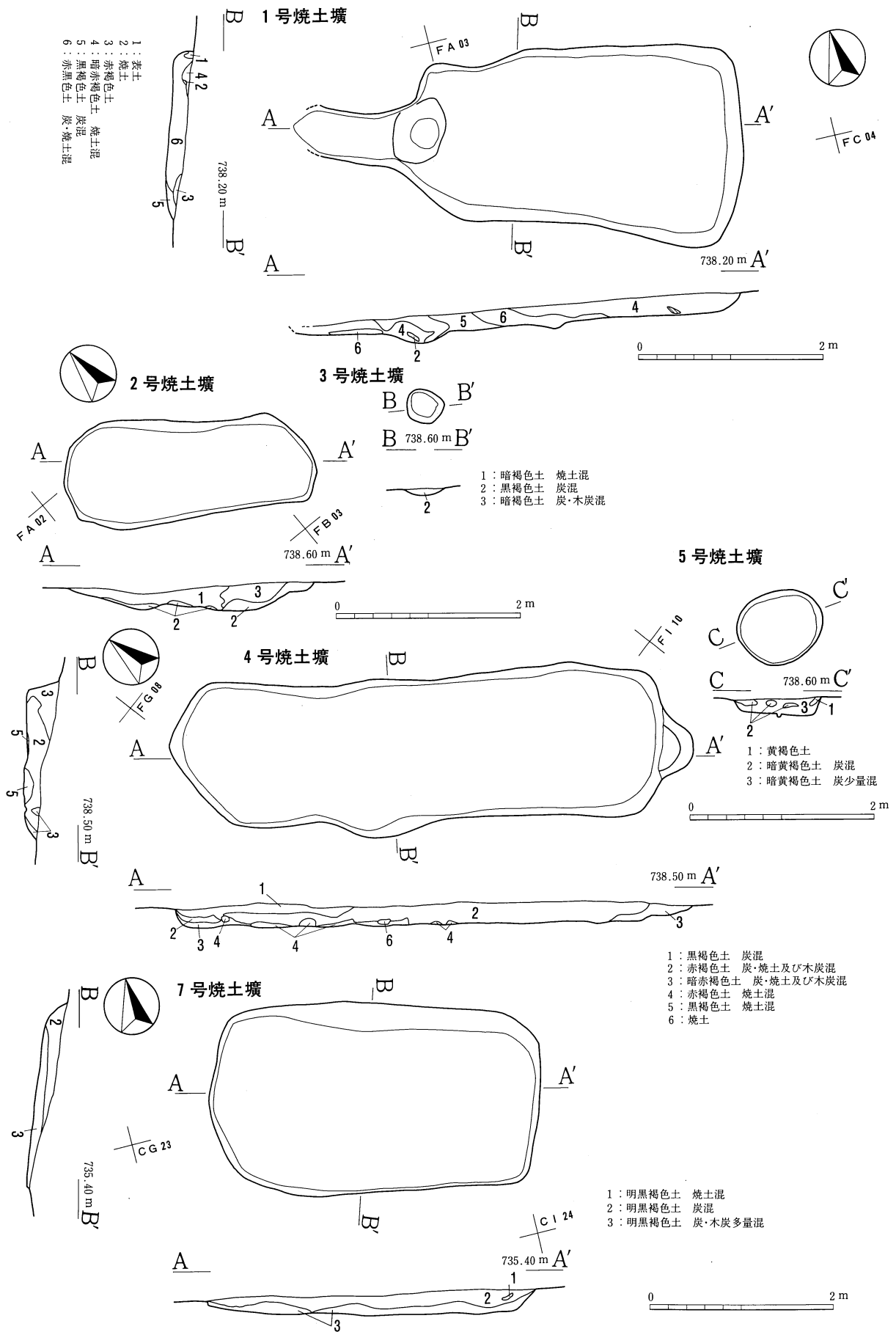


图38 b地区1~5·7号烧土壤实测图 (1:60)

にそって径5cm、深さ3cm~10cmの小さなピットが数個並ぶ。壁は斜めに立ち上がる。遺物はない。

⑤ 5号焼土塊

N181W83付近、4号焼土塊の1m東に位置し、III層中で検出。埋土には木炭粒を含み、それが多量にある部分も多い。0.9m×0.8mのほぼ円形で、深さ0.2mである。底面は平坦で、中央に径5cm、深さ2cm~8

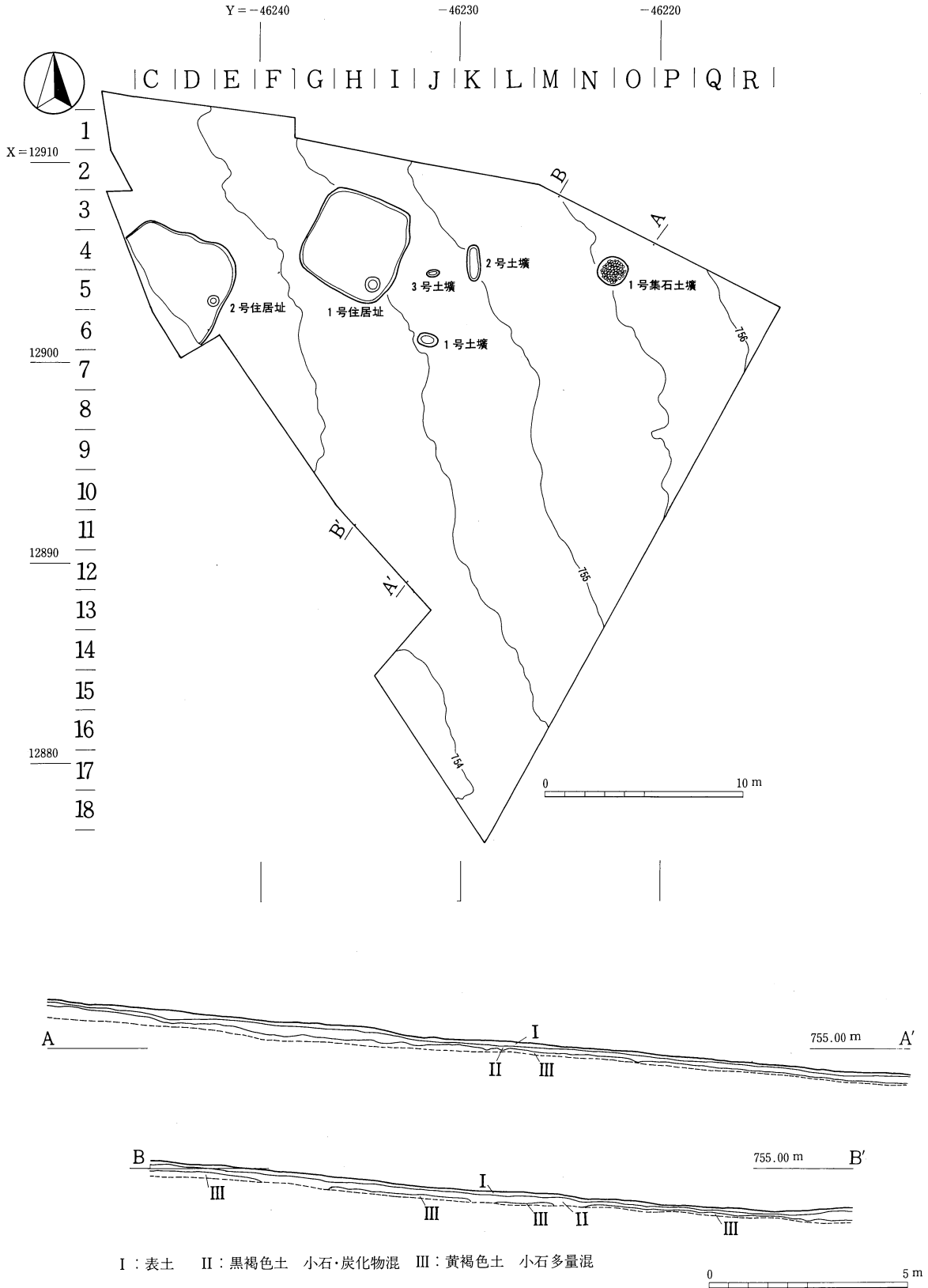


図39 c地区遺構分布図(1:300)・土層図(1:150)

cmのピットが3個並ぶ。遺物はない。

⑥ 7号焼土壇

調査区の西端にあたる、N206W203付近に位置し、III層中に検出。埋土は木炭および木炭粒を含み、特に下層から床面上にかけて多量に存在した。焼土粒も混じる。3.5m×2.1mで、深さ0.3mの隅丸長方形を呈し長軸は地形の傾斜にほぼ直交している。床面は平坦でやや南に傾斜し、壁は斜めに立ち上がる。遺物はない。

c 地区

(1) 層序と地形形成 (図39)

東から西にかけて緩やかな傾斜面に位置する本地区は、その背後をなす北側が急峻に立ち上がる尾根となり、前面となる南西にかけては小さな沢で区切られる。地形的には非常に安定した場所と考えられ、それを裏付けるかのように層序は薄い水平堆積を示していた。層序は次の通りである。

I層：表土層。

II層：小石、炭化粒子を含み、しまりの強い黒褐色土層。

III層：小石を多く含み、しまりが強く黄褐色を呈する層。古墳時代遺構の検出面。

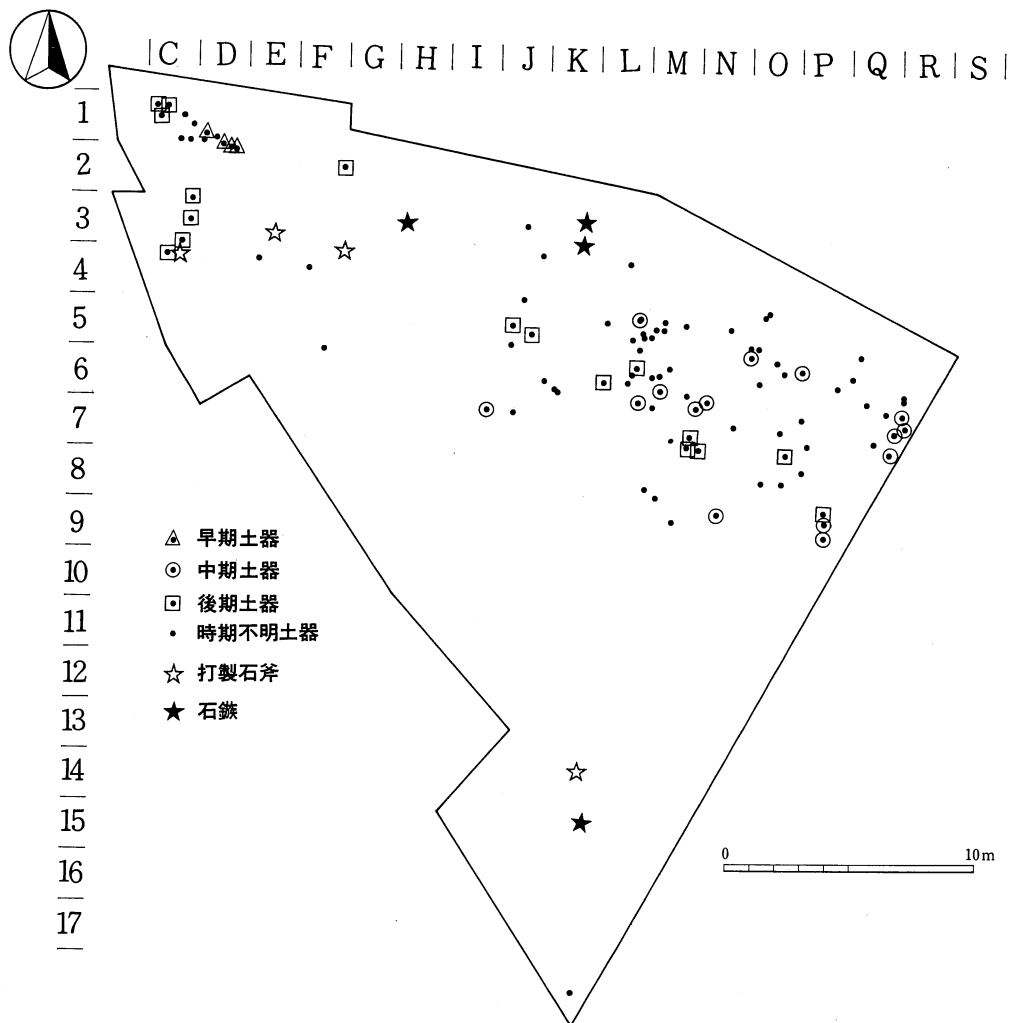


図40 c 地区縄文時代遺物分布図 (1 : 300)

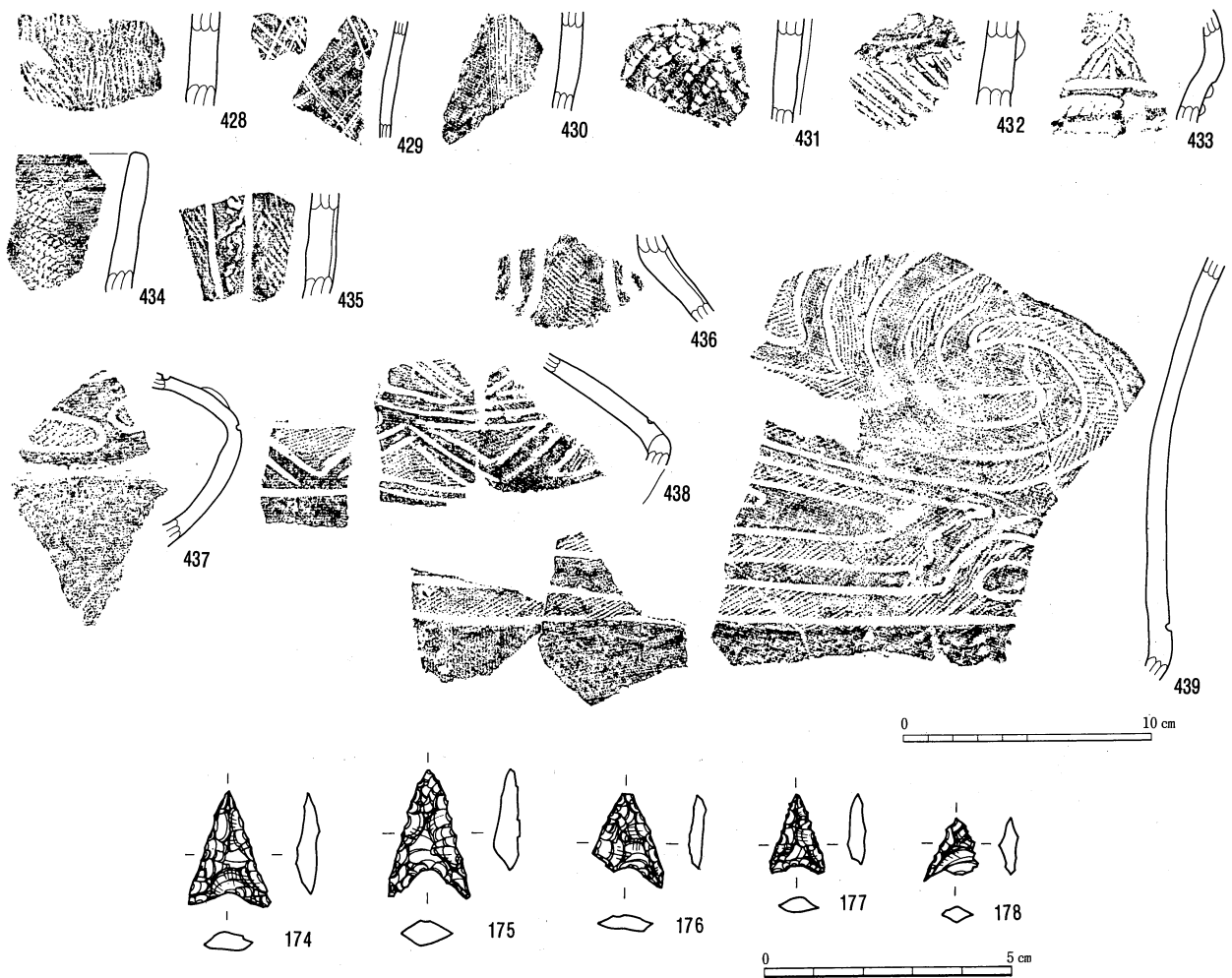


図41 c地区遺構外出土縄文時代遺物実測図・拓影

(2) 遺構と遺物の概観 (図39)

本地区は、5世紀代の遺構と特殊な遺物に象徴される。住居址2軒、土壇3基、集石土壇1基は、いずれも同一時期に所在したと思われる、また、そこから出土した土器の多くは高杯、埴等といった供献形態を示し、さらに手捏土器も多数あり、非日常的な色彩を強く感じさせる。加えて地理的には、狭小な平坦地で、生産地を近くにひかえているとも思われにくい。祭祀的な集落と考えられようか。

この他には、縄文時代早期～後期の土器、石器類が散在的に発見されている。しかし遺構を伴っているわけではなく、生業の中心的な場とは考えにくい。

(3) 縄文時代の遺物 (図40・41)

**遺物の出土状況：**縄文時代の遺物は、少数ながらも早期、中期、後期の各期にわたっての土器片が出土しており、またその各期に相当すると思われる石鏃、打製石斧などの石器類も発見されている。遺物は発掘区域内に散布しており、その分布に傾向性は認められない。

**出土土器：**428・429は早期土器で、428には細い撚糸文が施される。429は非常に薄い器壁で焼成もよく、モチーフは沈線により格子目状に描かれる。木島式系の土器であろう。430～435は中期のもので、430は平出第Ⅲ類A、431は角状押引文を多用する貉沢式、432・433は中期後半曾利Ⅱ式、434・435は加曾利E式後半であろう。436～439は後期土器で、439は大形の深鉢、436～438は胴部で大きく「く」の字状に屈曲する形状から注口土器と思われる。いずれも堀之内Ⅱ式に比定されよう。

**出土石器：**打製石斧4点、石鏃5点(174~178)がすべてである。打製石斧はいずれも短冊形を呈するが、欠損品である。石鏃は黒曜石製である。

(4) 古墳時代の遺構と遺物

ア 住居址

① 1号住居址 (図42~45、P L 52・55)

**検出：**発掘区北側に存在した2軒の住居のうちの東側である。III層である黄褐色土を掘り込んでおり、明瞭に検出できた。**規模・形状：**平面形は一辺4m~5mのほぼ方形を呈し、軸方向はW22°Eとなる。**埋土と遺物の出土状況：**両者は緊密な関係をもつので、ここでは合わせて記述したい。まず、住居址北半分を中心に、埋土中に多量の焼土の存在することに注目したい。これは垂直的にみると埋土の中間層にあたる。また埋土中には炭化物片も含まれるが、家屋原材と思われる大形の炭化材は全くなく、したがって焼失家屋とは考えにくい。そのことを遺物とその出土状況が裏付ける。まず、出土遺物は大きく3種に分けることができる。高杯、鉢といった供献形態の土器、壺、甕といった日常什器、そして手捏土器である。その割合は、少量の日常什器を圧して供献形態の土器が多く、手捏土器が比較的まとまって存在する。このよ

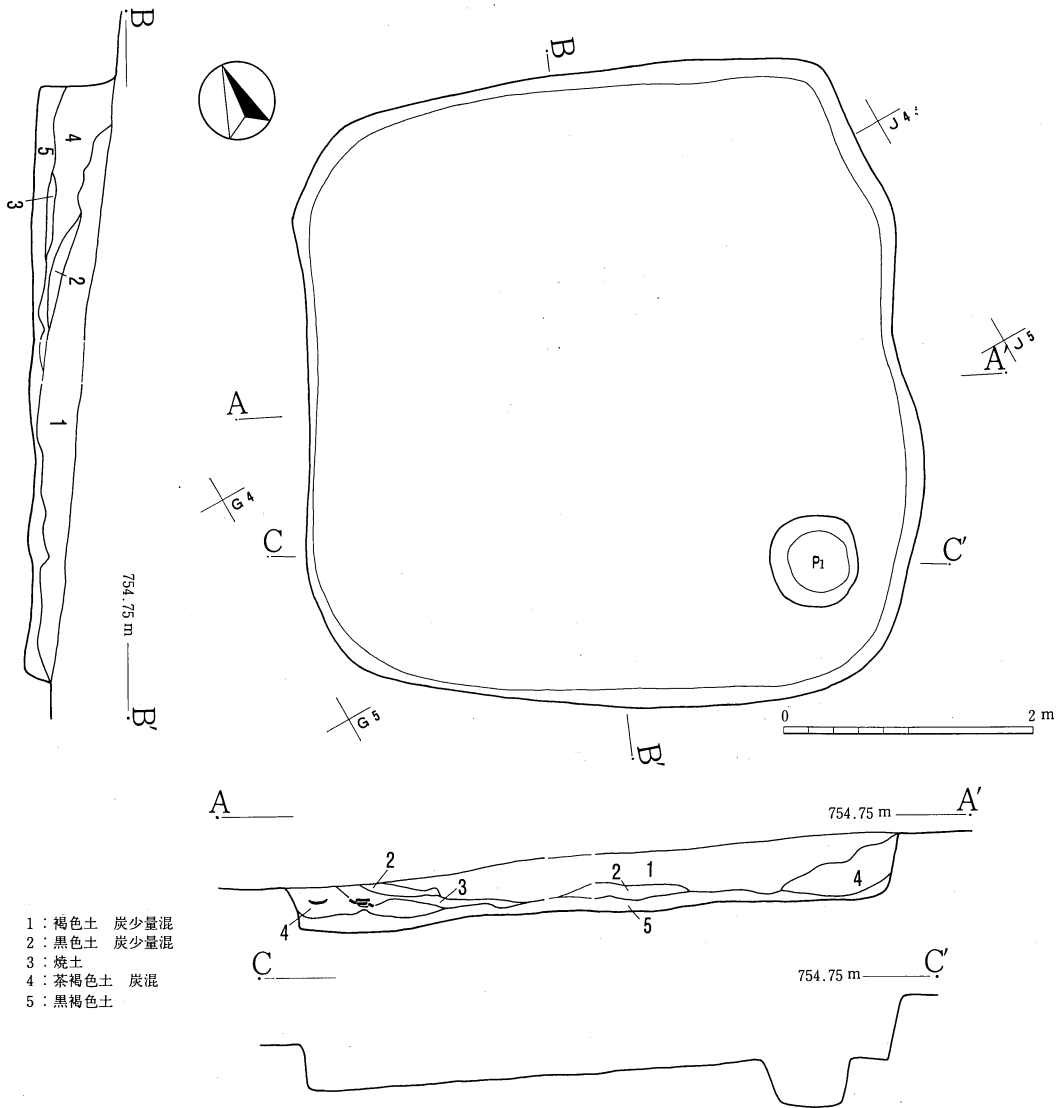


図42 c地区1号住居址実測図



図43 c地区1号住居址遺物分布図

うな在り方は、本住居址の性格を考える上で示唆的である。遺物の出土状況を見ると、平面的には大きく2箇所にかたよる分布を示している。住居の西側と東側への集中で、中間地帯が散漫となり、特に東側に密であることが看取できる。垂直的には、図示したように床面直上から埋土内にわたって厚く分布する。その接合関係を見ると、平面的には近い同志の接合は勿論、東側と西側の離れたまともり間でも接合できた。垂直方向の関係では、先述したように上下位にあるものが偏りをみせず接合していることがわかる。以上のデータは、遺物や埋土が比較的短期間、というよりもむしろほぼ同時に埋没したことを示し、また遺物に挟まれて存在した焼土もこれらの遺物の廃棄と共に行われたのではないかとこの予測が可能となるのである。なお、遺物の接合は住居址内のみにとどまらない。1・2号土壌出土遺物との接合資料も得られている。それも決して少ない事例ではなく、単に偶然の事象として見逃すことはできにくい。住居址と土壌との有機的な関連と、遺物の廃棄、投棄といった行動の背景を知る上で、さらには遺跡の性格を考える上でも示唆に富んだ資料と考える。**その他の施設**：住居址南東コーナー際に直径約70cm、深さ約40cmのピットが存在した。この中からは、高杯、鉢、手捏土器といった、特殊な土器ばかり4個体分がまともって出土している。断面図にその位置を記載してないが、壙底面より5cm～10cm程浮上していた。**床面・壁**：掘り込みは検出面から40cm～50cmの深さを持ち、壁はしっかりしている。しかし、床面はそれ程堅くはない。**炉**：ない。**柱穴**：ない。

**遺物**：先にも触れた通り、本住居址出土の土師器を概観すると、煮沸用具である甕が極度に少なく、大

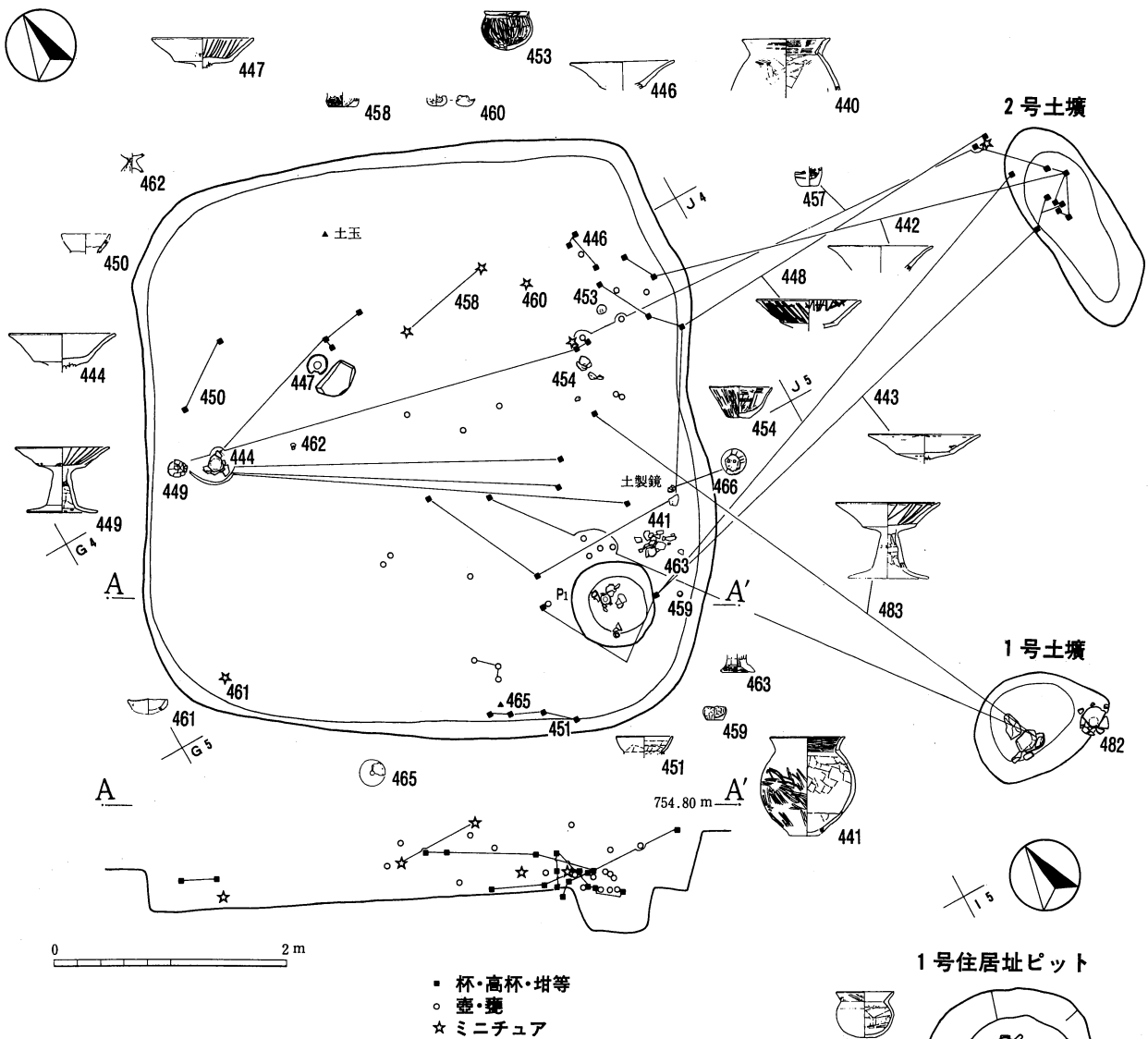


図44 c地区1号住居址遺物出土状況・接合関係図

半を供献形態である高杯、鉢が占め、更に多くの手捏土器がこれに加わる。

**壺(440・441)** 441は底部を欠損するがほぼ完形である。最大径を球形胴部の中位にもち、口縁は「く」の字状に外反する。肩部から底部にかけて、粗いミガキが施される。共に二次焼成を受けており、特に441の胴部外面には多量に炭化物が付着する。

**高杯(442~449)** 破片も含めて、個体数にして15個体以上が確認される。杯部の形態は、すべて杯底部付近に稜を有し、口縁部は外反あるいは直線的に開き、同一型式の範疇で捉えることができる。脚部の形態には、脚柱部が若干ふくらむ円筒形を呈し、裾部との境に稜を有し、裾部が外反気味に開くもの(445・449)と、脚部全体が「ハ」の字状に広がる円錐形を呈し、裾部との境が不明瞭なものとの二者がある。杯部の整形は、内外面ともハケおよびヨコナデの後にミガキの施されるものがほとんどである。ミガキの方向はまちまちで、外面縦方向(442~444・446・449)、左上斜め方向(447・448)、内面縦方向(448)、左上り斜め方向(443)、右上り斜め方向(442・446)、横方向(444・447・449)である。また、ミガキの上に暗文を加える例もある(447~449)。脚部の整形は内外面ともハケおよびナデを主体とし、外面ではさらに縦方向のミガキが施される。なお、脚柱部上半の残存するものには、接合時のしぼり痕をみる。また、高杯のほとんどの杯部内外面に径1mm~5mm大の円錐状剝離が認められ、さらに意識的な打ち欠き痕をもつもの



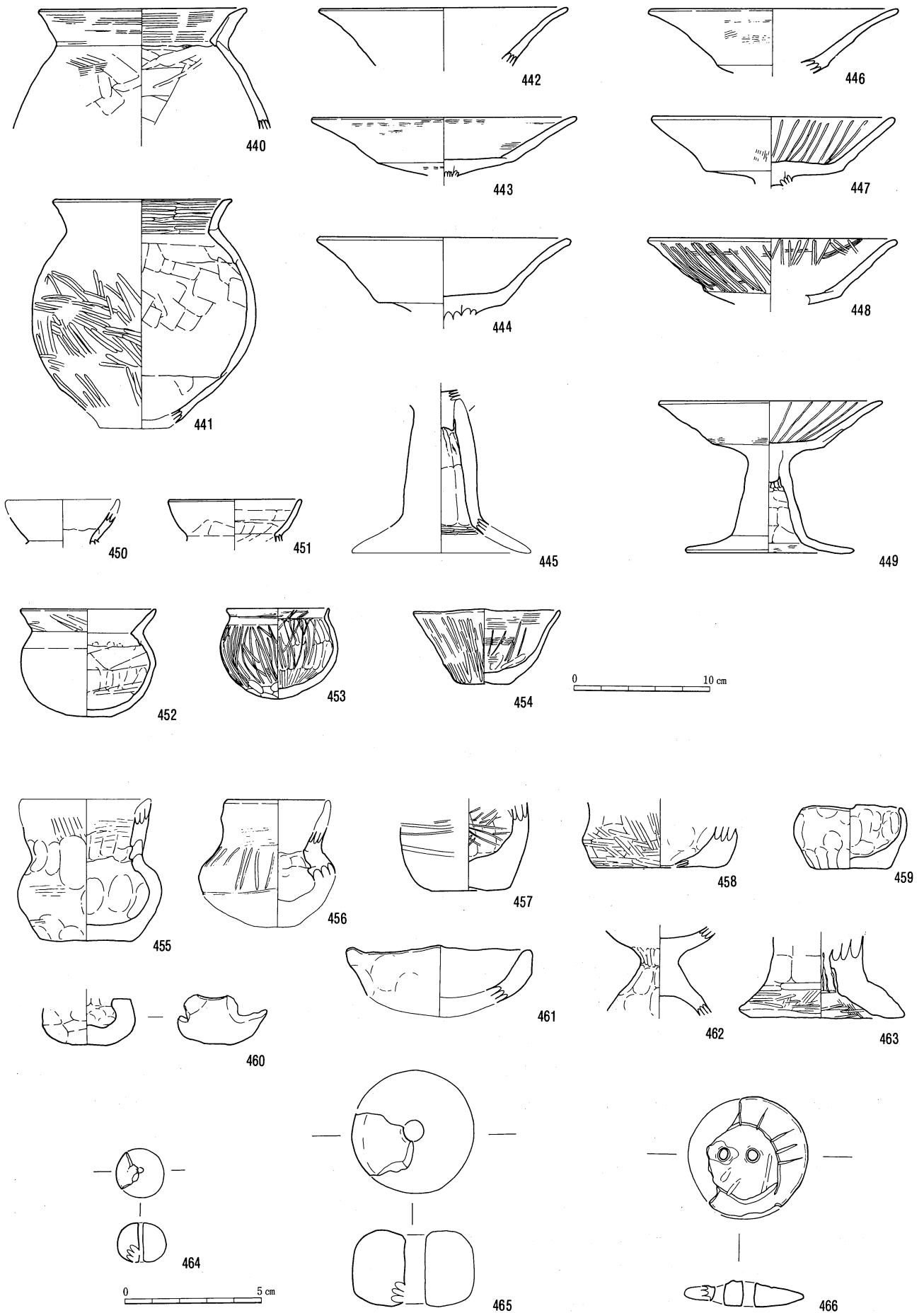


图45 c地区1号住居址出土遺物実測図(455~466=1:2)

さえあった(PL55)ことを特記しておきたい。鉢(450~454) 鉢といっても、椀、杯等様々な呼称が用いられることから、当遺跡では便宜上口縁部が長く立ち上がり、口縁部高と体部高との割合が1:1~1:2のものを埴、他を一括して鉢として扱った。個体数は多く、15個体以上が確認された。450は埴である可能性もある。鉢の形態には、口縁部が短く立ち上がり、球形の胴部をもつもの(450~453)と平底(中央が凹むものも含む)で口辺部が直線的に開くもの(454)とがある。整形は451が内外面ヘラナデなのに対し、他はミガキを用いている。特に453は丁寧な作りといえる。452~454は二次焼成を受けており、体部外面に炭化物の付着がみられる。また、450の口縁端部および頸部には、先の高杯にあったと同様の意識的に行われたと思われる打ち欠き痕が認められた。手捏土器(455~463) 多数の手捏土器には、壺・埴(455・456)、高杯(462・463)、杯(461)をそれぞれ模倣したもの等がある。整形は手捏ねの他に、粘土紐の巻き上げや輪積みもあり、その後指ナデにより器面を平滑にし、ミガキ、ヘラナデ等が加えられている。土製品(464~466) 土玉(464)、紡錘車(465)、模造鏡(466)が出土している。464・465は破片で、指ナデにより器面を調整している。模造鏡とした土製品(466)は、円形を呈し復元径4.4cm、最大厚1.0cmを測り、中央には径5mmの一对の孔を穿つ。整形は両面とも指ナデで、背面にはヘラによる沈線で文様が描かれる。その文様は中程に同心円を描き、その半円部分に外側にむかってヒゲ状ないしは放射線状に短線が刻まれる。文様が珠文鏡のそれに似るところがあり、また形態的には石製円板(石製模造鏡)に通じ、2孔は紐をあしらっているとも解釈できる。

**時期：**出土土器は関東地方土師器編年の和泉式に含まれると思われる、5世紀後半と考えられる。

② 2号住居址 (図46・47、PL 53・56)

**検出：**1号住居址の西方約3mに、1号住居址の南西コーナーと向かい合うように位置する。地形的には南西側に向かって著しく傾斜するところに位置するためか、南西部はすでに検出できない状況であった。遺構検出時にIII層である褐色土を掘り込んだ落ち込みが認められ、住居であることを確認した。**規模・形状：**南西部を欠くため推定となるが、残る北側辺が約5m程あり、これを一辺とする方形ではなかったかと思われる。軸方向はW21°Nで、ほぼ1号住居址と同じといえる。**埋土：**埋土の堆積は薄く、その性格については判断できにくい。遺物の出土状況からやはり人為的埋没と思われる。**床面・壁：**南西側については床、壁ともに確認できていない。残存部の床面については1号住居址同様、堅い床ではなかった。また、壁は北側において約30cmの高さで、明瞭に認められた。**炉：**ない。**柱穴：**ない。**その他の施設：**東壁際のほぼ中央にあたる位置に、径約60cm、深さ約30cmのピットが存在した。このピット内からは、やはり完形の鉢や埴が、壁に接するように壙底より約10cmほど浮上して出土している。**遺物の出土状況：**遺物とその出土状況は1号住居址の様相に似る。ただし、量は1号住居址に比べると少なく、その平面分布も散漫である。強いていえば住居址東壁側に多い。手捏土器もこの東壁に沿って分布する。垂直分布に関しては、埋土の上下層にかかわらず出土するという1号住居址と同じ様相と考えてよいが、接合関係については、比較的近い範囲の接合にとどまり、また、本址外との接合は認められなかった。

**遺物：**供献形態である高杯、埴、鉢を中心としており、特に高杯の割合が高い。甕等の日常什器はほとんどなかった。いずれも土師器である。**高杯(468~472)** 破片を含めて10個体以上が確認された。杯部及び脚部形態は、1号住居址のものと同様であるが、他に口縁部が若干内湾するもの(469・472)がある。杯部の整形は内外面ともハケ及びヨコナデの後にミガキの施されるものが主だが、472のみはヘラナデだけでミガキは確認されない。ミガキの方向は外面タテ、内面ヨコ方向(468)、あるいは内外面左上リナナメ方向(469・470)で、469・470の内面は、最初に右上リナナメ方向のミガキを行い、その後さらに左上リナナメ方向のミガキが施されている。脚部の整形は、内外面ともハケ及びナデを主体とし、外面ではタテ方向のミガキが加えられている(471)。471の脚柱部外面中程には長さ5.5mm、幅2.9mmの靱痕が残されているが、これは土器の表面についたものではなく、胎土中にあった靱が焼成時にはじけると同時に土器表面の剥落がおこり、

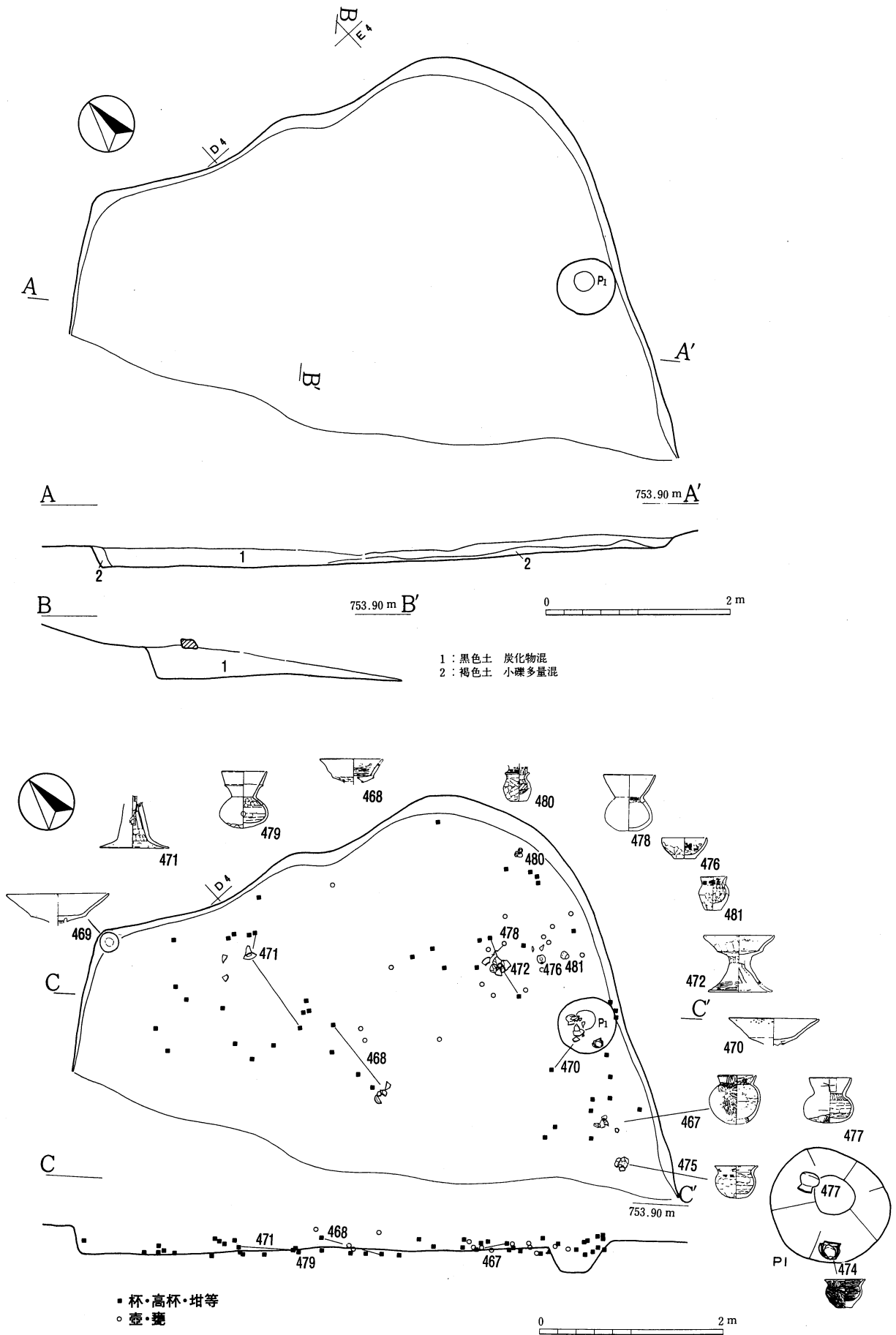


図46 c地区2号住居址実測図・遺物分布・接合関係図

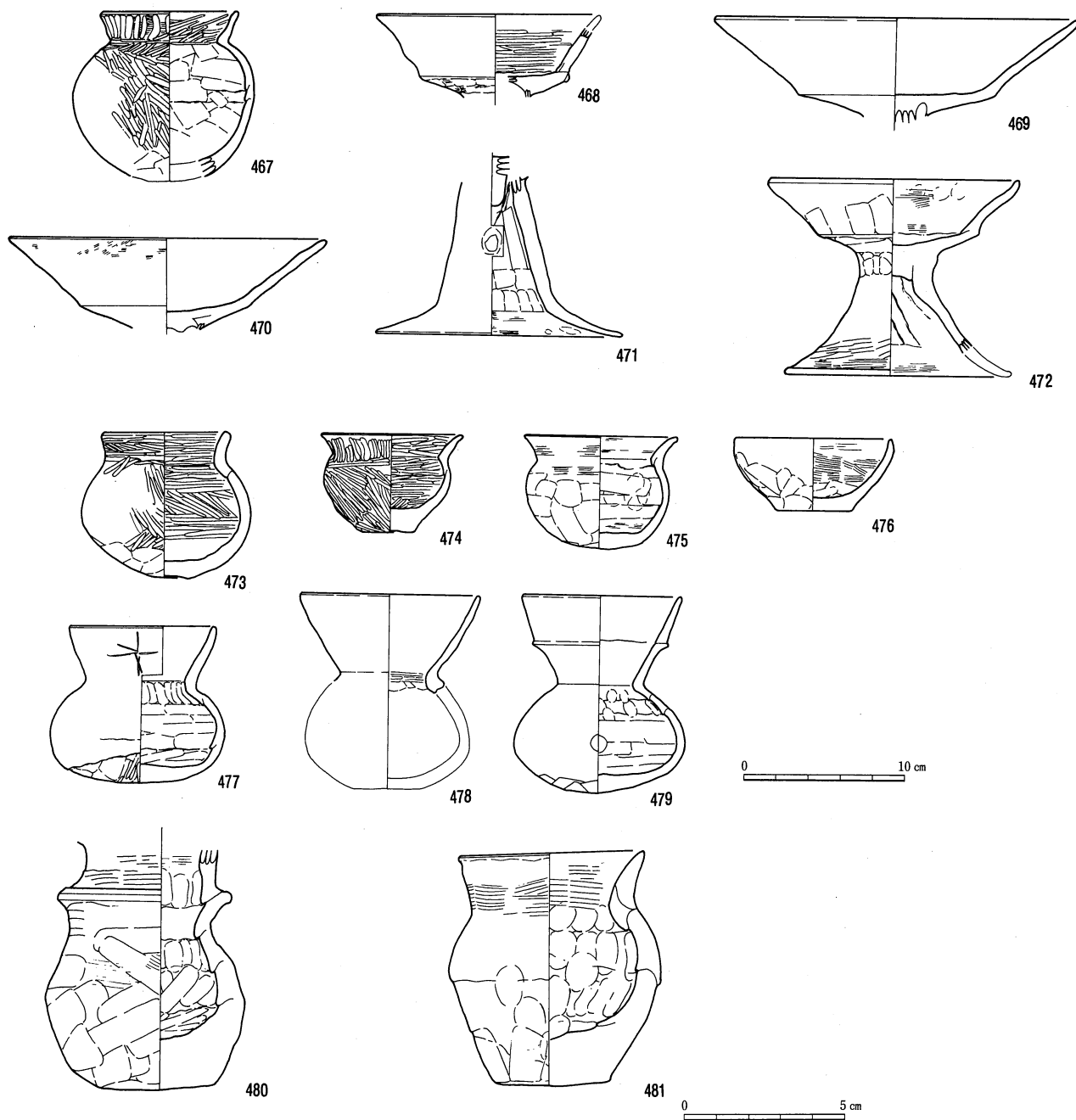


図47 c地区2号住居址出土遺物実測図 (480・481=1:2)

表に現れたものである。468は杯部上半部の接合部より剥離しているため、高杯の接合状態を知る上で良好な資料である。杯部内外面には1号住居址出土の高杯同様、円錐状の剥落が認められる。また、破片には意識的な打ち欠きと思われる欠損状況を示すものが多く確認された(PL55)。

**鉢**(473~476) 6個体以上が確認された。形態的には口縁部が短く立ち上がり、球形の体部をもつ丸底(475)及び平底(473・474)、口辺部が内湾して立ち上がる平底(476)等がある。整形はハケ及びナデ等が主体で、474には内外面とも細かなミガキが施されており、他に比べて丁寧な作りといえる。474・475は二次焼成を受けており、体部外面に炭化物が付着する。

**罎**(477~479) 5個体分以上が確認される。いずれも扁平で下膨れした体部と内湾する口辺部を有する。整形はナデを主体とするほか、477・478の口辺部外面にはタテ方向のミガキが施される。477は完形で、口縁部外面に線刻を付す。479は甕の模倣品と考えられるが、穿孔部は欠失する。477・479は二次焼成を受けている。

**手捏土器**(480・481) 2個体が出土した。481は壺のミニチュアで完形である。左回

転方向の粘土紐の巻き上げ成形される。480は甕の口縁部に横方向の粘土紐を貼付し、さらに上方に伸びる様子であるが欠損する。甕と甕のセット状況を模したものと思われる。整形はハケ、ヘラナデを主体とし、指オサエの痕跡を残す。

**時期：**出土した土器は1号住居址と同様和泉式に含まれると思われる、5世紀後半と考えられる。

#### イ 土 壙 (図48、P L 53・56)

##### ① 1号土壙

発掘区のほぼ中央、1号住居址の南東約2.5mに位置する。平面形態は卵円形を呈し、長軸約1.2m、短軸約0.8mの規模を有する。検出面からの掘り込みは深い所で20cm弱である。特に東側では掘り形が緩やかになっている。遺物はその東西両側から出土している。共に高杯の杯部で、東側では正位に置かれ壁に接した状態で出土した。西側では斜位に、そしてその上には幼児頭大の石がおかれていた。なお、この高杯の脚部は1号住居址内より出土している。また、この石の北側にもう1個同大の石が置かれていた。

出土遺物は高杯の杯部2点で東側にあった482と、西側にあった483である。共に杯部形態は1号住居址の高杯と同一で、底部付近に稜を有し、口辺部は若干外反して立ち上がる。483の内側には縁に沿って一条の沈線が巡り、また、暗文も施される。483にみられる脚部形態も1号住居址の脚部と同様といえる。杯部には内外面ともミガキが施されており、その方向は482が左上りナナメ、483は外面タテ、内面右上りナナメとなっている。なお、残存状態についてみると、483は杯部は完形であるが482は口縁部を3分の1程欠いている。その欠損面は特異で、磨かれたように摩耗している。人為的に研磨されたものと思われる。482の口縁部外面には長さ6.25mm、幅3.35mmを測る靱痕が認められる。これは、2号住居址の471と同様、胎土中に含まれていた靱がはじけると同時に土器表面も剝落した結果生じたものと思われる。

##### ② 2号土壙

1号土壙の北東約3.1m、1号住居址東方約2.9mに位置する。平面形は長軸1.8m、短軸0.7mの楕円形を呈する。深さは約20cmで、長軸方向の断面形は舟形となる。遺物の出土は比較的多く、平面分布は遺構内全面に散在する。また垂直分布では、覆土内の上下層にわたっており、その接合も上下に及ぶ。従って、覆土は分層できたものの、人為的な埋め戻しが想定される。遺物は破片が多いが、大半は高杯であり、接合により半分ほどまで復元できた高杯杯部(484)と、同じく脚部(485)がある。なお、1号住居址の項でも触れた通り、1号住居址の遺物と多くの接合関係をもつことは注目される。

出土遺物は、復元できた484を含めて高杯4個体分の他、鉢、甕の破片が出土している。484の高杯については、やはり1号住居址例と同様、杯部底部付近に稜を有し、若干外反して立ち上がる口縁となる。整形は内外面ともミガキが施されており、その方向は外面タテ、内面右上りナナメであった。485の脚部は「ハ」の字状に広がる円錐形を呈し、脚柱部と裾部の境が明瞭となっている。なお、485の脚部には内側より故意に打ち欠かれたと思われる痕跡が観察される。

##### ③ 3号土壙

1号住居址と2号土壙のちょうど中間に位置する。東西方向に長軸をもつ不整楕円形を呈し、長軸約55cmの規模となる。3基の土壙中最も小さい。また、前記土壙と異なり、ほとんど遺物を含まない。

#### ウ 集石土壙 (図49、P L 54)

##### ① 1号集石土壙

1号住居址の東方約10mにあり地理的・地形的環境からして、本遺構が本遺跡の最も東端の位置にあたる遺構といえよう。

直径約1.5mのほぼ円形の平面プランを呈し、土壙の断面形は深さ約65cmの台形様となる。この中に、拳大を中心とする礫が多数詰まっている。この礫の大半は火熱を受けており、また、礫間の覆土中には炭化

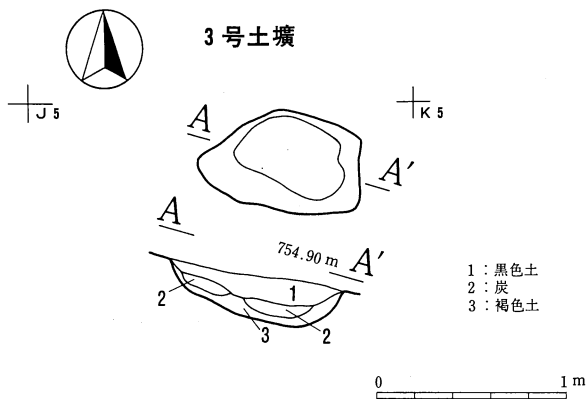
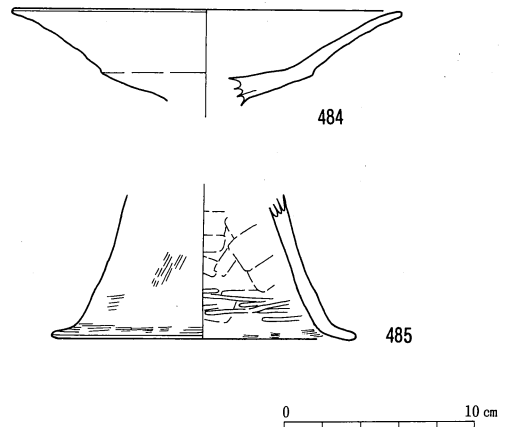
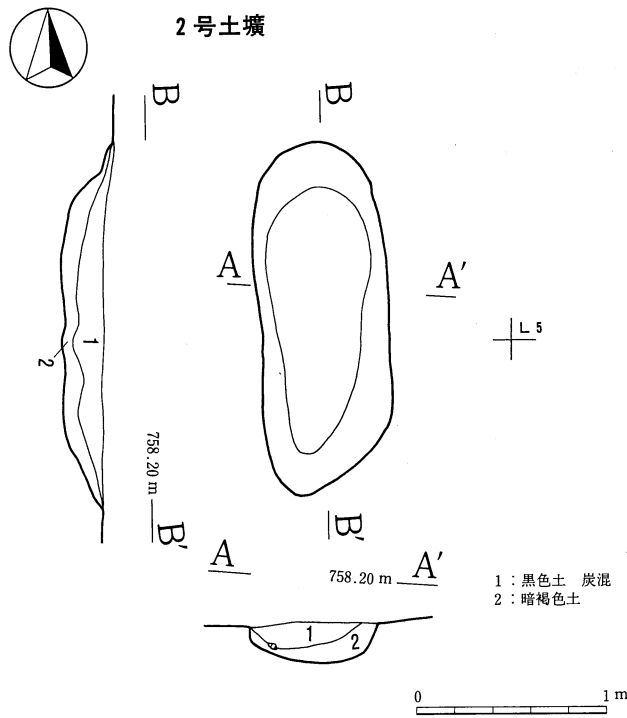
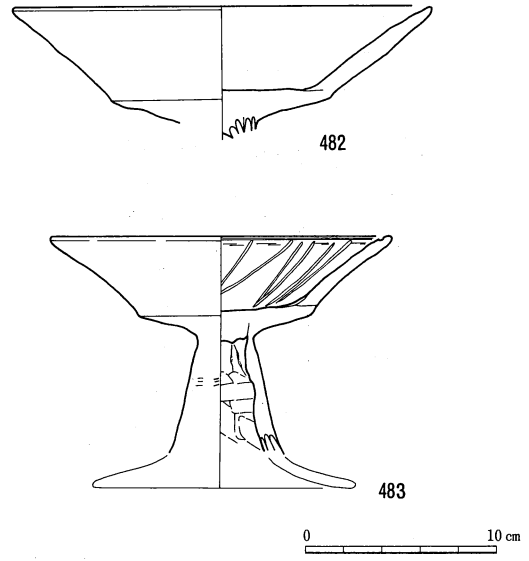
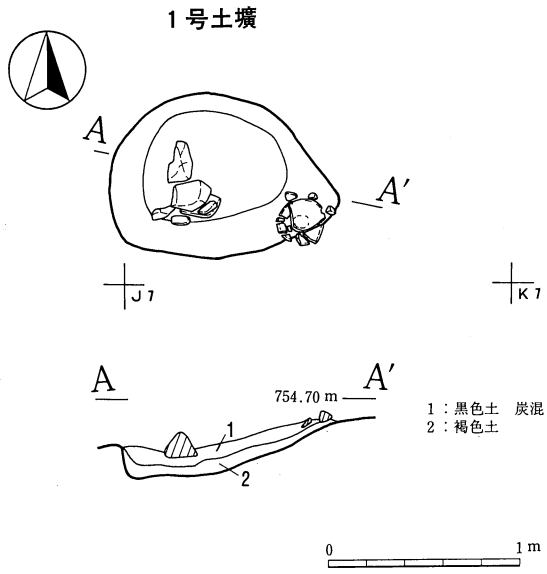


図48 c地区1~3号土壙実測図・出土遺物実測図

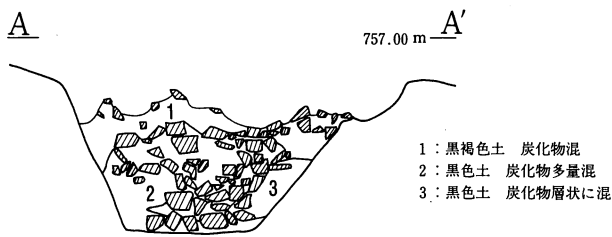
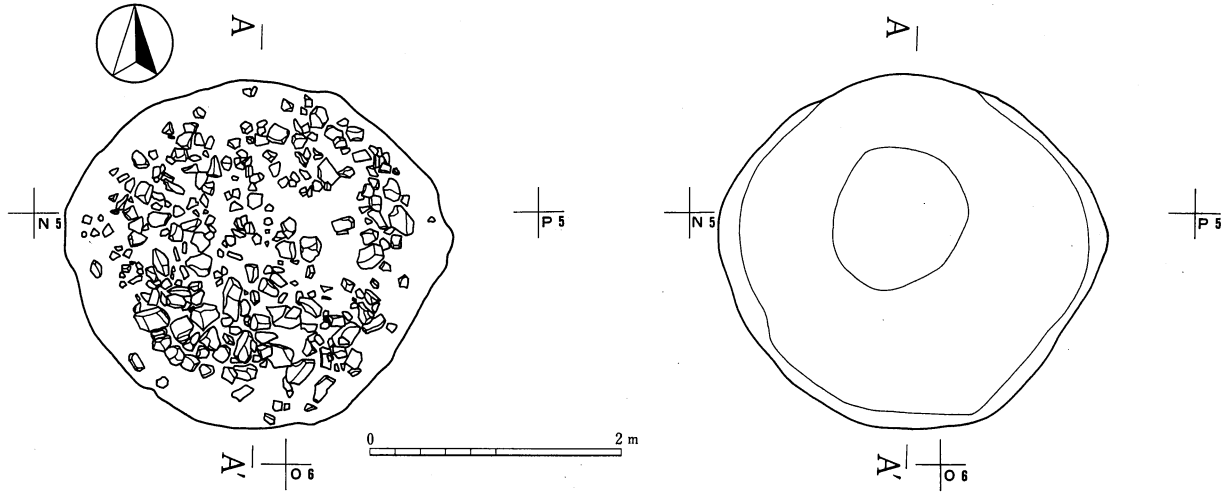


図49 c地区1号集石土壌実測図 (1:60)

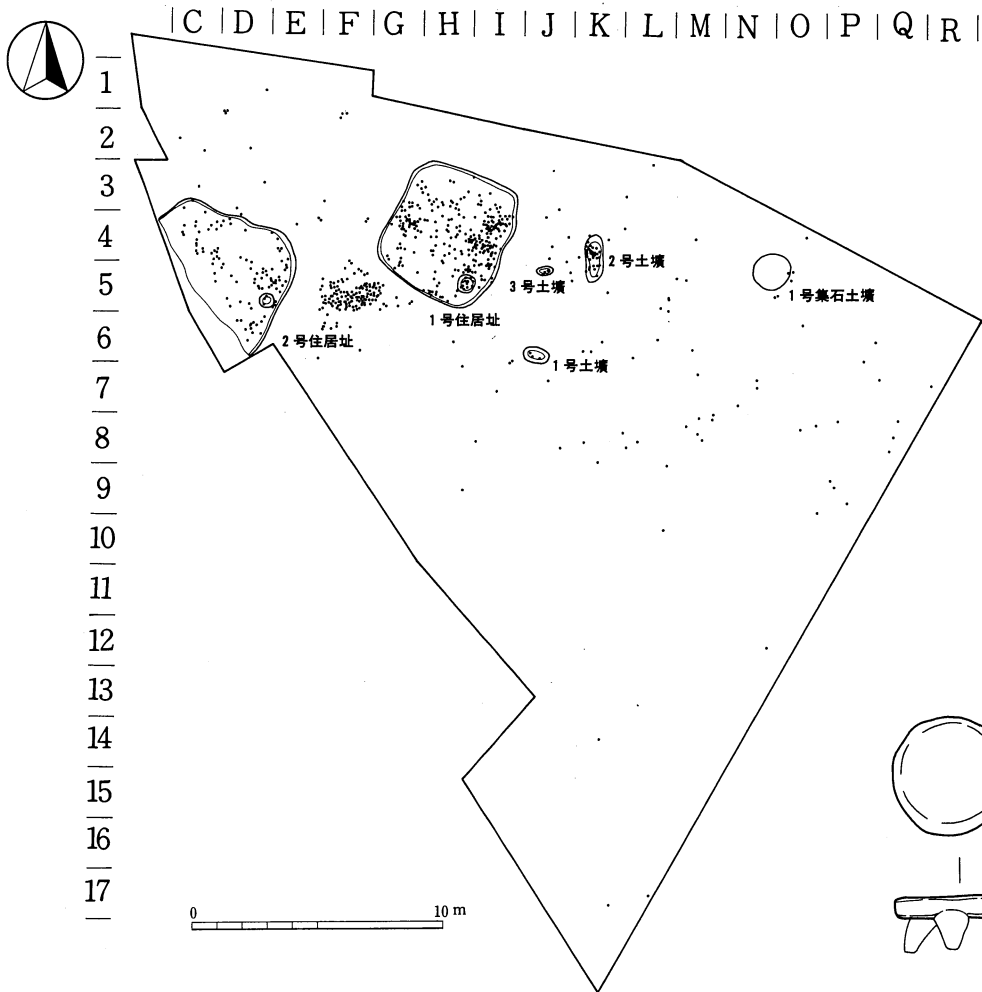


図50 c地区古墳時代遺物分布図 (1:300)

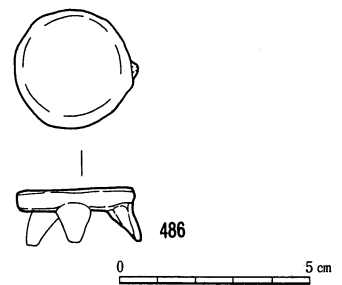


図51 遺構外出土遺物実測図 (1:2)

物が多量に詰まっていた。構造的には、b地区の集石炉にあったような壙底に大形の礫を組み合わせたものではない。なお、この礫間から2点の高杯破片が出土した。その時期は前記遺構群と同一の時間内に納まるものと思われる。

また、本土壙は完掘後1時間ほど経つと、半分ほどまで水のたまることが観察された。他の部分に試しに深く穴を掘ってもこのような現象は得られず、地下水脈を知った上での所産かとも思われ、水と係わりの深い遺構であったかとも推察される。

エ 遺構外出土遺物とその出土状況 (図50・51)

本遺跡の遺構内外から出土した遺物の分布状況を平面的に図化したのが図50である。この図から、発掘区北半分に多く、また、1号住居址と2号住居址の間には、特に遺物の集中する地区のあることがわかる。ここには土器の破片のみが集まっており、整理作業においては遺構内遺物との接合等に注意を払ったが、実際にその関係をつかむことはできなかった。しかし、その場所や欠けた破片から遺構内遺物と何らかの有機関係の持たれていたであろうことが予測され、その可能性を指摘しておくことにしたい。ここから出土した小土器破片のほとんどは高杯と思われる。

なお、486は本地区の表採品であるが、三足盤のミニチュアと思われる珍しい例である。須恵質の土器で、2足を欠損する。整形は指ナデによるもので、手捏ね様の土器である。本地区から須恵器は発見されておらず、その年代や性格を含めて、本地区の遺構と関連があるか否かは、残念ながら不明とせざるを得ない。

5 成果と課題

(1) 集石炉をめぐって

本遺跡及び竜神遺跡の集石炉については、その機能を探る上での資料として、構成礫の石質、重量、焼礫、自然礫の区別という点に特に着目した調査が行われた。ただし、礫個々の出土地点及び層位、完形礫、破損礫の別、礫の接合状態、礫の付着物の有無などといった諸点については、調査時の記録がなく資料化することはできなかった。また、礫個々の重量についても絶対値ではなく、100g~200gといったような一定の幅(100g単位)をもった資料であることをつけ加えておく。ここでは、こうした構成礫の分析を中心

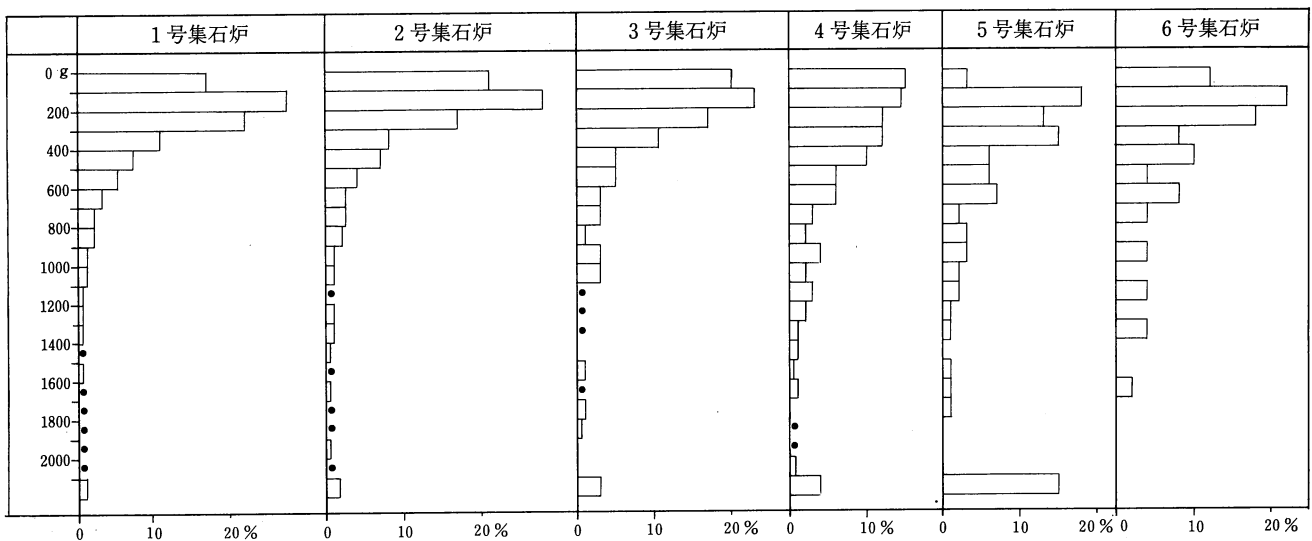


図52 集石炉の構成礫重量別割合



に、集石炉の形態や他遺構群との関連を考え合わせながら集石炉について検討を加えていく。

ア 集石炉の構成礫について

構成礫の石質は、安山岩、多孔質安山岩、石英閃緑岩、玢岩、泥岩、ホルンフェルス、砂岩、硬砂岩、緑色凝灰岩、凝灰岩、礫岩と古生層を起源とする礫である。これらは、本遺跡周辺の川等にみられる礫であり、集石炉構築にあたり、周辺の川辺から持ち運ばれてきたものといえる。なお、本遺跡一帯は地質的にいっても安山岩地帯であり、様々な石質の中でも安山岩の占める割合が非常に大きい。したがって、集石炉構成礫の中でも安山岩の占める割合が大きいのも肯首できる。

構成礫の重量別点数をグラフ化したものが図52である。これをもみても明らかなように、重量別の礫の在り方から、集石炉は4種に分類される(図53)。

Aタイプ(1・2・3号集石炉)は、100g～200g(鶏卵大)に集中している。グラフでいえば、ピークが極端に高く急峻で裾野の広い曲線を描いている。

Bタイプ(4号集石炉)は極端な集中がない。なお、拳大以下に集中するという傾向は、Aタイプと同様であるが、100g未満の礫が最多である点など異なっている。

Cタイプ(5号集石炉)は、100g～200gと2001g以上というように二つのピークがある。また、100g未満の礫が非常に少ない点が特徴的である。

Dタイプ(6号集石炉)は、100g～200gに集中はみせるが、特に1500g以上の礫がないという特徴をもつ。

Aタイプに属する1・2・3号集石炉は、1号集石炉と2・3号集石炉では礫の総数および焼礫の占める割合(図54)、1・2号集石炉と3号集石炉は掘り込みの有無といった点でそれぞれ異なっている。一方、1号集石炉は西群(諸磯c式期)で2・3号集石炉は東群(中期初頭～狛沢式期)に属する遺構であり、時期が異なっても重量別の礫の在り方は同様である。さらに、東群では集石炉の形態が異なっているにもかかわらず重量別の礫の在り方は同様である。したがって、本遺跡の場合、集石炉の礫の在り方はAタイプが一般的であるといえよう。

遺構群として捉えた場合、西群では同形態の集石炉が2基ずつあるが、重量別の礫の在り方はそれぞれ異なっている。遺構分布をみると、火床群を中心に北に1号集石炉及び1号竪穴状遺構、南に4・5・6号集石炉というまとまりが捉えられる。Aタイプに属す1号集石炉を除いて、ここでは4・5・6号集石炉に注目し、それぞれを比較検討してみたい。

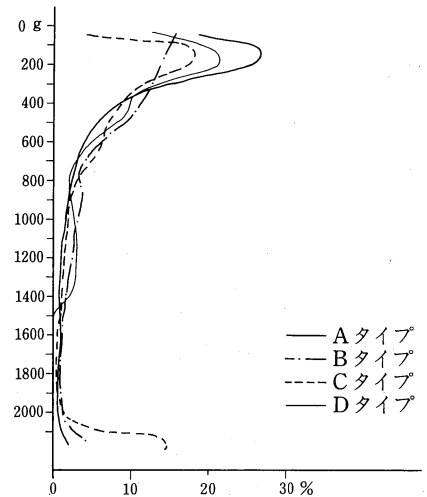


図53 重量別の礫の在り方

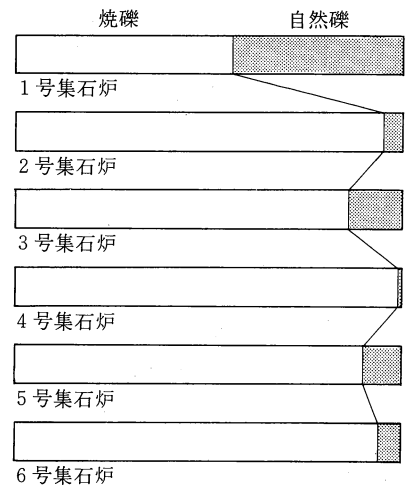


図54 焼礫と自然礫の割合

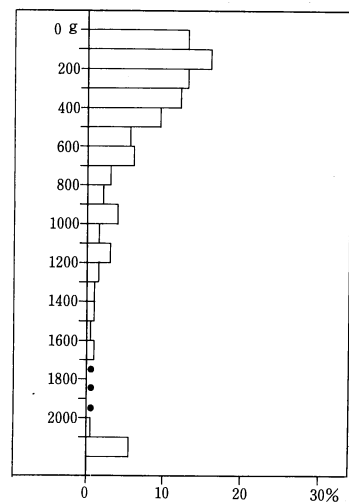


図55 4～6号集石炉全構成礫重量別割合

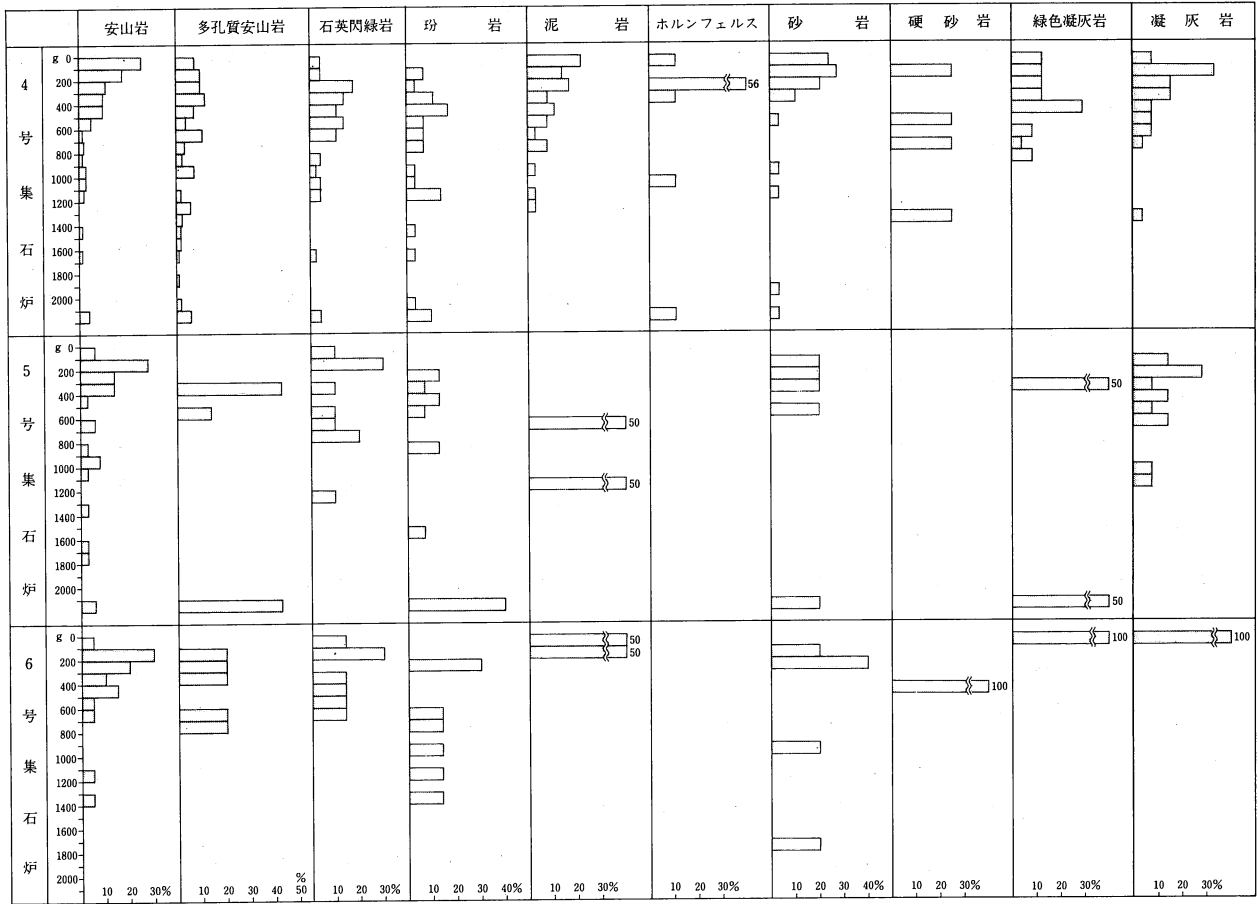


図56 4～6号集石炉構成礫・石質別・重量別割合

4号集石炉では100g未満の礫が最多であるのに対し、5号集石炉では100g未満の礫が非常に少ない。また、6号集石炉では400g以上の礫がほとんどないのに対し、4・5号集石炉ではそれがあるという状況がみられる。次に石質毎に重量別の礫の在り方をみとめる(図56)。4号集石炉の多孔質安山岩、石英閃緑岩、珩岩では、特定の重量を中心として極端に礫が集中するというのではなく、ほとんどの重量に礫がみられる。これは、材質という点に特に注目され集められた結果を意味していると考えられる。これら三者は、いずれも火熱を受けても割れにくいという特徴をもつ石質の礫である。5・6号集石炉の多孔質安山岩、石英閃緑岩は偏在性をもっている。特に5号集石炉の多孔質安山岩では、300g～400gと2001g以上という二極があり、これは何等かの目的のため、または行為の結果として必要とされる礫が外部に持ち運ばれた、あるいは礫が集められたということを示していると考えたい。同様なことは5・6号集石炉の珩岩についてもいえる。礫の数が少ないため極端な集中とはいえないが、そのピークが5号集石炉では重い方に、6号集石炉では軽い方にと対照的である。これらの点からいっても、多孔質安山岩、石英閃緑岩、珩岩は材質という点で注目されており、一方構成礫の4割近くを占める安山岩は4・5・6号集石炉とも、特定の重量を中心として極端な集中をみせるAタイプと同様な在り方を示している。その中で4号集石炉についてはそのピークが100g未満にある点、他とは異なっている。また、5・6号集石炉の安山岩ではその100g未満の礫が非常に少ない。これは安山岩の100g未満の礫が5・6号集石炉から4号集石炉に集められた結果といえないだろうか。仮にそうであれば先の三者が材質という点で注目されているのに対し、安山岩は重量(大きさ)に注意が払われたといえる。安山岩は量的にも多く入手しやすい石質の礫であることから、むしろその大きさに注目したことは自然といえる。また、安山岩は火熱を受けると割れやすくなるという特

徴をもつ石質である。先の5・6号集石炉→4号集石炉という図式が成り立つならば、火熱を受けて小さくなっている5・6号集石炉の安山岩の礫の中から特に小さくなったもの(100g未満の礫)を選択し、4号集石炉に持ち運んだといえるのではなかろうか。

以上のように、遺構の分布のみからではなく重量別の礫の在り方からも4・5・6号集石炉は何等かの関連があることが示唆され、特に、礫構成の在り方からいえば必要を充たす礫の補充の仕方などを示すものと考えられる。ところで、試みにその三者を総合したところ、重量別の礫の在り方は図55のようになった。これはAタイプに近い在り方を示している。Aタイプは前述のように集石炉に一般的にみられる礫の在り方であり、その意味においても4・5・6号集石炉の補完性を強調しておきたい。

#### イ 集石炉の機能と礫の移動

集石炉の中の焼礫の在り方、また、集石炉構成礫の中には材質選択の意図が窺えるものがある点などから、礫はまず焼かれるために周辺の川等から遺跡内に運びこまれたと考えられる。そして、それら焼礫はその特性を生かすべく何らかの目的のために利用されている。では、何のために礫が焼かれたのか、また、焼礫はどのように使われたのだろうか。これはそのまま集石炉の機能に関わる問題である。ここではそうした点について検出されている遺構、礫の状態など最近の研究の成果をふまえて検討してみたい。

##### ① 礫はどこで焼かれたか

遺構内で火が使用された痕跡が認められるものとしては、集石炉と火床があげられる。

集石炉は前述されているようにその形態から二種に分かれる。1つは掘り込み内に焼礫が集積されているもので、1・2・4号集石炉が相当する。もう1つは平面的に焼礫が集積されているもので、3・5・6号集石炉が相当する。以下、前者をa型、後者をb型と称する。b型集石炉は礫間及び遺構周辺に焼痕及び焼土、炭化物はみられず、b型集石炉では礫を焼いた可能性はないといってよい。したがって、そこに集積されている焼礫は他所で焼かれたものを集めたものと考えざるを得ない。一方a型集石炉はいずれも壁の一部に焼痕があり焼土、炭化物が掘り込み内に多量に含まれることから、遺構内で火が使用されたことは明白である。しかも、多量の焼礫が共存することから、ここで礫が焼かれていたことはほぼ間違いないものと思われる。

火床はその名のとおりに、火床面と焼土粒子が分布する遺構である。これについては前述されているように、長時間あるいは一時に大量に火が焚かれた結果つくられた遺構である。したがって、ここで礫が焼かれたことは十分に考えられることであり、その可能性は非常に高いといえるだろう。

以上のことから礫を焼成し得る施設はa型集石炉と火床ということになる。a型集石炉で礫を焼くためには火が焚かれている掘り込み内に礫を投入していく方法が考えられる。掘り込みが深いので、結果として礫を積み上げていくことになる。また、その範囲は掘り込みの規模によって規制され、その上、上位の礫に熱は伝導しにくいという短所がある。したがって、多量の礫を一度に焼くには不向きな施設であり、また、それが主目的ではないことが考えられる。これに対し、火床は地面あるいは浅い凹みを基盤として火が焚かれ、その中に礫を投入する方法をとる。礫を多量に焼く場合はその範囲を広げ、少ない場合は狭めればよい。それを示すかのように火床の規模はまちまちでプランも一定していない。また、a型集石炉に比し遺構数が多いことが指摘できる。したがって、礫の焼成施設としては火床の方がより適しており、火床が主でa型集石炉が従といった関係が想定できる。

##### ② 集石炉の機能について

焼礫は直接火を用いないで物に熱を伝導することができるという特性をもっている。この特性を利用して、焼礫が調理、あるいは懐炉などに使用されていたことが知られている。

焼礫を利用した調理方法の中で多量の焼礫を用いるものに、ミクロネシアなどの民族例に代表される

earth-ovenがある。この施設は地面を掘り凹め、その中で火を焚き食物を入れ、その上に焼礫を数多く投入し、さらに土などで穴をふさいで食物を蒸し焼きにするものである。これらが集石炉を石蒸料理施設とする説の有力な根拠として一般化しつつあるようである。この他、焼礫利用の調理方法は平板な焼礫の上に食物をのせ焼く方法(stone-baking)や、水をはった容器の中に食物を入れ、さらに焼礫を投入し沸騰させ調理する方法(stone-boiling)などがあるが、いずれもearth-ovenほど多量の礫を必要としない。

a型集石炉は先述したように炉として捉えることができる。ただ一般的に炉というものは火及び焼く、あるいは熱する対象物(食物・容器等)を容易に操作することが可能な施設であり、効率の良い熱の利用が配慮されている施設でもある。a型集石炉のように掘り込みが深い炉として縄文早期の炉穴があるが、これは掘り込み内に人間が入って火等を操作することが可能であり、さらに煙道部も一種の炉として利用することが可能な施設であったと考えられる。しかるに、a型集石炉は掘り込みが深いばかりでなく、掘り込み内に人間が入って火等を操作することは難しい施設である。と同時に、先のearth-ovenに酷似する形態をもっている。このことは、a型集石炉は炉であると同時に単なる礫焼成施設としてではなく、石蒸料理が行われた施設であったことを示唆していると考えたい。

一方、b型集石炉は炉としては捉えられない。しかし、焼礫の特性を利用した一種の炉であったと考えられるものの、礫の点数や分布範囲、焼礫の在り方、付近に同様な施設があることなどから、その可能性は低いといえるだろう。むしろ、a型集石炉で使用された焼礫の置場として捉えた方が自然であろう。ただし、3号集石炉についてはa型集石炉と礫数の上でも遜色なく、重量別の礫の在り方もAタイプを示している。焼礫の分布範囲も他のb型集石炉に比しはるかに大きいものである。またearth-ovenの中にも焼礫を地面に積み上げる例は存在する。したがって、3号集石炉はある種の炉であった可能性を残しているといえる。この3号集石炉がa型集石炉と同様に調理施設であったとしたら調理対象物の違いによる使い分けなどといったことを考えていかなければならないだろう。

以上、集石炉の機能についてみてきたが、ここでは、a型集石炉を石蒸料理の行われた調理施設、b型集石炉を石蒸料理を行うために焼かれた礫の置場として捉えておく。ただし、3号集石炉に関しては、調理施設の可能性もあることをつけ加えておく。

③ 礫の移動

先述した4・5・6号集石炉にみられた補完性とa型、b型集石炉の機能を前提として、礫の移動を復元したものが図57である。

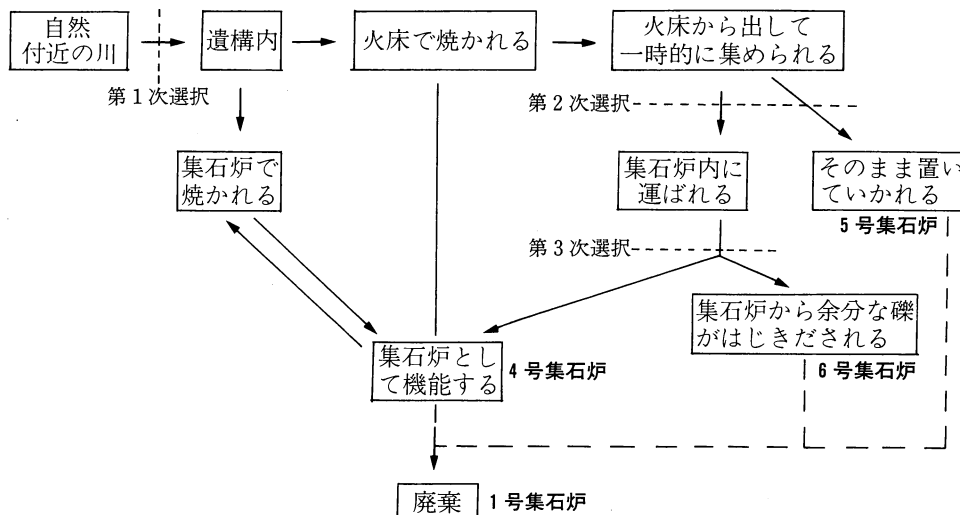


図57 礫の移動復元モデル

遺構内に礫が大量に持ち込まれ、まず火床で焼かれる。焼礫は火床から取り出され、5号集石炉が形成された地点にまとめられる。さらにここから、4号集石炉で石蒸料理を行うために、焼礫が4号集石炉へと運ばれる。その際に取り残された焼礫群が5号集石炉である。一方、4号集石炉では火が焚かれ、ここでも礫が焼かれ、次に食物が投入される。その上にここで焼かれた礫や先の焼礫が投入され石蒸料理が行われる。この工程の中で不用となった礫が、4号集石炉の傍らに集められる。これが6号集石炉である。こういった工程が繰り返され、4・5・6号集石炉が形成され、残されていたと考える。こうした調理の工程は、谷口氏のいう「充填型集石土壙」における石蒸料理の工程である「充填法」に合致するものと考えられる。また、a型集石炉はその「充填型集石土壙」に相当するものである。

5号集石炉から4号集石炉への礫の動きは、重量別の礫の在り方が一つの根拠となる。4号集石炉から6号集石炉への礫の動きも同様である。また、6号集石炉は4号集石炉の焚き口側に近接した位置にあり、また、5号集石炉は火床に近い位置にあり、遺構分布の面からも上記のことがある程度想定でき興味深い。

遺構の状況は、当時の人々の施設利用、あるいは何等かの行為の最終段階を示すものであり、さらに後世の人的、自然的作用の加わった総体を示している。本遺跡の場合、後世の人的、自然的作用が極めて少ない遺構である。したがって、4・5・6号集石炉については、石蒸料理の工程のある段階で人の手が加わらなかったことを示しており、その段階とは石蒸料理が終了した段階と考えられる。一方、1・2号集石炉などのようにAタイプの礫の在り方を示すa型集石炉では、石蒸料理が終了し、利用した礫を掘り込み内に集めた状態で人の手が加わらなくなったと思われる。このことは、4・5・6号集石炉の礫を総合するとAタイプに近い礫の在り方を示すことから指摘できる。また、3号集石炉については、機能について今一つ不鮮明であるため、火床で焼かれた礫がすべて集められたものか、あるいは1・2号集石炉と同様なことがいえるのか検討の余地を残している。

以上に述べてきたことは仮説であり、もとより、一遺跡の資料で語り得るべき内容の問題ではない。同様な資料の集成と遺跡の性格の把握、周辺遺跡との関連の追求などが必要なことはいうまでもない。しかしながら、県内ではそうした資料が無に等しい状況にあって、本遺跡ではa・b型集石炉と火床という良好な資料に加え、構成礫の石質別、重量別のデータに恵まれたためあえて述べてみた次第である。

本遺跡で検出された集石炉のような遺構については、その名称もまちまちであり、また、資料としての扱ひ方もぞんざいである。県内で類例を探すため、各報告書にあたったところ、その存在は記されているにもかかわらず、図面、所見、あるいは一覧表にすら報告されていない報告書がしばしば見受けられた。図面が掲載されているものに関しても、断面図には礫のドットすらなく、また、上面のみの調査で終わっている遺跡も少なくない。礫が掘り込み上面に集中するものと、礫が掘り込み内にも含まれるものとは、機能が異なるという指摘がなされている〔杉山博久1981、上田典男1983、谷口康浩1986〕。礫の在り方は、これらの遺構を分析していく上で最も重要なポイントの一つとなるものである。したがって、図面類でいえば遺構上面の平面図、掘り込みの平面図、礫の垂直分布図を含めた断面図は最低限提示すべき資料である。

また、礫個々、あるいは全体について、火熱を受けているか否かの記述がほとんどの報告書ではわからない。さらに、遺構の名称も単に集石、集石土壙とされるだけで、所謂配石遺構に含まれるものと区別がつかないのが現状である。たとえば、阿久遺跡の集石、上原遺跡の集石、本遺跡の集石等も名称の上では同じ遺構であり、それに対する細かい説明がなければ区別がつかない状況である。こうした混乱を避けるために、この種の遺構に対して「焼石遺構」〔小栗一夫1979〕、「焼礫集積遺構」〔上田1983〕といった名称が提唱されている。両者とも、遺構の現象面を捉えた名称である。遺構の機能がしっかりとつかめない現状では、先土器時代における礫群と配石のごとく、名称の上からだけでも分離させようという姿勢のあらわれ

である。本遺跡では、本意ではないが「集石炉」という名称を使用し、混乱を避けたつもりである。

さらに、構成礫の分析については、県内では全く行われていないといっても過言ではない。先述したように、構成礫の石質別、重量別点数、焼礫、自然礫の区別という、わずかな資料ではあるが一つの仮説を呈示してきた。今後、多方面から検証していかねばならないことはいうまでもないが、さらに、礫の大きさ、完形礫、破損礫の別、礫の接合関係、礫の焼損状態などといった資料が加われば、焼礫の使用方法や使用頻度、礫の移動などといった点で、こうした遺構の機能解明に大きくアプローチすることができると考えられる。その一つの契機ともなれば幸いである。

## (2) c 地区検出の祭祀的遺構・遺物について — 農耕祭祀の一例 —

竜神平c地区は、出土遺物に祭祀的色彩が色濃くみられるという点に特色がある。特に1号住からは3点の土製模造品が出土し注目される。伴出土器より時期はおよそ5世紀にあてられるものである。古墳時代の住居址から石製模造品、手捏土器等の祭祀関係遺物が出土する例は、関東地方を中心に広くみることができ、長野県内でも54例を数えている(註1)。しかし、中信地区では極めて少なく、僅かに塩尻市平出遺跡の3例が知られるのみである(註2)。また、土製模造品に限るならば、本例は中信地区で初めての出土例となり、この地域における該期の祭祀形態を知る上で貴重な資料となるものである。以下、本遺跡の性格について若干の整理をしておきたい。

### ア 祭器の破碎と遺構の埋め立て

本遺跡は、高ボッチ山塊西麓の東西に通ずる狭小な谷を流れる沢の谷頭右岸にあたるわずかな平坦地に立地する。西流する小さな沢の水源縁辺にあたり、遺跡の南側の低地は地下水がしみ出し湿地帯となっている。住居址2軒、土壇3基、集石土壇1基が検出され、2軒の住居址の中間に土器片の集中する箇所が認められた。2軒の住居址および2号土壇からは多量の遺物が出土しており、1号住と1・2号土壇の遺物は相互に接合関係をもっている。また、3号土壇と集石土壇からも微量ではあるが同期の遺物が出土しており、これらは同時期に廃棄されたものと考えられる。

まず、これらの遺構と遺物との関係が問題となろう。1・2号住居址、2号土壇は、いずれも埋土上層から床面直上まで満遍なく遺物が含まれ、しかも上層のものと下層のものが接合関係をもっている。それは、これらの遺構が土器片とともに一時に埋立てられたことを示している。ところで、2軒の住居址はともに火処をもたず、出土した土器も大部分が高杯・鉢などの供献形態であり、煮沸形態がほとんどみられないことから、日常生活の場であったとは考えにくく、祭祀のために特別につくられたものである可能性が強い。しかし、祭祀自体が住居址内で行われた痕跡は認められず、これらの住居が祭祀の中で具体的にどのような役割を担ったものであるのかは明らかでない。ただ、出土した土器はその大部分が破片であり、明らかに人為的に打ち欠いたと思われるものが少なくないことや上記の出土状態から判断して、祭祀終了後時をおかずして祭器を意識的に破碎し、祭祀に係わる施設とともに一括廃棄したと思われる。1号住の場合、埋土に焼土層を挟むが、その上下の層に含まれる遺物が接合関係をもつことより、上屋の除去、祭器の破碎→埋立て→住居址内での焚火→再度埋立てという行為が、短時間に連続して行われたことを窺わせている。これに関連して、両住居址の間の遺物集中箇所は、ここでの遺物がいずれも小片であり、それらのほとんどが高杯と思われることから、祭器の破碎場所もしくは破碎して祭器の一時的な集積場所

(註1) 〔国立歴史民俗博物館1985〕による。これは祭祀関係遺物を出土した住居跡のみの数であり、いわゆる祭祀遺跡や祭祀遺構、および包含層出土のものは含まれていない。

(註2) 最近、本遺跡の西約1kmの田川の段丘上に位置する中挟遺跡(塩尻市片丘南熊井)の大形住居址から、「滑石製装飾品」の出土が伝えられた〔『広報しおじり』1987年3月15日号〕。正式な報告がなされていないので詳細は不明であるが、時期的にも近接しており、本遺跡との関係が注目される。

であったと推定することができる。また、出土した高杯は30数個体に及ぶが、完形に近い形にまで復元できたものは、1号住、2号住の各1個体と、1号住出土の脚部と1号土壙出土の杯部が接合したものの計3個体のみである。他は杯部のみあるいは脚部のみにとどまり、復元できない小片が多いため断言はできないが、杯部と脚部とを二分し別々に処理した可能性もまったく否定することはできない(註1)。いずれにせよ、これらの行為は祭祀一回限りの使用を強く意識したものとみることができる。

ところで、2号住のあり方は多くの遺物を出土しているのにも係わらず、それらが他の遺構の出土遺物と全く接合関係をもたないという点で、1号住と様相を異にしている。それには、祭祀に係わっての役割もしくは集団の相違による廃棄方法の相違、あるいは時期の相違など、いくつかの可能性が考えられ、それに伴い祭祀に係わる場所や器物の分布が、すでに沢筋によって削平されている南側から西側にかけて広がっていたことも予想される。

#### イ 湧水を伴う集石土壙

調査区の東端に検出された集石土壙は、明確な時期決定資料には乏しいものの、前述のように一応他の遺構と同時期の所産と考えたい。本址は径1.5m、深さ0.6mの播鉢状に掘り込まれた土壙内に、拳大の礫が充填されているものである。これらの礫には火熱を受けた痕跡がみられ、礫中には多量の炭化物が層状あるいはブロック状に混在していた。また、壁にも炭化物の付着がみられ、何らかの火の使用を窺わせている。さらに礫を取り除くと壙底より水が湧き出すという状況が観察されており、あるいは湧水層を意識して掘り込んでいる可能性が考えられる。本例に極めて類似した例として、長野市駒沢町遺跡9号址がある。規模は本址よりやや小さいが、やはり湧水を伴う集石土壙で、下部には焼土や灰の層の堆積がみられるという。遺構の時期は明らかではないが、該地域における古墳時代中期の祭祀との係わりが示唆されている〔大場磐雄1966、笹沢 浩1982〕。住居址同様本址もまた廃棄の跡と考えると、土壙内部の礫のうち上層のものは土壙外に置かれていた可能性もあり、あえて推測を重ねれば、湧水を中心とする浄域を画するために用いられたものであったかもしれない。壙底に置かれた礫上に炭化物を層状に多量に含む土がのり、さらに、その上に炭化物をブロック状に含む土が混じるといふ本址の堆積状況は、この土壙の使用時の姿が壙底に若干の礫を敷いただけのものであったこと、そこで火が焚かれたこと、その後周囲に置かれた礫とともに埋め立てられたことを思わせるのである。本址も祭祀を構成した一施設であったととらえることが可能であろう。

#### ウ 土製模造鏡

1号住出土の土製模造鏡は、復元径4.4cm、断面最厚部1.0cmの凸レンズ状をした円板である。中央部に1cmの間隔をもって双孔を穿ち、片面にはそれを巡る沈線で内外区を画した後、外周に向かって5本の沈線が引かれている。土製円板の出土例は多いが、いずれも無孔もしくは単孔であり、本例のような双孔円板は、県内はもとより全国的にも稀少である〔亀井正道1981〕。一般に土製模造鏡とされるものは、「径4.5センチから8センチくらいの円板の片面に鈕をつけたもの」であり〔亀井1981〕、関東・九州を中心に出土例が多く、県内では、駒沢新町〔大場1966〕、更埴市城の内〔岩崎卓也・木代修一1961〕、坂城町百々目利〔丸山徹一郎1967〕出土の3例が知られている。本例は鈕を持たず、それにあたる部分に双孔が穿たれるという点でこれらとは形態を異にし、また、他に類例はないものの、石製模造品における鏡と双孔円板との関係〔亀井1966、相山林継1972〕、その形態と文様のあり方などから、鏡の模造品と判断して間違いのないものである。文様は百々目利出土例の背面文様に近似しており、おそらく朱文鏡を写したものと思われる〔丸山1967〕。

(註1) 同様の傾向は、佐久市市道遺跡2号住、同3号竪穴状遺構〔藤沢平治1982〕、小布施町堀回遺跡1号住〔桐原1983〕、鼎町天伯B遺跡祭祀跡〔今村他1975〕、阿智村中原遺跡H1号特殊遺構〔大沢和夫・宮沢恒之他1969〕などいくつかの例がみられ、〔藤沢1982〕ではそこに何らかの意図を予想している。

出土状況についてみると、百々目利では不明だが、駒沢新町では破碎した祭器の集積場所と推定される3号址から、城の内では祭祀遺構と判断される竪穴状遺構から、それぞれ土器や土製模造品とともに出土している。ともに本例とおおよそ時期を同じくするものである。本例は住居址内からの出土であるが、それは祭器の廃棄場所であり、駒沢新町の例と共通性が認められる。ここで行われた祭祀の性格を考える上で参考となろう(註1)。

本例は、土製模造鏡としては県内で4例めのものであるが、前述したように他の例とは形態が異なり、また、全国的にみても特異な例といえる。さらに県内における土製模造鏡の出土地は従来北信地方に限られており、それ以外の地域では初めての例である。土製模造鏡自体の形態変化の中での位置づけとともに、それを祭祀に用いる風習の伝播経路とその意味についても今後検討していかなければならない課題であろう。

#### エ 祭祀の性格

最後に、この地で行われた祭祀の性格について考えてみたい。施設の面では、集石土壇、土壇、竪穴住居址が一つの単位として構成されていたものと考えられる。このうち、本遺跡の住居址のあり方に類似した例として、箕輪町澄心寺下遺跡2号住がある〔箕輪町教育委員会1980〕。本遺跡と同様和泉式期のものであり、床面近くで供献形態を中心として土器の完形品が出土しているほか、掘り下げの過程でも多くの遺物が出土している。床面が軟らかく日常生活雑器が見られないところから、日常生活の場ではなく、祭祀のための齋屋的なものと考えられている。周辺にはいくつかの配石跡や祭器の廃棄跡と思われる遺物集中区があり、該期の農耕祭祀の場と考えられる遺跡である。水辺に立地している点も本遺跡と類似している。

遺物の面からみると、祭器として土器を主に用いる祭祀である。多量の土器を残す祭祀遺構の例としては、駒沢新町遺跡1・2・3・4号址〔笹沢1982〕、中野市新井大口遺跡祭祀跡〔金井汲次1982〕、鼎町天伯B遺跡祭祀跡〔今村善興他1975〕などが著名である。これらの遺跡は、いずれも扇状地末端もしくは河岸段丘上の平地に立地している点では本遺跡と状況が異なるが、湧水あるいは湿地帯に近接する、即ち、水辺への立地という点では共通しており、水に係わる農耕祭祀の跡と考えることができる。特に駒沢新町の場合、遺構、遺物のあり方に共通する点が多く、本遺跡における祭祀もこれらの地で行われた祭祀と質的に変わりのないものであったと思われる。さらに、本遺跡にみられる水辺への立地、穴を掘りそれは湧水層を意識している可能性があること、火の使用を推測させること等は、弥生時代以来の農耕祭祀に共通する特徴である〔石野博信1977〕。以上の点から、本遺跡は水源地における農耕祭祀の跡であると考えたい。遺跡の規模や遺物の量からして、この祭祀を執行した集団はさほど大きなものではなかったと推定される。谷の入口付近で谷戸田を経営するような小集落の存在を予想しておきたい。なお、本遺跡の東側に展開する高ボッチ山塊の一主峯である鉢伏山は、「水分りの神」の宿る山として信仰の対象とされており、周辺にはそれに関連する神社も多い〔原 嘉藤他1973〕。あるいはこうした信仰の古い形態の一例と考えることもできよう。

以上概観してきたように、本遺跡は祭祀遺跡としては小規模ではあるものの、祭祀の場の占地、関係施設の構築、祭祀の執行、そして廃棄の過程を一連のものとして復元することがある程度可能であり、おそらく沢の下流域に展開した小集落によって営まれたであろう農耕祭祀の一端を窺うことができた。しかし、この祭祀の主体となったであろう集落については現時点では不明であり、また、水源地の祭祀とした場合、少なくとも調査区内においてはその後継続的に行われた様子がみられない点など、問題も残されている。田川右岸の山麓地帯には古墳時代の遺跡が少なく、該期の集落の展開についてもその実体は明らかにされ

(註1) 住居址から出土した土製模造品については、カマド祭祀との関係が指摘されており、事実そのような出土状況を示す例も多い〔金子裕之1971、桐原1983など〕。しかし、本例の場合は、出土した住居址が日常生活の場であったとは考えにくく、住居に伴う祭祀に用いられたものではないと思われる。



ていない。本稿は推測による部分が多く、残された課題もまた多いが、最近中央道塩尻インターチェンジ関連整備事業に伴う発掘調査が進められる中で、次第にその事例も増えつつある(註1)。残された課題については、これらの公表を待って、改めて検討される必要があるだろう。

(3) 焼土壙について

焼土壙と仮称するものは、木炭や木炭粒を多量に含むが、遺物がほとんどない遺構を指す(註2)。これらは1号焼土壙や2号焼土壙のように、長さ3m前後より大きくて、平面形が長方形の土壙と、3号焼土壙のように2m前後より小さなものに分けられ、前者をA類、後者をB類とする。A類は煙道のあるIと、ないIIがあり、青木沢遺跡1号焼土壙、八窪遺跡1号焼土壙のように床面に溝のあるものもあり、溝の本数によって、0・1・2というように表示する。また、主軸に沿って小さなピットが床面に並ぶものがあり、ピットのあるものをa、無いものをbとする。これにしたがって本遺跡と、青木沢・八窪遺跡の焼土壙を分類すると次のようになる。

竜神平遺跡	1号焼土壙	A I - 0 - b	青木沢遺跡1号焼土壙	A I - 1 - a	
〃	2号焼土壙	A II - 0 - b	八窪遺跡1号焼土壙	A I - 1 - a	
〃	3号焼土壙	B	〃	3号焼土壙	A I - 0 - a
〃	4号焼土壙	A I - 0 - a			
〃	5号焼土壙	B			
〃	7号焼土壙	A II - 0 - b			

次に埋土の状況を見ると、A類では床面や壁面に接して木炭が多量に混在し、焼土塊や焼土粒も混在するという特徴をもつ。これらの木炭や焼土の混在状況は自然埋没でなく、人為的な行為が及んでいることを示す。B類の埋土にも木炭や木炭粒は混在しているが、焼土粒は認められず、焼成を伴う行為は不明である。なお、A類では床面が焼土化した例もあり、特に煙道のあるものに顕著である。

焼土壙の用途や年代について、全国の事例を交えながら考えてみたい。B類は集成不十分なため、主にA類について触れる。ただ竜神平遺跡のB類は、A類の2・4号焼土壙の東1mの所にB類の3・5号焼土壙があり、A類との関係の深さを示している。

用途については製炭用〔徳島県教委1981、多治見市教委1981・1984〕と火葬用〔藤枝市教委1981〕の2つの見解があるが、製炭用とする場合が多い。

製炭用としたのは、木炭が多量に遺存していることが理由となっている。また岐阜県北丘古窯跡の焼土壙(共にA I - 2 or 1 - b)では形態から製炭窯と考えられている〔多治見市教委1981・1984〕。A I - 0 - bである、京都府篠古窯跡の焼土壙では製炭窯とするには形態などに違いがあるとしている〔京都府教委1983〕。製炭窯とされているものの実態が説明されていないので、根拠を明らかにする必要があるだろう。また、東京都多摩ニュータウンNo.562遺跡の焼土壙は大きさがB類となるが、A II - 0 - bの形態を示し、民俗例より製炭用と考えられ〔多摩ニュータウン1979〕、長さが6m以上ある多摩ニュータウンNo.559遺跡の焼土壙(A II - 0 - b)も同様に考えられている〔東京都埋文センター1982〕。

火葬用と考えられている例に静岡県内瀬戸火葬墓群の焼土壙群(A I - 3 - aやA II - 3 - aなど)がある〔藤枝市教委1981〕。この場合、骨片は出土しないものの焼土壙群の所在する丘陵上が火葬墓群となっていることによる。骨片が残っていないことをどのように考えているのか疑問である。

(註1) 289ページ註2参照

(註2) この種の遺構の呼び方は様々あり、窯状遺構〔京都府教委1983〕、炭化土壙〔徳島県教委1979・1981〕、炭焼窯〔多治見市教委1981、東京都埋文センター1982、群馬県教委1985など〕、窯状遺構〔藤枝市教委1981〕、焼土壙〔埋蔵文化財天理教調査団1983〕などがある。ここでは遺構が掘り込みを有すること、遺構内で焼成されたと考えられるものが大半であることから焼土壙という呼称を使った。

このように用途については、十分明らかになったとは言い切れない。ただ、焼土壌に遺存する木炭の樹種同定は、大量の木炭が形成された行為を知る手掛かりとなろう。このように樹種同定の行われた事例は極くわずかで、東京都多摩ニュータウン遺跡No.540遺跡の場合クヌギやコナラの遺存が確認とされている〔東京都埋文センター1981〕。用途でなく機能についてみれば木炭が多量にできるような焼成行為が行われた場合で、その後焼成によってできたものが取り上げられている。そして煙道や床面の溝の有無にかかわらず、木炭や焼土が形成される場であることから、機能の上で同一の効果をもったと考えられる。

C<sup>14</sup>年代測定によれば竜神平・青木沢・八窪遺跡の焼土壌は9～12世紀を中心とする年代が得られている。熱残留磁気測定は北丘1～3号炭焼窯で実施され、いずれも13世紀前半を中心とする年代が得られている。他に年代測定の実施された資料はないが、伴出遺物のあった焼土壌は小数ながら存在する。徳島県足代遺跡〔徳島県教委1981〕の焼土壌では奈良時代から平安時代にわたる須恵器杯が出土し、静岡県半田山古墳群〔静岡県教委1984〕のそれでは12世紀代の陶器が出土している。兵庫県長谷遺跡の焼土壌は検出面の他の遺構の年代が12世紀後半から13世紀にかけてで、該期に比定されている〔神戸市教委1984〕。このようにA類の焼土壌は、年代測定されたものの誤差を考慮しても、平安時代を中心とする時期が想定される。ただ東京都多摩ニュータウンNo.23遺跡の焼土壌は、長さ6m以上の長大なもので、検出面から考えると近世以降の可能性が大きい〔東京都埋文センター〕。このように長さが6m以上の長大な焼土壌は、煙道や溝などをもっておらず、東京都と栃木県に数例知られる。これらの焼土壌は他のA類の焼土壌とは形態や年代の上で区別する必要がありそうで類例の増加を待ちたい。

焼土壌は近年類例が増加してきているが、遺物の出土が木炭を除いてほとんどなく、形態についても様々なものがあって遺構の年代や性格の把握を困難にしている。また、年代の不明な焼土壌が多いため、形態別の変遷を捉えるのを困難としている。今後、焼土壌の集成を加えながら地域別の特徴、類形の変遷を明らかにし性格を解明していきたい。

## 6 小 結

述べてきたように、各々の地区は時代を違え、目的を異にした場として利用されていたことが明らかとなった。

a地区は台地の先端のみの調査であったが、台地中央部にかけて広大な居住地が展開されているであろうことが予測できた。

b地区は一般的な集落遺跡とは趣を異にしていた。立地はもとより、住まいである住居よりも集石炉や火床といった生産的な遺構を中心とする遺跡の構成は、集落としての遺構の質的、量的な不均衡を示すに他ならない。こうした状況こそが本遺跡の性格を適確に伝えるメッセージであり、それを正しく理解することが、多様な遺跡が有機的に結合して構成する遺跡群の示す社会を知る上で必要なことと考える。

本遺跡の主体となる集石炉と火床は、詳細な考察から共通の機能を生む、相互補完的な遺構であることが想定され、その機能する石蒸料理という行動が、本遺跡の存在意義を強く象徴することとなった。ここでは、時間的な観点から若干の補足をしてまとめとしたい。東西に分布する集石炉や火床は同一時に存在したとは考えにくい。それは、同様の分布を示す土器に時間差が認められることによる。先項でふれた土器の時期的分布によると、東西の集石炉、火床の時期は、東群では早期末～前期諸磯c式期が、西群は早期末～中期中葉猪沢期あたりの時期が相当すると考えられる。そしてこの年代は住居址(中期初頭～猪沢式期)、竪穴状遺構(諸磯c式期)に合致する。となると、東西にあるこの2つの遺構は、共に石蒸料理を行う際の出作り小屋の機能をもった遺構であることが想定できるのである。このように、本遺跡の生産活動は、西群(諸磯c式期)→東群(中期初頭～猪沢式期)と場を移して展開されたという点をここで加えておきたい。考

察中でも述べてあるように、本県でも集石炉、火床などの発見例は少なくないはずであるが、その実態については不明な点が多かった。本遺跡の報告を契機に、その見直しと縄文社会の中への正しい位置付けや意義付けが活発に展開されることを期待したい。

また、本地区では平安時代の焼土壙も多数発見できた。やはり県内での類例がないことはなかったはずであるが、その性格や機能についてはほとんど触れられることはなかった。考察の中で行った若干の集成や分析を今後の研究に少しでも役立てていただけたらと思う。

c地区は時期的にも内容的にも類例の少ない遺跡であることが分かった。その詳細については考察の中で触れてあるので繰り返さないが、遺跡、遺物両面において、貴重な資料を提供できたと考えたい。古代社会を考える中で、特に祭祀形態についてはとかく観念論に陥り易く、考古学的に解明することには困難を伴うとされているが、考古資料をもって農耕祭祀の復元に迫ることができた。それは、面積的には狭い範囲であったが、立地、遺構、遺物等の内容が非常に凝縮された内容に恵まれた遺跡であったからに外ならない。

このように本遺跡の特にb地区、c地区で得られた知見は、従来の概念からすると特殊ともいえる遺跡であることを示していたが、各々その性格の解明にまで近付き得ることができ、そして問題提起のできたことを一つの成果とし、まとめにかえたい。

参考文献

- 石野博信 1977 「四・五世紀の祭祀形態と王権の伸長」『ヒストリア』75 大阪史学会  
 今村善興他 1975 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡鼎町その2』  
 岩崎卓也・木代修一 1961 「城の内—信州千曲河岸の土師式集落遺跡の研究—」『史学研究』 東京教育大学文学部  
 上田典男 1983 「縄文時代焼礫集石遺構の形態的把握」『物質文化』41 物質文化研究会  
 大沢和夫・宮沢恒之他 1969 「長野県下伊那郡阿智村中原遺跡報告」『長野県考古学会誌』6 長野県考古学会  
 大場磐雄 1966 「長野市発見の古代農耕祭祀遺跡を中心として」『信濃』18—8 信濃史学会  
 金井汲次 1982 「新井大ロフ遺跡」『長野県史 考古資料編主要遺跡(北・東信)』 長野県史刊行会  
 亀井正道 1966 『建鉢山—福島県表郷山古代祭祀遺跡の研究—』 吉川弘文館  
 亀井正道 1981 「土製模造品」『神道考古学講座』第3巻 雄山閣  
 金子裕之 1971 「古墳時代屋内祭祀の一考察—関東・中部地方を中心として—」『国史学』84  
 京都府教委 1980 「篠窯跡群 昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1980—1)』  
 " 1981 「篠窯跡群 昭和55年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1981—2)』  
 " 1983 「篠窯跡群」『京都府遺跡調査概報』第7冊  
 桐原 健 1983 「古墳時代にみられる集落内祭祀の一端」『中部高地の考古学』II 長野県考古学会  
 群馬県教委 1985 「小仁田遺跡」『関越自動車道(新潟線)水上町埋蔵文化財発掘調査報告書』  
 神戸市教委 1984 「西神中央線長谷遺跡」『昭和57年度神戸市文化財年報』  
 小栗一夫 1979 「縄文時代における焼石遺構」『小田原考古学研究会会報』8号 小田原考古学研究会  
 国立歴史民俗博物館 1985 「祭祀関係遺物出土地地名表」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集  
 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985 「中天下遺跡」『年報5—昭和59年度—』  
 笹沢 浩 1982 「駒沢新町遺跡」『長野県史考古資料編主要遺跡(北・東信)』 長野県史刊行会  
 杉山博久 1981 『東田原八幡遺跡』  
 椋山林継 1972 「石製模造品」『信道考古学講座』第3巻 雄山閣  
 多治見市教委 1981 「北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書」  
 " 1984 「北丘25号窯・26号窯発掘調査報告書」  
 谷口康浩 1986 「縄文時代「集石遺構」に関する試論」『東京考古』4 東京考古談話会  
 多摩ニュータウン遺跡調査会 1979 「No.562遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査報告』  
 千葉県埋文センター 1983 「堀之内遺跡」『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書III』  
 " 1977 「京葉II千葉市東寺山戸張作遺跡」  
 東京都埋文センター 1981 「No.540遺跡」『多摩ニュータウン遺跡—昭和55年度—』  
 " 1984 「No.521遺跡」『多摩ニュータウン遺跡—昭和58年度—』  
 " 1984 「No.740遺跡」『多摩ニュータウン遺跡—昭和58年度—』  
 " 1984 「No.382~4・6遺跡」『多摩ニュータウン遺跡—昭和58年度—』

- 〃 1982 「No.559遺跡」『多摩ニュータウン遺跡—昭和56年度—』
- 徳島県教委 1979 「昼神遺跡(西貝川地区)」『徳島県文化財調査概報 昭和52年度(1977)』
- 〃 1981 「足代遺跡(小原地区)」『徳島県文化財調査概報 昭和54年度(1980)』
- 栃木県文化財振興事業団 1985 「谷館野西遺跡第1次調査」
- 富山県教委 1977 「神明原遺跡」『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第5次緊急発掘調査概要』
- 〃 1977 「南原下遺跡」『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第5次緊急発掘調査概要』
- 浜松市教委 1984 「半田山古墳群(IV)・初生遺跡発掘調査報告書」
- 原 嘉藤他 1973 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第2巻歴史上 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料刊行会
- 兵庫県教委 1985 「IV地区の調査」『大森谷遺跡—淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書I』
- 藤枝市教委 1981 「内瀬戸火葬墓群」『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書IV』
- 藤沢平治 1982 「市道遺跡」『長野県史 考古資料編主要遺跡(北・東信)』 長野県史刊行会
- 埋蔵文化財天理教調査団 1983 「奈良県天理市杣之内火葬墓」
- 丸山敞一郎 1967 「坂城町百々目利出土の土製鏡」『信濃考古』22 長野県考古学会
- 箕輪町教育委員会 1980 『澄心寺下遺跡』

## 第13節 <sup>やま かみ</sup>山の神遺跡 (EYN)

### 1 遺跡の概観

遺跡は塩尻市大字片丘10854番地2を中心とする一帯に所在する。高ボッチ山塊に源を発する幾筋もの小河川は、片丘丘陵を開析しながら西流し、いずれも田川に合流する。大沢川もその一つで、麓の南熊井地籍に広大な扇状地を形成した。遺跡は、ロームをのせたこの扇状地の扇頂部から扇中央部にかけて西向き緩斜面に展開し、北西方向に中原・犬原・上木戸遺跡が境を接して分布する。標高735m~745m、盆地平坦部との比高差約100mを測り、松本盆地を一望のもとに見おろすことができる。

昭和32年、遺跡の東部が片丘村教育委員会によって発掘調査され、縄文時代中期後半の住居址及び勝坂式・加曾利E式土器など遺物多数が発見されている。

### 2 調査の概要

中央道長野線は遺跡の西側を横切り、調査の対象となる面積は14800㎡である。当初は北区のみを調査の対象としていたが、現地踏査の結果、地形や遺物散布状況から南側にも遺構の存在が予想されたので、日本道路公団、長野県教育委員会、塩尻市教育委員会の三者が協議し、新たに南区が加えられた。調査前の一帯は畑地で、東側は長野県畜産試験場の敷地となっている。

北区(10800㎡)は、昭和60年4月下旬から6月上旬にかけて発掘調査を行い、調査研究員6名が当たった。調査に当たっては、まず、全体の様子を探ることにし、およそ地形の傾斜方向に4本、それと直行する方向に2本のトレンチを1mの幅で設定し、発掘した。その結果、耕作土の下はローム層となり遺物包含層は認められず、遺構もなかったが、遺物は微量ながら出土した。そこで、念のため、2m×2mのグリッドを設定し、市松状に掘り下げて遺構、遺物包含層の有無確認に努めた。最終的には2800㎡余りを掘り上げたが、これにより先土器時代の遺物集中箇所1、土壌1の存在が確認できたのみで、以後この2地点を中心に調査を進めた。

南区(4000㎡)は、同年6月上旬から8月上旬にかけて発掘調査し、調査研究員は主として2名が当たった。まず4本のトレンチを設定し、トレンチ調査を行った。その結果、北西部を除いた全面に遺物の出土を認め、住居址プランも検出されたため、面的調査に移行した。

測量基準点には日本道路公団工事用杭 STA114+80(X=13795。

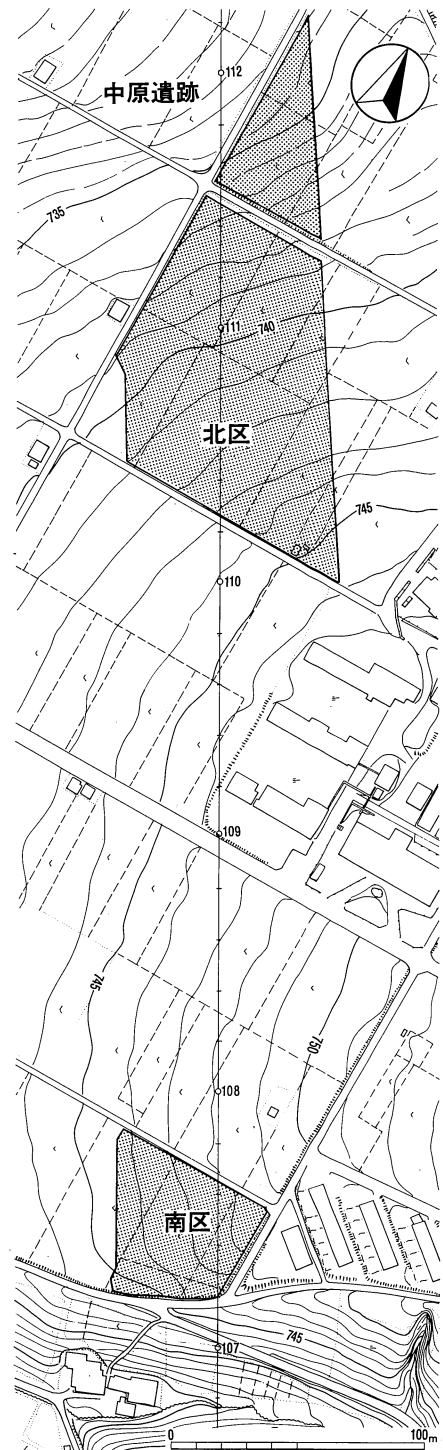


図1 地形及び発掘範囲図 (1:2500)

8204、Y=-46855.1660)を用い、業者に委託して隣接する中原・犬原・上木戸遺跡までカバーする大地区設定を行った。遺構の測量には遣り方を用い、南区では業者委託による写真測量を併用した。

整理作業は同年12月に開始し、図面整理、調査所見の調整、遺物の水洗、注記を年度内に終了した。

### 3 調査の経過

#### 昭和60年度

- 4月23日 北区にトレンチ設定。調査研究員による掘り下げで層序を確認。
- 4月30日 作業員を投入し作業開始。すべてのトレンチを掘り終えたが遺構はなく、遺物の出土も少ない。
- 5月1日 グリッド調査開始。市松状にグリッドをあける。



- 5月10日 PG12で黒曜石剥片がまとめて出土。遺構がなく、土器も認められないため先土器時代の遺物集中箇所である可能性が考えられ、以後ローム層を掘り下げることにする。
- 5月13日 黒曜石集中箇所を掘り下げたところ、ローム層上面から20cmの深さにも黒曜石が含まれること、また、それが平面的に広がるらしいことが確認された。よって先土器時代の生活址と認定し、10m四方に範囲を拡張してローム層中の調査に入る。PA02グリッドには、北西隅に落ち込みが確認された。土壌の可能性が高く、周辺を拡張する。
- 5月15日 落ち込みを半割し、土壌であることを確認する。

先土器時代遺物出土地点と土壌の調査を残し、グリッド調査を終了。

- 5月22日 土壌は陥穴であることを確認し、調査終了。
- 6月10日 先土器時代遺物出土地点はようやく無遺物レベルまで到達し、北地区の調査を終了する。本日より南区に入り、トレンチ調査開始。
- 6月12日 住居址と思われる落ち込み確認。以後面的調査。
- 6月14日 1号住居址を検出。
- 7月17日 表土の除去を終了し、遺構の検出に入る。
- 7月18日 検出作業終了。住居址2軒、土壌多数を確認。
- 7月24日 1号住居址完掘。



- 7月25日 2号住居址の土層ベルトの下に埋甕炉を検出。
- 7月30日 土壌もすべて完掘し、全景写真、写真測量を完了。
- 7月31日 両住居址の埋甕炉の断面観察と土器の取り上げ。
- 8月5日 残務を終え、本遺跡の発掘調査を終了。
- 1~3月 図面整理、遺物の洗浄、注記等基本的な整理作業を終了する。

#### 昭和62年度

- 1月~ 報告書作成に向けて本格的な整理作業に入る。

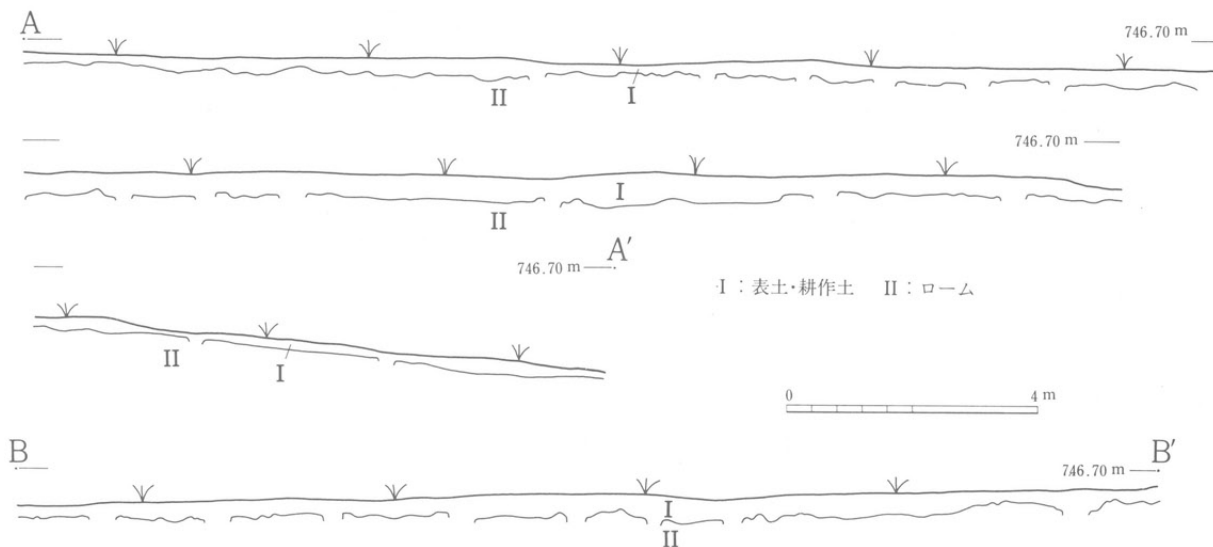
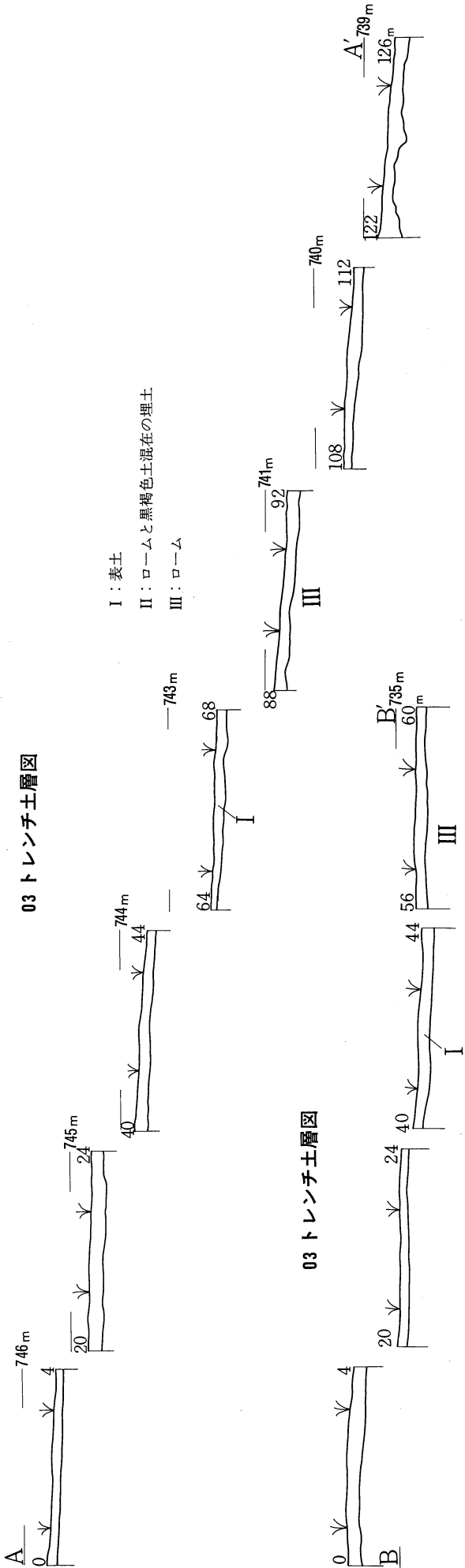


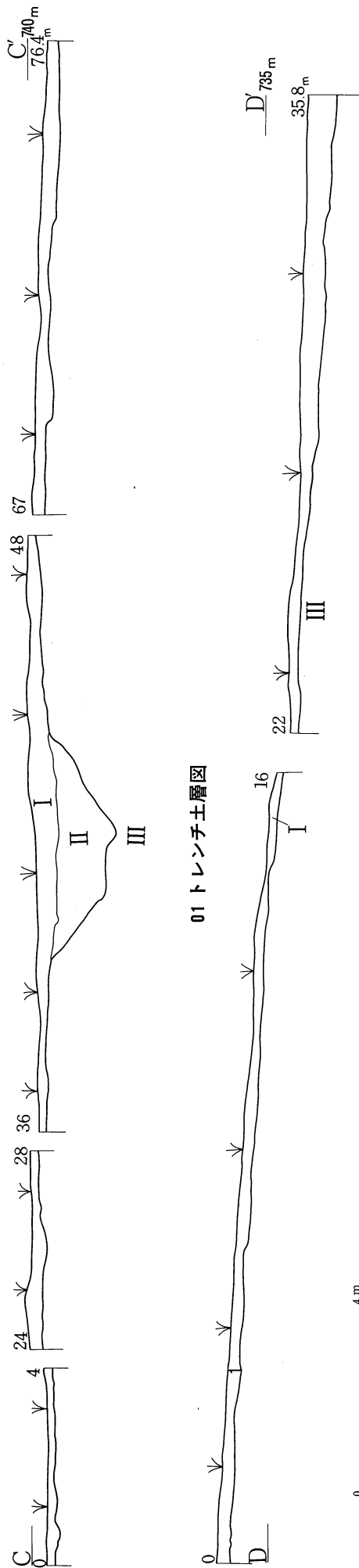
図2 南区土層図 (1:120)

03 トレンチ土層図



03 トレンチ土層図

05 トレンチ土層図



01 トレンチ土層図

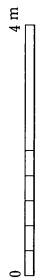


図3 北区土層図 (1:120)

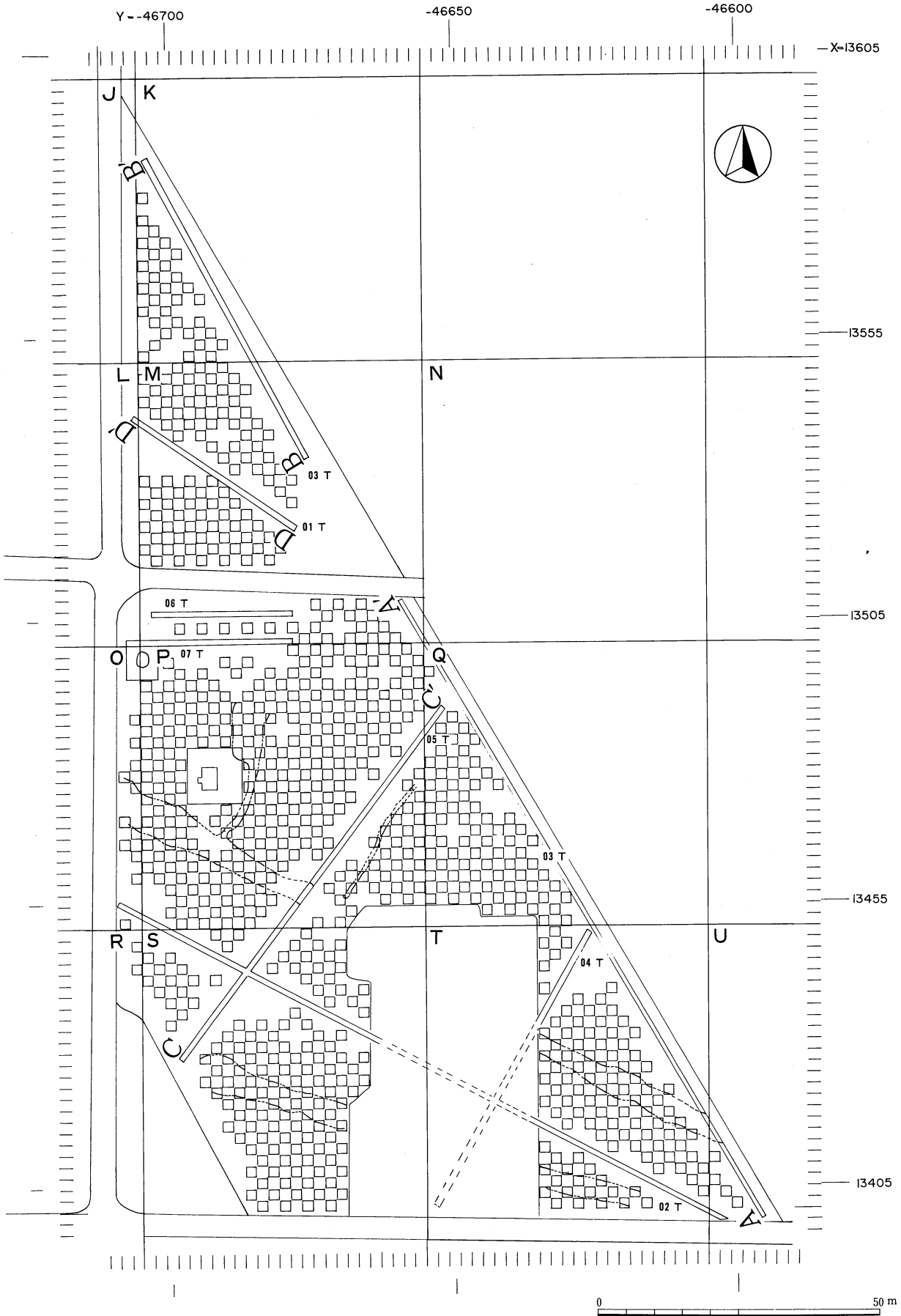


図4 北区トレンチ配置及び遺構分布図 (1:1000)



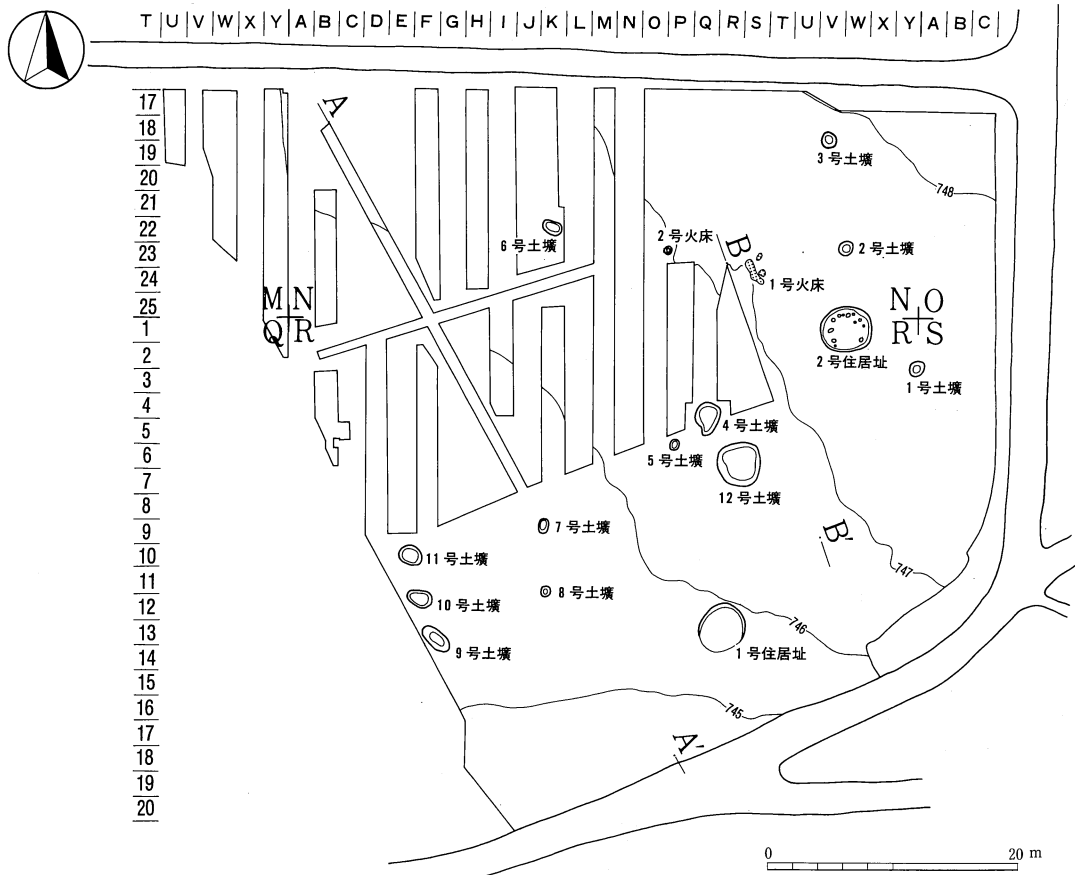


図5 南区遺構分布図 (1 : 600)

#### 4 調査の結果

##### (1) 層序と地形形成 (図2・3)

遺跡の層序はローム層を基盤とし、その上に腐植土層が堆積する。しかし、約30cm~50cmの厚さをもつ腐植土層のほとんどは耕作により攪乱され、包含層は認められない。こうした状況は北区、南区とも同じであった。なお、畑作には長芋栽培が盛んで、トレンチャーによる深耕がローム層中深くまで及んでいる。そのため、南区の遺構は破壊されている部分も多かったが、北区ではローム層中の石片が浮き上がり先土器時代の生活址を発見できたという経緯がある。

##### (2) 遺構と遺物の概観

北区と南区では検出された遺構の年代が異なり、また、遺跡地としての性格も異なる。したがって、北区と南区を分けて記述することにした。

##### ア 北区 (図4)

10000㎡余という面積に比して遺構、遺物の検出は極めて少ない。その中で、先土器時代の生活址の発見は注目される。フレイク・チップを中心とするごく小規模な遺物集中区であったが、塩尻市内ではほとんど存在をみない時期である。また、土壙が1基発見されたが、これは縄文時代の陥穴と思われる。その他、戦前まで使われていた道の跡が確認された。

##### イ 南区 (図5)

縄文時代中期の小集落が存在した。住居址2、土壙12、火床1がその内容である。出土した土器は縄文時代早期と中期中葉前半に限られる。石器も数は少ないが石鏃、打製石斧、磨石等が出土した。

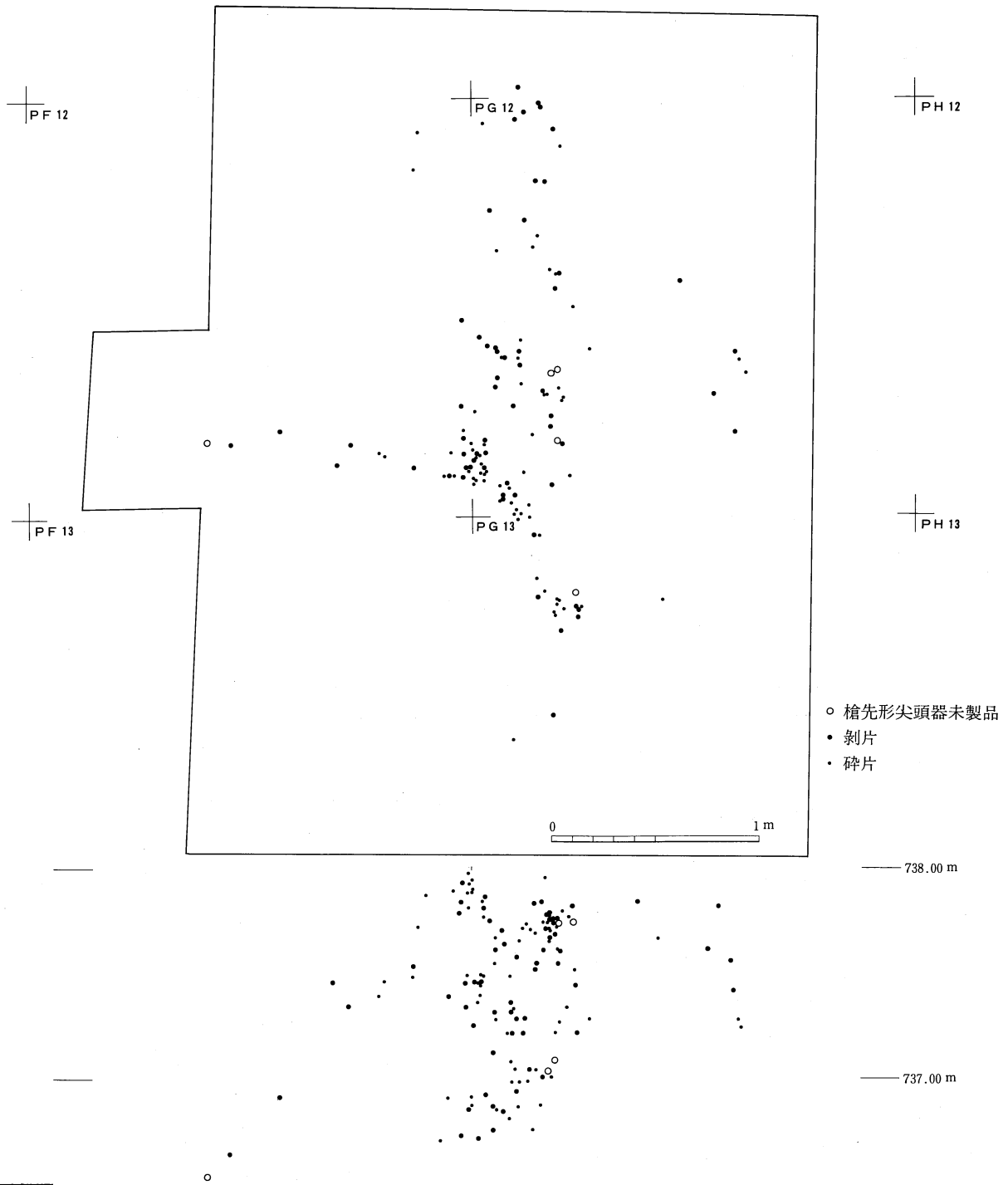


図6 1号ブロック器種別分布図 (1:30)

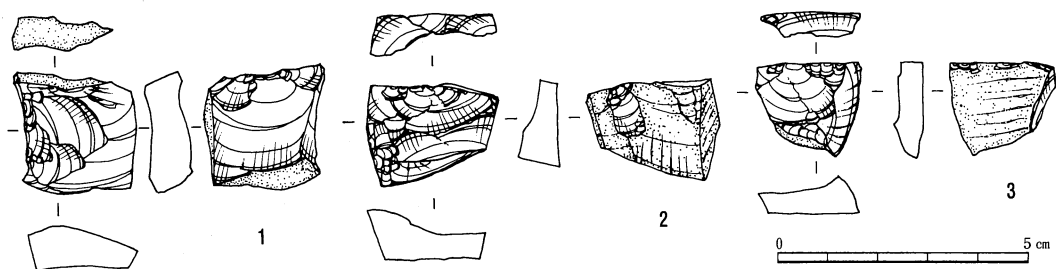


図7 先土器時代石器実測図 (4:5)

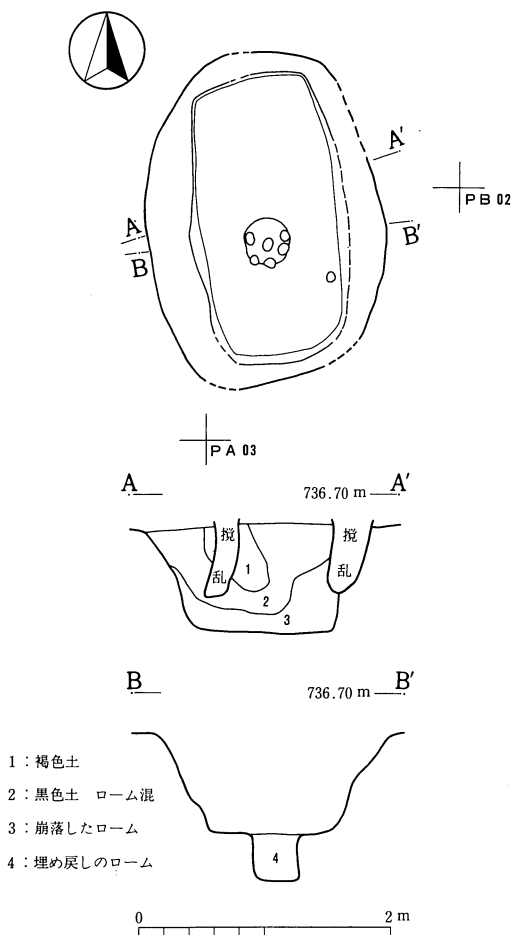


図8 北区土壌実測図

(3) 北区の遺構と遺物

ア 先土器時代の遺構と遺物 (図6・7、PL60)

本遺跡では、III層中より先土器時代の所産と考えられる遺物集中区が1箇所発見された。以下、このまとまりを1号ブロックと称し、遺物の遺存状態、石器群の特徴を記述する。

① 遺物の遺存状態 (図6)

本ブロックは、PG12グリッド南西部を中心として、直径約3mの範囲に散漫な分布を呈する。ただし、本遺跡全体に走る長芋栽培のトレンチャー痕が本ブロックの範囲にも約80cmの間隔で南北方向に数条走り、その影響でかなりの遺物が攪乱をうけ、かならずしも良好な遺存状態とは言えない。遺物の垂直分布は、III層中に約150cmにわたりみられ、1つのブロックにしては上下幅の非常に大きい点が興味深い。

遺物の総点数は、136点をかぞえる。その器種別構成をみると、道具と考えられる定形的な石器は1点もなく、槍先形尖頭器の未製品もしくは石核と考えられる石器4点のほかはすべて剥片、碎片である。石質はすべて黒曜石である。

② 石器群の特徴

槍先形尖頭器未製品 (図7、PL60)

石器の表面に見られる剥離痕を石器製作のための調整加工とみるか、剥片剥離作業面とみるかで石器器種の評価が変わってくる。前者と考えれば槍先形尖頭器の未製品、後者と考えれば石核としてとらえられる。ただ、このあとに述べる剥片、碎片の特徴や、図示した3点の石器をみると、自然面を多く残し、有効な剥片が何枚も剥がされたとは考えにくく、石核の可能性よりは槍先形尖頭器未製品の可能性のほうが大きい。

剥片・碎片 (PL60)

比較的薄手で、表面側が外反しており、おそらく槍先形尖頭器製作時に剥出された調整剥片であろう。形状は多様で、その大きさは、長さ幅ともに約1cm～3cmの範囲におさまる。

以上の所見から1号ブロックは、先土器時代後半期の槍先形尖頭器を使用していた人々が残した遺構である可能性が大きい。遺構の性格は石器の製作址であり、おそらく先土器時代の一集団がこの山の神遺跡に短期間ながら逗留し、若干の石器を製作し、また他の場所に移動していったと考えられる。

イ 縄文時代の遺構と遺物 (図8、PL57)

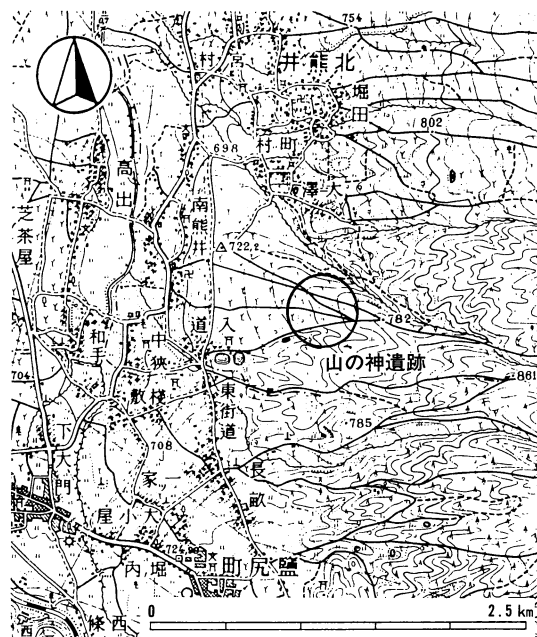


図9 昭和6年当時の遺跡周辺 (1:50000)

縄文時代と思われる遺構として、土壙が1基検出された。調査区東辺の中程にあたるPA02グリッドに位置する。ほぼ南北方向に長軸をもち、2.58m×1.83m、深さ0.86mの規模を有する。平面隅丸長方形で、壁中程に段をもつ。壙底中央には径が5cm～6cmの小さな黒色土の入り込んだ痕跡が5・6個ほどかたまって発見され、北側をカッティングしたところ、これを包むかのように大きな掘り込みのあることが明らかとなった。この掘り込みは径36cm、深さ40cm。中にブロック状のロームがぎっしりと詰まる。これは、径36cmの穴を掘り、その中に等間隔に5・6本の杭を立て、ロームを詰めて杭を固定させたと推定された。このような施設は、東京都の多摩ニュータウン遺跡群で多く観察されている事例と共通し、陥穴と考えられているものである。本遺跡では1基しかその存在を確認できなかったが、さらには東方に分布することが予想され、付近一帯はかつての猟場であったと想定されるのである。出土遺物がないため、詳細な時期決定はむずかしいが、縄文時代の所産として間違いのないと思われる。

#### ウ その他の遺構

調査区南部に、北西から南東方向に走る幅2m～4m、深さ1m程の溝が2本検出された。調査時には、埋土は明らかに人為的に埋め戻された状態であるがその年代と性格については不明としていた。しかし、その後、付近の住民より、この辺には戦前に細い道があったが、終戦直後、開墾のために埋め戻されたという話を聞くことができた。また、古い地形図(図9)には、その小道が確かに載っている。したがって、この溝は昭和20年頃に埋め戻されたという道の跡であると判断した。

### (4) 南区の遺構と遺物

#### ア 住居址

##### ① 1号住居址 (図10・11、PL58～60)

**検出状況**：調査区中央南寄りに位置する。トレンチ調査の段階ですでにプランを確認できた本址は、ローム層を掘り込んでおり、検出も容易であった。緩やかとはいうものの南西方向への傾斜があり、そのためか、南西側壁及び床の一部は確認できなかった。**規模・形状**：壁および床の一部が不明なため推定となるが、直径約3.4mのほぼ円形のプランを呈すると思われる。**埋土**：壁際に若干ロームブロックが混じる壁の崩落と思われる層があるが、全体的には黒色土の単層である。**床面・壁**：床面はローム層を比較的堅く敲击しめてつくられる。壁は南西側については不明であったが、北側では約30cmの掘り込みがある。**炉**：住居のほぼ中央に土器を埋没した埋甕炉があり、その周囲約90cm×60cmの範囲は厚い焼土となっている。**柱穴**：検出されなかった。**遺物の出土状況**：注目されるのは石皿で、図示したように炉の北側の床面に伏せた状態で出土した。また打製石斧(4)と石匙(7)が北西壁際に重なって出土したことも特記したい。他には、埋土中より少量が散在的に出土した。**遺物**：1は埋甕炉として用いられた土器である。口縁部及び底部を欠損する。その上半は楕円区画文列が上下2段に並び、下半は渦巻状モチーフと逆「J」字状モチーフが一对となって2単位配される。文様要素には波状沈線文や斜行沈線文が用いられる。2は浅鉢で、口縁部が5分の1程度残存する。口縁部に横位2列の押引文が施され、また、何箇所かに粘土紐の貼付装飾が配されていたようである。その他では、3は平出Ⅲ類A系の土器、4～8は角押引文を主とし、玉抱き三叉文を特徴としてもつ一群である。以上はいずれも中期中葉前半猪沢式に併行する時期の土器と考えられる。石器は、数こそ少ないが多様な種類が出土した。10は石皿で完形である。9は磨石で、石皿とセットになっていたものであろうか。一面が非常に平滑に摩耗している。手に握るにはちょうどよい大きさといえる。7は横形石匙で、大形粗製の部類に入ろうか。ホルンフェルス製で、鋭利な刃をもつ。4～6は打製石斧で4は完形品である。8は石錘で、長軸の両端に刻目を有する。自然礫を利用しており、その扱いは表裏両面よりなされている。**時期**：縄文時代中期中葉前半と考えられる。

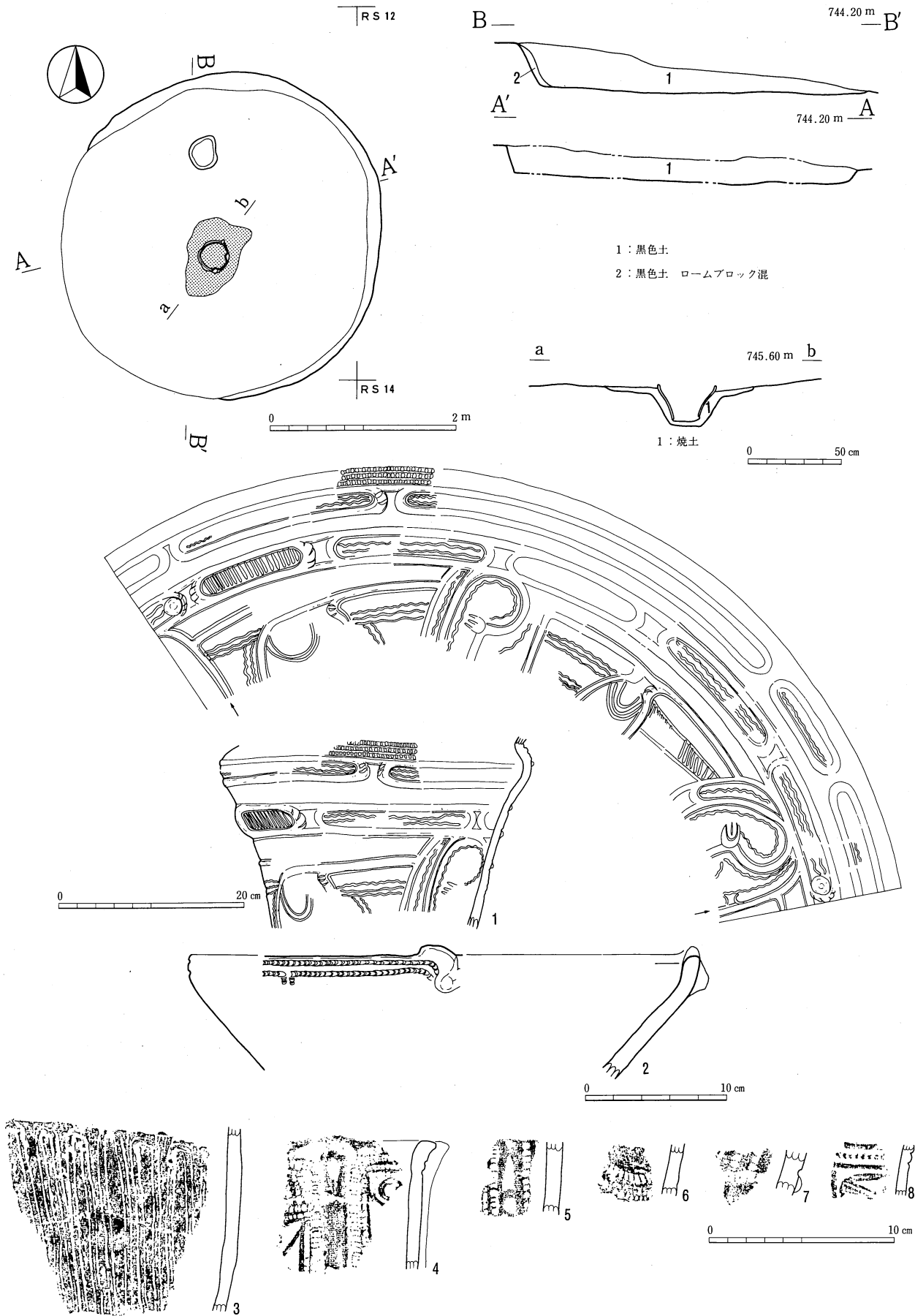


図10 1号住居址実測図・出土遺物実測図・拓影1 (1 = 1 : 6)

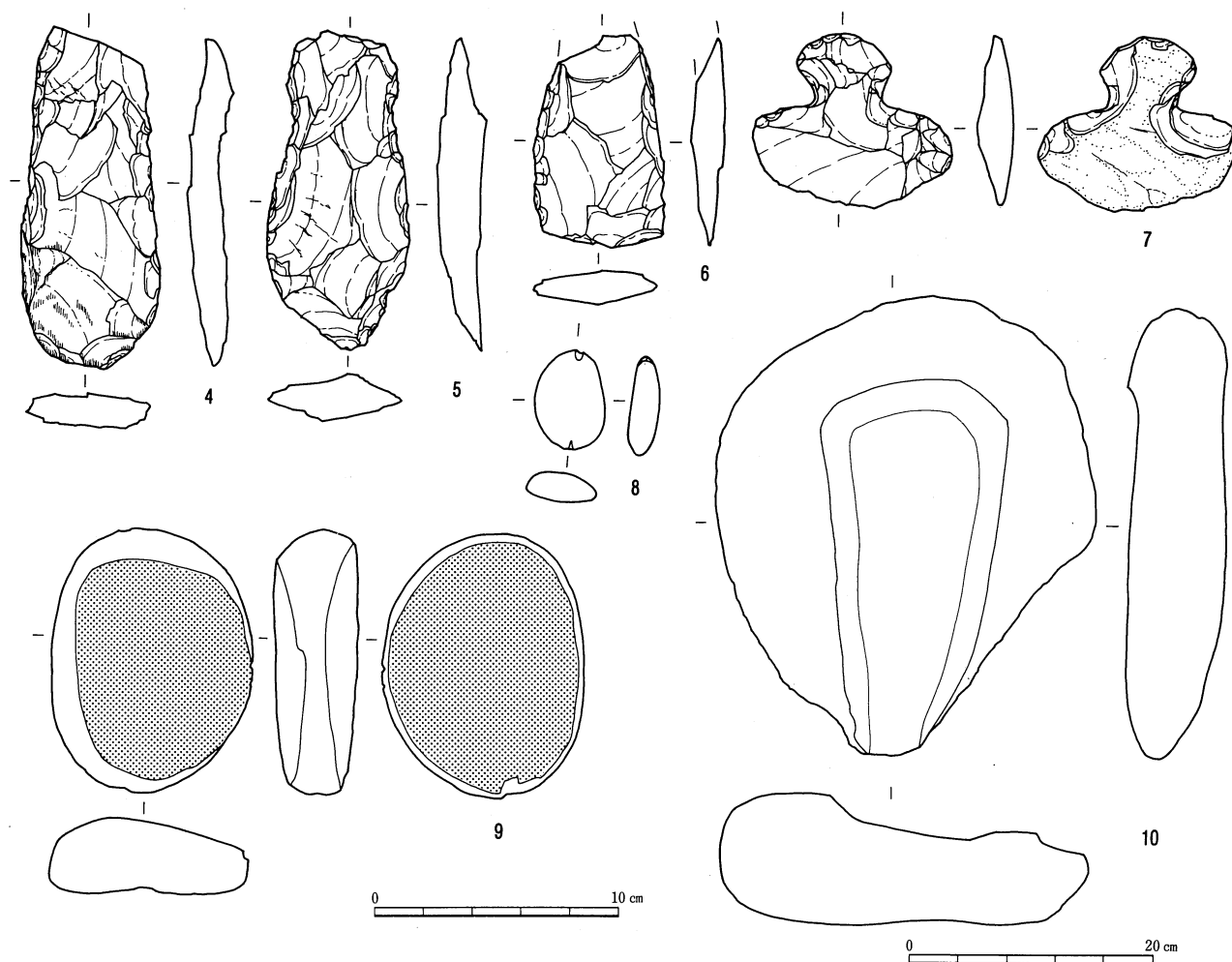


図11 1号住居址出土遺物実測図2 (10=1:6)

## ② 2号住居址 (図12、PL59・60)

**検出状況**：調査区東端、RW01グリッドを中心に位置する。耕土除去作業後、ローム層に明瞭な落ち込みが検出され、住居址であることが確認された。**規模・形状**：プランは楕円形を呈し、東西方向に長軸をもつ。規模は4.1m×3.6mを測る。**埋土**：埋土は2層に分層できる。**床面・壁**：約40cmローム層を掘り込んで構築され、壁は明瞭である。床面には若干の凹凸はあったが、堅く敲きしめられていた。**炉**：住居のほぼ中央に位置し、1号住居址と同じく埋甕炉で、埋没された土器の回りには厚い焼土が東西方向に広がっていた。**柱穴**：ピットは大小16個存在したが、主柱穴と思われるのはP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>である。これらは平面的に2.2m×1.6mの長方形になるよう配置されており、深さも40cm前後でばらつきがない。他のピットは規模の点においても大小、深浅様々で、その性格については不明である。**遺物の出土状況**：遺物はごく少量で、埋土中より散在的に出土したにとどまる。**遺物**：9は埋甕炉として使用されていた土器で、口縁部と底部を欠き胴中位のみが残存する。その文様は上位に楕円区画モチーフを配し、下半には逆「U」字状モチーフを持つ。また、地文には指頭圧痕を残す。10もこれと同じ様相を示す。11には角押引文が多用され、12・13・15は波状、斜行の沈線文を主要モチーフとする。16は浅鉢の口縁部である。この口縁部には横位3列の押引施文がなされる。以上はいずれも1号住居址同様に中期中葉前半貉沢式に併行する時期の土器と考えられる。石器は、黒曜石、チャートの剥片が少量出土したのみで、製品はない。**時期**：土器からみて中期中葉前半と考えられる。

## イ 土 壙 (図13・14、PL59)

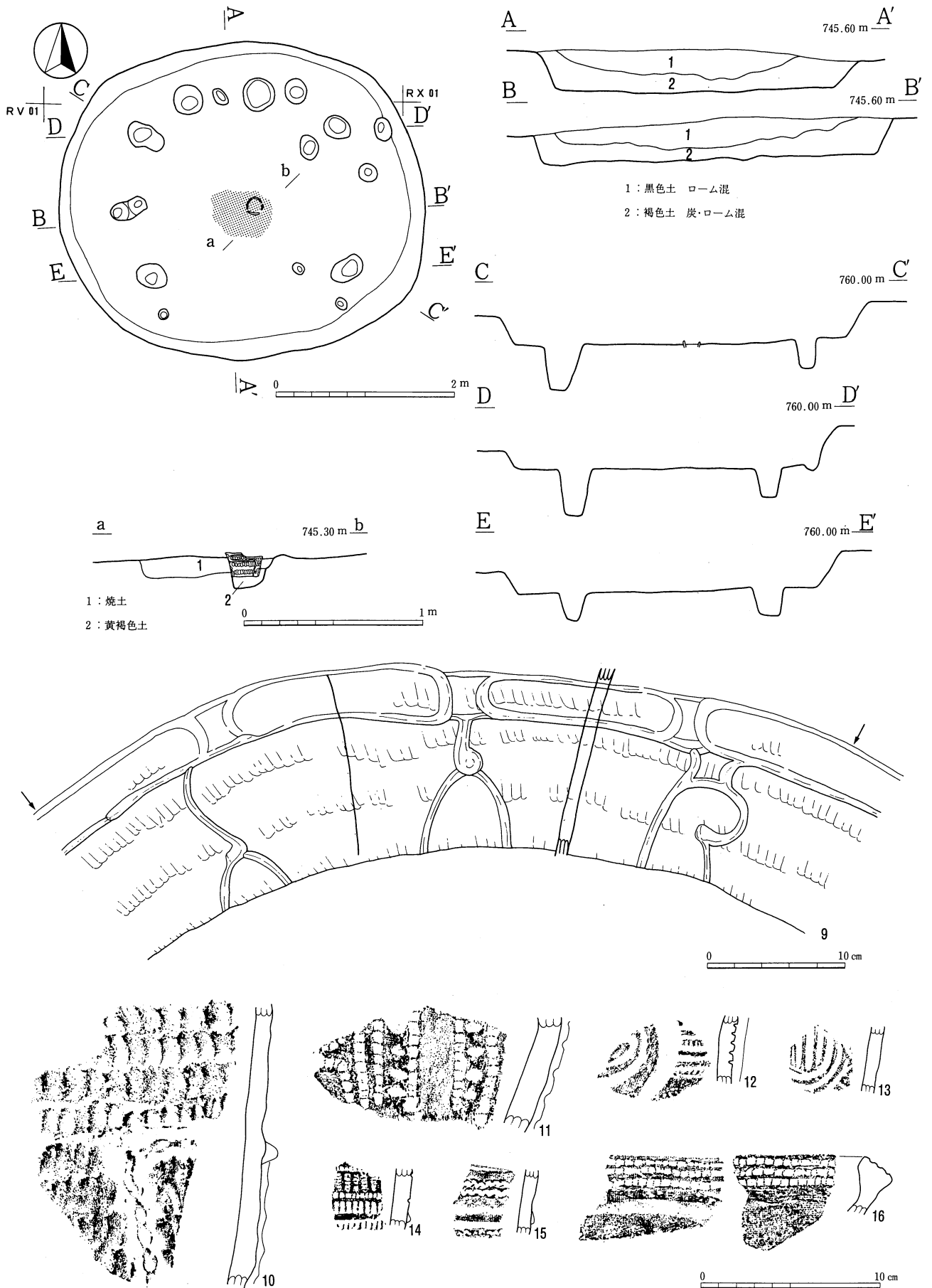
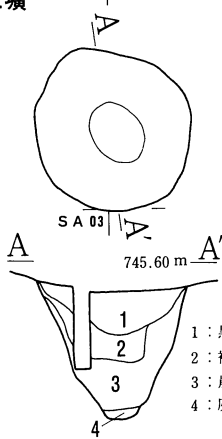


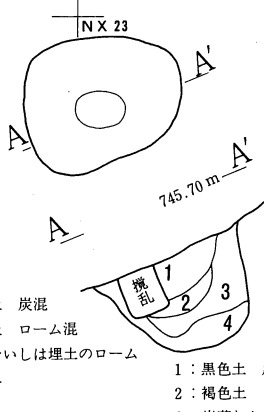
図 12 2号住居址実測図・出土遺物実測図・拓影

1号土壌



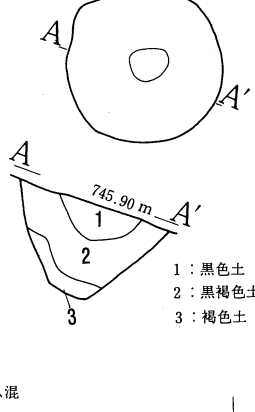
- 1: 黒色土 炭混
- 2: 褐色土 ローム混
- 3: 崩落ないしは埋土のローム
- 4: 灰色土

2号土壌



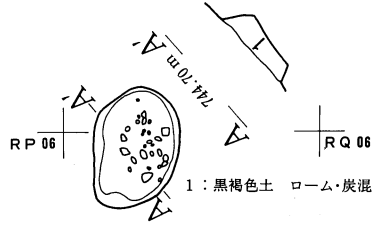
- 1: 黒色土 炭混
- 2: 褐色土 ローム混
- 3: 崩落したローム
- 4: 指頭大のローム粒

3号土壌



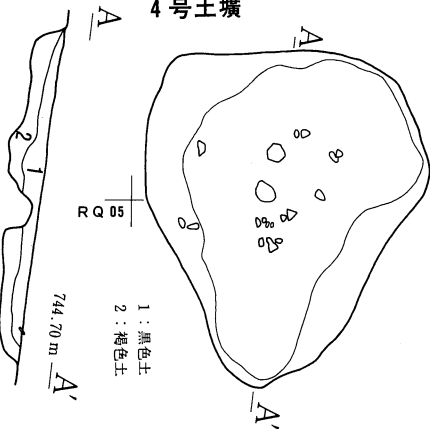
- 1: 黒色土
- 2: 黒褐色土 ローム混
- 3: 褐色土 ローム混

5号土壌



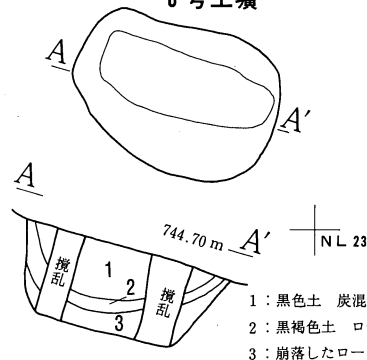
- 1: 黒褐色土 ローム・炭混

4号土壌



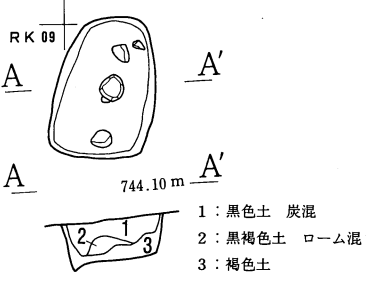
- 1: 黒色土
- 2: 褐色土

6号土壌



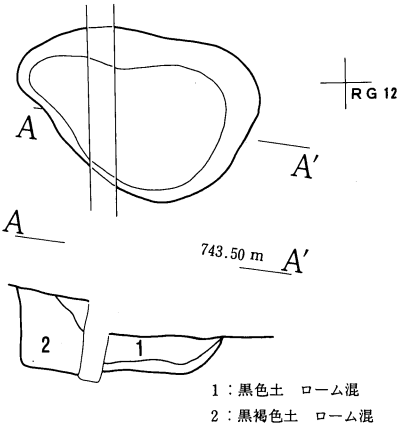
- 1: 黒色土 炭混
- 2: 黒褐色土 ローム混
- 3: 崩落したローム

7号土壌



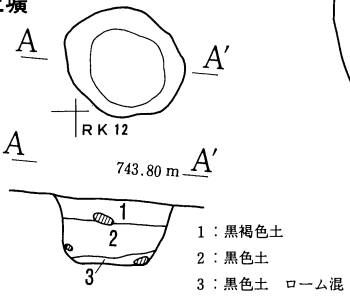
- 1: 黒色土 炭混
- 2: 黒褐色土 ローム混
- 3: 褐色土

10号土壌



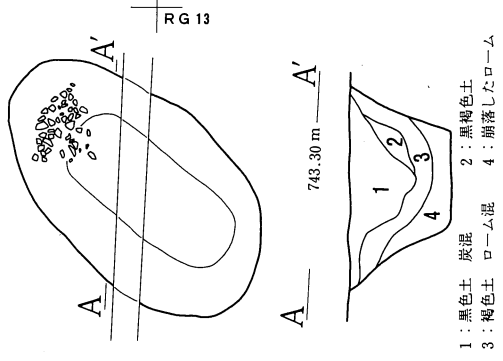
- 1: 黒色土 ローム混
- 2: 黒褐色土 ローム混

8号土壌



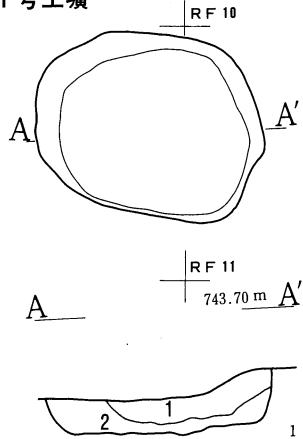
- 1: 黒褐色土
- 2: 黒色土
- 3: 黒色土 ローム混

9号土壌



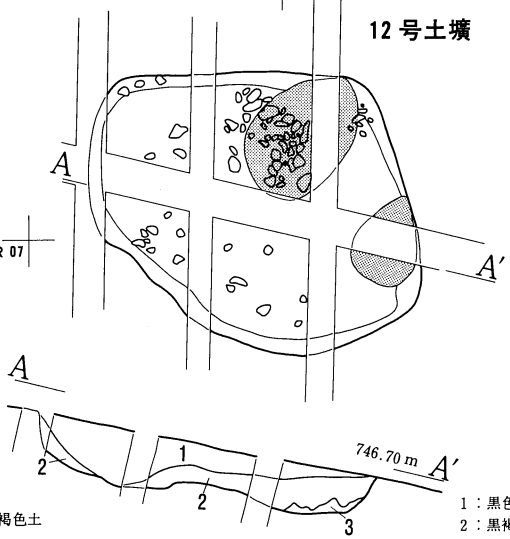
- 1: 黒色土 炭混
- 2: 黒褐色土 ローム混
- 3: 褐色土 ローム混
- 4: 崩落したローム

11号土壌



- 1: 黒褐色土
- 2: 崩落したローム

12号土壌



- 1: 黒色土 ローム混
- 2: 黒褐色土 ローム混
- 3: 焼土

1号火床

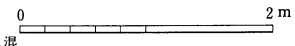
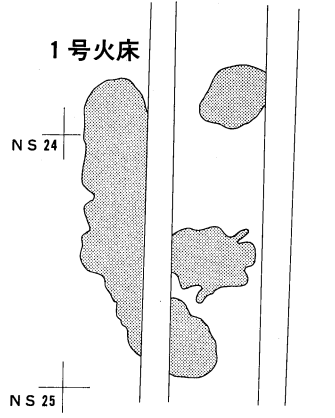


図13 土壌実測図 (1:60)



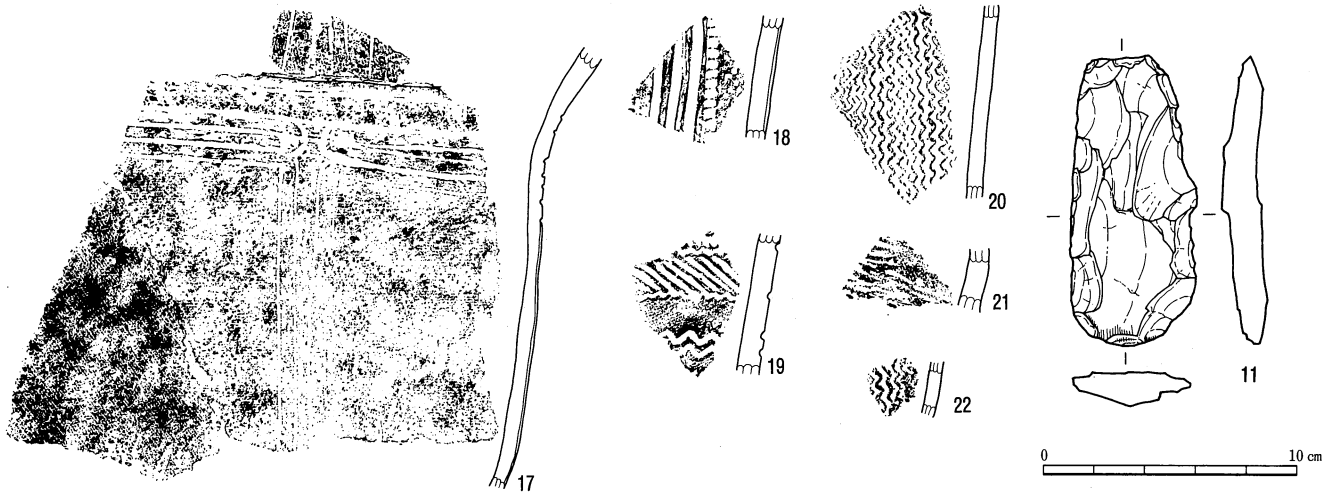


図14 土壙・火床出土遺物実測図・拓影

12基の土壙が検出された。形態等に幾つかのバリエーションがあり、同一の用途をもった土壙ではなさそうである。

① 1号土壙

SA03グリッド付近に位置する。1.4m×1.2mの円形に近い楕円形プランを呈し、深さ1.0m。断面は播鉢形で、壙縁に対し、底面積の小さいことに特徴がある。出土遺物はない。

② 2号土壙

NX23グリッド付近に位置する。1.0m×1.0mの円形プランで、深さ0.8m。断面は播鉢形。出土遺物はない。

③ 3号土壙

NV19グリッド付近に位置する。直径1.2mの円形プランで、深さは0.7m。断面は播鉢形で、1号土壙同様、壙縁に対し底面積が小さい。出土遺物はない。

④ 4号土壙

RQ05グリッド付近に位置する。2.7m×2.3mの不整な楕円形を呈し、深さ0.3m。断面形は四角で、大ききの割には浅い。埋土中に小礫を多く含むことを特徴とする。出土遺物はない。

⑤ 5号土壙

RP06グリッド付近に位置する。規模は1.0m×0.7m、深さ0.2m。平面楕円形、断面「U」字形。やはり埋土中に多くの礫を含む。出土遺物はない。

⑥ 6号土壙

NK22グリッドに位置する。規模は1.6m×1.2m、深さ0.7m。平面楕円形、断面台形を呈する。出土遺物はない。

⑦ 7号土壙

RK09グリッド付近に位置する。平面1.0m×0.9mのほぼ円形プランで、深さ0.5m。断面は台形を呈す。若干の礫と大形の土器破片(17)が出土した。この土器は平出第Ⅲ類Aに比定される。

⑧ 8号土壙

RK12グリッド付近に位置する。平面1.2m×0.8m、深さ0.35m。平面隅丸長方形、断面は四角形を呈する。壙底よりやや浮上して幼児頭大の石があたかも置かれたかのような状態で出土した。墓壙である可能性が強い。出土した2片の土器(18・19)はいずれも貉沢式に併行する時期である。

⑨ 9号土壙

R G13グリッド付近に位置する。平面2.4m×1.4m、深さ0.8mと比較的大形の土壙で、平面楕円形、断面台形を呈す。長軸方向東側の埋土に小礫が多量に含まれており注目される。遺物は山形押型文土器(20)が出土している。

⑩ 10号土壙

R F12グリッド付近に位置する。規模は1.9m×1.2m、深さ0.6mで、平面不整楕円形を、断面は台形を呈す。土器片と石器が出土しており、21は条痕文のある土器、22は押型文土器で共に早期に属す。11は完形の打製石斧である。

⑪ 11号土壙

R E10グリッド付近に位置する。平面楕円形で1.8m×1.4m、深さ0.4m。出土遺物はない。

⑫ 12号土壙

R S07グリッド付近に位置する。平面2.9m×2.3m、深さ0.4mを測る大形の土壙で、不整楕円形を呈する。縦横に走るトレンチャーにより部分的に破壊されている。土壙内には礫と焼土が分布する。焼土は壙底東側の2箇所があり、礫は拳大よりも小さめの石が全面に散在する。特に、一方の焼土上には礫が集中し、焼けているものが大半であり、集石炉的な様相をもつ。出土遺物はない。

以上12基の土壙は必ずしも明確に時期決定できないが、いずれにしろ早期または中期中葉前半の所産であろう。また、その機能を明らかにする手がかりは少ないが、8号土壙の石は抱石葬に伴うもの、10号土壙の打製石斧は壙底近くから発見されており副葬品とそれぞれ捉えられる可能性があり、また、7号土壙の大きな土器破片も同様に推定できないことはない。

ウ 火床 (図13)

N S24グリッドを中心とする位置に検出され、約2m×2mの範囲に焼土が広がっている。時期決定の決め手となる遺物は得られていない。

エ 遺構外出土遺物

調査区全域にわたって、土器片や石器類が発見されている。しかし、その数は少なく、散在するといった状況であった。

① 土器 (図15、P L61)

主に早期押型文土器と中期中葉前半の土器が発見された。

23～47は押型文土器で、この中にも時間差が認められる。23・24は格子目押型文で、口唇部にも施文される。25・26は山形文で、波長が大きい。23～26はともに器壁が厚く、雲母を含むという特徴があり、文様の特徴とも合わせると立野式に比定できる一群と思われる。27～43は山形押型文で、その波長も狭く、縦位に密接施文される。器壁は比較的薄い焼成は良好で堅い。ただし、黒鉛を含んだものはない。44～47は楕円押型文で、いずれも横位に回転施文する。47には鋸歯状の押型文も併用される。48～54は胎土中に繊維を含む一群で、48・49は条痕文が、53には絡条体圧痕文が施される。

55～97は中期の土器である。55～73はモチーフの表出に角押引文が多用される土器で、そこに楕円区画文等が組み合わされる。いずれも深鉢で、猪沢式に比定されよう。75～82は斜行ないし波状の沈線文を特徴とする一群で、楕円形モチーフも併用される。時期的にはやはり前記の土器群と併行しよう。83はそれに伴うと思われる浅鉢である。口縁部文様帯に角押引文による連続モチーフがみられる。84・85は区画文を基調とし、その内部を細い沈線文で格子目状に充填する。北陸の新崎式土器の特徴に似る。86～97は平出第Ⅲ類Aと呼ばれる土器である。

98～100の3点は後期の土器である。弧線文(98)、磨消縄文(99)、列点文(100)を特徴としており、堀之内式土器に比定できよう。

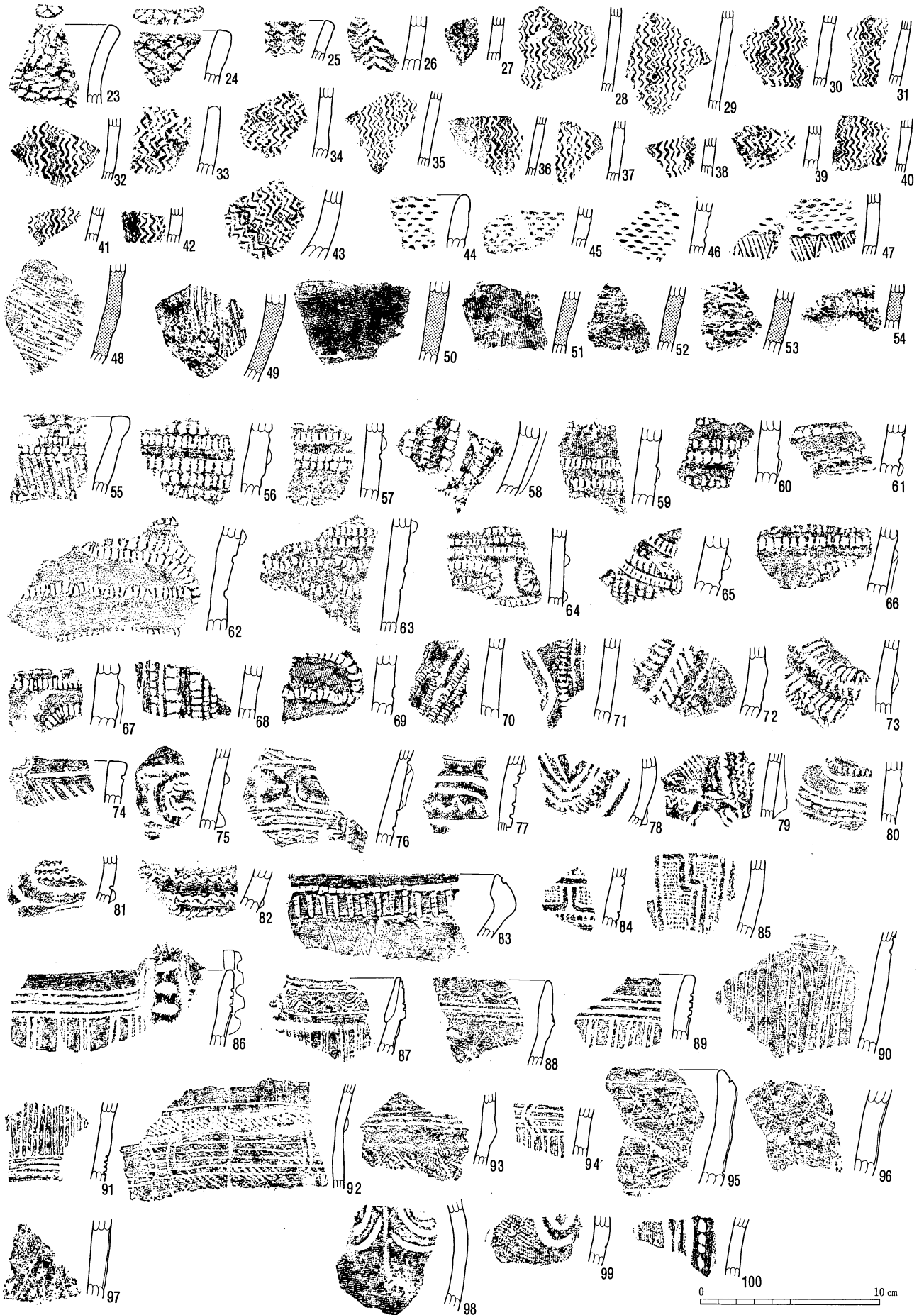


図15 遺構外出土縄文時代土器拓影

② 石器 (図16・17、P L62)

定形的な石器について、図示できるものについてはすべて掲載した。

石鏃(12~25)は14点出土した。無茎凹基のものが圧倒的に多いのは時期的な特徴であろうか。13・17・21がチャート製の他は黒曜石製。石錐はつまみを有するもの(26)と棒状(27)の2種がある。27はチャート製で、先端部付近に摩耗が観察される。26は黒曜石製。石匙は3点がある。縦形の28は先端と片側縁を欠損する。刃部は両面から調整される。横形のうち完形の29は刃部片面調整、30は両端欠損していて刃部は使用痕に近い小剥離痕が残るのみで調整痕はない。3点ともチャート製である。このほか不定形な石器としてスクレイパー3点、ピエス・エスキーユ5点、小剥離痕のある剥片4点があり、スクレイパー1点がチャート製の他はすべて黒曜石製。

31~42は打製石斧である。31~36が完形で、長さは11cm~12cm前後を測り、すべて短冊形か撥形である。43は剥片を利用した横刃形石器、44は粗製大形石匙である。刃先の一部を欠損する。45~49は磨石で1面ないしは2面に磨面をもつ。46・48・49には敲打痕も認められる。

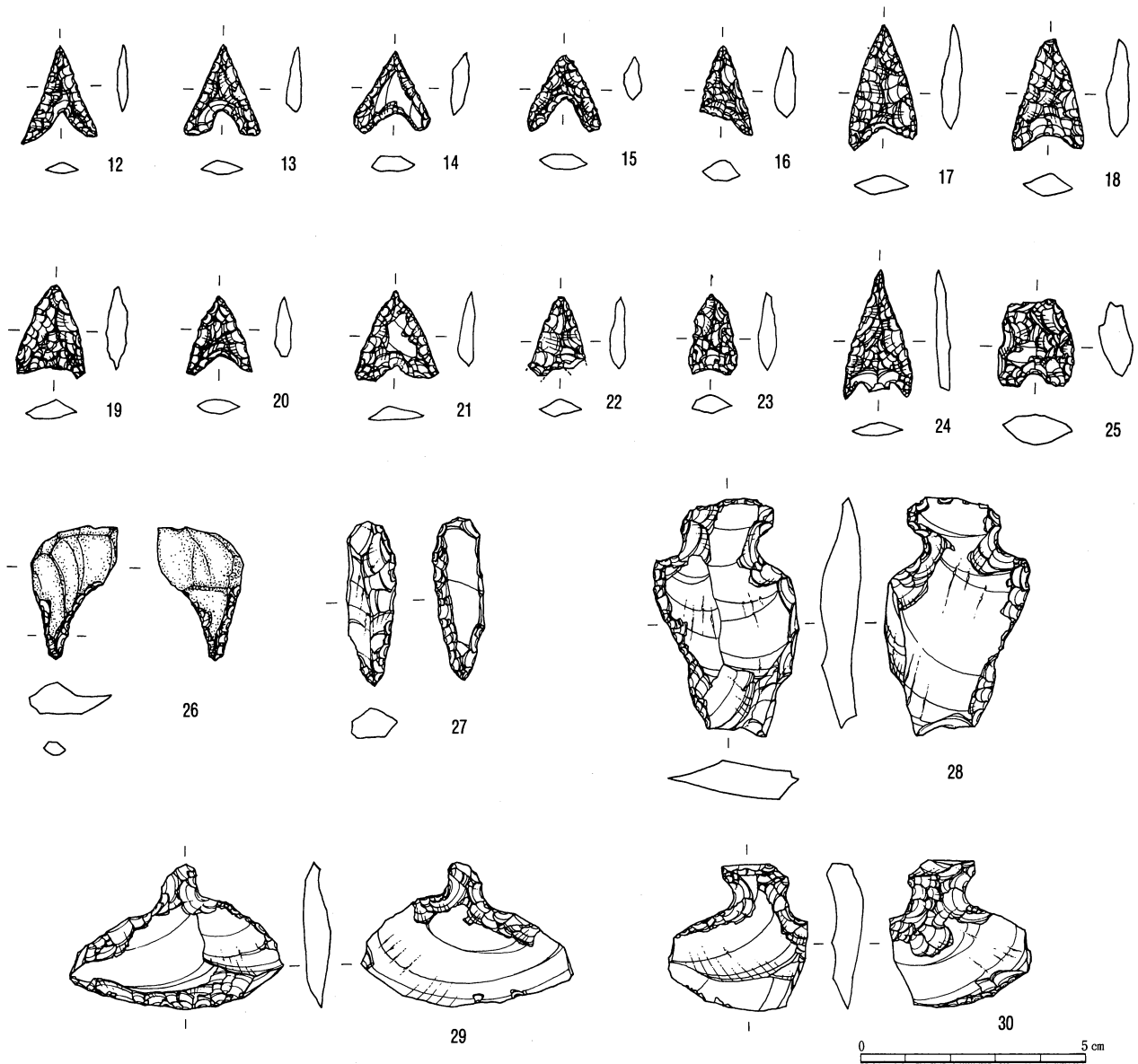


図16 遺構外出土縄文時代石器実測図1

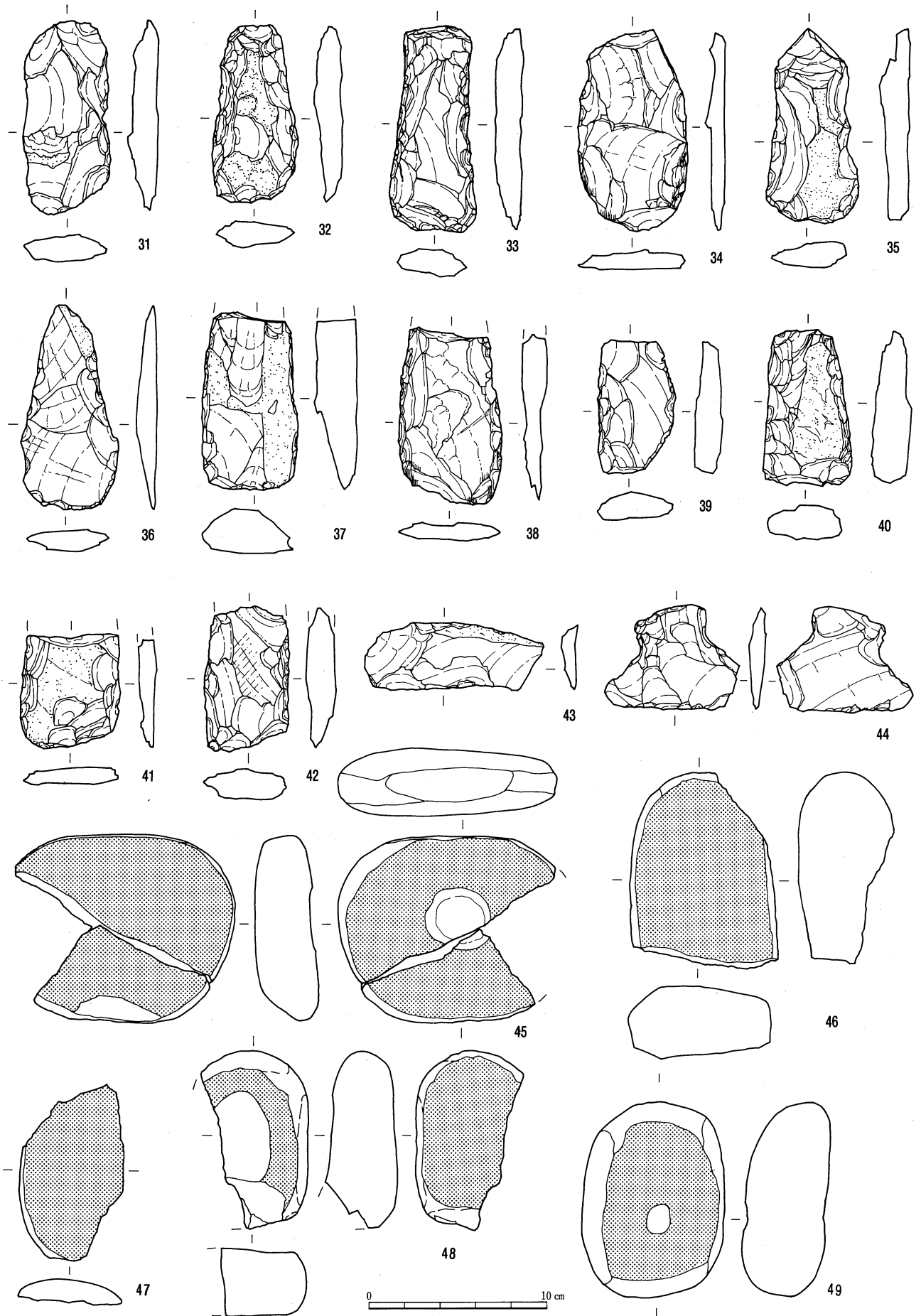


図17 遺構外出土縄文時代石器実測図2

## 5 小 結

広大で陽当たりのよい扇状地であっても、必ずしもそのすべてが古代人の居住地として歓迎されていたわけではなかったようである。北区の1万㎡余という広大な土地に発見された1基の陥穴から、縄文時代にあっては、付近一帯は居住地というよりも猟場であったらしいことが想定された。一方、先土器時代の遺物集中区は、塩尻市内における人々の生活の開始時期を示唆するという貴重な発見となった。しかし、その規模はごく小さく、あたかも狩猟の途中で破損した石器を修復したか、または、移動の途中に立ち寄ったかのごとく、ごく短期間の逗留を物語るものにすぎないともいえる。これも遺跡の実態や、古代人の生活の一面を見るためには重要な資料となろう。

南区では、小規模な縄文時代中期の集落の跡をみることができた。2軒の住居址はおそらく同時に存在したものであろうし、土壌の多くもその住居址と同じ時期に構築されたと思われる。前面に広大な原野をみながら、台地の縁辺でどのようなくらしが展開されたのだろうか。近年、縄文時代の集落研究では、その地域の中心的な大集落と、それと強い関係をもって存在したとされる小集落との係わりが注目されている。本遺跡はその小集落の1つとして、今後地域史を語る上で果たす役割が期待される。

## 第14節 なかつばら 中原遺跡 (ENP)

### 1 遺跡の概観

遺跡は塩尻市大字片丘1077番地9一帯に所在する。筑摩山地の麓、洪積扇状地に波田ロームをのせた広大な台地の中央に位置し、北東に浅い谷を刻んで大沢川が北流している。周辺は一面の畑地で、なだらかに西へ傾斜しており、標高は720mから750m。東は山の神遺跡、北は犬原遺跡に続いている。

### 2 調査の概要と経過

中央道長野線は遺跡の東部を南北に横切り、調査の対象となったのは21500㎡の範囲である。

調査は昭和60年8月6日から28日及び10月21日から24日にかけて行い、調査研究員5名が当たった。まず、地層層序、遺物の出土状況、遺構の有無を探るため、傾斜方向とそれに直行する方向に23本、延べ1960mのトレンチを入れた。その結果、基本的層序はI層：耕作土、II層：暗褐色土、III層：ロームであり、縄文時代中・後期の土器片や黒曜石片を含むII層は調査区南西部のごく狭い範囲にのみ分布することが明らかになった。しかし、出土した土器片はいずれも小破片で、量も少なく、遺構に結び付く可能性はないと判断された。また、隣接する山の神遺跡で先土器時代の遺物が出土したこともあって3箇所を深く掘り下げてみたが、遺物は出土しなかった。以上のことから、面的調査の必要はないと判断し、調査は延べ17日間で終了した。

なお、耕作土からは古墳時代以降の遺物が出土している。

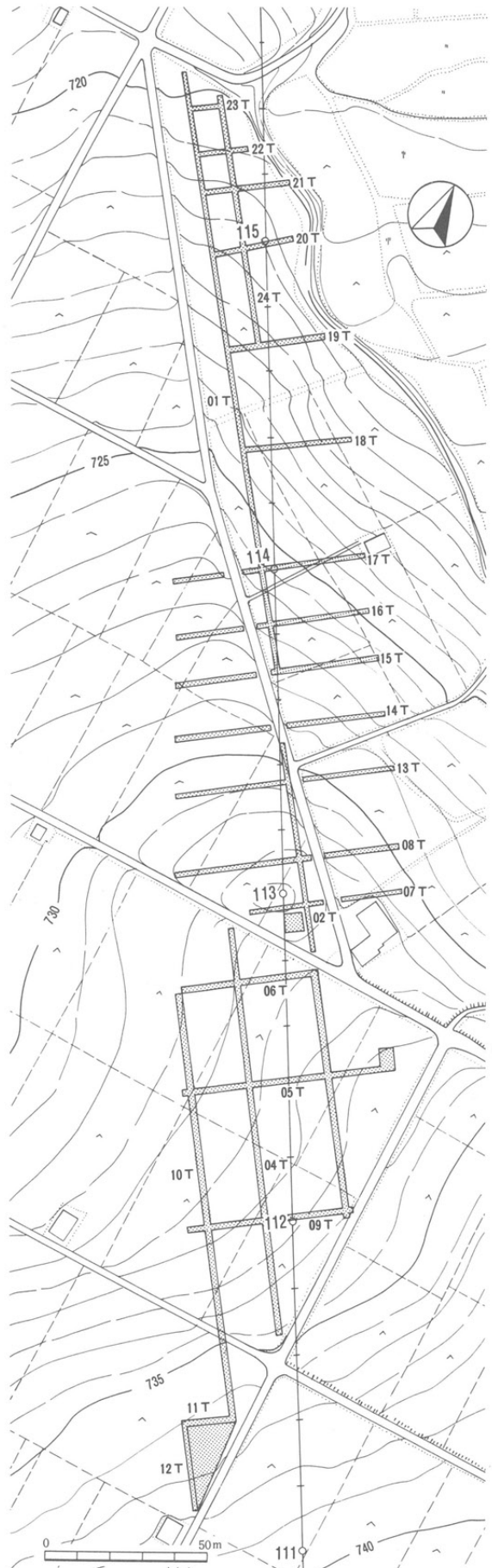


図1 地形及び発掘範囲図 (1:2000)

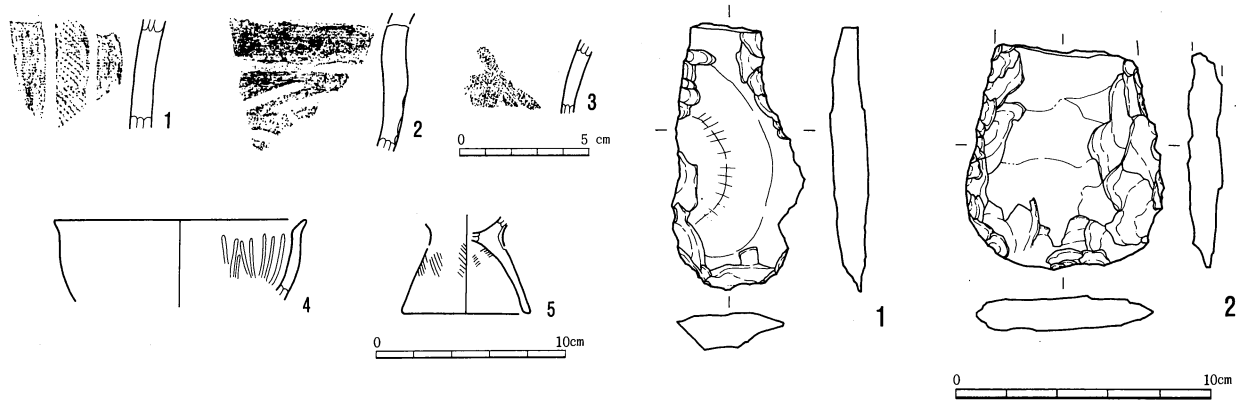


図2 出土遺物実測図及び拓影

### 3 小 結

今回の調査では少量の遺物が出土したのみで遺構は存在せず、遺跡の中心は、より西側にあると予想される。ただ、よく似た立地条件にある大原遺跡で陥穴とみられる土壌が発見されたこと、隣接する山の神遺跡でも1基ながら同様の土壌が検出されていることを考え合わせれば、水の得にくい高燥な台地の中央に立地する本遺跡も生産の場として人々の生活を支えていた可能性はある。



## 第15節 <sup>いぬっばら</sup> 犬原遺跡 (EIP)

### 1 遺跡の概観

遺跡は塩尻市大字片丘10761番地一帯に所在する。高ボッチ山塊に源を発する大沢川が平地に出る付近の左岸台地上に立地する。この台地は西側を北流する田川に、北東側を大沢川に開析された古扇状地性の台地で、西に緩く傾斜している。道路を境界として北は上木戸遺跡、南は中原遺跡が隣接する。標高およそ710m～720m。現河川との比高差は、田川が約40m、大沢川が約4mを測る。遺跡からは北アルプスを背景に松本盆地が一望できる。

昭和42年、遺跡の北部が松本深志高校地歴会によって発掘調査され、弥生時代後期の住居址2軒が検出されている〔藤沢宗平・小松虔1968〕。

### 2 調査の概要

中央道長野線は遺跡の東縁部を通過し、これによって調査の対象となった面積は3250㎡である。調査前は畑地で、長芋などの野菜が栽培されていた。なお、台地縁辺が出入りしているため調査区は南と北に分かれるが、北はわずかな面積(約20㎡)であり、調査の結果をみても道路を隔てて接している上木戸遺跡から連続して遺構が分布することから、上木戸遺跡に含めて報告する。

発掘調査は昭和60年4月22日から同年6月21日まで行われ、調査研究員7名が担当した。まず、層序と遺構、遺物の分布状況把握のため、トレンチ調査を実施した。トレンチは、いわゆる土器捨て場や弥生時代～古代の水田址が存在する可能性も考慮し、台地下にも設定した。その結果、台地上の3箇所遺構が見つかり面的調査に移行したが、台地下では複数の古い水田面が検出されたもののいずれも近世以降のものと判断され、それ以前の遺構や遺物包含層は認められなかったため、面的調査は行わなかった。これら発掘調査はすべて手作業による。

測量基準点は、同じ台地上に隣接して分布する山の神・中原・犬原・上木戸遺跡で共通とし、日本道路公団工食用杭STA114+80(X=13795.8204、Y=-46855.1660)をあてた。大地区設定は業者に委託し、グリッド設定は調査研究員が行った。遺構の測量は簡易遣り方によっている。

整理作業は昭和60年12月に開始し、年度内に図面整理、調査所見の調整、遺物の水洗、注記を終了した。

### 3 調査の経過

#### 昭和60年度

4月22日 遺跡にて調査計画検討し、発掘準備開始。

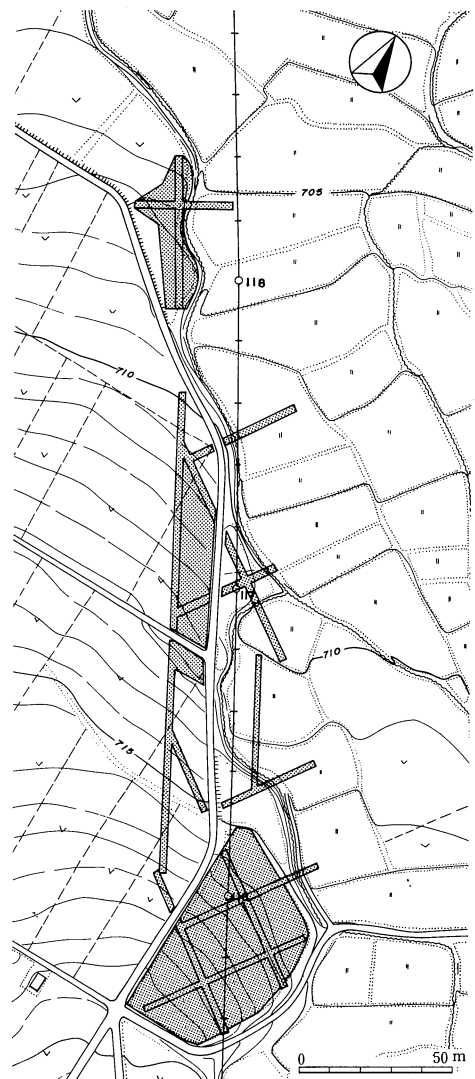


図1 地形及び発掘範囲図 (1:2500)

- 4月30日 トレンチ調査開始。1～3トレンチにて溝址検出。
- 5月2日 6・9トレンチで縄文時代早・後期土器出土。
- 5月8日 3・5・7・8トレンチでは台地下を調査。摩耗した土師器片や陶器片が出土。
- 5月9日 10トレンチで縄文時代の土壙検出。
- 5月10日 長野県農事試験場梅村弘氏を招いて、特に台地下の土層を検討し、複数の古い水田面確認。
- 5月13日 再度土層を検討した結果、台地下は氾濫性堆積物に覆われ、遺構検出の可能性なしと判断。
- 5月17日 D・I・P地区で面的調査開始。
- 5月23日 D地区で新たに土壙検出。I地区で検出の溝址を近世以降の道跡と判断。
- 6月4日 I地区で溝址の調査終了し、縄文時代遺物包含層掘り下げ開始。
- 6月5日 D・I地区で相次いで方形周溝墓検出。
- 6月10日 危険防止のため、重機を使って台地下のトレンチを埋め戻す。
- 6月12日 P地区にて道跡と考えている溝状遺構に切られる人骨を伴った土壙墓検出。
- 6月17日 信州大学医学部西沢寿晃氏を招き、出土した人骨

の鑑定を依頼。

6月21日 調査区全景写真を撮り、調査終了。



12月21日 図面整理、調査所見の調整等整理作業を開始。

**昭和61年度**

4月～3月 遺物台帳を作成し、遺物の実測を行う。

**昭和62年度**

4月～12月 報告書刊行に向けて図版作成及び原稿執筆。

## 4 調査の結果

### (1) 層序と地形形成 (図1・2)

遺跡が立地する台地の基本的層序は単純で、I層：耕作土、II層：暗褐色土、III層：ローム(波田ローム)、IV層：礫層(波田礫層)である。このうちII層は風性の堆積物とみられ、I地区とP地区の一部にのみ分布し、それ以外の地区ではI層下は即III層となる。II層の上部から縄文時代後期、下部から早期の土器が出土している。また、遺構は、II層の分布範囲内ではII層上面、分布範囲外ではIII層上面で検出された。

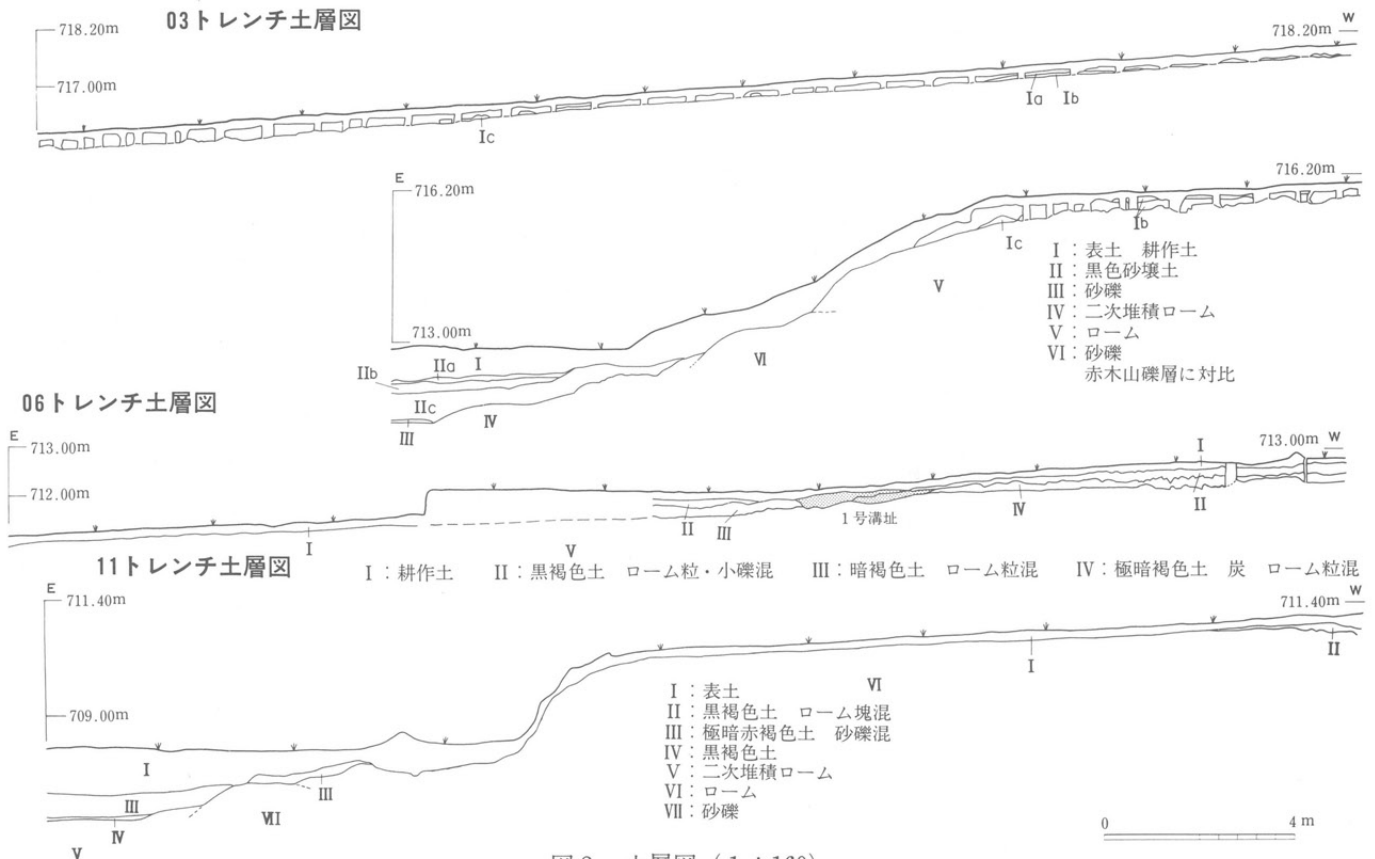


図2 土層図 (1:160)

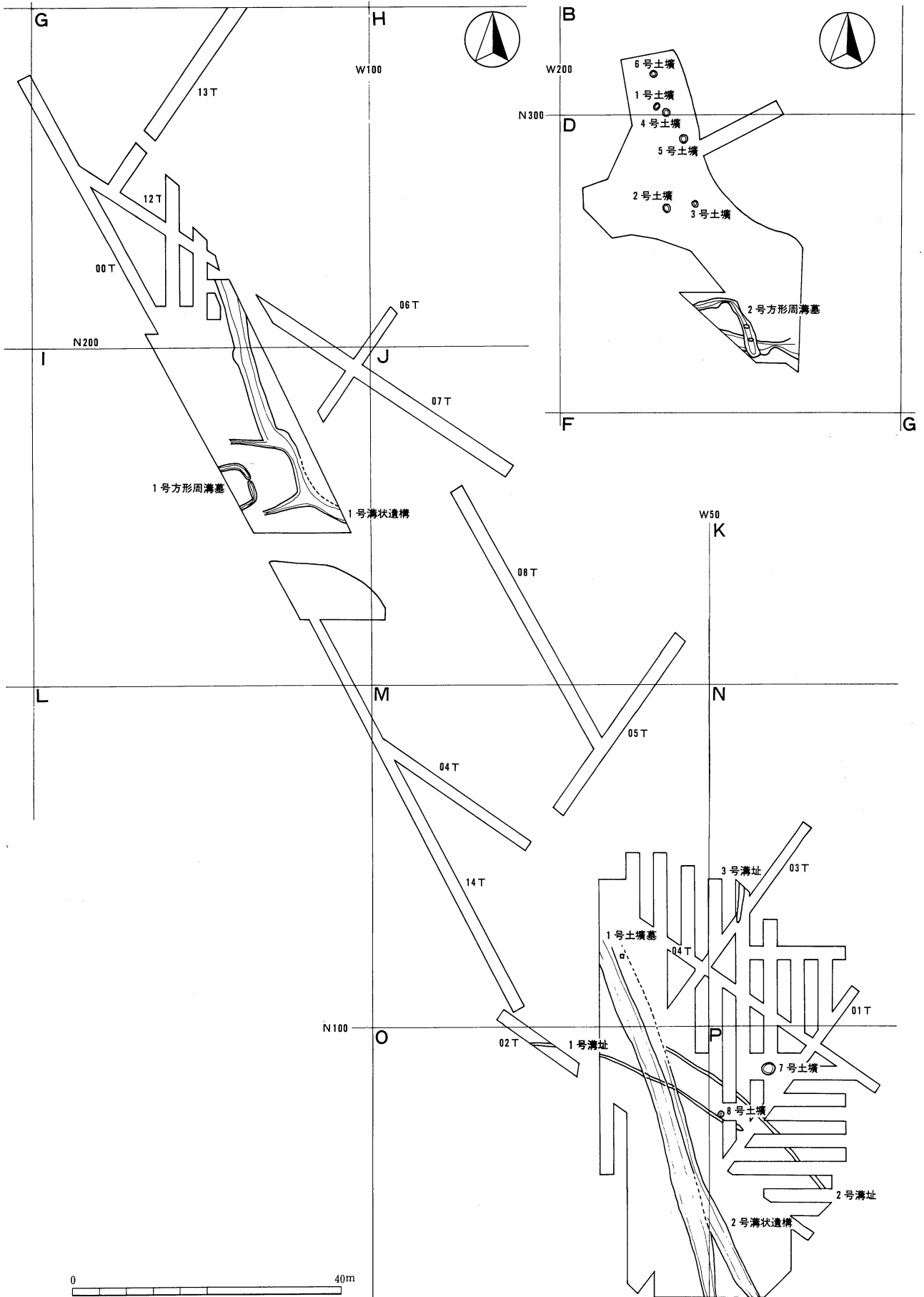


図3 トレンチ配置及び遺構分布図 (1 : 800)

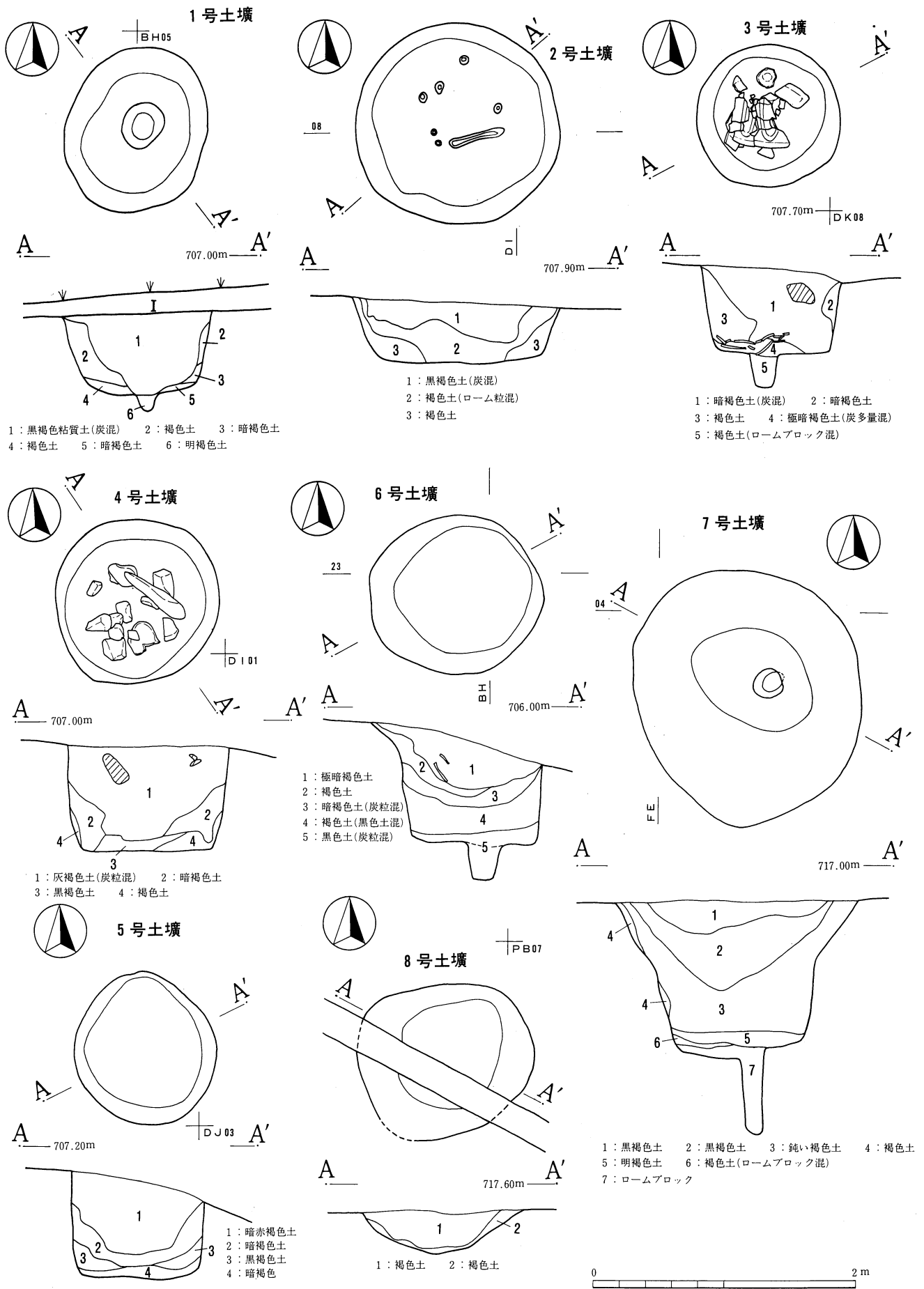


図4 土壌実測図

(2) 遺構と遺物の概観 (図3)

縄文時代、弥生時代及び近代の遺構と遺物がある。縄文時代の遺構としては中期終末期の土器を出土した2基を含む土壙6基があり、時期不明の2基も縄文時代の所産である可能性が大きい。また弥生時代の遺構としたのは2基の方形周溝墓であるが、調査区外にかかって全体を調査できなかった上にまったく遺物を伴っていないので、時期の確定はむずかしい。近世の遺構は、2本の溝址と道跡と考えられる3本の溝状遺構及び人骨の残る土壙墓1基である。遺物には、遺構外出土遺物に縄文時代早期押型文土器、後期堀之内式土器、石器がある。

(3) 縄文時代の遺構と遺物

ア 土壙 (図4・5、PL63~65)

調査区北端のB・D地区に検出された1~6号土壙は規模、形状に共通点が多く、径1.0m~1.2mの円形プランで深さ0.5m~0.8m、壁は垂直に近く、壙底が平坦で堅い。埋土はレンズ状に堆積し自然埋没とみられるもの(2・5・6号)と、大きな礫を伴い人為的埋没とみられるもの(1・3・4号)がある。1・3・6号土壙は底に小ピットを設けており陥穴を想像させるが、3号土壙では完形土器が底に置かれているなど陥穴を墓壙に利用した可能性もある。

3号土壙出土土器(1)は完形。底部から口縁までほぼ直線的に開く深鉢で、口縁部に1条沈線を巡らし、胴部は2本の沈線で区画さ

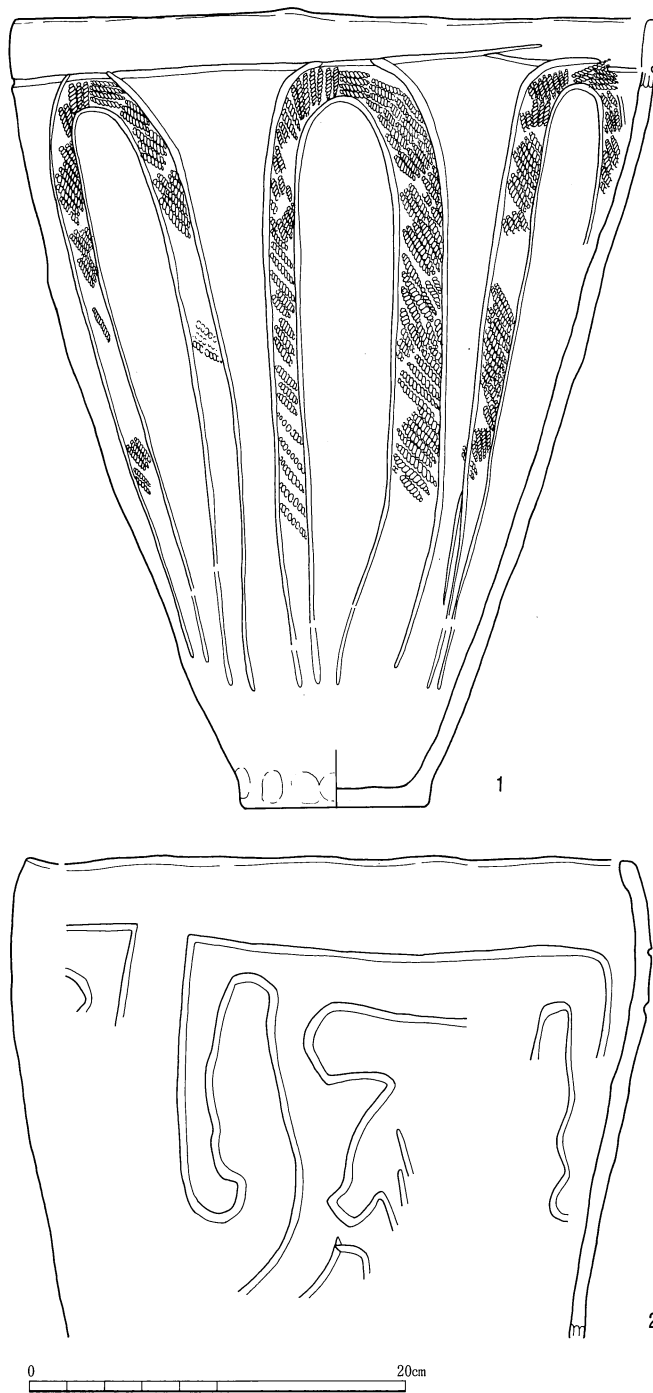


図5 土壙出土遺物実測図

番号	規模(長径×短径×深さ)m	平面形	断面形	埋土	備考
1	1.1×1.0×0.6	円形	壁斜底平	6分層、炭	壙底にピット1
2	1.5×1.5×0.5	円形	壁斜底平	3分層、炭	壙底にピット多数
3	1.1×1.1×0.7	円形	壁直底平	5分層、炭・礫	壙底にピット1、中期土器
4	1.3×1.3×0.8	円形	壁直底平	4分層、炭・礫	
5	1.2×1.1×0.8	円形	壁直底平	4分層	
6	1.3×1.2×0.9	円形	壁直底平	5分層、炭	壙底にピット1、中期土器
7	2.0×1.7×1.2	楕円形	壁直底平	7分層	壙底にピット1
8	1.3×1.1×0.3	隅丸長方形	壁斜底丸	2分層	

表1 土壙一覧表

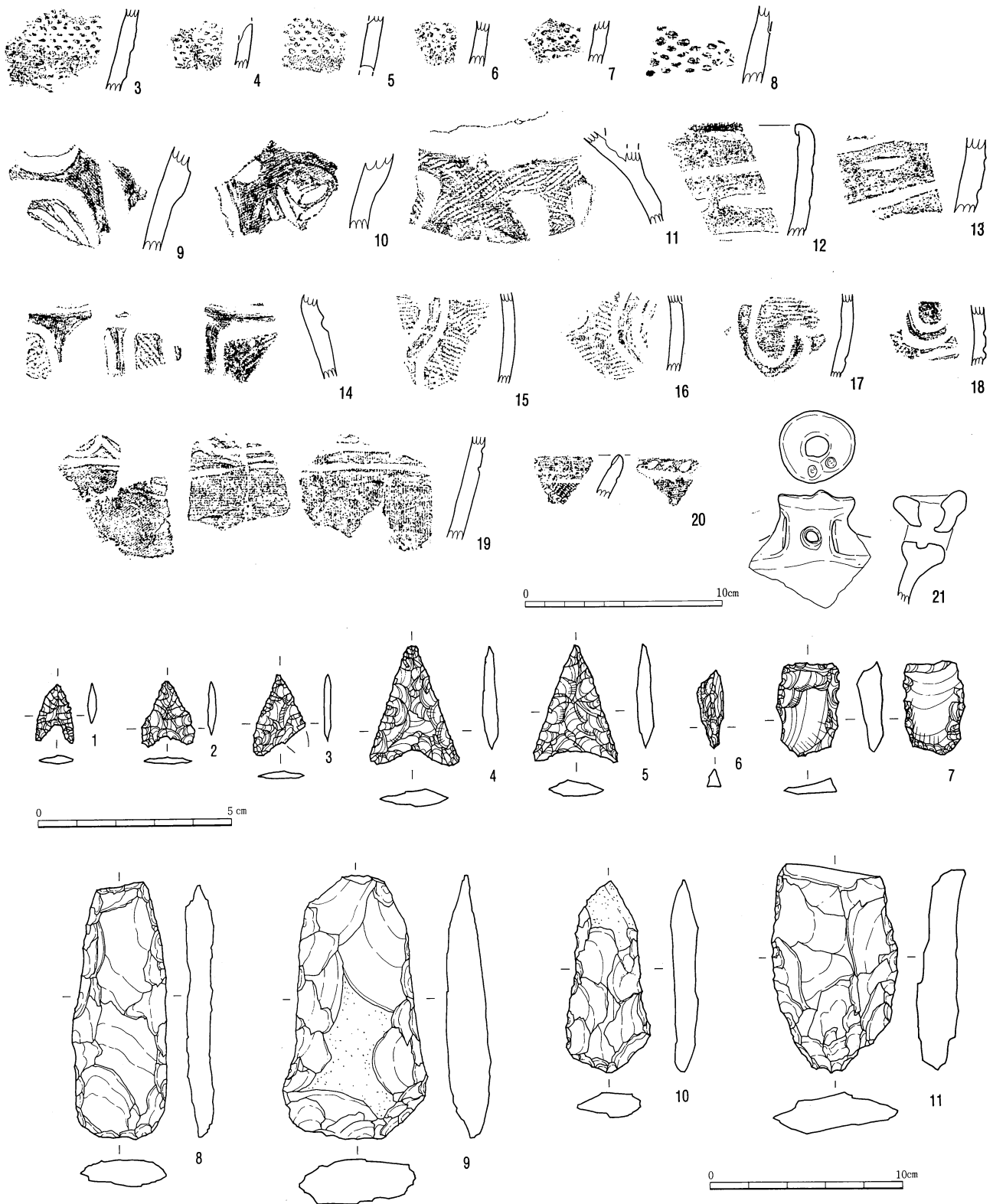


図6 遺構外出土縄文時代遺物実測図

れた逆「U」字状の縄文帯を6単位配している。中期終末期に比定される。5号土壙出土土器(2)は深鉢の大形破片で、わずかに口縁部が内湾する。胴部は沈線で複雑なモチーフを描いて飾るが、中に充填されるべき縄文は省略されている。中期終末から後期初頭に比定される。

調査区南部に単独で検出された7号土壙は径2mの円形プランで深さ1.1m、壁は初め垂直に立ち上が

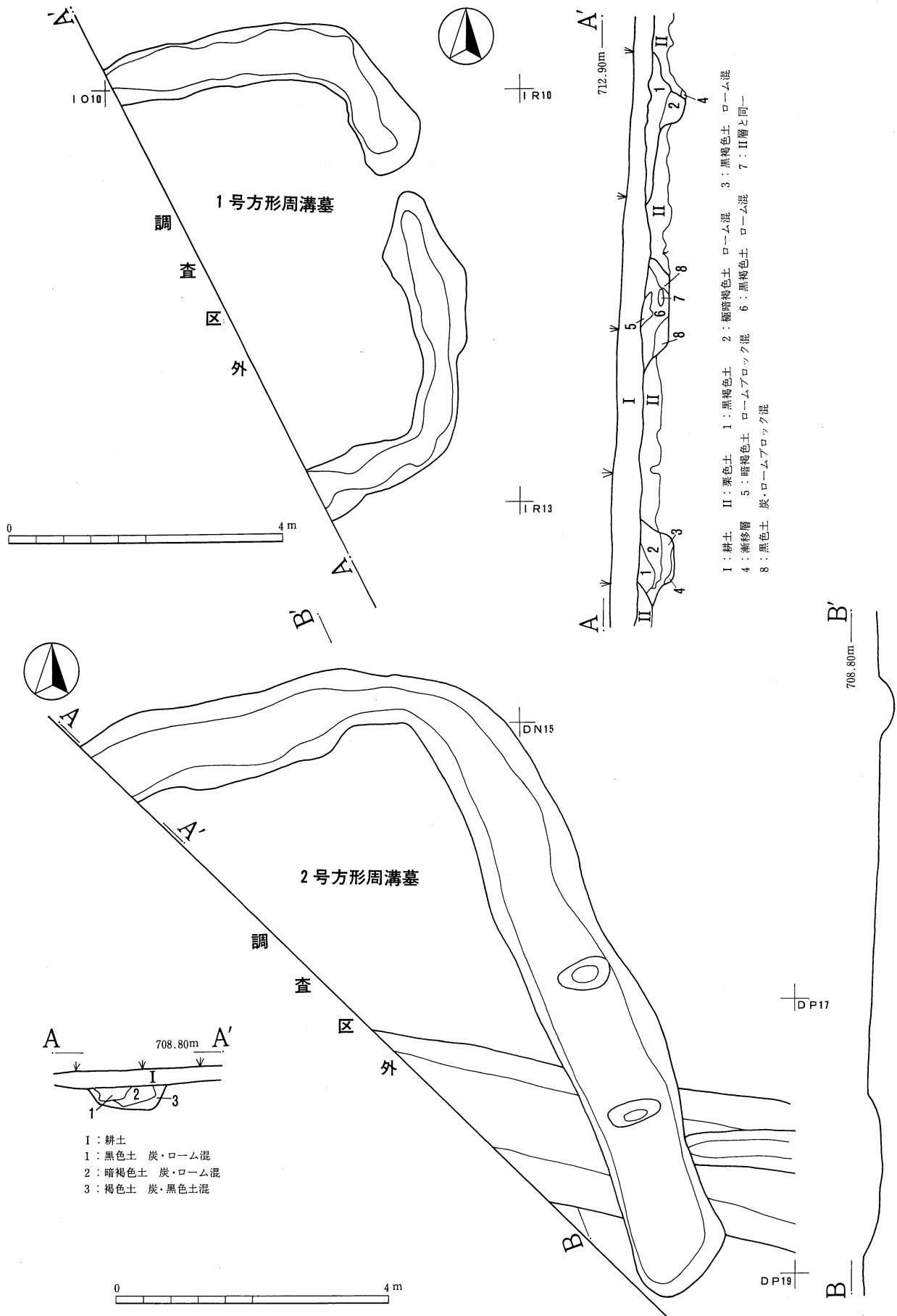


図7 方形周溝墓実測図 (1:80)

って上部で大きく開き、平坦な底の中央に小ピット1個をもつ。陥穴であろう。8号も南部に検出された土壌であるが、丸い底、なだらかに立ち上がる壁など他と異なる。出土遺物はない。

イ 遺構外出土遺物 (図6、PL65)

量は少ないが早期前半、中期後半、後期前半の土器及び石器が出土している。

早期前半押型文土器は横位回転施文の楕円文を施す(3~8)。I区のII層下部から出土したもので、小破片ばかり総数20点余りを数える。中期後半の土器(9~13)は曾利式あるいは唐草文系の中でも新しい段階に属するもので、11は把手を有する鉢、他は深鉢である。後期前半の土器(14~19)は堀之内式に比定される深鉢または鉢。I区のII層上部より出土し、総数30点を越え、同一個体の破片も見られる。口縁内側に刻みを施す20、把手をもつ21も後期の土器である。

石器には石鏃8点(1~5)、石錐1点(6)、スクレイパー1点(7)、打製石斧13点(8~11)などがある。これらはI層の出土で、調査区全域にわたって散漫に分布し、土器のような集中傾向はみられない。

(4) 弥生時代の遺構

ア 方形周溝墓 (図7、PL64)

2基検出されたが、2基とも調査区外にかかって調査できたのはおよそ2分の1であり、全容は明らかにできなかった。また、遺物の出土は皆無で、時期の確定はむずかしい。古墳時代の可能性もあるが、本遺跡の北部から隣接する上木戸遺跡にかけて弥生時代後期の集落が発見されていることから、弥生時代後期と考えたい。

1号方形周溝墓はI区に位置し、土層観察によればII層上面から掘り込まれているが、検出したのはIII層上面である。規模は南北8mを測り、胴張りの隅丸方形プランを呈する。軸の方向はN17°W。周溝の幅は平均70cm程で、II層上面からの深さ50cm。東側の溝中央やや北よりに陸橋部を設けている。主体部は検出できなかった。土層断面では中央部に幅1.6m、深さ40cmの掘り込みが認められるが、立ち上がりははっきりせず、後世の攪乱の可能性が大きい。

2号方形周溝墓は、D区のIII層上面に検出した。規模は、一辺10m以上。隅丸方形プランで、軸方向はN20°W。周溝は幅1m~1.2m、深さ40cmと広くて浅い。南で切れて陸橋となるが、コーナーか否かは確認できなかった。東側溝の底に2個のピットがある。

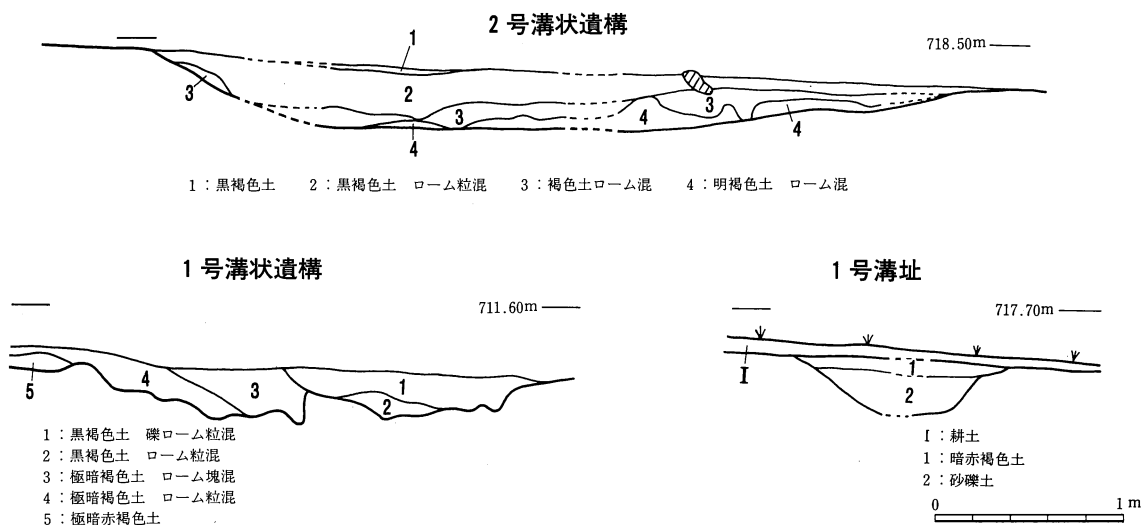


図8 溝状遺構及び溝址断面図



(5) 近世の遺構

ア 溝 址 (図8)

調査区南部のM・O区に2本検出された。2本ともほぼ等高線に沿って南から北西に延びている。III層を掘り込み、幅0.6m~1.0m、深さは最も深いところで30cm。底に土壤の混じらない砂礫が厚く堆積し、水の流れたことは確かである。遺物は出土しなかったが、近世の2号溝状遺構を切ることから、近世以降の所産と考えられる。

イ 溝状遺構 (図8、PL65)

調査区中央部のI区で1号、南部のM・O区で2号を検出した。共に検出面はI層下である。1号溝状遺構はほぼ南北に延び、途中西からの合流がある。平均幅3m、深さ40cm。

埋土上層には拳大の礫と近代陶器片が含まれ、中層に堅くしまった面も認められ、底は土壤化が進む。2号溝状遺構は南西から北東に延び、一部で新旧の重複が認められ、わずかながら西に位置を変えている。幅4m、深さ20cm~40cm。埋土上層に礫や土器・陶器片を含む。

1・2号溝はその規模、形状、延びる方向、出土遺物などからみて同一の遺構である。古い地形図をみればほぼ該当する位置に道があり、本遺構は耕地整理によって現在のまっすぐな農道が建設される以前に用いられていた道であろう。

ウ 土 墳 墓 (図9)

調査区南部で2号溝状遺構の下に検出した1基がある。0.7m×0.5mの長方形プランで、長軸は南北方向に一致する。人骨は下顎骨、大腿骨、頸骨が不完全ながら残っており、その出土状況は頭部を北にして西を向いた横位屈葬を示している。歯は成人のものであるが、年齢、性別等詳細は不明(註1)。木棺の痕跡は認められず直葬の可能性が大きい。副葬品はなく所属時期は明らかではないが、酸性の強いローム層中に葬られていたにもかかわらず遺骨の一部が遺存していることから、それほど古い時期のものとは考えられず、近世以降の遺構と判断した。

5 小 結

今回の調査では縄文時代中期末~後期初頭、弥生時代後期及び近世の遺構が発見された。

縄文時代の遺構は、その形態からは陥穴、出土遺物からは墓壇と推定される土壇であり、したがって狩猟の場であり墓域であったと考えられよう。北の上木戸遺跡では中期後半の集落が発見されている(本書第16節)。本遺跡の遺構は時期的にそれよりやや新しいが、両者はつながりをもつとみてよい。

弥生時代については、今回の調査では住居址は検出されず、遺跡北部から上木戸遺跡にかけて発見されている住居址群は本遺跡南部まで展開しないことが明らかになった。2基の方形周溝墓は離れて位置する

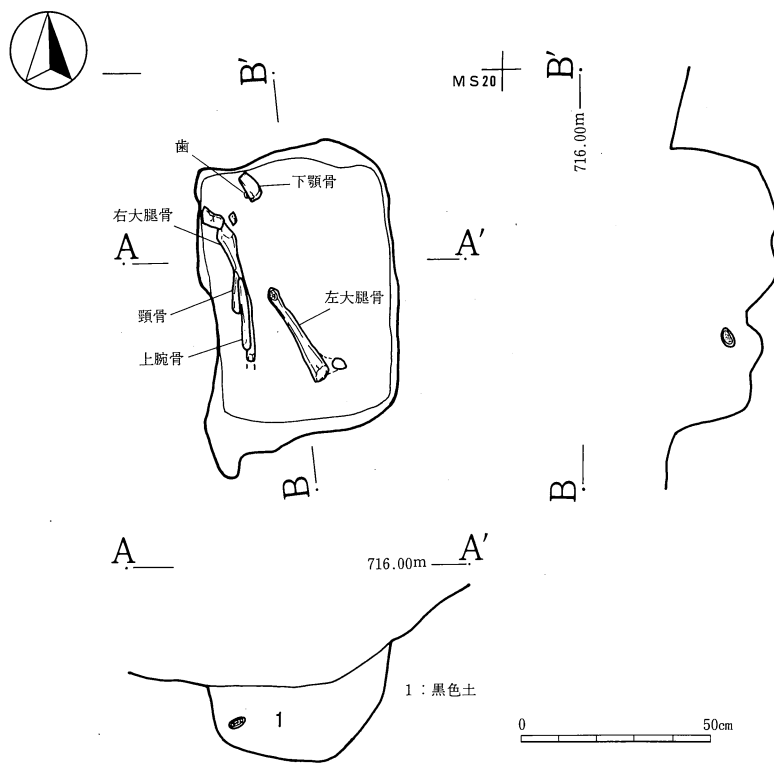


図9 1号土墳墓実測図 (1:20)

(註1) 信州大学医学部西沢寿晃氏による現場での鑑定結果である。

が、主軸の方向が一致し、同じ墓群に含まれると考えられる。また、2号に切られる溝も方形周溝墓の一部である可能性が強く、この一帯は方形周溝墓が群集する墓域とみられる。とすれば、居住域と墓域という関係において、上木戸遺跡と本遺跡は一連の遺跡とみるべきであろう。

近世と推定された土壙墓は、この辺りに墓地の営まれた伝承もなく、単独の遺構と考えてよい。

参考文献

藤沢宗平・小松虔 1968 「塩尻市片丘地区南熊井犬原遺跡調査概報」『信濃』22-4

## 第16節 <sup>うえきど</sup>上木戸遺跡 (EUK)

### 1 遺跡の概観

遺跡は塩尻市大字片丘字犬原10475番地1を中心とする一帯に所在する。

高ボッチ山塊に源を発し西流して田川に合流する大沢川が形成した広大な古扇状地性の台地は、扇端を田川に開析されて段丘地形をなす。その西に緩く傾斜した段丘面上にあって、眼下に田川を見おろす先端部北部に遺跡は立地し、標高は720m、田川に面した段丘崖の高さは10m、大沢川氾濫原との比高差は3m～4mを測る。

本遺跡の南側には犬原遺跡が隣接しているが、松本深志高校地歴会によって弥生時代後期の住居址2軒が発掘調査された地点は両遺跡を画している道路から南へ10m程入ったあたりである。さらに犬原遺跡の南には中原遺跡、縄文時代中期中葉の遺跡として知られる山の神遺跡が連続している。

本遺跡は、かつて住宅建設や道路工事の際に多量の遺物が出土し、以前より縄文時代中期及び弥生時代後期の複合遺跡として広く知られていた所である。調査直前にも多量の土器、石器を表面採集している。

調査前の付近一帯は畑であり、長芋が盛んに栽培されていた。

遺跡からの眺望はよく、塩尻市街から北アルプスまで一望できる。

### 2 調査の概要

中央道長野線は遺跡の東縁を南北に横切り、調査の対象となったのは3250㎡である。このうち、調査時に北調査区と呼んだ範囲は、調査直前の踏査で契約から漏れていることが判明し、日本道路公団と長野県教育委員会が協議を行い、急きょ調査対象に加えられたものである。

発掘調査は昭和60年6月10日に開始したが、用地内に建つ住宅および工場の撤去が遅れたため8月29日をもって一旦中断したあと、同年11月15日再開し12月6日終了した。この間、調査研究員は7名が当たった。調査はまず大沢川氾濫原に開かれた水田面から台地崖にかかるトレンチを設け、重機を導入して約2m掘り下げ、層序と遺構、遺物の有無を調べた。その結果、摩耗の著しい土器がごく少量出土するものの遺構はないと判断し、調査の対象を台地上に絞ることにした。台地上においても初めトレンチ調査を実施したが、厚さおよそ20cmの耕作土を取り除くとローム面に至り、遺構プランが現れたので、ただちに面的調査に切り替えた。工場跡地については、遺構を壊してしまうおそれがあるため、コンクリート基礎は残したまま遺構検出を行い、検出作業終了後に重機を使って排除した。これによって基礎にかかっていた住居址4軒も破壊を最小限に食い止めることができた。一方、住宅跡地は宅地造成に伴う削平が深く、遺構は壊滅状態であった。

遺構番号は、北・南調査区並行して調査を進めたことから、南調査区では1から、北調査区では31から検出順に付した。

測量基準点は、山の神・犬原遺跡などと共通の日本道路公団工事用杭STA114+80(X=13795.8204、Y=-46855.1660)を用いることとし、50m四方の大地区設定を業者に委託した。遺構の測量は座標に合わせた杭を用いた簡易遣り方によったほか、北調査区の遺構図と全体の遺構分布図は業者委託の写真測量によっている。発掘範囲やトレンチの位置測量は光波測距儀を用い、座標値に換算して作図した。標高も公団工事用杭を基準にして調査区内に独自のベンチマークを設定した。

整理作業のうち遺物の水洗、注記、土器の復元は発掘作業と並行して行い、そのほか図面類の整理、調

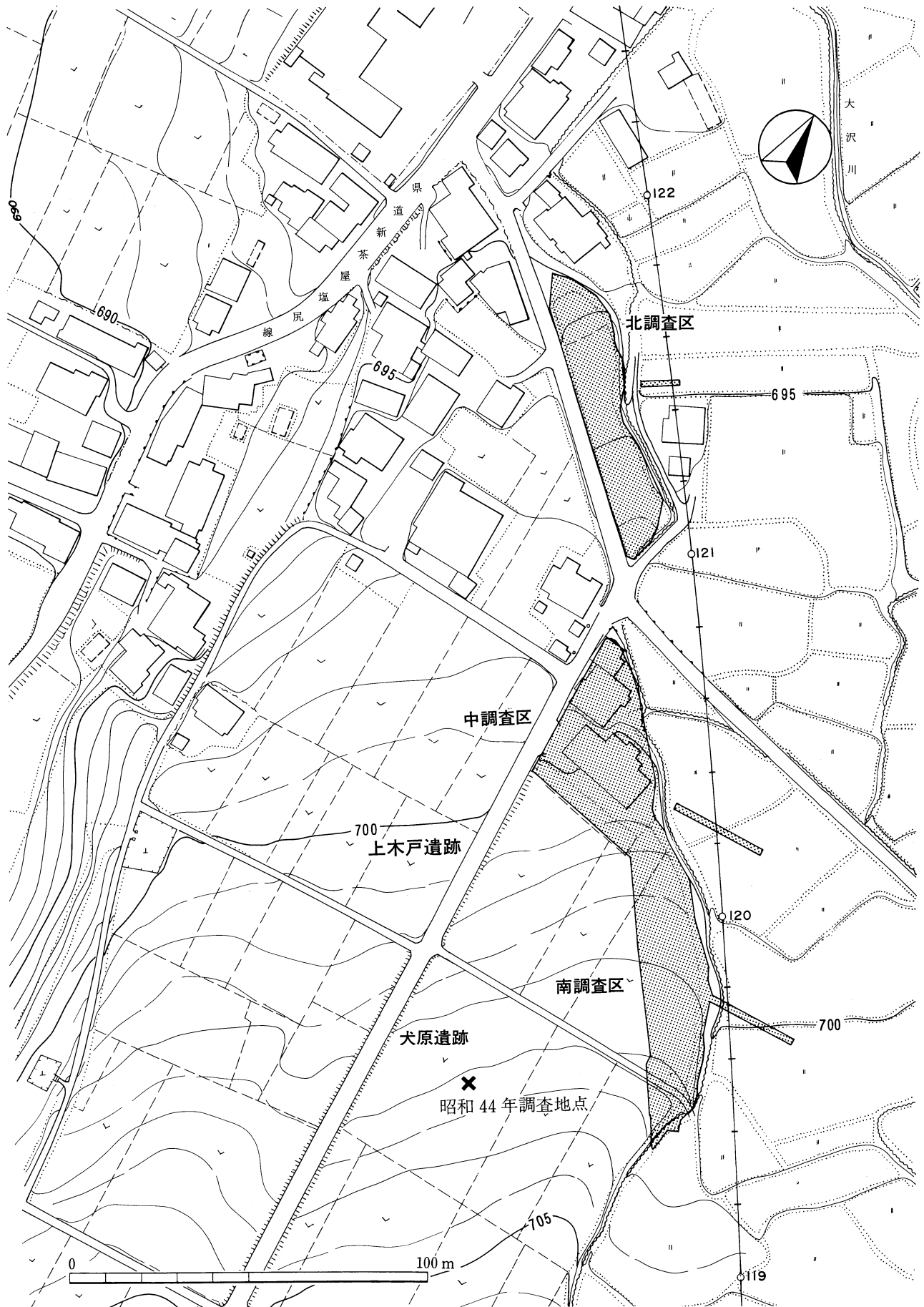


図1 地形及び発掘範囲図 (1:1500)

査所見の調整などは発掘調査終了後の12月から始め、一部次年度まで持ち越した。

### 3 調査の経過

#### 昭和60年度

- 6月10日 南調査区の草を刈り、グリッド設定を行う。
- 6月11日 台地下の水田に重機を使ってトレンチを掘る。耕土下は砂礫層で、調査の必要なしと判断。
- 6月12日 南調査区で初めて遺構の存在確認。検出面まで深さ15cm。
- 6月17日 排土場所確保のため台地崖を先に調査。水田造成に伴ってかなり台地が削平されていることが判明。
- 6月21日 北調査区でも検出作業開始。
- 6月27日 北調査区に幅4mの溝址検出。
- 7月1日 塩尻市教育会社会科委員会22名見学。
- 7月5日 2号住居址掘り下げ。時期は平安時代前半。
- 7月17日 9・31・32号住居址は埋土が深くて遺物が多いので、全点出土位置を記録して取り上げることを決める。
- 7月25日 県史編纂委員笹沢浩氏来所。指導を受ける。
- 7月29日 11～13号住居址、先行トレンチを入れて床で切り合いを見る。
- 7月31日 豊科中学1年生26名見学。
- 8月2日 県史編纂委員桐原健氏来所。指導を受ける。
- 8月5日 住居址の調査は炉、埋甕を残して終わり、土壇の調査に移る。
- 8月8日 埋甕、炉の調査開始。
- 8月12日 現地説明会開催。見学者200名余。業者に委託し遺構の写真測量を行う(~13日)。

- 8月29日 南・北調査区とも住居址床の断ち割り、実測の補訂を行い、調査を終了。  
(一時中断)
- 11月15日 中調査区(工場、住宅の跡地)の調査開始。特に住宅跡地は削平が深くて遺構の残る可能性はあまりない。
- 11月20日 住宅跡地に埋甕炉検出。柱穴1本のほかに住居址とする決め手なし。
- 11月22日 工場跡地で101号～105号住居址検出。104号住居址床面より完形の釣手土器出土。
- 11月25日 101号溝址検出し、掘り下げる。遺物多い。
- 11月27日 107・108号住居址検出、掘り下げ。重機を導入してコンクリート基礎の撤去開始。
- 12月2日 101号溝址に弥生土器大形破片多出。
- 12月5日 埋甕の調査。
- 12月6日 調査完了し、資材撤収。
- 12月20日 整理作業開始。遺構図の整理、所見の調整までを年度内に終了する。

#### 昭和61年度

- 4月～3月 遺物の実測。一部は原稿執筆。

#### 昭和62年度

- 4月～ 図版作成し、原稿執筆。

### 4 調査の結果

#### (1) 層序と地形形成 (図2)

層序は単純で、I層：耕作土、II層：ロームである。I層は、波田礫層の上に厚く堆積した波田ロームの上面が土壌化したものである。

台地崖の裾には現在も使われている用水路が通っているが、とくに北調査区では台地側を削って水路を築いている。また、南調査区下の水田面は耕作土下に砂礫が厚く堆積し、この辺りで大沢川の河道が大きく湾曲して台地の縁を侵食したことを示している。一方、中調査区から北調査区にかけて、すなわち北熊井地籍へ向かう道路のあたりでは耕作土の下はロームで、砂礫がみられない。大沢川の水を被っていない証拠であり、人為的に低く平坦化されたものとみられる。このように、台地の縁辺部は長い間にかなり姿を変えてきていることは確かであり、したがって検出された遺構が台地の縁にかかって一部を失っていることもうなずけよう。

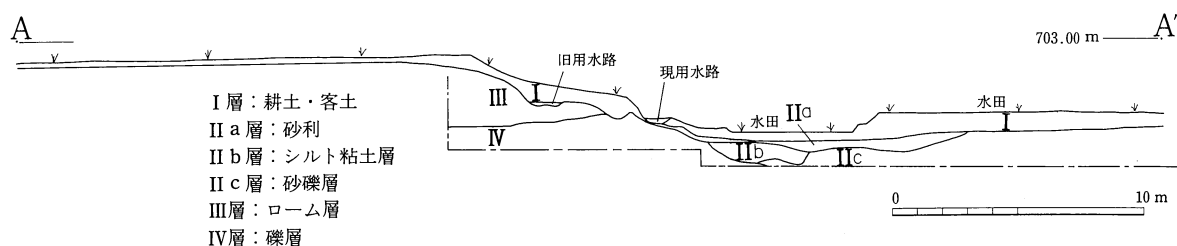


図2 02トレンチ土層図 (1:300)

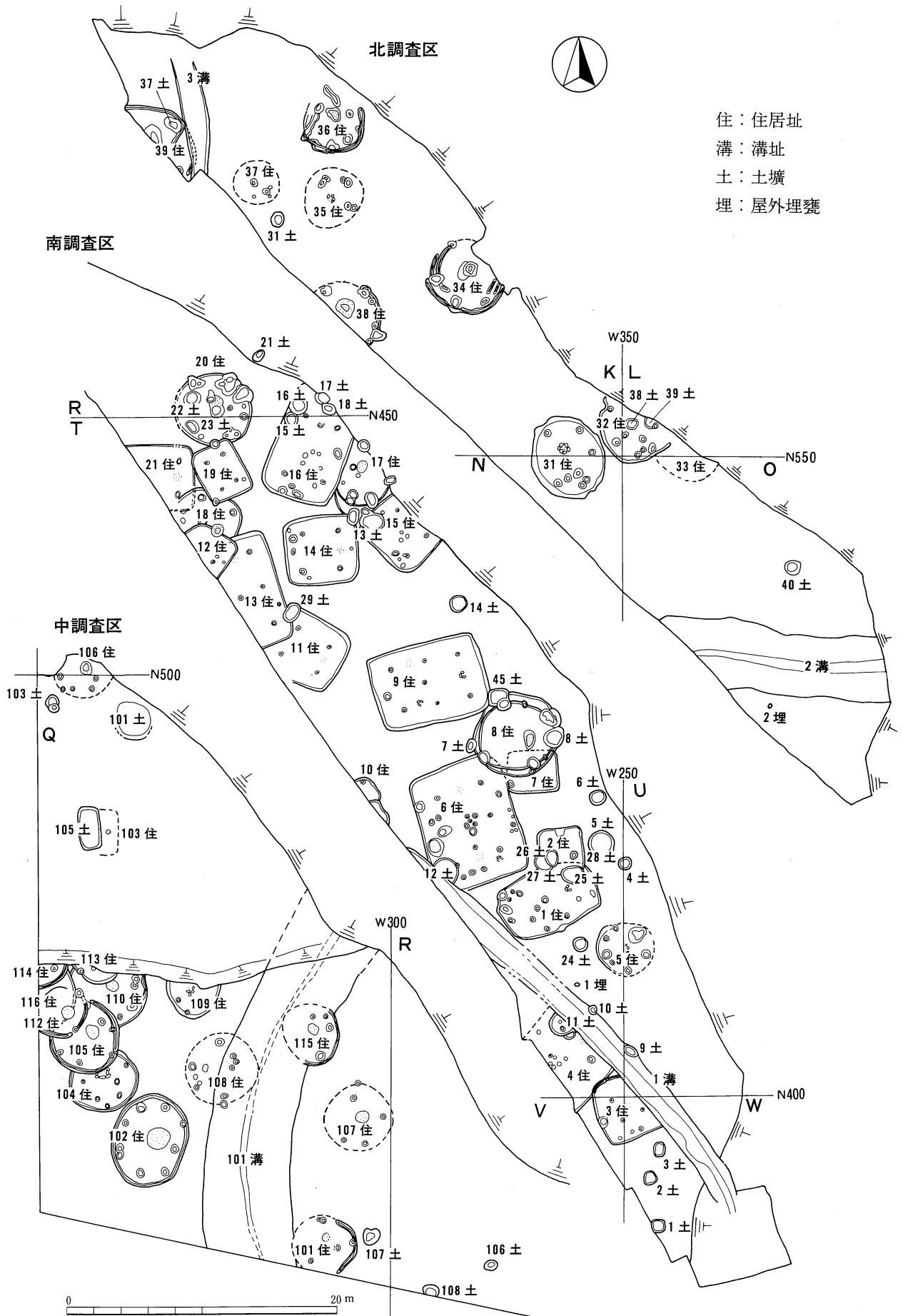


図 3 遺構分布図 (1 : 400)

(2) 遺構と遺物の概観 (図3)

縄文時代、弥生時代、平安時代の遺構が検出されている。

縄文時代の遺構は中期中葉井戸尻式期から中期後半曾利式併行期にかけの住居址28、土壙37のほか屋外に設けられた埋甕3がある。住居址は調査区全体に広く分布するが、中調査区西部で重複が著しい。遺物としては17・31・32・102・105・110号住居址からまとまった量の土器が得られており、その主体は唐草文系土器である。土壙は調査区東側に当たる台地の縁に沿うように分布し、集中はみられない。

弥生時代については後期後半の住居址10、溝址4がある。住居址は中調査区の103号住居址以外はすべて南調査区に分布し、規模、施設等の違いから大形、小形の2タイプに分けることが可能である。また、溝址のうち1・2・101号は南調査区から北調査区まで一連のものと考えてまちがいはなく、規模などからみて環濠と推定される。ただし、住居址と切り合っていて、時期的に検出されている住居址群よりやや新しい。こうした遺構より出土した土器は多量で、しかも多種多様な外来系土器を含んでおり、いままで松本平では該期のまとまった資料が少なかつただけに注目される。

平安時代では住居址1が検出されただけで、縄文・弥生時代に比して資料が乏しい。

このほか、若干の中・近世遺物が遺構外から出土している。

(3) 縄文時代の遺構と遺物

ア 住居址

① 5号住居址 (図4・5、PL77・85・89)

**検出：**南調査区南部に位置し、検出された縄文時代住居址の中では最も南にある。耕作土直下に炉が検出されて住居址と判明した本址は、耕作が床面近くまで及んでいるうえ、西側半分はさらに深い耕作によって破壊され、遺存状態がきわめて悪い。**規模・形状：**柱穴の位置と一部検出された周溝から、径4.5mの隅丸五角形ないしは円形と推定される。主軸方向はN105°Wである。**埋土：**残存しない。**床面・壁：**ローム削平面を床面としており、堅い面はみられず、平坦で、やや東に傾斜している。壁は耕作によって失われ、周溝が奥壁側にのみ残る。**炉：**石囲炉が中央やや奥よりに設けられている。西半分は耕作によって攪乱されており、全容はつかめないが、掘り形の内に径20cm程の石が残り、火床は厚い。**柱穴：**主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>の7本で、主軸に対して左右対称に配置される。P<sub>6</sub>を除いては掘り込みが深く、60cm～100cmを測る。**その他の施設：**東側のP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間に、底を残した大形の深鉢を正位に埋設した埋甕がある。深鉢は上端が床面レベルより10cm程低く埋められ、褐色土の貼り床に覆われていた。また、内部の土壌は2層に分けられ、その下層は土器小片や炭を含む。**遺物の出土状況：**埋設土器(1)のほか、埋甕のすぐ北の貼り床下から土器片がまとめて出土している(2)。**遺物：**図示可能な土器は深鉢2点のみ。石器にはピエス・エスキュー1(1)、打製石斧3(2・3)がある。**時期：**中期後半IV期。

② 8号住居址 (図6・7、PL68・77・85・89)

**検出：**南調査区の中央に位置する。耕作土直下ローム層上面でプランを検出した。周溝が2重に巡り、建て替えによる2軒の重複と判断される。切り合う8・28・45号土壙は本址より古い。**規模・形状：**外側の新しい周溝は6.3m×5.5m、内側の古い周溝は5.3m×4.6mの隅丸五角形に巡る。新しい住居の入口は埋甕のある西側で、主軸方向はN110°Eを示す。**埋土：**炭、焼土、ローム粒、小礫の混じった暗褐色土の単一層である。**床面・壁：**床面はほぼ平坦で、西側が強く東側は軟らかい。壁は西側で高さ10cmを測り、垂直に立ち上がる。周溝は同心円状に2重に巡り、貼り床されていたことから内側が古い。**炉：**中央に80cm×60cm、深さ50cmの掘り形だけが残り、その形態から大形の方形石囲炉と推定される。炉石はほとんど抜き取られ、掘り形内に石皿の破片を含む数個の礫が残るだけである。**柱穴：**8本の柱穴が検出された。

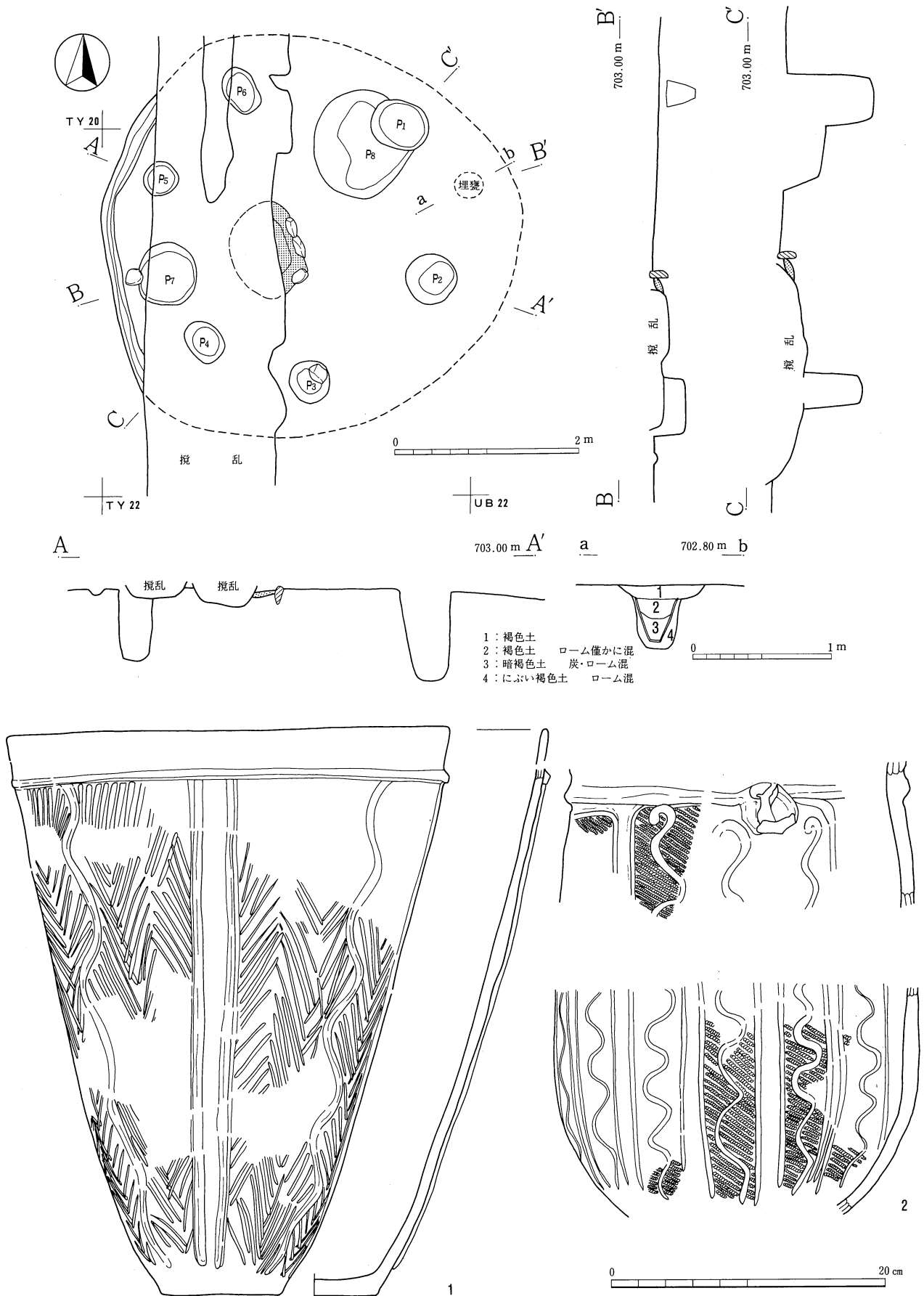


図 4 5号住居址実測図・出土遺物実測図 1



このうち、主軸に対して対称の位置に配置され、規模のよく似た  $P_1 \sim P_4$  が主柱穴である。 $P_5 \sim P_8$  も概ね対称の位置にあるが、小形で浅く、柱穴としても支柱であろう。なお、貼り床された柱穴はなく、建て替えに際して古い住居の柱穴をそのまま利用したと考えられる。**その他の施設**：西方の壁際に埋甕が設けられ、底を残した大形の深鉢を正位に埋設し、扁平な自然石で蓋をしている。蓋石の上面が床面に露出していたことから、この埋甕が新しい住居址に伴うことは確かである。深鉢内には土が充満し、その上層は住居址埋土に似た暗褐色土、下層は黒曜石1片のほか拳大の礫数

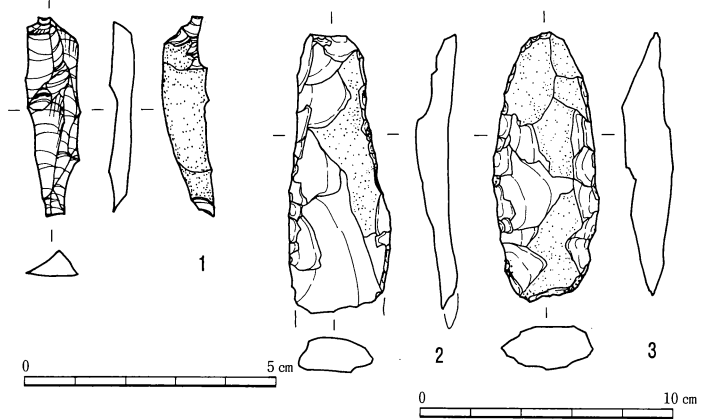


図5 5号住居址出土遺物実測図2

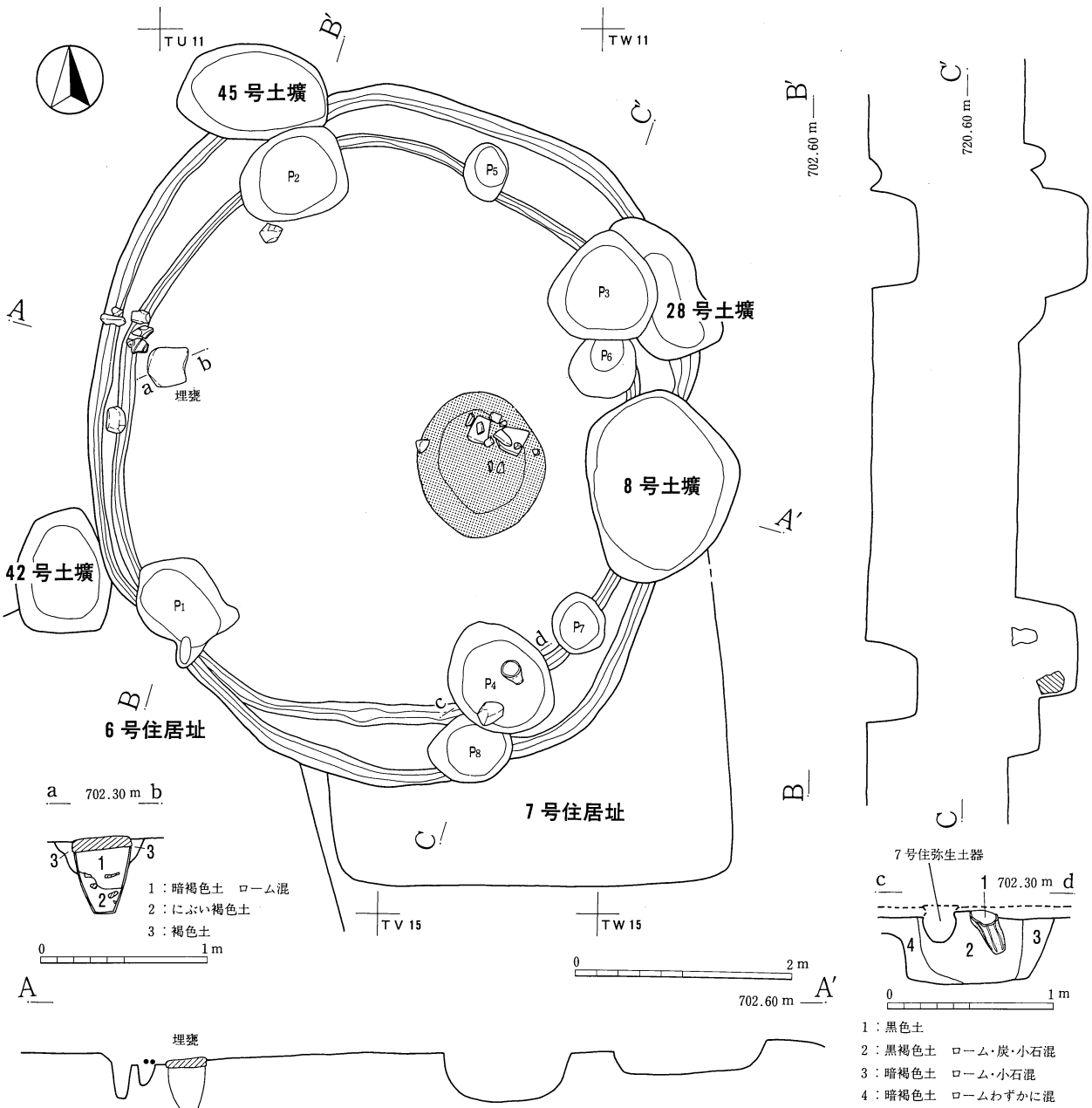


図6 8号住居址実測図

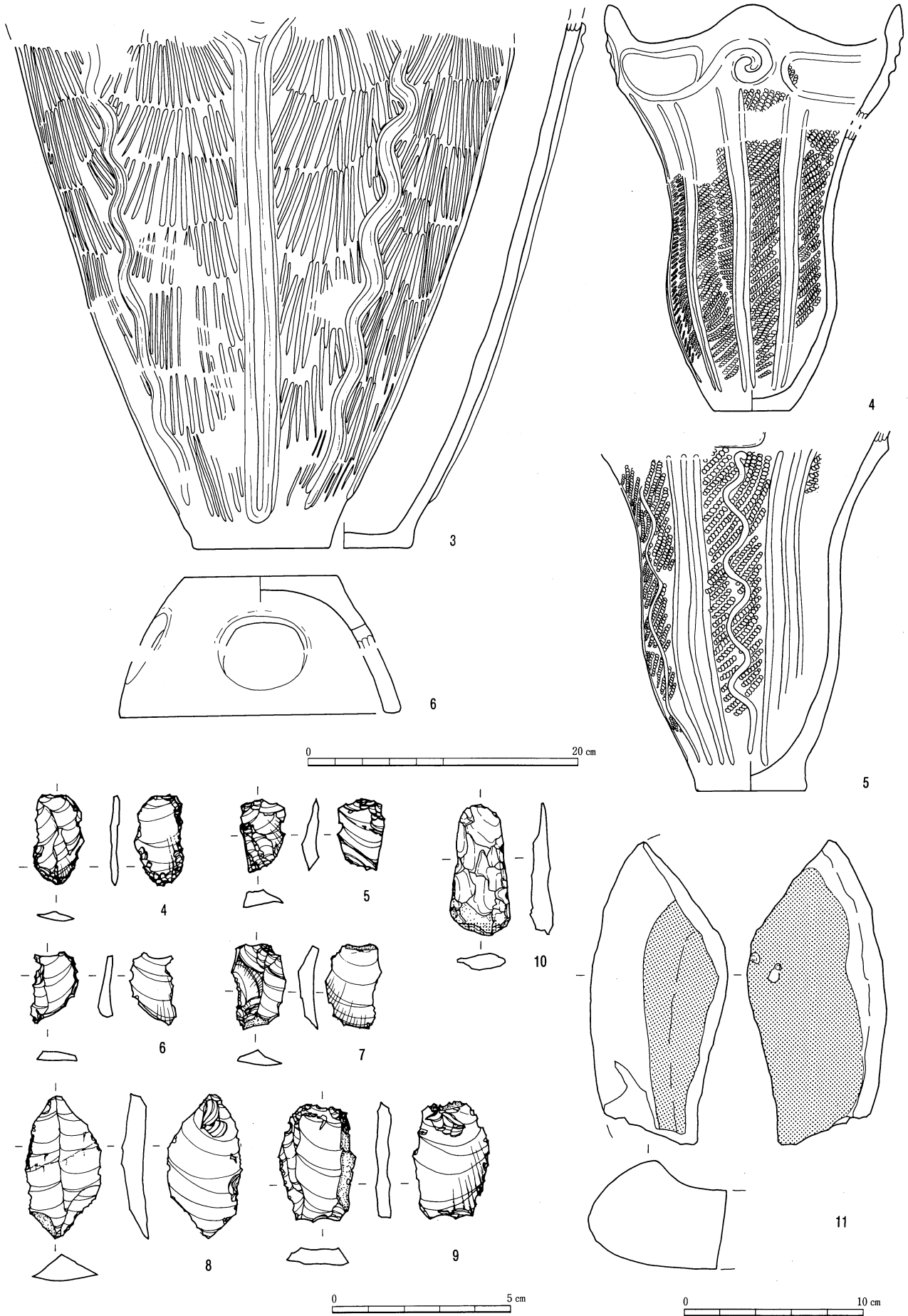


图7 8号住居址出土遺物実測図

個を含んだ暗い褐色の粘質土である。掘り形は土器の大きさに合わせて掘られ、土器との間に空隙がほとんどない。土圧のためか土器はひび割れていたが、破片が内側に落ち込んだ状況はみられなかった。**遺物の出土状況**：埋設土器(3)のほか、P<sub>4</sub>から口縁部を欠くだけの略完形土器(5)が出土している。7号住居址の貼り床下に見つかったもので、正位の状態に立っており、口縁部の破損は7号住居構築の際に被ったものとみられる。そのほか遺存状態のよい西側で床面から復元可能な土器がつぶれて出ている。**遺物**：深鉢3(3~5)、器台1(6)がある。器台は上面が平滑で、脚部に4個の丸い透かしが入る。石器にはスクレイパー1(4)、ピエス・エスキュー1(5)、小剥離痕のある剥片4(6~9)、打製石斧1(10)、横刃形石器1、石皿片1(11)がある。**時期**：中期後半IV期。

#### ③ 17号住居址 (図8~11、P L68・77・84・85・89)

**検出**：南調査区の北部に位置する。検出面は耕土下ローム層上面であるが、耕作土除去中その下部よりすでに土器片が多量に出土していた。なお、2重に巡る壁、2面の火床を有する炉、埋土中の貼り床の痕跡など2軒重複の可能性が大きい。貼り床の存在を考えれば掘り込みの浅い西側プラン(A)が新しいが、遺存状態は悪く、不明の点が多い。したがって、ここでは古い東側プラン(B)の記述に中心をおく。北と南を弥生時代の15・16号住居址に切られる。**規模・形状**：柱穴配置から直径およそ5.2mの円形プランと推定される。主軸方向は埋甕と炉の位置からみてN。Aは不明。**埋土**：検出面からBの床面までの埋土の厚さは10cmで暗褐色土の単層。貼り床の崩れた堅いロームブロックが多量に混じって攪乱を受けていると思われた。**床面・壁**：床面は全体に軟らかく、しかも大きな起伏がみられる。壁も軟弱で立ち上がりはなだらかである。**炉**：中央奥寄りに設けられる。石囲炉であるが、火熱を受けてもろくなった大きな花崗岩1個を残して、他は抜き取られている。火床はローム質黄褐色土を挟んで2層あり、いったん埋め戻したのち再度使用している。なお、炉を中心として床面上に広く焼土の分布がみられた。**柱穴**：主柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>~P<sub>7</sub>の6本である。P<sub>4</sub>は16号住居址の貼り床下で検出したものであり、配置からすればP<sub>2</sub>とP<sub>4</sub>の間にもあったと思われる。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>はそれぞれ2本重複している可能性がある。P<sub>3</sub>は焼土を伴っているが、ピット内は焼けておらず、炉ではない。**その他の施設**：南壁近くに埋甕が設けられている。埋設された深鉢(7)は口縁部を欠くだけのほぼ完形で、正位に埋められる。Aの埋甕は西壁下に設けられ、胴下部を欠いた深鉢(8)が逆位に埋められている。**遺物出土状況**：検出面から床面まで約10cmと浅かったにもかかわらず、遺物の出土量は非常に多い。埋土中、床面共に大破片が多いが、埋設土器を除いて完形土器はなく、また、接合例も少ない。なお、埋土の上層、下層、床面出土の土器に明らかな時間差は認められない。**遺物**：土器には埋設土器2を含め深鉢13(7~19)があり、ほかに土製品として土偶の足(21)が1点ある。石器には石鏃2(12・13)、ピエス・エスキュー2(15・16)、小剥離痕のある剥片7(17~21)、打製石斧12(22・23)、横刃形石器1(24)、磨石・凹石2(25・26)があり、打製石斧の数が多し。**時期**：中期後半V期。

#### ④ 18号住居址 (図12・13、P L85・89)

**検出**：南調査区に位置している。西側が一部調査区外にかかるほか、他遺構との重複も激しく、弥生時代の12・13・19・21号住居址に切られて遺存状況は悪い。**規模・形状**：残存する壁や周溝、柱穴から径5.8m×5.0mの隅丸五角形プランと推定される。主軸の方向はN120°E。**埋土**：焼土、炭を含んだ黒褐色土の単層である。**床面・壁**：ローム掘り込み面を床とする。住居奥から入口に向かって緩く傾斜し、炉の周辺に硬化が認められる。壁は残存する東側でみる限りなだらかに立ち上がり、壁下には周溝が巡る。**炉**：中央よりかなり奥に寄って設けられる。炉石は残っていないが、掘り形は1.0m×1.3mの長方形で深さ45cmを測り、大形の石囲炉である。掘り形の内面は火熱を受け、側壁まで赤色化している。**柱穴**：確認できたのはP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>の3本であるが、4本柱タイプとみてよい。掘り込みは70cm以上と深い。**その他の施設**：埋甕は南西側に設けられ、底を残した大形の深鉢を正位に埋設している。深鉢の胴部下半はひび割れ

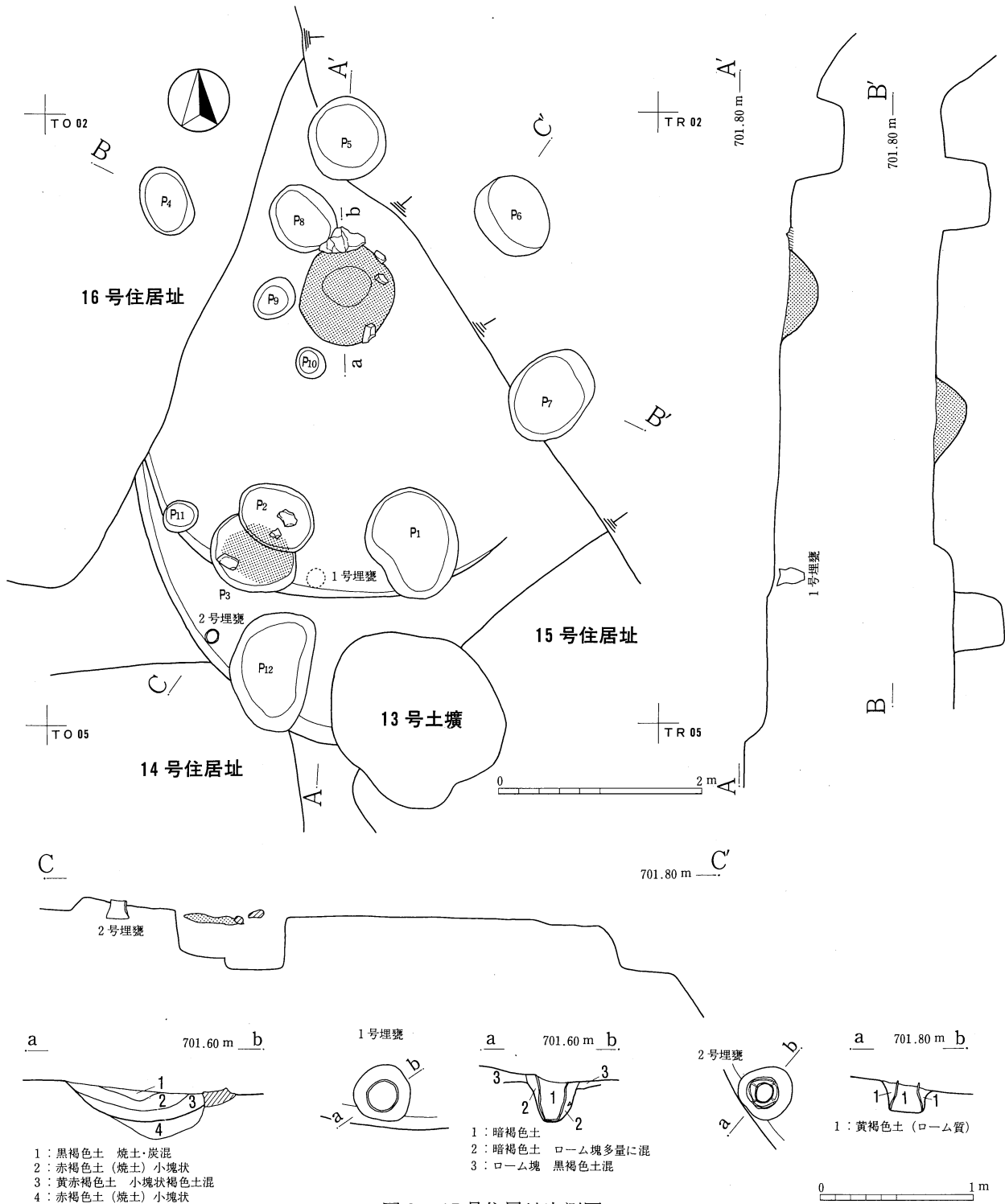


図8 17号住居址実測図

が著しい。土器内の土は2層に分層でき、埋設土器の破片のほか黒曜石剥片、拳大の自然石が含まれていた。**遺物の出土状況**：出土遺物は少ない。ほとんどは埋土中の出土で、埋設土器以外に図示可能な土器は1点があるのみである。**出土遺物**：ともに深鉢で、22は埋設土器、23は埋土中の出土である。石器は石鏃1 (27)、スクレイパー1 (28)、ピエス・エスキュー1 (29)、小剥離痕のある剥片1 (30)、打製石斧1 (31)、磨石・凹石1 (32)がある。**時期**：中期後半IV期。

⑤ 20号住居址 (図14~16, P L69・78・85・89)

**検出**：南調査区の北部に位置し、耕土下ローム漸移層上面で検出。北と西は耕作で攪乱されて遺存状態



図9 17号住居址出土遺物実測図1

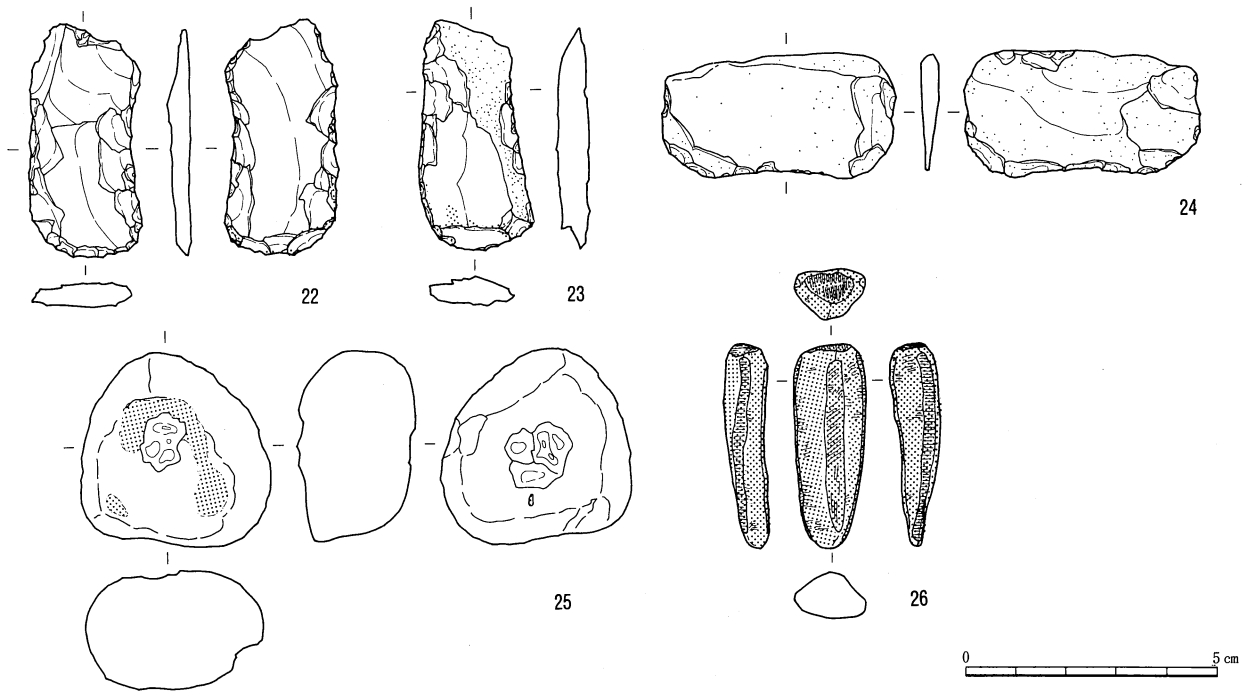


图11 17号住居址出土遺物実測図3

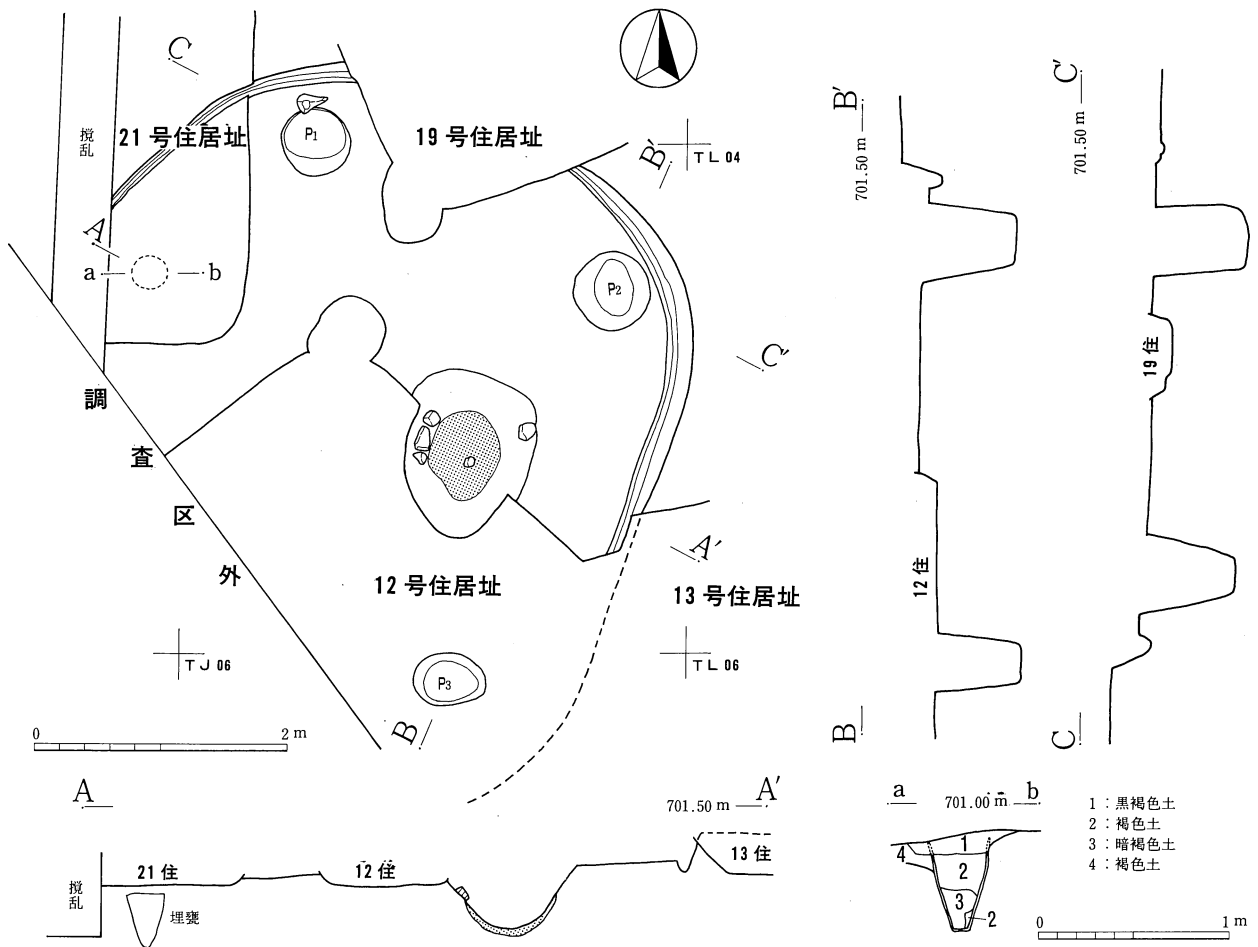


图12 18号住居址实测图

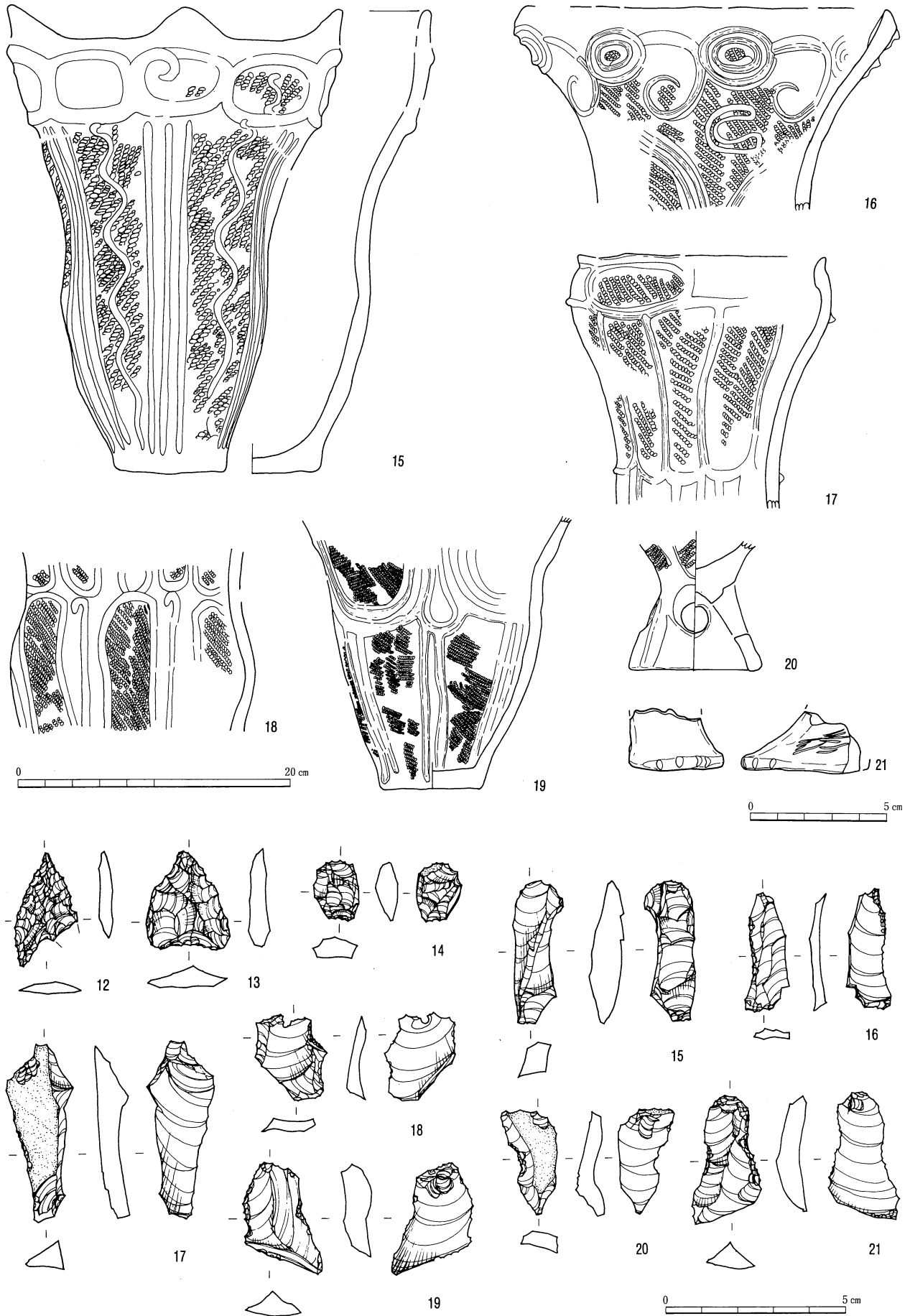


图10 17号住居址出土遺物実測図2

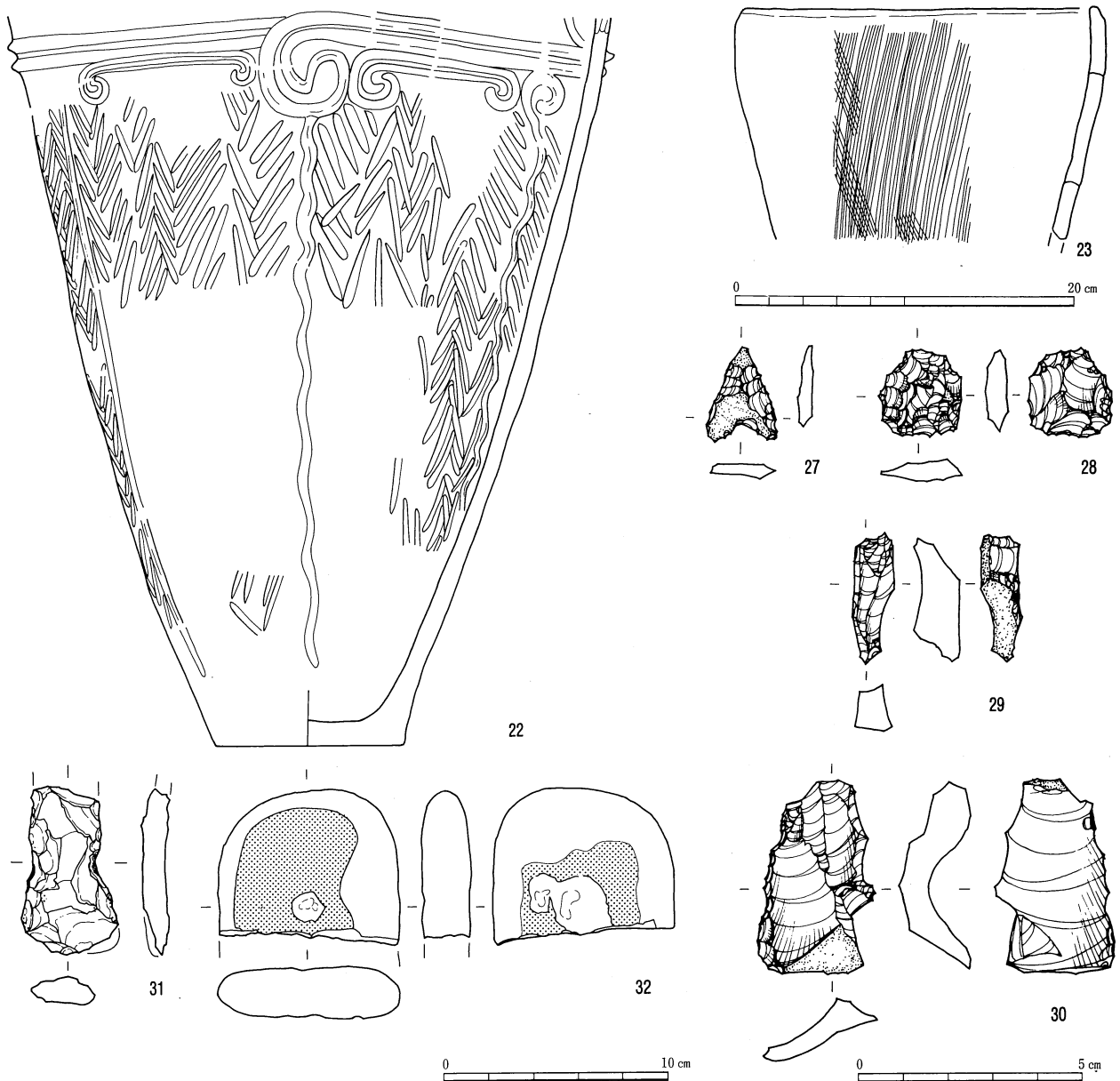


図13 18号住居址出土遺物実測図

は悪い。22・44号土壇と切り合うほか、南に3m離れて18号住居址がある。**規模・形状**：プランは5.5m×5.2mの隅丸五角形を呈し、主軸の方向はN22°Eを示す。**埋土**：焼土を多量に含む暗褐色土の単層である。なお、炉の南と西の埋土下部に焼土の層がみられた。**床面・壁**：ローム掘り込み面を床とし、ほぼ平坦で、硬化は認められない。壁はなだらかに立ち上がる。壁下には周溝が設けられ、東側でわずかに途切れるもののほぼ全周する。**炉**：中央やや奥寄りに設けられている。石囲炉であるが、炉石は奥と入口側に長大な礫が残るだけで、左右は抜き取られて残存しない。掘り形の深さは40cmを測る。炉の埋土は5層に分かれ、上層が焼土の混じらないローム質黄褐色土であることから、住居廃絶の直前に人為的に埋められたと考えられる。**柱穴**：床面上に計14のピットが検出され、中には切り合っているものもある。これらのうち、支柱穴は炉や埋甕の位置からみて配置のよいP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>と考えられる。埋甕の両側にあるP<sub>1</sub>とP<sub>8</sub>、炉の奥の複数が切り合うP<sub>4</sub>等も柱穴であろう。炉の周辺から東側にかけて分布するP<sub>9</sub>～P<sub>15</sub>は浅いピットで、位置からみても柱穴とは考えられない。**その他の施設**：南壁際に埋甕が設けられている。埋設された大形の深鉢は、底を残し、わずかに口縁を欠くだけのほぼ完形である。蓋石はない。土器内の土



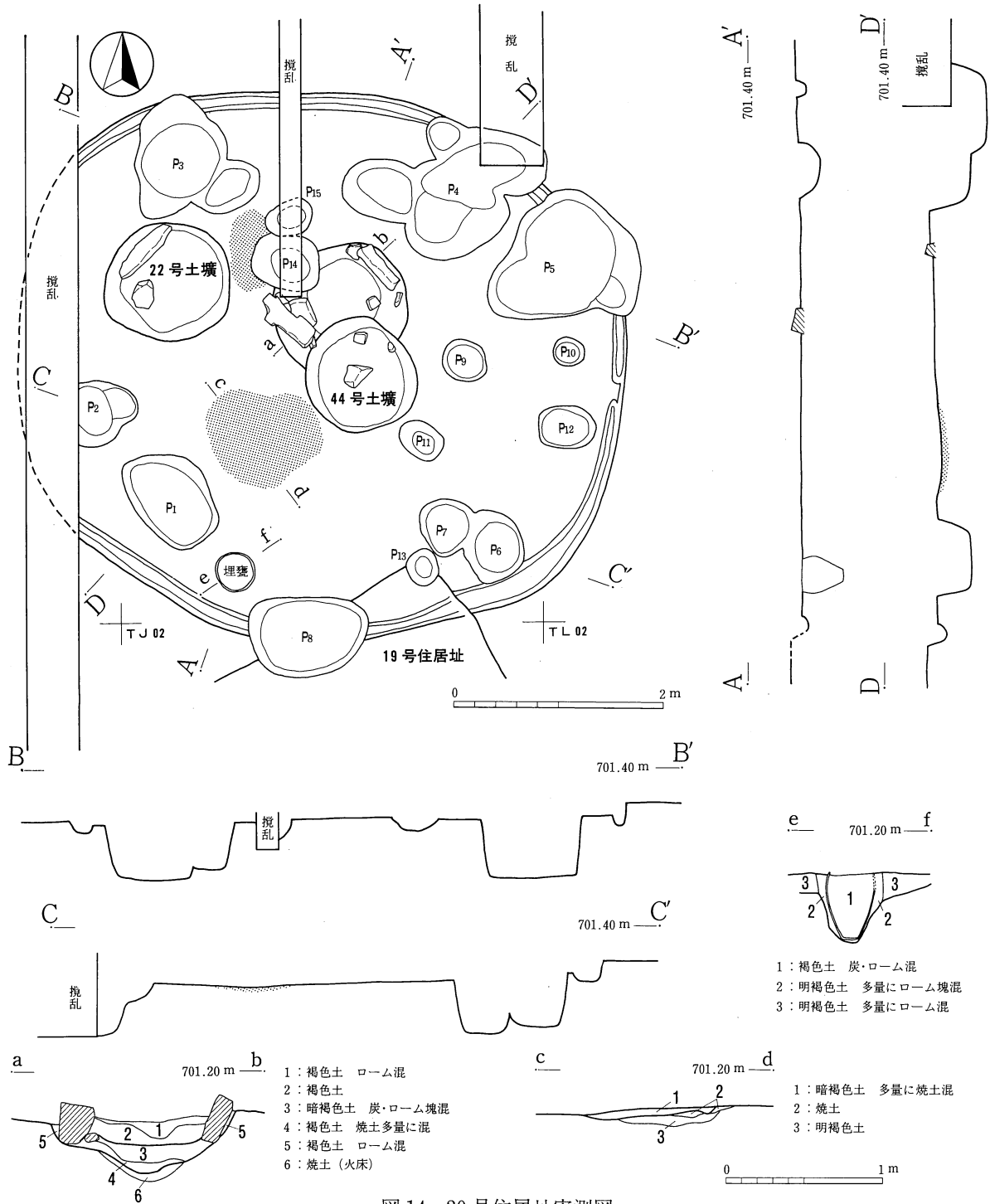


図14 20号住居址実測図

は1cm大の木炭やロームを含む褐色土の単層であり、上部に比べて下部は堅くしまっている。遺物の出土状況：埋土から多量の土器が出土したが、いずれも小片ばかりで、図示可能なものはない。炉の南の44号土壙内からは復元可能な土器がまとまって出ており、床面出土の破片と接合することから、本址廃絶時に床面に穴を掘り一括廃棄されたものと考えられる。出土遺物：埋設土器(24)のほか深鉢(25~28)、一對の把手をもつ小形の鉢(29)がある。石器にはピエス・エスキュー2(33・34)、使用痕のある剥片12(35~46)、打製石斧8(47~50)、粗製大形石匙1(52)がある。時期：中期後半III期。

⑥ 31号住居址 (図17~20、P L69・78・85・89)

検出：北調査区の中央部に位置し、東方に32号住居址が隣接する。単独遺構であるが、幅20cmの長芋裁

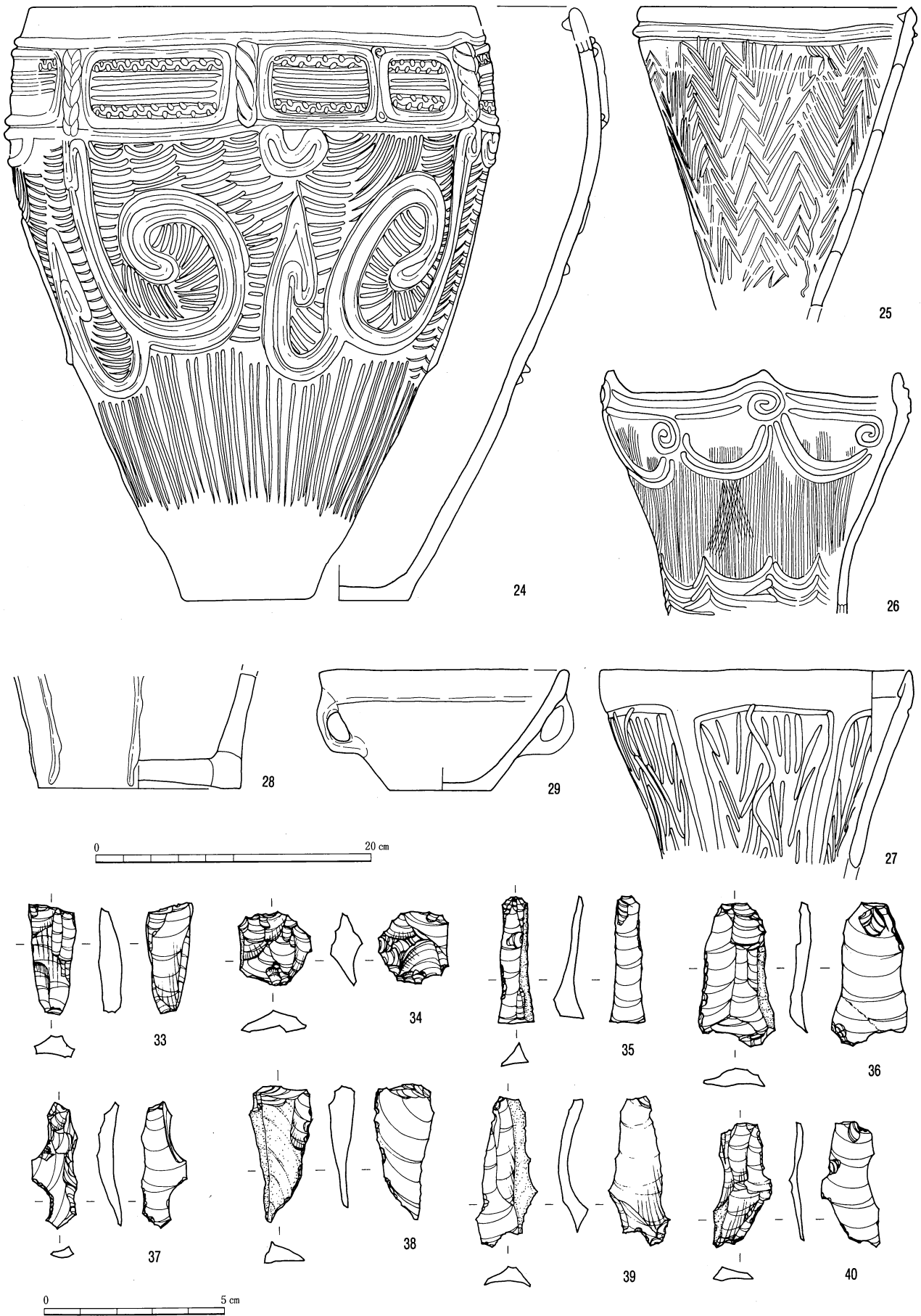


图 15 20 号住居址出土遺物実測图 1

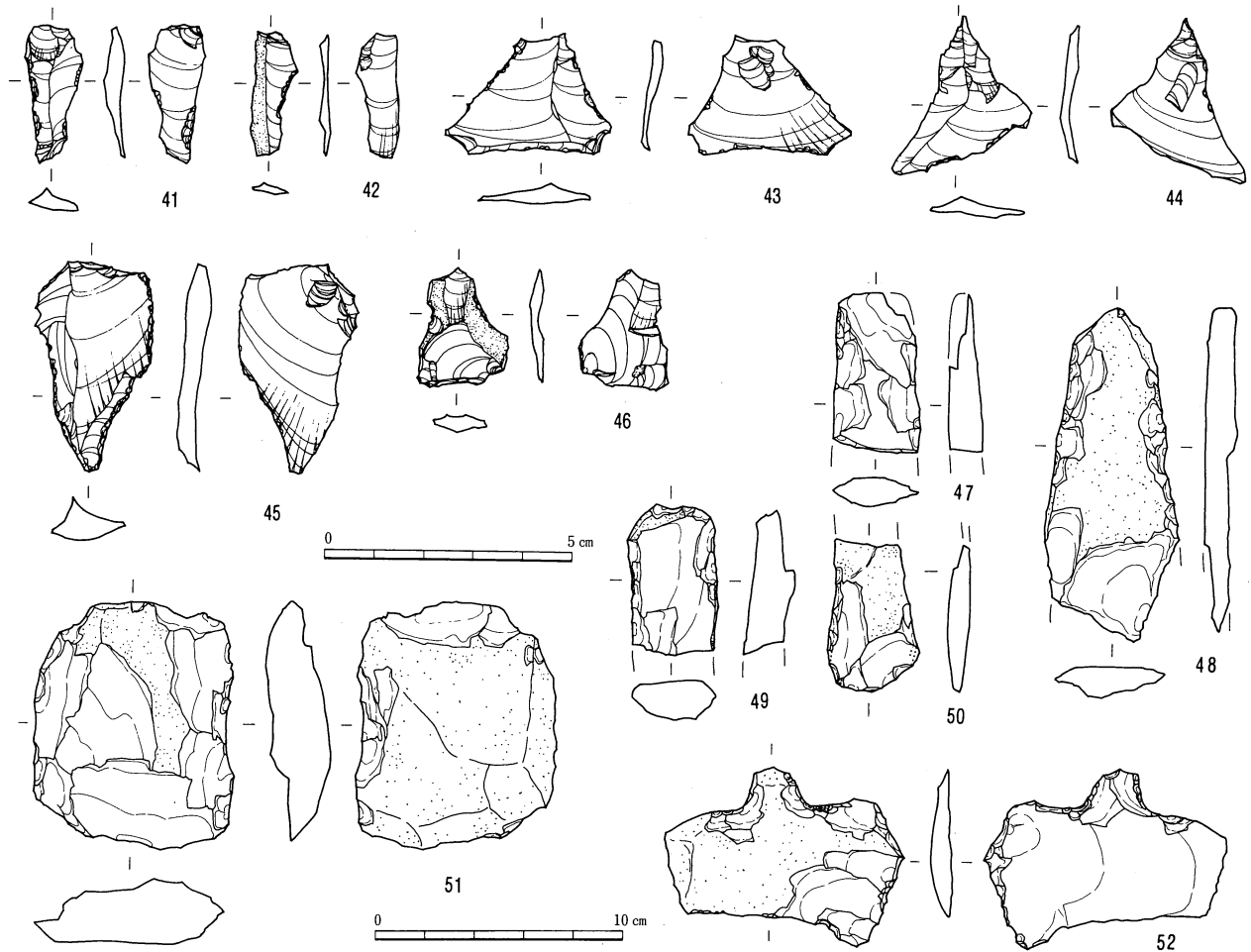


図16 20号住居址出土遺物実測図2

培の深い耕作痕が約50cm間隔で横切っている。**規模・形状**：6.0m×5.4mの南北に長い楕円形プランで、主軸方向は炉と柱穴の配置からN30°E。**埋土**：大粒の木炭、ロームを含んだ黒褐色土が床面まで覆い、壁下にのみローム混じり褐色土の流れ込みがみられる。また、床面直上には焼土と炭化材が広く分布し、火災にあったことを示している。**床面・壁**：床は平坦で堅い。周溝は南側1.5mを除いて壁下を巡るが、この周溝が途切れる辺りは炉から最も遠い位置であり、入口部と推定される。壁の立ち上がりはなだらかで、平均壁高は20cm。**炉**：中央奥寄りに石囲炉が設けられる。炉石は扁平なものが選ばれ、埋め込まれるというよりは床面に置かれている。火床は床面レベルより10cm、炉石の上端より20cm～25cm程低く、厚さ10cm。**柱穴**：床面に検出されたピットは10本。そのうち形状や位置からみて主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>の6本であり、これらは主軸をはさんで左右対称の位置にほぼ2mの間隔をおいて配置される。深さ50cm。**その他の施設**：P<sub>7</sub>～P<sub>10</sub>の4本のピットがある。P<sub>8</sub>とP<sub>10</sub>は床面レベルに焼土が広がり、貼り床されていたらしい。**遺物の出土状況**：多量の土器及び石器が出土した。土器の多くは埋土に含まれ、下層より上層に多く、また周辺より中央に集中する傾向がみられることから、住居廃絶後時間をおいて投げ込まれた廃棄遺物と考えられよう。40は入口と推定されるP<sub>8</sub>南から焼土に埋まって横倒しの状態で出土した。**遺物**：土器には深鉢(30～39)、台付き鉢(40)、浅鉢(41)、器台(42)がある。石器は種類が豊富で、石錐2(53・54)、スクレイパー1(56)、ピエス・エスキュー3(57～59)、小剥離痕のある剥片3(60～62)、打製石斧2(63)、横刃形石器2(66・67)、粗製大形石匙2(64・65)、磨製石斧1(68)、磨石・凹石2(69)、敲石2(70・71)がある。**時期**：中期中葉井戸尻Ⅲ式と中期後半Ⅰ・Ⅱ期の土器が出土しているが、主体が後者にあることから中期後半Ⅰ期とする。

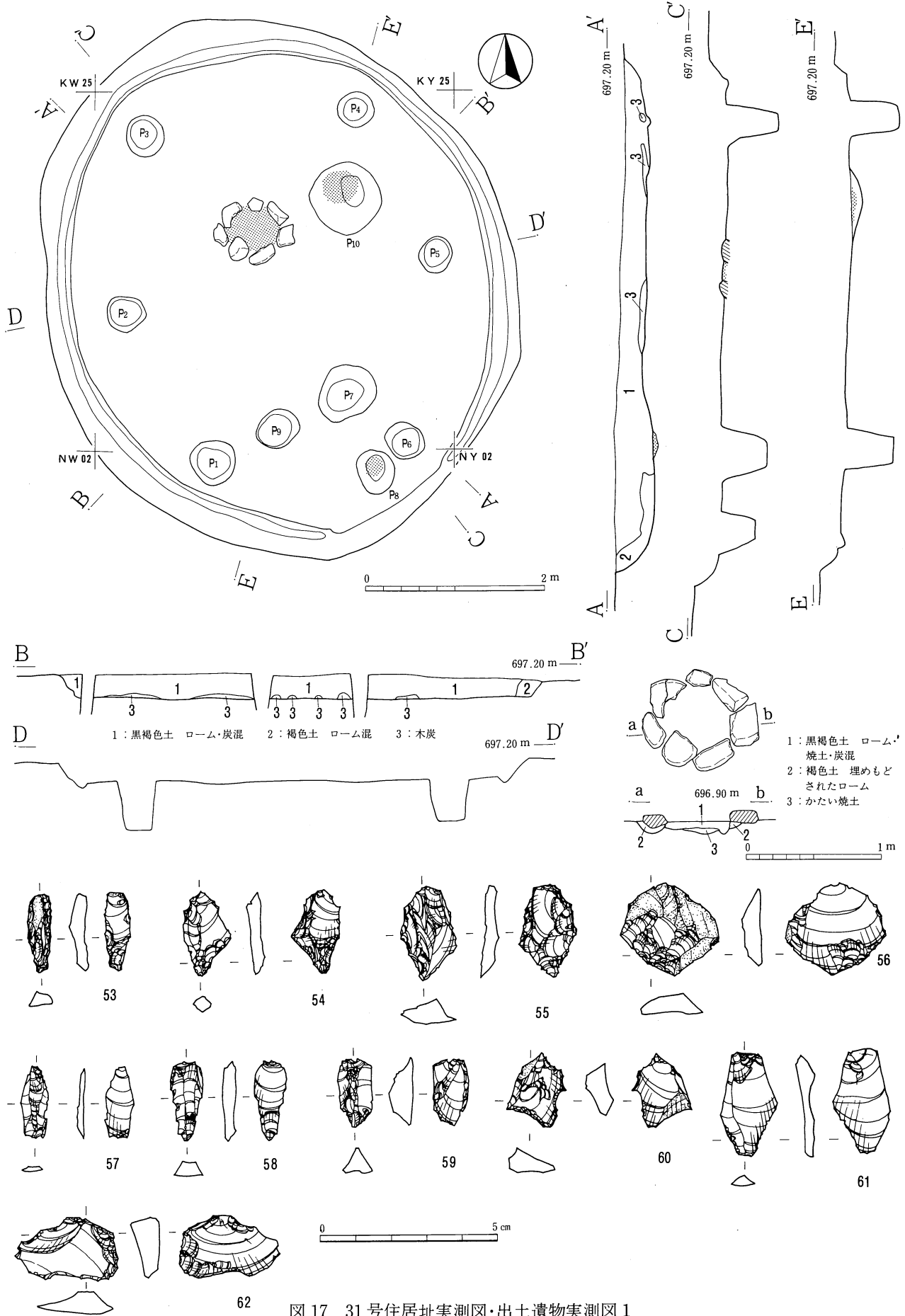


図17 31号住居址実測図・出土遺物実測図1

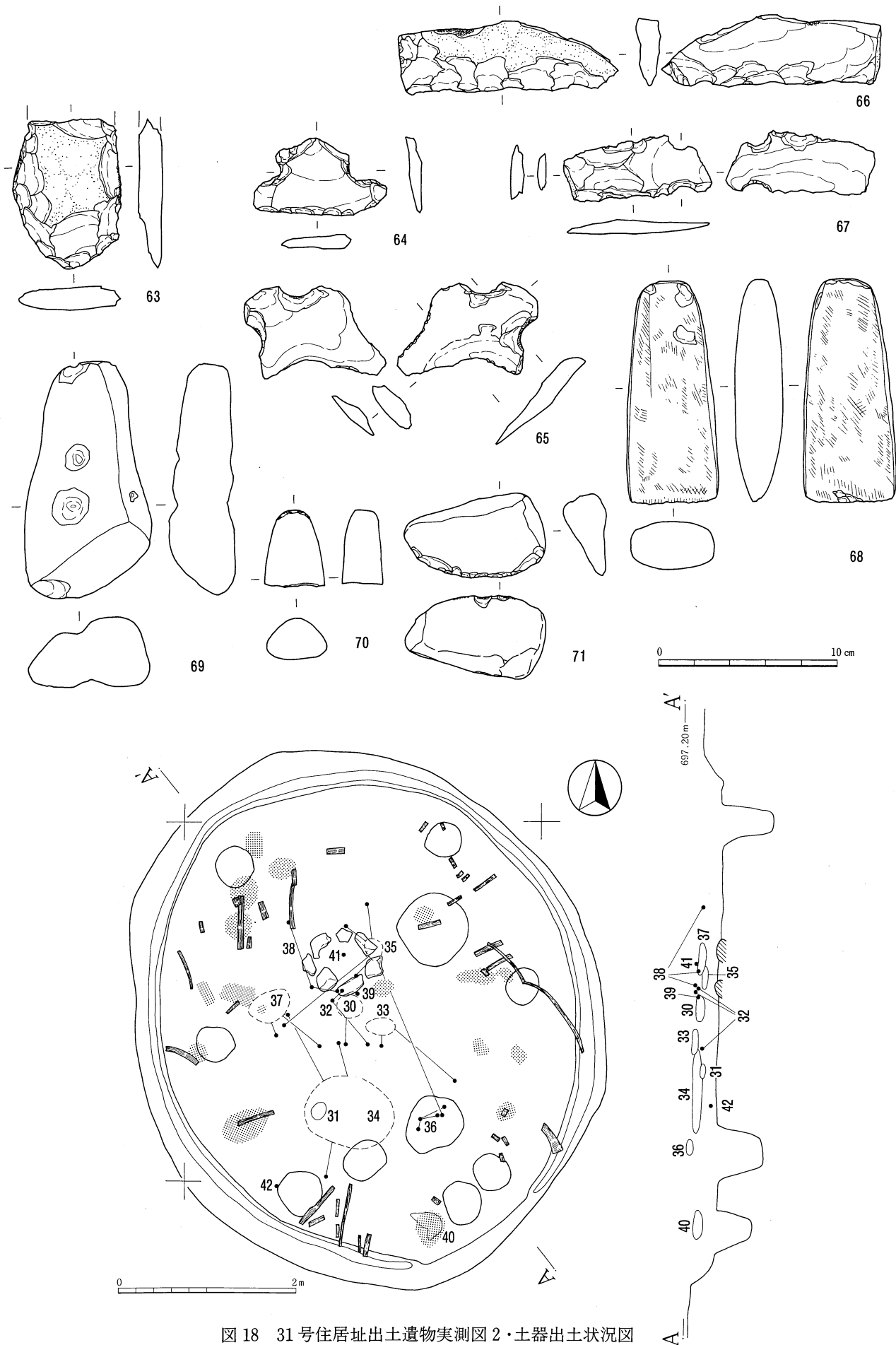


图 18 31 号住居址出土遺物実測图 2・土器出土状況图

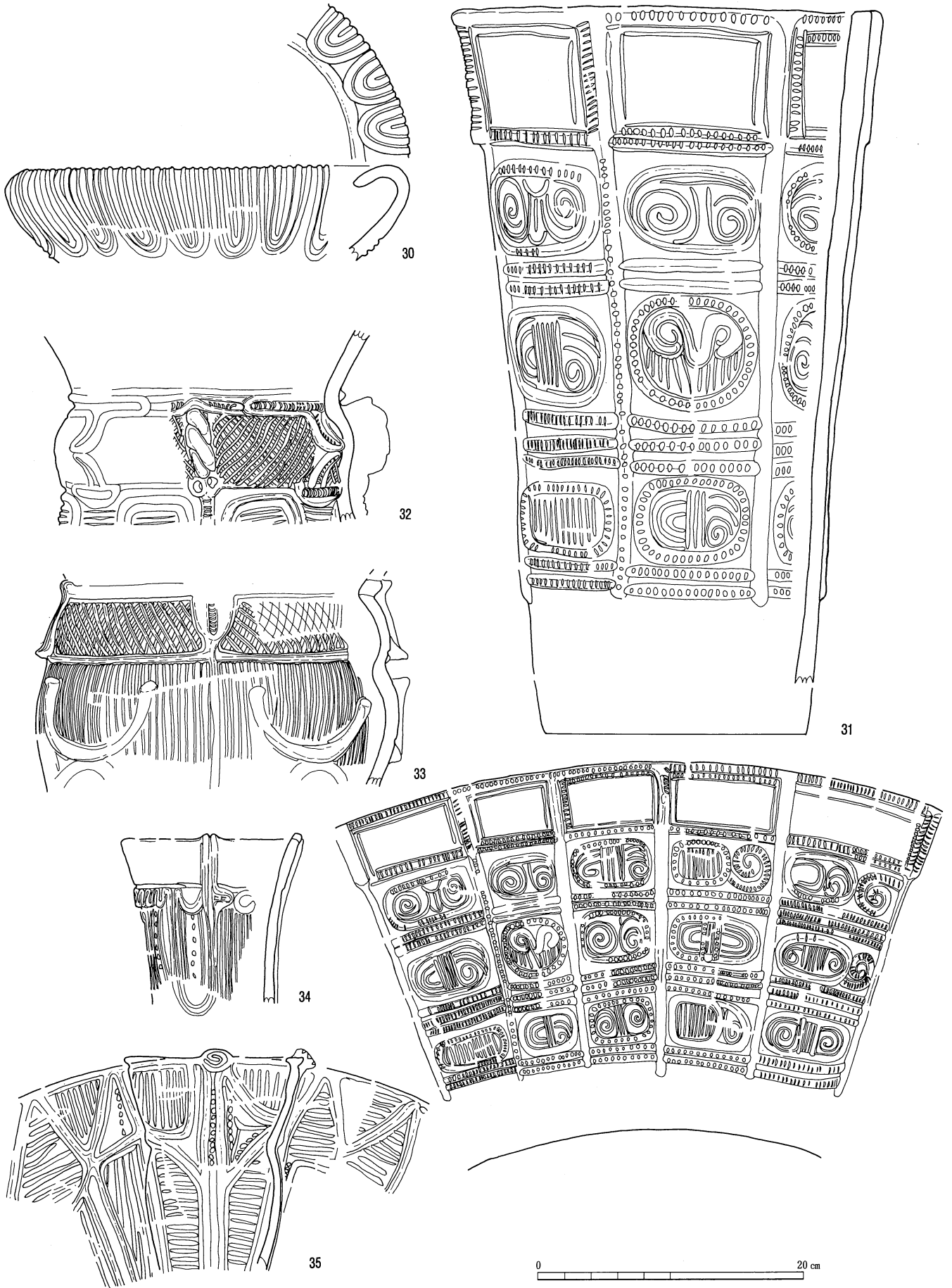


図 19 31 号住居址出土遺物実測図 3

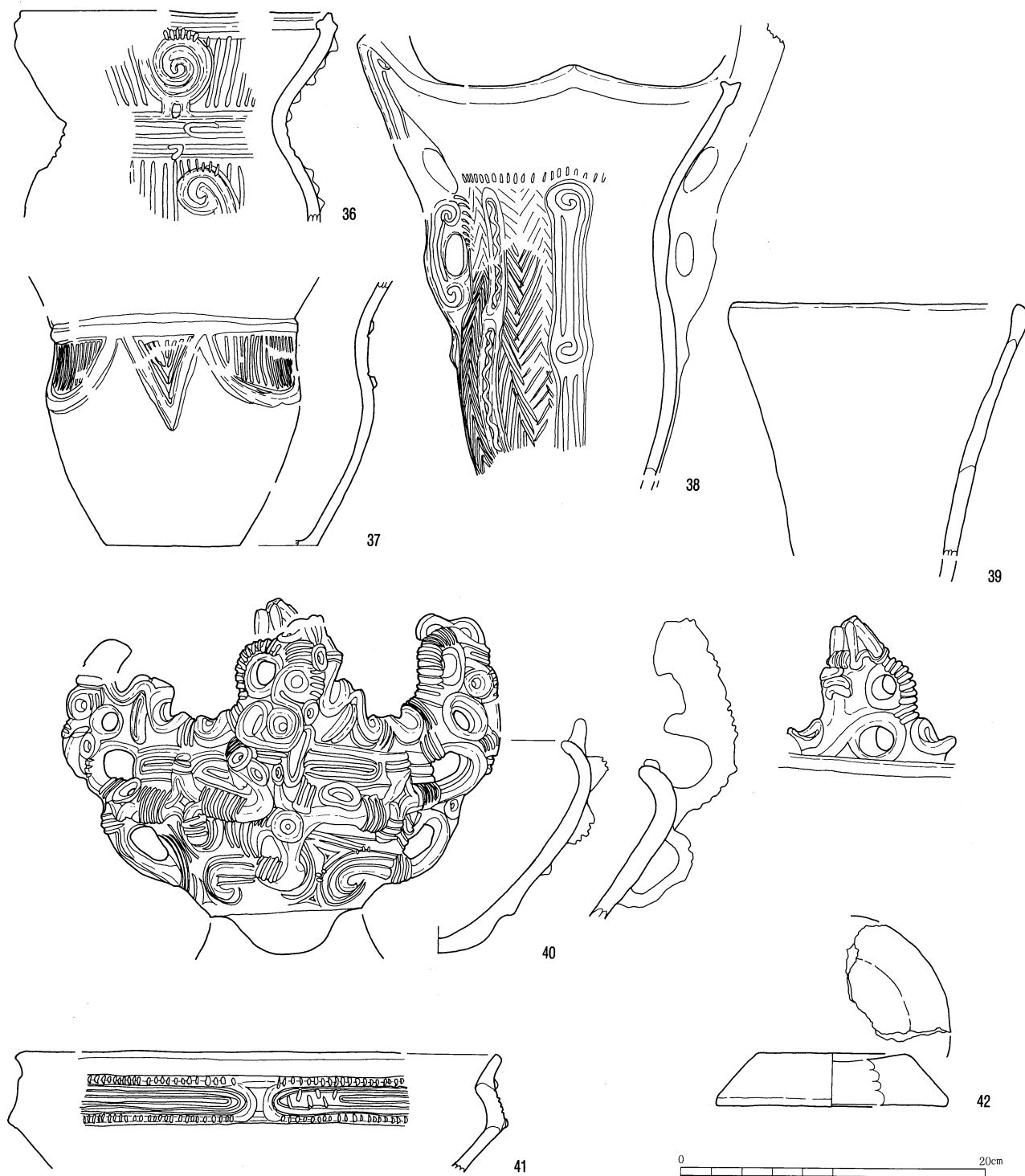


図20 31号住居址出土遺物実測図4

⑦ 32号住居址 (図21~24、P L70・79・85・89)

**検出：**北調査区中央部に位置し、台地の縁にかかって北半分を失っている。東側は33号住居址を切り、西は31号住居址と1mの距離をおいて隣接する。また38・39号土壌に貼り床している。**規模・形状：**径約5.4mの円形プランと推定される。主軸は不明である。**埋土：**炭、ローム混じり暗褐色土の単層で、厚さ30cm。**床面・壁：**床面は堅く、平坦である。壁はなだらかに立ち上がり、周溝はない。**炉：**残存しない。**柱穴：**7本のピットがあるが、位置からみてP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4本が柱穴であろう。径40cm~50cm、深さ50cm~70cmを測る。**遺物の出土状況：**6個体のほぼ完形土器をはじめまとまった量の土器が出土した。これらは床

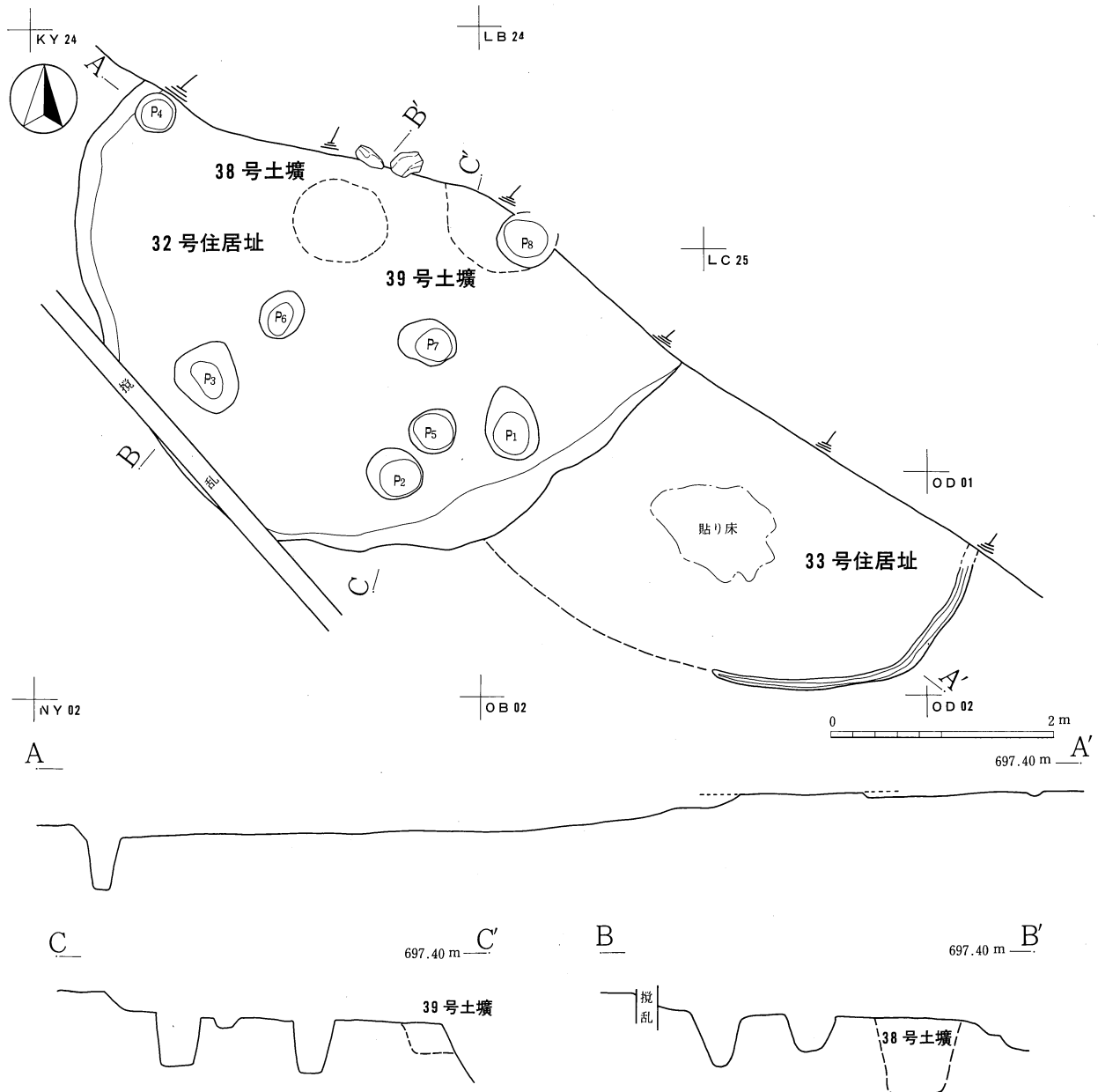


図21 32・33号住居址実測図

面から浮いて横倒しに潰れており、破片の散らばりも少ない。埋土が単層であることと考え合わせれば、本址廃絶時に竖穴を埋め戻す過程で一括投棄されたものと理解される。**遺物**：土器には深鉢(44~50)がある。石器には石錐1(72)、石匙1(73)、ピエス・エスキーユ1(74)、小剥離痕のある剥片9(75~82)、打製石斧20(83~87)、粗製大形石匙2(88・89)、磨製石斧1、凹石1(90)がある。打製石斧は数が多いが完形品はない。**時期**：中期中葉井戸尻Ⅲ式に併行する時期。

⑧ 33号住居址 (図21)

**検出**：北調査区中央部に位置する。耕土下ローム上面に狭い範囲ながら硬化した床面が検出され、部分的に周溝も認められたので住居址と認定した。しかし、北側は台地の縁にかかって残存せず、西側は32号住居址に切れ、不明の部分が多い。**規模・形状**：周溝のカーブから径5m程の円形プランと推定される。**埋土**：残存しない。**床面・壁**：確認された堅い褐色土の貼り床範囲は1.2m×0.8m。周溝は東側に長さ約3mが検出された。**炉**：残存しない。**柱穴**：検出されなかった。ただし、32号住居址の東側床面に分布するピットの中に本址の柱穴が含まれている可能性はある。**遺物の出土状況**：遺物は出土しない。**遺**



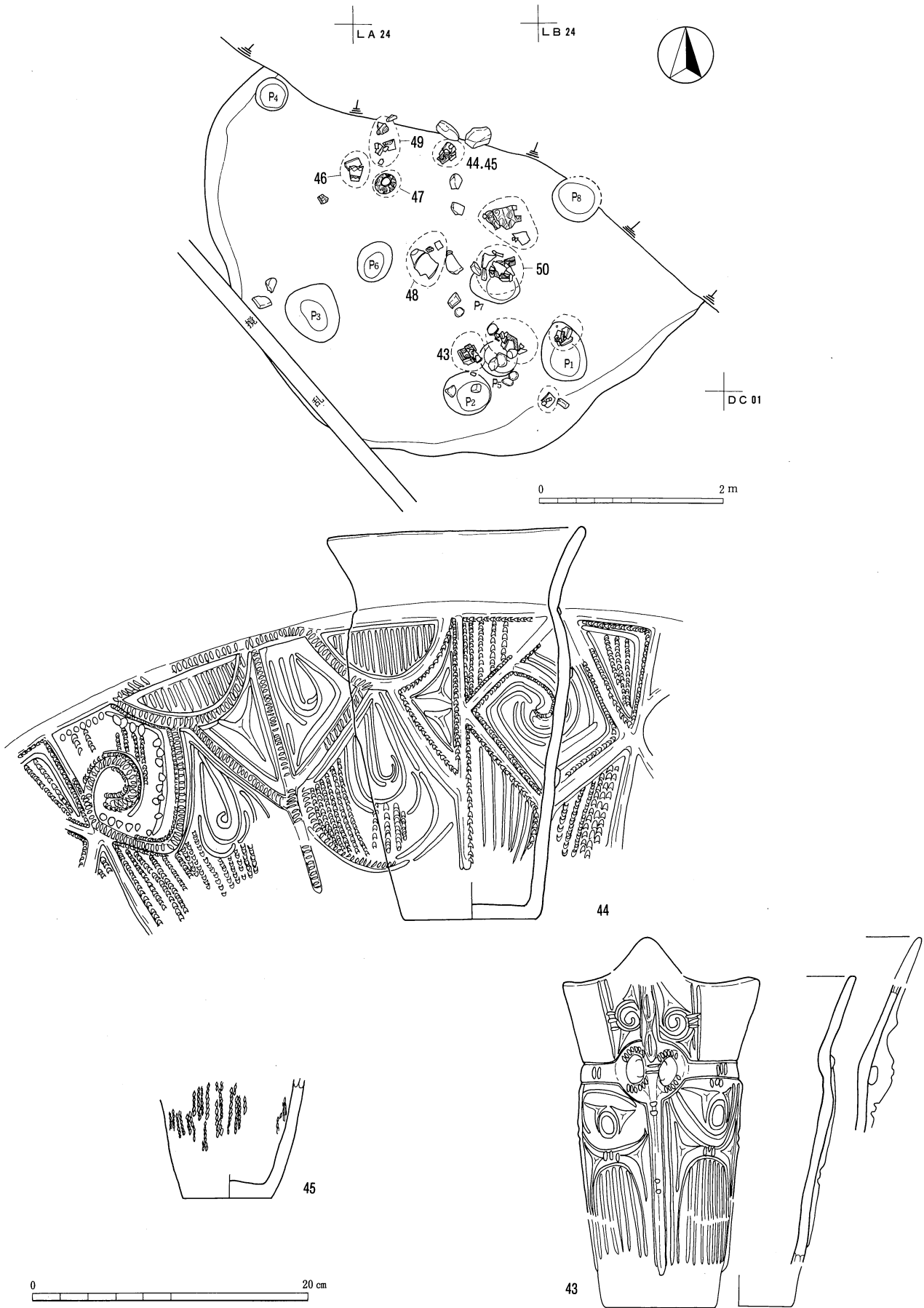


図 22 32号住居址遺物出土状況図・出土遺物実測図 1

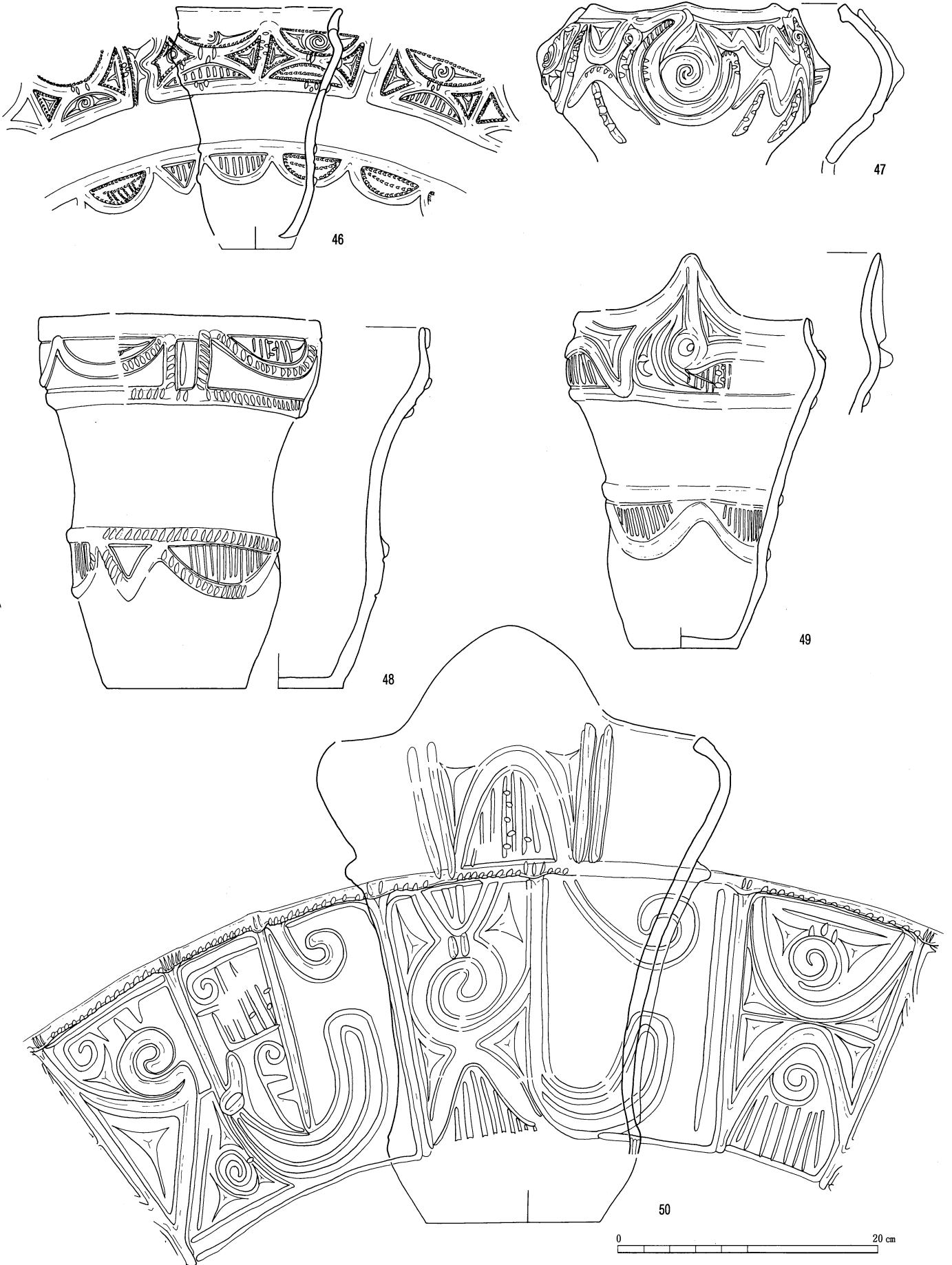


图 23 32 号住居址出土遗物实测图 2

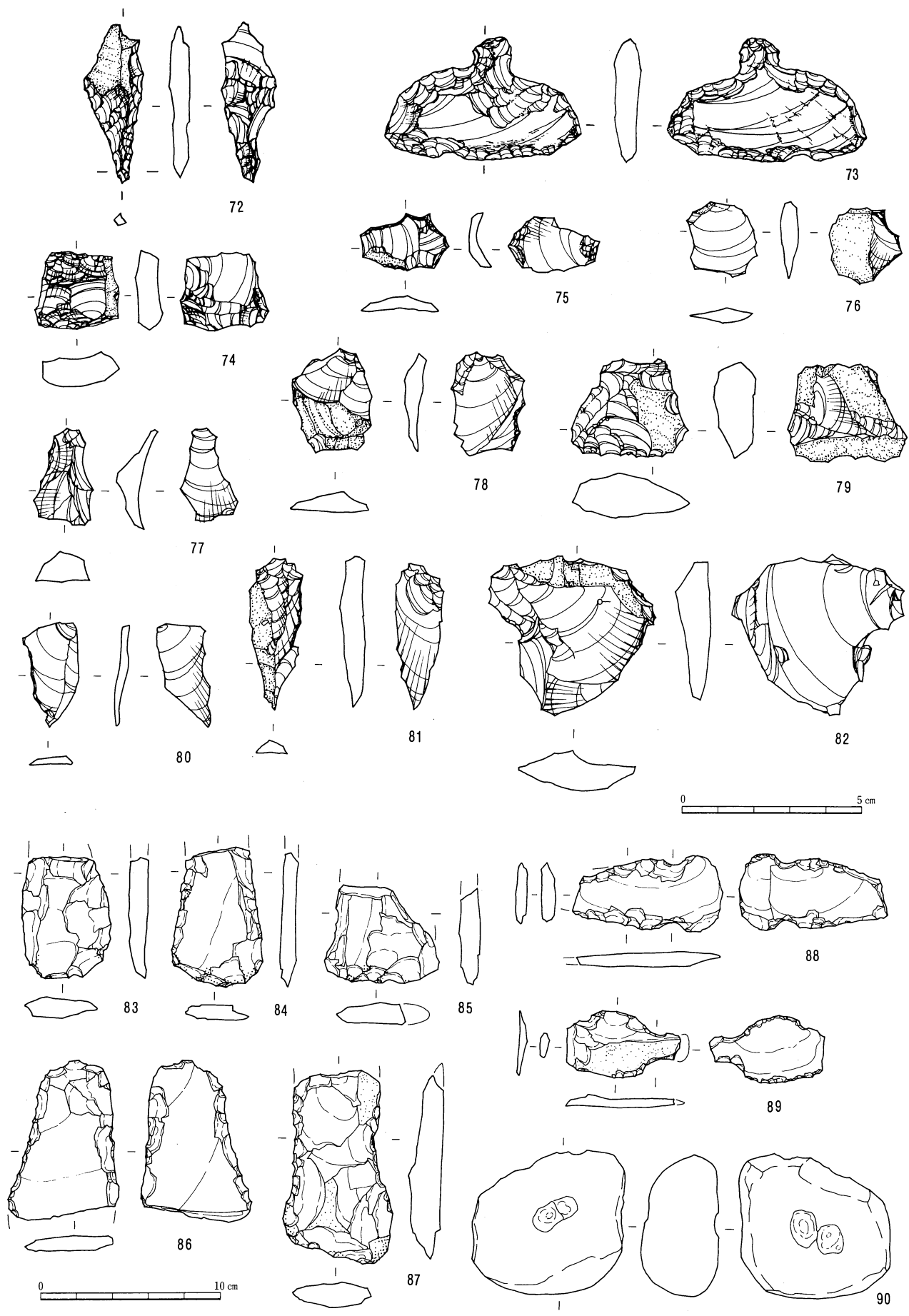


図24 32号住居址出土遺物実測図3

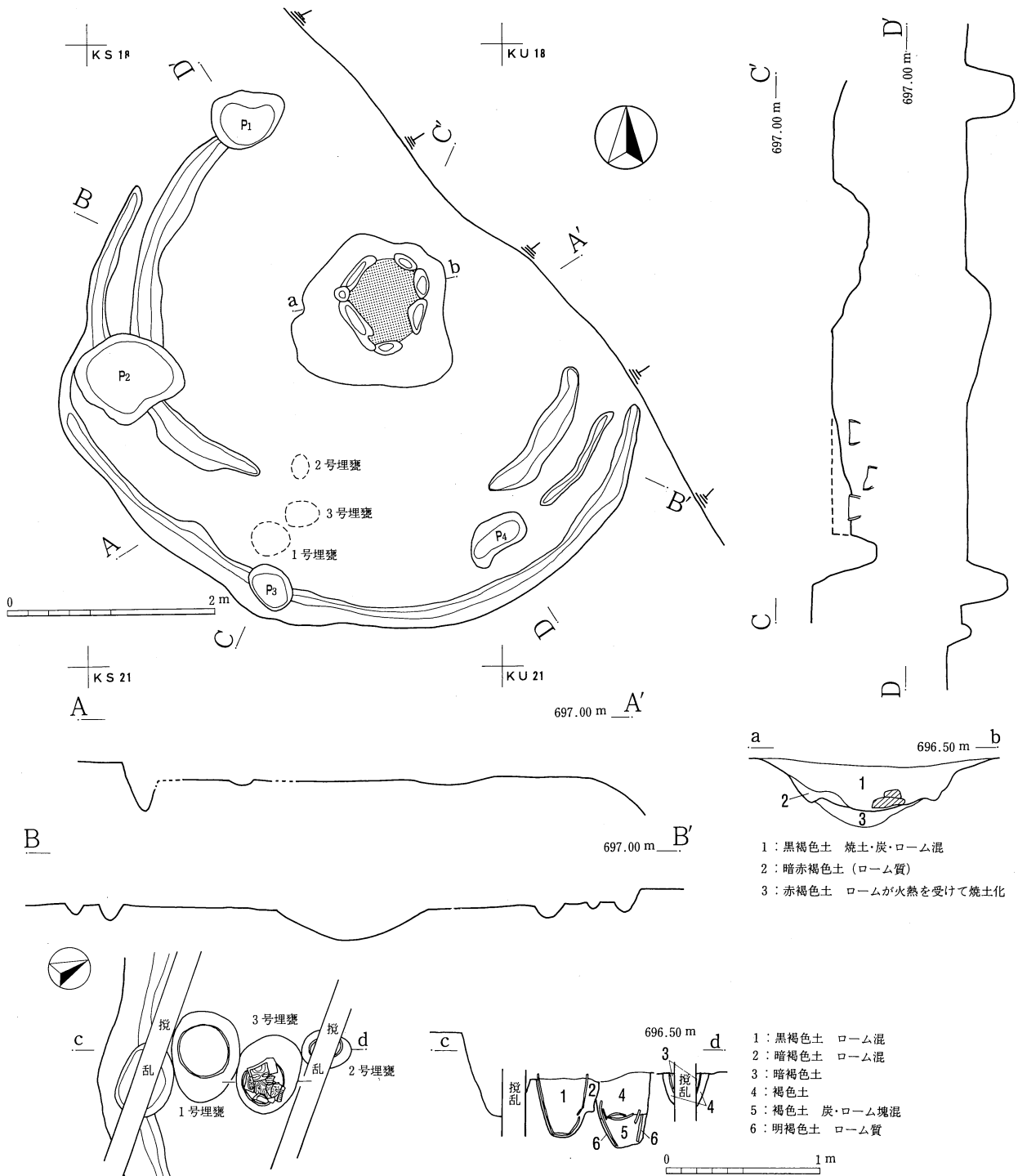


図25 34号住居址実測図

物：ない。時期：32号住居址に切られていることから、中期中葉以前に存在した住居址である。

⑨ 34号住居址 (図25~28、P L 70・71・79・84・85・90)

**検出**：北調査区の北部に位置し、北東側は台地の縁にかかり失われている。なお、埋甕、周溝ともに3基あり、2度の建て替えが考えられる。**規模・形状**：3基の周溝は隅丸の方形ないし五角形を描いて巡り、その径は4.4m、5.0m、5.9mを測る。主軸方向はN20°E。**埋土**：炭、ロームの混じる暗褐色土の単層で、厚さは20cm。**床面・壁**：床は平坦で堅い。壁は南側では急角度に立ち上がる。周溝は3重に巡り、内側の2本は貼り床されていて古い。**炉**：中央北寄りにある。掘り形は径1.5m、深さ30cmで、炉石の抜き跡も認められ、大形の石囲炉とみられる。**柱穴**：3本が検出された。深さはP<sub>1</sub>が約50cm、P<sub>2</sub>が約40cm、

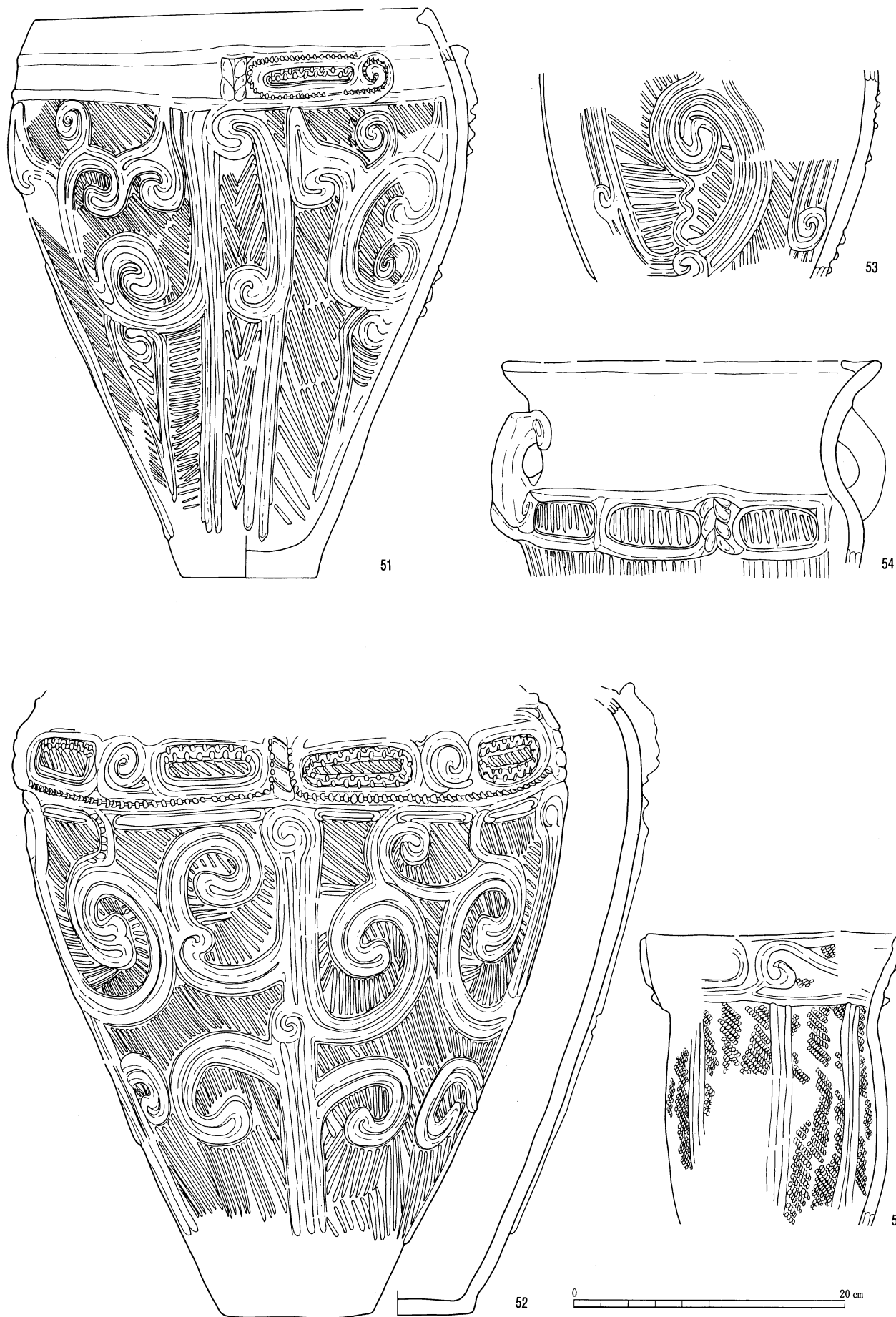
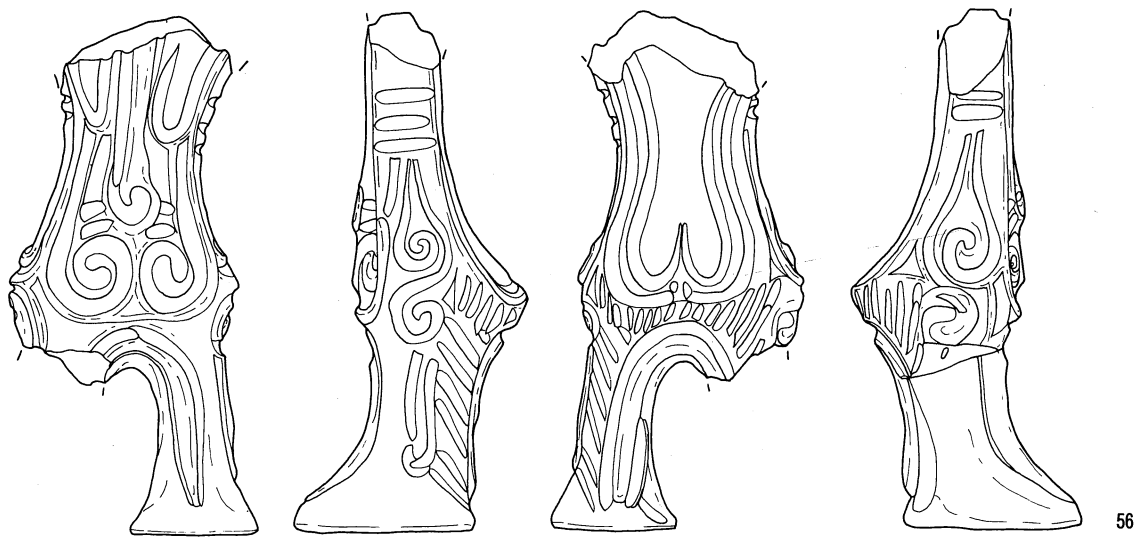
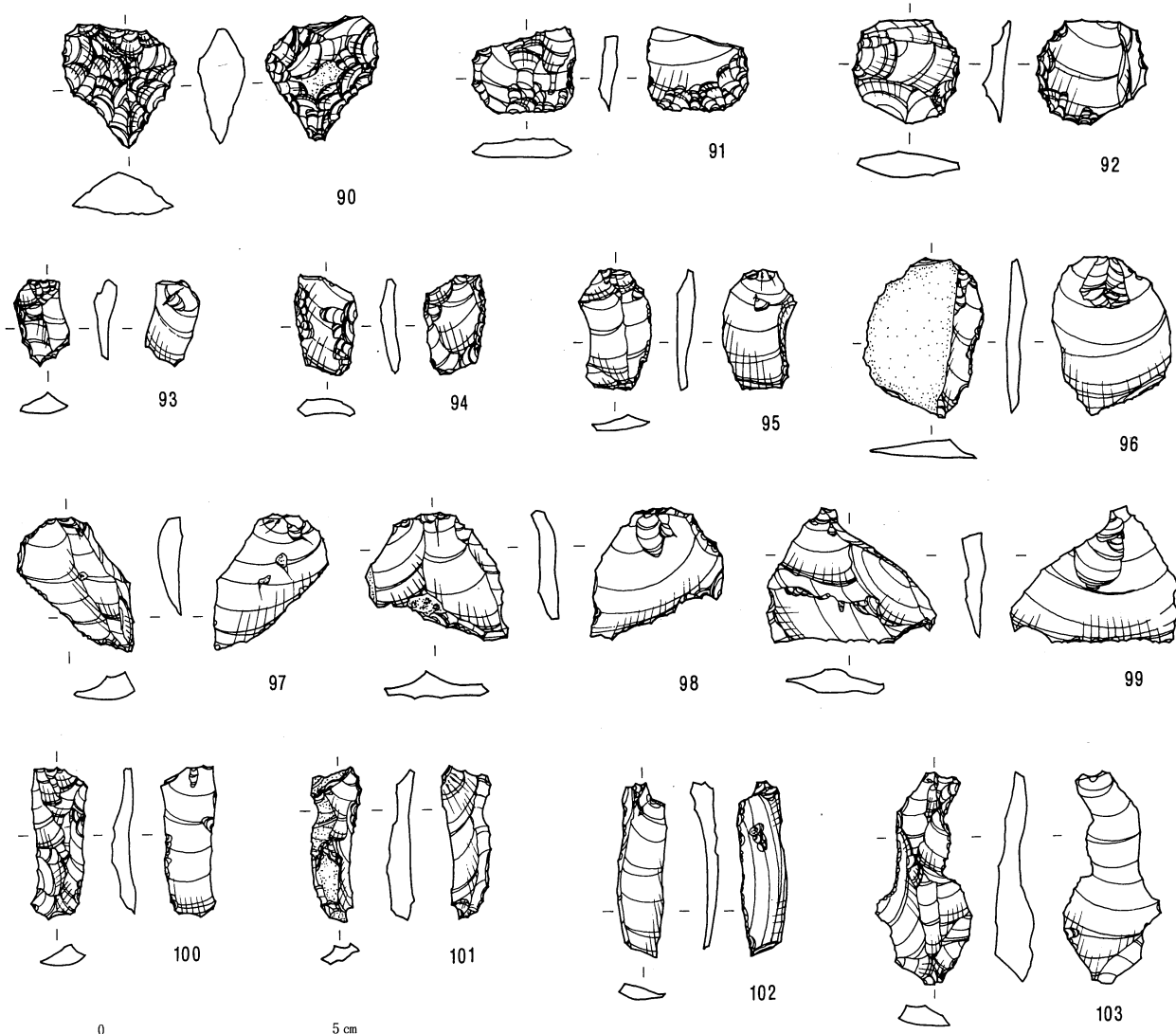


图 26 34 号住居址出土遺物実測図 1



0 10cm



0 5 cm

图 27 34 号住居址出土遺物実測图 2

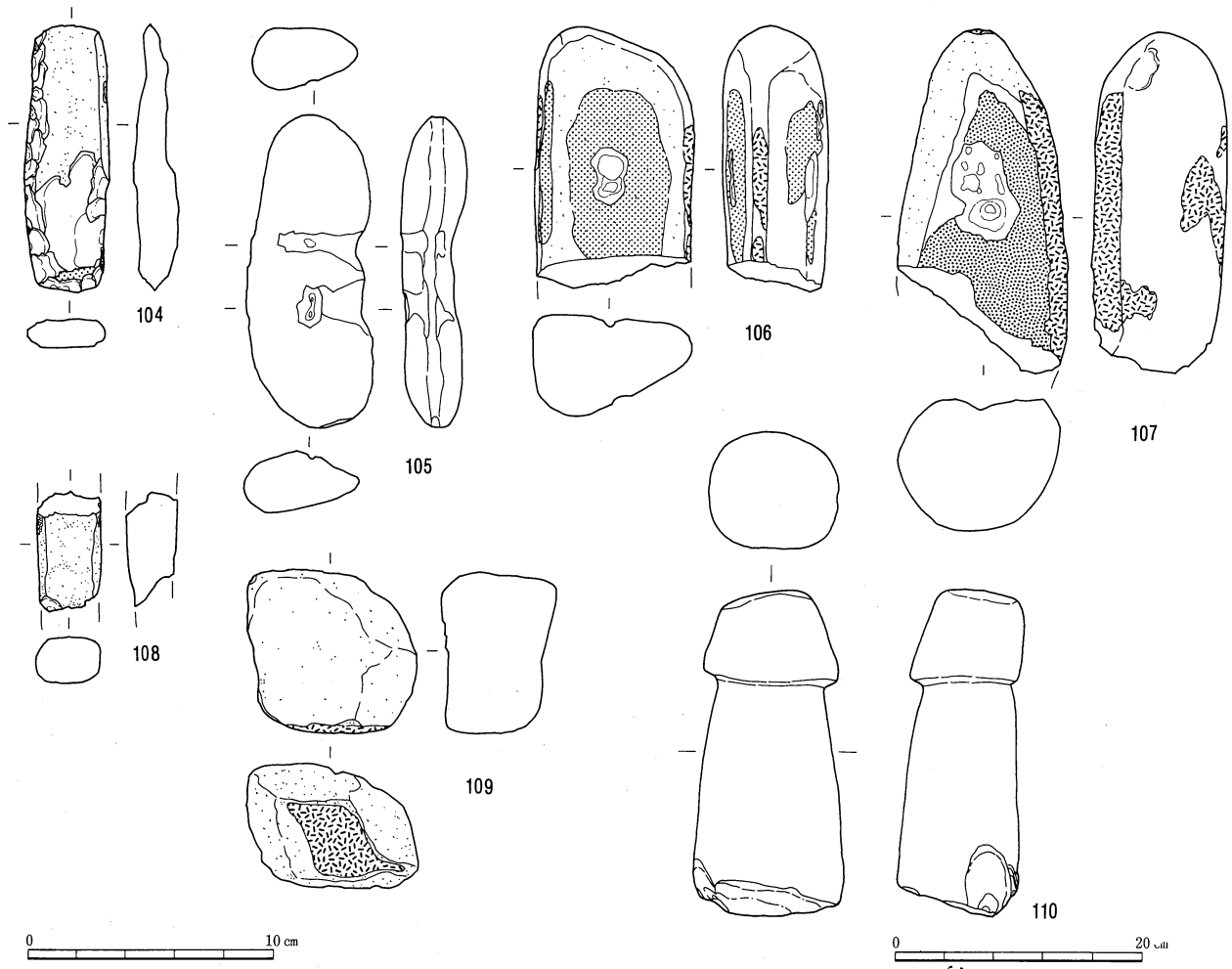


図28 34号住居址出土遺物実測図3

P<sub>3</sub>は30cm。位置からみて4本柱タイプである。なお、建て替えに際して柱穴の位置を変えていない。**その他の施設**：主軸線上に埋甕が3基設けられている。最も新しいのは壁下の1号で、完形の深鉢(51)を埋設している。2・3号は貼り床下に検出したもので、掘り形の切り合いから内側の2号の方が古い。3号は底を欠いた深鉢(52)を埋めている。2号は耕作によって攪乱され、埋設土器(53)も破損している。**遺物の出土状況**：土器の出土量は多いが、大部分は埋土の上層から出土した小破片で、住居廃絶後に投げ込まれたものと思われる。なお、土偶は住居東側の埋土上層から、石棒は炉の南の床面より出土し、両者の間に注目すべき関係は認められない。**遺物**：埋設土器(51~53)のほか埋土から出土した深鉢(54・55)があり、土製品には胸から上と右足を欠損した土偶(56)がある。石器は種類、量ともに豊富で、石錐1(90)、スクレイパー2(91・92)、小剥離痕のある剥片12(93~103)、打製石斧4(104)、磨製石斧1、磨石・凹石3(105~107)、敲石2(109)があり、石製品に大形の有頭石棒(110)がある。**時期**：中期後半Ⅲ期。

⑩ 35号住居址 (図29、P L71・86)

**検出**：北調査区北部に位置し、耕作土直下に床面が検出された。北に36号住居址、西に37号住居址が近接して構築される。**規模・形状**：壁が残存しないため炉と柱穴の位置から推定してプランは径約4.4mの円形で、主軸の方向はN90°W。**埋土**：残存しない。**床面・壁**：炉の周りに堅い面が広がるが、その周囲は軟らかい。壁はまったく残存しない。**炉**：住居中央に石囲炉がある。炉石は3個が残り、その頂部から火床までの深さは10cmと浅い。**柱穴**：ピットは13基を数えるが、主柱穴と考えられるのはP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>13</sub>で、深さは40cm~50cm。**その他の施設**：ない。**遺物の出土状況**：炉内から炭、焼土に混じってまとまった土器片が出土している(57)。本址廃絶の際に遺棄された遺物であろう。**遺物**：57は唯一復元できた土

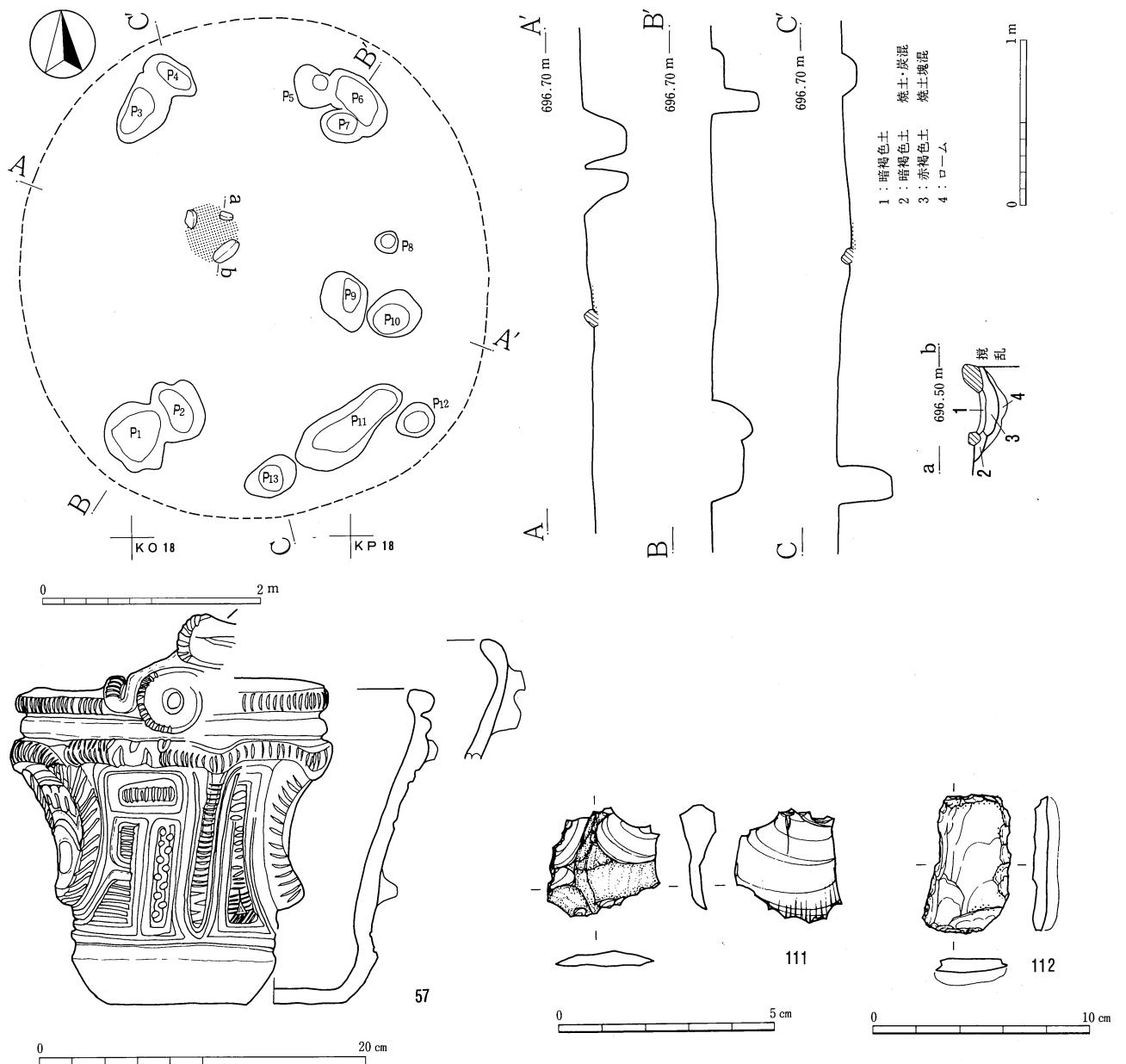


図29 35号住居址実測図・出土遺物実測図

器で、約2分の1が残存する。口縁に蛇体を模した突起をもつ小形の深鉢で、中期中葉井戸尻II式に比定される。石器は小剥離痕のある剥片1 (111)、打製石斧3 (112)がある。**時期**：中期中葉井戸尻II式並行。

① 36号住居址 (図30・31、P L71・86)

**検出**：北調査区北部の台地縁辺近くに位置する。耕作土直下に床面が検出された本址は、攪乱を受けて遺存状態は悪い。南に35号住居址が隣接している。**規模・形状**：4.5m×4.5mの隅丸方形プランで、主軸方向はN15°Eを示す。**埋土**：残存しない。**床面・壁**：堅く締まった床で、部分的に貼り床が認められる。壁はほとんど残存しない。周溝は全周していたと思われるが、北側は攪乱が及んで確認できない。**炉**：中央やや北寄りに設けられる。石囲炉であるが、炉石は抜き取られて残っていない。**柱穴**：支柱穴はP<sub>2</sub>～P<sub>5</sub>の4本で、4隅に配置され、深さは38cm～46cm。このほか入口部に当たる南側によく似た規模のピットがある。**その他の施設**：ない。**遺物の出土状況**：床面から10点ほど土器片が出土したが、流れ込み遺物とみられる。**遺物**：復元可能な土器はない。石器には小剥離痕のある剥片1 (113)がある。**時期**：中期後半。



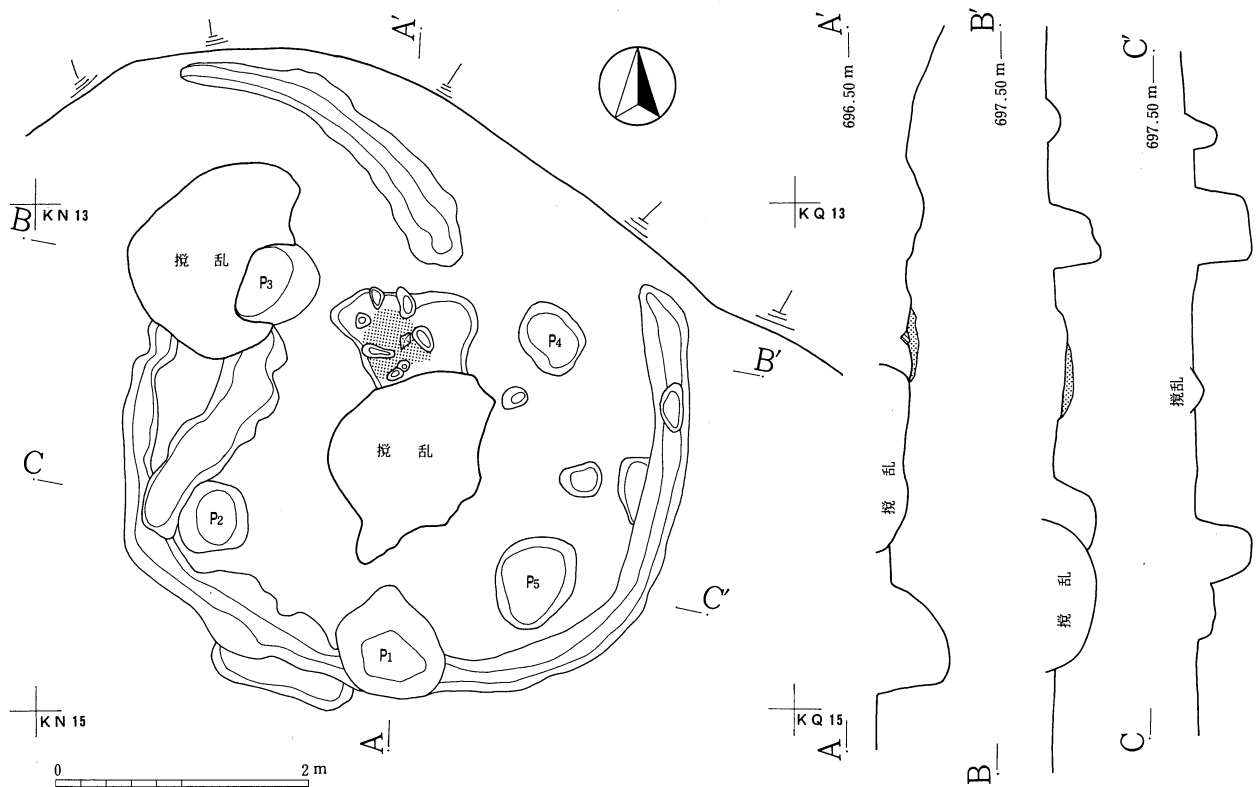


図30 36号住居址実測図

⑫ 37号住居址 (図32・33、P L71・79)

**検出：**北調査区北部に位置し、耕作土直下に床面が検出された本址は遺存状況が悪く、プランなど不明な点が多い。東に1m程離れて35号住居址がある。

**規模・形状：**柱穴配置から推定して径約3mの円形プランであろう。主軸は不明。

**埋土：**残存しない。**床面・壁：**ローム掘り込み面に貼り床したとみられ、黄褐色土の堅い面が部分的に残る。壁は東側にのみ残り、高さ5cmを測る。周溝はない。

**炉：**石囲炉であるが、炉石は2個が残るのみ。掘り形は60cm×40cmの楕円形で、火床までの深さは5cmと浅い。

**柱穴：**7本のピットのうち主柱穴は20cm以上の深さをもつP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>と思われる。残る3本は5cm～12cmと浅く、柱穴とは考えにくい。

**その他の施設：**ない。

**遺物の出土状況：**床面から出土しているが小破片が多い。

**遺物：**図示可能な土器は1点(58)がある。石器は1点もない。

**時期：**中期後半II期。

⑬ 38号住居址 (図34、P L86)

**検出：**北調査区の西部に位置し、一部調査区外にかかる。耕作土直下に周溝と炉が検出され、耕作による攪乱が激しい。北に4m離れて35号住居址が営まれる。

**規模・形状：**周溝から径約6mの円形プランと推定される。主軸は不明。

**埋土：**残存しない。**床面・壁：**ともに残存しない。周溝は東側にのみみられ、P<sub>2</sub>にあたって終わる。

**炉：**中央北寄りに設けられ、石囲炉であるが炉石は抜き取られて残らない。掘り形の規模は大きく、径1.3m、深さ30cmを測り、炉石抜き取り痕と思われる小ピットがある。火床は10cmほどの厚さをもつ。

**柱穴：**主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5本確認され

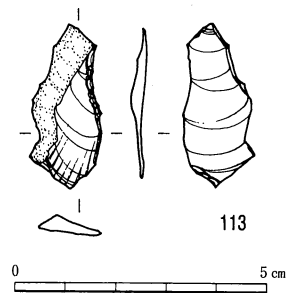


図31 36号住居址出土遺物実測図

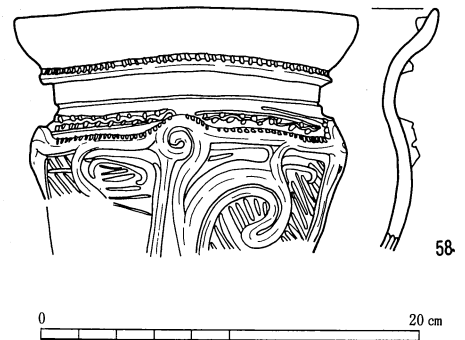


図32 37号住居址出土遺物実測図

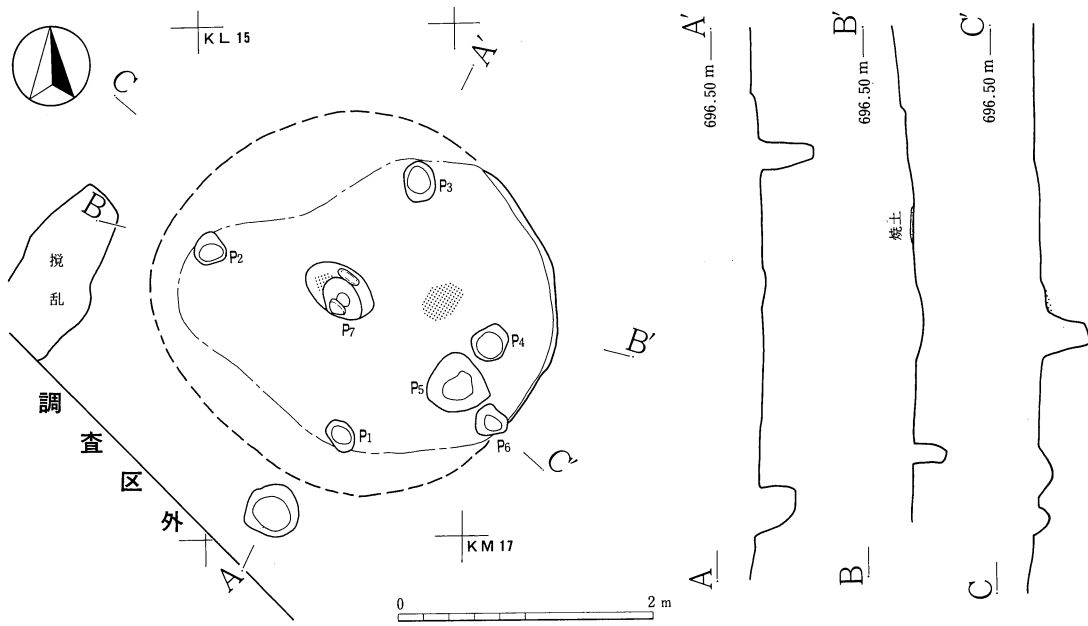


図33 37号住居址実測図

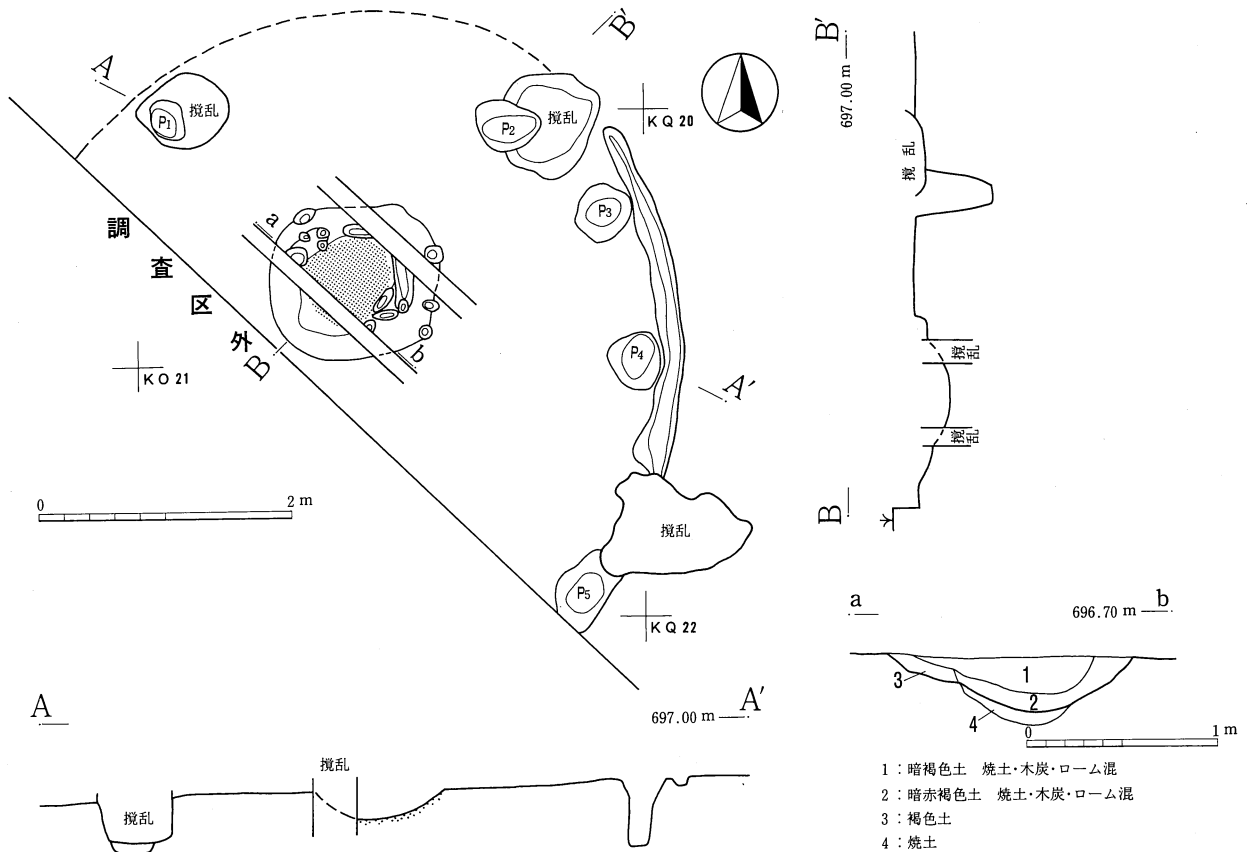


図34 38号住居址実測図

ているが、配置からみて調査区外にもう2本あると予想され、7本柱タイプである。5本の深さは34cm～62cm。その他の施設：ない。遺物の出土状況：床面から少量出土しただけである。遺物：土器はすべて小破片で、図示できるものはない。石器には小剥離痕のある剥片1、打製石斧2、凹石1がある。時期中期後半。

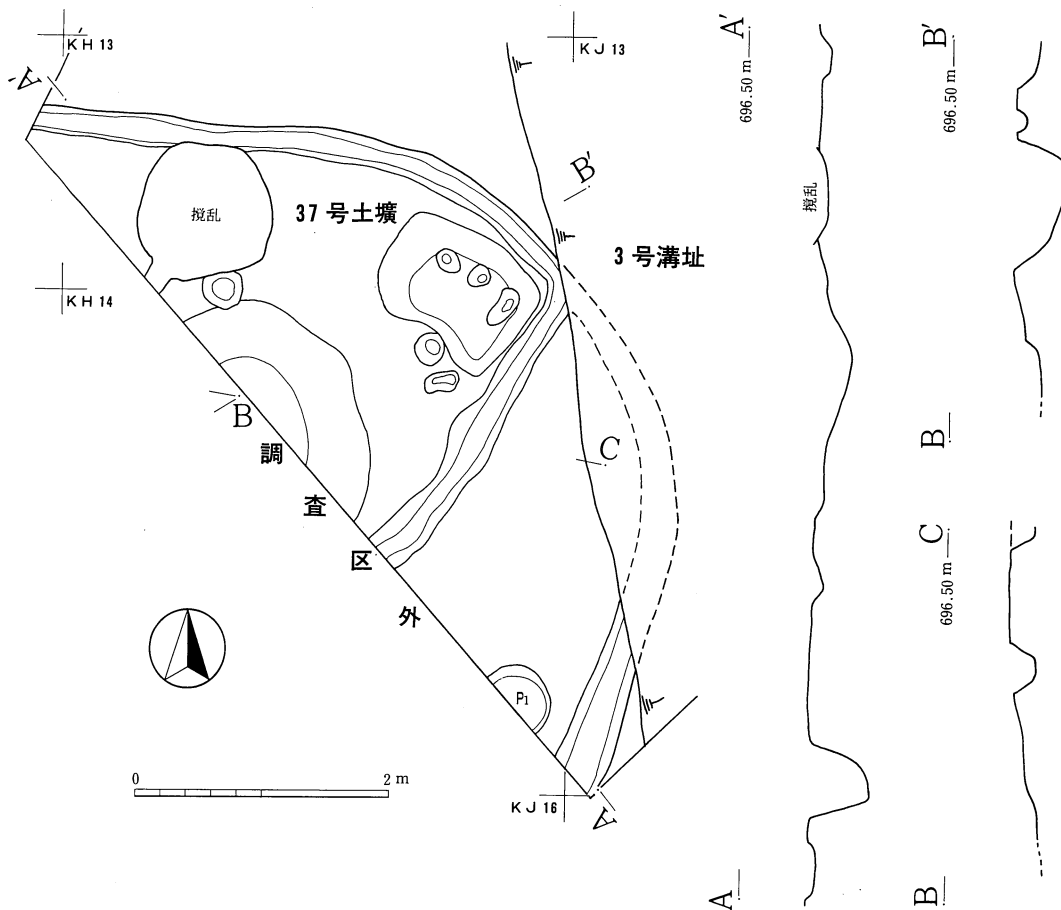
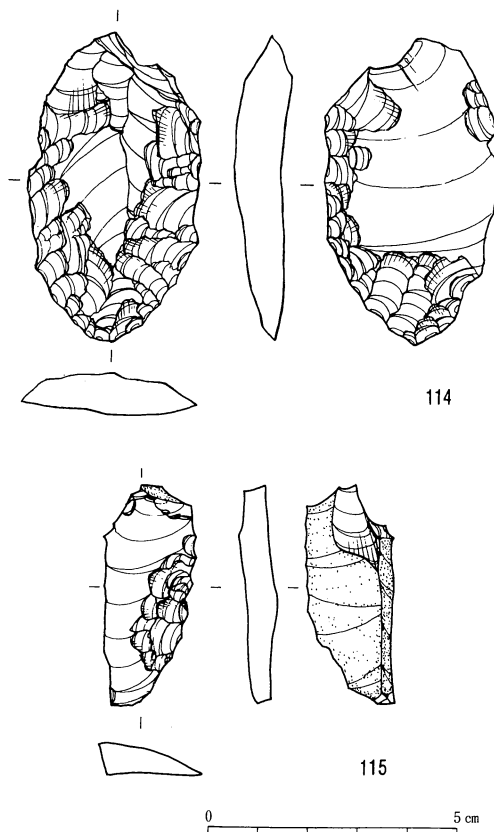


図35 39号住居址実測図

⑭ 39号住居址 (図35・36, P L86)

**検出：**北調査区の西端に位置し、大部分は調査区外にある。本址もまた耕作土直下に床面、周溝が検出された住居址で、東側を3号溝址に切られるほか耕作等による攪乱も著しく、遺存状態は悪い。南東方向の37号住居址とは約4mの距離がある。**規模・形状：**周溝から径6mを超える円形プランと推定される。主軸は不明。**埋土：**残存しない。**床面・壁：**ローム削平面を床面とし、平坦で堅い。壁は残らない。周溝が巡るが、床面を切って延びる直線状の溝は性格不明。**炉：**調査区外にあると思われる。**柱穴：**深さ50cmのP<sub>1</sub>が確認されたただけである。**その他の施設：**ない。**遺物の出土状況：**周溝内より土器片数点が出土したのみである。**遺物：**土器はいずれも破片で数は少なく、図示可能なものはない。石器はスクレイパー2(114・115)がある。**時期：**中期後半。



⑮ 101号住居址 (図37, P L72・80・86)

**検出：**西調査区の南部に位置し、一部が調査区外にかかる。耕作土直下に周溝および炉が検出された本址は、近年の耕作によって大きく攪乱され、全容は捉えられない。北に5m離れて107号住居址が営まれる。**規模・形状：**壁は残存しな

図36 39号住居址出土遺物実測図

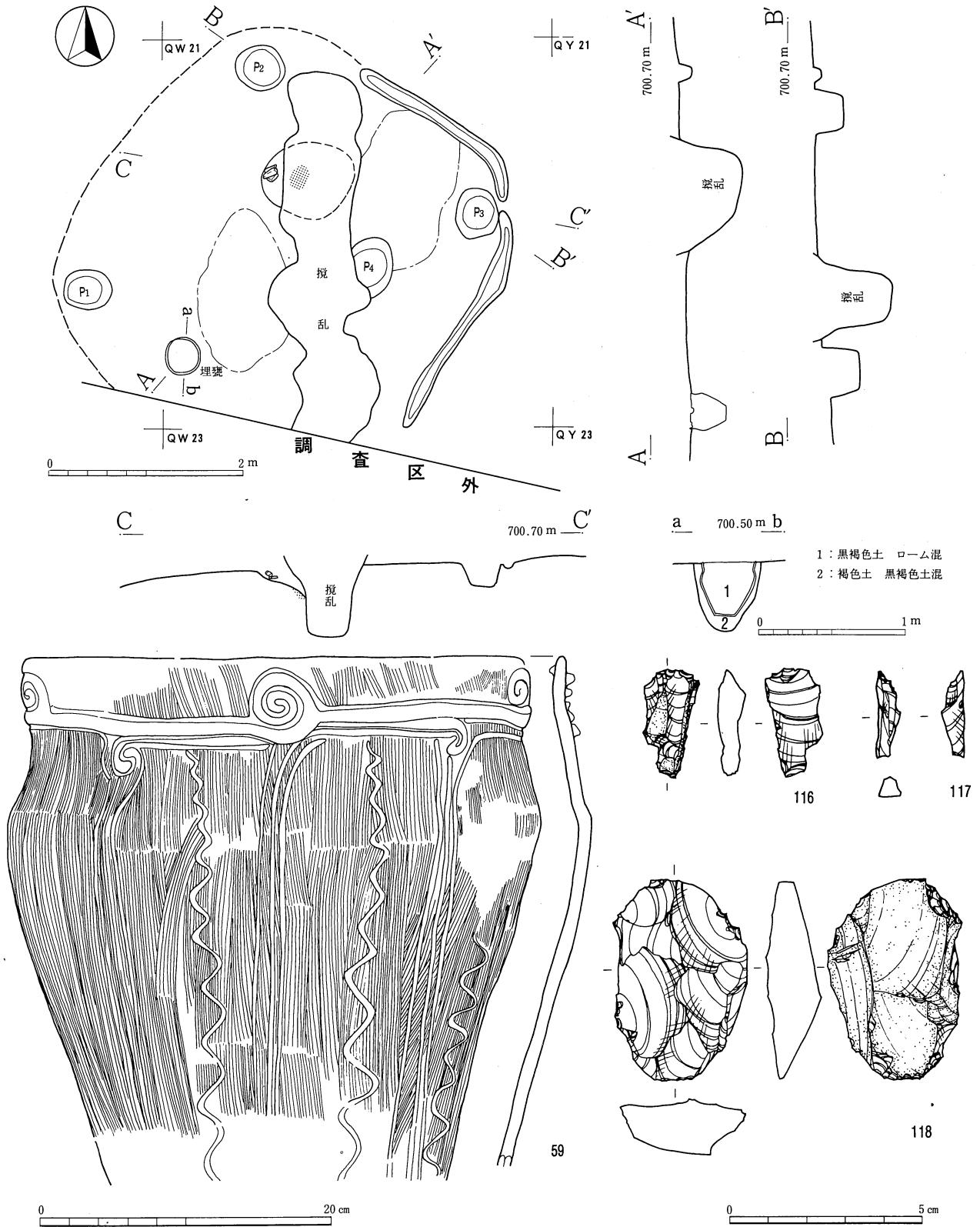


図37 101号住居址実測図・出土遺物実測図

いが、周溝と柱穴配置から一辺4.5mの隅丸方形ないしは五角形プランと推定される。主軸方向はN40°E。埋土：残存しない。床面・壁：床は部分的に残り、それを見る限りでは堅い。壁はまったく残存せず、周溝だけが東から北にかけて残る。炉：中央やや北東寄りに設けられ、石囲炉と思われるが、耕作による破壊が著しい。柱穴：主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>の3本が確認され、その配置は4本柱穴タイプであることを

示す。残りのよいP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>で深さ30cm。**その他の施設**：炉から南西の方向に埋甕が設けられる。埋設土器は底部を欠いた大形の深鉢で、正位の状態に埋めている。**遺物の出土状況**：出土量は少なく、P<sub>4</sub>の脇から深鉢の底部が出土した程度である。**遺物**：土器は埋設されていた深鉢(59)が唯一図示できるものである。石器にはピエス・エスキュー2 (116・117)、石核1 (118)がある。**時期**：中期後半Ⅲ期。

⑩ 102号住居址 (図38～42、P L72・86・80・90)

**検出**：西調査区の南部に位置する。他址との重複がなく、縄文時代住居址の中では遺存状態が最もよい。北西に104号住居址が隣接して、また、北東には2mの距離をおいて108号住居址がある。**規模・形状**：7.6m×5.6mの隅丸五角形プランを呈し、今回検出された中では最も規模が大きい。プランの張り出す西側を入口とみて、主軸方向はN115°E。**埋土**：20cm～40cmと厚く、5層に分層され、その堆積状況は自然埋没を示す。**床面・壁**：ロームの堅い床は周辺から中央に向かって緩く傾き、その比高差は10cm～15

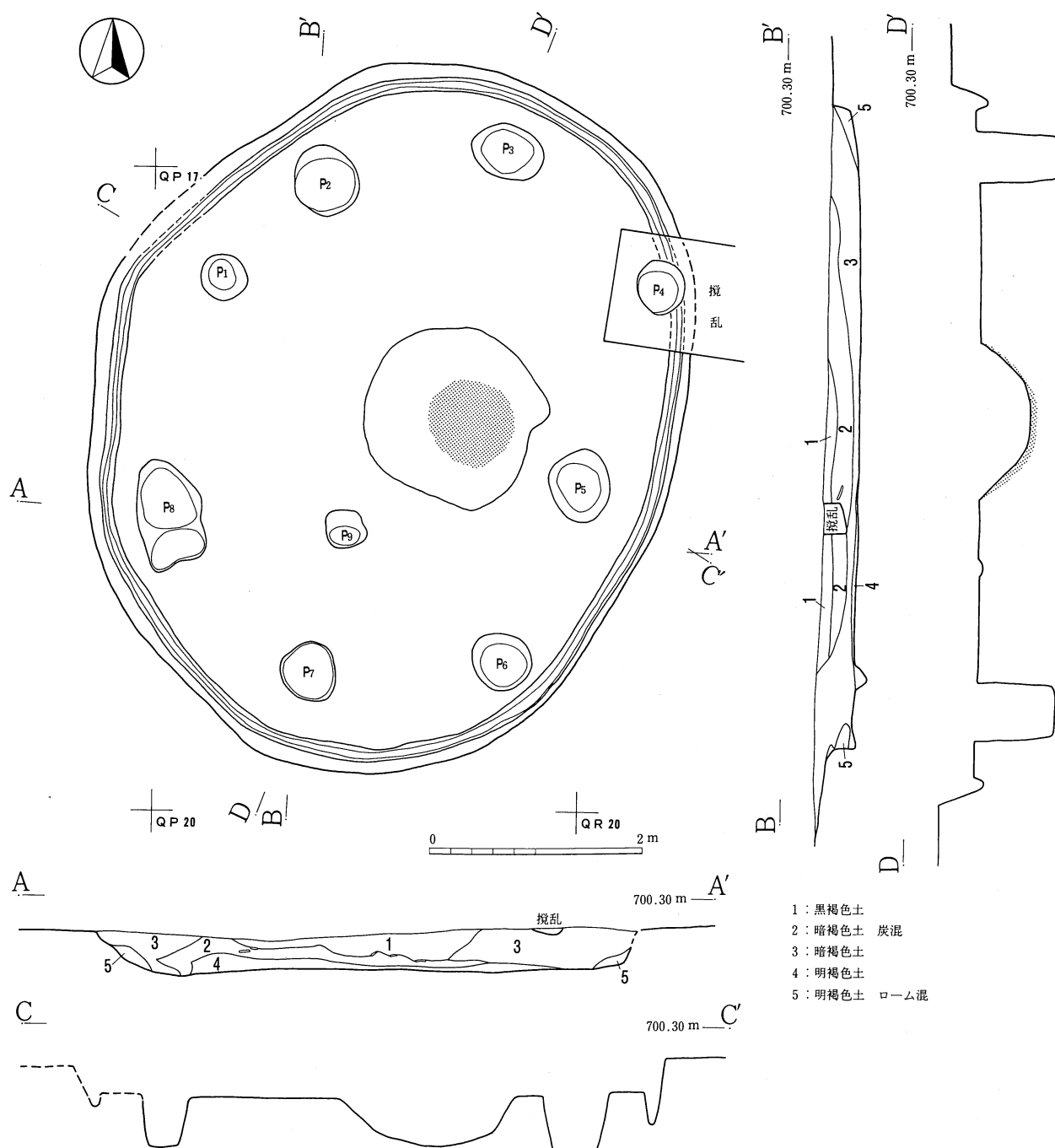


図 38 102号住居址実測図

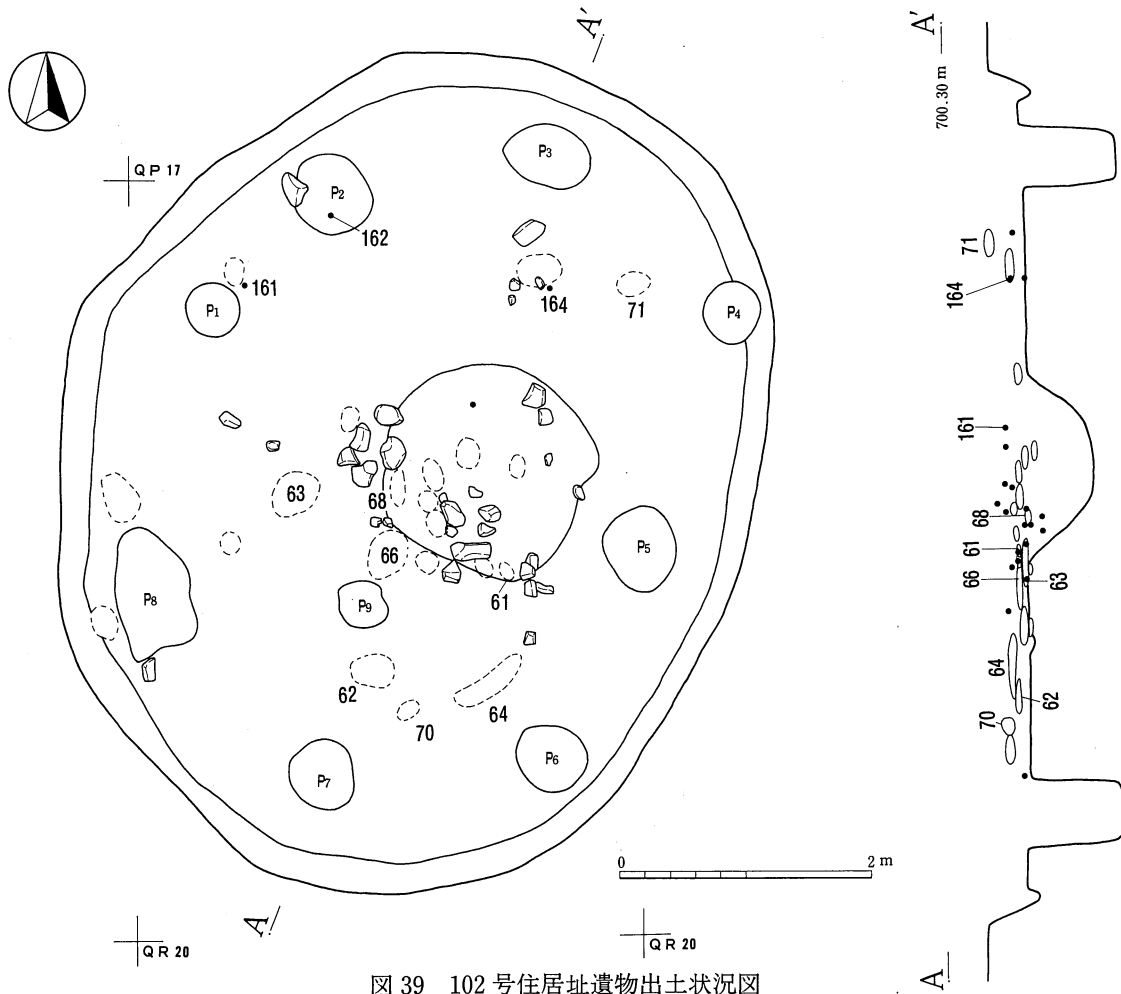


図 39 102号住居址遺物出土状況図

cm。壁は垂直に近い急角度で立ち上がり、壁下には周溝が一周する。炉：石囲炉が中央やや奥壁寄りに設けられるが、炉石は抜き取られて残らない。掘り形の規模は大きく、一辺1.6mの方形で深さ45cmを測る。柱穴：P<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>の8本がある。このうち、位置からみてP<sub>2</sub>～P<sub>8</sub>の7本が支柱穴であろう。いずれもよく似た大きさだが、深さはP<sub>7</sub>の64cmからP<sub>2</sub>の31cmまで差が大きい。その他の施設：ない。遺物の出土状況：土器の大部分は炭を多量に含みレンズ状に堆積する埋土第3層中に含まれていて、住居廃絶後、堅穴が埋没する過程で投棄されたものである。そのほか、P<sub>2</sub>内より磨製石斧の破損品(162)が出土している。床面出土の161とは石質が同じであり、接合しないが同一個体であろう。遺物：土器は唐草文系が主体を占め、深鉢には頸部でくびれる器形(60～65)といわゆる無頸タル形(66～68)がある。石器には、石鏃5(119～123)、スクレイパー2(124・128)、ピエス・エスキーユ3(125～127)、小剥離痕のある剥片31(129～145)、打製石斧28(146～158)、横刃形石器2(159・160)、磨製石斧4(161～164)、その他2がある。時期：中期後半II期。

⑰ 104号住居址 (図43～45、P L73・8081・86・90)

検出：中調査区西部の住居址集中域に位置し、北側を105号住居址に切られ、南に0.5mの距離をおいて102号住居址が隣接する。規模・形状：径4.8mのやや南側が突出した円形プランで、主軸の方向はN。埋土：厚さ30cmを測り、2層に分層が可能。レンズ状堆積を示し、自然埋没と考えられる。床面・壁：床はあまり堅くなく、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりは急で、壁下には周溝が巡る。炉：中央北寄りに石囲炉が設けられる。105号住居址に切られる北側を除けば、遺存状態は良い。一辺70cmの方形で、周囲に長さ30cm～40cmの細長い円礫を埋めている。炉石の頂部から火床までの深さは浅く、15cm。柱穴：P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>

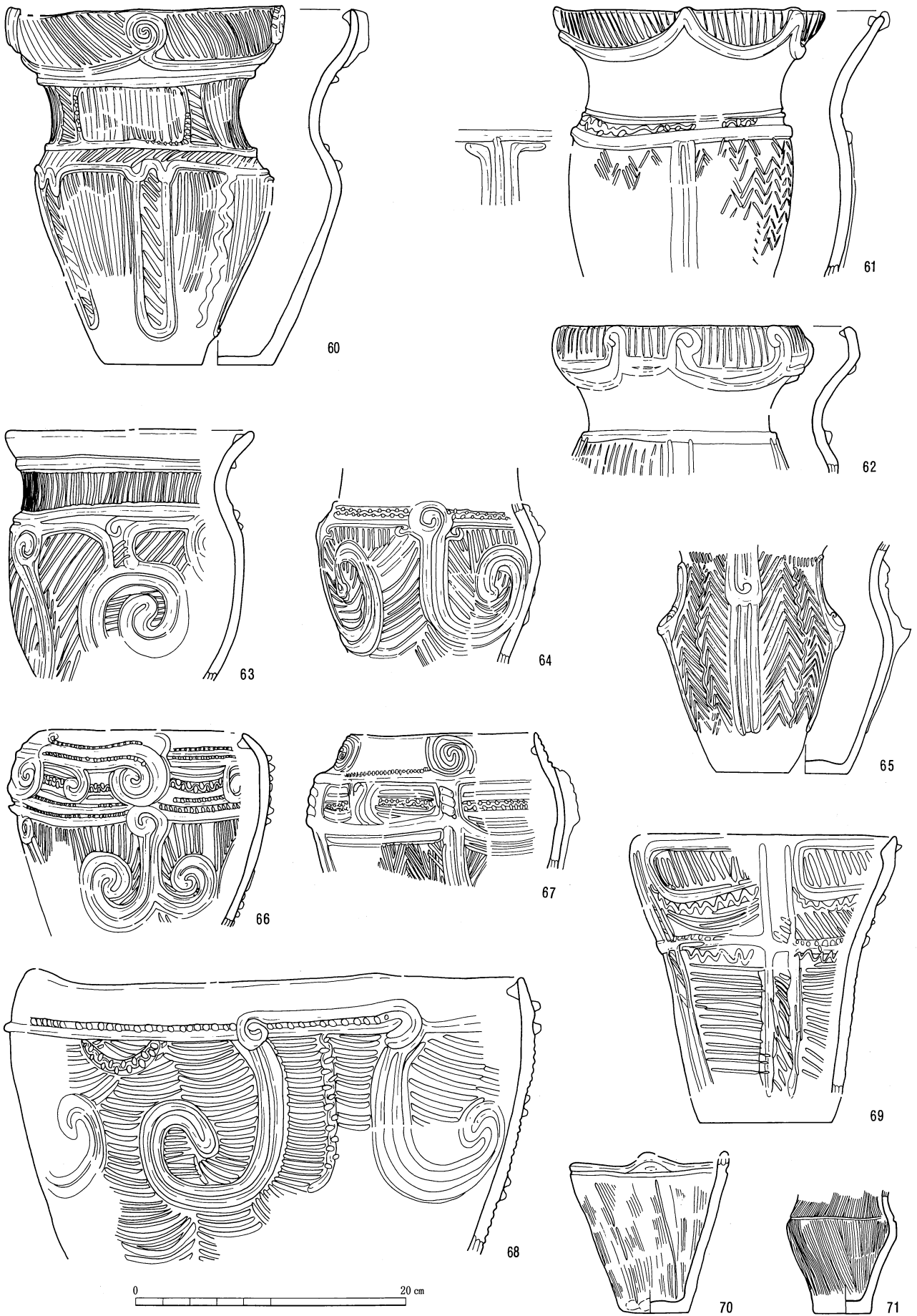


图40 102号住居址出土遺物実測図1



图 41 102 号住居址出土遺物実測图 2



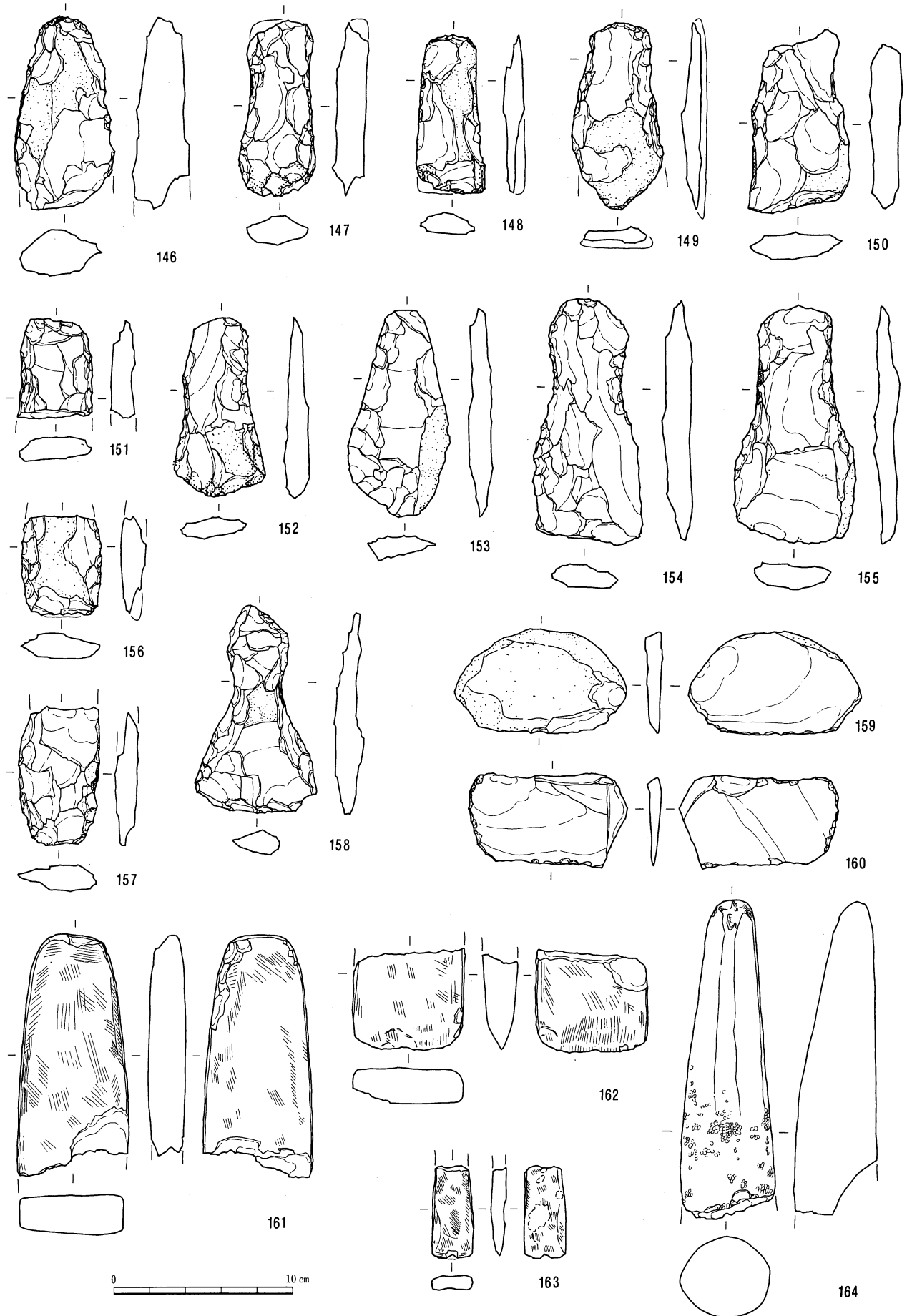


図 42 102号住居址出土遺物実測図 3

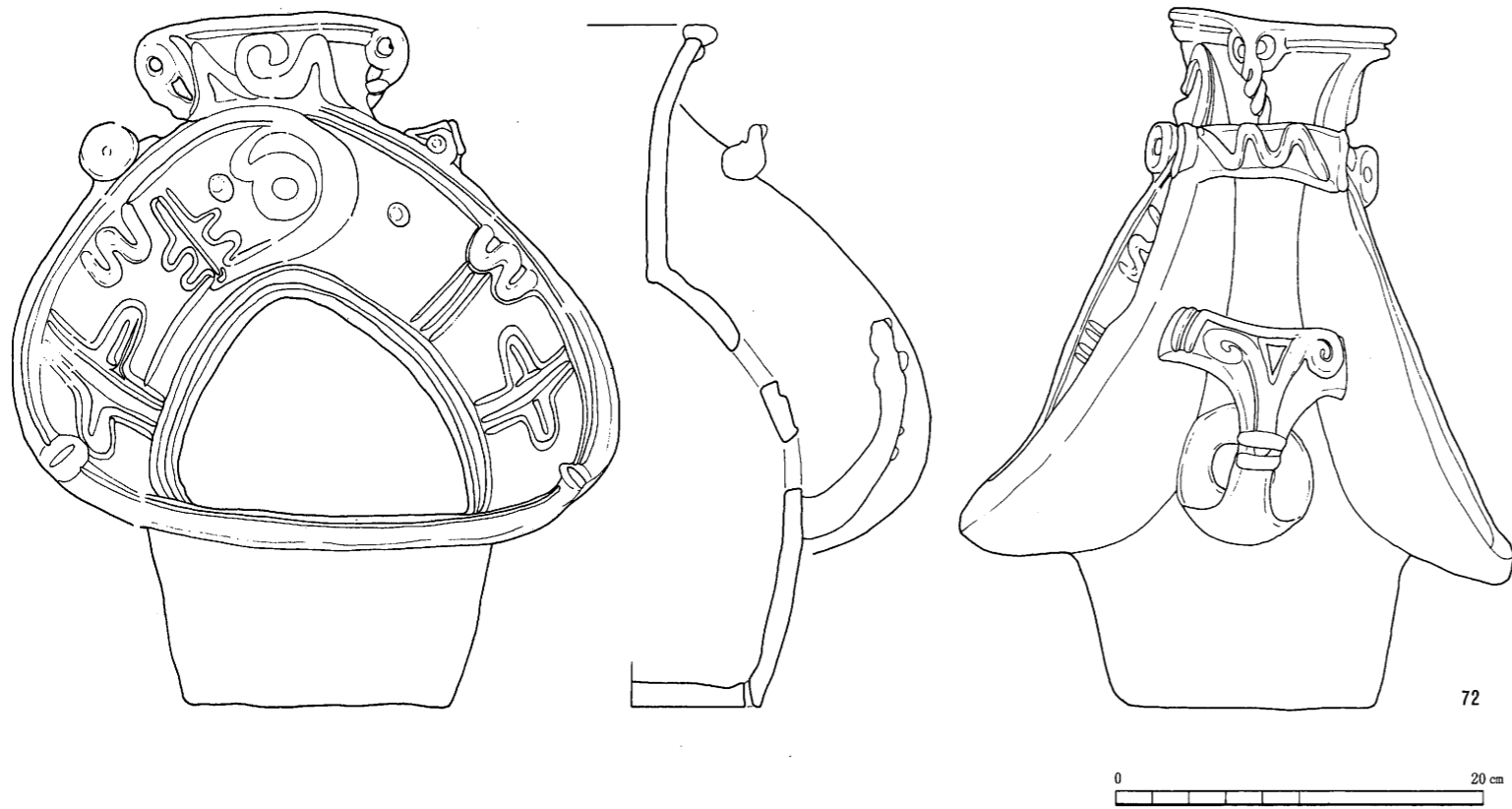
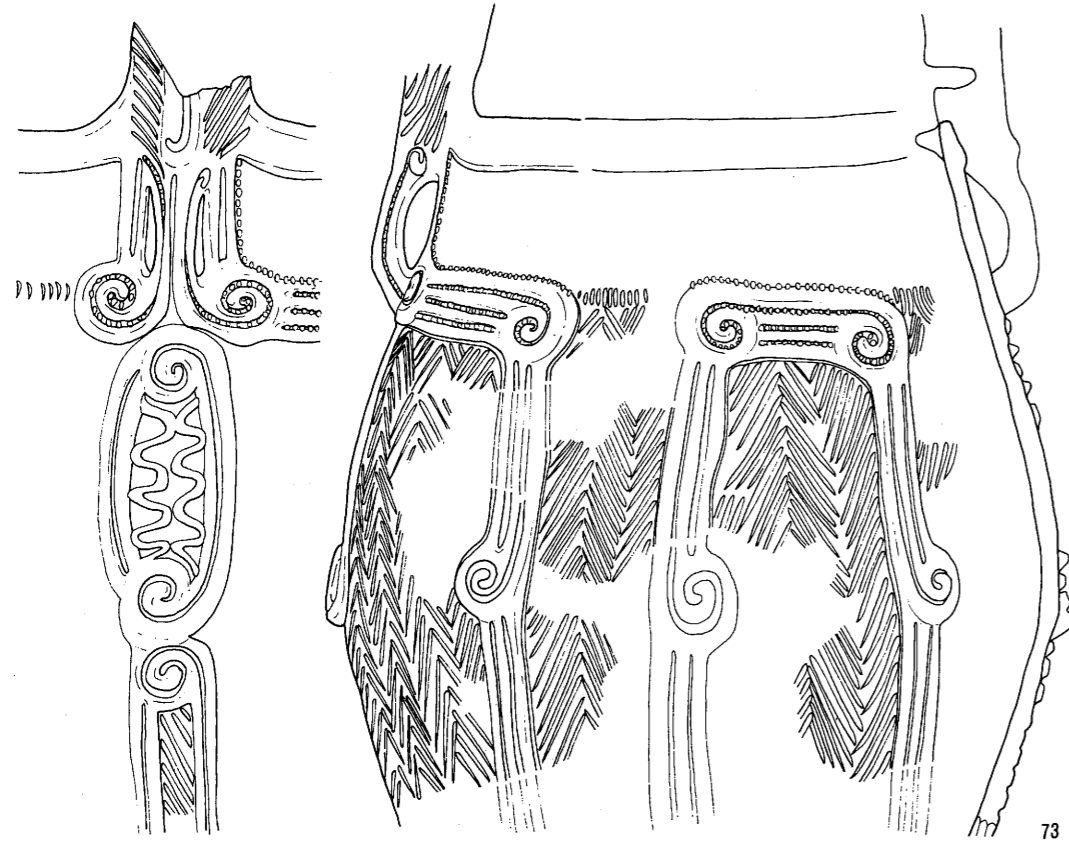


图 43 104 号住居址出土遺物実測図 1

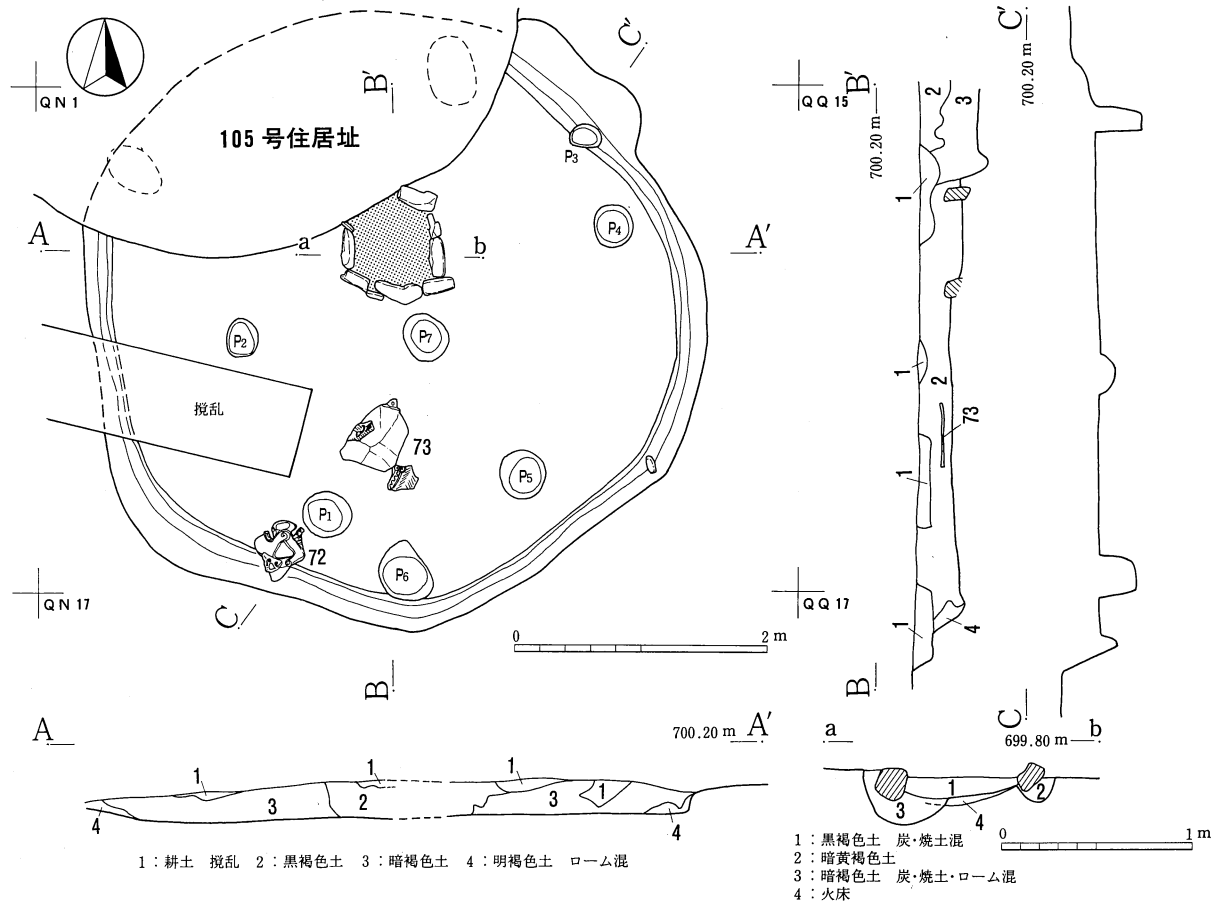


図44 104号住居址実測図

の5本に加えて105号住居址 P<sub>5</sub>と重複してもう1本あり、6本確認された。深さは最も浅い P<sub>1</sub>の26cmと最も深い P<sub>3</sub>の60cmとでは差が30cmを超える。その他の施設：ない。遺物の出土状況：遺物の量は少ない。復元できた土器は2個体のみで、2個体とも床面近くから出土している。このうち、吊り手土器は完形品で、壁上から落ちたかのように口縁を北に向けて横倒しの状態で南壁下から出土した。

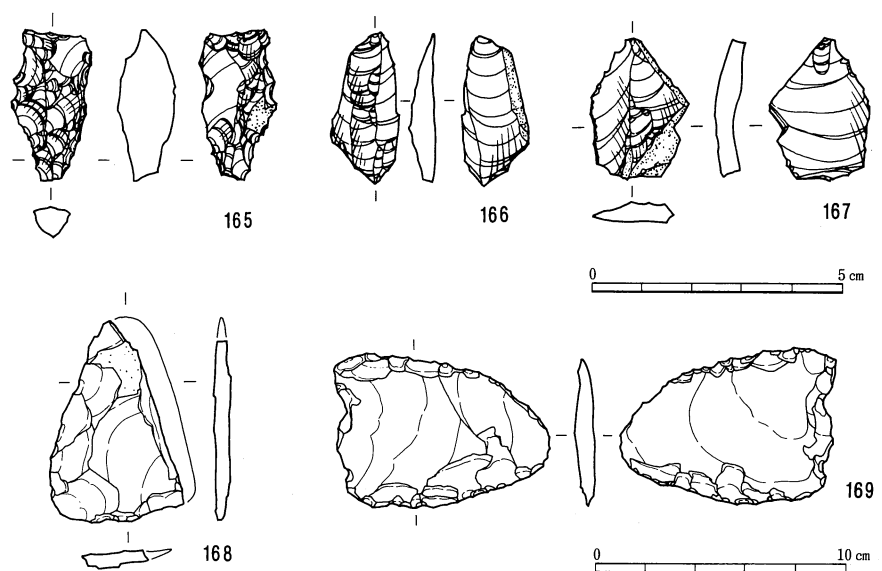


図45 104号住居址出土遺物実測図2

た。遺物：釣手土器(72)は、焼成前に2個一対の小孔が2箇所、ちょうど側面に設けられた窓の真下の互いに向かい合う位置に穿たれ、液体を入れることはできない。一方、吊手の部分は黒くすすけ、また、2次的な被熱のためにもろくなり、従来いわれているように内部で火を燃したことを窺わせる。石器は石錐(165)、ピエス・エスキュー(166)、小剝離痕のある剥片(167)が各1点のほか打製石斧4(168)などがある。

時期：中期後半II期。

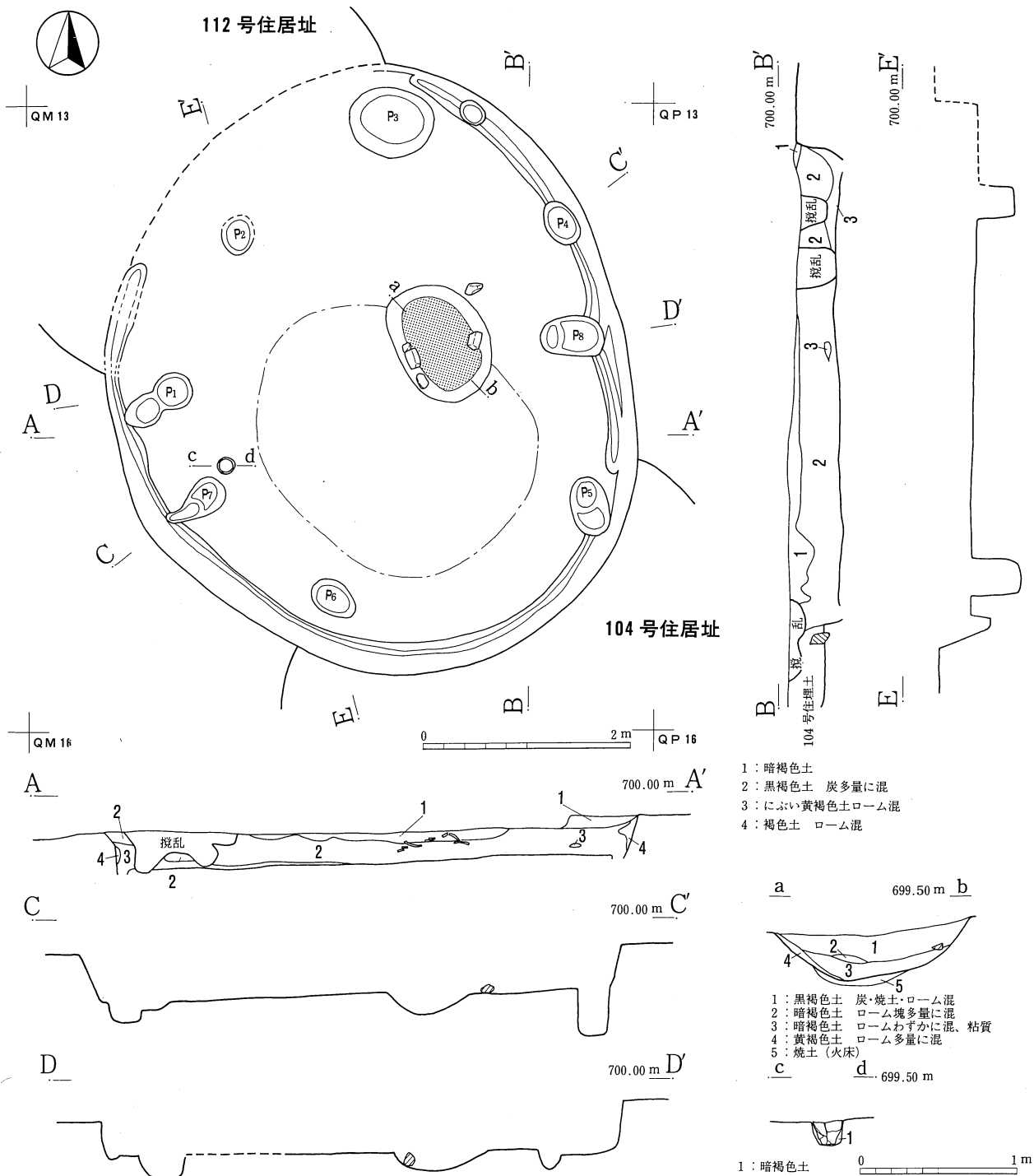


図46 105号住居址実測図

⑬ 105号住居址 (図46~51、PL73・74・81・82・86・91)

**検出：** 中調査区西部に位置し、南は104号住居址を、また東は110号住居址を切り、北は112号住居址が本址に貼り床して営まれる。**規模・形状：** 5.6m×5.0mの隅丸五角形プラン。主軸方向はN60°E。**埋土：** 3層に分層が可能で、おおむねレンズ状堆積とみることができる。なお、床面上に焼土、炭の分布が顕著に認められるもののその範囲は炉より南の直径2.5mの範囲内に限られ、本址が焼失家屋であることを示すものではない。**床面・壁：** 堅いロームの床は平坦で、やや西に傾斜する。壁は切り合いのない東壁で高さ50cmを測り、掘り込みが深い。壁下には周溝が巡り、北側では検出されなかったが全周していたものと思われる。**炉：** 中央やや奥壁に寄って設けられる。炉石は抜き取られてほとんど残らない。掘り形の規模

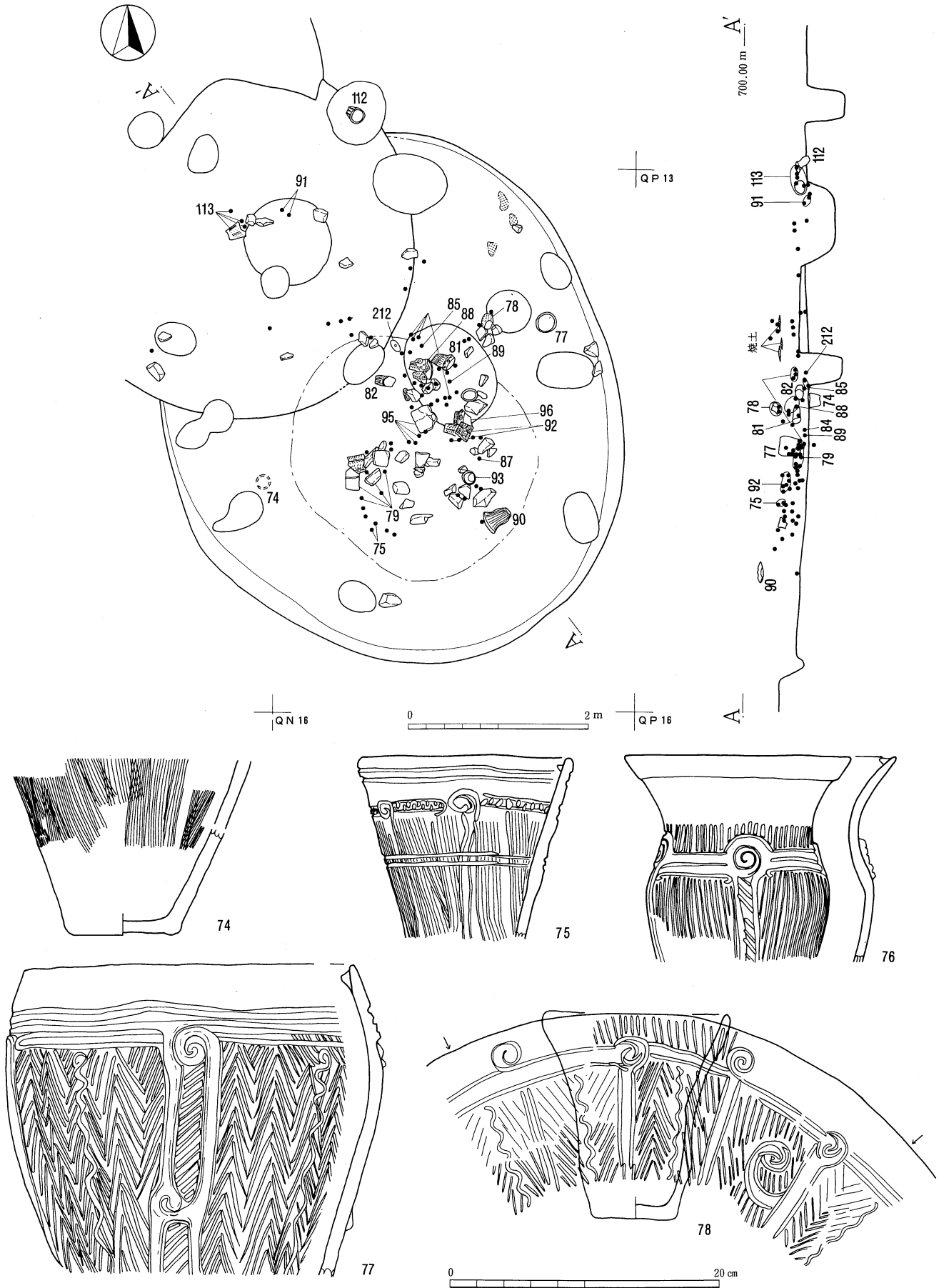


图 47 105・112 号住居址遺物出土状況図・105 号住居址出土遺物実測図 1

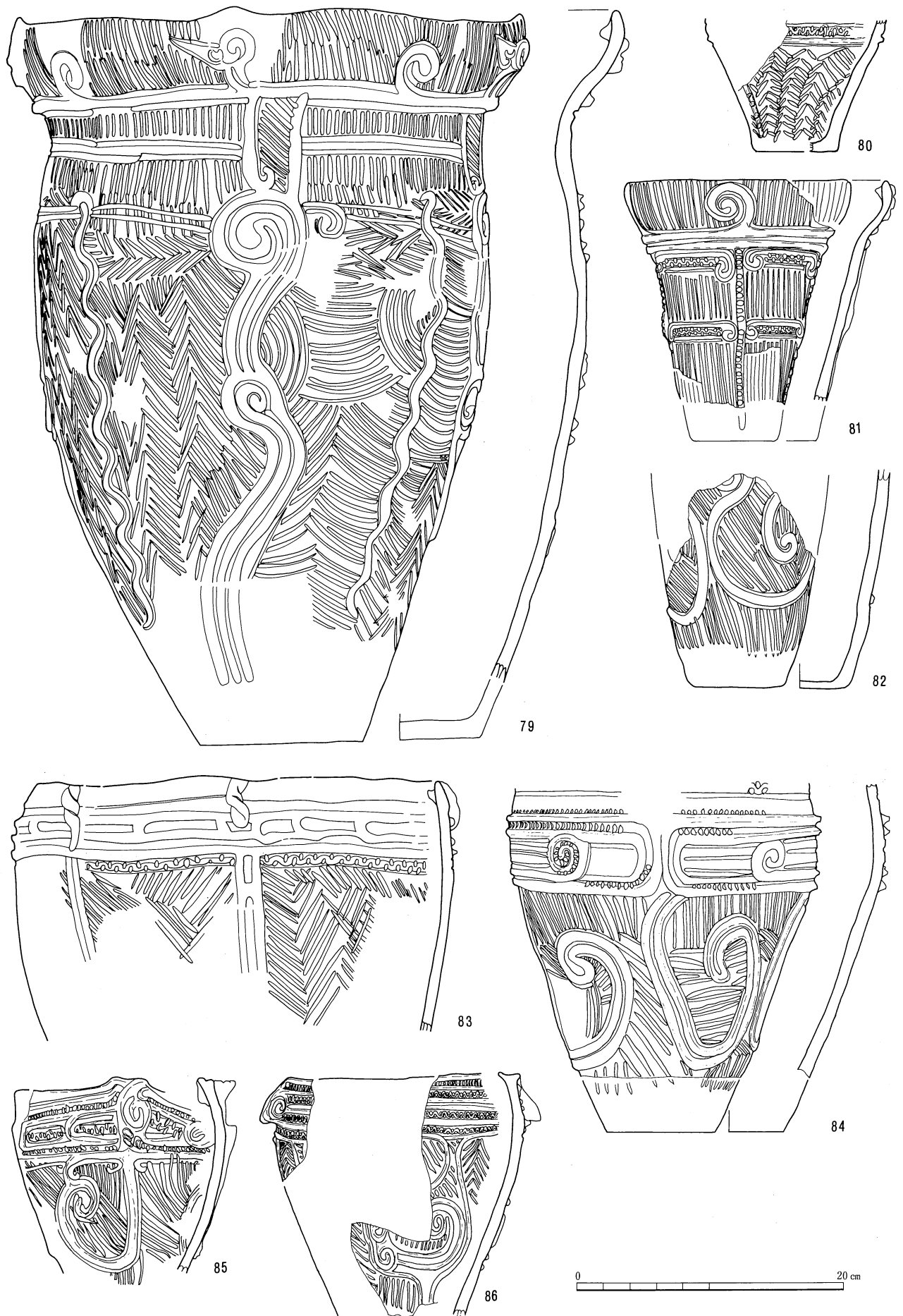


图48 105号住居址出土遺物実測図2

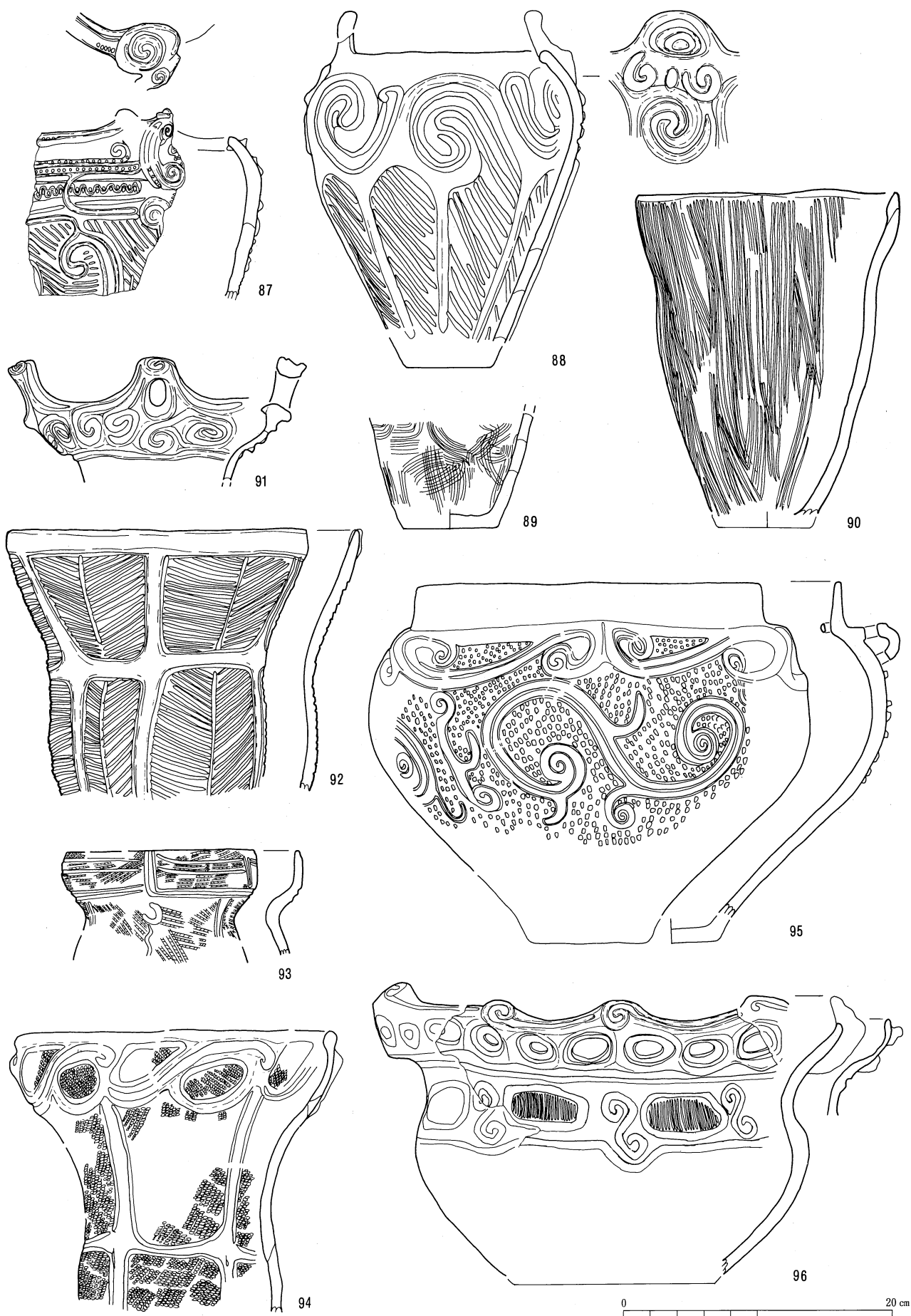


图 49 105 号住居址出土遺物実測图 3

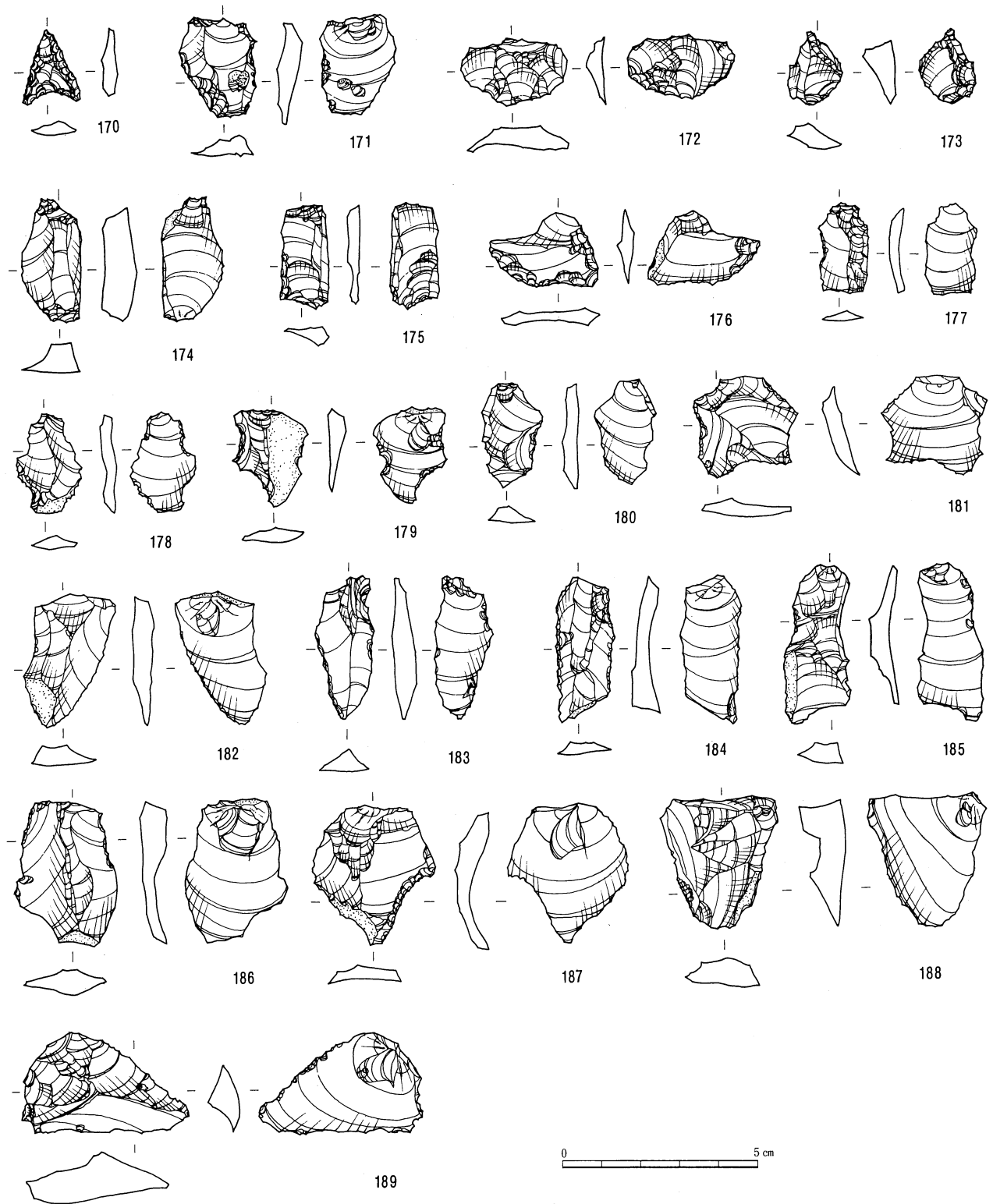


図50 105号住居址出土遺物実測図4

は1.2m×0.9m、深さ40cm。**柱穴**：床面から検出されたピットのうち主柱穴はP<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>～P<sub>6</sub>の4本とみられる。いずれも直径40cm前後、深さ20cm～45cmと他址に比べ小さくて浅い。その他、P<sub>1</sub>・P<sub>7</sub>は入口施設に伴うピットであろう。**その他の施設**：南西の壁から80cm内側に寄って埋甕が設けられ、胴部から上を欠いた深鉢が正位に埋設される(74)。**遺物の出土状況**：住居の中央付近から径20cmほどの礫に混じって完形、半完形の土器30個体以上が出土した。出土層位は炭を多量に含んだ埋土第2層であり、本址廃絶後に投棄されたものである。ただし、北東の床面に置かれた胴下部を欠く深鉢(77)は、本址伴うであろう。**遺**



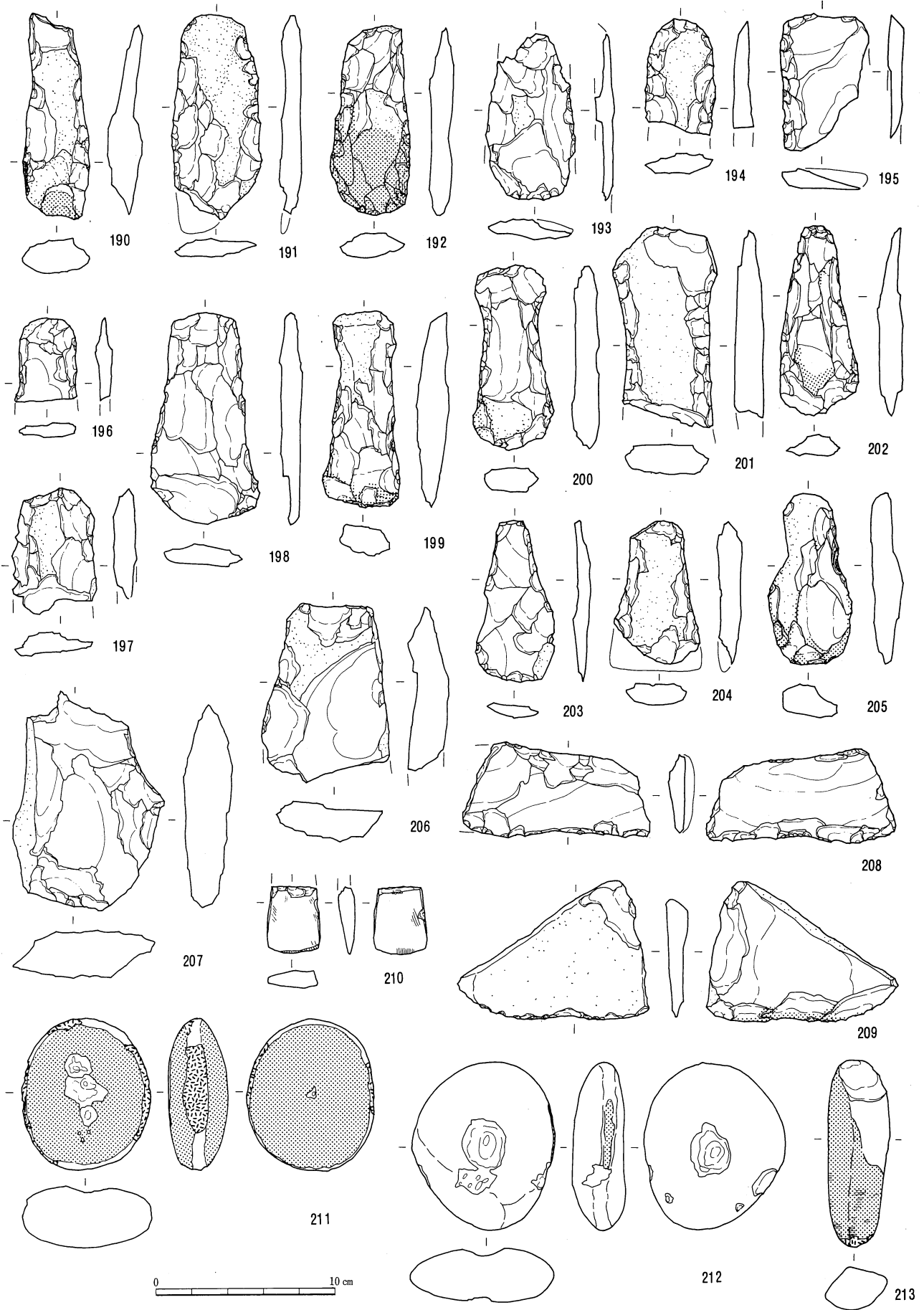


图 51 105 号住居址出土遺物実測图 5

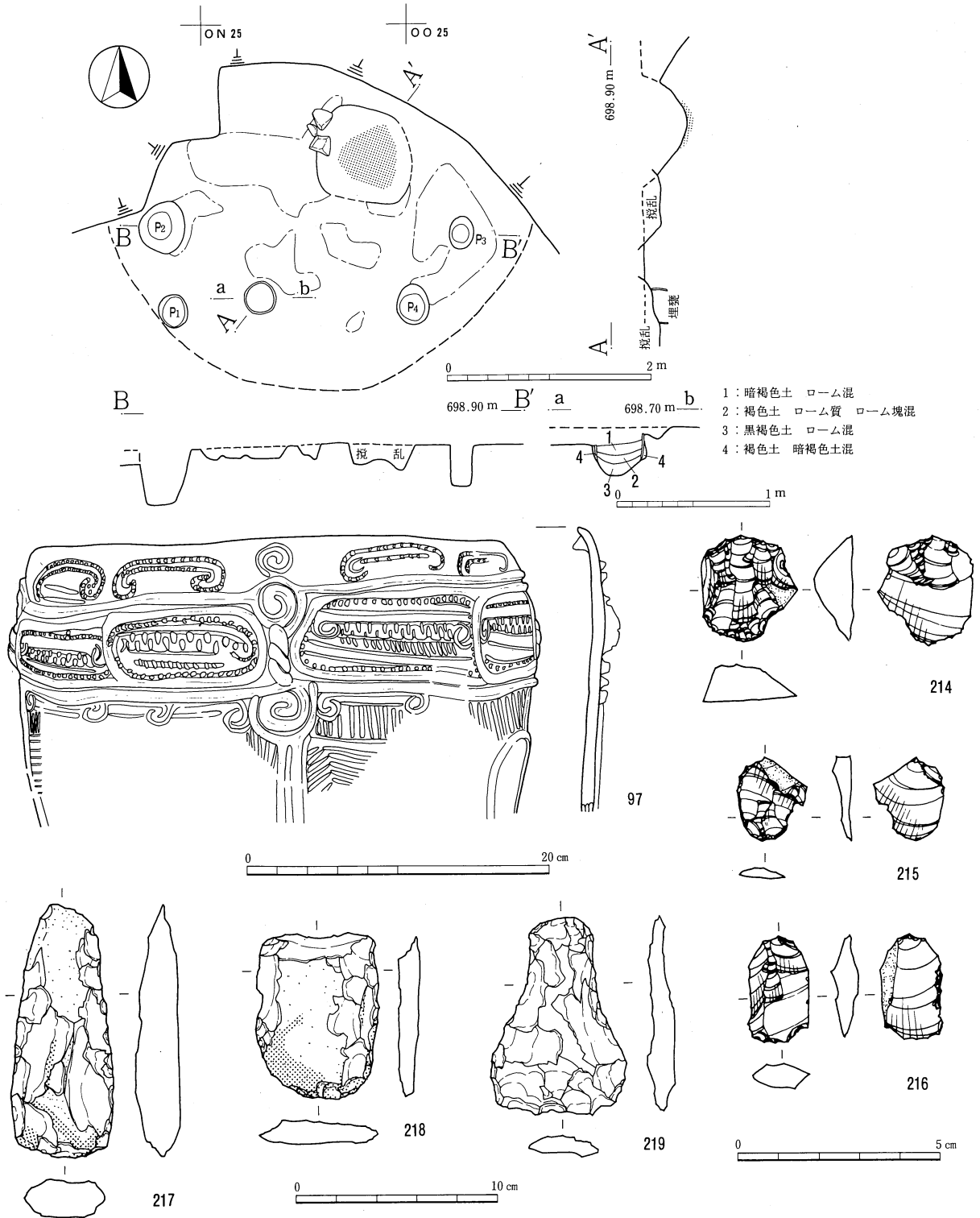


図 52 106号住居址実測図・出土遺物実測図

物：土器は深鉢が20個体以上(74~94)鉢3個体(95・96)がある。石器には石鏃1(170)、スクレイパー2(171・172)、ピエス・エスキーユ3(173~175)、小剥離痕のある剥片14(176~189)、打製石斧31(190~207)、横刃形石器2(208・209)、磨製石斧1(210)、磨石・凹石2(211・222)、敲石1(213)がある。時期：中期後半III。

⑨ 106号住居址 (図52、P L75・82・87・90)

検出：中調査区の北端に位置し、住宅跡に検出された本址は遺存状況が極めて悪く、炉、埋甕など一部が確認できたにすぎない。規模・形状：プランは推定5mの円形。主軸方向はN35°E。埋土：残存しな

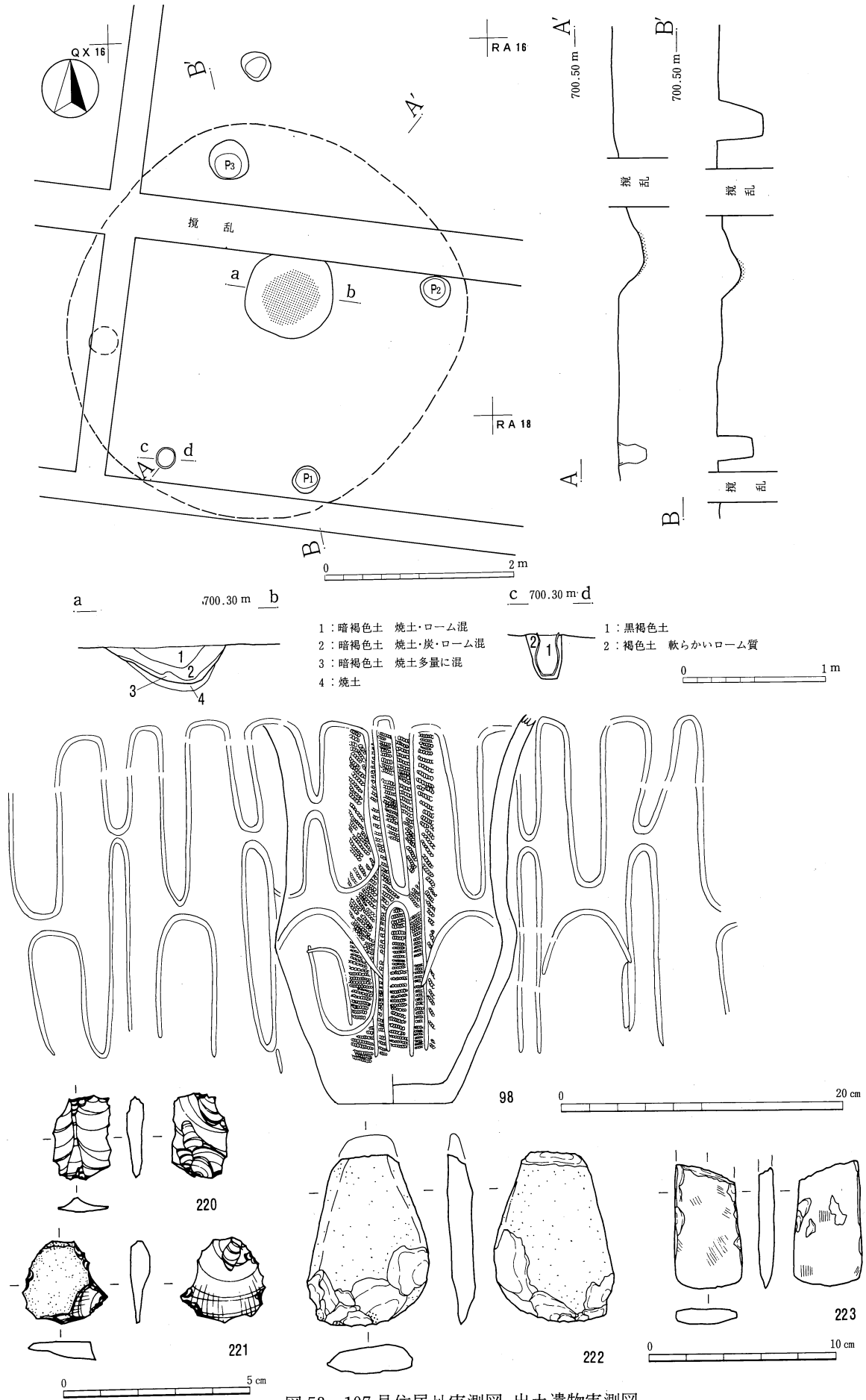


図53 107号住居址実測図・出土遺物実測図

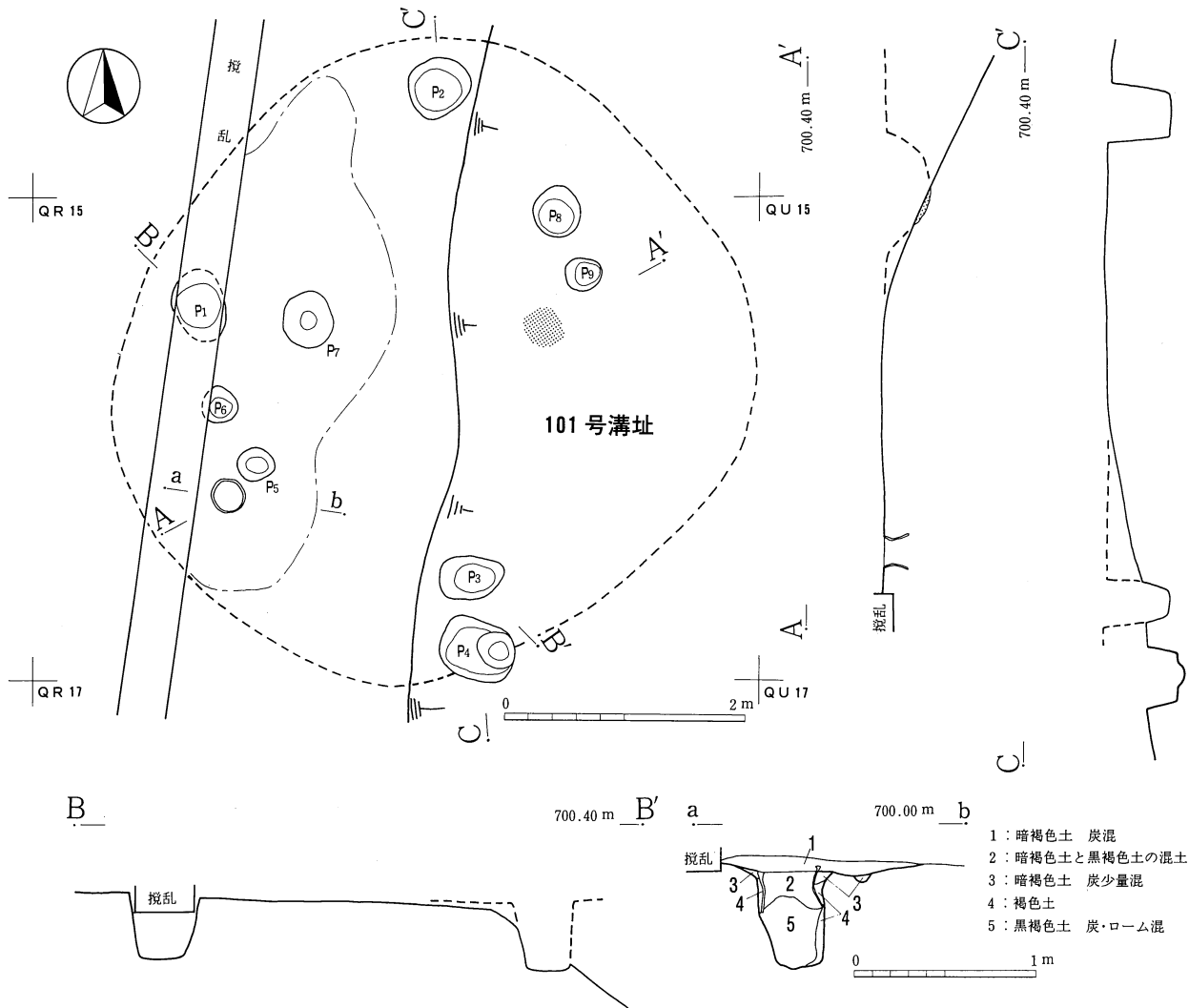


図54 108号住居址実測図

い。**床面・壁**：攪乱は床面まで及び、壁はまったく残らない。周溝も確認されていない。床は部分的に残存し、ロームが堅くしまる。**炉**：石は抜き取られて残らないが、石囲炉である。掘り形は一辺1mの方形に近いプランを呈し、深さ40cm。火床は厚い。**柱穴**：4本がある。深さは25cm～38cm。**その他の施設**：炉の南西に埋甕が設けられ、胴部下半を欠いた大形の深鉢が正位に埋設される。**遺物の出土状況**：埋設土器のほかは炉内及び攪乱層から少量出土したにとどまる。**遺物**：土器は埋設されていた深鉢1(97)がある。石器にはスクレイパー1(214)、小剥離痕のある剥片2(215・216)、打製石斧10(217～219)がある。**時期**：中期後半Ⅲ期。

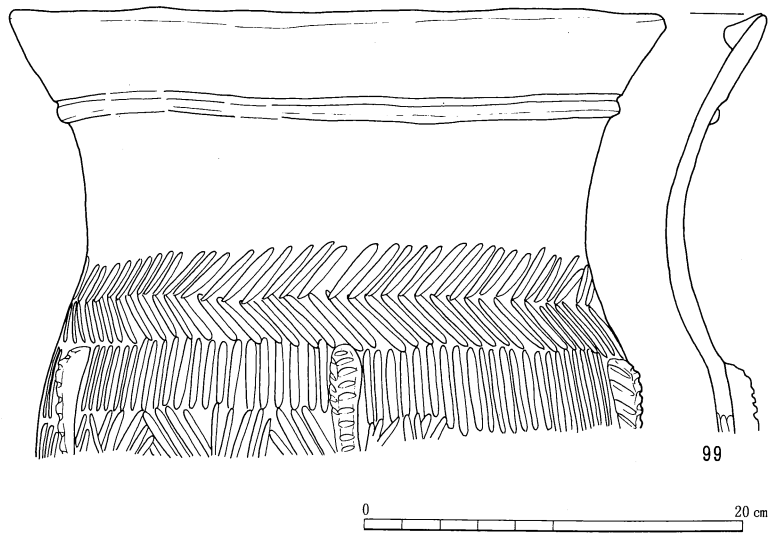


図55 108号住居址出土遺物実測図

㊦ 107号住居址 (図53、P L75・82・87・91)

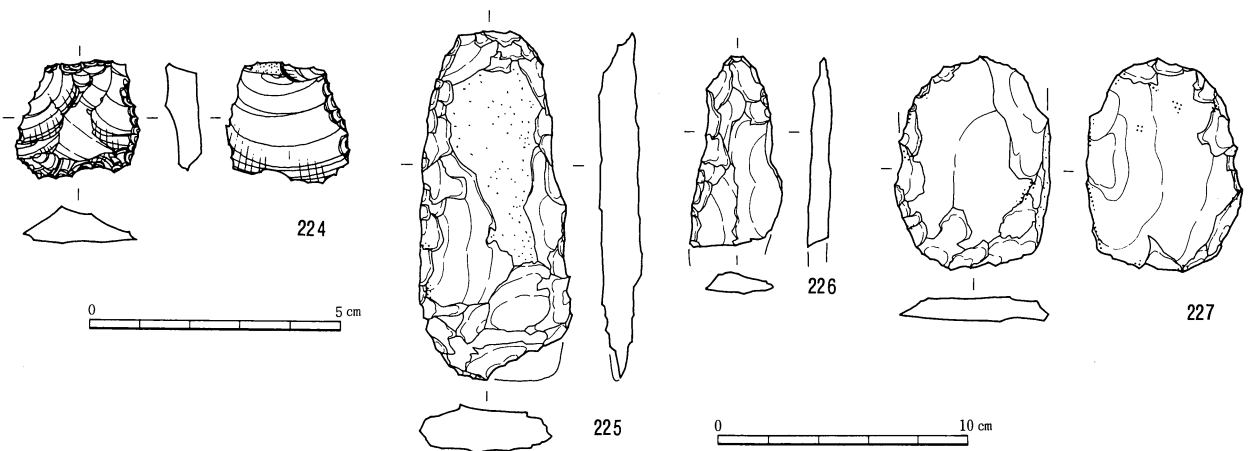
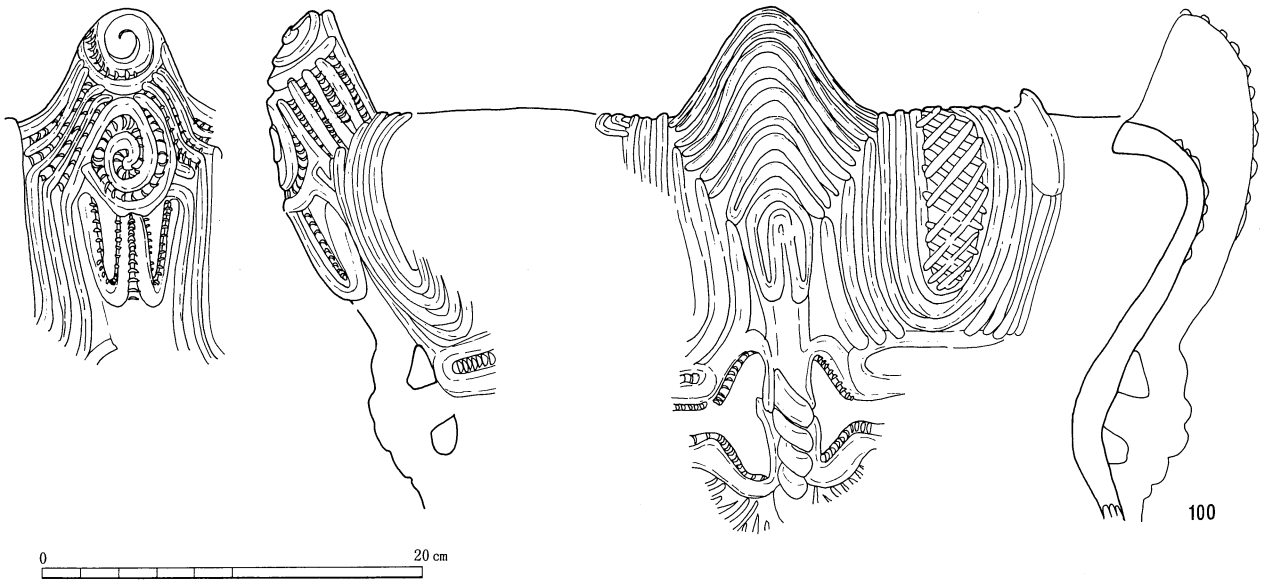
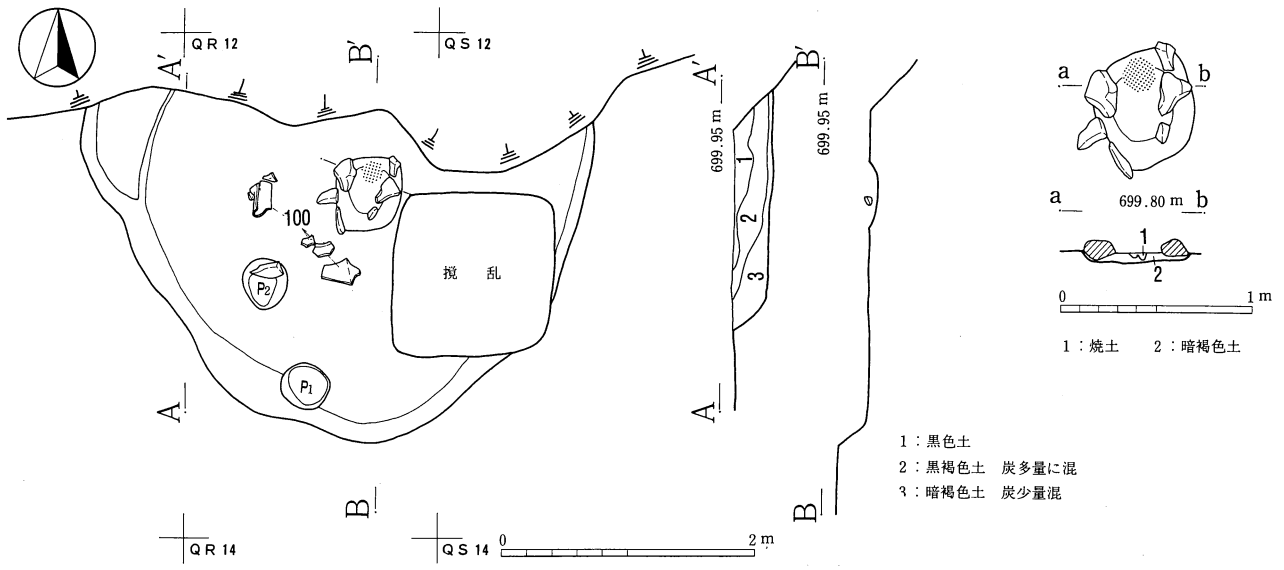


図 56 109号住居址実測図・出土遺物実測図

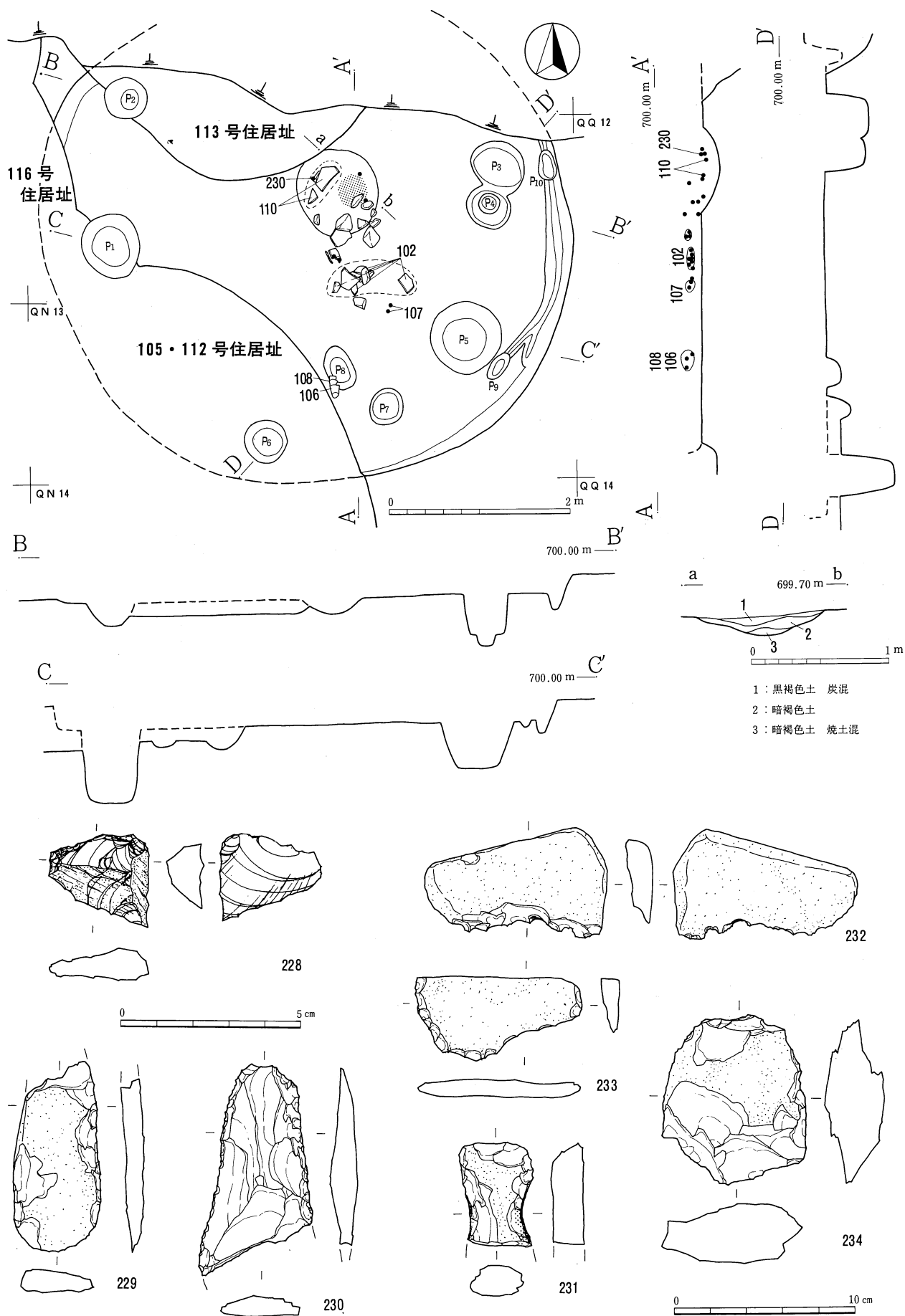


图 57 110 号住居址实测图·遺物出土状况图·出土遺物实测图 1

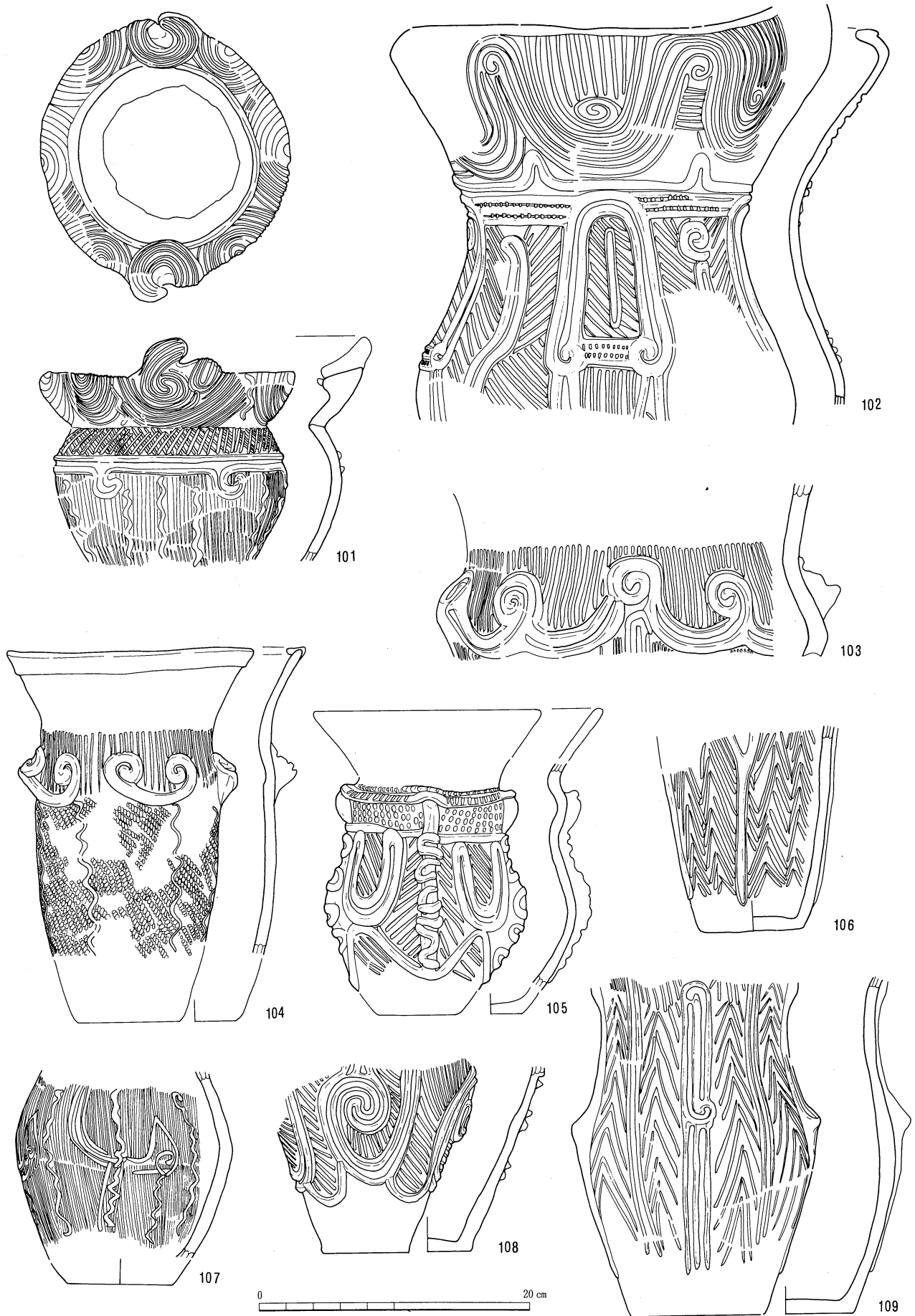


图 58 110 号住居址出土遺物実測图 2

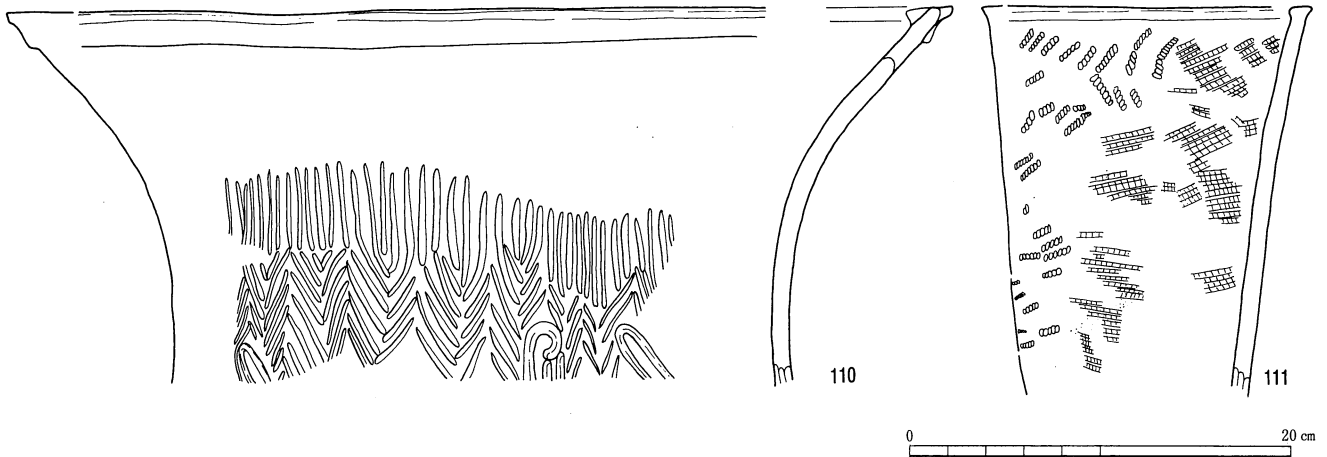


図59 110号住居址出土遺物実測図3

**検出：**中調査区の工場跡に検出されたが、工場建設以前の耕作による攪乱が床面まで及び、プランは捉えられなかった。**規模・形状：**柱穴の位置からプランは径約4.5mの円形と推定される。主軸方向はN35°E。**埋土：**残存しない。**床面・壁：**ともに残存しない。周溝も見られない。**炉：**中央やや奥寄りに石囲炉が設けられる。ただし、炉石は抜き取られている。掘り形は径90cmの隅丸方形。**柱穴：**主柱穴は、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>の3本に工場基礎の下になった1本を加え、4本である。現存する3本の深さは30cm～48cmを測る。**その他の施設：**埋甕が住居の南西に設けられ、口縁部をわずかに欠いた深鉢が正位に埋設される。**遺物の出土状況：**埋設土器以外には若干の小破片が検出面で出土した程度である。**遺物：**土器は埋設されていた深鉢(98)1点しかない。石器はピエス・エスキュー1(220)、小剥離痕のある剥片1(221)、打製石斧2(222)、磨製石斧1(223)がある。**時期：**中期後半IV期。

② 108号住居址 (図54・55、P L75・82・87)

**検出状況：**中調査区の工場跡に検出された。東側を弥生時代の101号溝址に切られ、また、耕作や工場の基礎工事によっても攪乱され、プランは把握できない。南西方向に102号住居址が近接している。**規模・形状：**直径6m前後の円形プランと推定される。主軸方向はN60°E。**埋土：**炭を含んだ暗褐色土であるが、床面上に部分的に薄く残る程度のため、埋没状況はわからない。**床面・壁：**床面はほとんど残らないが、埋甕の周辺は少し低くなっており、堅い面が残る。壁は残存しない。**炉：**101号溝址の西壁に火床があり、位置からみて本址の炉と判断したが、詳細は不明。**柱穴：**検出された中でP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>が主柱穴であろう。深さは45cm～60cmと深い。**その他の施設：**南西方向に胴下部を欠いた大形の深鉢(99)を正位に埋設した埋甕が設けられる。興味深いのはその掘り形で、深さが55cmと埋設土器残存高の2倍もある。**遺物の出土状況：**埋設土器以外に出土していない。**遺物：**深鉢1点(99)のほかは、土器も石器も出土していない。**時期：**中期後半II期。

② 109号住居址 (図56、P L87・91)

**検出：**中調査区の中央部に位置し、宅地造成により北部を削平されるほか南東部にも攪乱を受けている。**規模・形状：**径約3.6mの円形プランと推定される。主軸方向不明。**埋土：**厚さ30cmを測り、3層に分層が可能で、自然埋没とみられる。**床面・壁：**ローム掘り込み面を床面としているが、堅く締まった面はみられない。壁はなだらかに立ち上がり、高さ20cm。周溝は設けられない。**炉：**規模60cm×50cmの方形石囲炉で、床面と火床のレベル差はほとんどない。**柱穴：**確認できたのはP<sub>1</sub>のみで、その深さは60cm。**その他の施設：**ない。**遺物の出土状況：**出土量は少なく、床面より10cm程浮いて同一個体の大形破片が出土したにとどまる。**遺物：**深鉢1(100)は唯一の図示可能な土器である。このほか小剥離痕のある剥片1(224)、打製石斧3(225～227)がある。**時期：**中期後半I期。



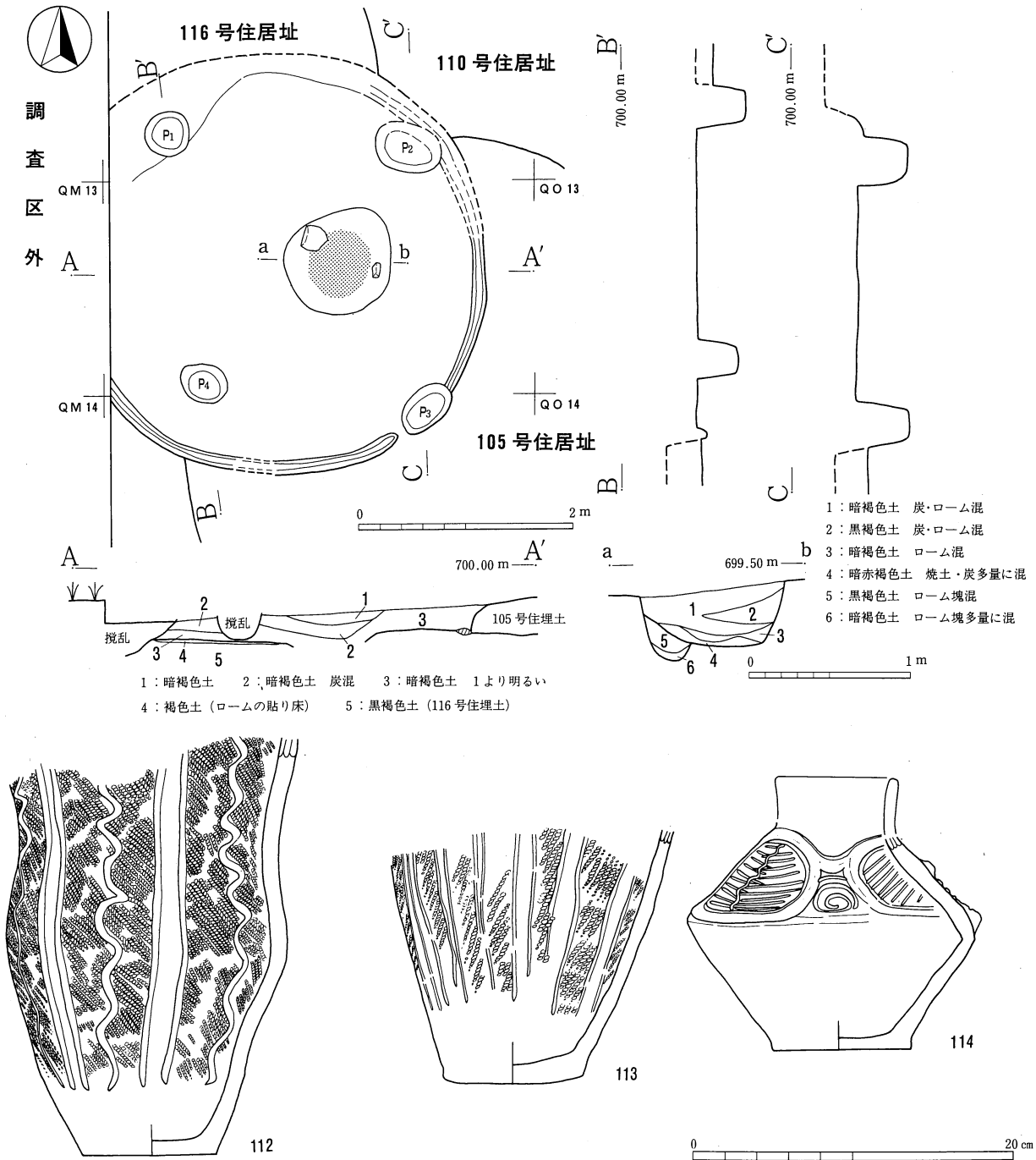


図 60 112号住居址実測図・出土遺物実測図 1

㊸ 110号住居址 (図57~59, P L73・74・83・91)

**検出:** 中調査区の中央部に位置する。105・112・113・116号住居址に切られるほか、宅地造成によって北部を失う。**規模・形状:** 径6.0mの円形プランで、主軸方向N40°Eと推定される。**埋土:** 厚さ20cmで、単層。自然埋没であろう。**床面・壁:** 床面は平坦で、炉に向かってわずかに傾斜する。堅さはみられない。壁の立ち上がりは急で、高さ25cm。東の壁下にもみ周溝が設けられる。**炉:** 中央やや北東寄りつくられ、石囲炉と思われるが、石は抜き取られて1.0m×0.9mの楕円形の掘り形が残る。**柱穴:** 床面からの深さが50cmをこえるP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が支柱穴とみられ、その位置から6本柱タイプと推測される。**その他の施設:** ない。**遺物の出土状況:** 床面上に礫と大形の土器片が散乱していた。土器は埋土中のものも含めて接合した結果12個体が復元できたものの完形品はなく、住居廃絶後に投棄されたと考えられる。**遺物:** 深鉢

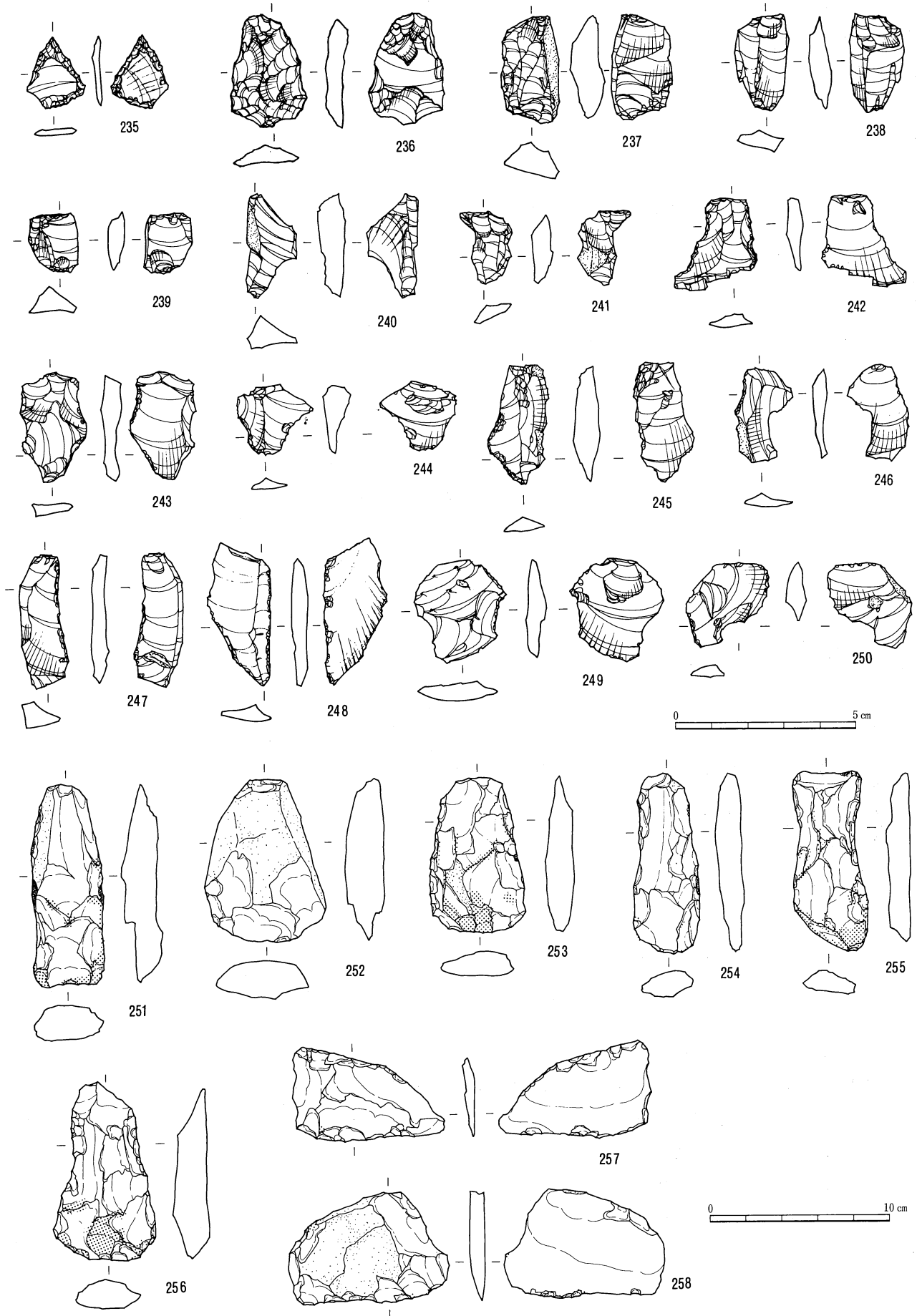


图 61 112 号住居址出土遺物実測図 2

11(101~111)がある。石器は小剥離痕のある剥片1(228)、打製石斧10(229~231)、横刃形石器2(232~233)などがある。**時期**：中期後半II期。

㊸ 112号住居址 (図60・61、P L73・87・91)

**検出**：中調査区中央部西側の住居址集中域に位置し、110号住居址を切り、105・116号住居址に貼り床していることから、重複関係にある7軒の中では最も新しい。**規模・形状**：貼り床の範囲から、径4m程の円形プランで、主軸方向はN90°Eと推定される。**埋土**：2層に分層でき、レンズ状堆積を示すことから自然埋没とみられる。**床面・壁**：床は105・116号住居址埋土の掘り込み面に厚さ3cm程ロームを貼ってつくられ、堅い。壁は埋土の断面観察で高さ20cmを測る。東から南にかけて周溝が巡る。北側にも設けられていたと思われる。**炉**：中央やや東寄りに設けられる。石囲炉であるが、石は抜き取られて径90cmの円形の掘り形だけが残る。**柱穴**：4本が床面で検出された。東側、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は周溝と重なり、入口に当たる西側のP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>は内寄りに配置される。**その他の施設**：ない。**遺物の出土状況**：礫数個とともに半完形土器及び石器が床面から浮いて出土した。住居廃絶後の廃棄遺物であろう。**遺物**：土器は深鉢2(112・113)、壺1(114)と少ないが、石器は多く、石鏃2(235・236)、ピエス・エスキュー5(237~241)、小剥離痕のある剥片9(242~250)、打製石斧11(251~256)、横刃形石器2(257・258)がある。**時期**：中期後半III期。

㊹ 113号住居址 (図62・63、P L73・74・83・87)

**検出**：110号住居址を切ってその北に構築され、宅地造成のため北側の大部分を失う。**規模・形状**：プランも規模も不明。埋甕から主軸方向はNと推定される。**埋土**：厚さ30cmで単層。**床面・壁**：ローム掘り込み面を床とし、堅く締まる。壁は高さ20cm。**炉**：残存しない。**柱穴**：残存しない。**その他の施設**：2基の埋甕が設けられている。壁に近い1号は完形の深鉢(115)を正位に埋め、2号は深い掘り形の中位に大形破片(117)を敷き、その上に完形の深鉢(116)をやはり正位に埋めている。両者の新旧関係はつかめていないが、他址の例からすれば外側に位置する方が新しい。**遺物の出土状況**：埋土中からごく少量の土器片が出土したのみで、遺物量は少ない。**遺物**：図示可能な土器は、埋設されていた3個の深鉢(115~117)のみである。石器は石鏃1(259)、小剥離痕のある剥片2(260・261)、打製石斧2(262)がある。**時期**：中期後半III期。

㊺ 114号住居址 (図64、P L84・87・91)

**検出**：中調査区中央部の西端に位置し、北は宅地造成によって削平され、西は調査区外にかかる。116号住居址を切る。**規模・形状**：不明。**埋土**：ロームブロックを多量に含む単層で、人為的に埋め戻された

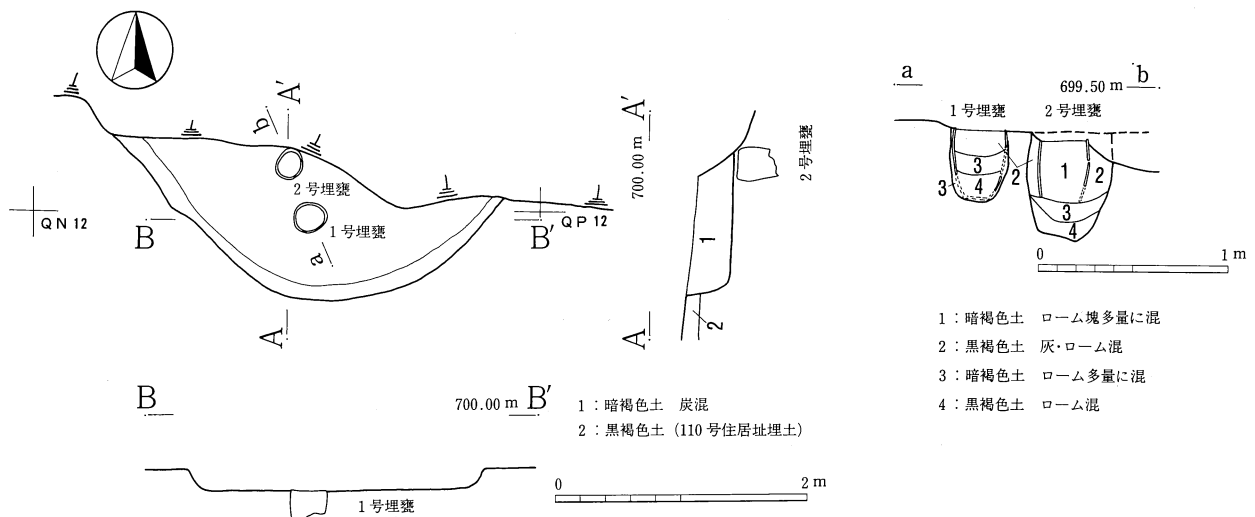


図62 113号住居址実測図

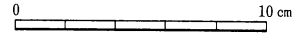
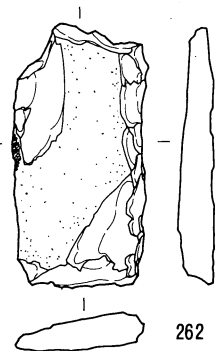
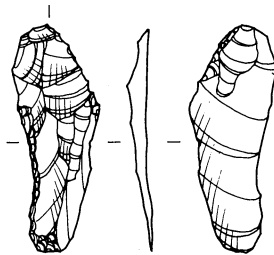
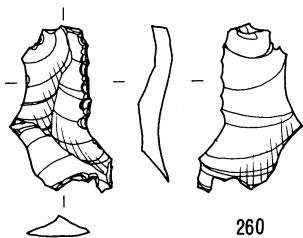
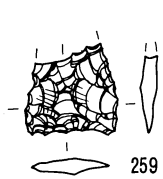
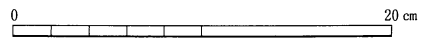
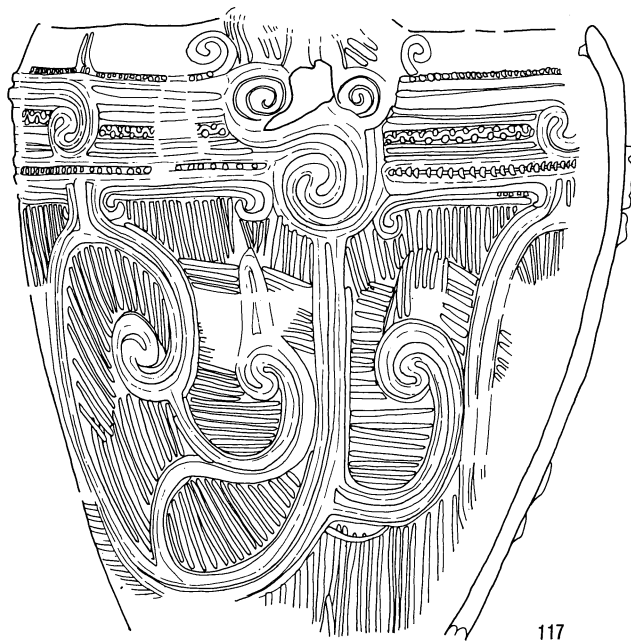
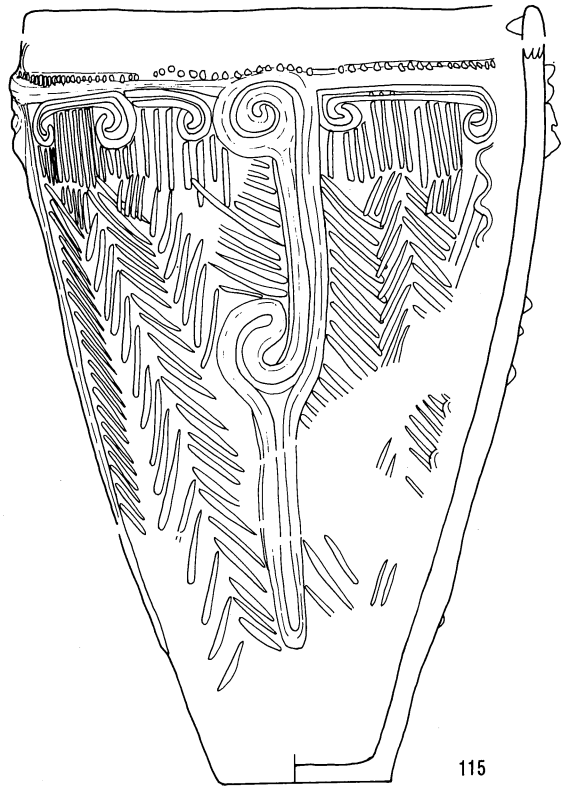


图 63 113号住居址出土遺物実測図

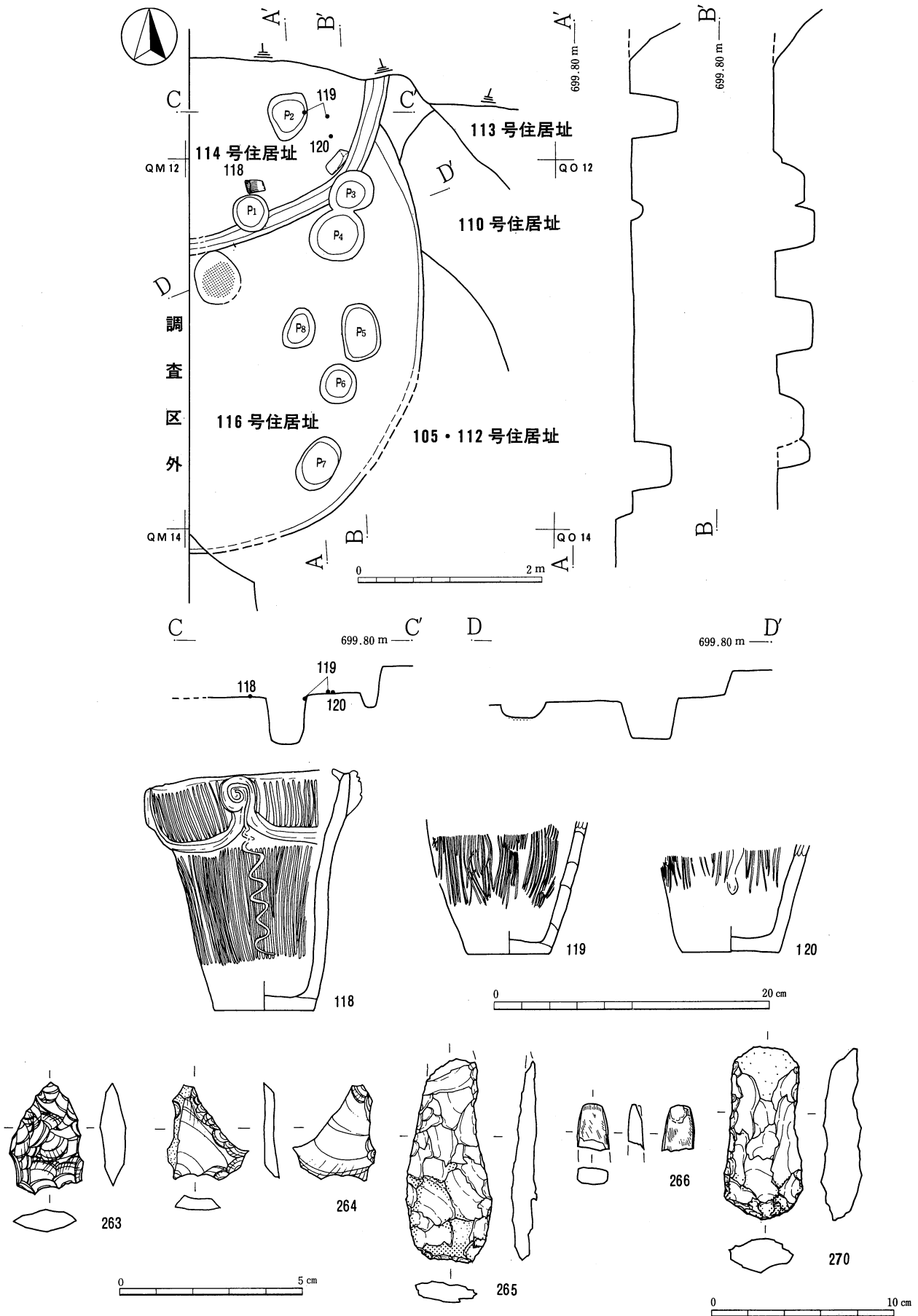


图 64 114·116 号住居址实测图·出土遗物实测图

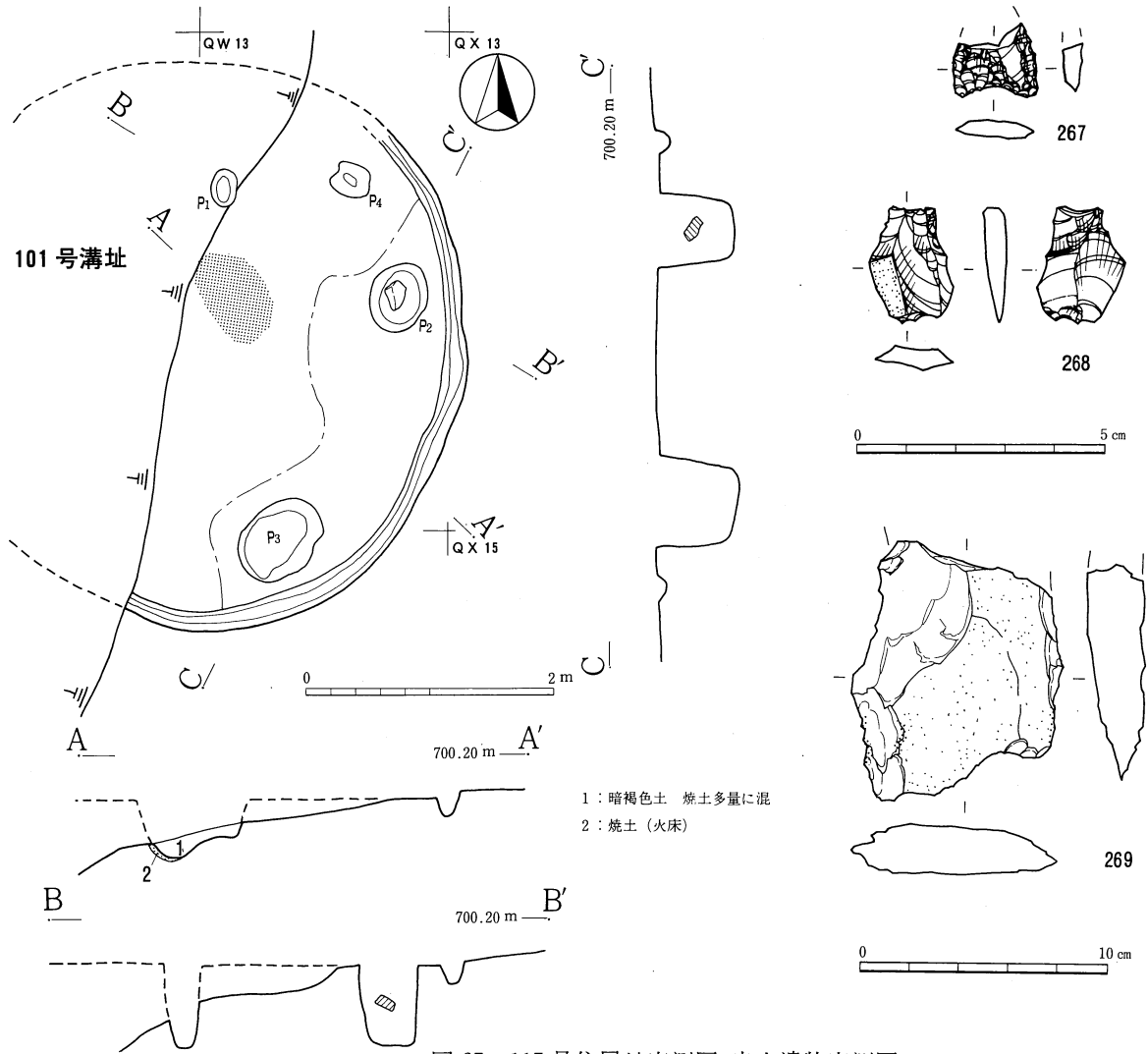


図 65 115号住居址実測図・出土遺物実測図

可能性がある。**床面・壁**：ローム掘り込み面を床とし、敲き締められたように堅い。壁は東側でわずかに残存し、高さ30cm、立ち上がりは垂直に近い。壁下には幅20cm、深さ10cmの周溝が設けられる。**炉**：削平されて残らない。**柱穴**：1本が検出された。P<sub>1</sub>で、深さは48cm。**その他の施設**：ない。**遺物の出土状況**：床面から完形を含む3個体の土器が出土している。埋土中からも出土したが、小さな破片ばかりで復元できない。**遺物**：土器はいずれも小形の深鉢である(118~120)。石器は石鏃(263)、小剥離痕のある剥片(264)、打製石斧(265)、磨製石斧(266)各1点がある。**時期**：中期後半Ⅲ期。

㊦ 115号住居址 (図65、P L 75・87)

**検出**：中調査区に位置し、弥生時代の101号溝址に切られて西側が残存しない。南東に107号、南西に108号住居址が近接する。**規模・形状**：径約5mの円形プランで、主軸方向はN40°Eと推定される。**埋土**：残らない。**床面・壁**：壁は残存しないが、周溝と堅く締まった床が東側に残る。**炉**：中央やや北東寄りに設けられる。石は残っていないが石囲炉と推測され、掘り形は80cm×50cmを測る。**柱穴**：P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>に加えP<sub>1</sub>も支柱穴であろう。**その他の施設**：ない。**遺物の出土状況**：炉及びピットから少量が出土した。**遺物**：土器は小片ばかりで、図示できるものはない。石器には石鏃1(267)、小剥離痕のある剥片1(268)、打製石斧2(269)がある。**時期**：中期後半。

㊧ 116号住居址 (図64、P L 73・91)

**検出**：中調査区の住居址集中域に位置し、西側が調査区外にかかる。112号住居址の貼り床下に床面が

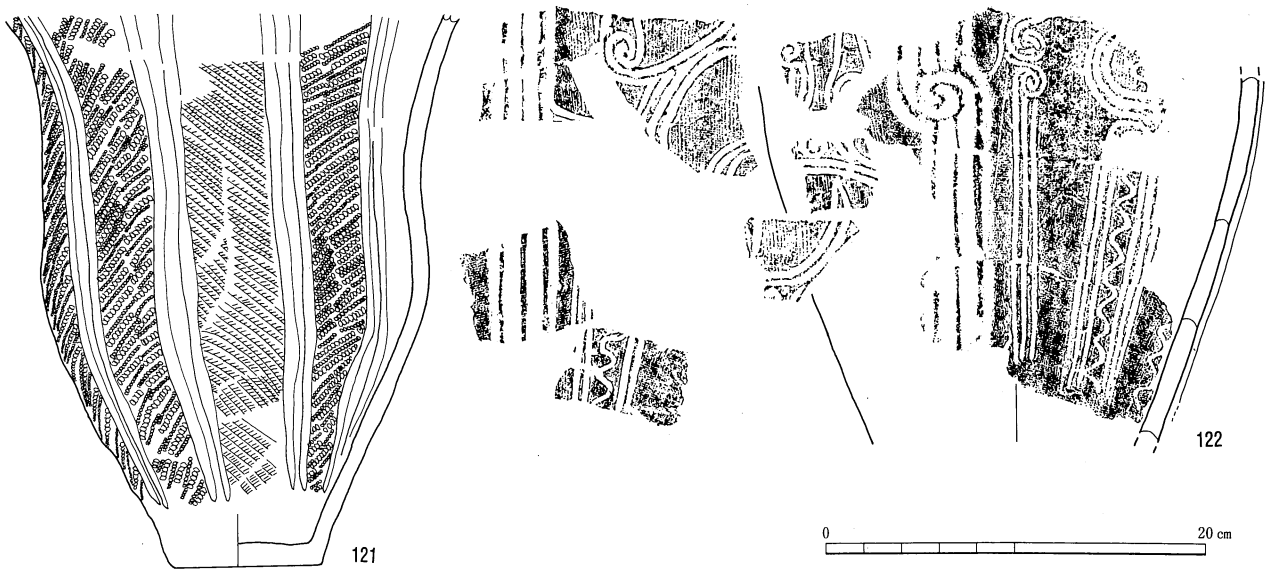


図66 屋外埋設遺物実測図・拓影(1:4)

検出された本址は、105・110号住居址を切り、112・114号住居址に切られる。規模・形状：5.2m×5.0mの楕円形プランと推定される。主軸方向は不明。埋土：単層で厚さは14cm。床面・壁：ローム削平面を床としており、締まって堅い。南側は荒れて凹凸があるが、112号住居址構築の際に攪乱を受けたのであろう。壁高は北東部で30cm。炉：石は抜き取られ、径50cmの円形の掘り形だけが残る。火床はよく焼けて赤い。柱穴：東壁に沿って5本、114号住居址床面に1本があるが、切り合いの激しいことを考えると、すべてが本址のものではないと思われる。その他の施設：ない。遺物の出土状況：112号住居址の貼り床下に少量出土した。遺物：土器はすべて小破片で図示できるものはない。石器も少なく、石錐1、打製石斧1(270)、凹石1の3点だけである。時期：中期後半。

## イ 屋外埋甕 (図66、PL84)

## ① 1号屋外埋甕

南調査区のTX21グリッドに検出。検出面は耕土直下のローム層上面である。埋甕の南方約1mの位置に焼土を伴った10号土壙があり、これを炉と仮定して住居址の可能性も検討したが、柱穴が確認できなかったことから単独遺構とした。正位に埋設された土器は付加縄文を施した加曾利E系の深鉢であるが、縦位区画の1箇所のみ無節縄文を施し、正面性を意識した構成をとっている(121)。口縁部は耕作による攪乱を受けており、本来の姿はわからない。

## ② 2号屋外埋甕

北調査区のOF10グリッドに検出。耕作による攪乱のため遺存状況は悪いが、残存部分から正位埋設とみられる。土器は条線文を地文とし、沈線で渦巻文を表出した深鉢である(122)。

## ウ 土壙 (図67~72、表1・2、PL76・84)

南調査区25基、北調査区5基、中調査区6基が検出された。これらの土壙は台地の縁辺寄りに分布し、おおむね円形プランで垂直な掘り込みをもつ。遺物の出土量や出土状況には差があり、特に出土量の多かった土壙として5・11・13・14・44・101号が、また、明らかに遺物を埋納したと判断される土壙に29・38号がある。ここでは、それらのうち代表的なものについて取り上げる。

## ① 2号土壙

南調査区の南端で検出。周辺に1・3号土壙がある。径およそ1m、深さ20cmで、埋土は炭混じり暗褐色土の単層。壙底に径20cm、深さ20cmの小ピットをもち、陥穴の可能性もある。出土土器は中期後半V期

に比定される(134)。

② 5号土壇

南調査区で検出。5号住居址と8号住居址の中間に位置し、周辺には4・6・24～27号土壇が2m～4mの距離をおいて散在している。径1.9m×1.7mのほぼ円形を呈し、壁は垂直に立ち上がり、その高さ80cmを測る。埋土は5層からなり、その堆積状況から自然埋没と考えられる。1層から4層は腐植質土、5層はローム質土層であり、1層～4層から土器、石器が多量に出土している。土器は破片ばかりで、4個体が復元できたものの接合しない破片も多く、大小の自然礫に混じって出土したことから投げ込まれたものと考えられる(123～125・136～138)。

③ 9号土壇

南調査区に位置し、弥生時代の1号溝址に大半を切られている。推定径1.1m、深さ35cm。埋土は2層に分けられ、ロームブロックを含まないことから自然埋没とみられる。中期後半V期に比定される無文の大形深鉢1個体が破片で出土している。

④ 10号土壇

南調査区に位置し、弥生時代の1号溝址に切られる。径1.2m、深さ70cm。埋土中に焼土が多量に含まれ、壇底も焼けていて炉の可能性はある。遺物は土器と石器があり、焼土に混じって出土した状況から見て、投げ込まれたものと思われる。土器は、中期後半のIV～V期に比定される。石器は石鏃1、ピエス・エスキーユ2、小剥離痕のある剥片1のほか黒曜石剥片26がある。

⑤ 11号土壇

南調査区南部に位置し、弥生時代の4号住居址および1号溝址に切られる。1.6m×(1.2)mの隅丸長方形プランで、深さ30cm。埋土は黒褐色土の単層。遺物は中期後半III～IV期に比定される土器片が80点ほど出土したが、いずれも小片である(139・140)。石器には使用痕のある剥片2がある。

⑥ 13号土壇

南調査区に位置する。ちょうど17号住居址の入口部に当たり、弥生時代の15号住居址に削られている。平面形は1.5m×(1.5)mの不整な隅丸方形、断面形はフラスコ状を呈し深さ55cm。埋土は単層で、人頭大の礫数個と土器片を含む(141)。土器は中期後半。

⑦ 14号土壇

南調査区に位置する。径1.2m、深さ90cmの円形土壇で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色土の単層で、壇底から20cm浮いて厚さ15cmの焼土層が挟まれる。人頭大までの礫に混じって土器片が多量に出土したが、器形の復元できるものはなく、投げ込み遺物であろう(127・128・142)。石器ではピエス・エスキーユ1、小剥離痕のある剥片3、打製石斧1などがある。土器は中期後半V期に比定される。

⑧ 16号土壇

南調査区北部に位置し、隣接する15号土壇と共に弥生時代の16号住居址に切られている。径1.4m×1.2mの楕円形プランを呈し、深さは75cm。埋土は単層で、中期後半III期に比定される土器大形破片1(129)、ピエス・エスキーユ2などが出土している。なお、129は輪積みのつなぎ目で割れているが、割れ口は角を落とし丸く滑らかに仕上げている。同様な再加工は123にもみられる。

⑨ 29号土壇

南調査区に位置し、弥生時代の11・13号住居址に切られる。1.4m×0.9mの楕円形プランを呈し、壁の高さは北東側で45cm、13号住居址に切られる南側では25cmを測る。壇底は堅くて平坦。埋土は、混入するロームの量に微妙な差はあるが、暗褐色土の単層と捉えられる。注目すべきは壇底から5個のヒスイ製垂



遺跡名	遺構名	遺構規模(長×幅×深)	平面形	断面形	硬玉製大珠の大きさ(長×幅×厚)等	伴出遺物	時期
塩尻市上木戸	29号土壙	140×90×60cm	隅丸長方形	桶状	ヒスイ 3.0×1.9×1.2cm単孔 " 3.7×2.2×1.1 " " 4.6×2.5×1.1 " " 5.1×1.6×1.3 " " 5.2×2.7×1.3 "	小剥離痕のある剥片1	中期後半 (III~IV)
塩尻市柿沢東	S 3	95×90×40	円形		ヒスイ 5.5×2.5×2.0単孔		中期後半
岡谷市梨久保	257号小竪穴	137×100×66	長楕円形	タライ状	ヒスイ 5.1×2.1×1.5単孔		中期中葉~後葉
	331号小竪穴	162×90×83	長楕円形	桶状	ヒスイ 5.6×2.2×1.1単孔	両極石器1	"
	481号小竪穴	80×80×73	楕円形	円筒状	ヒスイ 5.4×2.8×2.1原石	両極石器2、石鏡3、穀摺石2、凹石1	"
茅野市福沢中原	2号土壙		楕円形		硬玉 5.3×2.1×0.9単孔		中期後半 曾利II
駒ヶ根市高見原	62号土壙	170×85×48	長楕円形(張出部あり)	鉢状	ヒスイ 7.0×3.2×2.2単孔	打製石斧1、敲打器1	"曾利I?"
里見V	5号土壙	150×150×105	不整形円形	円筒状	ヒスイ 6.8×4.5×3.3原石	石斧1、横刃1、耳輪1	中期後半

表1 長野県内発見のヒスイ製大珠出土土壙一覧表

飾が北に3個、南に2個と分かれて約10cm浮いて出土したことであり、これを副葬品とみて本址を墓壙と考えることに異論はないと思われる。このほか、土器の小破片1、黒曜石片1があり、土器は中期後半III~IV期に比定される。

県内においていわゆる「ヒスイ製大珠」(註1)の出土例は多いが、住居址や土壙、石組みなどの遺構にもなって出土した例は少ない。縄文時代中期の土壙(小竪穴)に限ってみれば、原石出土の2例を含めても5遺跡7例が報告されているに過ぎない(註2)。これらの遺跡は、諏訪盆地を中心に松本平南部から伊那谷にかけて分布し、東・北信地方には発見例はない。これはヒスイ製大珠出土遺跡分布と一致する。

出土したヒスイ製大珠はその大きさが長さ5cm、幅2.5cm程度と小形品である点、片側に寄って1孔が穿たれる点、全面研磨されておおむね「鏢節型」に整形される点に特徴がある。本遺跡出土品も同様で、孔は1方向穿孔によって貫通し、特に274では中央に突出部を残した穿孔途中の孔がみられ、穿孔に管錐を用いたことが窺われる。

出土した土壙についてみると、プランが長楕円形を呈する点が特徴的といえなくもないが、円形ないしは円に近い楕円形を呈するものも半数を占め、環状あるいは馬蹄形集落中央に営まれる土壙群中に位置するなど、一般の土壙に比較して際だった差異は認められない。伴出遺物に石器類はあるが完形土器はみられず、大きな自然礫を伴う例もない。しかし、土壙群の中でヒスイ製大珠の出土するのはせいぜい1基か2基と限られており、性格が他と異なるであろうことに疑問の余地はない。この点について報告者は、「集落の族長を葬った墓壙」(林茂樹1987)といった積極的な発言もあるが、「何らかの特殊遺構」(小林康男1984)、「土壙墓」(会田進1986)に代表される消極的な発言に留めている。硬玉製大珠を伴った埋葬人骨としては福岡県山鹿貝塚(縄文後期)の例が著名で、仰臥屈葬された成年女性の胸部に副葬されていたという。しかし、本遺跡29号土壙の場合、出土位置が土壙の両端に偏っていて、それは北を枕にして屈葬された被葬者の両手足及び首のあたりと考えられる。したがって、副葬品というより身に着けて葬られたとする方が自然であろう。高見原遺跡の場合も北に寄って出土しており、頸に懸けていた可能性がある。いずれにしても、ヒスイ製大珠を所有できたのは集落の中でもごくわずかな人数であり、その多分にマジカルな要素から被葬者は特殊な職能、即ち、呪術を司る者と想像される。

ここではヒスイ製大珠を出土した土壙のみを取り上げたが、呪術的な要素をもつ遺物には琥珀、蛇紋岩、滑岩等を材料とした玉類もあり、これらも含めて検討する必要がある。

#### ⑩ 38号土壙

(註1) 八幡一郎氏の命名による「硬玉製大珠」が一般に用いられているが、「硬玉」とは「軟玉」に対して使われる宝石の名称であり、ヒスイの一種のジェード輝石をさし、ヒスイ=硬玉ではない(砂川一郎他1982『地学事典』平凡社)。しかし、実際には両者は同一に扱われることが多い。石質の違いによって大珠の性格が大きく変わるとは考えられないので、硬玉か軟玉かの判別は重要と思われず、「ヒスイ」が最も適した名称であろう。

(註2) このほか未報告資料に茅野市棚畑遺跡3例(茅野市教委守矢昌文氏の御教示による)、富士見町居平遺跡1例(富士見町教委小林公明氏の御教示による)がある。

北調査区に位置し、32号住居址に切られる。径80cm、深さ70cmの円形土壇で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土はロームの貼り床を除いて2層に分けられるが、ロームブロックを多く含む点では共通し、人為的な埋め戻しが行われたと推定される。壇底から浅鉢の底部(130)が出土し、もう利用価値のないと思われる1cmから1mm以下の微少な黒曜石チップが盛られていた。最も細かいメッシュを用いて水洗選別した結果得られたチップの量は約20ccであり、メッシュを通り抜けて流れた量も少なくない。これらのチップは石器製作時に生じた剥片、碎片であろうが、こうして土壇に埋納した意図は明らかではない。土壇の時期は、切り合い関係と出土土器から中期中葉井戸尻式期と考えられる。

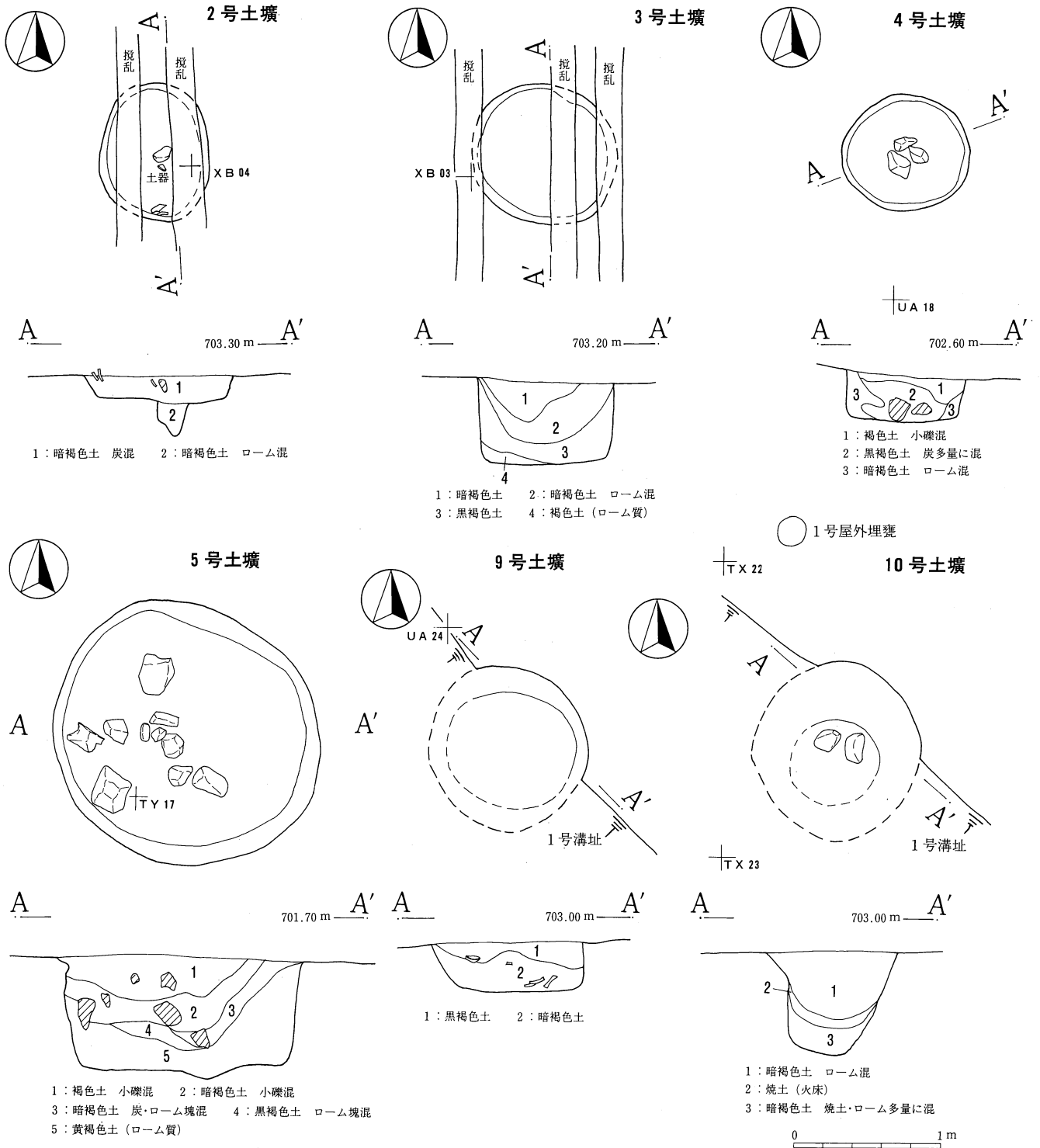


図 67 土壇実測図 1

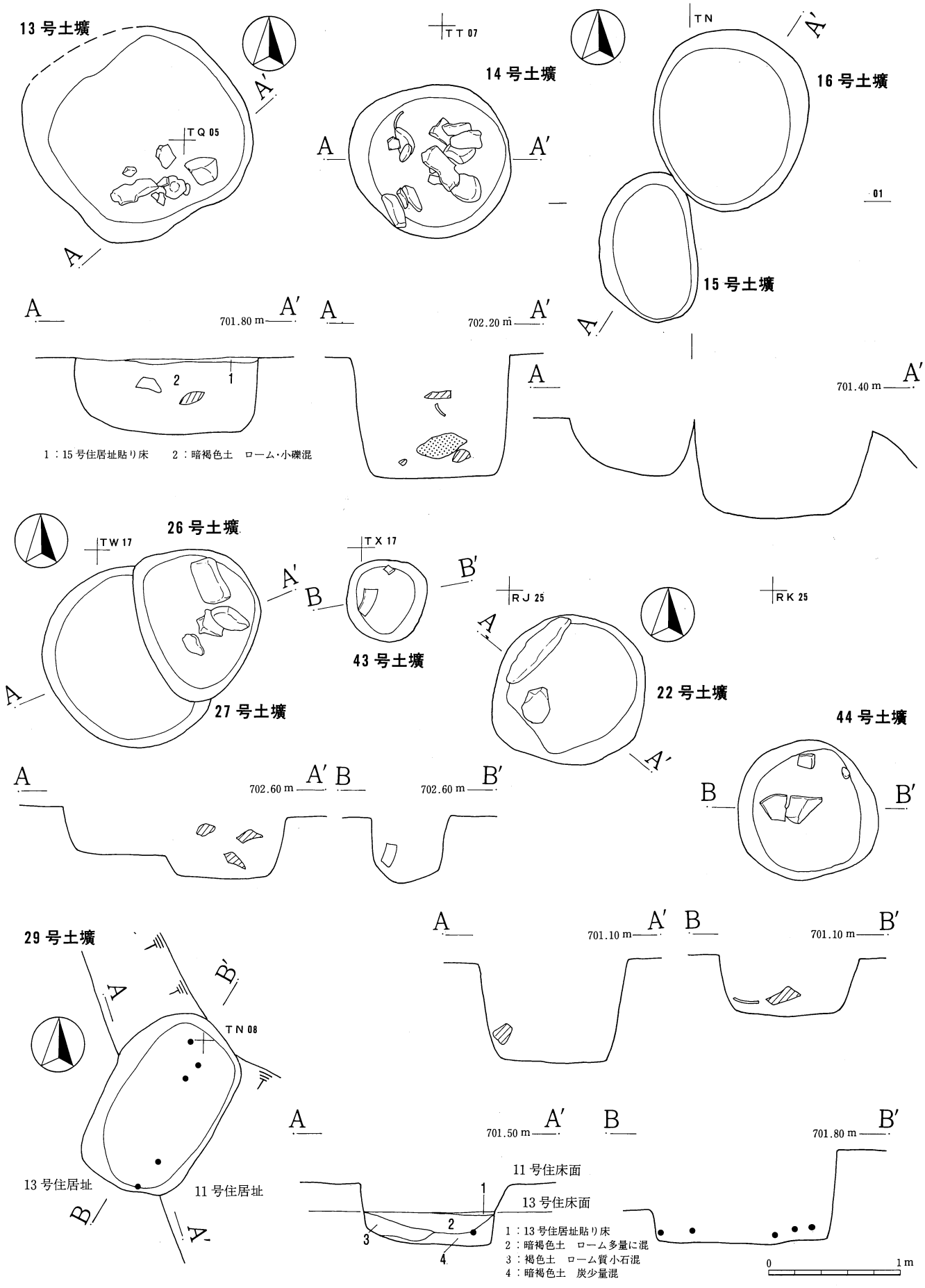


図 68 土壌実測図 2

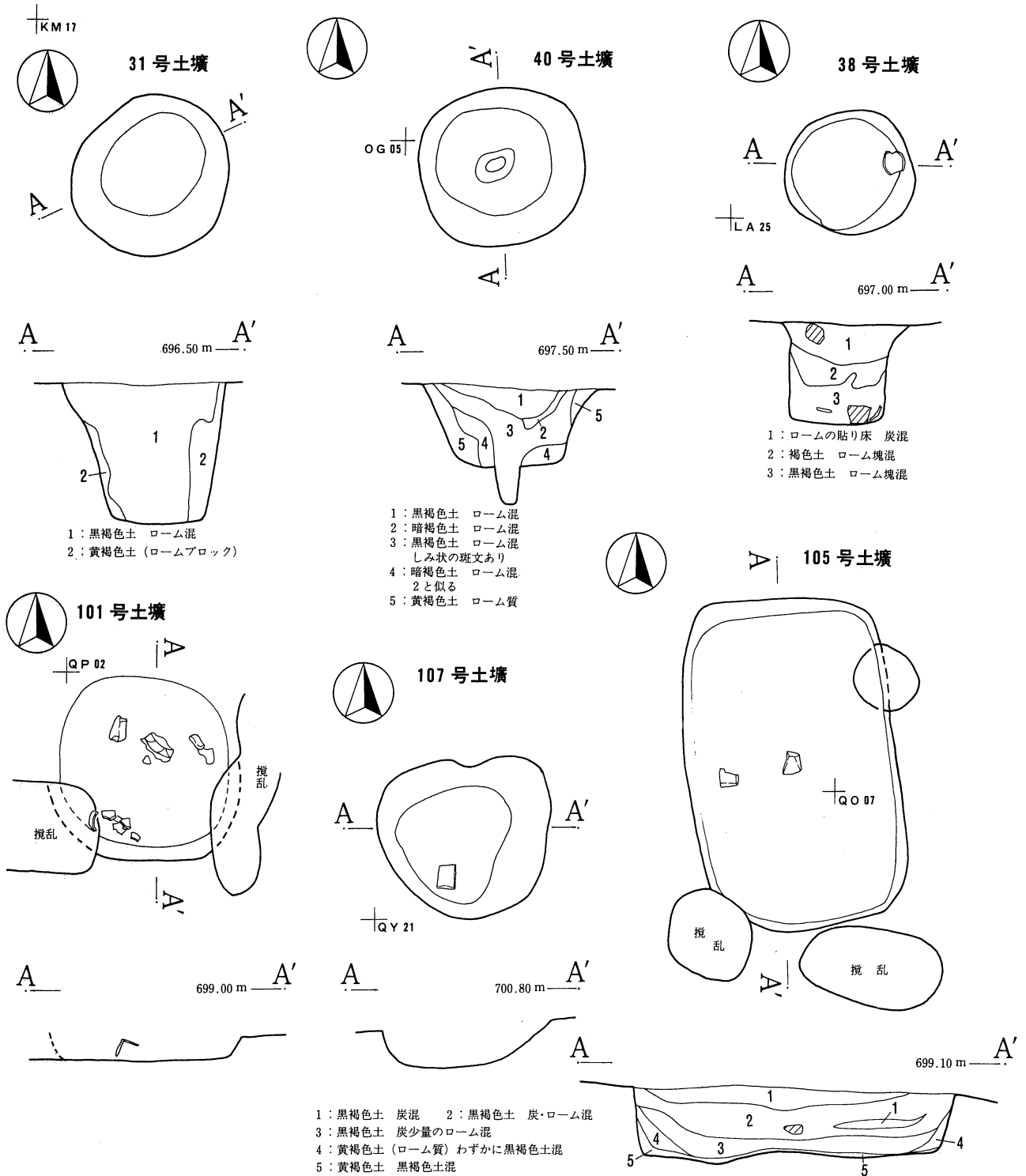


図 69 土壌実測図 3

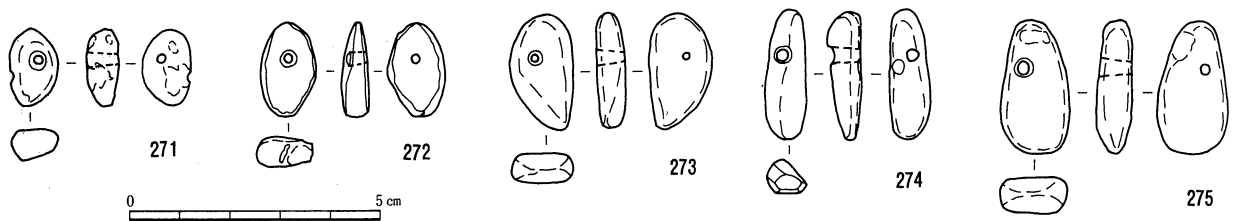


図 70 29号土壌出土遺物実測図 (1:3)

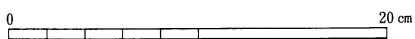
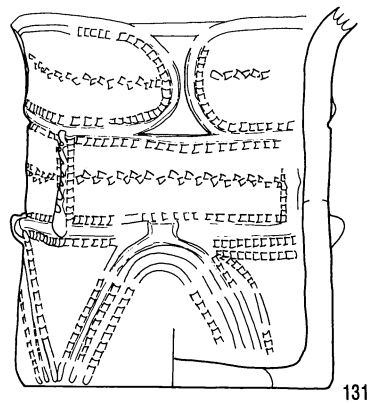
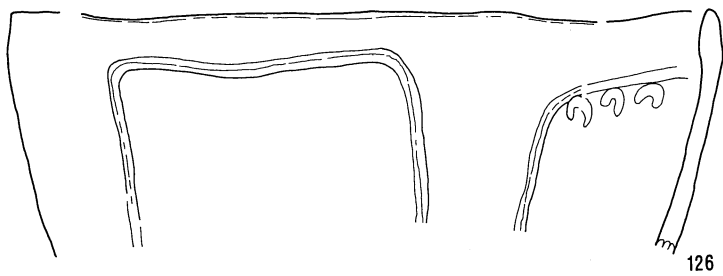
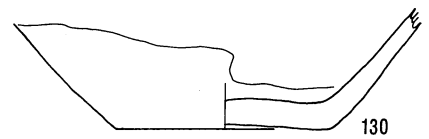
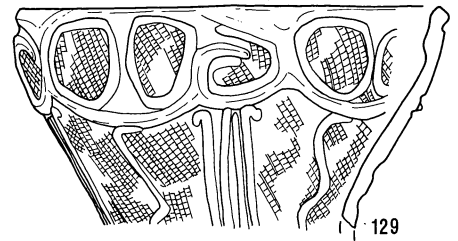
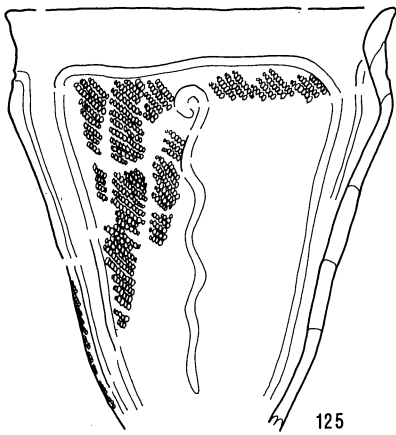
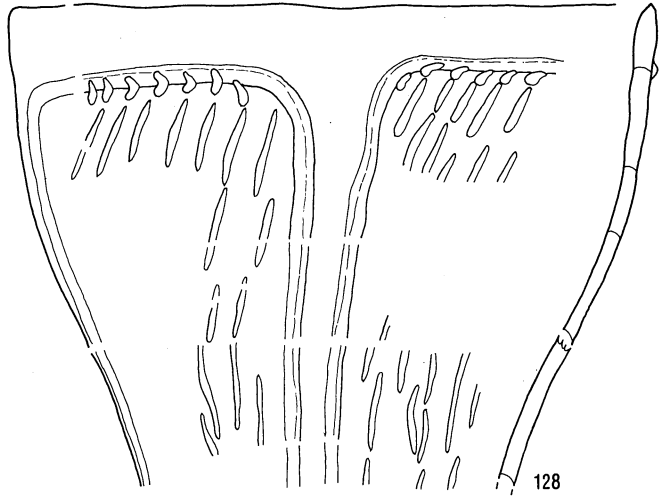
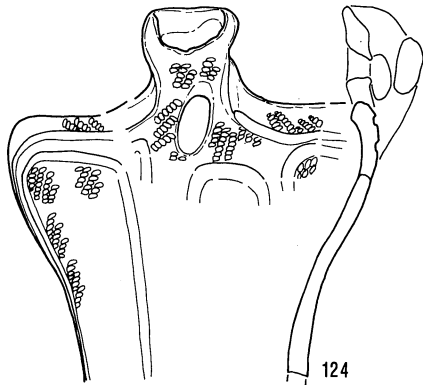
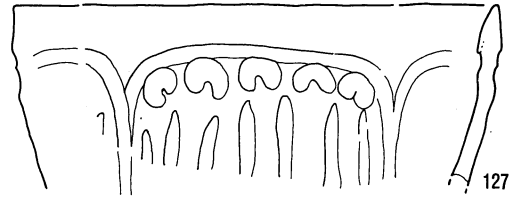
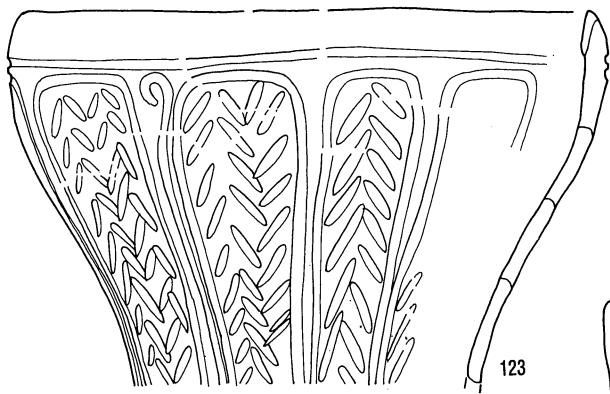


图 71 土壙出土遺物実測図

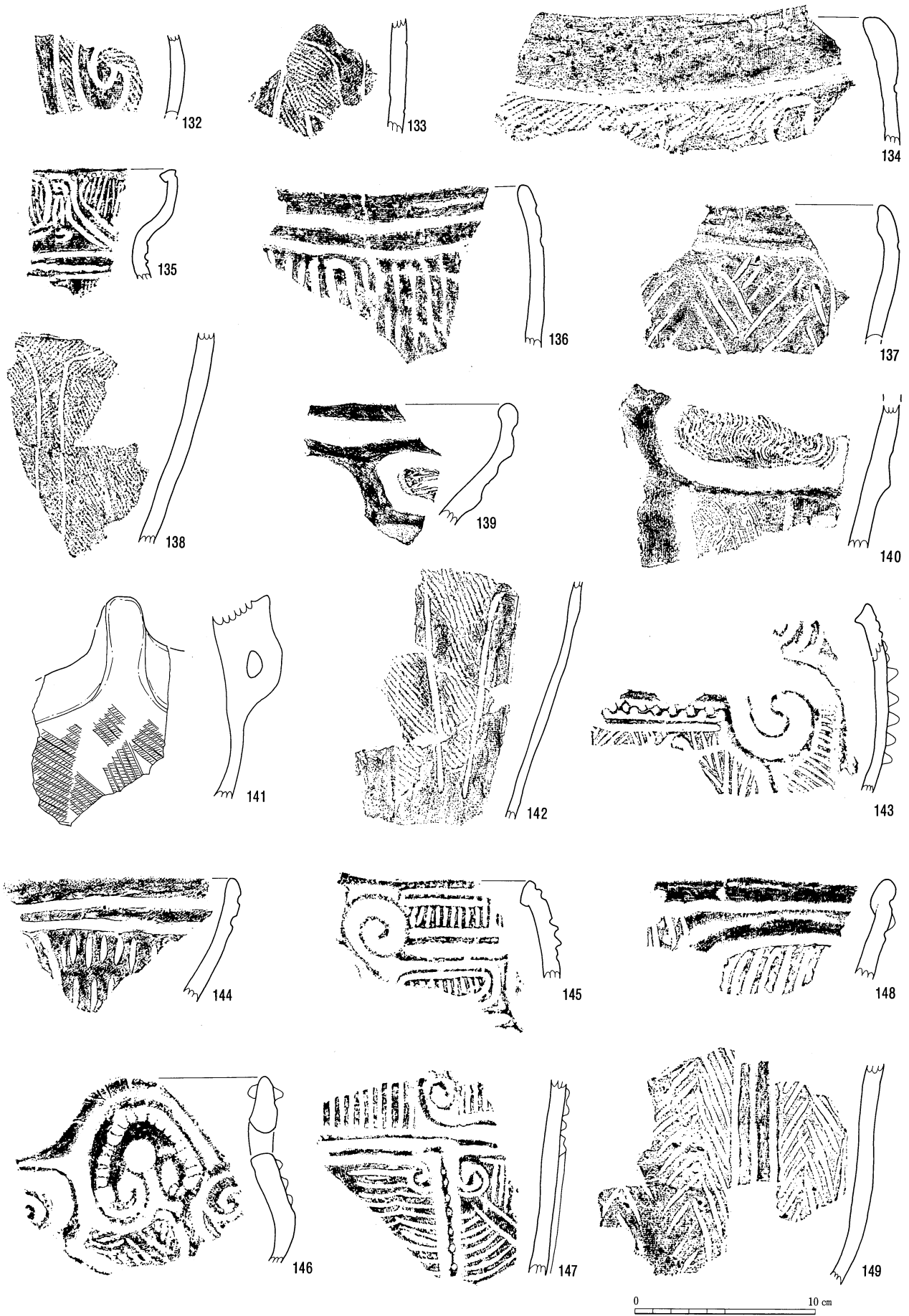


図 72 土壙出土遺物拓影

## ⑩ 40号土壇

北調査区に位置する。径1.1m、深さ50cmの円形土壇で、壇底に径20cm、深さ30cmの小ピットをもつ。埋土はレンズ状に堆積し、自然埋没である。陥穴と推定される。遺物は出土していない。

## ⑫ 44号土壇

南調査区に位置し、20号住居址の床を切っている。径約1mの円形土壇で、深さ45cm。土器の出土量は多く、5個体が器形復元できたが、なかに住居址床面出土土器と接合するものがあるが注目される。土壇プランが住居址検出面ではなく床面で捉えられたことと合わせ考えれば、住居廃絶時に構築されたと思われるのが妥当であろう。出土土器は中期後半Ⅱ～Ⅲ期。

番号	規模(長径×短径×深さ)m	平面形	断面形	埋土	備考
1	1.0×1.0×0.3	円形	壁斜底丸	単層	中期土器片
2	1.0×0.8×0.2	楕円形	壁斜底平	2分層、炭・礫	壇底にピット1、中期土器片
3	1.0×1.0×0.6	円形	壁直底平	4分層	中期土器片
4	0.9×0.8×0.3	円形	壁斜底平	3分層、炭・礫	
5	1.9×1.7×0.8	楕円形	壁直底平	5分層、炭・礫	中期土器片多量、石鏃1、ピエス2、剥片1
6	1.2×1.0×0.4	楕円形	壁直底平	2分層、礫	中期土器片
9	(1.1)×(1.1)×0.4	(円形)	壁斜底平	2分層礫	中期土器片、打斧1
10	(1.2)×(1.2)×0.7	(円形)	壁斜底丸	3分層、焼土・礫	
11	1.6×( )×0.3	隅丸長方形	壁斜底丸	単層	中期土器片多量、剥片2
13	(1.5)×1.5×0.6	隅丸長方形	壁直底平	単層、礫	中期土器片多量
14	1.2×1.2×0.9	円形	壁斜底平	単層、焼土・礫	中期土器片多量、剥片3、ピエス1、打斧1
15	1.1×0.7×0.4	楕円形	壁斜底丸	単層	中期土器片
16	1.4×1.2×0.7	楕円形	壁斜底平	単層	中期土器片、ピエス2
17	0.9×0.9×0.6	円形	壁直底平	単層	中期土器片
18	0.8×(0.8)×0.5	円形	壁直底平	2分層	
21	0.7×( )×0.6	円形	壁直底平	単層	
22	1.2×1.2×0.8	円形	壁直底平	礫	
24	1.0×1.0×0.4	円形	壁斜底平	単層、礫	中期土器片
25	1.7×1.5×0.5	楕円形	壁直底丸	単層	中期土器片、剥片1、ピエス1
26	1.1×0.9×0.5	楕円形	壁斜底平	単層	中期土器片
27	1.4×1.2×0.4	楕円形	壁斜底平	単層	中期土器片
29	1.4×0.9×0.6	隅丸長方形	壁直底平	単層	中期土器片、剥片1、ヒスイ垂飾5
31	1.1×1.0×0.9	円形	壁斜底平	2分層	中期土器片
37	1.2×0.8×0.4	隅丸長方形	壁斜底丸	単層	中期土器片
38	0.9×0.8×0.7	円形	壁直底平	3分層、礫	黒曜石チップ多量に埋納する。
39	1.2×( )×0.4	(円形)	壁斜底平	2分層	中期土器片、打斧1
40	1.2×1.1×0.5	円形	壁斜底平	5分層	壇底にピット
42	1.1×0.9×0.9	楕円形	壁直底平		
43	0.6×0.6×0.5	円形	壁直底丸	単層	中期土器片
44	1.1×1.1×0.5	円形	壁斜底平	礫	中期土器片多量
101	1.2×1.2×0.2	円形	壁斜底平	単層、炭	中期土器片多量、剥片2、石匙1
103	0.8×0.6×0.5	円形	壁直底丸		中期土器片、磨石類1
105	2.2×1.4×0.5	隅丸長方形	壁直底平	単層、炭	中期土器片多量、ピエス1
106	0.9×0.6×0.2	楕円形	壁斜底丸		
107	1.2×1.2×0.3	不整形	壁斜底丸		中期土器片、打斧1
108	1.0×(0.7)×0.2	楕円形	壁斜底丸	単層	

表2 土壇一覧表

⑬ 101号土壙

中調査区の北端に位置し、プランは径1.2mの円形。宅地造成により上部は削平され、残存する深さは約15cmである。壙底から中期中葉猪沢式に比定される深鉢の底部(131)、小剥離痕のある剥片2、粗製大形石匙1が出土している。

⑭ 105号土壙

中調査区に位置し、住宅跡地に検出された。2.0m×1.2mの長方形プランで、深さは40cm。埋土は5層に分けられ、壙底近くの堅く締まった黄褐色土を除いて違いはわずかだが、レンズ状堆積を示している。出土遺物は多いが、土器はすべて小破片で復元できるものはない(145~147)。

ウ 遺構外出土遺物 (図79)

① 土器

早期前半：小破片3点ではあるが、押型文土器が中調査区より出土している(150・151)。いずれも山形文施文の土器である。押型文土器は隣接する犬原遺跡でもまとまって出土していることから、今回の調査では検出されなかったが付近に住居址等の生活址の存在が予想される。

中期初頭：わずかに1片、梨久保式に比定される深鉢の口縁部がある(152)。頸部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がり、いったん内折したあと口唇部が小さく外に折れ曲がる器形と思われ、口唇部に連続爪形文が施される。

中期後半：量が多く、大半は溝址など弥生時代遺構からの出土である。溝の構築に際し破壊された該期の住居址に所属していたと考えられ、住居址出土土器と比べてその様相は変わらない。したがって、ここでは、遺構出土土器にみられなかったものについてだけ触れておきたい。153はキャリパー形深鉢の強く内湾する口縁部で、幅の狭い口縁部文様帯は渦巻と楕円区画文で構成され、その下には弧状に沈線が巡る。154~156はその胴部と思われる破片であり、地文縄文に連続弧線文が一周する。隆線を用いているが、157も器形や文様構成は同じである。こうした特徴は、伊那谷南部に分布の中心をもち、東海地方の咲畑式、中富式の影響下に成立したと考えられている土器に近似する(末木 健1978)。松本平のこの期の土器には唐草文、曾利、加曾利Eの3系統があることはすでに知られているが、このような咲畑系土器の出土は初めてであろう。

後期：158は称名寺式、159は堀之内式である。160は単純な器形の粗製深鉢で、口縁直下に頂部を指で押さえた太くて高い隆帯を巡らせる。八窪遺跡に類例が多数あり、堀之内式から加曾利B式に伴うことがわかっている。

晩期：末葉氷式に比定される浅鉢の破片が1点ある(161)。

② 土製品

土偶は5点があり、5点とも破損している。162は南地区03トレンチ出土。唯一顔の残る破片である。鼻は丸くて高く、鼻孔は細い棒状工具で突いて表す。目は鼻の上の弧状に刻まれた沈線とみられるが、鼻の横の短い沈線のようにも思え、はっきりしない。口は棒状工具でえぐって表現しているが、3つもある。これは目や口がたくさんあるというより、文身を表しているのであろう。乳房は高く突き出す。手は欠失しているが、斜め上方に伸ばしていたようだ。背中や側面にも沈線がある。後頭部には粘土の剥落した跡があり、髪を表現していたのかも知れない。鼻と乳房は粘土貼り付け、手と頭は胴部から引き出してつくられる。胎土は最大5mm大の小石を含む。163は2号溝址出土の右脚。ハート形の突き出た尻をもち、渦巻や弧線、列点で飾られる。縦の割れ口は接合面であり、左右の脚を別々につくって合体させたあと尻のどっぴりを加えた製作法がみてとれる。胎土に小石は少ない。そのほか164は弥生時代の9号住居址、165は2号溝址、166はI層の出土。164の割れ口も接合面であるが、中心に径2mmの孔がみられ、製作時に串を



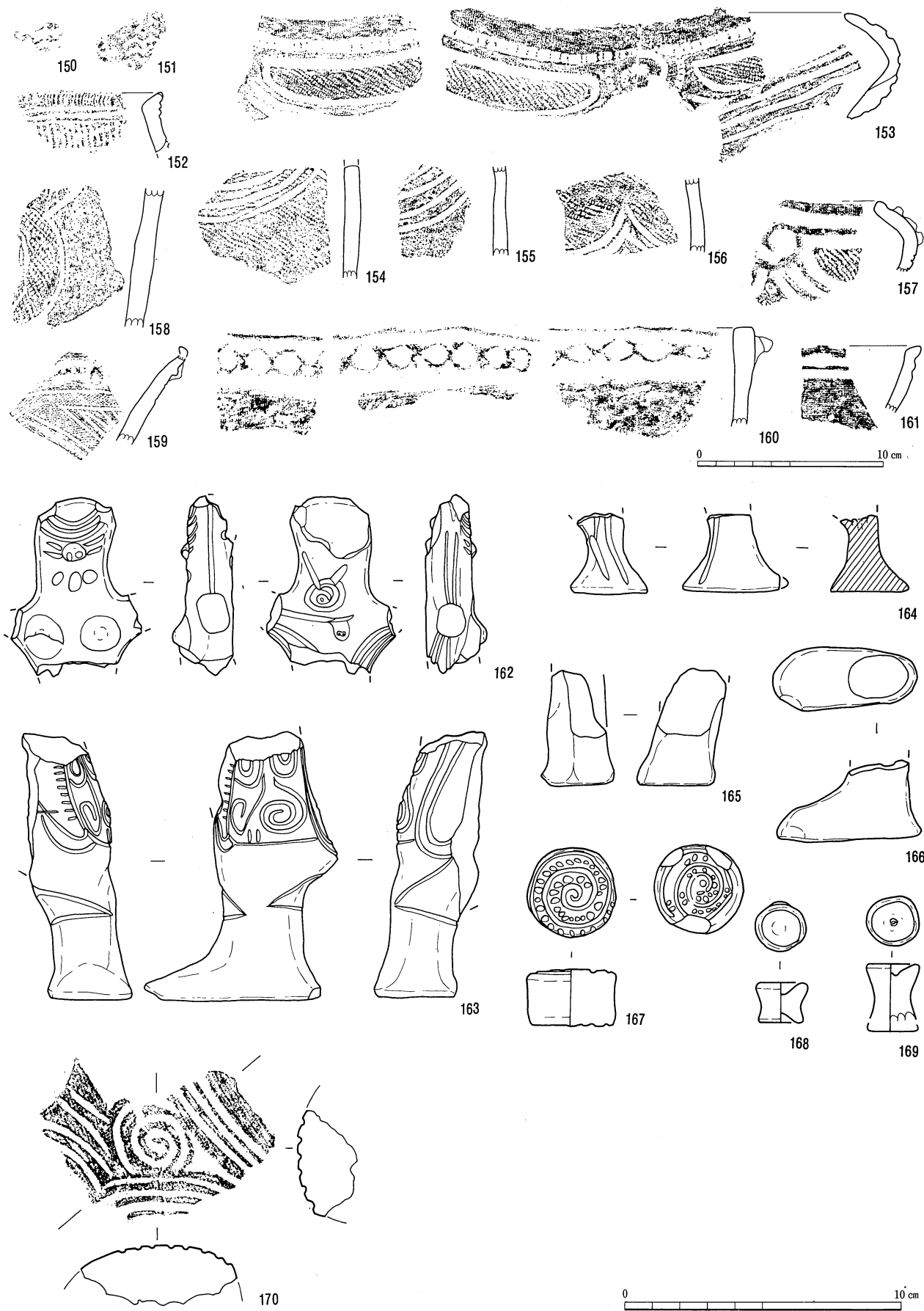


図 73 遺構外出土遺物実測図・拓影 (162~170 = 1 : 2)

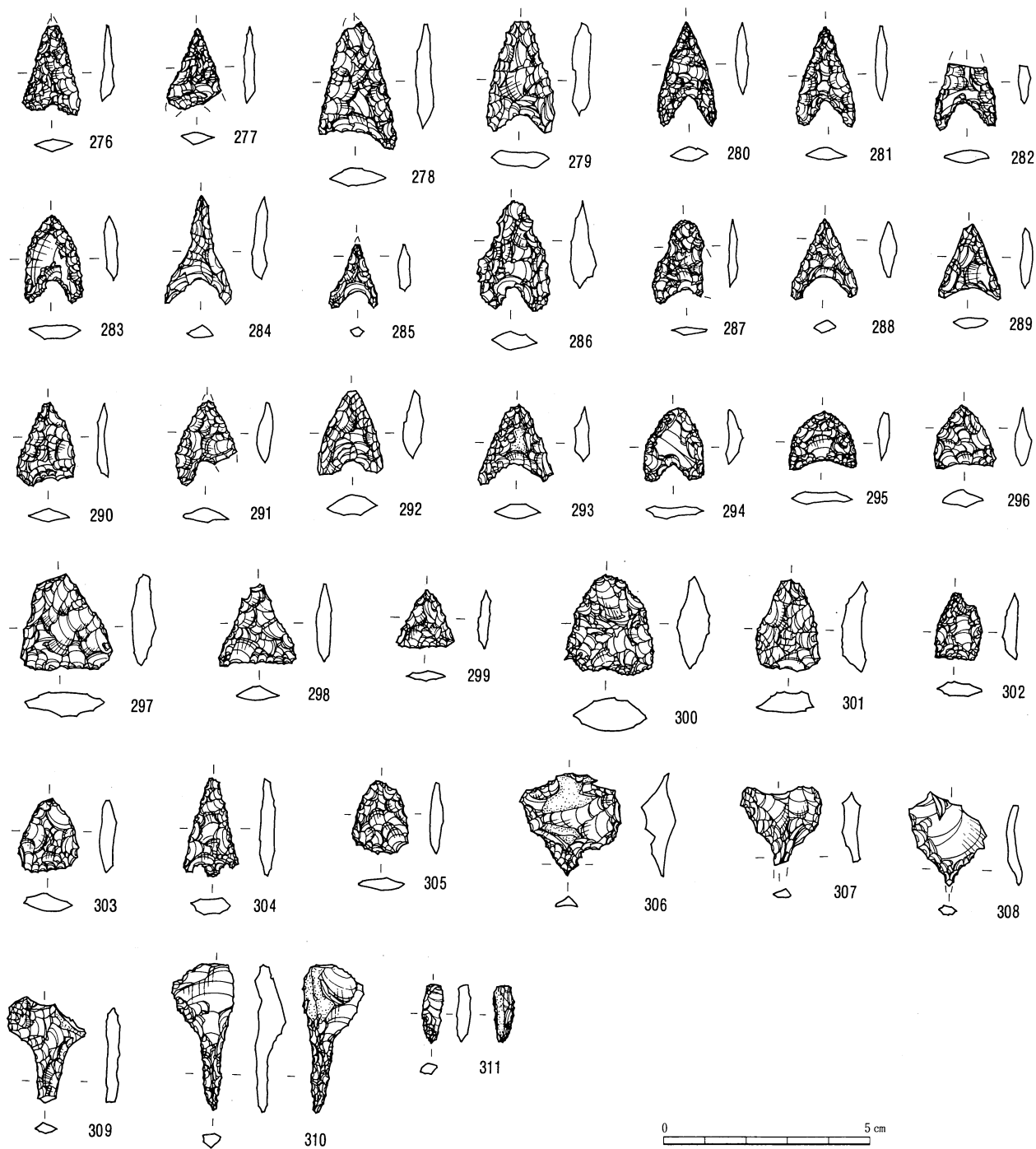


図 74 遺構外出土石器実測図 1

さして補強した跡と思われる。これらに指の表現はみられない。

耳栓は 3 点が出土した。167 は I 層から出土したもので、直径 3.3 cm、厚さ 1.9 cm。表裏両面とも渦巻文と列点文で飾り、側面はわずかに凹む。168 は 2 号溝址出土。いわゆる臼形を呈し、直径 1.8 cm、厚さ 1.3 cm、側面の最も細い部分の径 1.4 cm、169 は 9 号住居址出土。やはり臼形を呈し、直径 1.8 cm、側面の径 1.3 cm。片面は剝落して厚さは不明。

170 は 2 号溝址出土の土製品。3 辺が湾曲した三角形の面は凸面をなし、中心に渦巻、周りに弧線を刻む。三角壺形土製品の可能性がある。

このほか、図示しなかったが、土製円板が 2 点出土している。

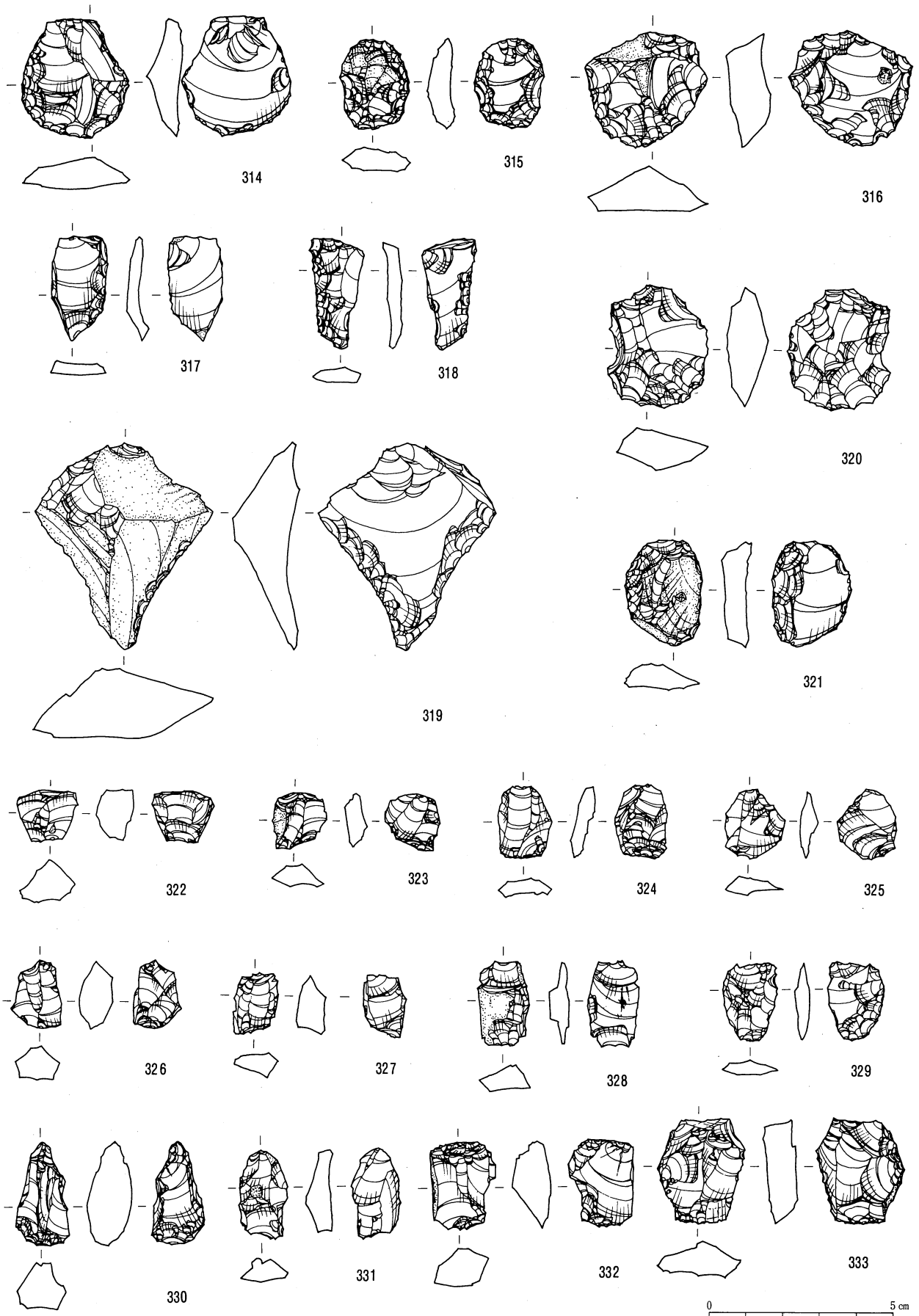


图 75 遺構外出土石器実測图 2

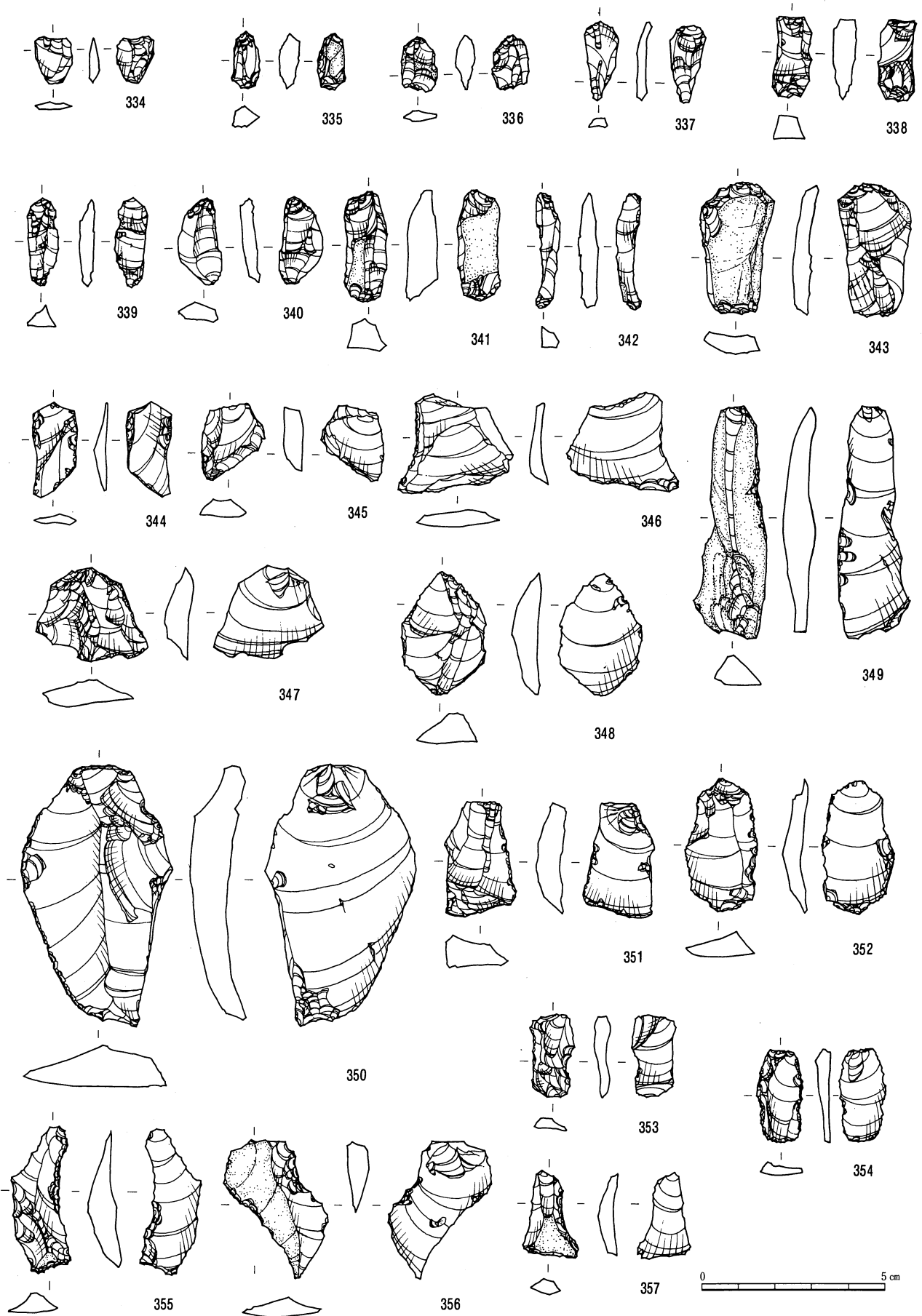


図 76 遺構外出土石器実測図 3

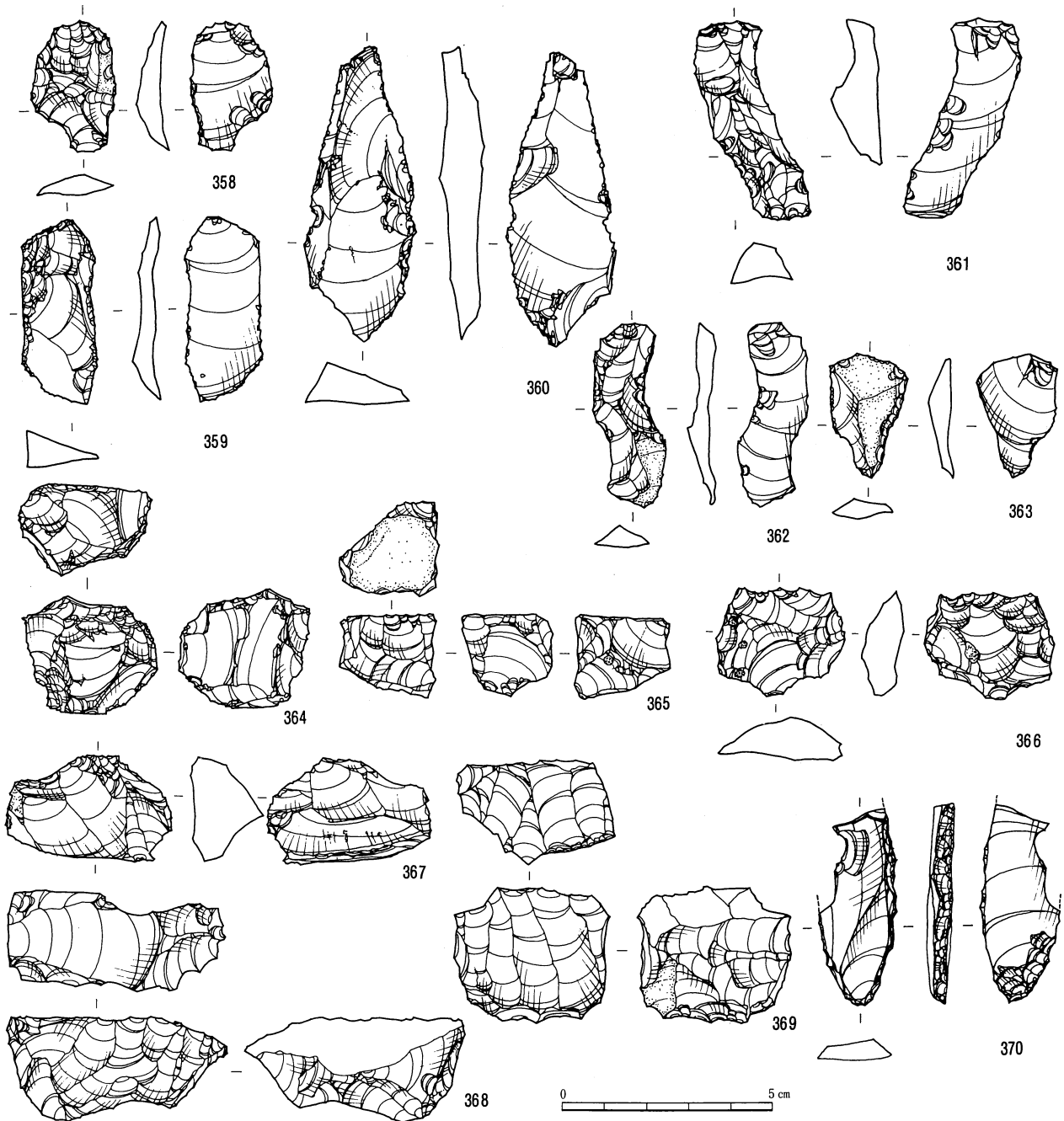


図77 遺構外出土石器実測図4

③ 石器

石器の観察結果については遺構出土のものも含めて後の項で扱うので、ここでは出土状況についてのみ触れておきたい。

遺構外出土石器は、その出土状況から2つに分けられる。1つは耕作土や近年の攪乱層から出土したものであり、もう1つは弥生時代の遺構から出土したものである。後者は、形態から明らかに弥生時代の石器と判断される石庖丁と石製紡錘車、住居址床面にすえられていた砥石を除いたすべてである。しかし、打製石斧などは弥生時代になっても使われていた可能性があり、縄文時代住居址出土の打製石斧と比較観察しても差異が見いだせなかったため縄文時代遺物に含めた。ただし、今後の検討に備えて図版を分けて掲載してある(図78・79)。

ちなみに耕作土層、攪乱層と弥生時代の遺構とで出土点数を比較してみると、打製石斧は165:143、石

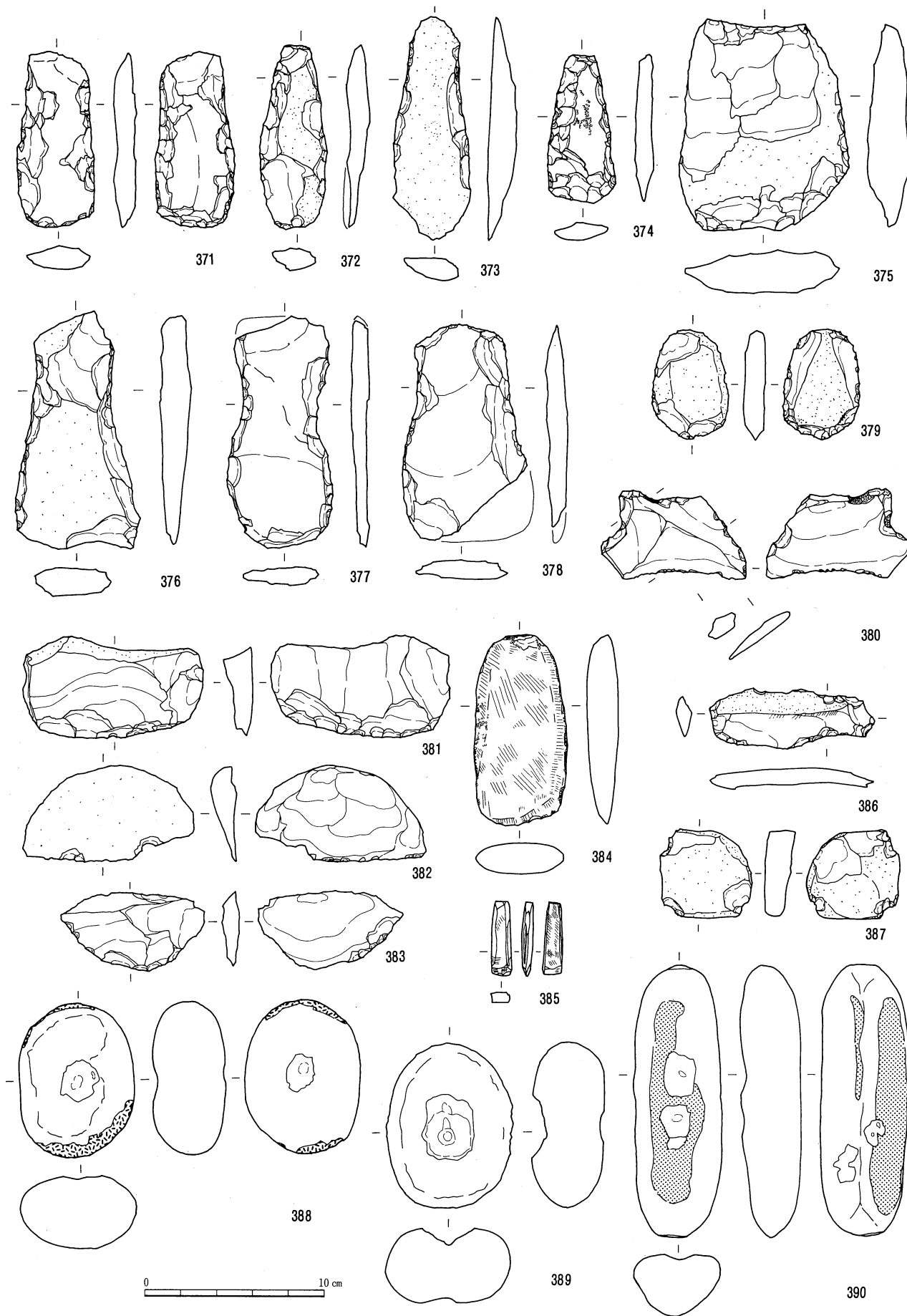


図78 弥生時代遺構出土石器実測図1

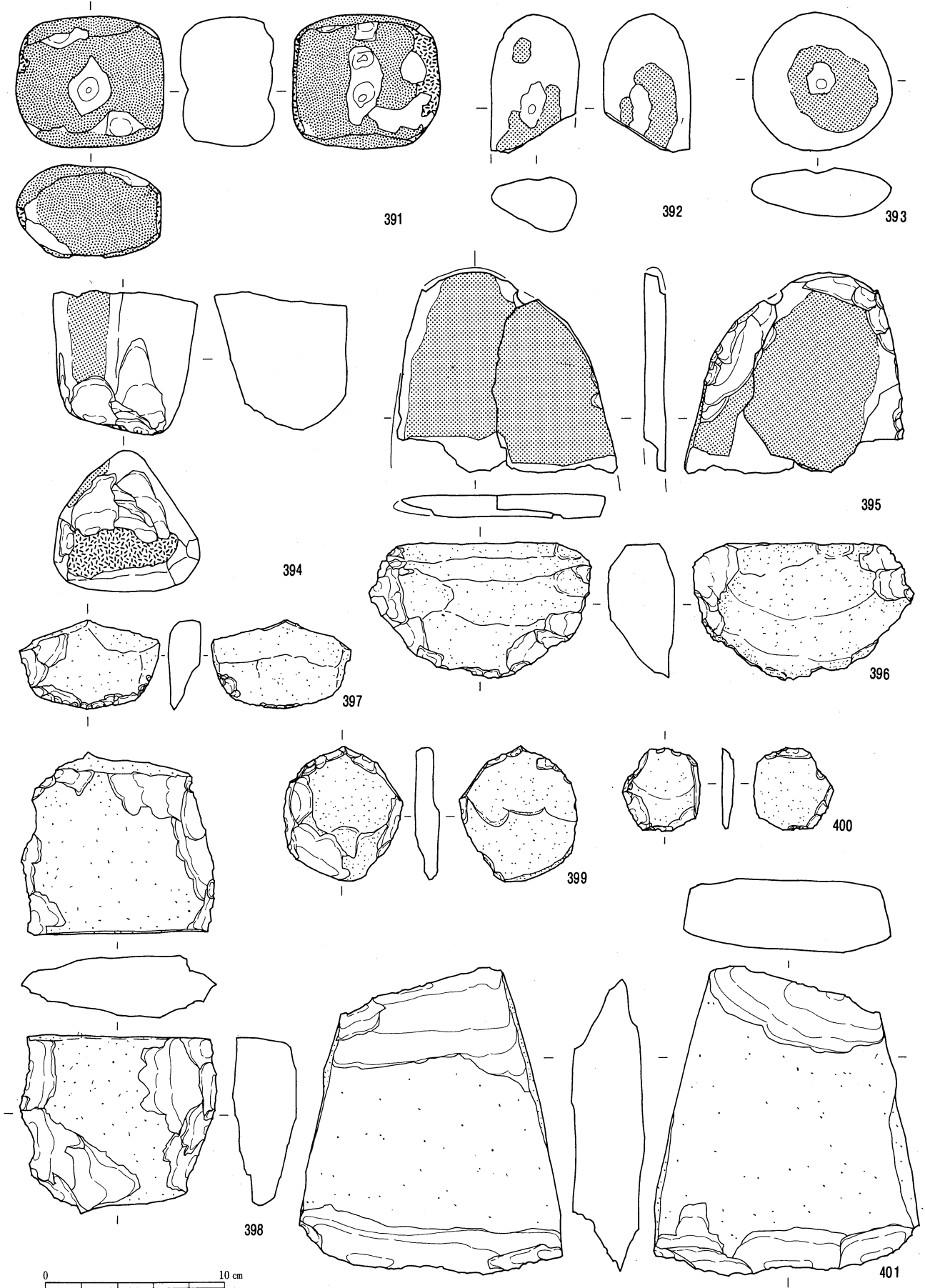


图79 弥生時代遺構出土石器実測図2

鎌が24:28である。打製石斧は特に溝址と段丘裾を巡る旧用水路埋土からの出土が目立ったが、後者は耕作中出土したものが捨てられたと考えられる。

オ 出土土器の分類— 中期中葉～後半の土器 —

本遺跡出土の縄文土器は、中期中葉井戸尻式から中期後半曾利式併行期の終わりにかけての土器が圧倒的に多く、100%に近い。しかも、その大部分が住居址出土であり、住居址を単位に土器の変化を捉えることが可能と思われる。そこで、ここでは住居址出土の器形がわかる土器を対象として本遺跡独自の分類を行ったのち、既存の土器編年と対比してその位置付けを明確にするとともに、器種や文様構成の変遷過程を明らかにしたい。

① 土器の分類

系統の判別：松本平におけるこの期の土器が在地の唐草文系土器を主体とし、曾利系土器、加曾利E系土器から構成されることは、すでに先学によって指摘されている〔永峯光一1955他〕。しかし、3者は互いに影響し合っただけで折衷した様相の土器を生み、にわかには系統を判別できないことがある。したがって、地文に用いられる文様を重視し、大きくI群—沈線文系、II群—条線文系、III群—縄文系に分けることにする。おおむね、唐草文系は沈線、曾利系は条線、加曾利E系は縄文を地文とするとみられるからである。

段階の設定：各類を設定する際に基準資料としたのは、I類=32号住居址、2類=31号住居址、3類=102・110号住居址、4類=105号住居址、5類=8号住居址、6類=17号住居址出土土器である。ところで、遺構の項でも触れたように、出土状況はいずれも住居廃絶後に投棄された遺物であることを示しており、廃棄の同時性はともかく製作の同時性を問うことはできない。その点、例えば型式学的方法によって補う必要があるが、ここでは器形の変化と器種の消長を明らかにすることを目的としているためあえて型式的に操作せずあくまで住居址単位のまとまりを優先して扱うこととした。

器種分類：深鉢、鉢、浅鉢、釣手土器、器台がある。圧倒的に数の多い深鉢についてのみ、以下のように大雑把な器形分類を行った。

深鉢A種—頸部でくびれる。

深鉢B種—頸部でくびれない。

深鉢C種—頸部がふくらむ。

深鉢D種—胴部で弱くくびれたあと長くゆるく外反する。

さらに、それぞれ口縁部の内湾する「1」、外反する「2」に細分する。

1類：唐草文系土器成立以前の特徴をもった土器である。32号住居址出土の一括遺物がこれに当たり、深鉢A2、D1がある。深鉢A2(43・44)頸部以下に文様帯をもち、4単位の垂下する隆帯の間を縦の沈線や三叉文、三角押文などで埋める点に共通性がみられる。43は口縁に1単位の山形突起をつくり、口縁部文様帯は無文を基本とするが、突起の下に限っては文様を施すという、正面性を意識した器形、文様構成をとっている。ともに器面は磨かれて光沢をもつ。深鉢D1(46~50)のうち大形の50も43同様に正面性を意識しており、「J」字状モチーフ、三叉文の多用などは44に共通する。46・48・49は「櫛形文土器」と呼ばれる斉一性の強い土器で、文様帯は口縁部と胴下部にある。

第I群

2類：深鉢A1、A2、B2、C、D2、台付鉢、浅鉢がある。A1(31・100)では、頸部を境に文様帯が口縁部と胴部に分かれる。口縁部文様帯に褶曲文を配する点で両者は共通する。100は口縁部に2対の角状突起をつくり、頸部には橋状把手を付け、隆線の脇には連続押引文を施す。A2(35・36)も口縁部と胴部に文様帯がある。35は隆線で区画した内に縦位、横位の沈線を充填し、隆線の脇には刺突文がみられる。B



2 (31)は口縁部から胴下部に至る間を縦横の隆線で整然と長方形区画し、内部を楕円文で埋めるが、最上位の1列だけは空白で、口縁部は無文帯とみてよい。C (32・33)は、膨らんだ頸部にそうめん状の細かい粘土紐を斜格子目状に貼り付け、平行する隆線間に連続押引文を付ける。D 1 (27)は櫛形文土器である。D 2 (38)は1対の大形把手を有し、口縁部は無文帯で、頸部以下に「腕骨文」と呼ばれる隆帯を垂下させ、地文に綾杉状沈線を施す。台付鉢(40)は4単位の把手をもち、底部に脚台の付いていた痕跡を残している。富士見町曾利遺跡4号住居址出土の「水煙形土器」を連想させる立体的な装飾は、粘土紐の貼り付けと半截竹管によって表出され、随所にみられる円孔が印象的である。浅鉢(41)は底部からほぼ直線的に開き、口縁部が内屈したあと短く外反する器形で、内屈部分に狭い文様帯をもつ。

3類：深鉢にはA 1、A 2、B 1、C 2、D 2がある。A 1には頸部文様帯がない(102)、ある(60)、あるが無文(62)のバリエーションがある。102の口縁部を飾る褶曲文には渦巻文が加わり、胴部は腕骨文で区画した内部を斜沈線で充填する。60と62は頸部に文様施文されるか否かの違いを除けば器形、文様、大きさとも共通点が多い。口縁部には連続渦巻文を配し、肩部以下は2本単位の隆線を4単位垂らし、縦の沈線を地文とする。61は、口縁部の形態こそ異なるが文様構成はよく似ていて、A 1に含めてよいと思われる。胴部の地文は綾杉状沈線文である。また、69は頸部のくびれは弱いが、文様構成は60に共通する。A 2 (61・63・64・99・110)はこの類の主体をなすものである。110は腕骨文が垂下する。頸部のくびれる63・64の胴部には隆線を用いて大柄渦巻文を描き、間を斜沈線で埋める。99は口縁部の隆線、肩部の頭に刻みを加えた凸帯など余り例のない土器であるが、無文の口縁部や頸部以下に施される綾杉状沈線文など109や63と共通する要素が窺われる。B 1 (66~68・73)のうち66~68はいわゆる「無頸タル形」の深鉢で、66・67にみられる頸部文様帯が68ではみられない。胴部の大柄な渦巻文は64と類似し、巻きが浅くて「J」字に近い。C 2 (103・105)はともに口縁部が無文で、頸部と胴部に文様帯がある。小形の105は頸部を棒状工具で刺突するのに対して、103は連続渦巻文を配し縦の沈線を地文としている。105の胴部は4単位の懸垂文とその間を埋める「U」字状、逆「U」字状に隆線を貼り、綾杉状沈線を地文とする。D 2 (65・109)は4単位の垂下する腕骨文が特徴で、73同様一對の把手がつくと思われる。深鉢以外の土器には釣手土器(72)がある。

4類：深鉢ではA 1、A 2が大きく数を減らすのに対して、B 1が数を増し主体となる。そのほかB 2、D 2がある。A 1 (79)は、口縁部、頸部、胴部に文様帯がある。口縁部は連続渦巻文を巡らせ、胴部は腕骨文風の蛇行する隆帯と蛇行隆線を4単位ずつ垂らす。部分的ではあるが地文の綾杉状沈線文が同心円状を呈し、伊那谷南部からの影響を感じさせる。A 2 (76)は口縁部は無文で頸部以下に文様帯がある。頸部の小渦巻から2本1単位の隆線を縦、横に伸ばし、地文は縦の沈線である。B 1 (24・51・52・77・85~88・115~117)には大小2種があり、さらに頸部の区画文、胴部の懸垂文や大柄渦巻文の有無、また、渦巻文の形の違いによっていくつかのバリエーションが認められる。頸部の区画文帯をもたないのは77・115で、この二つは胴部の大柄渦巻文もっていないが、115は小渦巻文に頸部区画文帯の名残がみられることから後出的であり、両者は同一視できない。胴部に懸垂文をもつのは51~53・77・115と約半数を占め、52・53は腕骨状懸垂文、51・77は間を斜めあるいは綾杉状の沈線で埋める「H」字状懸垂文と2種がみられる。胴部の大柄渦巻文は、大きくて単純な24・84・116などと、小さくて複雑に連続する51・52・113に大別できよう。小形の85~87及び117は口縁部に把手を付ける。B 2 (25・78・81)のうち、78・81は口縁部と胴部に文様帯があり、81は地文が縦位の沈線で隆線懸垂文と交互刺突文を用いるのに対して、78は地文が綾杉状沈線でモチーフも沈線で描く。25は地文からみてB 1に近い。D 2とした27は、胴部に文様帯があり、逆「U」字状に沈線で区画した内を波状沈線と綾杉状沈線で充填する。深鉢以外では一對の橋状把手をもつ小形の鉢(29)、壺(114)がある。

5類：資料的には乏しいが、深鉢はAがなくなりB 1に占められるようだ。深鉢B 1 (3・22)にはまだ頸